

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	小柳 昇
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 200 号
学位授与の日付	2015 年 9 月 9 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	日本語のモノと場の二者関係の概念化と自動詞・他動詞構文に関する研究

Name	Oyanagi, Noboru
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 200
Date	September 9, 2015
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Study on Japanese transitive and intransitive constructions based on a conceptualization of the two-party relationship between an entity and its location

日本語のモノと場の二者関係の概念化と
自動詞・他動詞構文に関する研究

小柳 昇

目次

謝 辞	vi
第 1 章 はじめに.....	1
1.1 研究目的と意義	1
1.2 〈場〉の規定.....	2
1.3 研究の概要と論文の構成.....	3
第 2 章 先行研究と本論文の立場	9
2.1 自動詞・他動詞とその構文.....	10
2.1.1 先行研究の概略	10
2.1.2 本論文における自動詞と他動詞の規定	13
2.1.3 自動詞・他動詞と自動詞構文・他動詞構文.....	15
2.2 モノと〈場〉の一体性	16
2.3 意味の構造と事態の把握の在り方	19
2.4 語彙意味論における概念の拡張・転換.....	21
2.4.1 Thematic Relations Hypothesis	21
2.4.2 場所項の取り立て.....	24
2.4.3 経験者主語・責任者主語.....	29
2.5 認知文法における自他交替.....	33
2.5.1 Langacker の認知文法.....	33
2.5.2 トラジェクター・ランドマークと主語・目的語	37
2.6 日本語の周辺的な他動詞文の研究.....	38
2.6.1 二項述語の格配列.....	39
2.6.2 所動詞	40
2.6.3 状態動詞・両用動詞	42
2.6.4 使役変化他動詞とその主語名詞句	45
2.6.5 有対自動詞の拡張構文.....	51
第 3 章 研究の枠組みと分析のアプローチ.....	54
3.1 事態の把握とイベントスキーマ.....	54
3.2 イベントスキーマと構文.....	55
3.3 焦点化と図地反転.....	58
3.4 存在と所有について	59
3.4.1 BE 言語と HAVE 言語	59
3.4.2 所有の概念化：所有 A と所有 B	61
3.4.3 与格と二格.....	69

3.4.4	英語との対照で見えてくる所有の概念と拡張	71
3.4.5	本論文が考える BE 存在と BE 所有	73
3.5	本論文が提案する事態認知モデル	80
第 4 章	際立ちが与えられた〈場〉が作り出す構文：パート 1	82
4.1	存在と所有の関係	82
4.1.1	分析する動詞とイベントスキーマ	82
4.1.2	状態を表す他動詞と文脈に埋め込まれる〈場〉としての人	83
4.1.3	語る視点	88
4.1.4	動作主主語が認められる場合	89
4.1.5	存在物の多さを表す自動詞	90
4.2	発生と所有の関係	94
4.2.1	分析する動詞とイベントスキーマ	94
4.2.2	両用動詞	95
4.2.3	動詞の形態について	97
4.2.4	発生母体と発生物の関係	100
4.2.4.1	モノの発生	100
4.2.4.2	自律的な事象（再帰と自己組織化）	102
4.2.4.3	イベントの発生	104
4.2.4.4	現場に埋め込まれる〈場〉	105
4.2.4.5	所有と〈場〉の特徴付け	109
4.2.5	動作主主語が認められる場合	112
4.3	消失と所有の関係	113
4.3.1	分析する動詞とイベントスキーマ	113
4.3.2	「欠く」と「欠ける」	114
4.3.3	動詞の形態について（修正版）	115
4.4	存続と所有の関係	117
4.4.1	存続と消滅の関係	117
4.4.2	原因主語が認められる場合	119
4.4.3	動作主主語が認められる場合	121
4.4.4	分離不可能所有と分離可能所有	122
4.5	移動と所有の関係	123
4.5.1	I 型と II 型	123
4.5.2	非意図的な事象の場合（I 型）	125
4.5.3	設置動詞の場合（II 型）	127
4.5.4	再帰構造がベースの場合（III 型）	130
4.5.4.1	再帰とは何か	130

4.5.4.2	本論文が提案する再帰の概念とその分類.....	132
4.5.4.3	再帰と場焦点化他動詞構文.....	136
4.6	単他動詞と複他動詞の分析.....	140
4.6.1	「着る」「着せる」.....	142
4.6.1.1	二つの「着る」.....	142
4.6.1.2	「着せる」と非再帰化.....	144
4.6.2	「知る」「知らせる」「知れる」.....	145
4.6.2.1	二つの「知る」.....	145
4.6.2.2	「知らない」と「知っていない」.....	148
4.6.2.3	「知れる」の形態と意味.....	152
4.6.3	「見る」「見せる」「見える」.....	156
4.6.3.1	二つの「見る」.....	156
4.6.3.2	英語の see /look との対照からわかること.....	160
4.6.4	自発とは何か.....	168
4.6.5	自発・受身・可能と二格名詞句が表す〈場〉.....	170
4.6.6	「見る」と「見える」再考.....	189
4.6.7	「聞く」「聞こえる」「聞かせる」.....	196
4.6.8	「含む」「含める」.....	199
4.6.8.1	三つの「含む」と「含める」.....	199
4.6.8.2	四つ目の「含む」と「含める」.....	206
4.6.8.3	「含む」の受身文の問題.....	208
4.6.9	「教える」「教わる」の類.....	214
4.6.9.1	形態と意味の特徴.....	214
4.6.9.2	場焦点化他動詞としての「教わる」.....	217
4.6.9.3	動作主と二格名詞句の問題（「～に教える」「～に教わる」）.....	221
4.7	状態と所有の関係.....	235
4.7.1	モノの存在とモノの状態.....	235
4.7.2	「青い目をしている」構文再考.....	240
4.7.2.1	「青い目をしている」構文とは何か.....	240
4.7.2.2	形容詞述語から発生と所有の関係へ.....	242
4.7.3	状態変化と所有の関係（1）主体-側面.....	246
4.7.3.1	I 型の場焦点化他動詞構文.....	246
4.7.3.2	II 型と I & II 型の場焦点化他動詞構文.....	250
4.7.3.3	なぜ場焦点化他動詞構文なのか.....	253
4.7.4	状態変化と所有の関係（2）全体-部分.....	256
4.7.4.1	人の場合.....	256

4.7.4.2	植物の場合	262
4.7.4.3	機械・物の場合	263
4.7.5	状態変化と所有の関係 (3) 人間関係・分離可能所有関係	265
4.7.5.1	血縁・社会人間関係	265
4.7.5.2	所有者と所有物の関係 (分離可能所有関係)	268
4.7.6	場焦点化他動詞構文の成立の制約	276
4.7.6.1	成立の条件と制約	276
4.7.6.2	中立的な叙述としての場焦点化他動詞構文	285
4.7.6.3	事象タイプとのつながり	286
4.8	有対自動詞の両用動詞化	291
4.8.1	先行研究と課題	291
4.8.2	有対自動詞の両用動詞化の分析	294
4.8.2.1	「たれる」	295
4.8.2.2	「あく」	297
4.8.2.3	「かわる」「うつる」	300
4.8.2.4	場焦点化他動詞構文：所有 (反転型) と占有 (強化型)	301
4.8.2.5	「かわる」再考と「おわる」への拡張	308
4.8.2.6	「はずれる」	313
4.8.2.7	「まちがう」	315
4.8.3	所有と占有の概念化	323
4.8.4	語用論的效果	326
4.9	漢語サ変動詞と場焦点化他動詞構文	327
4.9.1	漢語サ変動詞の自他の区分	327
4.9.2	場焦点化他動詞構文のタイプと制約	335
4.10	介在性をもつ他動詞文の分析	341
4.10.1	課題と分析の枠組み	341
4.10.2	各タイプのイベントスキーマと介在性の表現の分析	344
4.10.3	課題の答え	353
4.10.4	補足：使役連鎖における実際の行為者の抑制について	354
4.11	ヴォイスの中におけるモノと〈場〉の二者の関係の概念化	354
4.11.1	介在性の表現の位置付け	355
4.11.2	状態変化主体の他動詞文の位置付け	356
4.11.3	間接受身文とニ格名詞句の依拠性	361
4.11.4	ニ格・ヲ格使役とニ格名詞句の依拠性	363
第5章	際立ちが与えられた〈場〉が作り出す構文：パート2	365
5.1	場所格交替する自動詞文	365

5.1.1	Swarm 型場所格交替	365
5.1.2	英語と日本語の構文成立の可否	366
5.1.3.	セッティング主語と BE 所有	370
5.2	場所格交替をする他動詞文	376
5.2.1	二つの事態把握と構文	377
5.2.2	三つの課題	379
5.2.3	場焦点化他動詞構文としての分析	381
5.2.3.1	全体的解釈	381
5.2.3.2	日本語の場所格交替の特徴	384
5.2.3.3	「パンをジャムで塗る」はなぜ成立しないのか	388
5.3	道具主語他動詞構文・LT 主語他動詞構文	389
5.3.1	locatum という見方	389
5.3.2	道具主語構文と LT 主語構文	391
5.3.3	物の移動事象の概念化と構文	399
5.3.4	自動詞文と受身文／ニ格とデ格	402
第 6 章	まとめと今後の課題	412
6.1.	モノと〈場〉の二者関係の概念化に注目する意義	412
6.2	〈場〉の焦点化によって生まれる構文	417
6.3	今後の課題	424
参考文献	429
[和文]	429
[英文]	436
[辞典・事典]	439
言語資料と出典一覧	439

謝 辞

本論文は、博士後期課程入学以来、東京外国語大学の多くの先生方よりご指導、ご支援をいただき完成することができました。宗宮喜代子先生には英語の論文講読を通じて言語を理論的に考察できるようご指導いただきました。一つの理論に寄りかかることなく、自分の道を切り拓くようにと叱咤激励を受けたことは本論文を書き上げる原動力となりました。川村大先生には国語学で蓄積された知見に触れる機会を与えていただき、本論文の大きなテーマである統語的なヴォイスの分析において厳しくご指導いただきました。そのご指導がきちんと反映されているか心もとないところもありますが、草稿段階でのご丁寧なコメントなしには、本論文は決して満足のゆくレベルには達しませんでした。

東京外国語大学の多分野交流の授業で日本語以外の言語の研究に触れる機会が多かったことも、改めて日本語を見つめ直すのに大変有益でした。授業を主宰してくださった早津恵美子先生、成田節先生に感謝申し上げます。そして何よりも私の指導教官である望月圭子先生には論文のご指導はもちろん研究の全体にわたってご支援をいただきましたことに心より感謝申し上げます。先生のご支援なしには限られた期間内に仕上げることはできませんでした。

また、場の言語とコミュニケーション研究会を通じて会員の皆様より貴重なご意見をいただき、論文の内容を深めることができました。特に東京学芸大学の岡智之先生には、場の言語学の視点から本研究に対して有意義なコメントをいただきました。認知言語学の観点から場と言語のつながりを考察するに当たり、常に先生の研究から刺激を受けながら論文の執筆を進めることができました。

最後に、これまで本研究の内容を発表させていただいた学会、研究会においてコメント、助言をくださいました方々にお礼を申し上げます。なお、本研究は東京外国語大学グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育拠点」の支援を受け論文の執筆を進めることができました。ここに謝意を表します。

2015 年 3 月 小柳昇

第1章 はじめに

1.1 研究目的と意義

本論文は、モノと〈場〉の二者関係に注目し¹、その概念化という視点から現代日本語の自動詞文と他動詞文の間に見られる構文交替現象を分析する。それによってモノとモノの二者関係だけでは捉えられなかった他動詞構文の存在を示し、その生成メカニズムを明らかにするものである。

従来の日本語の自他交替現象の研究は、動詞の形態上の対応関係の研究とあいまって(1)に示すような他動詞文の目的語が自動詞文の主語になる使役起動交替を中心に進められてきた。

(1) 太郎がコップを割った。 ⇔ コップが割れた。

これはモノとモノの関係に注目して外界の事象を把握することを前提としていたことを意味する²。しかし、日本語の自他動詞構文の全体を分析する際には、このようなモノとモノの関係を前提とした事象の把握だけでは不十分である。例えば(2)に示したような自他交替現象は客観的に同じ現象を話者がどのように把握し概念化するかの違いによるもので、モノと〈場〉の二者関係の把握の違いに起因するというのが本論文の主張するところである。

(2) 柳の木が芽を出した。 ⇔ 柳の木に芽が出た。

事態の把握の違いと言語現象のつながりに関する研究では、古くは日英の対照研究における「人間中心」対「状況中心」(国広 1974)や「スル」対「ナル」(寺村 1976[1993], 池上 1981),あるいは類型論的研究における「主語卓越言語」対「主題卓越言語」(Li and Thompson 1976)などがある。近年では認知言語学および認知類型論における「I モード」対「D モード」³(中村 2004, 2009),あるいはアジアの言語にも目を向けた「意図的」対「非意図的」の出来事のコード化(ブラシャント・堀江 2005),さらには「場の理論」(岡 2013)などが挙げられるだろう。しかし、残念ながらこれらの先行研究で得られた知見を日本語の自他交替の分析に応用し、かつ十分な成果を上げてきたとは言い難い。

「なる型言語」で「主題マーカ―をもつ言語」と特徴付けられる日本語が、例えば(2)

¹ 本論文では、特に断らないかぎり、「モノ」という表記で「人」と「その他の生物」「無生物」および抽象的な概念も指す名称として用いる。

² 第2章で論じるが、それは行為連鎖モデル(Langacker 1990, 1991)や因果連鎖モデル(Croft 1991)などの事態認知モデルを前提にしていたことを意味する。

³ I モードと D モードはそれぞれ Interaction Mode と Desubjectification Mode のことで、前者は認知主体が認知の場の内部にあり、対象と主客合一的なインタラクションがあるが、後者は脱主体化した認知主体が認知の場の外にいる。

に示したような「非意図的」な事象を言語化するとき、どのような概念化に基づいて自動詞構文あるいは他動詞構文として言語化しているのか。それを解き明かす鍵となるのが、モノと〈場〉の二者関係の基本的な概念である存在と所有だと考える。そこで認知言語学的な観点から存在スキーマを基本として拡張した所有スキーマを組み込んだ事態認知モデルを提案し、これによって〈場〉に相当する名詞句とモノあるいはイベントとの二者関係の概念化が作りだす他動詞構文の存在を明らかにし、従来の自動詞文と他動詞文の交替現象の研究に欠けていたものが何かを明らかにする。そして、本論文が主張するモノと〈場〉の二者の關係に注目した分析アプローチは自動詞構文、他動詞構文の研究のみならず、統語的なヴォイスの研究にも資するものであると主張する。

1.2 〈場〉の規定

本論文が考える〈場〉とは、第一に「～に<対象物>が{ある/いる/ない/いない}」と表現することができる二格名詞句のことである。それは人と物が存在するあるいは存在しない実空間であり、抽象的なものが存在する観念空間へと拡張する⁴。第二に、モノあるいはモノ同士の関係が発生するところである。人もイベントが発生する〈場〉として認められる。そして、これも実空間から抽象的な空間へと拡張する。第三に所有空間である。これは人と物、人と人、物と物が所有という概念で関係づけられた空間である。典型的には人がもつ空間であるが、あとで論じるように物についてもこれを認める。第四に空間化メタファーによって〈場〉として把握される状態空間である。‘STATES ARE LOCATIONS’という空間 - 事態構造メタファー (Lakoff and Johnson 1999 : 179) によって、ある対象がある状態であることは、その対象がその状態空間に存在すると把握される⁵。

上述の〈場〉とは異なる性質のものとして、題目が作りだす〈場〉がある。三尾 (1948) は文を場との関係によって四つに分類したが、その中の「判断文＝場を含む文」に現れる場がこれに相当する。日本語には題目マーカーとして「は」が存在する。この「は」によって示されるのが第五の〈場〉である。以上をまとめると次のようになる。

<本論文の対象となる〈場〉の規定>

- ① 存在空間：モノが存在する空間 (着点も含む)
- ② 発生空間：モノが発生、あるいはモノとモノの二者の関係が発生する空間
- ③ 所有空間：モノとモノが所有の概念で関係づけられる空間⁶
- ④ 状態空間：存在空間からメタファーによって拡張した空間
- ⑤ 題目空間：談話構造において取り立てられた題目がもつ空間

⁴ 今後、特に観念空間でなければ成立しない言語現象について言及する場合を除き、基本的に「実空間」と「観念空間」を区別はしない。それは観念空間はメタファーによってその特徴が引き継がれるためである。したがって、例文 (作例・引用) には観念空間のものも含まれる。

⁵ 4.7 節で詳しく論じられるが、状態空間として把握されるのは、名詞述語が表す「属性の場」で、形容詞述語が表す状態の概念はこれとは別の視点から存在論的に考察される。

⁶ この所有空間は 3.4.2 節で「命題成立空間」と「関数成立空間」とに分けられる。

②は「発生したものはそこに存在する」と見れば①に還元できる。⑤についてはあとで論じるように③の所有空間の一種と見られる⁷。そして④が①のメタファーであることを考慮すれば、①～⑤は根本的には「存在空間」と「所有空間」の二つということになる。本論文がモノと〈場〉の二者関係において、その基本的な概念として存在と所有に注目する所以である。本論文が①のみならず②～⑤を含めて〈場〉を規定することは、物はもちろん人であっても「ある対象が存在する〈場〉」、あるいは「ある対象を所有する〈場〉」として概念化者によって主体的に把握される、という点を強調しておきたい。常に人や物の背景として存在し、人や物とは別のものといった、一般的にイメージされるものとは違うことに注意されたい。そのため本論文で研究の対象となる場を“〈場〉”と表示することにする。

1.3 研究の概要と論文の構成

本小節では、本論文で分析の対象となる構文と、その際に本論文が独自に導入する用語の中からキーワードとなるものを紹介しながら論文全体の構成を示す⁸。なお、これらの用語は後の章で詳しく解説される。本論文は、外界の事態（動的・静的の両方を含む）の把握にあたって人間はイベントスキーマ（高度に抽象化された事態認知の構造図）と呼ばれるものを利用し概念化すると考える（cf. 山梨 1995 : 234-235）。そして自動詞文と他動詞文が交替する現象は、このイベントスキーマにおける焦点化の違いに起因すると考える。その焦点化における三つの異なる基本的把握によって概念化したのが、①使役変化他動詞構文と②対象変化を表す自動詞構文と③場焦点化他動詞構文である⁹。従来の構文交替現象の分析で欠けていたのが③である。③は本論文で〈場〉の焦点化によって生まれると考えるので、場焦点化他動詞構文と呼ぶものである。この三つのイベントスキーマにおける焦点化の違いは概略次のように示される。図 1.1 では四角の枠線に囲まれた領域内のモノが焦点化されている。そして図 1.2 では②は枠線内のモノに焦点が当たり、③はモノと〈場〉に焦点が当たっているが、〈場〉のほうがより強く際立ちが与えられていることを示している。

①太郎がコップを割った。 ⇔ ②コップが割れた。
 （使役変化他動詞構文） （対象変化を表す自動詞構文）

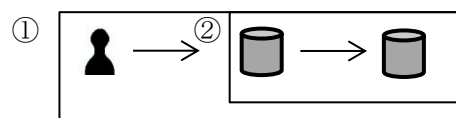


図 1.1

⁷ 3.4.2 節では、所有の出自としてトピックに由来するものが紹介される。そして、4.7.1 節の名詞述語、形容詞述語「～は N だ」「～は Adj」のスキーマとのつながりを取り上げる。

⁸ 本節に限りキーワードに下線を付して示しておく。

⁹ 事態把握にこの三つしかないという意味ではない。本論文では分析対象としてこの三つが基本的なものだという意味である。たとえば、これとは別に使役変化を表さない動詞（働きかけの動詞）もあるが、本論文の研究対象ではない。ただし、分析する際に必要に応じて適宜言及される。

⇔ ③柳の木が芽を出した。

(場焦点化他動詞構文)

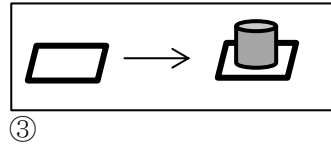
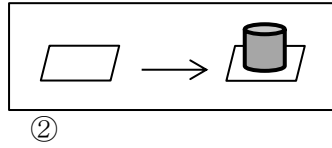


图 1.2

第 2 章では自動詞（構文）と他動詞（構文）に関する先行研究を概観しながら、この③の視点の欠如を指摘し、③の視点をとる本論文の立場を示す。そして第 3 章では、この③の場焦点化他動詞構文が所有の概念と深く結びついていることを示し、それに基づいた本論文の理論的な枠組みと分析アプローチをまとめる。第 4 章と第 5 章で場焦点化他動詞構文と考えられる様々な構文を取り上げて分析するが、③を含めた三つの事態の把握を見ることによって自他動詞構文の交替現象の全体が合理的に説明できることを示す。

第4章では、焦点化された〈場〉が主語位置に来る場合、焦点化他動詞構文が分析対象となる。本論文では静的な事象を表す〈存在〉と〈所有〉の関係がイベントスキーマを構成するもっとも基本的な単位だと考える。そこで、これを出発点として、発生事象や移動事象が、そのモノが存在する原因として読み込まれるような事態把握モデルを提案する。これは存在と所有の概念化を鋳型として動的な事象を説明するものである。原因として読み込まれる事象ごとに(3)に示した順番で分析する。(3a)は出発点となる基本単位であり、(3b)～(3g)の‘>’の左側の名称は、読み込まれる原因事象を示している。これらの構文を分析する中で「状態動詞」「両用動詞」と呼ばれる動詞、そして再帰の概念などが③の観点から考察される。

(3b)「発生」から(3e)「移動」までは対象物が自律的な内部構造によって変化すると考え、それに対応する③の場合焦点化他動詞構文をⅠ型と呼び、使役主の存在なしには成立しない事態がベースになっている場合でかつ非再帰のもの(3f)をⅡ型、再帰のもの(3g)をⅢ型と呼ぶことにする。

- (3) a. 存在と所有 彼の家に金がある／彼には金がある。 (4.1 節)
- b. 発生 > その木に芽が吹く／その木は芽を吹く。 (4.2 節)
- c. 消失 > 彼にやる気が欠ける／彼はやる気を欠く。 (4.3 節)
- d. 存続 > 町に昔の面影が残る／町は昔の面影を残す。 (4.4 節)
- e. 移動 > 磁石がたくさん蹉跌を付けている。 (4.5 節)
- f. 使役移動（他者）> その部屋は最新の AV 機器を備えている。 (4.5 節)
- g. 使役移動（再帰）> 太郎は顔に墨を付けている。 (4.5 節)

「使役移動（他者）」(3f)と「使役移動（再帰）」(3g)の分析を踏まえて、4.6節では二項述語を作る単他動詞と三項述語を作る複他動詞と形態上対立する自動詞の三者間の構文交替現象を分析する。まず、「着る」「着せる」「知る」「知らせる」「知れる」「見る」「見せる」「見える」「聞く」「聞かせる」「聞こえる」のグループを、移動物が物から情報へと抽象化しながらも、共通の枠組みで分析できることを示す。そして、「着る」「知る」「見る」「聞く」には①と③の他動詞構文があり、そう考えることによって言語現象が合理的に説明できることを示す。「見る」と「見える」では英語の‘look’‘see’との比較を試み、一般に言われているような対応とは異なるズレがあることを、場焦点化他動詞構文の観点から指摘する。また、「含む」「含める」は複数の概念が組み合わさっているが、Ⅰ型・Ⅱ型・Ⅲ型の場焦点化他動詞構文の視点から丁寧に切り分け、相互の意味のつながりを明らかにする。最後に、与え手と受け手がセットになった「教える」「教わる」のグループがどのような事態把握によって生まれるのかを分析する。

4.6節では「見える」「聞こえる」を分析するにあたり、自動詞と他動詞の構文だけでなく、自発文・可能文・受身文を作りだす事態把握も考察する。そこでは尾上（1998-1999）が主張するラレル述語文に共通する出来スキーマという考えを踏まえ、二格で示される〈場〉とイベントとの二者関係に注目したイベントスキーマを提案し、自発文・可能文・受身文に現れる二格名詞句が何かを考察し、「太郎が花子に英語を教わる」に現れる二格との共通点と相違点も論じる。

4.7節では「状態」および「状態変化」と所有の関係を論じる。まず形容詞述語で叙述される属性（一時的・恒常的の両方を含む）が捉え方によって存在（属性がある）としても所有（属性をもつ）としても概念化されることを示し、この所有の概念化の事例としていわゆる「青い目をしている」構文を取り上げる。これまでの先行研究とはやや異なり、これは「N1はN2がAdj（青い）」(4a)と「N1はAdj（青い）N2をしている」(4b)の構文交替であり、前者は所有の概念をもつ形容詞述語で、後者は発生事象が原因として読み込まれて生成された、所有の概念をもつ動詞述語で、軽動詞「する」が現れる場焦点化他動詞構文であると分析される。

- (4) a. 状態（所有）・彼女は目が青い。
 b. 発生 > ・彼女は青い目をしている。

「状態変化」と所有の関係によって成立する場焦点化他動詞文の分析では、対応する自動詞構文の主語名詞句が表す「N1のN2」の二者の関係によって分類し、それぞれのグループの特徴を明らかにする（例文5）。その中には「自発変化他動詞構文」（杉岡2002：例文5a）および「状態変化主体の他動詞文」（天野1987b：例文5d,h）が含まれる。

- (5) 状態変化> a. 台風は次第に勢力を強め、九州に上陸する見込みだ。
 b. 崖から落ちて、車は原型をとどめないほど形をかえた。
 c. その木は地中深く根を張った。
 d. 太郎は、兄に殴られて、前歯を折った。
 e. チョークは折れて粉を散らした。
 f. 花子は先月母親を亡くした。
 g. 太郎は、台風で愛用のサーフボードを折ってしまった。
 h. 次郎は、その火事で二階を全焼した。

その分析を踏まえて、事態把握は連続しており、Ⅰ型とⅡ型の場焦点化他動詞構文の中間に位置するような事例があることを指摘し、それをⅠ&Ⅱ型と呼ぶことにする。また、原因が背景化し「〜で」で現れながら場焦点化他動詞構文を作るのが日本語の特徴であることを示す。4.7節の最後では、ここまでの分析を踏まえて場焦点化他動詞構文の成立にかかわる制約を論じる。

4.8節では、自動詞の形態をとりながらヲ格名詞句をとるという一見特異な言語現象に見える「席をかわる」「宿題をおわる」「音程をはずれる」「答をまちがう」などの表現が取り上げられる。そしてこれらの構文も③の場焦点化他動詞構文であると分析され、形態と構文の特徴に基づいて有対自動詞の両用動詞化の現象と命名される。

また、これらの構文の分析を通じて、〈場〉の焦点化の在り方が再考され、それによって場焦点化他動詞構文にも二つの型があることが示される。一つは反転型と呼ばれるタイプで、背景化されていた場所句が焦点化され主語位置や目的位置に昇格するものである。もう一つは強化型と呼ばれるタイプで、主語位置にある名詞句と背景化されていた場所句の結び付きが強化され、場所句が目的語位置に昇格するものである。

ここまでは主に和語動詞を中心に分析されるが、4.9節では、「発生する」「紛失する」「存続する」「拡大する」などの漢語サ変動詞が取り上げられ、和語動詞が作りだす場焦点化他動詞構文との共通点を確認する一方で、和語動詞にはない制約があることを論じる。

第4章の最後では(6)に示したような「介在性をもつ他動詞文」(佐藤 1994)が分析対象となる。多くの先行研究がモノとモノの使役連鎖だけをベースに分析するのに対して、本論文ではその使役連鎖の事態把握と、モノと〈場〉の二者関係に基づく事態把握の両方の融合によって生まれる構文であると分析される。

- (6) a. 太郎は病院で注射をした。(注射をしたのは医者)
 b. 太郎は丘の上に城のような家を建てた。(建てたのは大工/建築会社)

第5章ではまず、場の焦点化によって際立ちが与えられた〈場〉が主語位置に来る点は第4章の研究対象と同じだが、他動詞構文ではなく自動詞構文を作るものを5.1節で考察す

る。これは英語で **SWARM** 型の場所格交替 (Levin1993) と呼ばれるもので、(7a) のように対象物 (‘bees’ 「蜂」) に際立ちが与えられ、主語位置に来る構文と、(7b) のように対象物が背景化し、〈場〉が主語位置に据えられた自動詞構文との交替である。5.1 節では Levin (1993) の分類にしたがって用例を観察し、日本語では同一の動詞を用いた構文交替は非常に成立しにくいことを確認し、その原因を探る。

- (7) a. Bees are swarming in the garden. 蜂が庭に群がっている
 b. The garden is swarming with bees. 庭が蜂で {*群がっている／一杯だ}
 庭には蜂が群がっている

次に、5.2 節で場の焦点化によって際立ちが与えられた〈場〉が主語位置ではなく、目的語位置に来る構文を考察する。英語で **SPRAY/LOAD Alternation**、日本語で壁塗り交替と呼ばれているものである。先行研究では場所格交替現象の一つとして、モノの移動 (= 位置変化) に焦点が当たるのか、場所の状態変化に焦点が当たるのかという視点で分析されている。本論文では、場所の状態変化とは非所有から所有の状態への変化であると考え、所有の概念化という視点から先の **SWARM** 型の場所格交替とも通じる統一的な説明を試みる。それと同時に (8) (9) のように英語では成立して日本語では成立しない例を取り上げてその原因を探る。

- (8) a. He loaded boxes into the wagon. 彼はワゴンに箱を積んだ
 b. He loaded the wagon with boxes. 彼はワゴンを箱で {*積んだ／一杯にした}
- (9) a. She smeared the wall with paint. 彼女は壁をペンキで塗った。
 b. She spread the bread with butter. *彼女はパンをバターで塗った。

第 5 章の最後では、上と同様に三項述語でモノの移動を表す点は同じだが、(10) (11) に示したように、移動したモノを主語位置に据えて他動詞文を作るような動詞を取り上げる。(10c) (11c) は川野 (2000) が「道具主語構文」と呼んだ構文である。本論文では、(10) (11) に示した文の成立の可否の違いをもとに「道具」と「LT」(=Locatum¹⁰) を区別して論じることの必要性を説く。そして、この道具名詞句が作る他動詞構文 (10) と、LT 名詞句が作る他動詞構文 (11)、さらに通常のモノ名詞句が作る他動詞構文 (12) を観察し、それらに現れる動詞の意味と構文のつながりを論じる。この分析にあたっては、第 4 章で導入された強化型と反転型の場焦点化他動詞構文を区別の意義が確かめられる。

¹⁰ locatum は Clark and Clark (1979) の造語であり、移動先の場所が location であることを踏まえ、その場所の構成物となるものをこのように呼んだ。影山・由本 (1997) はこの訳語として「物材」 (= 物体と材料をあわせた合成語) を当てている。ちなみに Levin (1993) では動詞 ‘fill’ は場所格交替で **Lacatum Subject Alternation** に分類されている。

(10) 道具の移動

- a. 花子はテーブルを白い布で覆った。
- b. *花子はテーブルに白い布を覆った。
- c. 白い布がテーブルを覆っている。・・・強化型の場焦点化他動詞構文
- d. *そのテーブルは白い布を覆っている。・・・反転型の場焦点化他動詞構文

(11) LT (=Locatum) の移動

- a. 太郎は水槽を水で満たした。
- b. 太郎は水槽に水を満たした。
- c. 水が水槽を満たしている。・・・強化型の場焦点化他動詞構文
- d. ?その水槽は水を満たしている。・・・反転型の場焦点化他動詞構文

(12) 通常のモノの移動（設置動詞）

- a. *友子は鞆をかわいいストラップで付けた。
- b. 友子は鞆にかわいいストラップを付けた。
- c. *かわいいストラップが鞆を付けている。・・・強化型の場焦点化他動詞構文
- d. その鞆はかわいいストラップを付けている。・・・反転型の場焦点化他動詞構文

このように本論文の分析に通底しているのは、モノと〈場〉の二者関係の概念化において焦点化された〈場〉が作りだす構文に注目するという点である。第 6 章ではこれまでに分析された場焦点化他動詞構文の全体を示し、〈場〉に注目して分析することの意義をまとめる。存在と所有という概念は、単に動詞「ある」「いる」「もつ」の三つの動詞だけで表されるもの、静的な事象を表すだけの概念と考えるべきではなく、人間が外界の様々な事象を切り取る際の鋳型となる重要な概念であると主張する。最後に今後の課題を挙げる。

第2章 先行研究と本論文の立場

本論文は存在と所有の概念が単に「ある」「いる」「もつ」といった動詞によって言語化されるにとどまらず、様々な自動詞文と他動詞文あるいは自動詞文同士の交替現象に関係していることを包括的に研究するものである。これまで日本語を対象にこのような包括的な視点で構文の交替現象を扱った研究はない。それは存在と所有の概念をさまざまな構文交替と結び付けて分析するという発想そのものが乏しかったからだと言える。本章では主要な先行研究を取り上げて、次の三つの側面を確認する。

1. 自他交替の研究が使役起動交替を中心とした研究であったため、正しく分析されなかった側面がある。
2. 自動詞構文と他動詞構文の分析が他動詞中心に分析されたため、正しく分析されなかった側面がある¹¹。
3. 他動詞が一つのカテゴリーとされ、その内部が他動性のスケールの高低でしか分析されなかったために、正しく分析されなかった側面がある¹²。

モノを事態把握の構成の中心に据えて、その関係（使役連鎖）を分析するのは、ある意味当然のことだと言える。人間の人間たるゆえんは単に「動く」ものというだけでなく「他者へ意図的に働きかける」ものであり、使役連鎖の出発点としてその地位を確保されるべきものという考えがあるからである。しかし、「受け手としての人間」という視点やモノの自律的な存在、発生、移動、変化を中心にした事態把握なども無視はできないだろう。これまでの研究はあまりにも前者の視点に偏っていたと言える。本論文は、モノと〈場〉の二者関係の事態把握に注目し、後者の視点で分析することによって見えてくる側面を明らかにし、今後の自動詞と他動詞の研究に新しい流れを提供することを目指す。

自動詞文と他動詞文の交替現象を研究するにあたって、自動詞とは何か、他動詞とは何かという定義の問題から逃れることはできない。そこで、以下ではまず自動詞と他動詞の区別およびその構文についての先行研究を紹介し、それに対する本論文の立場を示す。次に、日本語において〈場〉に注目する意義を考える上で有益と思われる心理学の知見を紹介した上で、本論文が考察の対象とする自他交替および自動詞構文、他動詞構文の主要な先行研究を取り上げながら上述の1～3の側面を確認し、それに対する本論文の立場を示す。

¹¹ 英語では、intransitive（自動詞）が transitive（他動詞）ではない（接辞：in-）という意味になっていることからわかるように、他動詞によって叙述される外界の事象が基本的なものであるという捉え方がある。

¹² ここで「内部」とするのは、主に主語名詞句の意味役割（深層格）の認定および、使役や働きかけのような意味のことを指す。

2.1 自動詞・他動詞とその構文

2.1.1 先行研究の概略

現在の日本語学における自動詞と他動詞の区別および対応関係の認定に影響を与えた先行研究は多いが、ここでは奥津（1967）を取り上げる¹³。奥津は、「動詞を自・他に分けることは、単に動詞の意義的性質にかかわるのみで、文法上重要な問題ではないとする山田孝雄の主張は、西洋文法そのまま自・他を立てた大槻への批判としては或る程度正しい」（同上：47）¹⁴としながらも、「まず動詞の自・他は、文構成の上で、自動詞は目的語をとらず、他動詞は目的語をとる、という著しいちいのが（ママ※引用者註：「ちがいの」の誤植か）あることを認めなければならない」（同上：47）と述べている。その上で、目的語を示す「目的格」としてのヲ格と、移動を表す述語に現れるヲ格を区別し、後者を「移動格」と呼んだ。そして「同じ音形をもつ「ヲ」であっても、文法的な立場から目的格と移動格とに弁別できるから、目的語をとるかとらないかで、動詞を自・他に分けることは、文法上有意義である」（同上：48）と結論づけている。このように目的語に相当するとみられるヲ格名詞句とるかどうかは他動詞かそうでないかを判別する上で重要な統語的な違いであり、動きや感情の向かう対象としてヲ格名詞句をとる場合は他動詞とされ、述語が移動を表し、ヲ格名詞句が（通過）場所あるいは出所を表す場合は、働きかける対象が外部に存在しないため自動詞とみなされるのが一般的である¹⁵。杉本（1986）は奥津（1967）が示した目的格と移動格の違いを、「格下げ」¹⁶の現象が起こるか起こらないかという視点で検証し、その区別が有効であることを確認した上で、（1a）の場合のヲ格名詞句を「目的語」、（1b）の場合を「移動補語」、そしてそれぞれを対格の「を」、「移動格」の「を」と呼んだ。

¹³ 須賀・早津（1995）の解説では、1950年代までの主だった研究として、自動詞と他動詞の区別については、「近世までの伝統的な語法研究と英文典の概念とを折衷した文法書として」（p.211）大槻文彦の『広日本文典』（1897）および『広日本文典別記』（1897）を挙げており、これによって自動詞と他動詞の通説が形成されたと指摘している。また、自他の対応関係については、自他の対立の在り方を歴史的な視点で整理したものとして望月世教（1944）「國語動詞に於ける對立自他の語形に就て」を挙げ、「現代語を対象にして、動詞の自他対応のタイプを分類したもの」（p.218）として佐久間鼎（1936）『現代日本語の表現と語法』を、「自他対応の動態面を現代語において示した」（p.218）ものとして西尾寅彌（1954）「動詞の派生について—自他対立の型による—」を挙げている。本節で奥津（1967）を取り上げるのは、これらの初期の先行研究を踏まえてまとめられており、その後の研究に流れに大きな影響を与えた論考の一つであると考えからである。

¹⁴ それぞれ大槻文彦（1897）『広日本文典』、山田孝雄（1908）『日本文法論』を指している。

¹⁵ 自動詞と他動詞の定義については、三上（1953〔復刊 1972〕）のように所動詞と間接受身しか成立しない動詞を自動詞、直接受身が成立する動詞を他動詞と定義することも可能である。（所動詞についてはこの後の2.6.2節を参照されたい）しかし、その場合は三上自身がその存在を指摘したように「所動対格」と呼ばれる「ヲ格名詞句をとる所動詞」の扱いが問題になる。寺村（1982：304）も、間接受身の成否の判断が難しいことは認めながらも、「今のところ日本語の文法を説明するのに最も有力なものとしてそのまま受けつづことにする」として、その有用性を認めている。

¹⁶ ある文に新たに主語を付加して自動詞文から他動詞文へ、また単他動詞文から複他動詞文へ転換した場合、元の文の主語が格下げになると考え、ヲ格をとり直接目的語になるのか、二格をとり間接目的語になるのか見てみた。「次郎は絵を見た」からは「太郎は次郎に絵を見せた」が成立し、「絵を」が直接目的語であるため、「次郎」は間接目的語に格下げされ「次郎に」となって現れたと判断される。一方、「次郎は門を通った」からは「太郎は次郎を無理やり門を通した」なら成立するが、「太郎は次郎に無理やり門を通した」は非文になる。このことから「次郎を」は直接目的語に格下げされたと判断され、その結果「門を」のヲ格は直接目的語とは別の補語であると判定される。（杉本 1986：284-286）

- (1) a. 太郎は次郎をなぐった。
b. 太郎は遊歩道を歩いた。

杉本 (1986 : 282)

一方、自動詞と他動詞の対応については、奥津 (1967) は下に示したように「(17.1) [※本論文の (2-①)] の主語 N₁ が消え、代わりに (17.1) の目的語 N₂ が (17.2) [※本論文の (2-②)] では格助詞「ガ」をとって主語となる、という変化をしながら、しかも両文の意義に或る同一性が保たれている場合に対応がある」(同上 : 49) と言えるとした。

- (2) ① N₁ ga M₂ o V₁
② N₂ ga V₂

これはあくまでも自他の「対応」に関する規定であったが、このような使役起動交替という統語現象に注目することが、自動詞構文および他動詞構文の研究の流れを作ってきたと言える。その結果、使役起動交替しない自動詞と他動詞は形態上対立関係にあっても周辺の事例として扱われ、あまり注目されなかったのである。しかし、そこから態（事態の把握の仕方が動詞の形態あるいは文法形式の違いとして現れる）の枠組みを考える上で重要な点が見えてくる。

例えば、「受ける - 受かる」は形態上「-er(u)」対「-ar(u)」という対立があり、「掛ける - 掛かる」と同じである。しかし、(3) に示したように使役起動交替しない。自動詞「受かる」は (4b) のように「～ガ～ニ」の格配列になるため、“通常の” 自他交替の分析からは漏れることになる。

- (3) a. 太郎がボールを受ける。
b. *ボールが受かる。

- (4) a. 太郎が試験を受ける。
b. 太郎が試験に受かる

使役起動交替における自動詞文と他動詞文の関係は、対象物に何らかの働きかけを与えることを表す他動詞文と、働きかけを受ける対象物の変化を表す自動詞文という関係になっている。(3b) のように「太郎がボールを受けた」結果、「ボールがどうなった」かを叙述する自動詞文はない。ところが、(4b) に示したように、主語を同じくして「太郎が試験を受けた」結果、「(その) 太郎がどうなった」かを叙述する自動詞文は存在する。

次に (2) のように見かけ上使役起動交替の対応になっていながらも、他動詞の側に二つの形態が存在する動詞を考える。

- (5) a. ひもが切れた。 (ひもの変化)
 b. 花子はひもを切った。 (花子の動き：ひもへの働きかけ)
- (6) a. (花子 [のうちに] は) 醤油が切れた。 (醤油の変化)
 b. ? (花子は) 醤油を切った。 (花子の動き：醤油への働きかけ)
 c. (花子 [のうちに] は) 醤油を切らした。 (花子 [のうちに] の変化)

「切る - 切れる」は形態上対立する自他動詞であり、事実 (5) のように使役起動交替する。ところが (6a) の「なくなる」という意味の自動詞文に対応するのは (6b) ではなく (6c) である。それでは「切れる」と「切らす」は意味上どのような対応関係にあるのか。(5b) では花子が対象物に「何をしたか」を叙述しているのに対して、(6c) では花子 (のうちに) が「醤油がある」状態から「醤油がない」状態に変化したこと、つまり花子 (のうちに) が「どうなったか」を叙述している。(6c) の「醤油」が主語名詞句 (花子) が働きかける対象になっていないことは、「早く醤油を切らせ/切らそう」のような働きかけを表す表現が成立しないことからわかる。このような点に注目すれば、「なくなる - なくす」の自他の対応も一見すると (2) と同じタイプに見えるが、意味上の対応を見れば、通常の使役起動交替ではないことがわかる。

- (7) a. (太郎は) 財布が なくなった。 (財布の変化)
 b. 太郎は 財布を なくした。 (太郎の変化)

(7b) は太郎が「財布がある」状態から「財布がない」状態へと変化したことを表している。やはり「何をしたか」ではなく「どうなったか」という意味になっており、「財布をなくせ/なくそう」や「自信をなくせ/なくそう」のような意志を表す表現は成立しない。

沼田 (1989) は、自他の対応を観察し、多義語における対応の欠落を論じたものである。「あげる」が「上昇」の意味では「あがる」と対応する一方で、「授与」の意味では「あがる」には対応しない。これを「意味の特殊化・周辺化」によるものと分析している。そうすると、「切れる」が「切断」の意味では「切る」と対応する一方で、「なくなる」の意味では「切る」に対応しないのは、沼田の分析では「意味の特殊化・周辺化」に分類されることが考えられる。しかし、同論文ではこの動詞は取り上げられていない¹⁷。沼田 (1989) の分析で対応の欠落が生じるもう一つの要因として挙げられているのが「関与の可能性」であ

¹⁷ 「切れる」対「切る」「切らす」のように、一つの自動詞に二つの他動詞が意味を棲み分けて存在することについては、「とける」対「とく」「とかす」「ぬける」対「ぬく」「ぬかす」の動詞が紹介されているのみで、詳しくは分析されていない。しかし、このような不均衡な対応関係をもつ動詞はほかにもある。吉川武時氏は「フォーク型対応」と名付けてそのような動詞をリストアップしている。(吉川氏の HP「動詞の自他について」: <http://w01.i-next.ne.jp/~g140179870/jita.html>) なお、このよう対応関係をもつ動詞の形態上の分類については小柳 (2008) も参照されたい。

る。この分析では自動詞が表す事象を基本にして、他動詞との構文的な対応を論じている。そこでは、他動詞のカテゴリーの内部を（8）に示したように他動性のスケールによって構文的に対応する他動詞を分類している。（X は他動詞文の主語、Y は自動詞の主語、他動詞の目的語に相当する）

- (8) I. X は事象 E が成立するよう積極的に Y に働きかける。
II. X は事象 E が成立を妨げないという形で消極的に Y に働きかける。
III. X は事象 E が成立時点では Y に何ら働きは持たないが、成立した E の状態を経験する、あるいは X の部分として所有する。

Ⅲに分類されるのは(9)のような自他の対応である。「働きかけという点では、例外的な特殊な場合であり、そのためⅢにあたる自・他対応は少ない」(同上:211)と述べている。2.6節で詳しく見るが、このような他動性のスケールによる分類および分析ではⅢは必然的に周辺のまたは例外的な扱いを受ける。形態上対応関係にありⅠ、Ⅱのような対応を示す動詞のペアの数と比べれば少ないことも確かである。しかし、本論文では日本語の構文においてこのような例外的、周辺の扱いは正当なものではないことを主張する。

- (9) a. 花子が熱をだす。 ⇔ b. 熱がでる。
c. 太田は（戦災で）家をやいた。 ⇔ d. 家がやける。（同上：212）

以上の観察から言えることは、(2a, b) のような使役起動交替現象とは異なり、(4a, b) (6a, c) (7a, b) のように主語名詞句と目的語名詞句が一体となり、前者が後者を所有するの¹かしないのかという主語名詞句の変化に注目する交替現象があるということである。それは、沼田(1989)が示したような分類では十分にとらえきれない対応関係である。なぜなら、これらの主語名詞句は仕手ではなく受け手あるいは事態の発生する〈場〉として把握されるからである。真に自動詞側からの分析とは、(8)に示したような構文的な対応関係だけを見ることではなく、(結果として発生/変化する)対象物がそこ(=その場)に存在するの²かしないのかという事態把握であり、裏を返せばその場がその対象物を所有するの³かしないのかという事態把握である⁴と考える。〈場〉というのを単なる物理的な場所だけでなく、モノ(人を含む)がもつ場所的な側面まで拡張して外界を見たときに見えてくるもの、それが「所有」の概念を鋳型とする外界の事態把握であり、そのような把握によって作られる他動詞構文が存在すること、それが従来の先行研究に欠けていた視点である。

2.1.2 本論文における自動詞と他動詞の規定

第 3 章で具体的に示すが、本論文では事態の把握の在り方と構文のつながりに注目して自動詞と他動詞を次のように規定する。

<自動詞と他動詞の規定>

事態把握にけるモノと〈場〉の際立ちの与えられ方，そしてその相対的な際立ちの度合いによって最終的に唯一の際立ちを与えられたモノあるいは〈場〉が主語位置に据えられ，「ガ格名詞句」となり，一項述語を作るのが自動詞である。それに対して，第一の際立ちが与えられたモノあるいは〈場〉が主語位置に据えられ，「ガ格名詞句」となり，第二の際立ちが与えられたモノあるいは〈場〉が「ヲ格名詞句」となり，二項（三項）述語を作るのが他動詞であると規定する。

この規定に従うと，ヲ格名詞句をとる二項（三項）述語に現れる動詞はすべて他動詞として扱われることになる¹⁸。上に紹介した先行研究との関連で問題となるのは，移動補語に現れる場所のヲ格名詞句の扱いである。「場所」の取り扱いでは付加詞と項の区別が重要である。

- (10) a. 太郎は車をガレージで洗う。
b. 太郎は車をガレージに入れる。

「洗う」は二項動詞で「仕手」と「対象」をとり，「ガレージで」は付加詞である。一方「入れる」は三項動詞で「仕手」と「対象」とその移動先である「場所」が述語の意味を完結させるために必要である。この観点からすると，移動補語をとる「渡る」や「通る」などは，移動の対象（移動する空間）としての場所が示されなければ意味が完結しない。(11a) (12a) は場所情報が文脈から了解され省略されているかダイクシスで場面から理解されるのでなければ不自然である。

- (11) a. 太郎は渡った。
b. 太郎は横断歩道を渡った。

(12) a. 太郎は通った。
b. 太郎は店の前を通った。

さらに，移動推進動作（影山・由本 1997 : 128）を表す動詞である「歩く」「走る」「泳ぐ」「飛ぶ」などは，(13a) (14a) のように一項述語を作る自動詞であると同時に移動場所を対象化し，(13b) (14b) のようにヲ格名詞句をとることもできる。これを二項述語と呼ぶべきかはなお検討を要するが，(15) に示したように英語で他動詞扱いになることを考慮

¹⁸ ここで「項」というには述語の意味が完結するために必要な文の要素のことである（長谷川 1999）。したがって「太郎は雨の中を車で出かけた」の「雨の中」は「ヲ格名詞」があるが，これは状況補語と呼ばれ，述語の項ではないため，「出かける」は他動詞とは見なされない。

すれば、二項述語の他動詞の用法になっていると見なすこともできるだろう。しかし、本論文では、これは英語の「目的語化」とは異なり、空間を対象化するものだと考える¹⁹。その上で、対象化した空間をヲ格名詞句で示すという点で、これも他動詞構文の一つと見なすことにする。

- (13) a. 太郎は出張先の町で営業のために 20 キロほど歩いた。
b. 太郎は銀座通りを 500 メートルほど歩いた。

- (14) a. 花子は川で泳いでいる。
b. 花子は川を泳いでいる。

- (15) walk v.intr.

1. To move over a surface by taking steps with the feet at a pace slower than a run: a baby learning to walk; a horse walking around a riding ring.

v.tr.

1. To go or pass over, on, or through by walking:
walk the financial district of a city.

(American Heritage Dictionary Online) ²⁰

次に先行研究とのかねあいで問題になるのは、事態の把握の在り方の違いとヲ格名詞句の現れ方である。(2a, b) のように二者分離を前提にし、モノとモノのエネルギー連鎖/使役連鎖をベースにして生まれる他動詞文と、(6a, c) (7a, b) のように二者一体を前提にし、モノと〈場〉の二者関係（存在と所有の概念）をベースにして生まれる他動詞文は、どちらもヲ格名詞句を伴うが、前者のヲ格は構造格であり目的語として認定されるが、後者は目的語としては認定されないという違いがある（奥津 1967, 杉本 1986）。したがって受身文も成立しない。

2.1.3 自動詞・他動詞と自動詞構文・他動詞構文

本論文では自動詞と他動詞は先に示した項の数とガ格名詞句、ヲ格名詞句の現れ方によって規定され则认为るが、唯一これでなければならないと主張するものではない。そして、ある動詞が自動詞か他動詞かを判定することが本論文の目的だというわけでもない。本論文が明らかにしたいのは、使役起動交替のような構文とは別に、〈場〉を焦点化あるいは対象化することによってヲ格名詞を伴って作られる文があり、それに注目することの必

¹⁹ 池上 (1993) が指摘しているように、英語の移動推進動詞の他動詞用法が日本語のヲ格名詞句をとる場合と意味的に一致するというわけではない。移動補語に現れるヲ格名詞句については 4.8.2.4 節で取り上げて詳しく論じる。

²⁰ <https://ahdictionary.com/>

要性を主張するものである、したがって、本論文ではある特定の動詞について「これはヲ格名詞句を伴う他動詞である」というのではなく「これはヲ格名詞句を伴う他動詞構文（の動詞）である」ということにする。これは先行研究における他動詞の規定を“狭義”の規定（目的語としてのヲ格名詞/対格のヲ格をとる動詞）とし、項とその現れ方（補語としてヲ格名詞句をとること）による他動詞の規定を“広義”の規定とした場合、「他動詞」という用語は狭義の意味で用いることにし、本論文が考える広義の他動詞については「他動詞構文」（補語としてヲ格名詞句をとる構文）という用語を用いることにするものである。繰り返しになるが、これはある動詞を取り上げてそれが自動詞か他動詞かという議論は不毛なものになるおそれがあり、そして本論文の目的ではないからである。

具体的には第3章で説明されるが、本論文では(6c) (7b) (9a, c) は、モノと〈場〉の二者関係において存在から所有の概念に転換し、背景化されていた〈場〉が焦点化されることによって際立ちを与えられ、その結果、〈場〉（として捉えられる人を含む）を主語位置に据えてヲ格名詞を伴う構文が作られると考える。そのためこのような他動詞構文を特に「場焦点化他動詞構文」と呼び、モノとモノの使役連鎖という事態把握に基づて作られる「使役変化他動詞構文」と区別することにする。

2.2 モノと〈場〉の一体性

本論文はモノと〈場〉の二者関係のもっとも基本的な関係である存在と所有の概念の言語化を研究の対象とする。モノの独立性を前提にそのモノ同士のエネルギー連鎖に注目した事態把握は「二者分離」である。それに対して存在と所有の概念は「二者一体」の事態把握であると言える。この存在と所有の概念はどの言語にもあることは言うまでもないことだが、モノと〈場〉のつながりにどの程度注目して言語化されるかはそれぞれの言語によって異なることが予想される。Masuda and Nisbett (2001)（以降「M & N (2001)」と略す）が行った心理実験は西洋的な物事の見方と東洋的な見方が視覚情報の受け取りの違いにも反映されているかを検証するために行われたものであるが²¹、その結果はモノと〈場〉（背景）のつながりの捉え方を考える上で非常に興味深い資料を提供してくれる。

この実験では日本人の大学生 41 名とアメリカ人の大学生 36 名を被験者として、図 2.1 のような水槽の映像 (vignettes) をパソコンの画面を通じて見せたあとに、想起テストと認識テストをした。

²¹ 西洋的な見方と東洋的な見方はそれぞれ「分析的な考え」(Analytic Thought) と「全体的な考え」(Holistic Thought) と呼ばれ、次のように説明されている。

Analytic Thought: detachment of the object from its context, a tendency to focus on attributes of the object in order to assign it to categories, and a preference for using rules about the categories to explain and predict the object's behavior. Inferences rest in part on the practice of decontextualizing structure from context, the use of formal logic, and avoidance of contradiction.

Holistic Thought: an orientation to the context or field as a whole, including attention to relationships between a focal object and the field, and a preference for explaining and predicting events on the basis of such relationships. Holistic approaches rely on experience-based knowledge...and are dialectical, meaning...a search for the “Middle Way” between opposing propositions. (同上 : 923)

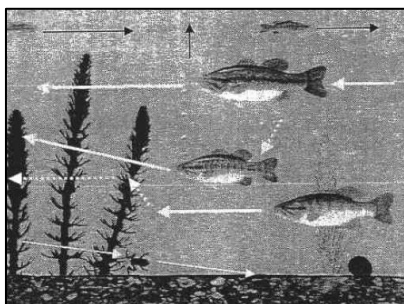


図 2.1 実験用の映像例 (M & N 2001 : 924. fig.1 より)

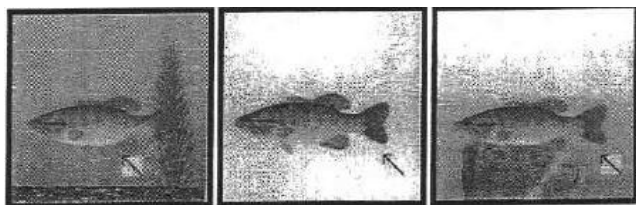
想起テストでは，映像で観察されるモノを九つに分類し，想起された文（口頭）にどれがいくつ出現したか，その出現数を統計処理した。

表 2.1 観察されるモノの分類

分類（処理）		分類（集計）	
1	Focal Fish	1	形と色に際立ちがあり，前景で活発に動いている大きな魚
2	Active object	2	形と色のはっきりせず，背景でゆっくり動いている魚
		3	形と色に際立ちがあり，前景で活発に動いている小さな生き物（蛙，イモリ，サンショウウオ）
3	Inert object	4	背景にあつてあまり/ほとんど動かない生き物（貝，軟体動物）
		5	背景にある水草
4	Background	6	不規則な間隔と方向に現れる泡
		7	水槽の底に置かれている岩などの物体
		8	水（背景としての色，流れ，など）
		9	その他の背景的な環境（熱帯の海，池，など）

認識テストでは，図 2 のように「実際に見たもの」と「新規のもの」について，それぞれの三つの背景で示し，どの程度正しく「実際に見たもの」を認識できるかを調べた。

実際に画面上で見たモノ



実際と同じ背景

背景なし

新規の背景

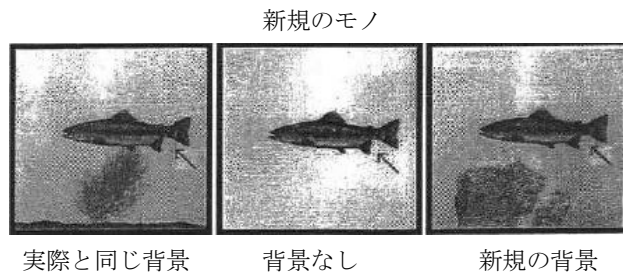


図 2.2 認識テスト用の映像例 (M & N 2001 : 925. fig.2 より)

想起テストの結果は、‘Background’ と ‘Inert object’ の数について、日本人のほうが有意に高い数が想起された。一方、focal fish についてはアメリカ人も日本人も最も想起数が高く、かつ両者に有意な差は認められなかった²²。また、想起にあたって、何と何を結び付けてコード化されるかについて、‘focal fish’ と ‘active object’ への関連付けである<Relation to active animal>と、‘Inert object’ と ‘Background’ への関連付けである<Relation to field>の割合を調べた。その結果、「Relation to field」については、日本人のほうが有意に高いが、「Relation to active animal」には有意な差は認められなかった。この結果から、日本人は動いて目立つものはもちろん、動かないものにも注目し、かつそれと関連付けて事態を捉えていることが窺える。

一方、認識テストでは、日本人は三つの背景パターンによる正答率に有意な差が認められた。すなわち「実際と同じ背景」のときと「背景なし」のときの正答率が「新規の背景」と比べて有意に高く、「実際と同じ背景」と「背景なし」との間には有意な差は認められなかった。一方、アメリカ人のほうは、背景の操作による正答率の変動はそれほど認められなかった²³。この結果から、日本人は正解 (= 実際に見たモノ) を見せられても、それが実

²² 分類ごとの出現数は次のとおりである。(M=平均, SD=標準偏差, n=被験者数)

Table 2
Numbers of Accounts of Scenes in Each Category for American and Japanese Participants

Category	American			Japanese		
	M	SD	n	M	SD	n
Background	20.11	19.68	36	30.88	20.51	41
Inert objects	38.22	24.62	36	65.39	34.44	41
Active objects	77.42	34.39	36	89.76	33.50	41
Focal fish	117.91	60.12	36	130.32	58.05	41

Note. The number of accounts in each category was compared independently.

²³ 三つの背景のパターンによる正答率は次に示した通りである。

際とは異なる背景で表示された場合には、正答率が落ちる傾向があり、モノと〈場〉が一体として把握されていることを示唆していると言える。

M & N (2001) の実験結果が示唆していることは、事態の把握において図 (figure) として認識されるものは注目されるという共通点がある一方で、モノを〈場〉と切り離して把握するのか、それとも一体として捉えるのかについてはその程度に違いがあるということである。そして日本人は後者の傾向が強いということである。このことから、言語の分析においても、モノと〈場〉の言語化の在り方に注目することには意義があると考えられる。

2.3 意味の構造と事態の把握の在り方

語彙 (概念) 意味論と呼ばれる分野において動詞の意味構造および、意味構造と統語構造とのつながりが研究され、動詞の意味がそれまで考えられていた以上に統語構造に影響を与えていることがわかってきた。英語では、Levin (1993 : 1-19) のイントロダクションに紹介されている動詞 (cut, break, touch, hit) の意味上の分類と統語上の振る舞いの違いがそれを非常にわかりやすく示している。「接触」「動き」「変化」の有無、あるいはその組み合わせによって動詞の統語的な振る舞いが決まるのである。

また、Vendler (1967) の「状態」(state), 「活動」(activities), 「到達」(achievements), 「達成」(accomplishments) の分類以降、動詞をその意味的に内在するアスペクトの特徴によって分類し、アスペクトを表す形式や副詞との共起などが論じられてきた (Smith 1991, Dowty 1979, Van Valin 2005, Pinker 2007 など)。

このような動詞の意味構造を根源的な意味に分解し、その合成によって意味の特徴を捉えようとするアプローチとは別に、意味は概念化であると考え、外界の事態の把握の在り方そのものも意味として取り入れたのが認知言語学である。そこでは知覚心理学の図と地という考え方を応用し、客観的に同一の事態も「捉え方」(construal) によって異なる形で概念化されるという考え方に基づいて言語現象が研究されてきた。事態認知モデルおよび認知構造図やイベントスキーマといった抽象的な図式は把握の在り方とその違いを説明するための拠り所になるものである。

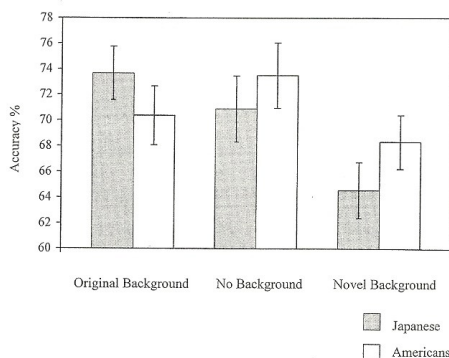


Figure 5. Recognition accuracy for previously seen objects.

以上の二つの研究のアプローチは、一般的には前者は要素還元主義で後者は全体主義と
いうように理解されるが、前者の流れの中で Jackendoff (1994) や Pinker (2007) が「思
考の言語」と称し、言語習得にも利用される根源的な概念を抽出することと、認知言語学
の事態認知モデルにおけるスコープ、プロファイルや際立ち、そして図と地の分化や反転
による物事、出来事の概念化は決して相容れないものではない。むしろ補完しあうべきも
のである。つまり、言語のモジュール性や生得的な言語知識の存在を認めるかどうかとい
う点では対立はあるものの、私たちがどのような概念を基本的な単位として言語を習得し、
心的な辞書（メンタルレキシコン）を構築するかという点と、言語の創発にどのような認
知的な能力が関与するかは全く接点のない概念ではないと考えられる。事実、Pinker (2007)
は「思考の言語」を主張する一方で、①場所格交替 ②与格交替 ③使役起動交替の三つ
をいわゆる図地反転として認め、①では「移動」対「変化」、②では「移動」対「所有」、
③では「何かが起こること」対「何かを起こすこと」という意味の転換だと考えている。
本論文も語彙意味論における外界のインターフェースとしての動詞の意味の鋳型（意味構
造）と認知言語学における事態把握にかかわる参照点能力、プロファイルや際立ちによる
対象物の非対称化は、対立するものとは考えず、補完しあうものとして扱う。具体的な扱
い方は第 3 章に示す。

本小節の最後に上の語彙意味論と認知言語学に影響を与えたと考えられる場所理論
（localist theory）について取り上げておく。場所理論とは、「場所」と「移動」を意味の
基本と考え、その他の意味、例えば状態や状態変化、さらには時空間へと拡張すると考え
る理論である。Lyons (1977 : 718) では Localism を次のように説明している。

Localism is “the hypothesis that spatial expressions are more basic,
grammatically and semantically, than various kinds of non spatial
expressions (cf. Anderson, 1971, 1973). Spatial expressions are linguistically
more basic, according to the localists, in that they serve as structural
templates, as it were, for other expressions; and the reason why this should
be so, it is plausibly suggested by psychologists, is that spatial organization is
of central importance in human cognition (cf. Miller & Johnson-Laird, 1976 :
375ff).”

その源流は 19 世紀前半のドイツ語圏の学者に現れた場所論者（ヴェルナーとハルトウン
グ）に認めることができるが（池上 1981）、その後イギリスの Anderson (1971) によって
格関係が見直され改訂された。また、アメリカでは Gruber (1976) の生成意味論の中で場
所を基本として意味が拡張するという考えが示された。生成意味論自体はその後消滅する
ことになるが、後の生成文法において新しい意味論の重要性が認識されるようになった。
そのような流れの中でこの Gruber の場所理論を踏まえて語彙意味論（lexical semantics）

の構築を目指したのが Jackendoff (1983) である。そこでは TRH (Thematic Relations Hypothesis) による「意味の場」が提唱された。これについては次節で詳しく取り上げる。

Jackendoff を中心とする語彙意味論は場所理論の研究の流れの中に位置付けられると考えられるが (影山 1996 : 52), 認知言語学と直接的なつながりがあるかどうかは明確ではないようである。Fortis (2011 : 10) は場所理論の歴史的な考察の中で, 19 世紀のドイツの場所理論を引き継ぎ, 認知言語学における場所理論の先駆者として Gruber と Talmy を考えているが²⁴, 場所理論の先行研究への言及はないと言う。そして, Fortis (2011) では, 認知言語学者は場所理論の知識を持っていなかった可能性があることを指摘し, 場所理論は, 認知機構と身体性に基盤をもつ言語学を生む土壌として働いたという側面があると結論づけている。この分析が正しかったとしても, 場所理論が考える「場所中心」の心理学的な動機付けと概念メタファーとしての空間化メタファー (Lakoff and Johnson 1980, 1999 など)²⁵ は共通した認知的基盤に立っていることは確かである²⁶。

本論文も意味の基本を「場所」に求める点で場所理論の研究の流れの延長にあると言える。後の議論で明らかにされるように「二格」によって示される格関係は多岐にわたるものの, その基本は「場所」であるという立場をとる。そのため, 日本語における典型的な所有構文である「山田さんに弟がある」も, 与格主語構文といった見方をとらず「二格」はあくまで「二格」としてその共通した認知的な基盤 (事態の把握の在り方) が何かを示すという立場である。これは二格は与格であるという見方を一概に否定するものではない。

2.4 語彙意味論における概念の拡張・転換

2.4.1 Thematic Relations Hypothesis

Jackendoff (1983) は TRH (Thematic Relations Hypothesis) で, ‘BE’ ‘AT’ という概念で表示される「場所」と ‘GO’ ‘TO’ ‘FROM’ という概念で表示される「位置変化」と ‘STAY’ ‘CAUSE’ ‘LET’ という概念と概念を結びつける意味述語によって動詞が表す意味を記述する理論を提唱した。その中で五つの意味場 (semantic field) を設定してそ

²⁴ Fortis は次の論文を挙げている。

Gruber, Jeffery (1965) "Studies in lexical semantics" MIT Working Papers in Linguistics.

Talmy, Leonard (1972) Semantic Structures in English and Atsugewi. Dissertation, University of California, Berkeley.

²⁵ 概念メタファーとしての空間化メタファー (Lakoff and Johnson 1999 : 179)

(i) a. States Are Locations (interiors of bounded regions in space)

b. Changes Are Movements (into or out of bounded regions)

²⁶ ラネカーにしても生成意味論を支持し, 生成文法とたもとを分かち, その後生成意味論の終焉によってアンチテーゼとして認知文法の構築に進んだという経緯がある。ちなみに, ラネカーは 70 年代後半～80 年代の初め, 認知文法 (cognitive grammar) という名称を使わず, ‘Space Grammar’ という名称を用いていたことから「空間」とのつながりを強く意識していたと考えられる。Langacker(1987) の Preface でこの名称について触れている。「space grammar という名称の frivolity (軽薄さ) に否定的な反応が多く, 真面目に (seriously) 受け取られなかった。cognitive grammar という名称は intellectual significance (知的な印象) を与える。」(p.vi)

なお, Cognitive Linguistics vol.7(1996)で Jackendoff の概念意味論と認知言語学との共通点と相違点を探る試みがなされたが, これまでと同様, Jackendoff は場所理論的に考える場所とその他の概念とのつながりは, 認知言語学が主張するメタファーとは異なるものであると主張している。

の関連付けを示した²⁷。例えば、「時間の意味場」(Temporal field)であれば、次のように存在と移動の概念(例文 16)が時間にも拡張して適用される(例文 17)。

- (16) a. The statue is in the park. (BE)
b. We moved the statue from the park to the zoo. (GO)
c. Despite the weather, we kept the statue on its pedestal. (STAY)
(Jackendoff 1983 : 190)
- (17) a. The meeting is at 6:00. (BE)
b. We moved the meeting from Tuesday to Thursday. (GO)
c. Despite the weather, we kept the meeting at 6:00. (STAY) (ibid.)

「所有の意味場」(Possessive field)は、(18)のような規定によって存在と所有が関係づけられ、静的な(分離可能)所有は(19)のように意味構造が示される²⁸。

- (18) Possessive field (:Alienable possession)
a. [THINGS] appear as theme.
b. [THINGS] appear as reference object.
c. Being alienably possessed plays the role of location; that is,
"y have/possesses x" is the conceptual parallel to spatial "x is at y"
(Jackendoff 1983 : 192)
- (19) Beth has/possesses/owns the doll. The doll belongs to Beth.
[State BE Poss ([DOLL], [Place AT Poss ([BETH])])] (ibid. ※下線は引用者による)

(19)の意味構造で注目すべき点は、所有者である[BETH]が存在の意味構造の「AT(場所)」に当たるところに位置している点である。つまり、ある場所にあるモノが存在するという概念の構造と、ある人があるモノを所有するという概念を、場所を人に平行的に対応させることによって結び付けたということである。生成文法においても Freeze (1992) が統語的に存在から所有へと変形されることを理論化しているが、どちらの場合も、なぜどのように概念が平行的に対応、あるいは統語構造で変形(移動)するのかという動機付けが明らかではない。直観的には(16)(17)で示したような存在空間から時空間への対応はメタファーとして理解できるが、(19)のようなものはそれとは異なると考えられる²⁹。本

²⁷ 本小節で紹介する意味場以外の二つは「状況の意味場」(Circumstantial field)と「存在の意味場」(Existential field)である。

²⁸ 動詞「give, receive, lose, keep」は(19)を基本として、意味述語「GO」「TO」「FROM」「STAY」「CAUSE」「LET」によってその意味構造が示される。

²⁹ Jackendoff (1983) では、「時間の意味場」「状況の意味場」の抽象的な意味場は空間との平行性で習得

論文は存在から所有への転換は一種の図地反転をベースにした概念の転換であり、動機付けとしては「〈場〉が、そこに存在するモノによって特徴付けられる」という事態把握であるとする。

なお、図地反転という点では、前節でも紹介したように、Pinker (2007) は、Jackendoff による語彙意味論の発展を受け、「思考の言語」という基本的な概念の要素の存在を支持する一方で、①場所格交替 ②与格交替 ③使役起動交替の三つをいわゆる図地反転として認め、①では「移動」対「変化」、②では「移動」対「所有」、③では「何かが起こること」対「何かを起こすこと」という意味の転換だと考えている。②が「移動」対「所有」つまり、モノの移動に焦点が当たるのか、所有の移転に焦点が当たるのかの図地反転であるとする点はいいとして、①については「移動」対「変化」と考えるのは広く受け入れられている分析であるが、それだけでは不十分だと考える。モノとして捉えれば、確かにそれが「移動」するのか「(状態) 変化」するのかという視点でもいいのだが、それが〈場〉として捉えられた場合に、その変化は「非所有」から「所有」の状態への変化、あるいは「所有」から「非所有」の状態への変化である、という視点が重要だというのが本論文の立場である。つまり、②だけでなく、①についてもモノに注目して、それが移動して「存在」の場所が変化するという把握の在り方と、〈場〉に注目して、その所有状態が変化するという把握の在り方の対立であるという見方をすることが重要だと考える。

次に「同定の意味場」(Identificational field) を取り上げる。(20) のような規定によって存在と所有が関係づけられ、分類 (type) は (21) のように、属性 (property) は (22) のように意味構造が示される

(20) Identificational field

- a. [THINGS] appear as theme.
- b. [THING TYPES] and [PROPERTIES] appear as reference objects.
- c. Being an instance of a category or having a property plays the role of location.

(Jackendoff 1983 : 194)

(21) Ellise is a pianist.

[State BE Indent ([Thing Token ELLISE], [Place AT Indent ([Thing Type PIANIST])])]

(ibid.)

(22) The light is red.

[BE Indent ([LIGHT], [AT Indent ([Property RED])])]

(id. : 195)

(21) (22) の意味構造で注目すべき点は、名詞述語では場所の位置に type が、形容詞述語では場所の位置に property が来ている点である。つまりコピュラ文も場所 (存在) の括

されるが、「所有の意味場」と「同定の意味場」は生得的なものだとしている (同書 : 210)。生得的な否かの議論はさておき、この二つが同じ扱いを受けている点は興味深い。本論文ではどちらも存在から所有の概念へと転換として分析される。

張として捉えられている。本論文もカテゴリーのメンバーであることやモノの属性が存在の概念と平行的に捉えられるという立場であるが、本論文では分離不可能所有としてこのような属性の所有あるいは全体と部分の関係を捉え、大きく所有という概念の枠組みで分析することにする。

2.4.2 場所項の取り立て

影山 (1996) は、一つの動詞述語の表し得る最大の意味の構造を (23d) とし、それは (23a) 状態 [BE : 存在を含む], (23b) 変化 [BECOME] の下位事象と (23c) 活動 [ACT] ³⁰ という上位事象とが使役 [CAUSE] によって結び付けられた構造であるとした³¹。

(23) 語彙概念構造 (LCS) の型

- | | | |
|---------|-----|---|
| a. 状態 | : | [y BE AT-z] |
| b. 変化 | : | [y BECOME [y BE AT-z]] |
| | (発生 | ([BECOME [y BE AT-z]]) |
| c. 活動 | : | [x ACT (ON y)] |
| d. 使役変化 | : | [x ACT (ON y)] CUASE [y BECOME [y BE AT-z]] |
- 上位事象

下位事象

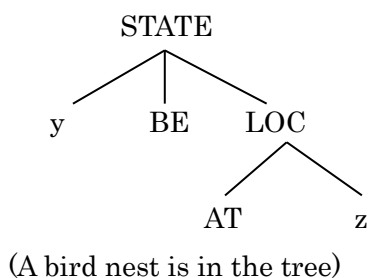
影山 (1996) が示した語彙概念構造の型は、Vendler (1967) のアスペクトによる動詞の四分類とも対応する一方で、「時間とエネルギーの流れに沿って、先に (左側に) 使役事象が来て、その後に結果事象が続く」(同上 : 90) という特徴を有している。これは「認知言語学のビリヤードモデルのアイディアを反映させつつ、あくまでも文法表示の一部としての意味構造を表したものである」(同上 : 90) と述べているように、これは意味の構造という視点にたって作られたものだが、外界の事態の把握の鋳型として事象構造を表していると言える。そこで本論文では、上記の語彙概念構造そのものを分析ツールとして利用することはしないが、(d) が人間の言語が一つの述部で表し得る最大の概念構造であるという点 (同上 : 204) を支持し、(d) の「使役変件事象」を事態把握におけるイベントスキーマの枠組みとして設定し、どの事象に焦点をあてて概念化するのかという観点で分析することにする。そこでは、(a) の状態/存在事象を基本に据え、その原因事象として発生事象、変件事象が読み込まれるというモデル、つまり下位事象側からみたモデルを提案する。

³⁰ ‘x ACT’ は自動詞で概念化される活動を表し、‘x ACT ON y’ は「打撃・接触」(対象 y の変化が含意されない) 他動詞で概念化される活動を表す。

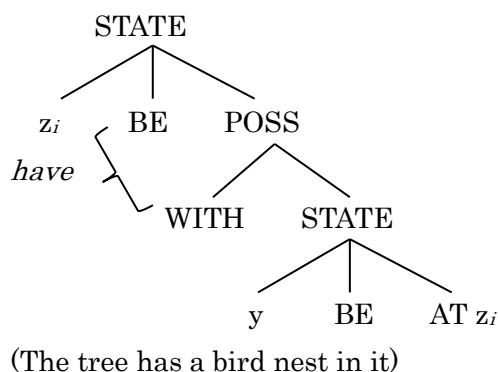
³¹ 影山 (1996) では、日本語の他動詞化接辞の働きを考慮し、主語が出来事 (人間名詞も含む) の場合には ‘CAUSE’ が使われ、動作主の場合には ‘CONTROL’ が使われるとし、両者を区別しているが (同上 : 197-198)。変化については、初期状態が存在する通常の変化と存在しない発生とを区別している。後者の場合は変化の意味構造における BECOME 述語の主語がない。また、アスペクトの違いによって ‘BECOME’ (瞬間相) と ‘MOVE’ (継続相) を使い分けるとしている (同上 : 59)。

影山（1996：55）では，（24）に示したように存在構文（be）と所有構文（have）の関係は概念構造の組み換えであるとした。「存在文が存在対象（y）に焦点を置いた構文であるのに対して，場所（z）の方に焦点を当て，zを主語に取り立てたのが所有文である」（同上：55）と規定したのである。つまり，（24a）は（23a）と同じで，対象（y）が場所（z）の位置になることを示しており，（24b）はその場所（z）が取り立てられ主語位置に来て，場所（z）が，対象（y）がそこ（z）に存在するという状態を伴っている（BE WITH），という構造に組み換えられるとしたのである。

（24） a. 存在文



b. 所有文



（同上：55（19）の図より）

存在と所有の概念をそれぞれ‘BE’と‘BE WITH’に対応させる考え方はすでに生成文法の変換（包入）でも示されていたものだが，意味構造の組み換えとして示された点には意義のあることである。本論文は，この「組み換え」というものを，動詞の意味構造という抽象的な概念の枠組み内での操作ではなく，外界の事態把握における一種の図地反転と考える。つまり，〈場〉が背景として把握されるのか前景として把握されるのかという観点で見ることによって，所有は単なる意味構造の組み換えではなく，事態の把握において〈場〉を焦点化する動機付けがあり，それによって背景としての〈場〉が前景化すると考えるのが本論文の立場である。

その後影山は，影山（2002）でこの存在と所有の概念の転換の考えを発展させ，動詞の意味構造において非対格性をもつ他動詞の存在を主張した。非対格性をもつ他動詞とは図

2.3 の「？」を付した意味構造に対応する動詞である。

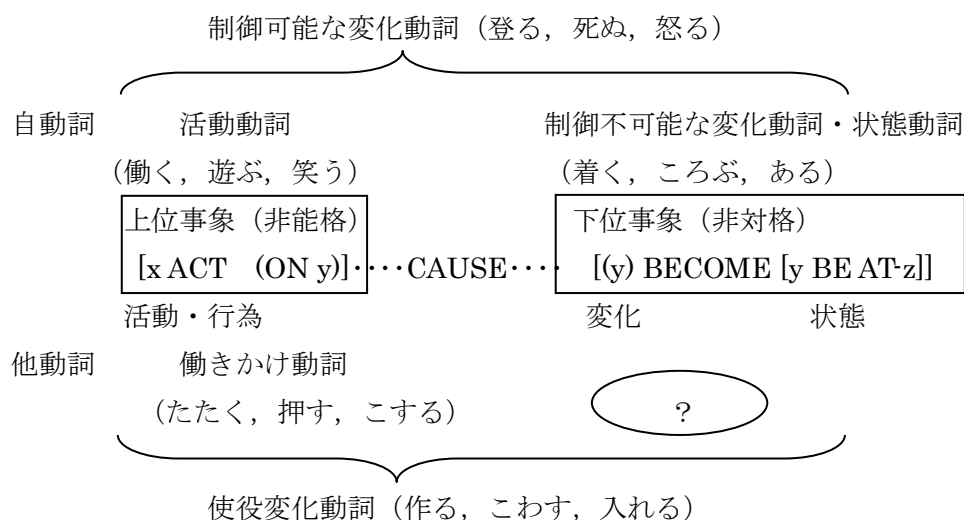


図 2.3 語彙概念構造と動詞の分類 (影山 2002 : 120 より)

図の中央には (23d) に示したのと同じ使役変化の意味構造が示されている。意味述語の ‘CAUSE’ でつながれた上位事象と下位事象, そして図の上下に示された自動詞と他動詞のグループを見ると, 自動詞のほう是非能格性をもつ動詞と非対格性をもつ動詞, そして使役変化全体を表す動詞グループが存在する。しかし, 他動詞のほうは, 上位事象の働きかけを表す動詞と使役変化全体を表す動詞は存在するものの, 下位事象のみを表す動詞のグループが「？」になっている。ここに入るべき動詞が非対格性をもつ他動詞ということになる。この動詞は統語上はヲ格名詞を伴って他動詞構文を作るが, 意味構造上は下位事象しかもたず非対格性をもつため, 受身文も成立しないと説明される。

この分析で注目されるのは, 非対格性をもつ他動詞とは, 意味構造において場所が取り立てられて, 変化の意味述語の主語になったものだと分析されたことである。(25) に示した英語の湧出動詞 (gush, ooze) の分析では, (a) の自動詞は「場所 (z) から物 (y) が出てくる」という発生を表すが, (b) の他動詞は「場所 (z) がどうなったか」を叙述する文になっている³²。したがって, (b) は他動詞文であるが, 主語名詞句「タンカー」について「何をしたか」という問いは不適切で, 「どうなったか」という問いが自然になると説明される。

(25) 英語の gush の意味構造と自他動詞構文

a. 自動詞としての gush

³² 意味構造を逐次的に解釈すると, (a) は「y が場所 z ではないところに存在するように変化する」ことを表し, (b) は「場所 z が, y が z ではないところに存在するように変化する」ことを表す。

[BECOME [y BE NOT-AT-z]]

↓ ↓

Oil gushed from the tanker.

b. 他動詞としての gush

[z_i BECOME [y BE NOT-AT- z_i]]

↓ ↓ ↓

The tanker gushed oil (from several cracks). (影山 2000 : 129)

非対格性の他動詞の存在を指摘した点は注目される。しかし、それが場所を取り立てるという概念の転換によるのであれば、所有の概念とどのようにつながっているのかという点が気になるところであるが、それについては、影山（1996）も影山（2002）もはっきりとはしない。（24）に示したように存在（BE）から所有（BE WITH）への転換が場所の取り立てによるのであれば、（25b）にも BE WITH という意味述語が現れてもよさそうだが、上に示したように現れない。影山（1996）では発生の意味構造を（26）のように規定しているが、ここにも BE WITH は現れない。

（26）発生の概念構造と自他動詞 ³³

a. 自動詞としての「生じる」

[BECOME [y BE AT-z]] (y が z に存在するように変化する)

例：コンピュータにミスが生じる／木の芽がふく

b. 他動詞としての「生じる」

[z_i BECOME [y BE AT-z_i]] (z が, y が z に存在するように変化する)

例：コンピュータがミスを生じる／木が芽をふく

影山の考える存在から所有への概念の転換は、（24）にツリーで表示したもののだが、これを意味構造で表示すると次のようになり、BE WITH が have になると示されている。

（27）存在構文 [y BE AT-z]

(Only ten dollars are in the drawer.)

→所有構文 [z_i BE [WITH-[y BE AT-z_i]]]

have

(The drawer has only ten dollars in it.) (影山 2002 : 132)

影山（1986 : 116）では、発生の意味構造を（26）のように示した後、発生事象ではない「結

³³ 影山（1996 : 114-115）の記述をもとに意味構造を書いたものである。原文では構造はツリー表示されている。

婚生活には困難が伴う」と「結婚生活は困難を伴う」も同じ構造の図式に当てはめることができるだろうと指摘するにとどまっている。「伴う」を静的な存在と所有の概念をもつと考えれば (27) になるはずだが、発生と同じだとすれば (26) の構造をもつことになる。

さらに、同じ発生でも「芽を吹く」「ミスを生じる」の意味構造を、影山 (1986) では (26) のように NOT なしで規定しているが、その後影山 (2002 : 138) では「芽を出す」の「出す」は「gush」と同様に (25) のように NOT が現れる意味構造に変更し統一している。しかし、「芽を出す・芽を吹く・ミスを生じる」は発生物が派生母体 (上) に存在するのに対して、「gush」は発生母体の内部にあったものが外部へ流出する事象を表す。発生と流出 (消失) は視点の違いだけで同一事象を表すと考えられることもできるが、その場合であってもはたして (25) が妥当と言えるかも疑問である。また、影山 (2002) では、「教える」に対する「教わる」も非対格性をもつ他動詞であると分析されるが、発生の意味構造では現れていなかった BE WITH がこの「教わる」への変換では現れる。

以上、まとめると「場所の取り立て」という意味構造の概念転換の点では同じでありながら、なぜ発生事象の他動詞構文では BE WITH が現れず、(情報の) 移動事象がベースになっている「教わる」では現れるのかが十分に説明されていない。そして、発生および流出 (発生母体から見れば消失) の意味構造をどのように記述するのかについてまだ検討の余地があると考えられる。本論文では、所有を単に静的な存在からの転換にとどまらず、動的な「非所有」から「所有」の状態への変化まで広げて構文を分析する。これによって、〈場〉の取り立て (焦点化) によって際立ちを与えられた〈場〉はなんらかの所有の概念へと転換し、所有の意味概念をもつ構文を作ると考える。この所有の概念が非対格性を持ちながらも構文上はヲ格名詞をとり他動詞構文を作ると分析される。そのように考えることによって所有という概念が様々な構文の「下地」になっていることを明らかにする。

さて、影山 (2002) の分析に戻ると、発生構文における非対格他動詞の生成原理を、所有の概念そのものよりもむしろ意味構造における「場所の項 (z)」の位置関係に注目し、(28) のように (z) が両端に位置する「サンドイッチ構造による対格の認可」(同上 : 140) であると考え、以下のように分析している

(28) サンドイッチ構造による対格の認可

$$\begin{array}{c} [z_i \text{ BE / BECOME } [y \dots z_i]] \\ \hline \end{array} \quad (\text{影山 2002 : 140 (77) より})$$

外項があれば、それが対格付与の絶対的な力を行行使す。これを原型とすると、外項がないのに対格が与えられるというのは周辺的な状況である。そこでは、場所的な項が焦点化されて、BE ないし BECOME の主語に取り立てられる。その結果、二つの z 項が y 項をはさむというサンドイッチ構造が生まれ、間にはさまれた y 項が対格目的語として認められる。外項が単独で対格を付与でき

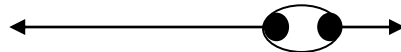
るのに対して、(77) [引用者註：本論文の (28) を指す] の非対格構造では二つの場所表現が協力して初めて対格を認可することになる。(影山 2002: 140)

対格の認可がどのような仕組で成立するのかについては、本論文の分析の対象ではないが、意味構造からのリンキングだけで構文の成立をすべて説明することには無理があるのではないだろうか。確かに動詞の意味構造は統語構造と深く関係しているが、その意味構造の鑄型の大元には、人間が外界をどのように捉えるのかという「把握の在り方」があるというのが本論文の立場である。したがって、意味構造における概念転換そのものを否定するわけではないが、根本的には存在と所有を「モノ」と「場」の二者の捉え方の違いとして分析し、その際立ちの在り方によって自動詞構文になるのか他動詞構文になるのかを考える。

2.4.3 経験者主語・責任者主語

影山 (1996) では、日本語のナル型視点を (29) のように示した上で、「日本語の自他の変換は、自動詞から他動詞と、他動詞から自動詞の 2 通りが存在する」(同上: 284) と述べている。

(29) [x ACT ON y] CUASE [y BECOME [y BE AT-z]]



スル型の英語などが左側から右側へ、つまり仕手の側から結果の方に向けて出来事を見る視点をとるのに対して、ナル型の視点が (29) のように中間に位置して両側に向かう視点をとるというものである。そして日本語の BECOME から上位事象への拡大に注目し、次のような純粋に「使役主」と呼べないような主語をとる他動詞文が成立するのは、「非対格構造の上に特別に上積みされた経験者主語ではないかと考えられる」(同上: 286) と分析している³⁴。

- (30) a. 彼らは、空襲で家財道具をみんな焼いた。
b. 親戚の人が、台風で家の屋根を飛ばした。
c. 子供が手にとげを刺した。

(同上: 285)

ここで「上積みされた経験者主語」というのは、(31) に示したように、(30) のヲ格名詞を主語にした自動詞文が成立するという点で典型的な経験者主語と区別される³⁵。つまり、下位事象が自動詞文で表現される一方で、経験者にあたる名詞句が上積みされて見かけ上

³⁴ (30a, b) は天野 (1987b) が「状態変化主体の他動詞文」と呼んだものである。

³⁵ 「風邪をひく」「咳をする」「死ぬ」に現れるのを典型的な経験者主語としている。(同上: 285)

は使役変化他動詞構文を作るというわけである。

- (31) a. 空襲で、彼らの家財道具がみんな焼けた。
b. 台風で、親戚の人の家の屋根が飛んだ。
c. 子供の手にとげが刺さった。 (同上：285)

影山（1996）は典型的な経験者主語と上積みされた経験者主語の違いについて、前者は間接受身が成立するが、後者はしないこと、また前者は英語でも経験者主語の文が成立するが、後者は英語では *have* を用いて迂言的に表現しなければならないことを挙げている。

- (32) a. 大事なときに、先生に風邪をひかれてしまった。
b. *?彼らに、空襲で家財道具を焼かれてしまった。
c. *?あすはピアノの発表会だというのに、子供に手にとげを刺されてしまった。
(同上：285-286)

- (33) a. catch a cold, suffer from illness
b. They had their house burned in the war. (同上：286)

影山（1996：286）は上積みされた経験者主語の例として、さらに次のような、形態上は自動詞でありながらヲ格名詞句をとる他動詞文（各例文の(a,b,c)の右側）を挙げている。

- (34) a. 与太郎が口をあけて／あいて寝ている。
a'. 歯科医が患者の口をあけた／*あいた。
b. ロケットが軌道をはずした／はずれたようだ。
b'. 景子は眼鏡をはずした／*はずれた。
c. イヌがしっぽをたらして／たれて歩いている。
c'. 化学者がビーカーの中に試薬を一滴ずつたらしている／*たれている。

影山は例文の (a', b', c') で自動詞文が成立しないことから、例文 (a,b,c) は「いずれも主語のコントロールの及ばない非対格的な事象だと解釈されるから、ここでも自動詞文が基本になり、そこに新たに主語を付け加えたものと考えることができるだろう」(同上：287) と指摘している。

この影山の分析で注目すべきは、次の二点である。(30) のような他動詞文、そして (34a,b,c) の自動詞の形態で作る他動詞文は、自動詞文が基本で経験者主語は上積みされた（付加された）ものであると分析している点である。そして、影山は、この二つに共通するのは、「新しく付け加えられる主語は、基になる非対格文の主語と所有関係を持っているという点である。文法的（形態的）に裏付けられた他動詞化ではないから、所有関係という意味的な

リンクによって、母体文と新しい主語との関連性を示そうとしているように思われる」(同上: 287) と指摘している点である。

構造格として対格が付与されるわけではなく、所有関係という意味的なものによってヲ格名詞をとる他動詞文を作るというのは、本論文の立場と同じである。本論文では、意味構造そのものではなく、事態把握の在り方として、存在から所有の概念への転換を基盤とする。上の影山の指摘は、他動詞文を他動性の低下という仕手側からの分析だけで終わらせずに、自動詞文で表される事態把握を基本とする分析アプローチが重要であることが確認できるだろう。ただ、影山の分析は、自動詞側からのアプローチとしてそれが所有の意味関係とつながりがあることを指摘するにとどまり、それが具体的にどのようなものかには踏み込んではいない。(32) (33) に示した統語上の違い、あるいは言語による違いは有益な指摘だが、細かく見れば、「とげをさす」は間接受身を作らないが、英語では経験者主語の他動詞文を作る。つまり、影山の挙げた例とは異なる振る舞いを見せる。確かに影山が示したように (32a, b) は受身文を作らない。しかし、この現象と英語の *have* 構文とは常に一致するわけではない。つまり、日本語で間接受身が成立しない場合に常に英語で *have* による迂言的な構文が対応するというわけではない。

(35) 「刺す」の統語的な振る舞い

a. 再掲 (=32c)

*?あすはピアノの発表会だというのに、子供に手にとげを刺されてしまった。

b. A pin pricked her thumb. = She pricked her thumb with [on] a pin.

彼女は誤ってピンで指を刺した。(ジ英和)

個別言語の振る舞いについては、所有の意味関係の中味を見る必要がある。どのような所有関係が *HAVE* 言語で *have* が用いられるのか、また *BE* 言語で通常の使役変化他動詞と同形の動詞が用いられるのか、といった細かい分析が必要である。本論文では、「主体 - 側面 (属性、一時的状態を含む)」「全体 - 部分」のような分離不可能所有と「所有者 - 所有物」といった分離可能所有に分類し、どのような構文で言語化されるのかを見ていく。

さて、経験者という意味役割は根源的には事態の発生する〈場〉と結びついていると考えられる (Landau 2010)。本論文では、このように〈場〉と結びついた経験者は、受け手の〈場〉としての存在であり、事態の生起する〈場〉と把握される存在であると仮定し、経験者が主語位置に来る他動詞構文は、〈場〉(=経験者)がそこに生起した結果物を所有することになる、という事態把握に基づいて生成され则认为。このように経験者は根源的に所有の概念と結びついていると仮定すれば、非意図的な事象を叙述する中核要素となるのが本来の姿だと考えられる。そしてその後、経験者の意味役割は、結果物の所有についてコントロールできる立場にあると認められるように拡張したと推察される。したがって、英語のような対格言語として発達した言語から見れば、「風邪をひく」が「典型的な

経験者主語’ となるが、所有の概念を中心に事態把握を見れば、＜風邪という病気を所有するようになる＞ことを意味している。ただし＜風邪を患う＞と比べれば、主語名詞句のコントロール性が高くなっている分、‘根源的な経験者’からは拡張していると言えるのである³⁶。本論文は経験者という意味役割をこのように考え、(30)の他動詞構文は、所有の概念に転換し、さらに〈場〉が焦点化されて主語位置に来て作られる場焦点化他動詞構文の一つの拡張事例として分析される。ここでいう拡張とは原因事象が読み込まれることによって静的な所有から動的な所有の概念に転換していることを指している。したがって、本論文では「上積みされた」経験者というよりも、所有の概念の拡張事例の一つとして「使役変件事象」が読み込まれたものとして分析される。重要なのは、ここでモノとモノの使役連鎖の事態把握とモノと〈場〉の二者関係の事態把握の接点があるということである。他動詞側からだけの分析でもなく、自動詞側からの分析だけでもなく、両者の接点を見ることによって、存在と所有の概念の言語化の全体を明らかにする。(30)の事例は4.7節「状態と所有の関係」で分析される。

影山(1996)は(34a,b,c)について、(30)との共通点を述べた後、「この場合は非対格主語の格標示が変わるだけで、動詞は自動詞形のまま残っているという点で特異なのである」(同上:287)と述べている。この特異な点についてはそれ以上踏み込んでいない。本論文では4.8節「有対自動詞の両用動詞化」で、場焦点化他動詞構文を生む概念として、「所有」とは別に「占有」を導入し、移動事象におけるモノと〈場〉の二者関係を分析する。

また、影山(1996)では、上述の上積みされた経験者のように統語上主動詞と直接的に項関係をもたないような特別な主語が付け加えられている現象として次のような構文を挙げ、これを「責任者主語」の構文と呼んでいる³⁷。

(36) a. 課長が家を建てた。(もちろん、本当に建築したのは業者)

b. 住職が古くなった寺を修復した。

c. こんど新しくスーツを作った／仕立てた。

d. (火事のときに息子を救出できなかった父親が言う。)

息子はボクが殺したんだ。

(同上:287)

影山はこのような他動詞文が成立することについて、日本語固有の規則として、「一つの下位事象が与えられているときに、その左側に上位事象を継ぎ足すということである」(同上:287)と述べている。これをナル型からスル型への拡張と位置付けている。本論文はこれとは少し異なる立場をとる。確かに(30)との共通点として影山の言うところの主語の

³⁶ コントロール性の高低については、例えば「風邪をひく」は「引かないように注意する」のような事態成立を阻止することを表現できるが、「風邪を患う」は「患わないように注意する」は許容度が低下すること、あるいは間接受身で「部下に風邪をひかれて困った」とは言えるが、「部下に風邪を患われて困った」は許容度が低下することから判断される。

³⁷ (36a, b, c)は佐藤(1994)が介在性の他動詞文と呼んだものに相当する。

「取りつけ/継ぎ足し」があることは確かであるが、前者は非意図的な事象を表し、後者は意図的な事象を表す（あるいは表し得る）点で異なる。この違いについては、影山は「二重使役の意味構造を設定すべきかどうかは定かではないが、英語に訳すときには、have 使役文などを使って迂言的に表現しなければならないことは確かだろう」とだけ述べている。

本論文の分析では、(30) も (36) も事態把握にモノと〈場〉の二者関係の概念化が入り込んでいる点では同じだが、前者はあくまでも所有への概念転換の枠内でモノとモノの使役連鎖の事態把握との「接点」が認められただけだが、後者ではモノまたはイベントと〈場〉の二者関係の捉え方とモノとモノの使役連鎖による事態把握が融合されていると考える。

(36) のような文は、4.10 節の「介在性をもつ他動詞文」の分析で詳しく論じられる。

2.5 認知文法における自他交替

2.5.1 Langacker の認知文法

Langacker (1990a, 1990b, 1991) の考える認知モデルでは、事態 (event) は基本的に構成要素としての参与者 (participants) とそれらの間に存在する関係 (relation) によって示される。この参与者間の相互関係において、一方向にエネルギーが伝達する流れが認められる場合、これをアクションチェーン (action chain) と呼び、言語化されるに当たり、その中で選択され切り取られる部分がスコープ (scope) と呼ばれる。そして、この認知的なスコープ内において、特定の参与者に認知的な際立ちを与えることをプロファイル (profile) すると言う。下の図はこれらの概念を表している。アクションチェーンは二重の矢印で、スコープは楕円で、プロファイルは太線で示されている。

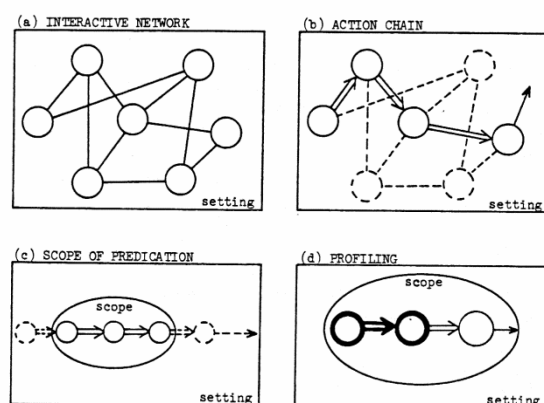


図 2.4 Langacker のアクションチェーンを基本とした認知モデル
(Langacker 1990a : 215 fig.2 より)

そして、スコープ内でのプロファイルの違いによって生まれる構文については次のような例文を挙げ、それに対応する認知構造図を図 2.5 のように示している。

- (37) a. Floyd broke the glass (with the hammer).
 b. The hammer (easily) broke the glass.
 c. The glass (easily) broke. (Langacker 1990a : 216)
- (38) a. Floyd hit the glass (with the hammer).
 b. The hammer hit the glass.
 c. Floyd hit the hammer against the glass. (ibid.)

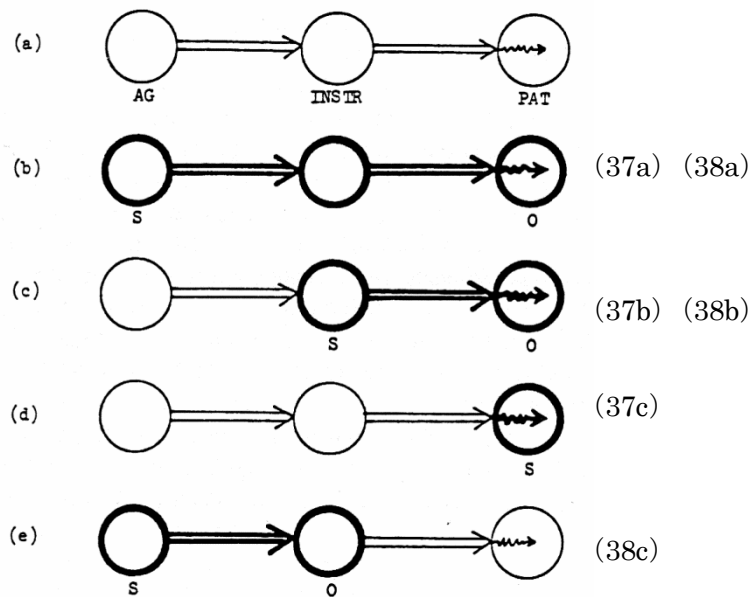


図 2.5 プロファイルの違いと構文

(Langacker 1990a : 217 fig.3 より) ³⁸

上の図に示したように認知文法では、アクションチェーンの流れにおいてプロファイルされた参加者が二つあれば、その非対称性によって先頭 (head) が主語に、末尾 (tail) が目的語になり他動詞構文として言語化されると説明される。プロファイルされた参加者が一つであれば自動詞構文になる。このようにアクションチェーンに基づいた認知モデルは参加者、つまり個体中心の関係を重視したモデルである。しかし、このような認知モデルでは、(39) のモノとモノの行為連鎖に基づいた「割る」と「割れる」の使役起動交替はうまく説明できても、(40) のような真理条件的には同じ事態を表していると考えられる「出す」と「出る」の構文交替をうまく説明できない。

- (39) a. 太郎がグラスを割った。
 b. グラスが割れた。

³⁸ 図中の例文番号は本論文に合わせて書き直してある

- (40) a. 柳の木が芽を出した。
b. 柳の木に芽が出た。

(40) は (b) の「柳の木」という場所句と参与者の「芽」が、(a) ではそれぞれ主語位置と目的語位置に来て他動詞文を作っている。このような場所句が主語位置に来るような構文交替は事態のどのような把握の仕方に基づいているのか。Langacker (1990a, 1991) の認知文法では、場は事態が起こる空間的な場、あるいは時空間として事態を構成する参与者とは区別され、セッティング (setting) と呼ばれる。このセッティングをステージに見立てて作られたのがステージモデルと呼ばれる事態認知モデルである。このセッティングには (動詞) 述語が要求する場所 (Location) も含まれる³⁹。

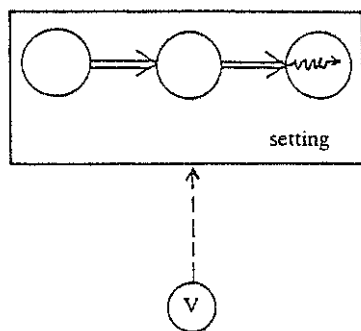


図 2.6 ステージモデル (Langacker 1990a : 211 Fig. 1 より)

この事態認知モデルにおいて、通常は参与者がプロファイルされ主語あるいは主語と目的語となるのだが、セッティングがプロファイルされ、場が主語になる構文があり、それは「セッティング主語構文」(Setting subject construction) と呼ばれる。図 2.7 の (a) では参与者がプロファイルされており、(b) ではセッティングがプロファイルされている。

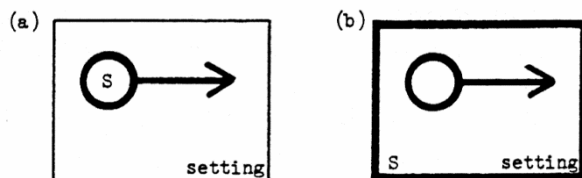


図 2.7 セッティング主語構文 (Langacker 1990a : 211 Fig. 8 より)

³⁹ Langacker (1997 : 383-384) では、「場所」はセッティングよりも小さな単位で、参与者に直接かわる領域として扱われている。セッティングは文の副詞 (clausal adverb) として現れ、場所は付加詞 (oblique) として現れる。次の文では 'in the kitchen' がセッティングで、'on the counter' が場所と把握されるという。(i) In the kitchen, Seymour sliced a salami on the counter with a knife.

Langacker (1990a : 231-233) が挙げた例を便宜的に三つに分類して下に示しておく。(例文の下線は引用者による)

(41) 時や場所を表す名詞句が擬人法的な (メトニミー的な) 主語になる

- a. Tuesday saw yet another startling development.
- b. This arena has witnessed many thrilling contests.

(42) モノ主語の自動詞文から場所主語の自動詞文に転換する

- ① a. Fleas are crawling all over my cat.
- b. My cat is crawling with fleas.
- ② a. Bees are swarming all through the garden.
- b. The garden is swarming with bees.

(43) モノ主語の自動詞文が場所主語の他動詞文に転換する

- a. Brygida Rudzka stars in Fellini's new film.
- b. Fellini's new film stars Brygida Rudzka.

Langacker (1990a : 232-233) では、セッティングが主語になっている文 (42①b②b, 43b) は、‘be the setting for …’ という意味になっていると説明している。例えば、(42①b) であれば、‘be the setting for crawling activity’ という意味である。

場に際立ちが与えられ主語位置に来るという点、そして (43) のように見かけ上は他動詞文になっていても、参与者主語の他動詞文ではないために、受身文が成立しないという分析は本論文でも支持するが⁴⁰、単に「主語名詞句が述語が表す事態のセッティングである」という意味になっているとするだけでは、先に示した (40) の構文交替現象が起こる動機付けが十分に説明されているとは言えない。そもそもなぜ場に際立ちが与えられるのかの説明されなければいけない。そしてそれはどのような概念の転換によるものなのかも説明されなければならないだろう。

本論文では、〈場〉がそこに存在するモノによって特徴付けられるという事態把握が所有の概念への転換を生み、そして〈場〉が焦点化されることを動機付けると考える。つまり、場所格交替する (42) (43) のセッティング主語構文は、元々参与者として際立ちを与えられていたモノが格下げされ、新たに焦点化された〈場〉との間に所有関係が生まれて作られる構文だと考える。それを本論文では「場焦点化他動詞構文」と呼び、(42) のような自動文で場所格交替する現象は 5.1 節で分析される。(43) のような構文交替に相当する日本語は第 4 章で詳しく観察される。

⁴⁰ *Brygida Rudzka is starred by Fellini's new film. (Langacker 1990a : 233)

2.5.2 トラジェクター・ランドマークと主語・目的語

前節ではステージモデルおよび行為連鎖という視点からプロファイルされた参加者の先頭と末尾が他動詞構文で主語と目的語となることをみた。河上（1997：124-125）は、これを他動詞構文における主語と目的語のプロトタイプとし、静的な状況における二者の関係が他動詞文で表現されるような場合を拡張事例とし、第一の際立ちと第二の際立ちが与えられた参加者が、それぞれ他動詞構文の主語と目的語になるというスキーマが抽出されるとまとめている。Langacker（1997b：217）はこの第一の際立ちと第二の際立ちが与えられた参加者をそれぞれトラジェクター、ランドマークと呼んでいる。そして河上（同上：124）では、セッティング主語構文は、トラジェクター主語の構文ではないので、真の目的語をとることができないと説明している。しかし、この説明では、なぜトラジェクター主語でなければ真の目的語をとることができないのかが説明されなければならないだろう。本論文はそれを説明するのが所有の概念であり、参照点構造という認知構造に依拠したモノと〈場〉の二者の意味関係の概念化によって他動詞構文が作られるからだ⁴¹と考える。

中村（2000）は、自他交替を認知文法で分析したものだが、自他交替を引き起こす事態の把握には二つのタイプがあると分析している。（39）のような使役起動交替は「プロファイル部選択」による自他交替であり、次のような認知構造をもつとしている。使役構造を認知ベースとして変化の部分のみをプロファイルした右下が自動詞構文を作り、使役構造全体をプロファイルした左下が他動詞構文を作る。

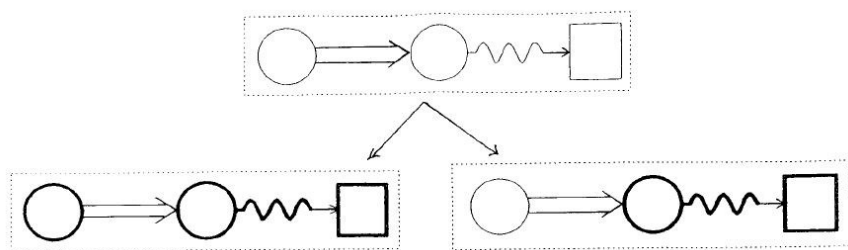


図 2.8 プロファイル部選択による自他交替（同上：86 の図より）

一方、主語と目的語が全体と部分の関係になっている場合は、上とは異なり「トラジェクターの選択」による事態交替であると分析している。中村が全体と部分の関係になっているとして挙げている例は次のものである。

- (44) a. I broke a finger.
b. My finger broke.

⁴¹ 英語の所有を表す他動詞文がトラジェクターとランドマークという認知構造に依拠しており、日本語のほうは参照点構造に依拠していることについては、3.4.5 節で詳しく取り上げる。

(45) a. Deer grow new horns in the spring.

She has grown her hair long.

b. Her hair has grown long.

(46) a. My guitar broke a string.

b. A string of my guitar broke.

各例文の (a) は全体（変化主体以外の参与体）が、(b) は部分（変化主体）がトラジェクターとして選択されことによって他動詞と自動詞文が交替しているとして、その認知構造を次のように示している。

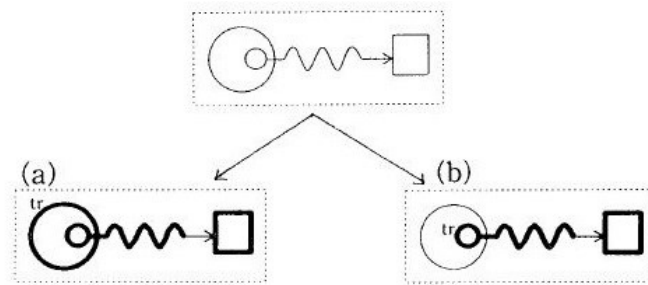


図 2.9 トラジェクターの選択による自他交替（同上：95 の図より）

(40) に示した (a) 「柳の木が芽を出した」は「柳の木」と「芽」を全体と部分と見ることができ、(b) 「柳の木に芽が出た」は「柳の木の芽が出た」とも言えることから、上の中村の「トラジェクターの選択」による自他交替に該当すると考えられる。本論文は (a) は場焦点化他動詞構文で、所有の概念に転換して言語化されたものだと分析するのだが、この所有の意味関係の一つに「全体と部分」がある。その点から言えば、中村の分析も事態の把握の在り方と自他交替とのつながりを考える上で重要な視点を提供するが、これだけでは、なぜ自動詞文の場所句が他動詞文の主語になるような構文交替があるのか、その根本的な仕組が明らかにされない。本論文ではその根本にはモノと〈場〉の二者関係の概念化があると考え、存在と所有の概念に注目する。中村が挙げた例文のうち日本語でも自他交替が成立する (44) (45) は、状態変化事象が原因として読み込まれて所有の概念に転換する事例として 4.7 節で分析される。なお、Langacker の認知文法における所有の概念化については 3.5 節で紹介する。

2.6 日本語の周辺的な他動詞文の研究

日本語学において状態および非意図的な事象を表す他動詞文はこれまでも研究されてきたが、大雑把に言えば周辺的な言語現象として扱われてきたという印象はぬぐえない。これは他動詞文は典型的に事態を構成する二者間のエネルギーの伝達によって成立するもの

で、対象に働きかけてそれが変化する事態を表すものが典型的な他動詞文だと見られてきたからである。そのため、状態および非意図的な事象を表す他動詞文は、他動性のスケール (Li and Thompson 1976) でもっとも低い位置の事例であると見なされてきた。

本論文はそれに対して自動詞の側から状態・非意図的な事象を表す他動詞文を見ることの重要性を主張する。それは、モノとモノの使役連鎖における事態の切り取り (焦点化) とは別のレベルでの事態把握があることを主張するものである。それが、モノと〈場〉の二者関係に基づく事態把握である。所有という概念から生まれる他動詞構文という視点を取り入れ、さらには個体間のエネルギー連鎖における事態の把握との接点を探り、その融合を考えることによって、他動性のスケールで測れる他動詞構文という側面だけでは十分に解明されない言語現象を解決することを試みる。

本節では、まず角田 (1991) が示した二項述語の格配列を取り上げ、「～が～を V」と「～に～が V」の対立として捉える視点の意義を考える。次に前節で紹介した影山 (2002) の非対格性をもつ他動詞 (とその構文) に相当するものとして、すでに日本語学において三上 (1953 [復刊 1972]) が所動的他動詞という概念を示していたことを確認し、その意義を考える。次に、後の第 4 章と第 5 章で分析対象となる特定の他動詞構文について、代表的な先行研究を取り上げ、本論文の立場との違いを示す。なお、ここで取り上げて紹介する特定の他動詞構文については後の章でもその先行研究に言及している。

2.6.1 二項述語の格配列

角田 (1991) は、複数の言語と日本語とを対照して、二項述語の階層を論じている。二項述語を (47) のような階層をもつ七つに分類した。

(47) 二項述語の分類と日本語の例 (角田 1991 : 95 表 5 を参考に作成)

類	意味	下位類	意味	例
1	直接影響	1 A	変化	: 殺す, 壊す, 温める
		1 B	無変化	: たたく, 蹴る, ぶつかる
2	知覚	2 A		: 見つける (see, hear)
		2 B		(look, listen)
3	追求			: 待つ, 捜す
4	知識			: 知る, 分かる, 覚える, 忘れる
5	感情			: 愛す, 惚れる, 好き, 嫌い, 欲しい, 要る, 怒る, 忘れる
6	関係			: 持つ, ある, 似る, 欠ける, 成る, 含む, 対応する
7	能力			: できる, 得意, 強い, 苦手

そして、日本語の二項述語の格枠組みは下図のようになるという。



図 2.10 二項述語の格配列 (角田 1991 : 112 図 6 より)

これは状態を表す他動詞文の位置付けに重要な視点を与えてくれる。他動性の低い 4「知識」、5「感情」と 6「関係」において「が - を」と「に - が」の格配列が重なっていることが確認できる。角田は (47) は「意味の点でも形の点でも、二項述語の他動性の程度を示している」(同上 : 111) と述べているのだが、ここで注目すべきは、図 2.10 に示された「が - を」と「に - が」の矢印である。ヲ格が 6 の「関係」まで伸びているのとは対照的に「に - が」は他動性が最も低いと考えられる 7 の「能力」から右から伸びて行っている。角田はこの二つの重なりの部分について分析をしていないが、「に - が」の最も基本的な構文として存在文「x に y がある」があると考えた場合、その「に - が」の格の枠組みが、6 の「関係」で接している、つまり最も他動性の低い他動詞構文「x が y をもつ」のところで接し、4 の「知識」まで伸びていることは、〈存在〉と〈所有〉が接点を持つことを示唆していると考えられる。「に - が」の格の枠組みは、非規範的構文または「与格主語構文」と呼ばれるものと関係しているが、本論文では「二格」は「二格」であり、その根底にあるものは「場所」であると考えられる。これについては 3.5 節の「与格と二格」で具体的に論じる。

2.6.2 所動詞

坂野 (2004) は、影山 (2002) とは別のアプローチで「非対格他動詞」の存在を考察したものである。坂野は、まず影山の言う「非対格他動詞」を三上 (1953 [復刊 1972]) の「所動的他動詞」と同じものであると指摘し、三上の業績を再評価している⁴²。そして、その所動的他動詞の枠組みを再確認した上で、生成文法の統語論的なアプローチで「所動的

⁴² 益岡 (2003) は、日本語記述文法において三上文法から寺村文法への流れを論じたものだが、ここでも三上の先見性・現代性を物語る事例として「所動詞と能動詞の区別」を第一に挙げている。(同上 : 44) なお、三上自身は三上 (1963 : 3) で受身の成否を用いた動詞の分類について「わたしは前に、この基準で能動詞と所動詞とを設けたが、それは無理だった」と述べているが、これは「受身の成否は難易の問題であって、それを動詞の分類の基準にすることはできない」(同上 : 3) という考えに基づいている。「ミズカラ (能動的)」と「オノヅカラ (所動的) ソウナル」の意味の区別そのものが無意味であるといっているわけではない。三上を含めて、その後日本語学の分野でこの所動詞がほとんど注目されなかったのは、「意志動詞」と「無意志動詞」という区分がおおむね能動詞と所動詞の区分に対応しており、かつ日本語の文法においては「意志性」と「無意志性」が様々な構文的な特徴と結びついていたことが関係しているからだと思われる。(cf. 吉川 1974 : 68-69)

他動詞」(ヲ格をとる所動詞)がどのような動詞なのかを明らかにしている。

生成文法による研究によって明らかになったように、「非対格他動詞」は外項を持たず、したがって受身化できないという統語的特徴をもっているが、三上(1953[復刊 1972])は、このような(直接・間接)受身化できない動詞を「所動詞」と呼んだ(同上(復刊): 104)。そして、ヲ格をとる所動詞があることを指摘し、それを「所動対格」と呼んだ。三上は下に示したように三つの対格があると考えた。

(48) 三上の指摘した三つの対格(同上(復刊): 258-260)

- a. 能動対格 : 他動詞に係る対格(すなわち処置の対格)
- b. 場所の対格: 「空ヲ飛ブ」「三番線ヲ急行ガ通過イタシマス」
- c. 所動対格 : 能動所動の対立において、助詞は必ずしも対立的にならない。
「金ヲ借(リ)ル」「金ヲ預カル」「物ヲ教ワル」
「三十分ヲ要スル」「英語ヲ話セル」

上に示したように、三上が所動対格と考えたものには、①授受にかかわる動詞(借りる; 預かる, 教わる), ②状態を表す動詞(要する; 可能動詞(話せる))がある。坂野(2004)は、この三上の能動と所動の対立の枠組みをもとに最終的に所動的他動詞に該当する動詞を次のように整理した⁴³。

(49) 坂野が示した所動的他動詞(坂野: 2004: 81)

- a. 教わる, 授かる, 預かる, 借りる(受動動詞)
- b. 終わる, あく, 当たる, 換わる(対応する能動的他動詞を有する他動詞)
- c. 読める, 書ける, 話せる, できる(能動的他動詞に対する可能動詞)
- d. 生ずる, 増す, 帯びる, ふく(対応する能動的他動詞のない所動詞)

本論文では、非対格性をもつ他動詞は所有の概念とつながっており、上に示された動詞は何らかの点で所有の概念と関係すると考える。人を含めて〈場〉として把握されるものと「モノ」の二者の関係の基本的な関係が存在と所有である。(a)は4.6節で、(b)は4.8節で論じられる。(c)は「(人)に(能力)がある」という所有構文とつながるものである。可能文に「～に～がV-(ら)れる」と「～が～をV-(ら)れる」の二つがあることについては4.6.5節で取り上げられる。(d)の「帯びる」は4.1節で、「生じる」「ふく」は4.2節で、「増す」は4.7節で取り上げられる。

⁴³ 坂野の生成文法の統語論的な分析の詳細には立ち入らないが、先に紹介した影山(2002)の分析との関係について少し触れておきたい。坂野の分析は「動詞句内主語仮説」と「v P-shell 仮説」を前提にしており、特にv P-shell 仮説に基づいて、動詞句の構造を「内核のVP (inner core)」と「外殻のv P (outer shell)」の二層からなる構造をもつと考える。坂野自身も「v P-shell 構造は、語彙概念構造とは全く別の統語論的立場から提案された構造であるが、大ざっぱに言えば、上位(外殻)v Pと下位(内核)VPが、語彙概念構造の上位事象・下位事象に対応する」(同上: 80)と述べている。

2.6.3 状態動詞・両用動詞

金田一（1950 [1976 再録]）がアスペクトの観点から動詞を四つに分類して以降、状態動詞は主にアスペクトの観点から分析されることが多く、一項述語と二項述語の違い、およびヲ格をとるものとそうでないものの違いについてはほとんど注意が払われてこなかった⁴⁴。その後、アスペクトによる動詞分類の研究において、金田一（1950）でほとんど取り上げられなかったタイプの動詞が注目された。何らかの状態を表す動詞であるが、「ル形」でも「テイル形」でも使われる、つまりアスペクトの対立がない動詞のグループで、それは「関係の動詞」（工藤 1987）、「関係動詞」（森山 1988, 工藤 1995, 山岡 2000a, 2000b）と呼ばれた⁴⁵。

山岡（2000a）は、文機能論という視点から従来のアスペクトによる分類では状態動詞に分類されていたものを、狭義の状態動詞（「いる」「ある」「要る」）とそれ以外の「叙述動詞」に分け、後者をさらに「可能動詞」「属性動詞」「所要動詞」「価値動詞」「関係動詞」に下位分類した。山岡の状態動詞の分類よりヲ格名詞をとる動詞を抽出したものを表 2.2 に示す。

表 2.2 ヲ格名詞句をとる状態他動詞（山岡 2000a : 205-271 をもとに作成）

分類	下位分類	動詞例
属性動詞	嗜好・要求	好む, 欲する, 嗜む
所要動詞		要する
関係動詞	包含・所有関係	含む, 包含する, 誇る, 有する, 擁する…
	記号関係	表す, 意味する, 含意する, 示す…

山岡は「関係動詞」について次のように述べているが、これは上の表に挙げた動詞すべてにかかわることだと考えられる。

- (50) 関係動詞は動作主名詞句を取ることがないという点ですべて「無意志動詞」であることも一つの特徴である。動作主名詞句を取らないのは、非対格動詞に共通する特徴でもあるが、関係動詞には構文上の目的語としてヲ格名詞句をとるものもあり、今後の議論の重要な課題となるだろう。

（山岡 2000b : 47 ※下線は引用者による）

本論文は上の表の「関係動詞」の下位分類にある「包含・所有関係」に限定されること

⁴⁴ 金田一（1950）では、状態動詞は「ている」がつかない第1種と必ず「ている」がつく第4種の動詞とに分類された。前者には「（3時間を）要する」、後者には「高い鼻をする」「丸顔をする」などが語例として記述されているだけである。

⁴⁵ 金水（1994 : 56）は「金田一の見逃していたもう一つの類型が存在する」として、「存在する・関係する・属する」のように「ている」が付く用法と付かない用法の両方があり、状態動詞と第四種の動詞の中間に位置付けられるものを「第五種動詞の形状動詞」と呼んでいる。

なく、表のすべての動詞が何らかの点で所有の概念とつながりがあり、それによってヲ格名詞をとる他動詞構文を作ると考える。「ある・いる・要る」以外はル形とテイル形でアスペクトの対立がないのは、そもそも日本語は純粋に状態を表す動詞が少なく、ほとんどが変化・発生を表す事象が原因として読み込まれるからだというのが本論文の立場である⁴⁶。具体的には 4.1 節で論じられる。

次に両用動詞について取り上げる。両用動詞とは、同一の形態で他動詞構文と自動詞構文を作るものを指すが、それぞれの構文のとり格配列および意味の関係をみると、それは決して一様ではない。それを記述的に分析したのが森田（1990 [1994 所収]）である。森田は、語の意味について「従来の“文法的な意味や語彙的な意味を担う語”という位置づけから脱皮し、文の意味にかかわっていく“文型中に所を得た語”という視点に立つ」（同上 [所収]：234）ことの必要性を説いた。そして、この観点から捉えられた語の意味を「表現的意味」と名付けた。その上で、(51) のような自他動詞のペアについて「自動詞文と他動詞文とが表現意図において差がなくなる場合、右の「割る」「倒す」の例でもわかるように、むしろ他動詞に表現的意味が加算されて自動詞に歩み寄る例が圧倒的に多い」（同上：237）と指摘している。

(51) 茶碗を割ってしまった／茶碗が割れてしまった

花瓶を倒してしまった／花瓶が倒れてしまった

(同上：237)

森田の考える「自動詞に歩み寄る」場合の自動詞文の現象とは「自然現象か、話者の意に反して自ずと推移していく不随意現象か、あるいはうっかりミス、または話者の意志の管轄を超えた客体界のあるがままの姿・態度」（同上：238）であり、他動詞がそのような「表現的意味」を帯びて自動詞に接近すると見ている。そして、森田は他動詞文が自動詞文に歩み寄っている例として (52a) を出した上で、このような自他異形のペアの動詞がない場合に (52b) のような自他両方の文型に同じ動詞が立ってしまうと考えている。このような他動詞の自動詞への歩み寄りが両用動詞を生み出す要因の一つになっていると指摘している。

(52) a. 鯰はヒゲを生やしている／鯰はヒゲが生えている。

b. この干し柿は粉を吹いている／この干し柿は粉が吹いている。

激しく火を噴く／激しく火が噴く。

(同上：239)

このように森田は両用動詞を主に「他動詞の自動詞への歩み寄り」によって生まれたと

⁴⁶ 定まった名称を与えてはいないが、高橋（1975）では、「所有する」「所属する」という動詞が「ル形」でも「テイル形」でもほとんど意味が変わらないことについて、「どうしてこうなるのかというと、これらの動詞が、動詞ではあるが動作をあらわさず、所有・所属という関係だけをあらわしているからである。」（同上：2）と述べている。

している。確かに、「他動詞の歩み寄り」は両用動詞の成立にかかわる要因の一つであることは否定できないが、反対の方向の「自動詞から他動詞への歩み寄り」にも目を向けてみる必要もあるのではないか。「他動詞の自動詞への歩み寄り」と見られるものは、他動性低下の程度の問題であり、日本語に限らず世界の言語に見られることである（角田 1991 などを参照）。森田（1994）は自他両用動詞の種類を全体で八つに分類して例を挙げているが、本論文の分析対象とするのは、概ね「(1)自他両文型が同じ表現的意味のグループ」に相当する⁴⁷。ここに分類された両用動詞は「他動詞の自動詞への歩み寄り」だけでは説明できない。なぜなら、これらの事象は基本的に人の意図的な働きかけによって生じるものではない。つまり自発的な事象として捉えられるものである。したがって、他動詞が自動詞に歩みよるのではなく、自動詞のほうから他動詞へ歩み寄っていると見るのが自然である。

(53) 自他両文型が同じ表現的意味のグループ（同上：239-240）

- | | |
|--------------------|--------------------|
| a. 子供を授かる／子供が授かる | h. 緑青を嘔く／緑青が嘔く |
| b. 迷いを去る／迷いが去る | i. 火を嘔き出す／火が嘔き出す |
| c. 手を着く／手が着く | j. 渦を巻く／渦が巻く |
| d. 目を閉じる／目が閉じる | k. 川が水を増す／川の水が増す |
| e. 危険を伴う／危険が伴う | l. 実を結ぶ／実が結ぶ |
| f. 蕾を開く／蕾が開く | m. 眠気を催す／眠気が催す |
| g. 水を嘔き上げる／水が嘔き上げる | n. 勢いを盛り返す／勢いが盛り返す |

また、(52a) にしても自動詞化／他動詞化の派生接辞から考えれば、自動詞「生える（生ゆ）」が元で他動詞化接辞によって「生やす」が生まれたと考えられるだろう⁴⁸。

森田の説明では、「形態上対応する自他動詞がないものがある」ことが所与の条件として扱われているが、問題とすべきは、なぜ日本語には多くの有対動詞があるのに、ある限られた動詞が両用動詞として存在するのかということである。これはやはり事態の把握の在り方との関連で論じる必要がある。どのような事態把握が形態上の対立を生じて、どのような把握が生じることを抑制するのか。ここにモノとモノのエネルギー／使役連鎖をベースとした事態把握とは異なるタイプの事態把握を考える意義があると考えられる。本論文では第 4 章で存在から所有の概念への転換という事態把握をベースにして言語化される他動詞構文の様々なタイプを分析するが、その中にこの両用動詞を位置付ける。

⁴⁷ 挙げられた八つの分類を見ると、(3)他動現象の結果が自動現象と同じと見るグループ、(4)他動行為の結果として自動現象が生じると見るグループ、(5)自他両文型で動作主・現象主が入れ替わるグループなどが、一部本論文が分析の対象とする両用動詞の特徴を備えていると思われるが、今回の分析では存在と所有の意味概念とはほぼ重なるものとして分類の(1)を分析の対象とする。

⁴⁸ 奥津（1967）のいう「他動化転形」である。この場合、自動詞（文語「生ゆ」）「hay-u」が他動詞化接辞「-as-」によって「hay-as-u」（生やす）ができると考える。自然発生的な事象を表す「生える」に対して、「主体が意図的に（切らずに）生えることを阻止しない」という主体のコントロール性が認知されることによって、他動詞化接辞をとり「生やす」が生まれたと考えられる。

2.6.4 使役変化他動詞とその主語名詞句

ここでは使役変化他動詞を用いた構文においてその主語名詞句が使役変化を直接引き起こす動作主や原因ではないものについて取り上げる。

◆状態変化主体の他動詞文

天野（1987b）は、井上（1976b）が示した他動詞文に表れる深層格、「動作主」「原因」「経験者」を踏まえ、主語が「経験者」になる文を、さらに動詞が表す事態に関して（54）のように「主体が引き起こし手である」場合と（55）のように「主体が引き起こし手でない」場合の二つに分類し、後者を「状態変化主体の他動詞文」と呼んだ。

- (54) a. ジョンは、思わず窓に手をついて、窓をこわしてしまった。
 b. 岡村はぼんやりして煙草の灰をこぼしてしまった。
 c. 母は買った品物をうっかり店に置いてきてしまった。 (同上：左 2)

- (55) a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。
 b. 勇二は教師に殴られて前歯を折った。
 c. 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。 (同上：左 2)

天野は、表 2.3 に示したように他動性が①から④へと低下するにしたがって、主体の意味役割が「動き手（動作主・経験者 a）」>「原因」>「状態変化」のように変わると考え、「状態変化主体の他動詞文」の他動詞の意味（④）を、「〈客体に起こった変化を所有する〉、〈ある事態を所有する〉というきわめて動作性の低い意味になるであろう」（同上：左 9）と述べている。

表 2.3 天野（同上：左 9）より

	他動詞の意味	主体の動きの側面	客体の変化の側面	主体
①	動き他動詞	実質的な動き	なし	動き手
②	動き変化他動詞	実質的な動き	あり	（動作主 経験者 a）
③	動き変化他動詞	事態を引き起こす	あり	原因
④	動き変化他動詞	事態を所有する	あり	状態変化

そして、(56) に示した二つの条件がそろふことによって、④に示したような「〈他動性〉を〈働きかけ〉だけでなく〈所有する〉という意味にまで広げ（る）」（同上：左 12）と結論づけている。

(56) 状態変化主体の他動詞文成立の条件

条件 1 : 状態変化主体の他動詞文を作る他動詞は、主体の動きと客体の変化の二つの意味を含む他動詞である。

条件 2 : 状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある。 (同上 : 左 5)

条件 1 は、次のような対象の変化を表さない他動詞は状態変化主体の他動詞文にはなれないことを説明する。

(57) a. 勇二は前歯を叩いた。

b. 田中さんは屋根を撫でた。 (同上 : 左 6)

条件 2 の「全体部分」という名称とその捉え方(定義)は、単に物理的な関係ではなく、外界の認知の仕方もかかわっている。

(58) 天野が規定する「全体部分の関係」

XはXを様々な側面から眺めることによって、様々な特徴付けられる。こうした特徴付けの総体Xを「全体」とし、特徴付けの側面を「部分」とする。Yが、総体Xの特徴付けの側面の一つであるとき、XとYは「全体部分の関係」にあるという。(同上 : 左 8)

以上をまとめると、状態変化主体の他動詞文は「事態を所有する」という意味をもち、他動性のスケールにおいてそのもっとも低いところに位置する構文であり、「状態変化主体の他動詞文も、他動詞文の一つの用法として正しく位置づけることが出来る」(同上:左 12)というのが天野の主張である。

天野の分析は他動詞構文が他動性のスケールにおいてどのような意味と関係してどのような構文を作るのかという点で有益な知見を提供しているが、直観的に不足しているものを感じるのも事実である。第一に、上の条件 1 で示されているように、この構文が成立するには何らかの変化を表す事象でなければならない点である。ここで重要なことは、状態変化他動詞文は使役変化他動詞を用いながらも、キャンセル文が成立しないことである。

(59) a. 芋を焼いたが、焼けなかった。

b. *宮地さんは、火事の焰で背中を焼いた。しかし、火勢が弱くて焼けなかった。

稲村 (1995 : 62)

これが意味するのは、状態変化主体の他動詞文の意味の“コア”の部分、使役変化を引

き起こす「仕手」の側ではなく、変化をこうむる「対象」だということである。だからこそ同じ事態を自動詞構文で表現できるのである。

- (60) a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。
b. 空襲で私たちの家財道具がみんな焼けてしまった。

- (61) a. 勇二は教師に殴られて前歯を折った。
b. 教師に殴られて勇二の前歯が折れた。

したがって、「事態を所有」というような意味を仮定するのであれば、他動性のスケールにおける位置付けとは別に、なぜ同一の変件事象を一方では「全体と部分」を一体として自動詞構文として述べることができ、もう一方では「全体と部分」を（構文上）切り離して他動詞文として述べることができるのかということを説明する必要がある。言い換えれば、自動詞文で表現されるものと他動詞文で表現されるもののいわば「図地反転」のような事態把握の転換も考えなければいけないことになる。このような視点から見たときに、経験者とは一体何なのかという点について今一度考えて見る必要があるだろう。欧米言語のような主語優位の文法をもつ言語においては、確かに他動性のスケール上に（行為者の延長として）経験者を位置付けることに違和感がないかもしれない。しかし、本論文では経験者は根本的に「受け手」あるいは出来事の「発生の〈場〉」であると考え。そして、受け手は根源的にはモノの行き先である〈場〉である。したがって、本論文は状態変化主体の他動詞文を単に他動性の低下した所有の意味をもつ構文だと分析するだけでは構文の真の姿の片側しか見ていないと考える。そこで、4.7節で存在と所有という概念の転換の拡張事例として、両者の見方の重なるところに成立する構文であるという分析を展開する。

ところで、本論文はモノと〈場〉の二者関係の概念化という枠組みで分析するに当たり、所有の概念は、天野（1987b）が示した「全体部分の関係」の捉え方に着想を得ている。天野は全体と部分という関係で規定したが、本論文はそれを存在から所有の概念への転換がどのようにして起こるのかという、より大きな事態の捉え方の中で再規定している。

◆介在性の表現

次に「介在性の表現」と呼ばれる他動詞構文を取り上げる。状態変化主体の他動詞文では、使役変化他動詞文の主語名詞句が変化を引き起こす仕手あるいは原因ではなく、変化をこうむる対象（全体と部分の関係にある「全体」）である。変化を引き起こす直接的な仕手ではない点では共通するが、主語名詞句が間接的な使役主になっている場合がある。それが佐藤（1994）の「介在性の表現」である。

佐藤（1994）は、「述語のヴォイスの形態が無標であるにもかかわらず、主語が動詞の示す行為の主体ではないという解釈をも許すもの」（同上：53）を「介在性の表現」と呼んだ。

通常、日本語ではヴォイスの形態が無標、つまり受身・使役などの接辞がつかない場合は、述語動詞の示す行為の主体が主語になるので、(62) (63) の (a) と (b) の動作主はそれぞれ別々のはずだが、実際には、同じ事象を叙述することができる。この (b) のような特殊な意味特徴をもつものを「介在性の表現」と呼び、どのような条件のもとでこのような他動詞文が成立するのかを分析している。

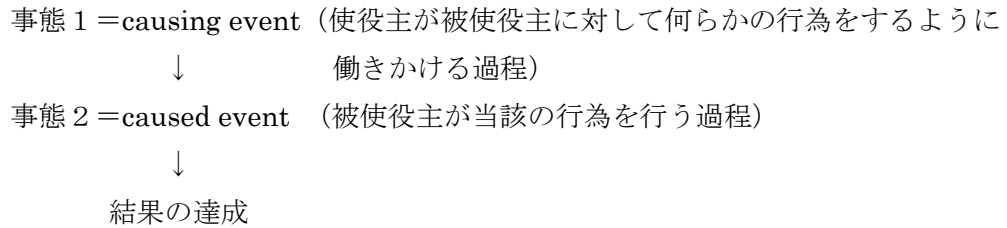
- (62) a. 医者が患者に注射した。
b. 患者が注射した。 (同上 : 54)
- (63) a. 大工が (山田さんの) 家を建てた。
b. 山田さんが家を建てた。 (同上 : 54)

佐藤は、介在性の表現の基本的な性格として、「使役的状况」としての意味的特徴を有している一方で、「話者が実際には存在する被使役主を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえている」という特徴をもっているため、「表現する事態と言語形式の間に大きなずれがある」(同上 : 57) と述べている。そして、「使役的状况」としての意味的特徴を有しているといっても、(64) が示すように、多くの場合介在性の表現が成立するわけではないと指摘し、介在性の表現が成立するための条件として「事態のコントロール」と「動詞の意味的焦点」という要因がかかわっていると結論づけている。例文の右側に (介在性) とあるのは、介在性の解釈で判定するという意味である。

- (64) a. (患者が医師に依頼し、病気の診察を受けた場合)
*患者が診察した。 (介在性)
- b. (学生が教師に依頼し、推薦状を書いてもらった場合)
*学生が推薦状を書いた。 (介在性) (同上 : 57-58)

佐藤は介在性の表現が表す使役的状况を (65) のように考えた。「使役主」は「被使役主」に働きかけ (= 事態 1), そして「被使役主」は実際に「対象」に対して動作を行い (= 事態 2), 結果が達成される。このような構図において介在性の表現が成立するには、被使役主 (= 実際の行為者) を無視して、あたかも使役主 (= 介在性の表現の主語) がすべての過程を自分で行ったかのように、話者が事態を把握しなければならないと考えた。そして、そのような事態把握には、使役主による「事態のコントロール」と「動詞の意味的焦点」の二つの要因がかかわっていると述べている。二つの内容を佐藤 (同上 : 58-61) の説明に基づいて (66) にまとめておく。

(65) 使役情況の過程 (佐藤 1994 : 57 より)



(66) a. 事態のコントロール

被使役主の「動作行為の過程 (事態 2)」を無視するということは、使役主が事態全体をコントロールしていると認知されなければならない。そのためには、使役主がコントロールできないような事態、つまり被使役の主観によって結果達成が左右されるような事態であってははいけない。

b. 動詞の意味的焦点

被使役主の「動作行為の過程 (事態 2)」を無視するということは、動詞が表す意味がそのような過程のあり方に焦点を当てるようなものであってはいけない。

上の「事態のコントロール」の要因は (67) の状況で、「動詞の意味的焦点」の要因は (68) の状況で介在性の表現が成立するかどうかを説明するという。

(67) a. (浩が写真屋に依頼して、顔写真をとってもらった場合)

浩が顔写真をとった。(介在性)

b. (浩が画家に依頼して、似顔絵をかいてもらった場合)

*浩が似顔絵をかいた。

(同上 : 58)

(68) a. (花子が人に依頼して洋服を作ってもらった場合)

花子が洋服を作った。(介在性)

b. (花子が人に依頼してセーターを編んでもらった場合)

*花子がセーターを編んだ。

(同上 : 59)

このように「動詞の意味的焦点」は動詞がもつ概念によって介在性が発生するかどうか決まるという、動詞の意味上の制約であり、「事態のコントロール」は介在性が発生し得る概念をもつ動詞であっても、「だれがだれになにをさせるのか」という事態の構成要素によって成立するかどうか左右される、つまり事態の在り方による制約と言える。

佐藤 (1994) は介在性の表現を「他動詞表現の意味的バリエーションの一つ」とであると位置付け、「ボイス転換の面などでも受動化や使役化などが可能であり、通常他動詞表現

と同じである」(同上：56) と考えた。

(69) (将軍が部下の兵士に命令して村人を虐殺させた場合)

- a. 将軍が村人を虐殺した。 (介在性)
- b. 村人が将軍によって虐殺された。
- c. 軍司令部が将軍に村人を虐殺させた。 (同上：56)

この文を見る限り、通常他動詞表現と同じであると言えるかもしれないが、実はこれは再帰性がない介在性の文である。佐藤が挙げる介在性の文には再帰性をもつ文も少なくないが、これらは上のように受動化されると意味が異なる。

(70) a. 再掲 (=67a) (浩が写真屋に依頼して、顔写真をとってもらった場合)

浩が顔写真をとった。(介在性)

- b. # 顔写真が浩によってとられた。(a とは異なる意味)
- c. (美容院で髪を切ってもらった場合)
山田さんは美容院で髪を切った。(介在性の表現)
- d. # 美容院で髪が山田さんによって切られた。(c とは異なる意味)

このように介在性他動詞文には再帰の場合とそうでない場合があることに注意しなければならない。佐藤自身も分析の最後に介在性の表現が再帰性に関係していることを指摘し、「介在性の表現では、主語自身があたかも一人で事態の全過程を行い、その結果を所有するという意味をもち、この意味において再帰性があるものと考えることができる」と指摘するにとどまっており、この構文と具体的にどのように関与しているかは論じていない。

稲村(1995)は介在性の表現にあたる構文を「主宰者的な主語による使役再帰構文」(同上：63)と考え、主語とヲ格目的語の関係を再帰構文の枠組みで捉えている。しかし、再帰だけでは(69a)のような文を含めて分析することはできない。須賀(2000)は介在性の表現を再帰が関与する場合としない場合に分けて分析している。須賀は、「患者が注射をした」のような再帰性がかかわる状況について、「「介在性の表現」の主体は、行為の主体であり、かつ状況の主体であるとも言える」(同上：29)と指摘した上で、「いわゆる他動詞文であっても、「原因－結果」という認識の枠組みだけでなく、〈受け手〉も行為者であるような、行為を中心とした認識の枠組みがあるのではないか」(同上：29)とまとめている。佐藤(1994)が〈仕手〉の視点から論じていたのに対して、〈受け手〉の視点で事態を把握することを指摘したのは重要である。つまり、介在性他動詞文は、佐藤が指摘するような「あたかも使役主(=介在性の表現の主語)がすべての過程を自分で行ったかのように、話者が事態を把握する」ことだけで成立するわけではなく、結果として状態変化を起こす側の行為も焦点化しているという点に注目したことである。しかし、須賀はその「〈受け手〉

も行為者であるような枠組み」が具体的にどんなもので、どのように生成されるのかについては説明していない。そして、再帰がかかわらない介在性の他動詞文は因果関係によって成立するものとして区別している。

以上、三つの先行研究を概観した。介在性の表現が成立する条件は佐藤（1994）が分析したとおりで、本論文も支持するものだが、この構文を他動詞構文の中にどのように位置付けるかについては十分検討されたとはいい難い。次の三点を解決すべき課題として挙げたい⁴⁹。

- ①「きのう予防注射をしたよ」「美容院で髪を切ったの」と述べる話者の意識の中には「使役主」としてよりむしろ「受け手」の意識のほうが強いという直感が筆者にはある。「あたかもすべての過程を自分で行ったかのように事態を把握する」という仕手としての視点と行為の受け手としての視点とはどのように融合するのか。
- ②介在性の表現に再帰と非再帰の二つがあるとしたら、両者を介在性の表現として成立させている根底にある事態把握あるいは概念は何か。
- ③同じ主語名詞でありながら、使役主として「～させる」と言語化される場合もあり、受益者として「～てもらう」と言語化される場合もあるわけだが、どちらの態も現れず無標で「～する」と表現される場合、それは話者のどのような事態把握に基づいているのか。

4.10 節で本論文の分析によって上記の課題の答えを出す、基本的なスタンスは先に挙げた状態変化主体の他動詞文の分析と同じである。それはモノとモノのエネルギー/使役連鎖の側面だけではこれらの他動詞構文の生成原理は十分には説明できないということである。「受け手」の視点、すなわち〈場〉として人の視点が必要であり、モノと〈場〉の二者関係の概念化にも注意を向けるべきだというのが本論文の立場である。

2.6.5 有対自動詞の拡張構文

日本語の自動詞と他動詞は語根を共有しながら派生接辞がついた形でペアをなす動詞が多い。自動詞の側からみれば「動く」は「動かす」という他動詞化接辞「-as(u)」が付加した他動詞があるので有対自動詞と呼ばれ、他動詞の側から見れば「刺す」は「刺さる」という自動詞化接辞「-ar(u)」が付加した自動詞があるので有対他動詞と呼ばれる。

そのようなペアの動詞にあって、特異な振る舞いをする動詞のグループが存在する。例えば「終わる」は、形態上対応する他動詞「終える」がありながら、ヲ格名詞をとり「会議を終わる」のように使うことができる。このようなヲ格名詞句をとる自動詞があること

⁴⁹ 佐藤（2005）では、メトニミーという観点から「介在性の表現」を動詞が表す意味と実際状況が「部分」と「全体」の関係にあり、「部分で全体を表す」という分析をしている。この分析のベースには佐藤（1994）が示した介在性の成立にあたっての事態の把握とその制約があり、それが変更されているわけではない。また、メトニミーによる分析でもなお上述の①②③の課題は解決されない。

は、単なることばのゆれの問題として片づけていいのか、研究者を悩ませてきたようである。須賀（1981）はそれまでの先行研究を（71）のように五つのパターンに分けている⁵⁰。須賀自身は（イ）～（ニ）を退け、自身は（ホ）の考え方をとると述べている。

（71）須賀（1981：547）

- （イ）自他の用法の誤りである。
- （ロ）他動詞が省略されている。
- （ハ）自動詞が臨時に他動詞化したものである。
- （ニ）語形が自動詞と共通する他動詞である。
- （ホ）自動詞の用法である。

このような特異な振る舞いをする有対自動詞は数はそう多くはなく、須賀（1981）では以下の例を挙げている。この問題は自動詞と他動詞をどのように規定するかによって答えが変わるだろう。2.1 節で述べたように本論文はある特定の動詞が自動詞か他動詞かを判定することを目的とするものではない。重要なことは、なぜ通常は自動詞として用いられる動詞が同形態のままヲ格名詞句をとるかを明らかにすることである。

（72）須賀（1981）が取り上げた動詞とその例文

（※①は p.555 より②～⑥は p.546 より。表示方法は一部変えた）

①あく

与太郎が口を {あけて／あいて} 寝ている。

②かわる

一郎は勝手に座席を {かえる／かわる} ので、先生によくしかられる。

③うつる

花子はたびたび住所を {うつす／うつる} ので有名だ。

④はずれる

指揮者は良夫が音程を {はずして／はずれて} いるのに気づいた。

⑤たれる

犬がしっぽを {たらし／たれて} 歩いている。

⑥おわる

山田君は仕事を {おえて／おわって} 家に帰った。

①～⑥に現れる自動詞の形態のままヲ格名詞句が用いられているものは、本論文では場焦

⁵⁰ 須賀は、（イ）については、本居春庭（1828）『詞の通路』、大槻文彦（1897）『広日本文典』などを挙げ、（ロ）については三矢重松（1908）『高等日本文法』を、（ハ）については松下大三郎（1977）『増補校訂標準日本口語法』を紹介している。

点化他動詞構文であると分析する。つまり、モノとモノの使役連鎖をベースにした通常の使役変化他動詞構文とは異なり、モノと〈場〉の二者の関係をベースにして言語化した他動詞構文である。そして、仕手が「何をするのか」(太郎が会議を終える)、対象が「どうなるのか」(会議が終わる)とは別に「仕手」が「どうなるのか」(太郎が会議が終わる)という事態把握に注目する必要があることを主張する。4.8節では、場焦点化他動詞構文を作る〈場〉の焦点化には二つのタイプがあることを示し、場所の焦点化がなぜ上記のような特異な構文を作るのかを論じる。

第3章 研究の枠組みと分析のアプローチ

本論文はモノと〈場〉の二者関係の概念化における存在と所有の概念に注目する。この章では本論文の研究の枠組みとして外界の事態把握の認知的な鋳型となるイベントスキーマ、そしてそのスキーマにおける「場の焦点化」がどのようなものを示す。最後にそれに基づいた事態認知モデルを提示する。第4章と第5章の分析はこのモデルに基づいてなされる。なお、本論文が考える〈場〉の概念については1.2節に示した規定を参照されたい。

3.1 事態の把握とイベントスキーマ

外界の事態の把握には、存在・状態といった静的なものからモノの動きや変化などの動的なものまで様々な捉え方がある。厳密に言えば、時間の流れの中で一瞬たりとも同じ事態であることはない。会社で自分の目の前の机の上にあるPCを見て「机の上にPCがある」と言う人が、次の日に会社に来て、同じ机の上にあるPCを見て、それは閉じているからとか、きのうとは違って机の隅のほうに位置しているからとか、だれかが勝手にその上に本を載せたからという理由で「机の上にPCがある」と言えるのか悩むことはない。なぜなら人はそのような状況もまた「机の上にPCがある」と言えるという言語知識を持っているからである。つまり、私たちは言語知識として、細かい差異は無視して、ある特徴を有している事態は同じパターンで言語化することを習得しているのである。これは人間の認知能力の一つである「異なる種類の刺激があれば、他の条件が一定であれば、同種類ものがまとまって知覚される」(河上 1996 : 5) というゲシュタルト要因によると考えられる。

それでは事態の把握の仕方としてどの程度の種類のものを考えるのがいいか。それは人が外界を切り分ける際にどのような鋳型を利用しているかを考えることでもある。何を分析するかによるだろうが、本論文の目的は自動詞文と他動詞文の交替現象であり、そのために必要な鋳型を考える。生成文法の語彙部門から発展した語彙意味論では、それを指して「概念の構造」「思考の構造」であるという (Jackendoff 1994)。一方、認知文法では理想認知化モデル (Lakoff 1987) の枠組みの中で事象内部の構図を表す認知ネットワークのモデルであると言う (Langacker 1990, 1991, Croft 1991)。両者は一般的には言語のモジュール性の有無で対立すると見られているが、実は両者は(細かい点を除けば)最終的にその鋳型の根拠を普遍文法に求めるのか、一般の認知能力に求めるのかの違いと言っていい。事実、自身の立場は生成文法であるとしながらもチョムスキーとは一線を画す Jackendoff (同上) や Pinker (2007) では言葉を慎重に選んではいるが、構文交替現象の裏には認知言語学でよく用いられるところの「図地反転」という概念転換があると指摘している。確かに語彙意味論は合成性の原理によって語彙分解し、語の意味と統語構造とのつながりを求めた。その点でゲシュタルトに依拠し、全体主義で概念主義の認知言語学とは相容れないという見方がある。しかし、構成部分をまったく無視して研究は成立しない。重要なのは、単に部分を合わせれば全体の意味がわかるという見方にとどまるのではなく、全体の

中でその構成要素を見るという視点である。語彙意味論の観点から、影山（1996）が示した、一つの動詞述語が最大に表すことができる意味構造の鋳型は⁵¹、認知ネットワークモデルとして Croft（1991）が示した因果連鎖モデルにおける三つの構成要素（使役相・起動相・状態相）の力学的な連鎖と見かけ上は似ている。動詞が表すアスペクト的な意味特徴に注目して外界の事象を切り分けている点で共通しているからである。

さて本論文が考える鋳型は、影山（1996）が一つの動詞述語が取り得る最大の範囲とした意味構造の枠組みを採用するが、その表示は Langacker（1990, 1991）の行為連鎖モデルと Croft（1991）の因果連鎖モデルをベースにして、そこに〈場〉を組み込んだものを事態認知モデルとして提示する。ただし、認知モデルの構築および精緻化を目的とするわけではないので、本論文の目的である自動詞文と他動詞文の交替現象を説明するのに最低限必要な要素を示すことにする。そして、それをイベントスキーマと呼ぶ。ここでスキーマとは抽象的な概念を簡略化して図示したものという意味で、事象（イベント）を把握し概念化するために用いられる抽象化された鋳型をイベントスキーマと呼ぶことにする。なお、存在や状態は動きがないためイベントと呼ばれないことが多いが、ここではすべてを含めてイベントスキーマと呼ぶことにする。ただし、必要に応じて存在と状態やメタファーに基づいて拡張した事態把握について、そのモノやイベントと〈場〉の関係を示したものをイメージスキーマと呼ぶ場合もある⁵²。

本論文で設定されるイベントスキーマの表す概念の種類は次の八つである。【1】～【4】が基本の概念で、【5】【7】はそれぞれ【1】【4】のメタファーによる拡張、【6】は【3】の否定概念（消失しない）、【8】は複合概念で、使役主（原因事象を含む）が【1】～【7】を引き起こすという因果関係を示す概念である。（※）の部分には「発生」の否定概念（発生しない）、つまり「発生しないで、そこに存在しない状態が続く」という概念が想定されるが、それを言語化する動詞が日本語にはないと考えられる。

表 3.1 イベントスキーマの表す概念の種類

基本概念	拡張概念	複合概念
【1】 存在	【5】 状態	【8】 使役変化
【2】 発生	(※)	
【3】 消失	【6】 存続	
【4】 移動	【7】 状態変化	

3.2 イベントスキーマと構文

本論文では、外界を概念化者（話者）が把握する際には、イベントスキーマと呼ばれる抽象化された認知構造が元になっていると仮定する。そしてそのイベントスキーマが表す概念が言語化されて自動詞構文／他動詞構文などの構文として出力されると考える。その

⁵¹ 影山（1996：48）自身も語彙概念構造は「言語と外界との認知インターフェース」とであると述べている。
⁵² 本論文で用いるイメージスキーマについては 4.8.2.4 節の説明も参照されたい。

際に何が主語位置と目的語位置に来て、何が場所項あるいは付加詞として統語構造に現れるかは、イベントスキーマが表す事態を構成するモノとモノあるいはモノと〈場〉に与えられる際立ち (salience) の違いによると考える。そこで、第一の際立ちを与えられたモノが文の主語となり、第二の際立ちを与えられたモノが目的語となるという認知言語学の事態把握と構文とのつながりの考え方を採用する (Langacker1990, 1991)。本論文では事態を構成する要素の中で背景化していたものに際立ちを当てることを「焦点化する」「焦点を当てる」という言い方をする。ただし、複数の構成要素についてどれにより高い際立ちを与えるかという状況では、「～に第一の/第二の際立ちを与える」という言い方を用いる。Langacker の行為連鎖モデル (action chain model) では行為連鎖のどの部分を切り取るかを選択するのを「スコープの選択」と呼び、どの参加者に際立ちを与えるかの選択を「プロファイル選択」と呼ぶ。本論文では、イベントスキーマで表される最大の範囲がスコープに相当し、プロファイルが焦点化に相当するが、イベントスキーマのどの事象の部分が前景化されるかを定める場合も「焦点化する」「焦点を当てる」という用語を用いる。つまり、イベントの構成単位においてもモノ・場の単位でも共通して焦点化という用語を用いる。また、題目マーカーの「は」によって示される場合には「取り立てる」という言い方をする。このように本論文では、概念化者が事態を主體的にどのように把握するかに重点を置く。焦点化とはそのような事態把握に対する用語であり、一般に談話レベルの文法および情報構造における「前提」と「焦点」という時の「焦点」とは異なる意味で「焦点化」という用語を用いるので注意されたい⁵³。

事態を構成する要素 (モノ・場) には ‘x’ ‘y’ ‘z’ という記号を用いる。これは「情報完結のために述語が要求する要素」(長谷川 1999 : 23) として認定される「項」の考え方に基いている。一つの文は特別な場合を除き、最大で三つの項をとる。つまり、一項述語 (「太郎が笑う」など)、二項述語 (「太郎が次郎をたたく」など)、三項述語 (「太郎が本を箱に入れる」など) で表される事態を構成する要素を、これらの三つのアルファベットの小文字で表示する。この三つの項をそれぞれ典型的な意味役割を用いて次のように規定する。なお、概念の転換などによって構成要素の際立ちに変化があった場合でも、それぞれの記号は変化しない。本論文では、モノと〈場〉の関係が重要な概念となるので ‘z’ への際立ちの与えられ方、つまり第一の際立ちを与えられるのか、第二の際立ちを与えられるのか、あるいは背景のままなのかに注目することになる。

<項の規定>

- ・ x : 動作主を典型とするエネルギーの発し手
- ・ y : 被動作主を典型とするエネルギーの受け手、あるいは存在または変化する主体
- ・ z : 〈場〉を表す。(※1.2 節で規定した〈場〉の種類を参照されたい)

⁵³ 後の分析で明らかにされるように本論文では参照点構造に基づいた事態認知を重視する。この際立ちを与えるとは、「目立たせる」という意味ではなく、参照点構造によって把握される〈場〉を事態把握の中心に据えるということである。

典型的にはモノの存在場所。述語の意味によってモノの発生場所や着点を表す。
また、〈場〉として把握される人も表す。

本論文ではイベントスキーマにおける焦点の当たり方に注目する。背景化されていた要素に際立ちが与えられ、相対的に他の要素との間に際立ちの変化があれば、イベントスキーマの転換が起こる場合がある。それは統語上に現れる構文の形にも影響を与えると考えられる。構成要素に与えられる際立ちと構文の関係をリストアップすると次のようになる。第一の際立ちが与えられている要素は‘□’で、第二の際立ちを与えられている要素には太下線を付けて示す。‘□’も太下線もない要素は背景化していることを示している。なお、要素が一つしかない場合は、自動的にそれを主語位置に据えて自動詞構文が作られるので際立ちのマークは付与されていない。なお、このリストは構文と一対一で対応しているわけではない。一つのリストに複数の自動詞文あるいは他動詞文が対応する場合がある。下に示したのはその一例である。

(1) 事態を構成する要素の際立ちと構文の対応

a. (x)	: x ガ V	ex. 太郎が歌う
b. (y)	: y ガ V	ex. 石が転がる
c. (□, z)	: □ ガ z ニ V	ex. 太郎が部屋にいる／入る
d. (□, z)	: □ ガ z ニ V	ex. 石が穴にある／入る
e. (□, y)	: □ ガ y デ V	ex. 王冠が宝石で輝く
f. (□, y)	: □ ガ y ニ V	ex. この土地が栄養に富む
g. (□, □)	: □ ガ □ ヲ V	ex. 太郎が石を投げる
h. (□, □)	: □ ガ □ ヲ V	ex. 桜の木が芽を吹く
i. (□, □, z)	: □ ガ □ ヲ z ニ V	ex. 太郎が水を水槽に満たす
j. (□, □, y)	: □ ガ □ ヲ y デ V	ex. 太郎が水槽を水で満たす
k. (□, z)	: □ ガ z ヲ V	ex. 水が水槽を満たす

a. - f. が自動詞構文で, g. - k. が他動詞構文である。構成要素が一つしかない場合 (a, b) は当然自動詞構文になるが、構成要素が二つであっても、一つが背景化している場合 (c, d, e, f) は自動詞構文になる。他動詞構文が作られるのは、構成要素が二つ以上ある場合で、かつ一方に第一の際立ちが、もう一方に第二の際立ちが与えられている場合である。

上のパターンの中で (z) に第一の際立ちあるいは第二の際立ちが与えられているものが、本論文の研究対象である。上に示した例文は全体の一部であるが、それらが分析されている節は次の通りである。

(2) 上記の構文が分析される節




- e. 王冠が宝石で輝く : 5.1 節 i. 太郎が水を水槽に満たす : 5.2 節
f. この土地が栄養に富む : 4.1 節 j. 太郎が水槽を水で満たす : 5.2 節
h. 桜の木が芽を吹く : 4.2 節 k. 水が水槽を満たす : 5.3 節

本論文でイベントスキーマに用いられる図は次の通りである。具体的な事象とそのスキーマは4章の各節の最初に提示される。

＜事態の構成要素と場の際立ちを示す図＞

- : 構成要素（際立ち無し） ● : 構成要素（際立ち有り）
□ : 場（際立ち無し） ■ : 場（際立ち有り）

＜構成要素と場、構成要素同士の関係を示す図＞

- | | | | |
|---|--------------------|---|------------------|
|  | : 場に対象が存在しない |  | : 場に対象が存在する |
| +++> | : 働きかける | ===> | : 引き起こす |
| >>>> | : {位置/状態} が変化する | …… | : {位置/状態} が変化しない |
|  | : リンクしている。同定されている。 | | |

実際のイベントスキーマは上の図と項を表すアルファベットを用いて次のように表示される。このスキーマが表す概念は、「 x が y に働きかけて、 y が z に位置変化することを引き起こす」である。

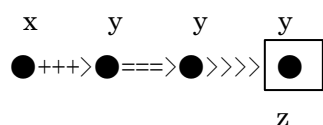


図 3.1 イベントスキーマの例

3.3 焦点化と図地反転

前節では構成要素に与えられる際立ちの差によってさまざまタイプの自動詞構文、他動詞構文が作られることを見た。際立ち（の差異）は固定されたものではなく、概念化者の主体的な把握の在り方によって変わる。ある構成要素が焦点化される（別な要素を脱焦点化することを含む）ことによって際立ちの差異に変化が生じ、それが構文の違いとなって現れると考える。このように構成要素の何を焦点化、つまり何に焦点を当てて、何を中心に事態が構成されていると把握するかについては、知覚心理学で提唱された「図」(Figure)と「地」(ground)の分化がその根底にあると考えられている。客観的に同一の事態であっても、概念化者が何を図として選択するかによって「見え方」が異なる。ルビンの杯はそのような図と地の反転を示すものとしてよく知られている。ゲシュタルト要因として閉じ

ているものは図として把握されやすいので、通常は黒い背景に白い杯があると知覚されるが、図地が反転すると黒い顔が向き合っているように知覚される。

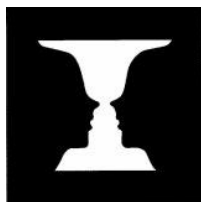


図 3.2 ルビンの杯

Talmy (1978) 以降、認知言語学では多くの言語現象にこの図地分化と反転がかかわっていると分析されている⁵⁴。本論文では、〈場〉が焦点化されて他動詞構文を作る現象に注目するが、この認知プロセスにもこの図地反転がかかわっていると考ええる。どのようにかかわっているかを論じる前に存在と所有について本論文の立場を示しておく。

3.4 存在と所有について

3.4.1 BE 言語と HAVE 言語

所有を、存在を表す動詞‘BE’で表す（以降これを「BE 所有」と呼ぶ）か‘HAVE’⁵⁵で表す（以降これを「HAVE 所有」と呼ぶ）かは言語によって異なるが（池上 1981）、世界の言語を見れば、HAVE 型言語はむしろ少数派であることが指摘されている（バンヴェニスト 1983, Lyons 1968）。HAVE-possessive をもつ言語には BE-possessive があるがその反対はないという非対称性も指摘されている（Clark 1978）。これは山口（2003）が指摘するように、歴史的な言語の発展段階を見たときに、大きな流れとして活格型言語または能格型言語から対格型言語への流れがあり、HAVE は対格型言語になってから獲得したものだからだと考えられる。これについては松本（2007）が HAVE のような所有動詞が欠如している点について次のように述べている。少し長くなるが引用しておく。

have のような所有動詞は近代のヨーロッパ諸言語を除くと、ほかでは現代ペルシア語とパシュート語など一部のイラン諸語に見られるだけである。また、ヨーロッパの印欧諸語にしても、全部がそのような所有動詞を持っているわけではない。すなわち、ブリテン諸島のケルト語、バルト海域のラトヴィア語、そしてスラヴ語の最も東方に位置するロシア語には、このような所有動詞は欠けている。これは、古い印欧語の特徴がこれらのヨーロッパ周辺の言語にたま

⁵⁴ 認知言語学では、Talmy (1978) が示した、二者の位置関係（「A が B の近くにある」のか「B が A の近くにある」のかのような二者の位置関係）とその拡張の把握の仕方といった単文レベルの図地反転のみならず、実空間から時空間への拡張として複文構造、分詞構文などへの応用も見られる。（河上 1996 : 6-12）

⁵⁵ 大文字の BE と HAVE は英語の特定の動詞を指すわけではない。英語で BE, HAVE で表されるのに相当する動詞を代表してこのように表記する。

たまに残存したものである。

英語の I have money というような所有構文は、ヨーロッパの中心部の言語で起こった比較的新しい発達にほかならない。現在のロマンス諸語はすべて have に当たる所有動詞を持っているが、もとのラテン語では、所有を表す構文は、存在動詞の esse を使う方が普通の表現だった。例えば、

est mihi pecunia. / mihi est pecunia

「私ニ (mihi) 金ガ (pecunia) アル (est)」

この構文が

pecuniam habeo / habeo pecuniam.

「(私ハ) 金ヲ (pecuniam) 持ツ (habeo)」

のような構文に変ったのは、比較的后代になってからである。そもそも印欧諸言語で所有動詞というのは、次表で見るように、語派によって全部形が違い、語源も異なっている。これは、英語の be 動詞に当たる印欧語の存在動詞がほとんどすべての語派で一致しているのとは大きな違いである⁵⁶。(同上：61-62)

松本 (2007) が上で指摘した印欧語諸語の所有動詞とは表 3.2 に示したものである。

表 3.2 印欧諸語における所有動詞 (同上：61 より)

ヒッタイト語	hark- (< *H ₂ org-)
ギリシア語	ekho (< *segh-)
ラテン語	habeo (< *ghab(h)-)
ドイツ語	haben (< *kap-)
リトアニア語	turėti (< *twer-)
教会スラヴ語	iměti (< *em-)
現代ペルシア語	dāshtan (< *dheH ₁ -?)

確かに形態が異なるのだが、ここで注目すべきは、HAVE に相当する動詞の語源を見ると、それはすべて行為を表す動詞の意味をもつと推定されることである。ギリシア語 ‘*segh-’ は ‘to hold’，ラテン語 ‘*ghab(h)-’ は ‘to take, to give, to move’，ドイツ語 ‘*kap-’ は ‘to take, to seize, to catch’，リトアニア語 ‘*twer-’ は ‘to keep, to hold, to fence’，教会スラヴ語 ‘*em-’ は ‘to take’，現代ペルシア語 ‘*dheH₁-?’ は ‘to hold’⁵⁷。以上このことから次の二点がわかる。

⁵⁶ 松本 (2007：62 脚注) が挙げている動詞は次のとおりである。ヒッタイト語：eszi，ギリシア語：esti，ラテン語：est，サンスクリット語：asti，スラヴ語：jesti，リトアニア語：ėsti，ドイツ語：ist

⁵⁷ 語源に関する情報は、Russian State University For The Humanities が提供する The Global Lexicostatistical Database (GLD) 中の Indo-European etymology データベースを検索して得られた情報に基づいている。このデータベースによれば、ラテン語のもう一つの所有動詞 ‘tenere’ の語源は ‘tenw(a)-’ で ‘to keep’ である。なお、ヒッタイト語の ‘hark-’ については同データベースでは ‘to hew, to kill’ と記述されていたが、松本氏が指摘した語源の形態かどうか不明。ウェブ上の公開サイトは次のとおりである。

<http://starling.rinet.ru/cgi-bin/query.cgi?basename=¥data¥ie¥piet&root=config&morpho=0>

- ① BE で所有を表すのが所有の原型である。
- ② HAVE 所有は BE 所有とは異なる動機付けで生まれた概念である。

ちなみに、ロマンス諸語の多くはラテン語の所有を表す動詞 ‘habere’ ‘tenere’ を受け継いだ動詞を用いるが、英語の **have** はそれとは異なり（伊藤 2003）、上に挙げたドイツ語の所有動詞の語源と同じである。

3.4.2 所有の概念化：所有 A と所有 B

BE 所有が所有の原型であるとしたら、それはどのようにして生まれたのか。Heine (1997) は類型論の観点から所有の概念が何に由来するのかを八つのスキーマに分類した。下の表にその内容をまとめておく。表の見方は、例えば、定型 (Formula) の ‘X takes Y’ なら、そのように定型化できるものから ‘X has, own Y’ という所有が生まれたことを意味し、そのような出自のラベルとして①Action を設定したことを表している。

表 3.3 所有の定型とイベントスキーマ⁵⁸

Formula	Label of event schema	
X takes Y	①Action	get, grab, seize, take, obtain から意味の漂白化を経た
Y is located at X (Y is X's place)	②Location	X は所格補語としてコード化
Y is at X's home		
Y is at X's body-part		身体の一部は「手」が多いが、頭、背中または体(全体)の場合もある
X is with Y	③Companion	XはYの付属として概念化
	Existence	
X's Y exists	④Genitive	属格修飾語
Y exists for/to X	⑤Goal	与格, 受益格, 目標格でコード化(dative, benefactive, goal)
As for X, Y exists	⑥Topic	所有者が主題としてあらわされる
Y exists from X	⑦Source	from, off, out of などの奪格の参与者として表される
Y is X's (property)	⑧Equation	所属構文に関係する

サンプルの 100 言語の中で多かったのは② (23 言語) と⑤ (22 言語) だったという。以下、④ (16 言語) ① (15 言語) ③ (14 言語) ⑥ (11 言語) と続く (同上: 45)。このスキーマの分類を、所属になる⑧を除いて次のようにグループ分けをしてみたい。

(A) 獲得/保持という行為からの拡張 : ① (15 言語)

⁵⁸ Heine (1997) の table 2.1 (p.47) と 2.1 節の解説 (pp.47-65) の内容に基づいてまとめた。なお、この分類はまず所有を「限定所有」(ex. Ron's dog) と「叙述所有」(ex. Ron has a dog. / The dog is Ron's) に分類したうえで、後者の所有を分類したものである。

- (B) 場所的な近接性による拡張 : ②③⑤ (合計 59 言語)
 (C) 属格修飾語の存在からの拡張 : ④ (16 言語)
 (D) 題目場における存在からの拡張 : ⑥ (11 言語)
 (E) その他 : ⑦

(A) は Heine (同上 : 50) でも指摘しているように HAVE 所有につながるスキーマである。(B) は定型 (Formula) からうかがえるように存在の BE が関係しており, ②「その場にある」, ③「それと共にある」, ⑤「それに対して/そのためにある」という場所的な近接性の概念をもつと考えられる。Heine の分類では, ④は Existence というくくりに入っている。確かに「～のモノが存在する」という存在の概念とつながりがあるが, あとで論じるように, 所有への拡張プロセスを考えると別のグループとして扱うほうがいいと考えるため (C) として別にたてておく。(D) は設定された題目の〈場〉における存在ということが出来る⁵⁹。そこでこれら (B) (C) (D) が BE 所有につながるスキーマだと見ることができる。以上まとめると所有の概念の出自には大きく二つの流れがあり, 所有の基本と見られる BE 所有の多くは, 存在を表す概念 (以降これを「BE 存在」と呼ぶ) から拡張したと考えられる。

表 3.4 存在と所有の関係

<出自>	拡張のプロセス	<所有のタイプ>
BE 存在	→ (?) →	BE 所有
ACTION	→ (意味の漂白化) →	HAVE 所有

ACTION (スキーマ) から HAVE 所有が拡張したのは Bleaching (意味の漂白化) (Heine 同上 : 47) によると考えられるが, ここで問題となるのは, BE 存在から BE 所有の概念への転換はどのようにして起こるのかということである。Heine (同上) は述語タイプの文法化のつながりは示しているが⁶⁰, 上の (?) については言及していない。相互に関係があるというだけにとどまる。Lyons (1967 : 390) も所有と existential は場所 (locative) に由来すると指摘し⁶¹, ‘be’ ‘have’ は copula であり文法的な機能しか担っていないと指摘しているにとどまる。Back (1967 : 476-477) も ‘be’ ‘have’ を linking element と見て, 関係の結び付けでそれぞれの用法を分類しているだけである。意味構造と統語構造をリンクするという分析では Foley and Van Valin (1984 : 48, 53) が BE WITH という意味

⁵⁹ Heine の分類によれば, ここに中国語が分類される。日本語もこのような特徴があると指摘されている。

⁶⁰ A grammaticalization chain of predicate types として文法化の程度の差を次のようなスケールで示している。Postural verb > Locative verb/copula > Possessive verb > One-place copula of existence > Two-place copula of identity (p.205)

⁶¹ Lyons の分類では Existential は時間軸上の特定の場所項をとらない (一項述語の) 存在文を指す。例 : Lions exist. There are lions (in Africa)。場所 (locative) とは二項述語の存在文といわゆる所在文を指す。例 : There is a book on the table. The book is on the table.

述語が HAVE という概念を表すことを示し、影山（1996：55-56）でも同様の考えによって意味構造における場所の取り立てによって存在から所有に転換すると分析している。生成文法による分析では Freeze（1992：588）が、D-構造の存在文（existential）における‘+human’の素性をもつ場所が S-構造で主語位置に移動し、前置詞が IP に移動し BE に編入されることによって HAVE が生成されると分析されている。

本論文は、以上の先行研究の分析を否定するものではない。概念化者の事態の捉え方への転換によってイベントスキーマにおける焦点化の在り方も変わるという立場をとるため、存在から所有の拡張も何らかの事態の捉え方の転換によるという分析を提案する。具体的には、(B) (D) の BE 存在から BE 所有への拡張は、一種の図地反転に基づく概念の転換を基盤にして、存在空間から所有空間、題目空間へと〈場〉の捉え方が変わることによると分析される。(C) については属格修飾語と被修飾語が参照点構造によって所有空間と所有物とに再解釈されると分析される。この分析の利点は、概念化のプロセスの違いを意味の違いに反映させることにある。その認知プロセスの背後で意味構造における場所の取り立てや普遍文法における統語構造での移動が起こることを否定するものではない。本論文では、存在から所有の概念の転換を①のように規定し、それに基づいて所有の概念化と構文のタイプを②③のように、そして構文上での〈場〉の現れ方を④～⑦のように規定する。

<存在から所有への概念転換に関する認知プロセス>⁶²

- ①参照点としての場 (z) に⁶³、ある対象 (y) が存在する状況において、場 (z) が、そこに対象 (y) が存在することによって特徴付けられると把握される場合に、所有の概念に転換する。

<所有の概念化と構文のタイプ>

上述の認知プロセスによって場 (z) が

- ②その参照点構造を維持したまま（デフォルトでは）文頭に来て、対象 (y) がガ格名詞のまま、自動詞構文を作る場合、これを参照点構造自動詞構文と呼び、このような所有の概念化を、所有 Aと呼ぶ。
- ③その参照点構造を維持しながらも、第一の際立ちが与えられ、主語位置に来て⁶⁴、対象 (y) に第二の際立ちが与えられ、ヲ格名詞句となり、他動詞構文を作る場合⁶⁵、これを場焦点化他動詞構文と呼び、このような所有の概念化を、所有 Bと呼ぶ。

⁶² 本論文の分析対象となる他動詞構文のほとんどがこの規定による概念転換であるが、第4章の一部の構文、および第5章の構文では別のタイプの概念転換を導入する。それは4.8節で規定される。

⁶³ 参照点とその構造については、3.4.5節の解説を参照されたい。

⁶⁴ 本論文では、主語が何かという定義には立ち入らない。そのかわりに「主語位置に来る」という表現を用いる。これは焦点化された〈場〉がデフォルト（無標）では「は」を伴って現れることを配慮したものである。「コト図式」に入れた場合に、「…が…を…V コト」で、ガ格名詞が現れることから、焦点化された〈場〉は主語となるべき位置に来てガ格を付与されていると考える。

⁶⁵ 2.1節でも規定したように、本論文ではガ格名詞とヲ格名詞句で二項または三項述語を作る場合に、それを他動詞構文と呼ぶ。これは必ずしも述語の動詞を「他動詞」だと認定していることを意味しない。

次に、構文上での〈場〉の現れ方を規定するにあたり、情報構造とのつながりについて説明しておく必要がある。①のように概念転換に関する認知プロセスを規定した帰結として、存在の概念化によって生成される構文では、構成要素である〈場〉もモノも情報構造上、未知でありうるが、所有の概念化によって生成される構文では、その場を特徴付けるという認知プロセスによって、その〈場〉は情報構造上、(デフォルトでは) 既知情報となる⁶⁶。存在文が、現象をまるごととらえて「～が…」(3a) と叙述できるのに対して、所有文はデフォルトでは「～(に) は…」(3b) と叙述されるのはそのためである。(c) は有標の文で、「だれが」という質問の答えになっている。つまり、所有の概念化は〈場〉(場として把握される物・人を含む) を特徴付ける属性叙述文(性状規定文) として言語化されると言える⁶⁷。

- (3) a. あ、太郎があそこで寝ているよ。
b. 太郎にはたくさん友人がいるよ。
c. 太郎がたくさん友人がいるよ。(←だれがたくさん友人がいるの?)

以上の考え方を踏まえて、所有の概念化によって生成された構文における〈場〉の現れ方を次のように規定する。

<所有の概念化によって生成された構文における〈場〉の現れ方>

- ④参照点としての〈場〉は所有の概念化によって情報構造上は題目となるため、デフォルトでは文頭に位置する。
⑤日本語には題目マーカの「は」があるので、デフォルトでは「は」が付く。
⑥所有 A では無生物制約⁶⁸ が働くため、〈場〉が無生物の場合には、この〈場〉が(所有の概念化によって) 所有空間になっていることを「は」によって示す必要がある。
⑦所有 B では他動詞構文が所有の解釈を保証するので「は」は必須ではない。

⑥と無生物制約について少し補足しておく。所有への概念転換という認知プロセスは物にも人にも起こり得るが、人間の認知は無生物より有情者に注意が向きやすい。所有 A で〈場〉に人が来る場合には、題目マーカの「は」による表示なしに統語上に現れ、所有の意味で解釈されるが、人以外は「は」によってマークされなければそのように解釈されないと考えられる。

⁶⁶ 「特徴付け」という認知プロセスは、その対象物が既知のものであることが前提になされるプロセスであり、未知あるいは不定のものは特徴付けることができない。

⁶⁷ 属性を表す形容詞述語はデフォルトが「～は+形容詞」であり「空は青い」となる。それに対して「空が青い」は有標の形式であるのと平行的に考えることができるだろう。

⁶⁸ 無生物制約とは人と比べて注意・意識が向かいにくいことに起因する事態認知上の制約のことである。

(4)	<概念>	<構文のタイプ> 69
a. 太郎の家に車がある。	存在	自動詞構文
b. 太郎の家に は 車がある。	存在	自動詞構文（場所の取り立て）
c. 太郎の家 (に) は 車がある。	所有 A	参照点構造自動詞構文
d. 太郎 (に) は 車がある。	所有 A	参照点構造自動詞構文
e. 太郎 は 車を有する。	所有 B	場焦点化他動詞構文

(5) a. （元々）太郎の家には車があるけど、修理に出したから、今はその車はない。
① ②

b. 太郎家本来有_有一輛車，但送出去修理了，所以现在车不_在（这里）
① ②

(6) a. うちの会社には山田という社員はいますけど、今は出張中でいません。
① ②

b. 我们公司里_有一名叫山田的职员，但 现在他不_在（公司），出差了。
① ②

⁶⁹ 「参照点構造自動詞構文」という名称は、先に示したく存在から所有への概念転換に関する認知プロセスがあることを前提にして所有の概念に転換したものに付けた名称である。しかし、「参照点構造」という名称を一般的に解釈すれば、(4a)と(4b)の存在も参照点構造に依拠する自動詞構文である。

＜本論文の対象となる〈場〉①③の再規定＞

①存在空間：時間軸を伴った空間であり、知覚対象としてモノが存在する空間のこと。存在を出来事として叙述する場合に設定される。

③所有空間：知識の対象としてモノが存在する空間のこと。

③・(1) 命題成立空間：その対象が存在するという命題が成立する空間

③・(2) 関数成立空間：その対象と関数でつながった値が存在する空間

①と③は時間軸を伴った空間として把握されるかどうかで区別される。ただし、これは実空間としての存在空間に対して、抽象化し、観念上の空間となった所有空間の規定である⁷⁰。③はさらに二つの領域に分類される。「z に y がある」という構文において、z が y との関数になっている場合がある。例えば「母」という語は「彼女は母だ」というだけでは意味が完結しない。なぜなら「母」は「だれの」という情報があつてはじめて意味が完結するからである。このような関係を金水（2002）の「関数の値域」という考え方にならって「関数成立空間」と呼ぶことにする。ただし、金水（同上）は、所有文に現れる二格名詞句とガ格名詞句の関係を一律に関数であるとし、二格名詞句はその関数の値域であると考えたが、本論文ではあくまでも意味が単独では完結しない場合に限って用いている。わざわざ区別するのは、所有文が見せる「定性制約」と呼ばれる統語上の制約の働きに違いがあるからである⁷¹。

この関数成立空間を想定すると、次のように説明することができる。「彼女には母がいる」という所有文における二格名詞句は単なる「存在空間」から「関数成立空間」へと質が変わっており、「彼女」というのはその値領域の「値」を示しているのである。一方「彼には車がある」という所有文において「車」は単独でその意味が完結している。したがって、先ほどの「彼女の母」「彼女の弟」とは異なる。この場合「車がある」という命題が成立する空間を指していると考えられる。つまり、「車がある」という命題が「彼」という〈場〉において成立するという把握である⁷²。この規定に従えば、(4c) の「太郎の家には車があ

⁷⁰ すぐ後で示される所有のタイプにおける「主体・側面」「全体・部分」は所有空間が存在空間と同一であり、上の規定とは異なる。詳しくは、3.4.5 節を参照されたい。

⁷¹ 「彼女には言語学の本がある」（命題成立空間）では「彼女にはすべての言語学の本がある」と言えるので定性制約は成立せず、「彼女には弟がある」（関数成立空間）では「彼女にはすべての弟がある」と言えないので定性制約が働いていると考えられる。定性制約とは、there 構文の動詞の後に現れる名詞句は、many, some, a few, no などの弱決定詞（weak determiner）、あるいは名詞句、冠詞を伴わない名詞句などが構成員となる不定表現（indefinite expression）は現れるが、every, most, all などの強決定詞（strong determiner）あるいは、代名詞・固有名詞などに代表される定表現（definite expression）は現れることがないという制約。（cf. Milsark 1977）(i) There are {many/some/no} books on the table. (ii) *There are {most/all} books on the table. このような制約は、日本語では所有文全体に見られる制約と見られていたが（岸本 2005）、本論文では、影山（2004b）が指摘しているように「アル述語」でかつ親族名詞かそれに準じる名詞について起こるという見方を支持し、上述のように区分する。

⁷² 金水（2002）では、存在文を大きく場所表現を伴うものと伴わないものに分けた上で、後者を「限量的存在文」と命名し、その中で二格名詞句が命題が成立する世界を規定するという意味で「世界設定語」になっているものを「部分集合文」と命名した。「最近は、教科書以外の本は一冊も読まない学生がいる/ある」などである。そのような文に「最近の日本には…」と二格名詞が現れた場合にそれを世界設定語

る」の「太郎の家に」という〈場〉は①「存在空間」から③・(1)「命題成立空間」へと質が変化していると解釈できるのである。

さて、このような〈場〉の特徴付けの認知プロセスが強化される、つまり特徴/属性を述べるという意識が強くなると、「に」は省略され「太郎の家は車がある」のようになる。モノが抽象的な場合はむしろ「に」がないほうが自然になることもある。そこには属性を叙述する（性状を規定する）形容詞述語文「～は＋形容詞」とのつながりが認められる。

- (7) a. このクラスに**は**活気**が**ある。
b. このクラス**は**活気**が**ある。
c. このクラス**は**楽しい。
d. このクラス**は**先生がおもしろい。

同じ所有 A でも (4d) が典型的な所有とみなされるのは、〈場〉に人が来ているからにはかならない。そして、所有 A は (7d) のような「～ハ～ガ」構文とのつながりもその射程に入れることができる。つまり、「このクラスは、＜先生がおもしろい＞という特徴/属性を有している」という把握である⁷³。このように題目の〈場〉が所有の概念とつながるという見方は、これまで隠れていた構文間のつながりを浮き彫りにする⁷⁴。そこに所有 A と B を区別してたてる意義がある。（これに関する本論文の立場は次節も参照されたい）

そして重要なことは、上の規定は単に存在と所有の概念を表す動詞である「ある」と「いる」の意味を分析するためのものではないということである。本論文の目的は、上に規定したような存在と所有の概念化の認知プロセスによって客観的には同じ事態が、自動詞構文となったり他動詞構文となったりする現象を分析することである。

次に本論文が所有と呼ぶ場合に何を指すのかを規定しておく。存在から概念の転換によって生まれる所有の概念もまた、モノと〈場〉の二者関係を示す最も基本的な概念である。全体では大きく「分離可能所有」と「分離不可能所有」に分けられ、その二者の関係によって (a) ～ (d) の四つに分類される。

<二者の関係に基づく所有の分類>

- | | |
|----------------|----------------------------|
| ・ 分離可能所有 : | ・ 分離不可能所有 : |
| a. 所有主体 - 所有対象 | b. 全体 - 部分 c. 主体 - 側面 |
| | d. 血縁関係 (社会的人間関係) |

と呼ぶのである。本論文はこの金水氏の分類を参考にした。

⁷³ これまでの考え方では「このクラスは楽しい」「太郎は頭がいい」などは属性を表す形容詞述語というだけで特に問題になることはなかったが、属性とは何かという点を考えれば「属性をもつ」という言い方ができることからわかるように、所有の概念とつながっているというのが本論文の立場である。

⁷⁴ 題目の〈場〉がいつも所有の概念と結びつくというわけではない。事態把握のプロセスから見れば、題目の場は参照点構造における参照点になっていると考えられる。ここで重要なことは、場は見方によって、何かがある場所とも、何かをもつ場所とも解釈されるという点である。

分離可能所有はさらに所有権の性質によって一時的所有、永続的所有に分類でき、さらに所持・保管も区別されるが（Heine1993：34-35）、本論文の目的には不要なので、これ以上は立ち入らない。分離不可能所有も更なる細分化が可能だが、本論文の目的に照らし合わせて、次の二点だけ補足説明しておく。(b)の全体-部分、身体における全体-部分も含む。(c)の「主体-側面」の「側面」とは実際には主体と一体になっているものを、その「主体の属性を決める面」として一度概念上分離し、認定されるものである。角田（1991）が示した所有傾斜の「属性」に相当する。

(8) 所有傾斜

身体部分＞属性＞衣類＞（親族）＞愛玩動物＞作品＞その他の所有物

（角田 1991：119）

この「側面」は本論文でかなり広い関係を含み持つことを指摘しておく。モノが存在する以上は必ずもつことになる「色」「形」「大きさ」などを基本的な側面とし、そのモノの状態を特徴付ける性格や態度や能力、精神状態、心理状態、さらには発生物（生産物）としての声や匂いなどもこの「側面」に含まれる。この側面はその主体と一体となっているのが原則だが、Chappell and McGregor（1996：8-9）が指摘しているようにその言語使用の文化・生活において基本的と認められるもの（culturally basic possessed item）は分離不可能所有として扱われる。例えば「土地」「家」など。これは物理的には分離可能所有であるが、心理的なつながりが文化的に保障され、分離不可能として形態的・構文的な違いとなって現れるということである。日本語は「ノ格」による表示および所有文における二格標示においてそのような形態上・構文的な違いを示すことはないが、分離可能・不可能所有は連続しており、「側面」がこのように拡張しうるという点は今後の議論で重要になる。

上に示した「二者の関係に基づく所有の分類」のイメージ図は次のとおりである。図の左側が存在の概念、右側が〈場〉の焦点化による所有 B の概念のイメージ図である。人が〈場〉になる場合、その近接性が点線によるリンクで表されている。図の枠線が太くなっているのは、〈場〉が焦点化され、所有 B の概念に転換していることを示している。



図 3.3 分離可能所有
所有主体-所有対象（物）

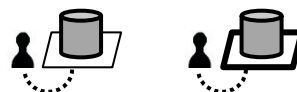


図 3.4 分離可能所有
所有主体-所有対象（人-物）



図 3.5 全体-部分（物）



図 3.6 全体-部分（人）



図 3.7 主体-側面（物）



図 3.8 主体-側面（人）



図 3.9 血縁関係

3.4.3 与格と二格

前節で示した Heine (1997) のスキーマの分類では、日本語の所有文「～に～がある」は⑤の Goal のスキーマに分類されている。スキーマの解説では‘allative/directional maker’（向格/方向マーカ）が現れるとしており、これに該当すると見られる。Heine (同上：59) では日本語の例文も紹介されているが、「に」には DAT（与格）のグロスが振られずに英語の ‘to’ を当てている。

(9) John-(ni)-wa kuruma-ga ar-ru.

John to car is

これまで「太郎に財産がある」のような所有構文に現れる「二格」は与格と呼ばれ、二格名詞句は主語かどうかという議論がされてきた。また、統語上は主語と見られるにもかかわらず二格で表示される構文は「非規範的構文」とも呼ばれ、二格名詞句は主語なのか、ガ格名詞句は目的語に相当するののかという議論がされた（柴谷 1978, 2001, 久野 2005）。柴谷（1978：221）では、格助詞の「が」「を」「に」を論じるに当たり、そのリストを次のように挙げている。

(10) 主格「が」	向格「へ」・「に」
対格「を」	奪格「から」
与格（位格）「に」	共格「と」
具格（位格）「で」	比較格「より」

ここで注目したいのは、格の名称ではなく、「位格」と「に」の扱いである。位格は与格と具格に付属するように括弧付きで書かれている。そして「に」は与格と向格の二つに対応している。このことから位格は与格と比べて周辺的で「に」は複数の（表層）格と対応させるという考え方が窺える。統語範疇である主語と目的語（直接目的語と間接目的語）と結びつく主格、対格、与格が中心の格として選ばれるのは理由のないことではない。しかし、これは主語と目的語という統語範疇が構文上重要な意味をもつ言語の発想である。

ここで主語や目的語の認定が意義のあるものかを議論するのは本論文の目的ではない。角田（1991）が「二項述語の分類」で示したように、言語類型論的に見て、「ガ〜ヲ…」の格枠組みが現れる方向と「ニ〜ガ…」が現れる方向の二つがある（同上：95, 122）という事実が重要である。「ニ〜ガ…」の格配列の側から見たらどのように言語現象を分析できるのか、それが本論文のとり立場である。「に」を欧米言語の格に合わせて分析するのではなく、「に」は「ニ格」として共通してもつ意味を考えてみるという姿勢である。ここで共通する意味と言った場合に誤解を与えないように補足しておく。Fillmore（1968）にしたがって深層格（意味役割）との対応を考え、ニ格は Location, Goal, Source, Agent などに対応すると主張したいのではない。本論文で共通する意味と言う場合には、事態把握における概念化のレベルでの「に」である。概念化の鋳型となるイベントスキーマおよびイメージスキーマにおいてニ格は根本的に「場所」とであると主張するものである。

〈場〉に依拠した文法理論としては場所理論（localist theory）がある。池上（1981a：21）では、場所理論を発展させた Anderson（1971）が示した格関係のリストに到達点を表す‘TO’が設定されていない理由について、「到達点（TO）は存在点（AT）と相補的な分布を示す、つまり、動詞が方向性を有する移動を表すものなら〈到達点〉、単に静的な存在を表すなら〈存在点〉をそれぞれ予想する」という理由で、場所（loc）として一つにまとめられていると説明している。池上自身もこのように到達点を表す表現と存在点を表す表現が中和される傾向があることを、日本語の「ソコニイル」と「ソコニイク」、英語の‘He went there’と‘He was there’を引き合いに出し認めている⁷⁵。

日本語の所有文に話を戻すと、「太郎に財産がある」の「ニ格」を与格と認める理由があるとすれば、それはニ格名詞が場所を表す場合は場所格（位格）だが、人が来る場合は与格であるという考えである。確かに英語では、場所と人の区別は文法的に重要になることが少なくない。

- (11) a. John sent a letter to Mary.
 b. John sent Mary a letter.
 c. John sent a letter to New York.
 d. *John sent New York a letter. (影山編 2001：127)

二重目的語構文は（b）のように間接目的語の位置に人が来る場合には成立するが、（d）のように場所が来る場合は非文になる。それは間接目的語の位置に来る名詞は単なる移動場所ではなく、受領者あるいは所有者となるからである。このように間接目的語は物の受領者、所有者になるということと平行して、所有を表す構文に現れるニ格は与格であると判断するのである。しかし、日本語には間接目的語という文法範疇を示す形式はない。上の文では（語順の入れかえはあっても）どちらも「ジョンは {メアリー／ニューヨーク} に

⁷⁵ 影山（1974）も localist theory の視点から所格の基本性を主張している。

手紙を送った」である。したがって、このような授受動詞における人名詞をとる二格を与格に相当すると見るのは間違いではないが、与格という点ばかりに目を向けすぎていたのではないか。むしろ、人でも場所でも「～に送る」と言えること、「～にある」と言えることにこそ注目すべきである。すなわち、着点と受け手を区別するという視点だけでなく、根本的には同じであるという視点から分析することによって得られるものに注目すべきである⁷⁶。

3.4.4 英語との対照で見えてくる所有の概念と拡張

表 3.4 に示した「存在と所有の関係」で一つの疑問が出てくることが予想される。それは BE 所有には対応する BE 存在があるが、HAVE 所有が ACTION スキーマから拡張したとしたら、HAVE 存在はどこにあるのか、という疑問である。

答えを先取りして述べれば、HAVE 存在はあり、それは HAVE 所有からさらに拡張したものと見られる。池上（2006）は、BE 言語の日本語と HAVE 言語の英語を比較して、興味深い指摘をしている。これをとっかかりにして、上述の疑問に答える形で所有の概念を改めて確認しておくことにする。

池上（同上）では、日本語は存在の「ある」から所有の「ある」へ、そして英語は逆に所有の‘have’から存在の‘have’へと拡張したという見方を示した。（表中の矢印の方向が反対になっている点に注目）

表 3.5 日本語と英語の拡張の違い（池上 2006 : 165 図 6-1 より）

表現形式 表現内容	〈存在〉	〈所有〉
〈存在〉	この部屋には窓が二つある ↓	The room has two windows ↑
〈所有〉	私には子どもが 2 人いる	I have two children
	〈BE 言語〉	〈HAVE 言語〉

日本語の存在の例として「この部屋には…」と「は」を付けているが、3.4.2 節の「所有の概念化と構文タイプ」の規定で示したように、これは「参照点構造自動詞構文」で、所有 A に相当する解釈もあることを指摘した。「この部屋には…」の文は、この規定に従えば二義的である。存在を表す場合、つまり場が単に題目マーカーで取り立てられている場合もあるが、所有への概念転換が起きている場合は、「この部屋」の特徴付けの認知プロセスがあることになり、それは存在ではなく所有 A ということになる。無生物が二格名詞句に来る場合、題目マーカーの「は」が付かなければ、それは形式の点でも内容の点でも存在だと

⁷⁶ 杉本（1986）では、所有の二格（与格）と存在の二格（位格）の共通性に注目し、主語性という文法点から見ると両者は異なるが、場所性という点で共通していることを強調している。

言えるだろう⁷⁷。したがって、対応する英語の‘The room has ...’も完全な存在文になっているわけではない。全体・部分という関係を表す点で本論文では広義の所有に分類される。

Freeze (1992 : 583) は‘have’の主語が無生物になる場合の構文成立について興味深い言語現象を紹介、分析している。(12) はすべて無生物主語だが、(a) (c) と (b) (d) では同じ主語にもかかわらず (c) と (d) のほうは非文法的になる。その原因は、主語と目的語の意味関係にあるという。(a) は分離不可能所有 (inalienable possession) なので成立し、(b) は分離可能ではあるが、目的語名詞句がそこにあることで主語名詞句を特徴付けている (characteristically associated) から、つまり (a) のような分離不可能所有と見なされる (treated as inalienably possessed) から文が成立すると説明されている。このような意味上の制限を解除するためには、(e) (f) のように統語構造上に主語名詞と照応される場所句を付けなければいけないという。

- (12) a. The tree has branches.
b. The flour has weevils (in it).
c.*The tree has a nest.
d.*The flour has a ring.
e. The tree_i has a nest in it_i. (= There is a nest in the tree.)
f. The flour_i has a ring in it_i. (= There is a ring in the flour.)

一方、(13) のように人が主語になっている場合には、分離可能所有 (a) であれば、分離不可能所有 (b) であれば、主語名詞句を特徴付ける所有 (c) であれば文は成立する。(日本語訳は引用者による)

- (13) a. The boy has a needle. 「その少年は針を持っている/所持している」
b. The boy has a cousin / a nose. 「その少年には従弟/鼻がある」
c. The boy has fleas (on him). 「その少年は体にノミがいる」

以上の言語事実から言えることは、‘have’の無生物の主語名詞が認知的に場所と同じ扱いを受けるのは (12e, f) だということである。これを踏まえて、表 3.5 の上段に文を追加し、拡大版を作る。表 3.6 は、本論文の分類である存在文、存在・所有文 (所有 A)、所有文 (所有 A) と対応している。そして英語の物主語の‘have’存在文の制約でわかったことは、‘have’所有にもやはり「主語名詞句の特徴付け」という意味特徴があるということ、そして人には特別の地位が与えられていることである。下の表にさらに本論文の目的である場焦点化他動詞構文 (所有 B) を位置付けて、拡大版としておく。「いる」「ある」という

⁷⁷ それは場所句が背景化しており、対象物に焦点が当たる文で、「あ、(この部屋に) 窓が二つあるね」「ほら、窓が二つ (この部屋に) あるよ」などがそれに相当する。

動詞による静的な事象に限定することなく、所有の概念化の鑄型を通して作られる場焦点化他動詞構文（所有 B）がどのような静的および動的な事象を表すのかを明らかにする。

表 3.6 拡大版：日本語と英語の拡張の違い

表現形式 表現内容	〈存在〉 「ある」「いる」 (BE 言語)		〈所有〉 have (HAVE 言語)
〈存在〉 〈存在・所有〉 〈所有〉	存在	木に鳥の巣が一つ <u>ある</u> ↓ この部屋には窓が二つ <u>ある</u> ↓ 私には子どもが 2 人 <u>いる</u>	The tree <u>has</u> a nest in it ↑ The room <u>has</u> two windows ↑ I <u>have</u> two children
↓			
表現形式 表現内容	「ある」「いる」以外の動詞述語		(have 以外の動詞述語・ have を用いた構文)
〈所有〉	所有 B	場焦点化他動詞構文	

3.4.5 本論文が考える BE 存在と BE 所有

ここまでの内容をまとめると、所有には BE 所有と HAVE 所有があり、前者がより基本的な所有であることがわかった。日本語は「ある（いる）」という存在の動詞を用いるので BE 存在である。そして BE 所有は BE 存在から概念の転換によって拡張することを示した。概念の転換に関する認知プロセスおよび構文のタイプについては、3.4.2 節で次のように規定した。

（再掲）〈存在から所有へ概念転換に関する認知プロセス〉

- ①参照点としての場（z）に、ある対象（y）が存在する状況において、場（z）が、そこに対象（y）が存在することによって特徴付けられると把握される場合に、所有の概念に転換する。

（再掲）〈所有の概念化と構文のタイプ〉

- 上述の認知プロセスによって場（z）が
- ②その参照点構造を維持したまま（デフォルトでは）文頭に来て、対象（y）がガ格名句のまま、自動詞構文を作る場合、
これを参照点構造自動詞構文と呼び、このような所有の概念化を、所有 Aと呼ぶ。
- ③その参照点構造を維持しながらも、第一の際立ちが与えられ、主語位置に来て、対象（y）に第二の際立ちが与えられ、ヲ格名詞句となり、他動詞構文を作る場合、これを場焦点化他動詞構文と呼び、このような所有の概念化を、所有 Bと呼ぶ。

そして、所有文に現れる二格を文法範疇である主語・目的語の観点から与格と認定することよりも、むしろ二格としてそこに通底する場所性に注目することによって見えてくるものを分析すべきだと主張した。最後に英語の対比から存在，所有 **A**，所有 **B** のつながりを確認し，本論文が単に「ある」「いる」という動詞だけでなく，存在から所有の概念への転換がより大きな事態の把握に適用されていると考え，それがどのような構文として現れるのかを分析するという方針を示した。その構文が場焦点化他動詞構文（所有 **B**）である。

そこで、次に本論文の分析の基盤となる BE 存在から BE 所有への拡張の流れと拡張のタイプの全体像を下に示す。3.4.2 節で Heine (1997) の所有のスキーマをもとに再分類した拡張のタイプ (A) 「獲得/保持という行為からの拡張」，(B) 「場所的な近接性による拡張」，(C) 「属格修飾語の存在からの拡張」に従って分類したものである⁷⁸。ただし，類型論的な観点から論じることは本論文の目的ではないので，日本語の場合に当てはめて考えたものである。図の①～⑥は拡張タイプ (B) に相当する。そして⑦が拡張タイプ (C) に相当する。Heine (1993) が指摘しているように一般的な傾向として (C) のスキーマは分離不可能所有に現れることが多い⁷⁹。日本語において⑦を分離不可能所有として (B) に入れるのではなく (C) に入れる根拠は⑦は他のタイプと異なり，定性制約が存在するからである⁸⁰。

図中の定型文の BE 存在，BE 所有 **A** の動詞は「ある」で統一しているが，人・動物の場合は「いる」が現れる。また BE 所有 **B** の動詞として「有する」を入れておく。他の動詞は 4.1 節を参照されたい。BE 存在から BE 所有への拡張は上に再掲した認知プロセスによると考えるが，〈場〉がどの空間を対象としているかは，分離可能所有と分離不可能所有とで異なる。通常，分離可能所有では図 3.10 に示したように〈場〉が存在空間から所有空間へと転換する。すなわち，実空間においてその対象物がその場に存在しなくても所有を表すことができる。「太郎には車がある」（所有空間）は，必ずしも太郎のそば，あるいは太郎の家に車がなくても成立するということである。ただし，「所持」の意味の場合は，存在空間における二者関係のままになっている⁸¹。「所持」は「存在」と「所有」の中間的な特徴をもつ概念だと考えられる。一方，分離不可能所有のうち「全体・部分」および「主体・側面」では，図 3.11，3.12 に示したように存在も所有も同じ「存在空間」の〈場〉における存在から所有への概念転換である。このように概念化される「空間」の名称と，存在/所有の概念は必ずしも一致しないので注意されたい。②の人が〈場〉に来るタイプは，通常分離可能所有の拡張プロセスを示している。「所持」の場合は，上でも説明したように「BE 所有」で概念化されるのは「所有空間」ではなく「存在空間」である。

⁷⁸ タイプ(A)については本節の最後で英語のような対格言語における have 所有とのつながりで論じる。

⁷⁹ ただし，①②のような分離可能所有にも現れることがある。

トルコ語の例：Kitab-im var

book-my existent (I have a book) (Heine 1993 : 58)

⁸⁰ 定性制約については，3.4.2 節の脚注を参照されたい。本論文では，定性制約が生じる原因（の一つ）として「属格修飾語の存在からの拡張」を仮定したが，これについてはさらなる検討が必要である。

⁸¹ 例えば，ライターの火を借りたいと思った人が隣の人に向かって，「すみませんけど，ライターありますか」と尋ねる場合，それは隣の人が発話時点でライターを所持しているかを問うている。その人のライターのコレクションを尋ねているわけではない。

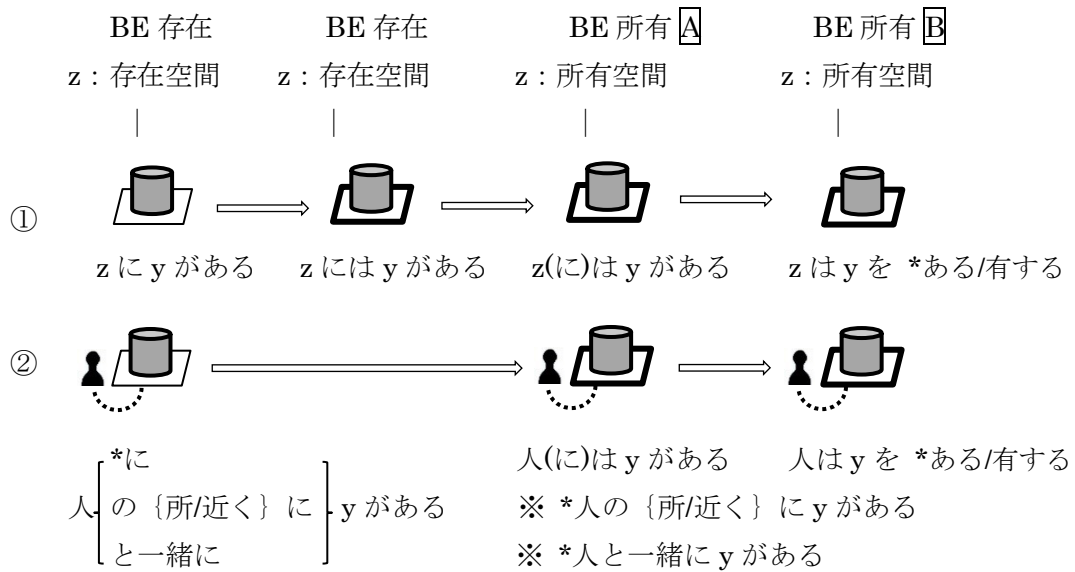


図 3.10 分離可能所有：BE 存在から BE 所有への転換

②の「BE 存在」で「*に」となっているのは、日本語では人の体を物あつかいにする場合、「人の体に」のように「体」や身体部位が入るのが普通だからである。図中の②の「BE 所有」で※を付した「人の～」「人と一緒に～」は日本語では成立しないが、他の言語には存在する。例えば、ヒンディー語には次のような所有文がある。(a) は所格所有で ‘ke pass’ は「～の近くに」という意味を表すという。(今村 2009)

(14) rames=ke pass do kaare hai.

ラメーシュ=LOC 2 車 存在する

(ラメーシュは車を二台持っている)

(同上：22 グロス是一部簡略化)

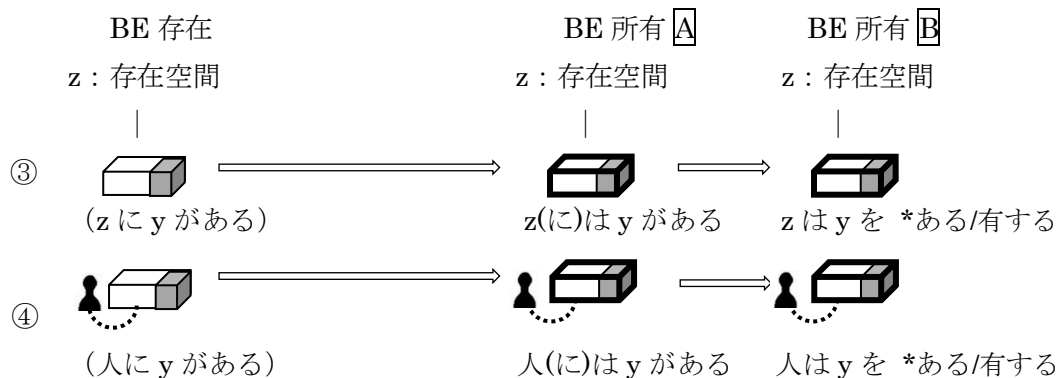


図 3.11 分離不可能所有【全体-部分】：BE 存在から BE 所有への転換

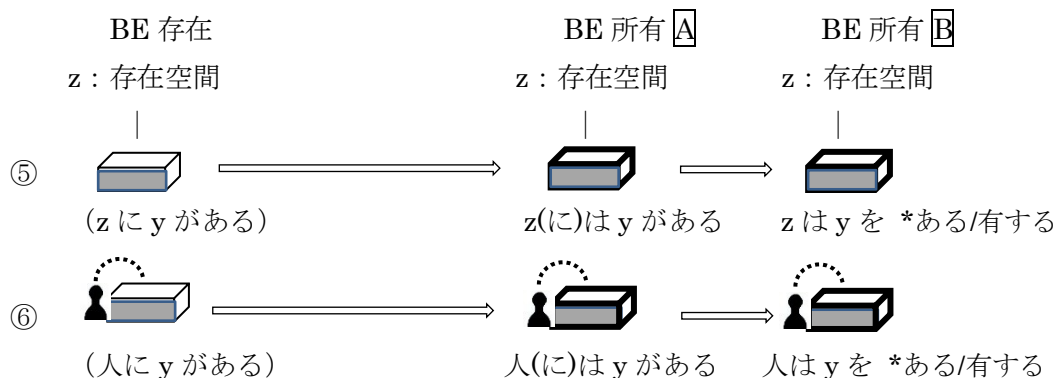


図 3.12 分離不可能所有【主体-側面】：BE 存在から BE 所有への転換

③～⑥で「z/人に y がある」が（ ）に入っているのは，【全体-部分】【主体-側面】の関係はすなわち所有を表すと把握されるのが普通だからである。とはいえ，拡張関係として存在から所有への転換があったと考え，（ ）に入れて示しておく。

同じ分離不可能所有であっても，「血縁・人間関係」は他とやや異なる拡張を見せる。図 3.13 に示したように元になるのは発生の概念である。親子関係や兄弟関係，友人関係や師弟関係が“生まれる”という把握である。日本語では「その人の〈場〉において関係が発生する」という把握になる。これは「～さんに {子ども/友人} ができる」「～さんと～さんの間に師弟関係が生まれる」という表現があることから窺える。そのように発生の〈場〉として捉えられていたものが所有の〈場〉へと転換すると考えられる。

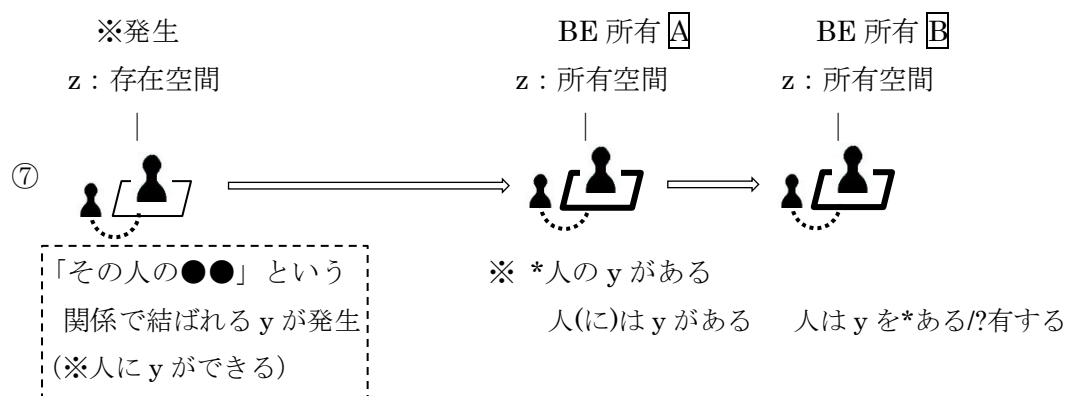


図 3.13 分離不可能所有【血縁・人間関係】：発生から BE 所有への転換

⑦の「BE 所有」で※を付した「*人の y がある」は，日本語では用いられない（*山田さんの娘がある）が，他の言語では用いられる。例えば，ヒンディー語では（15）のように用いられる。

(15) raam=kaa ek beTaa hai.

ラーム=GEN 1 息子 存在する

(ラームには息子が一人いる) (今村 3009 : 24 グロス是一部簡略化)

各拡張パターンの BE 存在, BE 所有の日本語の例を下の表に示した。

表 3.7 所有のタイプと存在から所有への拡張：日本語の場合

	BE 存在		BE 所有（所有 A）	BE 所有（所有 B）
構文			参照点構造 自動詞構文	場焦点化 他動詞構文
拡張パターン（B） <分離可能所有>				
①所有者（場） -所有物	この教室にテレビがある	この教室にはテレビがある	この教室（に）はテレビがある	（この教室はテレビを有する）
②所有者（人） -所有物【所持】	山田さんの所にペンがある	—	山田さん（に）はペンがある	（山田さんはペンを有する）
②所有者（人） -所有物【所有】	—	—	山田さん（に）は車がある	（山田さんは車を有する）
<分離不可能所有>				
③全体・部分（物）	（この鍋に取っ手がある）	—	この鍋（に）は取っ手がある	（この鍋は取っ手を有する）
④全体・部分（人）	（人間に足が 2 本ある）	—	人間（に）は足が 2 本ある	（人間は足を 2 本有する）
⑤主体・側面（物）	（この木に弾力がある）	—	この木（に）は弾力がある	（この木は弾力を有する）
⑥主体・側面（人）	（山田さんに力がある）	—	山田さん（に）は力がある	（山田さんは力を有する）
拡張パターン（C） （発生）				
⑦血縁・人間関係	（山田さんに子どもができる）	—	山田さん（に）は子どもがある	（山田さんは子どもを有する）

次に拡張パターン (A)「獲得/保持という行為からの拡張」と HAVE 所有のつながり, そして BE 所有のつながりを見る。これを示すには事態の把握にかかわるもう一つの人間がもつ参照点能力という重要な認知能力を考えなければならない。参照点能力について, 山梨 (2000) は次のように述べている。

一般に, われわれが何かをターゲットとして探索する場合, 常に見つけているターゲットとしての対象が直接的に把握できる保証はない。実際には, そのターゲットに到達するため参照点 (すなわち, 対象に到達するための手がかり) を認知し, この参照点を経由して, 問題のターゲットとしての対象を認知していくのが普通の探索のプロセスである。(同上 : 86)

参照点能力にかかわる認知プロセスは, 次の図のように規定される。C は認知主体で, R が

参照点, T がターゲット, 大きな楕円の D が参照点によって限定されるターゲットの支配領域である。破線の矢印はメンタル・コンタクトを示している。

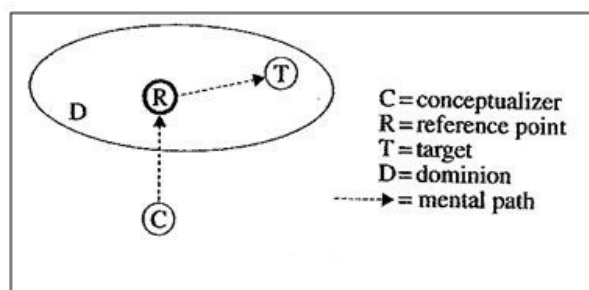


図 3.14 参照点構造 (Langacker 1993 : 6 図 1 より)

このような参照点能力に依拠した認知プロセスは, 存在文においては, まず〈場〉にアクセスし, その中を心的探索し, ターゲットである存在物に至ると考えられる。そのメンタルコンタクトは所有になっても同じである。違いは, 「場 (z) が, そこに対象 (y) が存在することによって特徴付けられると把握される」という認知プロセスによって概念転換が起こることである。そして, さらに〈場〉が焦点化され, 第一の際立ちが与えられ, モノに第二の際立ちが与えられると, 所有の概念は場焦点化他動詞構文として言語化される (所有 B)。下図の右二つは本論文が考える通常の分離可能所有の参照点構造を示している。

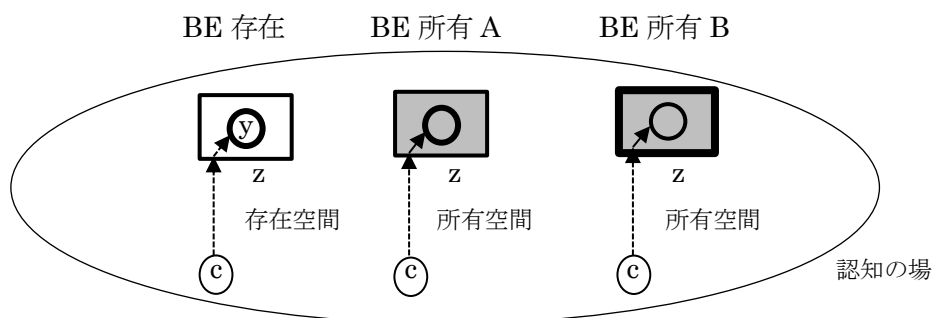


図 3.15 存在と所有のスキーマにおける参照点構造

Langacker (1993) は, ‘N1’s N2’ で表される所有の概念は参照点構造の認知プロセスによると指摘した。これ自体は日本の「N1 の N2」にも当てはまる汎用性のある認知プロセスである。そして参照点構造と認知的な際立ちの対応について, ターゲット (T) がトラジェクター (Tr : 第一の際立ち) となり, 参照点 (RP) がランドマーク (Lm : 第二の際立ち) となるとした。その上で, have 所有文では, 通時的な統語関係により, この対応関係が反転するとした。この通時的というのは先に紹介したように HAVE 所有は ACTION スキーマから拡張したことを意味していると思われる。

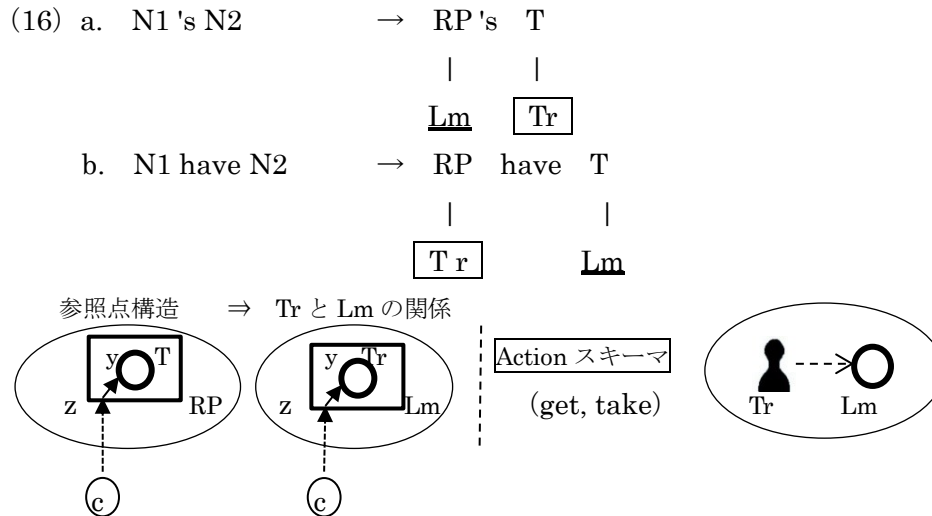


図 3.16 参照点構造と Tr と Lm の非対称関係

ここに英語のような HAVE 言語特有の事情が生まれることになる。所有の元々の概念は参照点構造で捉えられる概念であるにもかかわらず、英語の「主語＋動詞＋目的語」という統語構造に合わせる流れの中で、トラジェクターとランドマークの選択が反転し、行為者を典型とする人と対象の非対称関係の把握に置き換えられたと見られる。つまり、日本語のような BE 言語は参照点構造を保持したまま、〈場〉は〈場〉として主体的な事態把握における図地反転によって概念を転換したのに対して、英語は行為者中心の統語構造の枠組みの中で置き換えられ、〈場〉に主語という地位を与えたと考えられるのである。池上(2006)も BE 言語と HAVE 言語の特徴として次のようにまとめている。

〈所有〉は〈人間〉という項に焦点を当て、それを顕在化している概念である。〈所有〉の関係が〈存在〉の表現形式で捉えられるという場合は、〈人間〉は〈(あるものの存在する) 場所〉としての把握にとどまる。文法的には〈人間〉を表す項は副詞的な機能の句の中にも含まれていて、文全体を統括するような働きは託されていない。

一方、〈HAVE 言語〉を特徴付ける〈所有〉の表現形式においては、〈人間〉を表す項が主語として前景化され、HAVE という他動詞を介して所有を表す項を直接目的語としてとり、〈所有者〉としてそれを直接支配する主体という構図で捉えられていることになる。(同上：166-167)

日本語にも ACTION スキーマから所有に拡張した動詞として「持つ」がある。表 3.7 に示した所有 B (他動詞文) の日本語でも、① (図 3.10) と③ (図 3.11) のタイプ以外は「持っている」と言うことができる。しかし、「持つ」は英語の HAVE のように高度に文法化する

ることはなかった。これが BE 言語である日本語の特徴である。しかし、本論文は所有の概念が「ある」「いる」そして「もつ」で表現できるということで終わるものではない。確かに所有を表す動詞としては「ある」「いる」そして「もつ」があることは間違いない。しかし、所有の概念が事態把握の鋳型となり、その鋳型を通じて静的なものから動的なものまで広い範囲にわたって外界が切り取られ、言語化されるというのが本論文の仮説である。次節ではそれを検証するための分析の枠組みとして新しい事態認知モデルを示す。

3.5 本論文が提案する事態認知モデル

前節で示したイメージスキーマを縦に並べて表示したのが図 3.17 である。存在では対象 (y) に際立ちがあり、場 (z) は背景化している。所有 A では存在から所有の概念に転換しているが、〈場〉は背景化しており、際立ちを与えられた対象が主語位置に来て、自動詞構文を作る。所有 B では焦点化された〈場〉に第一の際立ちを与えられ主語位置に来て、第二の際立ちを与えられた対象がヲ格をとり、他動詞構文を作る。この静的な事態把握を基本単位として、そこに原因事象が読み込まれる動的な事態把握のモデルを考える。〈場〉が、そこに存在するモノによって特徴付けられることによって所有の概念へと転換するという部分をコアとしてもちながら静的な事象から動的な事象へと拡張するモデルである。原因事象とは、その〈場〉に対象が存在することを引き起こす原因である。〈発生〉が原因として読み込まれる場合を示したのが図 3.18 である。対象 (y) に際立ちがあれば、「y が z に〈発生〉」という自動詞構文になる。一方、場 (z) が焦点化され、所有 B になるとどうなるか。それは〈場〉(z) が対象 (y) を所有していない状態から所有する状態へと変化するという事態の把握になることを意味する。このような事態把握によって「z は y を〈発生〉」という場焦点化他動詞構文が作られると考える。ここで重要なことは、客観的に同じ〈発生〉事象であるにもかかわらず、モノの発生に注目するのか、それとも発生する〈場〉に注目するのかによって出力される構文が変わるということである。図で点線の楕円で示す部分が、本論文が注目する場焦点化他動詞構文を作りだす事態把握である。

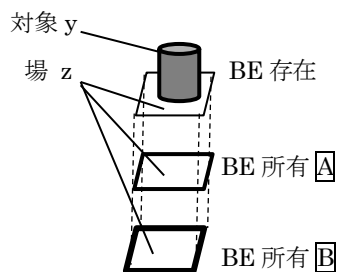


図 3.17 基本事象

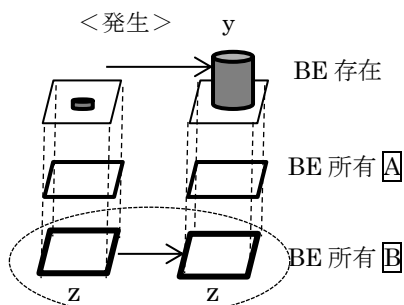


図 3.18 発生事象の読み込み

同様に対象物の存在を引き起こす原因事象として〈移動〉事象が読み込まれる場合を示したのが図 3.19 である。対象に際立ちが当たれば、「y が z に〈移動〉」という自動詞構文

が作られる。一方、図の下段に示したように、〈場〉が焦点化し、〈場〉が対象を所有していない状態から所有する状態へと変化したと把握されれば、「zはyを〈移動〉」という場焦点化他動詞構文が作られるのである。

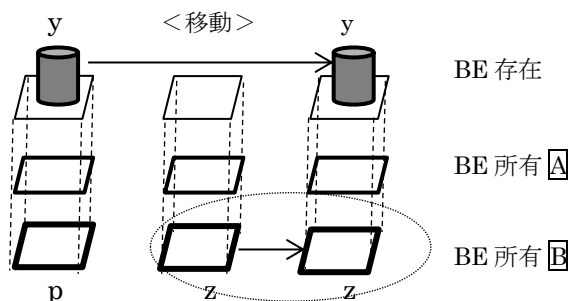


図 3.19 移動事象の読み込み

図 3.20 の上段に示した使役変化の事象が一つの動詞述語が表しうる最大の事象である。この場合、概念化者（話者）は使役変化全体に焦点を当てて、「xがyをzに〈移動〉 / 〈発生〉という」使役変化他動詞構文を作ることできるし、変換事象の部分、つまり〈移動〉や〈発生〉の部分だけに焦点を当てることもできる。そうすれば、使役主ではなく、対象に際立ちが与えられるので「yがzに〈移動〉 / 〈発生〉」という変化を表す自動詞構文が作られる。これがいわゆる使役起動交替と呼ばれる自他交替である。図の左上に示したように、使役起動交替は「スル側からの視点」による事態把握である。それとは反対の「受ける側からの視点」による事態把握にも注目してみる。それが存在の原因事象を読み込むという視点である。これは図の下に示したように、「ナル側からの視点」と結びつくことによって、使役主のエネルギーを受けて「対象がどう変化したか」ではなく、「場がどう変化したか」に注目する事態把握になるのである。この事態把握によって作りだされる場焦点化他動詞構文にはどのようなものがあるのか。それを第4章で明らかにしたい。

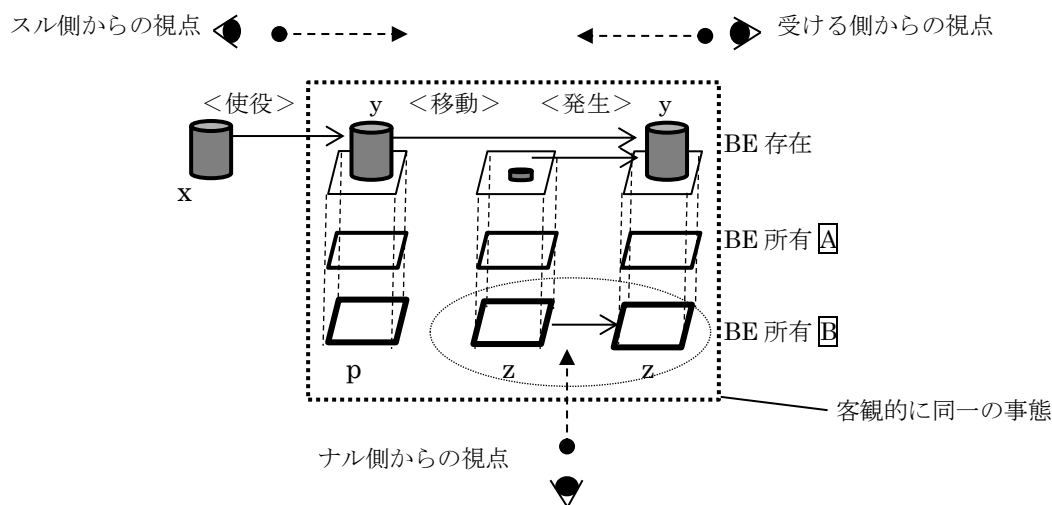


図 3.20 使役事象と移動/発生の焦点化

第4章 際立ちが与えられた〈場〉が作り出す構文：パート1

本章では、3.5節で提案した新しい事態認知モデルに基づいて、場焦点化他動詞構文にはどのようなものがあるのかを、読み込まれる原因事象別に見ていく。基本単位である静的な存在と所有から始めて、発生事象、消失事象、存続事象、移動事象の順番で所有の概念が鋳型となる事態把握と構文を見ていく。次にそれまでの分析を踏まえて、移動事象が組み込まれている動詞として単他動詞と複他動詞のペアを取り上げて分析する。その後、状態と所有のつながりを論じ、対象の状態変化が〈場〉の変化として把握される現象を明らかにする。状態変化の事象の分析を踏まえて、本論文が「有対自動詞の両用動詞化」と呼ぶ言語現象について分析する。そして、最後に「介在性をもつ他動詞文」を分析することによって、使役変化の事態把握である「スル側からの視点」と、場焦点化他動詞構文を生み出す「受ける側からの視点」とが融合して構文を作り出していることを示す。

4.1 存在と所有の関係

4.1.1 分析する動詞とイベントスキーマ

この節で扱う構文は、存在と所有の概念が「ある」(いる)以外の動詞で言語化されるものである。「ある」と「ない」のイベントスキーマは次のように示される⁸²。

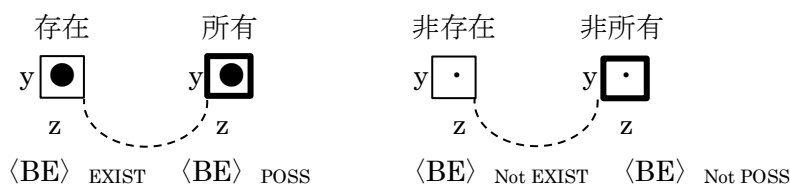


図 4.1 存在と所有のイベントスキーマ⁸³

第3章で示したように存在と所有の関係は、外界認知における図地反転がベースにあり、存在を表す「zにyが<BE> EXIST」(自動詞構文)から、所有A「zにはyが<BE> POSS」(参照点構造自動詞構文)へ、さらに〈場〉に際立ちが与えられることによって、所有B「zはyを<BE> POSS」(場焦点化他動詞構文)が生成されることが考えられる。日本語においては存在と所有を表す動詞が「ある」または「いる」であることは疑いようのない事実であるが、存在の概念をベースにその存在の内容や様態に応じてさまざまな意味が付加された語があることを示す。取り上げる動詞は状態を表す他動詞と呼ばれる動詞である。それとのつながりで存在物の多さを表す自動詞との構文上の対応関係も分析する。

⁸² イベントスキーマに用いられる図と矢印の意味については3.2節の説明を参照されたい。

⁸³ EXIST：存在の概念，POSS：所有（POSSESS）の概念を意味している。Notはその否定を表す。

4.1.2 状態を表す他動詞と文脈に埋め込まれる〈場〉としての人

最初に取り上げるのは、状態を表すとされる他動詞である。山岡（2000：205-271）の状態動詞の分類よりヲ格名詞をとる動詞を抽出して（表 4.1 の所有 B に挙げた動詞）、本論文で提案する所有 A との対応を示した表を下に示す⁸⁴。山岡は「包含・所有関係」という下位分類を関係動詞にのみ設定しているが、すべての動詞が所有の概念で対応しているというのが本論文の分析である。

表 4.1 状態を表す動詞と所有 A・B との関係（#：ニ格を伴わず使われる語）

分類	下位分類	所有 A 「z には y が〈BE〉 POSS」	所有 B 「z は y を〈BE〉 POSS」
①属性動詞	嗜好・要求	#好きだ, #嫌いだ, #欲しい	好む, 嫌う, 欲する,
②所要動詞		要る, 不要だ, #必要がある (時間・費用が) かかる	要する
③関係動詞	包含・所有 関係	(ある)	有する, 含む, 誇る, 擁する
	記号関係	(ある)	表す, 意味する, 示す

①の属性動詞から見てみる。これは嗜好や欲求という心的な傾向・状態が〈場〉としての人 (= z) の中に存在することを意味する。本論文の規定 (3.4.2 節) に従えば、その〈場〉にそれが存在することがその人を特徴付けることになる。と把握されて所有の概念に転換する。所有 A は「z に (は) y が〈BE〉 POSS」という自動詞構文を作るのが基本だが、日本語では「z は y が〈BE〉 POSS」という形容詞述語の構文を作ると考える⁸⁵。「z に」のようにニ格名詞（与格あるいは位格名詞句に相当するもの）が現れるのか、「z は」のように題目マーカーだけが現れるのか、あるいは「z には」のように両方が組み合わせられるのかは、個別言語的な現象であり、主語位置には参照点となる〈場〉に相当するものが来るという点では共通している。例えば、スペイン語では所有 A に相当すると考えられる文には与格が現れる（例文 1）。本論文では、与格は根源的には位格（場所）に還元できると考えるので（3.4.3 節）、このような他言語の現象も、存在の概念と所有の概念のつながりを支持していると言える。

- (1) Me gusta Juan
私 (与格) 好く ホワン

⁸⁴ 山岡（2000）が挙げた動詞でヲ格名詞句をとる動詞はこの表では所有 B の欄に入っているが、一部省略した。表の「分類」「下位分類」は山岡の分類と同じである。所有 A に挙げた語には、動詞だけでなく形容詞も含む。なお、「ある」を挙げた箇所は、意味的に対応する動詞がなく、動詞「ある」を使って説明的に用いることを示している。

⁸⁵ このような「～は+形容詞述語」が所有の概念をもつことについての分析は 4.7 節で行われる。

- (2) a. 私は 花子が 好きだ。
b. 太郎は 花子を 好いている。

- (3) a. 私は ジュースが 欲しい。
b. 太郎は ジュースを 欲している。

次に②の所要動詞を見る。日本語では「(時間・金) かかる」と「要る」が所有 A, 「要する」が所有 B に対応する動詞である。所有 A は「～に (は) ～が V」または「～は～が V」で表現される⁸⁶。

まず「かかる」について見てみる。「対象物のある場所にカケル」に対応する「ある場所に対象物がカカル」という元々の意味が抽象的な時間や費用に拡張したものである。対象物が「物理的にカカル物」から「その〈場〉に常にカクタ状態として存在するモノ」へ、そして「必要なモノ」へと拡張したと考えられる。したがって、「z に y (時間・金) がかかる」はこの拡張した意味になった段階で、「〈場〉(z) が, y (時間・金など) が必要なモノとして存在することによって特徴付けられる」という事態把握によって、所有 A になったと見なすことができるだろう⁸⁷。

「z に～がかかる」の〈場〉(z) には人・物名詞 (4a) が来る場合と行為を表す名詞または「～するには」「～するのに」のように動詞が来る場合 (4b,c) があるが、人・物の場合も何らかの行為が含意されている (4a の cf.)。その点で「かかる」の〈場〉は行為志向だと言える。また、〈場〉は二格だけでなく、「(～から) ～まで」のように範囲を示す場合もある (4d)。

- (4) a. {子供／ペット／教材} にお金がかかる。
cf. {子供を育てる／ペットを飼う／教材を買いそろえる} のにお金がかかる。
b. {結婚式／結婚式をあげる} にはお金がかかる。
c. {原稿のチェック／原稿をチェックする} のに時間がかかった。
d. {新しい環境に慣れる／結果が出る} まで時間がかかりそうだ。

次に「z に y が要る」を見てみる。「要る」は「入る (いる)」と同源だという説がある⁸⁸。

⁸⁶ 「必要」の意味を表す動詞の二つの項がどのような格で示されるかは、言語によっていくつかのパターンに分かれるが、「～に～が」のように「与格」と「主格」(または絶対格)の組み合わせとなるのは決して特異なことではない。角田 (1991 : 95, 107-108) では、「要る」が所属する「感情」のカテゴリー(「好き」「欲しい」などを含む)について、「与格+主格」の組み合わせが現れる言語として、ロシア語、アルバ語、スペイン語、カンナダ語(インド)などを紹介している。

⁸⁷ 例えば「{子供／修理}にお金がかかる」なら、{子供／修理}という〈場〉がお金が＜必要なモノ＞として存在することによって特徴付けられる、と把握される。

⁸⁸ 『明鏡国語辞典 2 版』では「要る」と「入る」は別見出しだが、「要る」の解説で同語源であると指摘している。また、『日本国語大辞典 2 版』では「いる」の見出しで「入る」と「要る」の両方を扱っているが、語誌では別語の可能性も示唆している。「派生の道筋が想定しにくく、特に現代語において、この

本論文も同源と考え、「要る」と「入る」のつながりを因果関係に基づくメトニミー・リンクによると分析する。図 4.2 に示したように、「y が z に入る」ということは、「z に y が必要である」ことを前提に、欠けている部分（＝必要要素）に必要なものが「入る」という因果関係になっていると考えるのである。

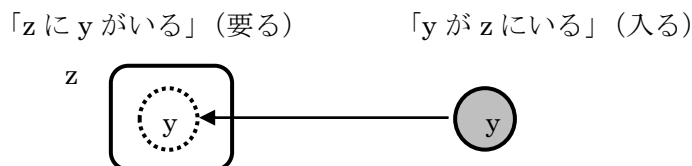


図 4.2 メトニミーによる「入る」と「要る」のつながり

つまり、「(z において) y が欠けている」ことの裏返しは「(z において) y が要る」ということであり、図に示したように充足された状態を四角に見立てれば、「必要要素」とはその四角の内部の欠けた部分を指しているのである⁸⁹。このようなメトニミーを仮定すると、「かかる」が「物がかかる」から「金がかかる」に拡張した段階で所有 A になったように、「入る (いる)」も「要る」に拡張した段階で、「〈場〉」が、そこに〈必要要素〉が存在することによって特徴付けられる」と把握され、所有 A になったと考えられる。

「z に～が要る」の〈場〉(z) には「かかる」と同様、人・物名詞・行為名詞、そして「～するには」「～するのに」が来るが、モノと〈場〉の二者関係は少し異なる。「かかる」の〈場〉は基本的に「行為」が〈場〉として扱われている。一方、「要る」は基本的に「人」が〈場〉として扱われている (5a,b) ⁹⁰。そしてその場としての人が拡張すると、一般人称となり、背景化する (5c-e)。「z に時間/費用がかかる」は上述のように、行為そのものが〈場〉と見なされており、その行為に対して「時間が必要だ」と述べる。一方、「要る」は、基本的に「人」が〈場〉と見なされている。したがって、(5d-e) に現れる目的の「～に」は〈場〉(z) ではなく、あくまで〈場〉は人が背景化し一般人称化していると考えられる。結果的に時間・費用が必要だということを述べていても、このように事態の捉え方が異なる。特定の個人を指しているのか、総称的に述べているのかは文脈によって判断される。その点で、背景化した〈場〉(＝人)は文脈に埋め込まれていると言えるだろう。

(5) a. 彼にはあなたの助けが要る。

意以外はほとんど「はいる (這入)」という語形に交替していることからすると、別語である可能性が考えられる。また、「要る」は訓読系の文献には見られず、この点でも「入る」とは異質である。」

⁸⁹ これは「穴がある」という表現と共通したものがある。本来「穴」とはその部分に何もない状態である。ところが「穴」を存在するものとみて「穴が『ある』」と言える。「必要要素 (＝欠けている部分) がある」と見る発想と共通している。

⁹⁰ 「子供にお金がかかる」は「子供に対して何かすることにお金が必要だ」という解釈である。一方「子供にお金が要る」は「子供自身に〈必要要素〉が存在する」という意味で、「子供自身が何かするのにお金が必要だ」と「子供に対して何かするのにお金が要る」という二つの意味がある。

- b. 子供にそんな高価なブランド物が要るとは思えない。
- c. 告白するには、けっこう勇気が要る。(勇気が要るのは、告白する人)
- d. 新しく事業を始めるにはまとまったお金が要る。
- e. この場所はだれでも利用できる。ただし、利用する {には／場合は} 所有者の了承が要る。

所有 B の「z は～を要する」は、基本的に「要る」の用法に対応するが、(6) に示したように文体的に硬いという特徴がある。なお、今後言語資料からの引用文に下線がある場合は、特に断らない限り、引用者によるものである。

- (6) a. 老いに向かうとはこういうことなのか、と理解できるために、人間は五十年の歳月を要するのだろうか。(BCCWJ[1])
- b. 学校東隣にある別の市有地は13年度に売るはずが、土壤汚染調査を要するため見通しが立たない。(毎日新聞 2014 年 3 月 17 日)
- c. 戦争は莫大な費用を要するというのが、『孫子』の考え方の基本です。(BCCWJ[2])
- d. 2 センチの短針を使う手作業は繊細さが求められ、さらに他の出展作品の制作、主宰する教室の生徒の指導と、多忙な合間に縫い進めた結果、完成まで 10 年を要したという。(毎日新聞 2013 年 9 月 18 日)
- e. 遅れの要因としては、「県や避難元との調整に時間を要する」という市町村が目立つが、(…略…) (毎日新聞 2014 年 8 月 10 日)

所有 A には「要る」とは別に連体修飾句/節を伴う「～必要がある」という表現もある。これは「①属性動詞」の所有 A と同様「二格」は現れず、「z は y が〈BE〉POSS」という構文を作る。

- (7) a. {彼は/*彼には} すぐ入院する必要がある。
- b. この {自動車は/*自動車には} 修理の必要がある。

英語の ‘want’ が「欲しい」という意味と「欠けている」という意味の両方を持つことは、「入る (いる)」から「要る (いる)」へとメトニミー的に拡張するという見方の妥当性を示していると言える。‘want’ は語源的には「欠けている」から「必要である」へ、そして「欲しい」に変化したという⁹¹。

- (8) a. She wants courage. 彼女には勇気がない

⁹¹ 『ジーニアス英和大辞典』の語誌情報より。例文も同辞書より。以下同辞典からの引用は「ジ英和」と略記する。

- b. This dirty floor wants a scrub. この汚れた床はごしごし磨く必要がある
 c. This CD player wants repairing この CD プレーヤーは修理の必要がある
 (ジ英和)

ところで、日本語の「欠く」は、英語の ‘want’ ‘lack’ と違って、純粹に状態を表すのではなく元々は変化動詞であり、それが拡張して状態動詞として用いられるようになったと推察される。したがって、本論文では「欠く」を 4.3 節で扱う。

最後に③の関係動詞を見てみる。ここで所有 A に分類される動詞は「ある」だけで、②に見られたような所有 B に対応する形態をもつ動詞はない。また、所有 B の「有する」は漢語的で文体が硬いため、「ある」を用いた表現のすべてが「有する」で表現できるわけでない。本論文では「含む」は元々使役変化（発生/位置変化）他動詞であると考えられること、また他動詞の形態に「含む」と「含める」の二つがあることから、その考察を 4.6 節に譲る。ここでは包含・所有関係の動詞から「誇る」と「擁する」を、記号関係の動詞から「表す」と「示す」を取り上げる。

「誇る」と「擁する」は「ある」という概念に何らかの情報が付加している。「誇る」は「ある」に「長所として認められるもの」⁹² という情報が、「擁する」は「自分の指揮（勢力）の下に」⁹³ という情報が付加される。つまり、あるモノがそのような特徴をもって、あるいはそのような状況下で存在することが、その場を特徴付けるものとして認められることによって、所有の概念に転換しているのである⁹⁴。(9) (10) の (a) と (b) (c) がそれぞれ所有 A と B に対応している。(a) の [] の内容は (b) の他動詞文で含意される意味を自動詞文のほうに組み込んだものである。

- (9) a. その君主には [自分の指揮（勢力）の下に] 強大な権力があり、
 歯向かうものは容赦なく処罰された。
 b. その君主は強大な権力を擁し、歯向かうものを容赦なく処罰した。
 c. 工事が進む県立球場は、(…略…) 東京ドームとほぼ同じ広さのグラウンドに、
 観客数 3 万人規模のスタンドを擁する。(読売新聞 2009 年 1 月 30 日)

- (10) a. この会社には [長所として認められる] 100 年にわたる伝統がある。
 b. この会社は 100 年にわたる伝統を誇る。
 c. 県内トップクラスの解像度を誇る口径 65 センチの反射望遠鏡を備えている。
 (読売新聞 2009 年 2 月 28 日)

⁹² 『明鏡国語辞典 2 版』の語釈より。以下同辞典からの引用は「明鏡国語」と略記する。

⁹³ 『新明解国語辞典 6 版』の語釈より。以下同辞典からの引用は「新明解」と略記する。

⁹⁴ 坂野 (2004) が「対応する能動的他動詞がない所動詞」として挙げた「帯びる」もここに分類することができるだろう。ただし、元々は発生（およびそのメタファー）を表す概念から「性質・成分・感じ・傾向をもつ」という静的な状態を表す用法へと拡張したと考えられる。(i) 会場は熱気を帯びている (ii) 頭部は全体に丸みを帯びている。

4.1.3 語る視点

事態把握が変わることによって存在から所有の概念に転換することは、単に自動詞構文か他動詞構文かという述語の形態に影響を与えるだけではない。事態の把握が変わるということは、「語る視点」が変わるということである。したがって、上の(9)のように複文の場合、(a)の「所有A」と(b)の「所有B」とでは語る視点が異なる。(a)では〈場〉としての人は背景化しているため、主節の出来事も受身文で語られるほうが自然である。一方(b)では〈場〉としての人は焦点化されており、主節でもその人を行為者とする文になっている。このような事態の把握の違いが「語る視点」にも影響を与える現象は、このあとのすべての場焦点化構文に言えることである⁹⁵。

「擁する」は人だけでなく、組織、さらには場所そのものが所有主体となることもできる。「～は{専門家・会員・人口}を擁する」などの用法がそれに当たる。下の例ではいずれも主語名詞句あるいは連体修飾節によって修飾される名詞句の特徴付けになっていることが確認できる。所有の概念がもつ〈場〉の特徴付けという事態把握は、語られる物を談話に登場させる題目としての〈場〉の提示と親和性が高いと言えるだろう。その点から見れば、〈場〉が焦点化されて作られた場焦点化他動詞構文は、その場が主題として文頭に位置するだけでなく、連体修飾節にもよく表れると言える。

- (11) a. MDRT (Million Dollar Round Table「百万ドル円卓会議」という世界 63 か国に約 2 万 3 千人の会員を擁する国際団体がある。(BCCWJ[37])
b. イラン 1. 概説 (1) 世界的原油供給地である湾岸地域から中央アジアに続く重要な位置にあり、5,000 万人を超える人口を擁する大国である。(BCCWJ[38])

- (12) 1812 年の 8 月に入って、圧倒的な勢力を誇るナポレオン軍はスモレンスクを落とし、9 月になってモスクワに入城した。(BCCWJ[40])

日本語では、特に書き言葉で次のような長い連体修飾節が現れるのは、英語などの「SVO」言語とは異なり、「SOV」言語という統語上の要請があるからだと言明されることが多い。英語なら、いわゆる「頭が重くなる」ことを避け、外置されるような修飾句が、日本語では文頭に長々と配置されることが許されるのは、まず語りのための〈場〉を設定するといことが日本語母語話者に好まれる事態把握であることと無関係ではないと考えられる。

- (13) 例えばニューヨークタイムズ、ワシントンポスト、ウォールストリートジャーナルに加えて、200 万部を超える部数を誇り、ウォールストリートジャーナルを抜いてアメリカ最大の新聞となったUSA トゥデイは、ホワイトハウス側から時折、内々の情報提供を受ける。(BCCWJ[41])

⁹⁵ これは早津(1991)で指摘された使役態の現れ方と共通した認知的基盤を持つと考えられる。

4.1.4 動作主主語が認められる場合

③「関係動詞」の下位分類の「記号関係」に属する「表す」「示す」は、記号とその意味の二者関係を表すものである。ここでは「容器 → 記号（形式）」「中身 → 意味」という容器のメタファーが働いている⁹⁶。したがって、意味が記号の中に存在することは、見方を反転させれば、記号が意味を所有するという捉え方が自然にできる。ここで「記号」と言うのは、言葉だけでなく絵、音楽、態度も含む。「ある」「ない」のほうはややぎこちない印象を与えるが、所有 A と B はそれぞれ各例文の (a) (b) に対応している。

(14) a. その言葉には感謝の気持ちがある。

b. その言葉は感謝の気持ちを表す。

(15) a. 彼の態度には謝罪の気持ちがない。

b. 彼の態度は謝罪の気持ちを示していない。

しかし、言葉という容器に存在する中味は自然にそこに存在するわけではなく、有情者がその記号に中身を“入れる”(＝記号化)行為が前提になっている。ここでは素朴な言語コミュニケーションモデルに従って、伝え手が意味をエンコード (encode) し、受け手がそれをデコード (decode) して意味を理解すると考える。自然現象で生じた記号を解釈するという状況は想定していない。したがって、本論文の分類では使役変化事象がベースになって、その変化事象のみに焦点が当たって言語化されるパターンに該当する。これは、後の 4.5 節でⅡ型の場合焦点化他動詞構文と命名されるものである。詳細は 4.5 節に譲り、下に型と例文を挙げておく。三項述語の「x が y を z に～」と二項述語の「x が y を q で～」がある。(16a) では、[1]の〈場〉である容器(言葉)が焦点化され、[2]で主語位置に来ている。(16b) では、[1]の道具・手段を表す名詞句が焦点化され、[2]で主語位置に来ている。[3]は[1]の使役変化他動詞文の「対象」に焦点を当てた自動詞文または受身文である。

(16) a. 「x が y を z に～」

[1] 太郎が 感謝の気持ちを その言葉に 表す。

[2] その言葉は (太郎の) 感謝の気持ちを 表す。(=14a)

[3] 感謝の気持ちが その言葉に 表れる。

b. 「x が y を q で～」

[1] 太郎が 謝罪の気持ちを 態度で 示していない。

[2] 彼_iの態度は (太郎_iの) 謝罪の気持ちを 示していない。(=15b)

⁹⁶ 「容器のメタファー」とは、実体のないものを具体的で形のある物体に喩える「存在のメタファー」の一種で LANGUAGE EXPRESSIONS ARE CONTAINERS のように容器に見立てるメタファーである。(谷口 2003 : 26)

[3] (太郎の) 謝罪の気持ちが 態度で 示されていない。

(17a) は「表現する」という動詞が使われているが「表す」と同様に分析できる。「x が y を z に〜」の型である。(17b) は場焦点化他動詞構文で、(17c) は使役変化他動詞文の物に焦点を当てた自動詞構文である。

- (17) a. 清高が、自分の意志を言葉に表現出来るようになるまで、いったいどれ程の歳月がかかったとお思いですか。(新潮文庫 100 冊[6])
- b. しかしその声はものやわらかで今までの永い沈黙が重荷になっていることを表していた。(新潮絶版 100 冊[5])
- c. 彼女は、(…略…) ポツソリと、答えた。驚きと、同情は、言葉に表われたが、それは、特別のものではなかった。(新潮絶版 100 冊[6])

以上で「ある」という動詞以外で言語化される所有の概念の考察を終わる。存在しないことを意味する「ない」に対応する所有 A の自動詞 (和語動詞)⁹⁷、および B の他動詞はない。「欠ける」「欠く」は元々変化を表す動詞であり、それが状態を表すようになったと考えられるため 4.3 節の「消失」事象が原因として読み込まれる場合として取り上げる。

よく指摘されることだが、日本語は英語と比べて、純粋に状態を表す動詞の数が非常に少ない。「ている」が付かない動詞は「ある」「いる (居る)」「⁹⁸要る」の三つである⁹⁹。これは日本語が「ナル型言語」であり、今の状態はある変化の結果であるという外界のとらえ方が強く影響していると考えられる。そこで、4.2 節以降では、ある対象物が存在する原因として「出現・発生」「存続」「移動」の事象が読み込まれて作り出される構文、そして非存在の原因として「消失」の事象が読み込まれる構文を見ていく。

4.1.5 存在物の多さを表す自動詞

この節を終わる前に、存在の構文として取り上げておかなければならないものがある。それは存在物の多さを表す自動詞である。「富む」という動詞は所有 A の構文も所有 B の構文も作らない。そのかわりに、状態を表す特別な構文を作る。存在の内容や様態の情報が付加された自動詞や他動詞があり、場焦点化構文を作る一方で、単に存在するモノが多いという情報が付加された「富む」は所有の概念をもつ場焦点化構文を作らない。

⁹⁷ 第 4 章では主に和語動詞が分析の対象となる。漢語サ変動詞についてはやや統語的な振る舞いが異なるので、4.9 節で取り上げて論じることにする。

⁹⁸ 共通語では「ている」は付かないと考えられる。関西方言では「いる」という動詞が「いてる」「いとる」という形で使われる。これは「いる」に「ている」が付加した形の縮約形と見られる。しかし、非縮約形の「いている」は用いられない。

⁹⁹ 「～すぎる」という複合語は、形容詞に接続する場合、「高すぎる」となり、「高すぎている」とは言えない。しかし、これは「すぎる」という動詞の概念に起因するのではなく、接続する形容詞が元々状態を表すからだと考えられる。動詞が接続する場合は「トラックは荷物を積みすぎている」のようにテイル形になる。

(18) 所有 A

- a. *彼の話には示唆が富む。 cf. 彼の話には示唆（するもの）が多い。
b. *この土地には栄養が富む。 cf. この土地には栄養が多い／豊富だ。

(19) 所有 B

- a. *彼の話は示唆を富む。 cf. 彼の話は示唆を多く含む。
b. *この土地は栄養を富む。 cf. この土地は栄養を多く含む。

(20) 「二格名詞」で存在・所有対象を示す状態表現¹⁰⁰

- a. 彼の話は示唆に富む。
b. この土地は栄養に富む。

日本語の「富む」に対応する英語として ‘abound’ がある。Anderson (1971) は形容詞の ‘abundant’ も含めて、(21) のような構文交替を紹介している。どの文も「野生の生き物がこの辺りには多い」という意味を表している。存在物が主語位置に来る (c) の構文は ‘abound’ という動詞を用いて ‘Wild life abounds on the farm’ と言うこともでき、どちらも存在を表す構文だと考えられる。それに対して、(a) と (b) は〈場〉が主語位置に来ている。注目すべきは、前置詞の ‘with’ と ‘in’ である。英語の SWARM 型の場所格交替を踏まえれば¹⁰¹、‘with’ が現れる (a) が所有の意味概念によるもので、(b) の ‘in’ は日本語の「に」が表すのと同様の機能を担っていると推察される。英語も目的語を直接とる他動詞構文を作らないので、日本語の所有 B に相当するものはないと言える。

(21) a. This area abounds with wild life.

b. This area abounds in wild life.

c. Wild life is abundant in this area. Anderson (1979 : 90)

今後の議論のためにここで指摘しておかなければならないことが二点ある。一つは、「富む」のような意味特徴をもつ動詞の構文交替である。英語は SWARM 型の構文交替が比較

¹⁰⁰ 所有量の多少を述べる述語は対象を二格で表示するものがあり、「富む」「恵まれる」「乏しい」「欠ける」などが挙げられる(益岡・田窪 1987 : 44)。量の多さを述べる「恵まれる」は「富む」と同じ振る舞いをする。「欠ける」と「乏しい」は、所有 A の構文と二格名詞で対象を表す構文の両方が成立する。「乏しい」は形容詞なので当然所有 B の構文を作らない。所有 A の「欠ける」に対応する所有 B の動詞には「欠く」があるが、このペアは次節で取り上げて考察する。

¹⁰¹ SWARM 型場所格交替とは、自動詞文の場所句が主語位置に来て、元々の主語が with を伴って斜格名詞に格下げされる交替現象のことである(Levin1993)。英語では次のように構文が交替するが、日本語はほとんどの場合同じ動詞では交替しない。(i) a. Bees are swarming in the garden. b. The garden is swarming with bees. (ii) a. ミツバチが庭に群がっている。 b. *庭はミツバチで群がっている。cf. 庭はミツバチでいっぱいだ。

的広範囲に成立するのに対して、日本語は生産性に乏しい。この交替の詳細は 5.1 節に譲るが、要点だけ述べれば、英語はモノに焦点を当ててその動きや現象を述べる文が、簡単な統語上の操作で「その場がそのような動作をするモノ、現象を起こすモノでいっぱいだ」という意味を表す文と交替する¹⁰²。それに対して、日本語は同じ動詞では交替できず、「～に～がいっぱいだ」「～に～が多い」のように形容詞述語で表現するか、「満ちている」や「集まっている」のような別の動詞、または「うようよ (いる)」や「うじゃうじゃ (いる)」のような擬態語などで迂言的に表現するしかない。「富む」に所有 A が存在しないのも、そのような日本語の特徴を示す一つの例だと言える。

もう一つは、〈場〉が主語位置に来てその場の状態を述べる構文では、日本語も英語も「存在・所有対象」を示すためになぜ場所を示す「に」／‘in’ が用いられるのかということである。本論文では二格名詞句は根源的に場所を表すと考える。それが述語の意味に応じて意味を分化させるのである。述語が静的な意味であれば、二格名詞は存在場所であり、動的な意味であれば、発生する場所あるいは位置変化・状態変化した先の場所である。そして、このような場所の把握は実空間のみならず、判断が成立する〈場〉にも拡張すると考えられる。

例えば、「私の家は近い」と言うだけでは、意味が定まらない。なぜなら「近い」ことを判断する基準が不明だからだ。「駅に近い」と言えばはっきりする。述語だけでは意味が充足しない場合に、何を基準にそれが成立するのか、心的にその基準（対象・場所）に意識が向かい、到達点としての場所を二格が示していると言える。しかし、「～に富む」（「恵まれる」「乏しい」「欠ける」も含む）の二格名詞句は存在対象そのものであり、基準とは異なる¹⁰³。それではどこに意識が向かっているのだろうか。

「この土地は富む」というだけでは、この土地は「単一性や平板を破る何かを多く/豊かにもつ」（新明解）という状態のあり方にまず焦点が当たる。つまり、「富む」はその場全体の在り方に注目してその状態を述べる動詞である。その場の構成要素に注目してそれが多いいことを述べるような構文（所有 A, B）は成立しない、あるいはしにくいと考えられる。そのため、述語の意味を完結するために必要なのは、「どのような点において」その述語の意味が成立するのか、その〈場〉を示すことである。概念化者の意識はその「命題が成立する場」つまり「観点の場」に向いていると考えられる。このような述語が成立するための観点の場という捉え方は図 4.4 のようなイメージスキーマとして示すことができる。これ

¹⁰² 例えば、英語では ‘sing’ は次のように用いることができる。(i) *Birds sang in the trees.* (ii) *The trees sang with birds.* (i)は「鳥たちが林でさえずっている」という意味だが、(ii)はその林を主語にして文を作り、さえずる声が林にこだまするような状況を述べることができる。このように英語では「場所名詞句＋【同じ動詞】＋with＋対象物」という統語的な操作で場の様子を述べるような文を作るが、日本語では非常に難しい。

¹⁰³ 『新明解国語辞典 6 版』の「に」の意味分類で興味深いのは、「～に近い」の「に」と「～に恵まれている」の「に」を一緒にして、「その状態を認めさせるものとしての基準や対象」という語釈を付けている。しかし、基準と対象がなぜ一緒に扱えるのについては言及されていない。すぐ後で述べるように本論文では、それは述語の意味を完結させるために、概念化者（話者）の意識が向かうべき先という点で共通しているからだと考える。

は図 4.3 に示した「～は～が多い」と比べるとその違いがわかる。

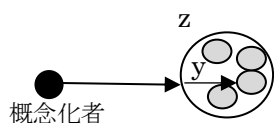


図 4.3 「z は y が多い」

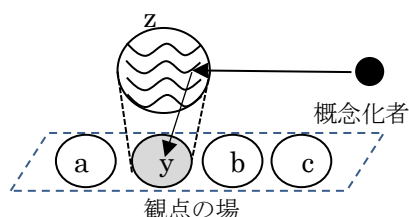


図 4.4 「z は y に富む」

「強い」「弱い」は両方の構文を作る。「z は y が～」は〈場〉である (z) に概念化者が心的にアクセスし、その内部の構成要素 (強い点/弱い点) を探索する。そしてヒットした対象物について「～は英語が強い」「～は歴史が弱い」と説明することができる。それに対して、観点の二格状態構文は、述語の表す意味が場 (z) 全体の状態を表すだけなので、どの観点でそれが成立するのか、その〈場〉にアクセスする必要がある。それが二格名詞句で示されると考えられる。このような事態の把握の仕方に違いがあるため、「弱い」では「彼は数学が弱い」も「彼は数学に弱い」も成立するが、「彼は女性が弱い」は不自然で「彼は女性に弱い」と言う。それは、「数学」は学問の分野・教科として個別に直接アクセスできる対象物 (強い点/弱い点) として把握することができると同時に、「弱い」という全体的な性質が「その (= 数学の) 知識が試される場面」とリンクして把握することもできるからである¹⁰⁴。「女性」は前者のようなアクセスの仕方は難しい。むしろ、「女性が存在する場面／女性となんかの接触をもつ場面」において「弱い」という事態が成立するという捉え方にならざるを得ないのである。

- (22) a. 彼は数学が弱い。
b. 彼は数学に弱い。

- (23) a. ??/*彼は女性が弱い。
b. 彼は女性に弱い。

存在の概念に何か情報が付加された動詞でありながら、所有 A も B も成立しない動詞として「富む」を取り上げて分析した。不成立の要因には、事態の把握の仕方が深くかかわっていることが明らかになった。英語との比較で興味深い違いを見せる SWARM 型の場所格交替 (自動詞文) については、5.1 節で詳しく論じる。また、観点の二格状態構文を作る「欠ける」については、「欠く」と合わせて 4.3 節で分析する。

¹⁰⁴ 能力を表す「～に強い」「～に弱い」には別の事態把握も想定できる。二格名詞句が、その能力が発揮されて向かう先 (対抗する対象) としても捉えらえる。

4.2 発生と所有の関係

4.2.1 分析する動詞とイベントスキーマ

この節では、存在の原因として発生または出現の事象が読み込まれる場合を取り上げる。本論文では、広義の変化事象を三つに分類する。まず「発生」と「それ以外の変化」に大きく二つに分ける。この根拠は前者は対象物が初期状態（変化前）では存在しないが、後者は存在することである（cf. 金水 1994, 影山 1996）。「それ以外の変化」は位置変化と状態変化に分けられる。この発生事象のスキーマは外界の事態把握において非常に重要な地位にあるというのが本論文の立場である。その重要性は 4.6 節の統語的なヴォイスの分析で論じられる。

下に発生と所有のイベントスキーマを示す。発生が原因事象になり、対象物が存在することを表すのが「z に y が〈OCCUR〉→〈BE〉_{EXIST}」（自動詞構文）である¹⁰⁵。そして、所有の概念に転換することによって、所有 A 「z には y が〈OCCUR〉→〈BE〉_{POSS}」（自動詞構文）が、さらに〈場〉の焦点化によって所有 B 「z は y を〈OCCUR〉→〈BE〉_{POSS}」（他動詞構文）が生成され则认为られる¹⁰⁶。

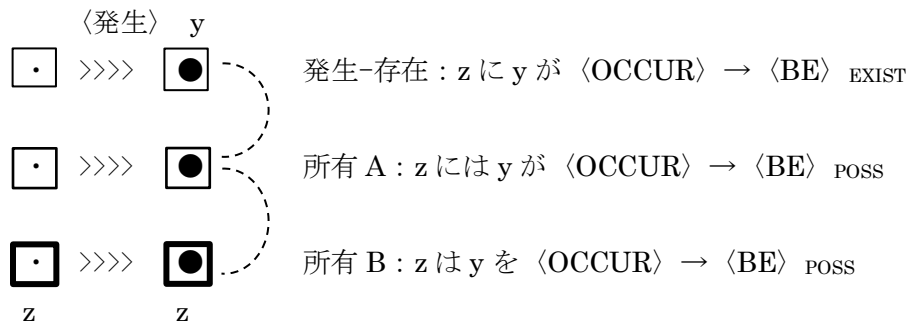


図 4.5 発生と所有のイベントスキーマ

〈OCCUR〉→〈BE〉_{EXIST}（自動詞構文）では、〈場〉が背景となり、その〈場〉で何が起きて、その〈場〉に何が存在するようになったのかに注目した事態把握である。一方、〈OCCUR〉→〈BE〉_{POSS}（他動詞構文）では、場に際立ちが与えられ、その場全体がモノの発生によって何を所有するように変化したのかに注目した事態把握である。その場にそれが存在することがその場の特徴付けとなるのが所有の概念である点は、このイベントスキーマでも引き継がれている。

(24) ～ (31) の (a) は「発生-存在」を表す自動詞構文であり、(b) は所有 B の他動詞構文である。その構文交替を観察すると、二つのタイプがあることがわかる。一つは、

¹⁰⁵ OCCUR は発生概念を表す。〈OCCUR〉→〈BE〉は、出現・発生によってあるモノが存在することを示している。

¹⁰⁶ これ以降の考察では、所有 A は必要がなければ取り上げない。

述語の動詞の形態が同じ (24) ～ (29) の場合で、もう一つは形態が異なる (30) と (31) の場合である。後者は使役変化他動詞と同じ形態である。

- (24) a. 柳の木に芽が吹く。
b. 柳の木が芽を吹く。

- (25) a. 桃の木に実が結ぶ。
b. 桃の木が実を結ぶ。

- (26) a. 海に渦が巻く。
b. 海が渦を巻く。

- (27) a. 太郎に眠気が催す。
b. 太郎が眠気を催す。

- (28) a. パンにカビが生じる。
b. パンがカビを生じる。 (明鏡国語)

- (29) a. 汚泥から/に有毒ガスが発生する。
b. 汚泥が有毒ガスを発生する。

- (30) a. 太郎に熱が出る。
b. 太郎が熱を出す。

- (31) a. 肉まんから湯気が立っている。
b. 肉まんが湯気を立てている。 (影山編 2011 : 295)

4.2.2 両用動詞

上に挙げた例では、「吹く」「結ぶ」「巻く」「催す」「生じる」「発生する」は、形態を変えことなく構文交替している。これらは森田 (1994) で両用動詞として取り上げられた動詞と一部重なっている。本論文では、事象のタイプごとに構文を分析するが、本節以降で取り上げるものを含めて、森田が「自他両文型が同じ表現的意味のグループ」として挙げた両用動詞と重なるものを一度ここで整理しておく。

- (32) 自他両文型が同じ表現的意味のグループ (森田 1994 : 239-240 より)
a. 子供を授かる／子供が授かる h. 緑青を嘔く／緑青が嘔く

- | | |
|--------------------|--------------------|
| b. 迷いを去る／迷いが去る | i. 火を噴き出す／火が噴き出す |
| c. 手を着く／手が着く | j. 渦を巻く／渦が巻く |
| d. 目を閉じる／目が閉じる | k. 川が水を増す／川の水が増す |
| e. 危険を伴う／危険が伴う | l. 実を結ぶ／実が結ぶ |
| f. 蕾を開く／蕾が開く | m. 眠気を催す／眠気が催す |
| g. 水を噴き上げる／水が噴き上げる | n. 勢いを盛り返す／勢いが盛り返す |

この例文の挙げ方からして、森田は場所句と主語位置に来る名詞の関係または全体と部分の関係にはほとんど注意を払っていないことが窺える。本論文の分析に合わせて事象のタイプごとに分類し、これらの二者の関係がわかるように【 】に語句を補充し、例文を整理すると次のようになる。

(33) 事象のタイプによる分類 (※アルファベットは原文のまま)

[1] 発生 (本節で扱う)

- | | | |
|-----------------|---|---------------------------|
| a. 【人が】子供を授かる | ／ | 【人に】子供が授かる ¹⁰⁷ |
| g. 【噴水が】水を噴き上げる | ／ | 【噴水から】水が噴き上げる |
| h. 【金属板が】緑青を噴く | ／ | 【金属板 [の表面] に】緑青が噴く |
| i. 【火山が】火を噴き出す | ／ | 【火山から】火が噴き出す |
| j. 【潮が】渦を巻く | ／ | 【潮に】渦が巻く |
| l. 【木が】実を結ぶ | ／ | 【木に】実が結ぶ |
| m. 【人が】眠気を催す | ／ | 【人に】眠気が催す |

[2] 消失 (4.3 節で扱う)

- | | | |
|--------------|---|------------|
| b. 【人が】迷いを去る | ／ | 【人から】迷いが去る |
|--------------|---|------------|

[3] 存続 (=非消失) (4.4 節で扱う)

- | | | |
|---------------|---|------------|
| e. 【仕事に】危険を伴う | ／ | 【仕事に】危険が伴う |
|---------------|---|------------|

[4] 状態変化 (4.7 節で扱う)

- | | | |
|----------------------------------|---|----------------|
| c. 【人が [地面に]】手を着く ¹⁰⁸ | ／ | 【[地面に] 人の】手が着く |
| d. 【人が】目を閉じる | ／ | 【人の】目が閉じる |
| f. 【花が】蕾を開く | ／ | 【花の】蕾が開く |
| k. 【川が】水を増す | ／ | 【川の】水が増す |

¹⁰⁷ この対応は対象が子供の場合に成立する。通常の物の授受では成立しない。元々は複他動詞「x が y を z に授ける」と単他動詞「z が y を授かる」の対応があり、赤ちゃんが生まれるという発生事象において、この単他動詞の概念が拡張し、「z (人) に y (子供) が授かる」が生まれたと考えられる。

¹⁰⁸ 森田 (1994) では「つく」の表記を「着く」としている。自動詞の「手が着く」は手を伸ばして「手が届く」という意味だが、「手を着く」はそのような意味には対応せず、「からだのささえにするために、細長い物の先を堅い場所に当てる」(新明解) という意味になり、表記も「突く」が当てられるのが普通である。意味的に対応していないとみなし、本論文ではこれを両用動詞のリストから除外する。ただし、もともと「手がつく」と「手をつく」の意味の対立があったという見方も否定できない。小柳 (2009) ではこの動詞を両用動詞として分析している。

n. 【敵が】勢いを盛り返す / 【敵の】勢いが盛り返す

[1][2][3]では、自動詞構文の場所句と主語位置にあるガ格名詞句が、それぞれ他動詞構文のほうでは主語位置と目的語位置に来て構文が交替していることがわかる。消失は発生の逆の事態把握であり、存続は消失しないで継続することだと考えれば、基本となるのは発生である。したがって、この三つは本節の冒頭に示した発生のイベントスキーマにおける、「zにyが〈OCCUR〉→〈BE〉EXIST」（自動詞構文）と「zはyを〈OCCUR〉→〈BE〉POSS」（他動詞構文）の構文交替を応用して分析できる。[4]の変化事象における構文交替については、もう一段別の分析アプローチが必要になる。詳細は4.7節に譲るが、要点だけ述べると、自動詞構文に現れる「AのBが〈変化〉」という事態把握において、AとBの名詞句が示す関係が（広義の）所有関係として再解釈され、「Aが、〈変化〉したBを所有する」のように事態把握されると考えられる。つまり、[4]の場合であっても、〈場〉（＝所有者）全体の変化に焦点が当たっているという点では[1][2][3]と同じなのである。

4.2.3 動詞の形態について

冒頭に挙げた例では、「吹く」「結ぶ」「巻く」「催す」「生じる」「発生する」は構文交替で形態を変えていないが、「出る／出す」「起こる／起こす」では形態を変えている。影山（2002）は、語彙意味論の観点から非対格性をもつ動詞には、従来考えられていたような非意図的な事象を表す自動詞だけでなく、下の表の網掛けの部分に存在すべき動詞、つまり非対格性をもつ他動詞も存在すると指摘し、この非対格性をもつ動詞間の交替現象では形態の変化は起きないとした。

表 4.2 事象と動詞のタイプ（影山 2002：120 の図を参考に作成）

事象 動詞	活動・行為	変化 状態
自動詞	〈活動動詞〉 働く・遊ぶ・笑う	〈制御不可能な変化動詞・状態動詞〉 着く・ころぶ・ある
他動詞	〈働きかけ動詞〉 たたく、押す・こする	〈非対格性をもつ他動詞〉

確かにこのような分析は本論文が提案する事態認知モデルにおける概念化者の事態の把握の在り方の違いから見ても妥当性のあるものである。図 4.6 に示したように、使役起動交替は（イ）・（ロ）の間で起こる。事態を構成する要素は「x, y, (z)」と「y, (z)」で異なる。これが自動詞化接辞あるいは他動詞化接辞を伴って形態の対立を引き起こす要因になっていると考えられる。それに対して存在から所有の概念への転換は（ハ）・（ニ）の間で起こる。事態を構成する要素が「y, z」である点は同じである。しかし、(34) のように客観的に同じ事態を叙述しながら、形態が変わらない場合（a）と変わる場合（b）があることを

どう説明するのかという問題が残っている。

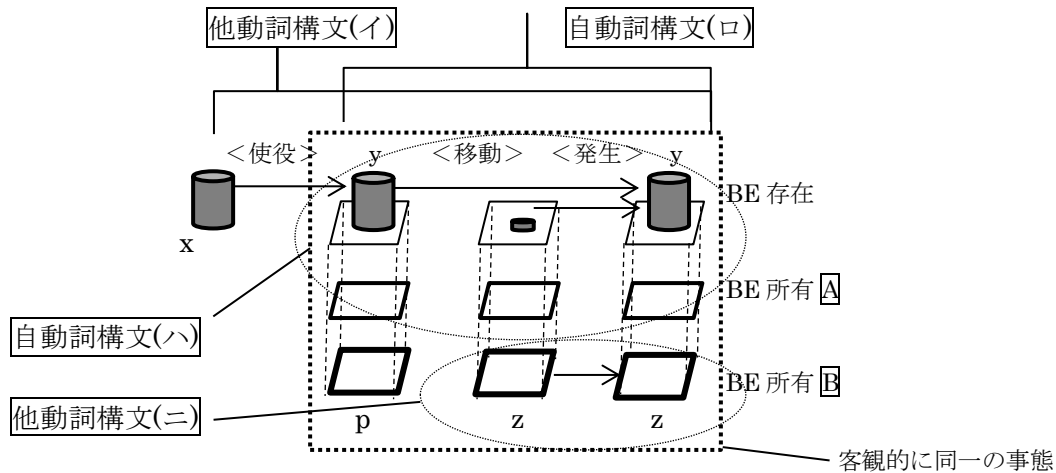


図 4.6 イベントスキーマと自他交替の二つのタイプ

- (34) a. 木から芽が吹く / 木が芽を吹く (形態が変わらない)
 b. 木から芽が出る / 木が芽を出す (形態が変わる)

本論文では、現時点で次のように考えておく¹⁰⁹。

<場の焦点化による構文交替の動詞の形態について>

- ①同じ事態の構成要素（対象と場所）による構文交替であり，対象に焦点を当てるのか，〈場〉に焦点を当てるのかの違いである。この場合，構成要素の増減を伴う使役起動交替に見られるような形態の転換を引き起こす動機付けに乏しい。その結果，自動詞構文と他動詞構文で同じ形態で交替する。このような動詞は，自動詞と他動詞が同じ形態で用いられる両用動詞のグループの一部を構成する。
- ②元々使役起動交替を起こす動詞の場合，場焦点化他動詞構文に用いられる動詞の形態が新たに生じることは少なく¹¹⁰，使役変化他動詞と同形態になる。これは語彙の経済性に従うものである。同じ二項述語で他動詞構文を作る場合，その意味が使役変化を表すのか，非意図的に〈場〉があるモノを所有するように変化することを表すのかは，文を構成する要素および文脈で判断されることになる。

重要なことは，形態上は使役変化他動詞と同じであっても，概念化者の外界の把握の仕方が，モノ対モノと見るのか，モノ対〈場〉と見るのか，そしてその〈場〉に際立ちを当てるのかどうか，という点で異なるのである。「出す」には使役変化を表す他動詞の用法が

¹⁰⁹ 4.3.3 節「動詞の形態について（修正版）」でもう一つの型が規定される。

¹¹⁰ 数は少ないが，「(醤油を) 切らす」や「(毎朝のランニングを) 欠かす (ことがない)」などがこれに相当する。場焦点化他動詞の形態については，4.3.3 節で再び取り上げ，修正版を示す。

あり、モノ対モノ、つまり動作主が被動作主に働きかけて変化を引き起こすという事態把握を概念化する一方で、「芽を出す」「熱を出す」のように場に際立ちが与えられ、その場の変化に注目した事態把握も概念化する場合にも用いられるのである。

生産動詞と呼ばれる動詞の中に「作る」という動詞があり、意味的に対応する自動詞として「できる」がある。上述の規定②によれば、事態の把握の仕方が異なれば、「作る」は場焦点化他動詞構文を作ることができるはずである。事実、「作る」はそれができる。次の(35a)では「作る」が使役変化動詞として使われている。(35b)はそれに対応する自動詞文である。

- (35) a. 父親が庭に犬小屋を作った。
b. 庭に犬小屋ができた。

生産動詞によって概念化される事態は、発生事象のイメージスキーマと重なる。つまり、生産とはある材料に働きかけて「ある場所にあるモノを新たに生み出す」ことである。したがって、(非意図的な)「～ができる」という発生事象を叙述する場合にも、〈場〉(＝発生母体)が、発生物がそこに存在することによって特徴付けられると把握されることによって、所有の概念へと転換し、「発生・所有」の概念化として所有 A であれば「できる」が、所有 B であれば「作る」が現れるのである。(36) は、どちらも〈場〉である「太郎」が非所有状態から発生物を所有する状態への変化に注目することによって生まれたものである¹¹¹。

- (36) a. 太郎は殴られて、頭にこぶができた。(所有 A)
b. 太郎は殴られて、頭にこぶを作った。(所有 B)

ところで、上述の「形態の規定①」に示したように、場焦点化他動詞構文を作る動詞のうち形態を変えないものと両用動詞がすべて重なるわけではない。両用動詞が生まれる要因には森田(1994)が分析しているように複数ある。国広(1996)が「再帰中間態」と呼んだものについてもここで少し触れておきたい。自他で形態の対立がある動詞の他動詞のほうが自動詞のように用いられる現象である。これは(37d)に示したように再帰が直接的に関与している。本論文がその存在の重要性を主張する場焦点化他動詞構文では、再帰が間接的にかかわっているものの、その根本には所有の概念がかかわっていると見る。また4.8節では、再帰中間態とは逆に自他で形態の対立がありながら、自動詞のほうが他動詞の

¹¹¹ 「発生・存在」の概念化である自動詞文は「太郎の頭にこぶができた」である。例文(a)は太郎が題目化されているので、本論文の分類では所有 A に相当する。他動詞構文になっている(b)が所有 B の場焦点化他動詞構文である。

なお、『プログレッシブ英和辞典 3 版』は(a)の英訳として、‘I developed a bump on my head where I was hit.’を挙げている。発生場所である人が主語位置に来ている点は共通している。

ように用いられる構文（例文 38c）を取り上げて分析する。

- (37) a. 人が道端に車^を寄せる
b. 車が道端に寄る
c. 人が友人宅に寄る
d. 波^が寄せる（「波が自分自身を寄せる」という意味）

- (38) a. 太郎が宿題を終える
b. 太郎は宿題^が終わる／太郎の宿題^が終わる
c. 太郎は宿題^を終わる

4.2.4 発生母体と発生物の関係

4.2.4.1 モノの発生

4.2.2 節の (33) で示した「[1]発生」に分類されている動詞は多義語であり、場の焦点化による構文交替に現れるのは「発生」の概念をもつ場合である。例えば「授かる」の場合、発生概念をもつ「子供を授かる」と「子供が授かる」は交替が成立するが、「秘伝を授かる」と「*秘伝が授かる」は交替は成立しない。

さて、例文を観察すると、二つのタイプがあることがわかる。「発生」とは本節の冒頭で規定したように「対象物が初期状態（変化前）では存在しないものが存在するようになる」という変化事象である。[1]の動詞の中では「(子供が) 授かる」「(緑青が) 嘔く」「(渦が) 巻く」「(実が) 結ぶ」はそれに合致する。しかし、「(水が) 噴き上げる」は少し異なる。〈場〉（＝発生母体）の内部に元々あったものが、外側に出現する場合である。また、流出したものが発生母体に存在している、あるいは流出したものを発生母体が所有しているとも見ることに違和感を覚えるかもしれない。以上の点からこのような事例は厳密には発生とは言えないと覚えるかもしれない。

Levin (1993) では‘gush’のような湧出動詞の自他交替は‘substance/source alternation’として扱っており、‘gush’が‘locative alternation’（場所項が斜格をとる付加詞から主語や目的語に来る交替）するものとしては (40) のような自動詞構文同士の交替を挙げている。しかし、影山 (2002) では英語の‘gush’の自他交替と日本語の「木から芽が出る」「木が芽を出す」を同列に扱い、(41) に示したような例は場所の取り立てによる意味構造の組み換えであると分析している。

- (39) substance/source alternation (Levin 1993 : 237 日本語訳は引用者による)
a. The well gushed oil. (油田がオイルを噴き出した)
b. Oil gushed from the well. (オイルが油田から噴き出した)

(40) locative alternation (Levin 1993 : 237 日本語訳は引用者による)

- a. Water gushed through the street. (水が通りに噴き出した)
- b. The streets gushed with water. (*通りは水で噴き出した)

(41) a. 木から芽が出る。

b. 木が芽を出す。

c. 火口から煙が出る。

d. 火山が (火口から) 煙を出す。

本論文では、液体・気体の流出は厳密には「発生」の概念とは異なるが、次の二点で共通していることから、二つの概念は連続していると考え、同じ枠組みで分析することにも意義があると考え。

1. 内部にどのような形で存在するかという科学的な事実(知識)とは別に、概念化者(話者)の立場からは、どちらも「見えなかったものが見える形となって現れる」という点で発生イベントと共通している。
2. 液体の流出および気体の流出は、連続しており発生母体とのつながりが認められ、発生母体が発生物を所有するという把握ができる。

1. について補足しておく。「芽が出る」では、植物の内部に「芽」があるとは考えられない。それに対して「噴水から水が噴き出す」では、噴水(という構造物)の内部に「水」があることは確かである。しかし、重要なのは発生母体内部のメカニズムによって、それまで見えなかったものが〈場〉(＝発生母体)の外側に目に見える形で出て来るという点である¹¹²。

2. について補足しておく。音、気体、液体が発生する場合、これを発生母体が発生した音、気体、液体を所有すると見る事態把握に違和感を覚えるかもしれない。これは「連続体」の把握と関係がある。もしあるモノがある〈場〉から発生し、そのモノが元々あった発生母体から切り離されて移動する、つまり個別の独立した存在として認められる場合は、発生母体が発生物を所有しているとは把握されない。しかし、気体や音、液体は「連続体」であり発生した音・気体・液体は発生母体と二者関係を持ち続けていると把握されている。これは発生したガスが拡散して消えてしまうといった物理現象の客観的な把握とは別であり、人間がどのように事象を把握し切り取り言語化するかという問題である。

¹¹² これは典型的な事象の把握であり、実際にはその拡張事例として、場の内部での発生もある。しかし、その場合でも、元々「見えなかったものが見える形となって現れる」という点では同じである。

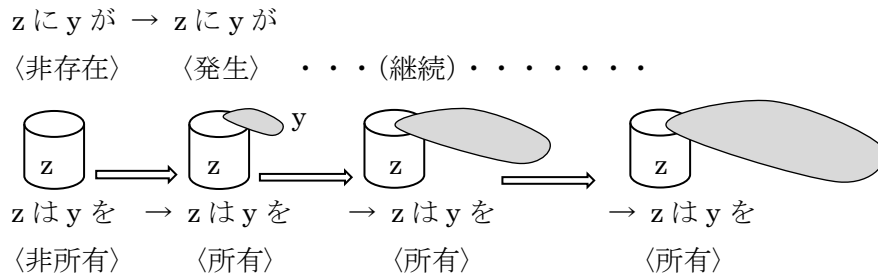


図 4.7 発生母体と流出物の二者関係

このような発生母体から対象物が発生・流出する事態は、使役主と対象物の関係 (42a) と平行的に捉えて、(42b) のように発生母体が対象物に働きかけてそれを外部に出しているように見ていいのではないかという考えもある。

- (42) a. 太郎が 机を 教室の外に 出した。
 b. 火山が 火を (自分自身の外に) 噴き出した。

しかし、決定的な違いは使役変化他動詞は二者分離が前提で、(a) は「太郎は何をしたか」と問えるのに対して、(b) は「火山は何をしたか」とは問うのは不自然で、「火山はどうなったのか」と問わなければならない。これは (b) は見かけ上 (a) と同じ他動詞構文になっているが、その事態把握は二者一体となり、場が何か目に見えるもの発生し、その発生物を所有するように変化したという見方になっていることを意味しているのである。

4.2.4.2 自律的な事象 (再帰と自己組織化)

前節の内容を受けて、自律的な事象についてもう少し見ておく。自動詞には意図的に活動することを表す非能格動詞と対象物の非意図的な変化を表す非対格動詞の 2 種類があること、そしてそれに基づいて提唱された非対格仮説 (Perlmutter 1978, Perlmutter and Postal 1984) は現在では通言語的に広く支持されている考え方である。Perlmutter and Postal (1984) が示した非対格動詞は、全体で六つに分類されている。

- (43) 非対格性を示す述語 (非対格動詞)

- a. Predicates expressed by adjectives in English . . . including predicates describing sizes, shapes, weight, colors, smells, states of mind, etc.
 b. Predicates whose initial nuclear term is semantically a Patient
 burn, fall, drop, sink, float, slide, slip, flow, tremble, boil,
 [inchoatives] freeze, melt, evaporate, open, close, break, explode

c. Predicates of existing and happening

exist, happen, occur [inchoatives] arise, vanish, disappear

d. Involuntary emission of stimuli that impinge on the senses (light, noise, smell, etc.)

shine, sparkle, glitter, smell, stink, jingle, click

e. Aspectual predicates

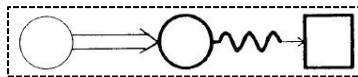
begin, start, stop, cease, continue, end

(Perlmutter and Postal 1984 : 98-99 より f は省略 動詞は一部のみ)

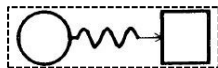
この4番目に ‘Involuntary emission of stimuli that impinge on the senses ’ というのがある。光・音・匂いなどを放出することを表す動詞である。中村（2000）は他の非対格動詞とは区別して、このような動詞（**verbs of emission**）は「変化を引き起こす要因が変化主体内部にあると考えられる」（同上：91）とし、次のような認知構造図を使って説明している。(c) はその内部において自分自身に働きかけるような活動が認められるが、あくまでもそれは内部の活動であり、(a) の表す使役変化の事象をベースにしたものとは異なることが見てとれる。

(44) 中村（2000：91）の示した認知構造図

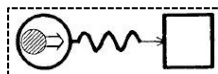
a. 自他交替動詞の自動詞用法の表す「自律的な」(autonomous) 事態



b. 非対格動詞の表す「自律的な」事態



c. verbs of emission の表す「自律的な」事態



(c) に示されたような自律的な内部活動を「再帰」と捉えて、再帰がヲ格名詞をとる他動詞構文の生成を動機付けていると見ることも可能である。しかし、それはこの場合のみのアドホックな説明に終わってしまう。そのような内部活動が見られない他動詞構文をどう説明するのか。4.1 節に示した状態を表す他動詞「解決には時間を要する」「この博物館は最新設備を誇る」「A 市は最大の観光地を有する」には再帰が認められるのか。このように考えれば、ここで問題になっている他動詞構文に直接関係するのは、再帰ではなく、所有の概念であるというのが本論文の主張である。

もう少し再帰について考えてみたい。国広（2005）では「巻く」という動詞が分析され

ている。そこではここで取り上げた「(海に) 渦が巻く」「(海が) 渦を巻く」を再帰として
いる。国広が挙げる次の文は確かに対象自体が軸（中心体）となりそこに自分自身を巻い
ているので再帰だと言える。

(45) ござを巻く, しっぽを巻く, 舌を巻く

しかし、「渦を巻く」の「渦」は国広自身が指摘しているように、結果目的語である。つま
り、対象（＝水）が巻くような動きをすることによって「渦」の形が発生したのである。
渦そのものは変化の成立以前には存在していないので、(45) のような再帰と同一視はでき
ない。「水が巻く」「水を巻く」という表現があるのなら、それは再帰と言えるが、問題と
なっている表現はそうではない。つまり、「実を結ぶ」も「芽を吹く」も「氷を張る」も「結
ぶ」「吹く」「張る」と（メタファー的に）把握される動きによって「実」「芽」「氷」が発
生するという事態把握であり、その点で「渦を巻く」も同じだと考えられる。確かに「巻
く」の場合は、他の発生の意味を表す動詞と異なり、実際に「巻く」動きがリアルに存在
するという点では異なり、その点を指して「再帰」であると見なすことは可能である。し
かし、ここで重要なことは、「実」「芽」も「渦」も発生物であるという点であり、それが
再帰によって生じたかどうかは重要ではない¹¹³。

上述の光・音・においの放出動詞の例もそうであったが、非意図的な事象に見られる「内
部活動」の根本には複雑系の科学で指摘されている「動的秩序の自己形成」または「自己
組織化」が関連していると思われる。植物のような生命活動が認められるものはもちろん
だが、空気のような無機物についても、「(地球をとりまく大気における) 台風の渦」の発
生は自己組織化であるという指摘がある。(中村 1989 : 102-104) しかし、これは本論文の
扱う範囲を超えるので単に指摘しておくにとどめる。

4.2.4.3 イベントの発生

冒頭に挙げた例文はすべてモノの発生である。発生事象によってある対象物が存在する
ことを表す「z に y が〈OCCUR〉→〈BE〉EXIST」（自動詞構文）から、事態把握の違いに
よって所有 B「z は y を〈OCCUR〉→〈BE〉POSS」（他動詞構文）へと構文交替が起こる。
前者はモノの発生に注目し、後者は〈場〉（＝発生母体）全体の変化に注目したもので、そ
れは発生物を所有することによって〈場〉が特徴付けられることだと分析した。そして、
発生とは、発生母体の内部メカニズムによってモノが目に見える形となって現れ、典型的
にはその表面に存在することであると規定した。このようにモノの発生の場合は、〈場〉と
発生物の所有関係は理解しやすいが、イベントの場合はどうか。

イベントは確かに「発生する」と言えるが、モノの発生とは異なり、必ずしも発生母体

¹¹³ とはいえ、再帰という概念は言語現象を捉える上で非常に重要な概念である。本論文でも 4.6 節の単他
動詞と複他動詞の問題のところで詳しく論じる。

の内部メカニズムによって発生するわけではない。通常は、発生する場所を限定する「デ格名詞句」が現れる。これは付加詞であり述語の成立が依拠する場所を示す「二格名詞」とは質的に異なる。したがって、発生を表す自動詞文は言えても、単純に場所句を主語位置に据えた他動詞文が作れるわけではない(46b)。しかし、イベントの発生がその発生した現場の内在する性質によるものだと捉えられるか、イベントの発生によって現場の特徴付けが変わったと捉えられるような場合は、(47)～(49)のように構文交替が成立する。つまり、モノの発生がそうであるように、場全体の変化が注目されるような事態把握が可能なら、イベントの発生でも場焦点化他動詞構文が成立するということである。

- (46) a. その交差点で交通事故が {発生した／起きた}。
b. その交差点は交通事故を {?発生した／*起こした}。

- (47) a. その山に地滑りが起こった。
b. その山は地滑りを起こした。

- (48) a. 隣の家から火事が出た。
b. 隣の家が火事を出した。

- (49) a. 手術後、体に拒否反応が起こった。
b. 手術後、体が拒否反応を起こした。

4.2.4.4 現場に埋め込まれる〈場〉

「死傷者が出る」という事態について述べる場合、その原因が「列車事故で」「航空機事故で」「爆発事故で」のように示されることがある。その場合、この原因を表す出来事を〈場〉ととらえて、(50b)のような場焦点化他動詞構文が成立する。しかし、興味深いことに、(50c)のような他動詞文も成立する。

- (50) a. その列車の脱線事故で (は) たくさんのけが人が出た。
b. その列車の脱線事故はたくさんのけが人を出した。¹¹⁴
c. その列車の脱線事故で (は) たくさんのけが人を出した。

(50a,c) のような構文は、ニュース報道で見ることが多いようだ。本格的な調査をまたなければ結論は出せないが、(50b) のような場焦点化他動詞構文を用いると、その所有の概念に基づいた意味、つまり「場の特徴付け」が全面に出る。見方を変えれば、それはその

¹¹⁴ この文は『英和表現辞典』の例文からとったものである。対応する英語として、‘The train derailment left many people injured.’ と書かれている。

事故の評価であり、評価はある程度時間がたってから「事故の履歴」という形で叙述されるのではないかと考えられる。例えば次の記事はそのような使い方になっていると考えられる。

- (51) 今から 43 年前の昭和 37 年に、東京・荒川区の旧国鉄常磐線で起きた三河島事故がきっかけでした。死者 160 人を出した機関車や列車の多重衝突事故です。

(NHK のウェブサイトより¹¹⁵)

(50a) のような自動詞構文は、出来事を中立的に述べる場合である。時間が経ち、事故の履歴として述べるのが相応しくなるか、客観的にそのような評価をする立場の人が述べる場合に (50b) の構文が使われやすくなりと考えられる。一方、(50c) は (50b) のように特徴付けを全面に出さず、被害を出した‘張本人’という指摘を控えめにしている¹¹⁶。このような解釈を生むのは、本来は焦点化されることによって題目化し、「～は」として主語位置に現れるはずの〈場〉が、原因を表す出来事の現場に埋め込まれてしまっているからだと考えられる。文脈によって解釈されるため、表層には現れないのである。4.1.2 節で指摘したように、所有 A にしろ所有 B にしろ、主語位置に来る所有主体は元々〈場〉を表すため、文脈という〈場〉と親和性があると考えられる。「出す」という使役変化他動詞と同形の動詞を用いながら、「だれが(それを)出したのか」あるいは「何が(それを)出したのか」という点ではっきりしない。はっきりしないにもかかわらず、おそらく多くの日本人はそれに違和感を持たないのではないか。それは現場に埋め込まれた〈場〉に反応して文脈から矛盾することなく文の意味を解釈しているからだと言える。それは因果連鎖における「仕手」あるいは「原因」という個物よりも、むしろ漠然とその発生したイベント(とその結果)が存在することによって変化した〈場〉をイメージしているというのが本論文の主張するところである。

(52) は (50a) と同様の自動詞構文の例で、(53) は (50c) と同様の他動詞構文で、題目化され「～は」として統語上に現れるべき〈場〉が状況に埋め込まれており、文脈で解釈あるいは、推察される場合である。

¹¹⁵ アクセス日 2014 年 8 月 10 日 <http://www.nhk.or.jp/nagano/eve/hatena/2005/050516.html>

¹¹⁶ このような解釈は、他動詞構文における「有責任性」の表れではないかという指摘が出ることが予想される。つまり、典型的な他動詞構文は主語に動作主が来て、意図的にある対象物に働きかけ、何等かの変化を引き起こすと見られるので、当然結果に対して責任がある立場にあるという見方である。第 1 章で述べたように、本論文の目的は他動詞側からの分析だけでは十分に説明しきれない点を、自動詞側からのアプローチによって明らかにすることである。上述のような有責任性の解釈が使役変化他動詞と同形態の動詞を使うことによって生まれることは否定しない。しかし、それと同時に自動詞側から見た場合、それは所有の概念に裏打ちされた解釈として主語位置に据えられた〈場〉の特徴付けという側面とく重ねあわされている>というのが、本論文の主張するところである。これに関しては本小節のまとめも参照されたい。このような両側からの分析による接点を探ることは、この後の分析でもなされるが、大きなテーマとしては、4.7 節の「状態変化主体の他動詞構文」、4.10 節の「介在性をもつ他動詞文」の分析で詳しく論じる。

(52) イスラエルの侵攻でパレスチナに千人以上の死者が出た。ウクライナでは民間航空機が撃墜され、300人近くの乗客が亡くなった。なにかをいいたいと思うが、すぐことばにはならない。(高橋源一郎「論壇時評」朝日新聞 2014 年 7 月 31 日)

(53) a. 今月 6 日の野党デモでは約 450 人が拘束され、多くの負傷者を出したが、今回は大きな混乱はなかった。(読売新聞 2012 年 5 月 14 日)

b. これらのほか、8 月には富士山砂走り下山道で落石事故があり、下山中の登山者が多数遭難し、また、静岡駅前ゴールデン街で大規模なガス爆発事故があり、多数の死傷者を出した。11 月には、栃木県の川治プリンスホテルで火災があり多数の死者を出した。(BCCWJ[4])

c. 史上最大のペストの襲来は、六世紀にヨーロッパを襲ったもので、東ローマのユスチニアス帝の時代に、世界最大といわれる流行をみたという。ギリシアの歴史家プロコペウスによれば、このペストによって、コンスタンチノーブルでは一日に一万の死者を出したという。(BCCWJ[5])

d. 内戦状態のシリアでは現在もクラスター爆弾が使われ、新たな被害者を出している。日本やフランス、ドイツなどは、アサド政権側が反体制派や市民への攻撃に使用したと厳しく非難しているが、政権側は使用を否定し続けている。(毎日新聞 2013 年 6 月 5 日)

状況に埋め込まれている〈場〉を顕在化させる場合、それは何を指すのかをしてみる。例えば、「死傷者が出た」場合は、「～に出る」のように出た場所を具体的に特定することができる。この場合の場所は (54a) のように、「～で」で示された原因を表す出来事における特定の場所である。これが焦点化されると、(54b) のように場焦点化他動詞構文が成立する。

(54) a. その列車の脱線事故で (は)、先頭車両に多くの死傷者が出た。

b. その列車の脱線事故で (は)、先頭車両が多くの死傷者を出した。

第二に犠牲者の属する母集団である。例えば、脱線事故を起こした列車にはたまたま団体旅行中の A 高校の学生が乗車しており、事故に巻き込まれてしまった場合、(55a) のように「A 高校に」と示すことで、それを焦点化して主語位置に据えれば、(55b) の場焦点化他動詞構文が成立する。多くのけが人が出たという事故の履歴を所有している (= 特徴付けとして所有している) ことを示す構文だと言える。

(55) a. その列車の脱線事故で (は) A 高校に多くのけが人が出た。

b. その列車の脱線事故で A 高校は多くのけが人を出した。

このように状況に埋もれていた〈場〉が明示される例もニュース記事に見られる。

(56) a. これに反発したタクシン派は昨年4月から5月にかけて、早期解散・総選挙実施を要求してバンコク都心部占拠事件を起こし、軍との衝突で多数の死傷者を出す事態となった。(毎日新聞 2011 年 5 月 10 日)

b. 特に多くの死傷者を出しているガザ市民は「ハマスの無責任な行動とイスラエルの厳しい反撃の板挟みになっている」とし、双方に報復の自制を求めた。

(朝日新聞 2014 年 7 月 11 日)

これまでの分析を〈場〉と①自動詞構文、②他動詞構文とのつながりという点でまとめると次のようになる。

①（発生事象を表す）自動詞構文・・・イベントの発生に注目

原因を表す「出来事名詞句」が〈場〉と把握されているが、背景化しておりデ格名詞句となって現れる。

・文型：【〈場〉：原因となる出来事名詞】で【犠牲者】が出る

・例文：その墜落事故で多くの死傷者が出た。

②場焦点化他動詞構文・・・イベントの発生による〈場〉の変化に注目

②-1：原因を表す「出来事名詞句」が〈場〉と把握され、焦点化する。

その〈場〉が（デフォルトでは）題目化されて「～は」で示される

・文型：【〈場〉：原因となる出来事名詞】は【犠牲者】を出す

・例文：その墜落事故は多くの死傷者を出した。

②-2：①と同様に原因を表す「出来事名詞句」が〈場〉と把握されているが、背景化しておりデ格名詞句となって現れる。それと同時に、その出来事名詞句とつながりをもつ〈場〉が焦点化し、場焦点化他動詞構文を作る。しかし、その（第二の）〈場〉は現場に埋め込まれているため、表層には現れず、文脈で解釈される。

・文型：【〈場〉：原因となる出来事名詞】で（は）

（現場に埋め込まれた〈場〉：・・・）【犠牲者】を出す

・例文：その墜落事故では多くの死傷者を出した。

※「現場に埋め込まれた〈場〉が「原因となる出来事名詞」と同一の場合、①よりも責任性の低下という語用論的效果を生む。

②-3：②-2 で現場に埋め込まれていた〈場〉が明示される。

・文型：【〈場〉：原因となる出来事名詞】で（は）

【〈場〉：関連付けられた特定の現場】が【犠牲者】を出す

【〈場〉：関連付けられた犠牲者の母体】が【犠牲者】を出す

- ・例文：その墜落事故では機体後部がより多くの死傷者を出した。
：次の試合開催地に向かう途中だった〇〇チームは、その墜落事故で多くの死傷者を出した。

なお、「その踏切事故で、〇〇鉄道は 10 名の死傷者を出した」¹¹⁷のような文を、有責任性の点で使役変化他動詞構文と見るか、②・3 に分類するかはなお検討の必要があるが、本論文では、事態把握は連続していると考え、他動詞側からの分析（使役連鎖の事態把握）による「有責任性」の解釈と自動詞側からの分析（所有の事態把握）による「場の特徴付け」の接点になっていると考える。

4.2.4.5 所有と〈場〉の特徴付け

発生事象における場焦点化他動詞構文は、モノの発生そのものに注目するのではなく、その発生物を所有することになった発生母体全体の変化のほうに注目するという事態把握によって成立すると分析した。それと同時に、所有とは、〈場〉がそこに存在物があることによって特徴付けられることによって生まれる概念であると考え、その概念は発生事象においても受け継がれていると分析した。液体や気体などの流動体の場合であっても、それは発生母体とのつながりが認められ、所有の概念が言語化することも示した。

それでは、次のような例に見られる「出す」には発生物と発生母体にどのような所有の関係が認められるのだろうか。

- (57) a. この宝くじ売り場 {から／で} 1 等 3 億円が出た。
b. この宝くじ売り場は 1 等 3 億円を出した。

発生物である「当たりくじ」は購入された人が所有しているのであって、発生母体に存在しているわけではない。しかし、そこから出た（＝発売元）という履歴は存在するのであり、発生母体はその履歴を所有すると見なすことができる。この履歴の所有がその発生母体の特徴付けになっている。したがって、このような「出す」は、発生母体の変化の側面よりも、そのような発生物を出したという特徴付けのほうに意味の重点がシフトしていると言える。このような構文の意味特徴を考えれば、(57a) のような自動詞文は当たりくじが出たという事実を伝える場合に、(57b) のような他動詞文はその売り場がどのような場

¹¹⁷ この文の通常の解釈は「〇〇鉄道の社員に死傷者が出た」というのではなく、「〇〇鉄道が事故を引き起こした責任者（＝加害者）である」という解釈である。その点で、事故の被害者が主語位置に来る②・3 とは異なる。しかし、非意図的な出来事という点で両者は共通点をもつ。また、「軍の空爆は市民に多くの死傷者を出した」のように原因を表す出来事名詞が「行為名詞」の場合、さらには主語名詞句が有情者になり、「治安部隊が民衆デモを強制排除し、多くの死者を出した」となれば、意図性と相まって有責任性はさらに高まり、使役変化他動詞構文のカテゴリーに入ると考えられる。このように事象の把握は連続しているため、その境界を明確にしようとしても難しいからこそ、他動詞側（＝仕手側）からの分析と自動詞側（＝受け手側）からの分析との接点を探ることに意義があると考えられる。

所なのかを述べる場合にふさわしい文ということになる。例えば次の新聞記事の例では、「が出た」が3回使われているが、①と③を「を出した」に変えても不自然ではない。

(58) 2本の1等 ①が出た宝くじ売り場

山口県宇部市の宝くじ売り場・宇部琴芝チャンスセンターで、年末ジャンボの1等2億円2本、前後賞5000万円4本 ②が出た。人口18万人の街は「一体誰が」と大騒ぎだ。(…略…) この売り場は10年前にも1等 ③が出た “穴場”。業界全体で苦戦が続く、お隣のデパート、宇部井筒屋は「呼び水となってお客さんが増えるかも」と、幸運のおすそ分けを大いに期待。

(毎日新聞「雑記帳」2010年1月10日)

次の新聞記事では、①に「が出る」、②に「を出す」が使われているが、前節に示したように主語位置に現れるべき〈場〉が現場に埋め込まれており、「～では」が使われている例である。

(59) 昨年12月31日に抽選が行われた年末ジャンボ宝くじで、島根県大田市久手町のコーヒー館「スピン」から2等(1億円) ①が2本出ていたことが分かった。(…略…) 同館ではこれまで、1993年と95年の年末ジャンボや、97年のサマージャンボで1等 ②を出した “実績”もあるという。(読売新聞2011年1月7日)

小柳(2010)では、「輩出する」という漢語サ変動詞を取り上げ、(60a)のような自動詞用法が本来の使い方であるとされているが、現代語の用法としては(60b)のような他動詞用法が多数存在し、それは発生場所が主語になる場焦点化他動詞構文であると分析した。

- (60) a. この塾からのちに日本の将来を担う政治家が多く輩出した。
b. この塾はのちに日本の将来を担う政治家を多く輩出した。

小柳(2010)では、二つの用法が具体的にどのような構文で使われているかを調べた¹¹⁸。そして、収集された用例を以下の構文タイプに分類した。(A)が自動詞構文で、(B)が場焦点化他動詞構文である。その結果、主語名詞句がガ格で示される文(出来事を叙述する文)では、「〈場所句〉から〈発生物〉が輩出する」のほうが「〈場所句〉が〈発生物〉を輩出」より圧倒的に多く(表中のA-1)、場所句が題目化した構文タイプでは、「〈場所句〉からは、〈発生物〉が輩出する」よりも「〈場所句〉は〈発生物〉を輩出する」のほうが多く

¹¹⁸ 調査には三つのコーパスを利用して、合計230例を収集した。①国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス モニター公開データ(2009年度版)』 ②私製の新聞記事コーパス(読売新聞、毎日新聞、朝日新聞のウェブ電子版2009年1月～7月の記事データを収集したもの) ③『青空文庫』(ウェブ上に公開されている、主に著作権が切れた書籍のアーカイブ。http://www.aozora.gr.jp/)

(表中の B・2), 場所を被修飾名詞とする連体修飾節の構文タイプでは, 「〈発生物〉が輩出する〈場所〉…」よりも「〈発生物〉を輩出する〈場所〉…」のほうが多い(表中の B・3)ことがわかった。この結果に基づいて, 発生母体の特徴付けになるような構文では, 場焦点化他動詞構文のほうが使われる傾向があると分析した。

(A) 発生物をガ格で示す

A-1 基本文(対象主語) : (z{から/に/で}) y が輩出する

A-2 場所項の主題化 : z{から/に/で}は y が輩出する
z は y が輩出する

A-3 連体修飾節 : y が 輩出する z…
※場所項が被修飾名詞

A-4 連体修飾節 : y が輩出する TP…
※時名詞句(TP)が被修飾名詞

A 使 使役文 : y を輩出させる ←[y が輩出する]
※連体修飾節を含む

(B) 発生物をヲ格で示す

B-1 基本文 : z が y を 輩出する (場主語¹¹⁹)

B-2 場主語の主題化 : (z は) y を 輩出する

B-3 連体修飾節 : y を 輩出する z…
※場所項が被修飾名詞

B-4 連体修飾節 : y を輩出する TP…
※時名詞句(TP)が被修飾名詞

B 受 受身文 : y が輩出される ←[y を輩出する]
※連体修飾節を含む

表 4.3 「～が輩出する」と「～を輩出する」

コーパス	(A) 発生物をガ格で表示							(B) 発生物をヲ格で表示							不明	合計
	1	2	3	4	使	他	計 (%)	1	2	3	4	受	他	計 (%)		
③	21	5	2	3	4	0	35(52)	1	4	0	0	0	1	6(9)	26	67
①	19	8	0	2	4	0	33(34)	4	33	12	1	2	3	55(57)	8	96
②	0	2	5	0	0	0	7(11)	0	13	35	1	0	3	52(79)	7	66
計	41	15	7	5	8	0	76(33)	5	50	37	2	2	9	113(49)	41	230

¹¹⁹ 小柳(2010)では, 際立ちが与えられ主語位置に来た〈場〉はガ格名詞で示されるので, 便宜的に「場主語」と呼んだ。これは, 統語的に主語であることを主張するものではない。

これらの事実は、場焦点化他動詞構文の現れ方が、所有表現のデフォルトである「～は＋述語」とつながっており、存在物による〈場〉の特徴付けであることを物語っている。「発生する」という動詞は、(61b)のように発生するのが物ではなくイベントの場合、場焦点化他動詞構文が成立しにくい¹²⁰。しかし、〈場〉の変化としては文が成立し難いような場合でも、(61c)のように〈場〉の特徴付けとして解釈される場合には文の許容度が上がる。このことは上述の考えの妥当性を裏付けている。連体修飾節で〈場〉の特徴付けを述べる(61d) (62) のような構造の場合はさらに許容度が上がる。

- (61) a. 昨夜その場所で土砂災害が発生した。
 b. ??昨夜その場所は土砂災害が発生した。
 c. ?そのような場所は頻繁に土砂災害が発生する。
 d. 土砂災害が発生しやすい場所を重点的に調査する。

- (62) 従来の砂防三法は、土砂災害が発生する原位置、土砂災害が発生する場所の対策工事をきちんとやっていこうというのが従来の砂防三法でございました。¹²¹

(BCCWJ[3])

事象叙述なのか属性叙述なのかという叙述タイプの違いの重要性は Carlson (1977) をはじめ Kratzer (1995) など多くの先行研究によって指摘されているが、場焦点化他動詞構文の成立の許容度にもこの違いがかかわっているのは興味深いことである。この現象は発生事象のみならず、他の事象でも観察されるので、その都度指摘する。また、4.7.6.2 節の「中立的な叙述」としての場焦点化他動詞構文でも取り上げられる。

4.2.5 動作主主語が認められる場合

これまで見てきた例は非意図的な事象を自動詞構文でも他動詞構文でも表現できるものであった。そしてその場合の他動詞構文とは、〈場〉の変化に注目した事態把握が反映された構文であり、それを場焦点化他動詞構文として分析してきた。

さて、このような特徴を有している構文は、興味深いことに、次のような元々使役交替をするような事象についても成立することがある。その理由は、使役変化を引き起こした動作主に注目するのではなく、結果として発生物を所有するようになった所有母体つまり、場の変化に注目しているからだと考えられる。「刺青を入れる¹²²」という行為はこのような構文交替を起こしやすい事象である。なぜなら、刺青は肌と一体化し、それが場に存在することがその場の特徴付けになるからである。(63a) と (63d) は「入れる」で同一形態だ

¹²⁰ 「起こる」「起こす」を用いた場合には (61b, c) に見られるような不自然さはない。自他で形態の対立がある和語動詞と、形態の対立がない漢語サ変動詞という違いにその原因があると考えられるが、これについては 4.9 節で論じることにする。

¹²¹ すぐ直前では「災害が発生する原位置」とあり、この「災害が発生する」は誤用の可能性も否定できないが、母語話者の直観としてこのような使い方は (61b) よりも許容度が増すことは確かである。

¹²² この「入れる」は生産動詞であり、「刺青」は生産物である。移動ではなく使役発生事象である。

が、事態の把握の仕方が異なる。

- (63) a. [刺青師が] その男の背中に刺青を入れた。(使役変化他動詞構文)
b. その男の背中に刺青が入っている。(使役起動交替した自動詞構文)
c. その男は背中に刺青が入っている。(所有 A：場を主題化した自動詞構文)
d. その男は背中に刺青を入れている。(所有 B：場焦点化他動詞構文)

〈場〉が主語位置に来る場合、(63c)のように場を主題化させるよりも、(63d)の場焦点化他動詞構文のほうが適切な文脈があることは次の用例からもわかる。「刺青が入っていました」と言っても文法上なら問題はないが、「刺青を入れていた」のほうが自然に感じるのではないだろうか¹²³。

- (64) 着ていた黒い背広の上着を脱ぎました。(…略…) 男は背中に刺青を入れていました。それを見せるために、透き通った紫色のシャツを身につけているのです。

(新潮文庫 100 冊[6])

このように事態の成立に動作主が認められる場合であっても、使役変化他動詞と同形態のまま異なる事態把握によって言語化されることは、日本語の構文を分析する上で非常に重要な点である。そこでこのようなタイプについては、4.5 節の「移動と所有の関係」で場焦点化他動詞構文をⅠ型とⅡ型とⅢ型に分類するところで詳しく論じる。なお、このように発生場所が人の場合は、2.6.4 節で紹介した「介在性の表現」に相当すると考えることもできる。これについては、4.10 節で改めて取り上げる。

4.3 消失と所有の関係

4.3.1 分析する動詞とイベントスキーマ

この節では、非存在の原因として発生とは逆の消失のイベントが読み込まれる場合を取り上げる。いまここに対象が存在しないのは、その対象が消失しからだという捉え方である。取り上げる動詞は「欠ける」「欠く」、「無くなる」「無くす(失くす)」、「亡くなる」「亡くす」である、イベントスキーマを示しておく。なお、「紛失・喪失する」もここに含まれるが、漢語サ変動詞は 4.9 節で取り上げて論じる。

¹²³ 男の人物描写に焦点を当て「男は～」と叙述する場合、「男は背中に刺青を入れていた」と「男は背中に刺青が入っていた」のどちらを用いるかで、描写する人の事態の捉え方が微妙に異なるものと思われる。筆者の語感では前者の場焦点化他動詞構文のほうが「男と刺青の一体感」つまり特徴付けとしての解釈が強く全面に出るように思う。これは「太郎は母を亡くした」と「太郎は母が亡くなった」と同じような表現効果だと考えられる。なお、刺青に焦点を当てれば「男の背中には龍の刺青が入っていた」となるだろう。ただし、ここで「～には」が現れる場合、本論文の分類では所有 A に相当する。刺青がその時にその場所にあったという意味ではなく、その〈場〉(＝背中)がどのような特徴を有しているのかという視点で述べられているからである。

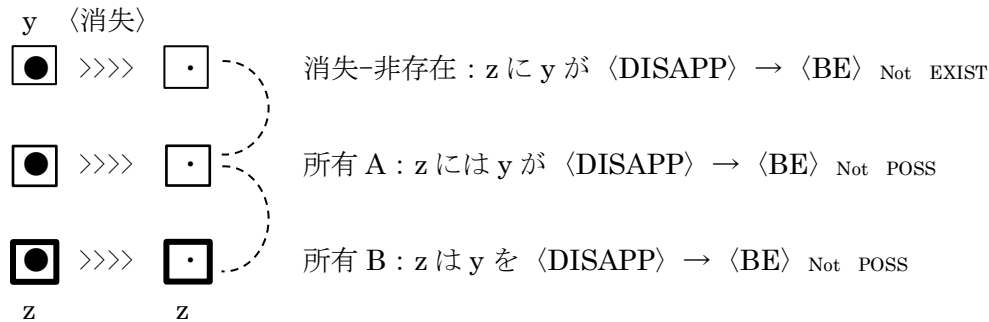


図 4.8 消失と所有のイベントスキーマ¹²⁴

4.3.2 「欠く」と「欠ける」

「欠く」は元々「太郎は茶碗を欠いた」のような使役変化動詞としての用法がある。しかし、現代語ではこのような使役変化の意味は薄れ、変件事象のほうに焦点が当たるようになったと考えられる。その結果、消失する対象に焦点を当てた自動詞構文と、消失対象の母体、すなわち〈場〉に焦点を当てた場焦点化他動詞構文が成立する¹²⁵。「欠ける」「欠く」を状態動詞として扱わないのはこのような使役変化から意味の縮小がありながらも、使役変化の用法を残しているからである。「欠ける」は 4.1.5 節で示したように存在物をニ格名詞句によって表示できる。つまり、「欠ける」と「欠く」は次のように三つの構文を作ることができる。

- (65) a. 太郎 (に) は協調性が欠ける／欠けている。

所有 A: <DISAPP> → <BE> POSS (参照点構造自動詞構文)

- b. 太郎は強調性を欠く／欠いている。

所有 B: <DISAPP> → <BE> POSS (場焦点化他動詞構文)

- c. 太郎は協調性に欠ける／欠けている。

状態: <BE> STATE (自動詞文)¹²⁶

(65a) は図 4.9 に示したように〈場〉(z) としての太郎に心的にアクセスし、そこに対象物「協調性」が存在しないという情報に至るという事態把握である。「対象物が存在しない」とわかることは「穴(=ないもの)が存在する」とわかることと同じである。(65c) は図 4.10 に示したように、対象としての〈場〉(z) が全体として「満たされていない状態であ

¹²⁴ DISAPP は、消失 (DISAPPEAR) の概念を表している。

¹²⁵ 「欠く」については、取り外しの意味で再帰構造になっていると分析することも可能である。つまり「脱ぐ」がそうであるように、「自分の身からあるものがないようにする」という意味である。ただし、現代語としてはそのような再帰構造をもつ使役変化動詞の用法はないため、本論文では意味の希薄化にとともに、変件事象のみが焦点化されていると分析する。

¹²⁶ <BE> STATE はモノの位置 (存在) ではなく、モノの状態の概念を表している。

る」という把握がまずあり、それがどのような観点において成立しているのか、観点の〈場〉にアクセスするという事態把握だと考えられる。このような捉え方は「～は～に富む」と同じである（4.1.5 節）。

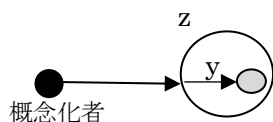


図 4.9 「z(に)は y が欠ける」

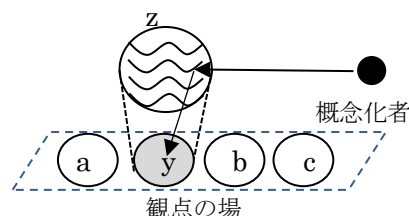


図 4.10 「z は y に欠ける」

4.3.3 動詞の形態について（修正版）

4.2.3 節で場の焦点化による構文交替における動詞の形態について、二つのことを規定した。一つは同形態で交替する場合で¹²⁷、もう一つは、場焦点化他動詞構文で使役変化他動詞と同じ形態の動詞を用いる場合のことである。ここで、場焦点化他動詞構文に現れるもう一つのタイプを示す。それは、「場焦点化他動詞」とでも呼ぶべき独自の形態である。これまで、場の焦点化によって所有の概念に転換して作られる他動詞構文において、その動詞を「場焦点化他動詞」とは呼ばなかった。その理由は、事態の把握のあり方が構文を変えるという見方に立ち、存在や変化を表す「自動詞」あるいは使役変化を表す「他動詞」が場焦点化他動詞構文にも用いられると考えるからである。

ところが、場焦点化他動詞構文しか作らない動詞というものもある。「欠く」には希薄化したとはいえ使役変化他動詞としての用法があった。「なくす（無くす）」と「なくす（亡くす）」は同語源だが自身のコントロールが及ぶ物に対しては使役変化他動詞の用法があるが、人の場合にはそれが無い。したがって、「なくす（亡くす）」はもっぱら非意図的な事象を表している¹²⁸。また、モノが対象であっても「失う」という動詞はやはり非意図的な事象しか表さない。

- (66) a. 先月無くした財布が見つかった。
 b. 世の中から男女の差別を無くそう！
 c. 彼女は幼いときに、母親を亡くした。

¹²⁷ 消失事象の読み込みによって成立する場焦点化他動詞構文の中で、この両用動詞の型に該当するものとして、森田（1994）が挙げた「迷いを去る」「迷いが去る」をここに含めてもいいかもしれない。ただし、「～を去る」には使役変化他動詞としての用法が残っていると見られる場合がある。

¹²⁸ 「亡くす」は、「滅亡」や「滅ぼす」との連想から、物を対象に「亡くそう」「亡くせ」のような意志表現で使われる場合があるようだが、ここで問題にしているのはあくまでも「人」についての「亡くす」である。なお、もっぱら場焦点化他動詞構文にのみ使われるという点では 4.6 節で取り上げる単他動詞の「教わる」「預かる」なども共通するものがある。

- d. *世の中から極悪人を亡くそう！¹²⁹
- e. 彼は {全財産・自信・信頼・チャンス} を失った。
- f. *欲を失おう！

重要なことは、単純に自動詞と他動詞の対応と見るだけでは、これらの動詞も他動詞というだけで処理されてしまうが、これらは「モノの所有」の状態から「モノの非所有」への〈場〉(人を含む)の変化を表す動詞である。(67a)は場焦点化他動詞構文であり、主語位置にある名詞句は所有者の意味役割をもつため、統語上も受身文が成立しない(67b)¹³⁰。その点で使役変化他動詞とは異なるのである(67c,d)。

- (67) a. 太郎は完全に自信を失った／なくした。
- b. *自信は太郎に(よって)完全に失われた／なくされた。
- c. 太郎は完全に箱を壊した。
- d. 箱は太郎によって完全に壊された。

「切れる」「欠ける」という自動詞には、形態上対応する使役変化他動詞である「切る」「欠く」がある。したがって、もし事態把握の違いによって場焦点化他動詞構文ができるとしたら、その形態は本論文の形態の規定に従えば、「切る」「欠く」になることが予想される。事実「欠く」は上述のとおり、それが成立する。しかし、消滅の概念を表す「切れる」に対応するのは「切る」ではなく、「切らす」である。さらに興味深いのは、「欠ける」についても、「欠く」とは別に「必要なものを、なしですます」(明鏡国語)という意味で「欠かす」という独自の形態が存在することである¹³¹。

- (68) a. 太郎には思いやりが欠ける。
- b. 太郎は思いやりを欠く。
- (69) a. (花子 [のうちに]) は 醤油が切れた。
- b. *花子のうちは醤油を切った。
*醤油を切った。 (「なくなった」の意で)
- c. (花子 [のう]) は 醤油を切らした。

¹²⁹ ここでの「*」の判定は、「命を奪って存在を消す」という意味である。「極悪人がいない世の中にしよう」という意味ではない。

¹³⁰ ここで受動文が成立しないというのは、対応する能動文の主語名詞句を格下げして「～に(よって)」と示す受動文が成立しないという意味である。「失う」は受身接辞をとり「両者の信頼関係が失われた」「失われた10年を取り戻すことはできない」のように用いることができるが、「両者に(よって)信頼関係が失われた」「国民に(よって)失われた10年を取り戻すことはできない」とは言えない。

¹³¹ 意味が同じというわけではない。「欠かす」は「欠く」と異なり、否定と呼応して使われ、どちらかという日常生活にかかわることが対象として取り上げられることが多い。また、「欠かさず」の形で副詞のように用いられることも多い。

- (70) a. 1 クラス 30～40 人を対象にする小学校の英会話学習では、こうした個別指導、個別支援を欠くことができない。(BCCWJ[6])
- b. (…略…) 後村上天皇は、日々の礼拝を欠かすことがなかったとも伝えられている。(BCCWJ[7])

4.2.3 節で示した動詞の形態の規定を修正したものを次のようまとめておく。

＜場の焦点化による構文交替の動詞の形態について（修正版）＞

- | | |
|--------------------------|-------------------|
| [1] 「(原因事象→) 〈BE〉 EXIST」 | (存在・変化を表す自動詞構文) |
| [2] 「(原因事象→) 〈BE〉 POSS」 | (所有 A：参照点構造自動詞構文) |
| [3] 「(原因事象→) 〈BE〉 POSS」 | (所有 B：場焦点化他動詞構文) |

自動詞構文[1][2]と他動詞構文[3]の動詞の形態に注目すると三つのタイプに分類できる

- ① [1] [2] と [3] の動詞が同じ形態（両用動詞）¹³²
- ② [1] [2] は存在・変化を表す自動詞の形態で、[3] は使役変化他動詞と同じ形態
- ③ [1] [2] は存在・変化を表す自動詞の形態で、[3] が独自の形態をもつ
 - ・欠かす：タイプ②の動詞「欠く」もある（⇔ [1] [2] 欠ける）
 - ・切らす：タイプ③のみ（⇔ [1] [2] 切れる）

なお、③に該当する動詞を含め、その形態がもつばら [3] の場焦点化他動詞構文にしか用いられない場合、これを「場焦点化他動詞」と呼ぶことにする。

- ・変化を表す動詞：切らす、欠かす、亡くす、失う、など
- ・状態を表す動詞：要する、有する、誇る、擁する、帯びる、など

4.4 存続と所有の関係

4.4.1 存続と消滅の関係

この節では、ある対象物が存在する原因として存続事象が読み込まれる場合を取り上げる。ここで考える存続とは消失しないでその場にある状態を続けるということである。そこで、消失のイベントスキーマをベースにしてそこに否定の概念を組み込むことによってそのスキーマを示すことができる¹³³。取り上げる動詞は「残る」「残す」「とどめる」「伴う」である。最初にイベントスキーマとの対応を示しておく。

¹³² 自動詞用法と他動詞用法のどちらが先に生まれたのかはそれぞれの動詞によって事情が異なるだろう。ほぼ同時に生まれた可能性もあるが、その点については本論文では扱わない。ただし、4.8 節で扱う「有対自動詞の両用動詞化」では、もともと存在した自動詞と同形態でヲ格名詞をとる他動詞としての使い方が生じたと分析される。

¹³³ 理論的には、これと反対に「発生」しないことによる「非存在」の存続も考えられる。しかし、現代語の動詞の中に単独でその概念を表すものはないと思われる。

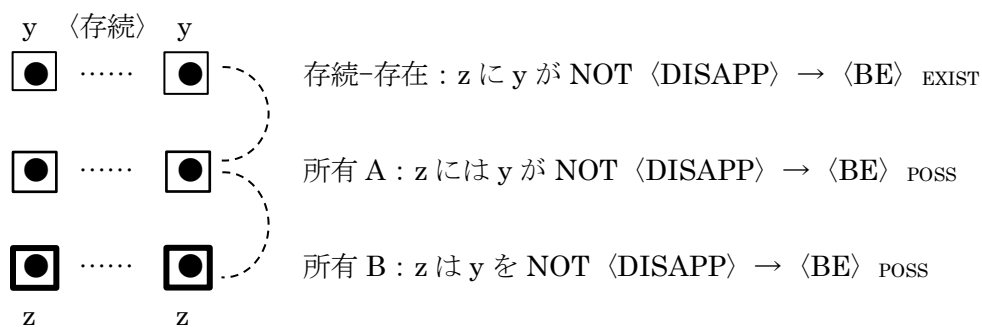


図 4.11 存続と所有のイベントスキーマ

「残る」と「残す」は次のように三つの構文を作る。

- (71) a. 町に昔の面影が残る／残っている。¹³⁴

「NOT 〈DISAPP〉 → 〈BE〉 EXIST」(自動詞構文)

- b. 町には昔の面影が残る／残っている。

所有 A: 「NOT 〈DISAPP〉 → 〈BE〉 POSS」(参照点構造自動詞構文)

- c. 町は昔の面影を残す／残している。

所有 B: 「NOT 〈DISAPP〉 → 〈BE〉 POSS」(場焦点化他動詞構文)

(71c) の場焦点化他動詞構文は、〈場〉に際立ちが与えられ、〈場〉があるモノをなくさずに維持していること、つまり変化しないでいるという事態把握に基づいて作られる構文である。形態は、使役変化他動詞と同じでタイプ② (cf. 4.3.3 節の形態の規定) である。しかし、使役変化他動詞 (例えば「山田さんはご飯を残した」など) と異なり動作主が存在するわけではない。(72) も同じことが言える。

- (72) 久高島の祭りは、日本のごく古い時代の祭りの面影を残しているものだと聞いて出かけた。(BCCWJ[8])

次に「伴う」について考察する。「伴う」はもともと「X が Y と一緒について行く」という意味で、そこから X と Y が「表裏一体の関係で存在する」(新明解) という意味に拡張している。存在の様態として「表裏一体の関係」という情報が付加されているわけである。しかし、そのような様態で存在するというだけの場合も確かにあるが、一方が他方から離れることなくそこにあり続けるという意味が含意されている場合もあると考えられる¹³⁵。

¹³⁴ 「残る」「残す」という形でも状態を表すことができるが、元々変件事象なので、状態を表す場合には「ている」の形式を使うのが普通である。

¹³⁵ 小柳 (2009) では「～が/を伴う」を存在と所有のイベントスキーマに分類したが、本論文では存続と所有のイベントスキーマに分類する。ただし、「存在と所有」に該当する例があることを否定するものではない。

そこで、「伴う」については原因事象の読み込みがない場合もあるという含みをもたせ、下に示したように、存続事象を括弧に入れておく。「伴う」は両用動詞で、構文交替で形態が同一のタイプである。

(73) a. この仕事に危険が伴う／伴っている。

「(NOT 〈DISAPP〉 →) 〈BE〉 EXIST」(自動詞構文)

b. この仕事には危険が伴う／伴っている。

所有 A : 「(NOT 〈DISAPP〉 →) 〈BE〉 POSS」(参照点構造自動詞構文)

c. この仕事は危険を伴う／伴っている。

所有 B : 「(NOT 〈DISAPP〉 →) 〈BE〉 POSS」(場焦点化他動詞構文)

「～を伴う」は(74a, b)のような定型の構文を作るほか、(74c)のように目的を表す「～には」が来て、「～には～を伴う」となる場合がある(cf. ～には～が伴う)。この場合、〈場〉は文脈に埋め込まれており、そのような目的に至るまでの行為の道筋として捉えられていると考えられる。

(74) a. 朝走るという単純な行為でさえも、毎日続けるとなると苦痛を伴う。

(BCCWJ[48])

b. 梅毒や麻疹といった発疹を伴う病気は、発疹がひどい人ほど病気自体は軽くすむことが、これを証明している。(BCCWJ[49])

c. このため、国により研究者数の測定方法に差異があり、国際比較には困難を伴う。(BCCWJ[50])

所有 B が〈場〉の特徴付けになっていることは、連体修飾節に使われることが相対的に多いことから見て取れる。下に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所)を用いた検索結果を示しておく¹³⁶。

表 4.4 「～が伴う」と「～を伴う」の連体修飾節

	総数(x)	連体修飾節で用いられている数(y)	割合(y/x)
が伴う	415	10	2.4%
を伴う	2533	329	13.0%

4.4.2 原因主語が認められる場合

自然災害が猛威を振るい、ある地域に被害をもたらした場合や戦争が被害をもたらした

¹³⁶ 検索ツール「中納言」を利用。検索条件：キー「伴う」(語彙素)(動詞)、前方共起「が」「を」、後方共起「品詞」(名詞・普通名詞・一般)。なお、検索結果から、形式名詞(「こと」「はず」「わけ」など)が被修飾語となっている例を手作業で除外した。

場合、「爪跡を残す」という表現が使われることがある。(75a)は自然災害という原因を主語にとる使役変化動詞の「残す」である。そして対象である場所を主語にした自動詞文も成立し(75b)、使役起動交替することが確認できる。4.2.5節で示した「刺青を入れる」がそうであったように、「爪跡を残す」も被害(損害)が甚大でそれがその場を特徴付けるのに十分なので、(75c)のように場所を主語位置に据えた場焦点化他動詞構文が成立することが期待できる。事実「爪跡を残す」には(76)のような用例が観察される。

- (75) a. 台風 15 号は各地に爪跡を残した。
b. 各地に台風 15 号による爪跡が残っている。
c. このあたりの農地は台風 15 号による爪跡をまだ残している。

- (76) 立て籠もりの戦場となった講堂や校舎は夢と消えた闘争の爪痕を無惨に残し、復旧はまだ遠い先だった。(BCCWJ[10])

上の例文では、〈場〉を取り立てて(所有 A の構文として)「…講堂や校舎には闘争の爪痕が残り、…」という表現も可能である。場焦点化他動詞構文が選ばれるのは、場の特徴付けという意識が強く働くという要因だけでなく、談話の流れにおける「語りの視点」も影響することはこれまでの分析で指摘したとおりである。(77a)は災害の威力に焦点を当てて叙述する場合であり、使役変化他動詞が用いられている。(77b)は爪痕の状況を具体的なモノに焦点をあてて叙述しており、「～が残る」と自動詞が選択されている。(77c)では、来場者が題目化されたことと連動して「会場の周囲」は背景化するために「～が残る」が選択されたと考えられる。

- (77) a. 大地震はKスタ宮城に大きな爪痕を残した。選手、スタッフとその家族の安否確認を終え、球団職員が午前中から球場の被害状況を確認。電気は復旧したが、ガスは完全に停止。(毎日新聞 2011 年 3 月 13 日)
b. 同じ地域で撮影されたのに、一方には津波で流されて横転した車など、生々しい爪痕が残るのに対し、片方はほぼ無傷。明暗を分けたのが、この地域を縦断する仙台東部道路だった。(毎日新聞 2011 年 5 月 10 日)
c. 7月からは(…略…)被災地でも落語会を開いてきた。会場の周囲はまだ震災の生々しい爪痕が残るが、来場者は誰もが笑みを浮かべてくれる。(毎日新聞 2011 年 10 月 21 日)

興味深いのは、連体修飾節では、被修飾名詞の特徴付けとなることから場焦点化他動詞構文が比較的多く表れることをこれまでの分析で観察したが、「～を残す」ではやや異なる振る舞いを見せる。(78a)では連体修飾節だが、客観的に「～が残る」のほうが自然であ

る。災害の爪痕はできるだけ早く消えたほうがいいと期待するものである。そのような意味的な特徴によって (78a) は「残す」より「残る」のほうが自然に感じられると考えられる。ところが、(78b,c) のように「残すべきもの」という価値判断が入ると、「～を残す」という形式も使われ、むしろ「～が残る」よりもふさわしいという印象を与える。これは場焦点化他動詞構文がもつ特徴付けという性質と「残す」という動詞の意味が相互作用して価値判断が反映したためだと言える。

- (78) a. 液状化の爪痕が生々しく残る市立〇〇小学校の投票所で投票を済ませた歯科医師の〇〇さん (41) は「こういう時こそ県議もきちんと選ぶべきだった。

(毎日新聞 2011 年 4 月 25 日一部伏字にする)

- b. 震災から 3 年が過ぎた沿岸部を歩くと津波の爪痕を残す建物などが取り壊され、当時の情景が思い出しづらくなった。(毎日新聞 2014 年 6 月 7 日)
- c. 被災したビルや乗り物を保存するかどうかが議論されている。津波の爪痕を残す建物などを、被災のシンボルとして後世に残そうという動きがあるのだ。

(毎日新聞 2012 年 3 月 13 日)

4.4.3 動作主主語が認められる場合

(79a-c) のように歌や俳句などの芸術作品や写真、成績などは、残すという行為をする動作主主語が認められる。それが使役変化動詞としての意味よりも結果のほうに焦点が移り、場焦点化他動詞構文によって、そのようなものが残っていることを、〈場〉としての人の特徴付けとして述べる形式だと言える¹³⁷。この構文は「人のモノが残る」と「人はモノを残す」との対立になっている点で、4.7 節で扱う状態変化と所有の関係に近いと考えられる。(79d, e) はそのような〈場〉としての人の特徴付けになる他動詞構文が「名を残す」「足跡をとどめる」という定型句になったものである。

- (79) a. ブーシェ フランソワ・ブーシェ (1703—70)。フランスの画家。イタリアに留学して (…略…) 芸術家で、(…略…) 風俗画のほか、壁面装飾にも多くの作品を残している。(BCCWJ[45])
- b. 龍馬は三十二歳の生涯で十枚ちかく写真を残している。幕末にこれだけの写真を残した武士は異例で、龍馬のほかには見当らない。(BCCWJ[46])
- c. 世界相撲選手権でドイツチームはなかなかの成績を残しているし、一九九九年には第八回世界選手権がドイツで行われる。(BCCWJ[47])
- d. 菅原道真といえば一平安時代の学者にして政治家、遣唐使の廃止などで歴史に

¹³⁷ このタイプの他動詞構文は、(5 月になってもこたつを出したままになっている人に対して)「あいつ、まだこたつを出しているよ」というアスペクトを表す「他動詞+ている」構文とのつながりが認められる。ここで「こたつが出ている」でも「こたつを出してある」でもなく、「出している」が使われることに注目されたい。

名を残している偉人である。(BCCWJ[43])

- e. 歴史は彼らの名前を忘れたけれども、彼らの仕事は忘れられず、芸術史にその
足跡をとどめている。(BCCWJ[44])

4.4.4 分離不可能所有と分離可能所有

場焦点化他動詞構文は、そこに存在するモノによって特徴付けられるという所有の概念が言語化したものである。したがって、存続のイベントスキーマに合致して言語化される「～を残す」という構文では、場と存続物の一体感が強く意識される。したがって、単なる場所とそこに存在するモノの二者関係だけでは成立しがたいことが期待される。事実、祭りで集まった人が、終わったあとにも残っているような状況を捉えて、(80b)のように言うのは非常に不自然である。場焦点化他動詞構文は場全体の変化に注目し、その場を特徴付けるものとして語る構文である。そのため、単に人がある場所に集まった場合、場所に際立ちを与えて述べるには、それなりの文脈がなければ許容度が上がらない。

- (80) a. 大勢の人が広場に残っていた。
b. ??/*広場は大勢の人を残していた。

興味深いことに、自動詞構文同士の場合格交替が比較的広範囲に成立する英語においても、‘remain’のような動詞は場所格交替しない。

- (81) a. A crowd of people remained in the square.
b. *The square remained with a crowd of people. (Levin1993 : 250)

「～を残す」のような場焦点化他動詞構文が成立するのは、二者が一体化している場合であり、それは多くの場合、「町 - 面影／風情」「顔 - 母の面影」「モノ - 原型」「人 - 名」の関係のように「主体とその側面（属性）」を表す名詞で一体性が強く感じられるものである。次の例もそのような主体とその側面の一体性が強く感じられる。

- (82) (…略…) チェルシー・ホテル。ここはかつてあまりお金のない文人や芸術家の溜まり場としてならしたところで、今でもその余韻を残している。(BCCWJ[9])

客観的には分離可能所有のように見える場合でも、上に挙げた「人 - 足跡」「人 - 作品」「人 - 写真」「人 - 成績」「人 - 言葉」の二者関係のように存続物に生産物が来る場合にはその人の履歴として所有物を述べるというスタイルになる。

- (83) 例えば、寅彦は随筆集『柿の種』に、「哲学も科学も寒き嚏哉」という俳句を残し

ている。(BCCWJ[42])

〈場〉がある特定の場所になっている場合では、次のような用例もモノと〈場〉の一体性が強く意識されるはずである。

(84) 7万本が茂った名勝・高田松原は津波の直撃を受け「一本松」を残して壊滅した。

(朝日新聞 2012 年 1 月 5 日)

4.5 移動と所有の関係

4.2 節から 4.4 節まで対象物が存在する原因として発生、消失、存続の三つの事象が原因として読み込まれて、存在から所有の概念に転換して言語化されている構文を見てきた。次の移動と所有の関係に入る前に、外界の把握の在り方と構文の対応関係を整理し、場焦点化他動詞構文を三つに分類し、それぞれをⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型と呼ぶことにする。この分類を踏まえて今後の議論を進めて行くことにする。

4.5.1 Ⅰ型とⅡ型

これまで場焦点化他動詞構文を、読み込まれる原因事象別に見てきた。各節では最初に「非意図的な事象」を取り上げて考察し、最後に実際には動作主主語あるいは原因主語が存在する使役変換事象がベースになっている場合があることを示した。

①非意図的な事象がベースになる場合

(a) 原因事象によってそこに存在することになったモノに焦点をあてて言語化するのか、それとも (b) そのモノを所有することになった〈場〉の変化（またはその逆¹³⁸⁾として言語化するのか。

②使役変換事象がベースになる場合

(a) その動作主の対象への働きかけとそれによって引き起こされる変化の全体に焦点をあてて言語化するのか、それとも (b) 使役変換によって変化する対象に焦点を当てて言語化するのか、あるいは (c) その使役変換によってモノを所有することになった〈場〉の変化（またはその逆）に焦点を当てて言語化するのか。

①の (b)、② (c) の事態把握によって場焦点化他動詞構文が生まれる。今後の議論のために、それぞれをⅠ型、Ⅱ型と呼ぶことにする¹³⁹⁾。

¹³⁸⁾ 「その逆」とは、「非所有から所有への変化」とは逆に「所有から非所有への変化」のことで、消失事象のイベントスキーマに基づいた事態把握のことを指している。

¹³⁹⁾ なお、現時点ではⅠ型とⅡ型の二つであるが、4.5.4 節でⅢ型が導入される。さらに、4.7.3 節でⅠ型とⅡ型の中間に存在するものとして、Ⅰ&Ⅱ型が導入される。

- ① (b) → I 型の場合焦点化他動詞構文 (所有 B) ¹⁴⁰
 ② (c) → II 型の場合焦点化他動詞構文 (所有 B)

②については、これまで使役発生変化、使役消失変化、使役存続（非）変化がベースになって作られる場合焦点化他動詞構文をいくつか紹介したが、例はそれほど多くなかった。そもそも使役変化の事態把握はモノに対する働きかけとそのモノの変化を表す。そのイベントスキーマの中で〈場〉の変化に焦点を当てて言語化する場合にはそれなりに動機付けが必要になる。その動機付けが、変化結果として存在するモノが〈場〉と一体化しているという事態把握であり、それを〈場〉の特徴付けとして語る視点であると分析した。I 型と II 型のイベントスキーマとそれをもとに言語化される構文タイプは次のように示される。

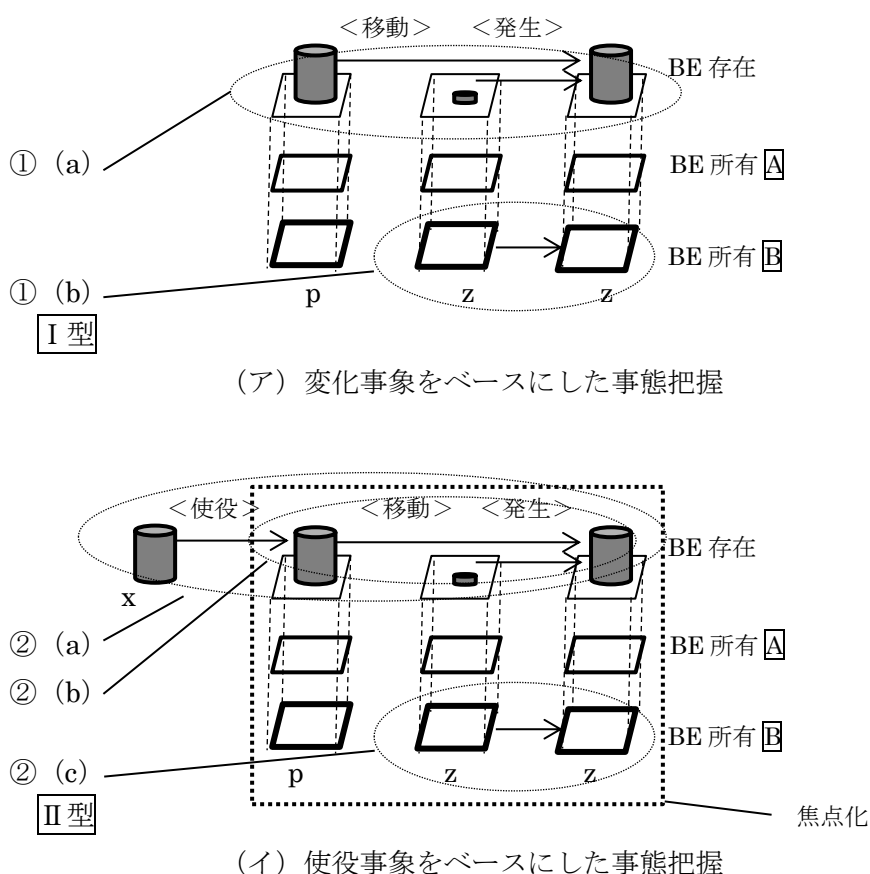


図 4.12 I 型と II 型のイベントスキーマ

この違いを踏まえて、この節では対象物が存在する原因として移動事象が読み込まれる場合を取り上げる。イベントスキーマは次のように示される。

¹⁴⁰ 今後の議論では所有 B を中心に進められるが、正確に言えば、I 型と II 型には所有 A に対応する「参照点構造自動詞構文」も存在する。

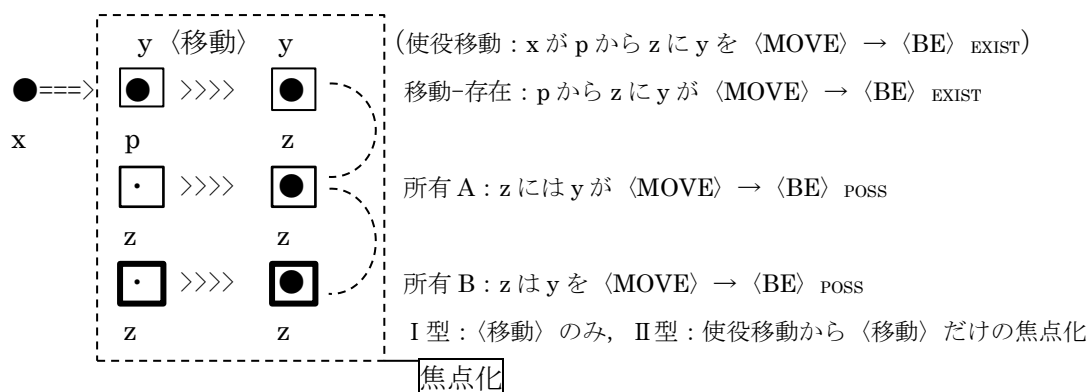


図 4.13 移動と所有のイベントスキーマ¹⁴¹

4.5.2 非意図的な事象の場合（I 型）

非意図的な事象で、あるモノがある場所に移動した場合、例えば、ほこりがしばらく使っていなかった机にたくさんあるという状況については、(85a) または (85b) のように表現するだろう。(b) は所有 A である。ところが、机という場の変化に注目したとしても、(c) のように表現するのは特別な文脈がなければ不自然である。移動事象が原因として読み込まれる I 型の所有 B は成立しがたいのだろうか。

- (85) a. 机にほこりがたくさん付いている。
 b. 机には、ほこりがたくさん付いている。
 c. ?? 机は、ほこりをたくさん付けている。

次の例でも、他動詞文の解釈は原因主語の解釈が入り込み、純粹に I 型の場合焦点化他動詞構文になっているのかの判断は微妙である。

- (86) a. スイカの皮に（は）アリがいっぱい集まっている。
 b. ?スイカの皮 {が／は} アリをいっぱい集めている。

ここで発生事象、消失事象、存続事象が原因として読み込まれた I 型の場合焦点化他動詞構文を思い出してみる。それは発生母体の内部の性質、内部活動、内部機能によって、あるモノが自律的にその場に発生したり、その場から消失したり、それがその場に消えずに存続していることを表していた。つまり、上で考えた「ほこり」と「机」では、〈場〉となる机にそのような性質、活動、機能がある自律的な変化事象が起こるとは把握されないので

¹⁴¹ MOVE は移動の概念を表している。

ある。このことから移動事象が原因として読み込まれてⅠ型が成立するとしたら、それは移動先のある母体にそのような自律的な変化する事象が起こる何らかの性質があると把握される場合だと推測される。事実、そのような場合にはⅠ型が成立する。ほこりは静電気をもつ物体に引きつけられることを、百科事典的な知識として持っている。だから「ほこり」と「机」では不成立だった文も(87)であれば成立する。磁石も鉄を引きつける力を持っていることを知っている(88b)も成立する。

(87) 静電気を帯びたセルロイド版がたくさんほこりを付けている。

- (88) a. 磁石に蹉跎がたくさん付いている。
b. 磁石が蹉跎をたくさん付けている。

ところで、この静電気を帯びた物体や磁石などは、それ自体が自分自身にモノを付ける、つまり(89a,b)のように再帰と解釈することもできる。いずれにしても、(89c)の人が動作主にたつ使役変化他動詞としての「付ける」と異なり、自律的な変化する事象であることは確かである¹⁴²。

- (89) a. 静電気を帯びたセルロイド版が(自分自身に)たくさんほこりを付けている。
b. 磁石は(自分自身に)蹉跎をたくさん付けている。
c. 花子は磁石に蹉跎をたくさん付けている。

さて、上のセルロイド版や磁石の例からは、再帰構造が場焦点化他動詞構文と何らかのつながりがあることが示唆される。実際、今後の議論の中で(90b)が変化後の状態を表している場合も場焦点化他動詞構文だと分析される。

- (90) a. 磁石は(自分自身に)蹉跎をたくさん付けている。(=89b)
b. 花子は(自分の体に)ローションをたくさん付けている。

そこで再帰構造がベースになって生まれる場焦点化他動詞構文を新たに認め、4.5.4節でそれをⅢ型として分析する。しかし、その前に移動事象が原因として読み込まれるⅡ型の事例を考察する。なお、「含む」という動詞は「ほうれん草は100グラムあたり30ミリグラムのビタミンCを含む」「スポンジが水をたっぷり含んでいる」という場焦点化他動詞構文

¹⁴² ここで自律的とは、使役主が関与していないという意味である。静電気をどのような形で帯びるようにしたかは問わず、そのような物体があれば、人為的に関与せずとも、自然にほこりを付けるということを意味している。磁石の場合も、もし物体に磁力があれば、地面や砂場に置かれているだけで、自然に蹉跎を付けるということを意味している。このような観点からすれば、(89c)の「花子」は磁石に起こる自律的な現象を促進しているだけの存在でしかないと言える。

を作る。前者は発生事象が対象物が存在する原因として読み込まれたⅠ型、後者は移動事象が読み込まれたⅠ型だと言えそうであるが、形態上の特徴およびその多義性を考慮し、4.6.8節で特別に取り上げて分析する。そして、使役変化と再帰構造をベースにした複雑な様相を呈していることを示す。

4.5.3 設置動詞の場合（Ⅱ型）

人がある場所にあるモノを移動させ、その場所にそれが存在するようにする、という出来事は日常よくあることであり、事実、そのような事態を表す動詞には「設置動詞」という名称も与えられている。そしてこの設置動詞の類は、物の位置変化（＝移動）に焦点をあてて叙述することを本務とするが、把握の仕方によっては移動先の〈場〉の状態変化に焦点をあてて叙述することもできる。

例えば「付ける」という動詞は（91a,b）のように使役起動交替をし、受身文（91c）も成立するが、それとは別に、モノの移動先を主語位置に据えたⅡ型の他動詞構文（91d）を作る。

- (91) a. 花子は、かばんにかわいい人形のストラップを付けた。
b. (花子の) かばんに (は) かわいい人形のストラップが付いている。
c. (花子の) かばんに (は) かわいい人形のストラップが付けられている。
d. (花子の) かばんは、かわいい人形のストラップを付けている。

このように設置動詞の類は、その意味特徴からして設置されたモノがその〈場〉を特徴付けるものとして認識されれば、〈場〉の特徴を述べるⅡ型の他動詞文が比較的作りやすい。

- (92) a. 折しも顔見世月がはじまって、道頓堀の芝居小屋は常より大きな絵看板を掲げ、色とりどりの幟がはためき、向かいの茶屋は軒並に赤い箱提灯をぶら下げている。

(BCCWJ[12])

- b. その赤頭巾の童話は、二つの絵を載せていた。一つは、森の中で赤頭巾の娘がオオカミと出会う場面。もうひとつは、(…略…) (BCCWJ[13])
c. 実際、地方紙のほうが核心を突いた記事を載せていると思います。(BCCWJ[26])
d. 大阪市電が九条から発祥したことになんで、鉄道車輪をモチーフとして、ホームの壁面は円形をくりぬいたタイルをはめ込んでいる。(岡田久雄『阪神電車』Jtbパブリッシング)

ここで指摘しておかなければいけないことは、第二言語習得あるいは外国語教育における文法の知識として、対象の変化結果を述べる場合、自動詞には「ている」を付加し（93b）、他動詞には「てある」を付加する（93c）と学習するのだが、それとは別に他動詞に「てい

る」がついてⅡ型の場合焦点化他動詞構文(93d)が作られることにはあまり注意が向けられていなかった¹⁴³。(93d)は看板を設置した〈場〉である店の特徴付けを述べる文であり、その看板を所有することによってその店が特徴付けられることを意味している。

- (93) a. 店主が店の入り口に閉店を知らせる看板を出した。
b. その店の入り口には閉店を知らせる看板が出ていた。
c. その店の入り口には閉店を知らせる看板が出してあった。
d. その店は入口に閉店を知らせる看板を出していた。

(93d)は「場所」と「人」がメトニミー的にリンクしているという見方もできる。つまり、「その店は」と言っているが、実際には「(その店の)店主は」と言っているというわけである。だから「看板を出す」というのはおかしくない、という見方である。そのような見方は一概に否定できないし、認知言語学的な観点からそのように分析もできるだろう¹⁴⁴。しかし、その場合でも、なぜ実際には店主なのに「店」が主語位置に来ているのかということを説明しなければならない。結局、それは〈場〉が焦点化されているからだということになるだろう。(94)は店の「見え方(=姿)」に焦点が当たっている。

- (94) (…略…) 華麗な店と店の谷間に小屋のような質素で小さな店が「無料案内所」の看板を出しているのが見えた。私は足早に向かった。(BCCWJ[11])

工芸品には当然作者が存在するわけだが、その工芸品の特徴を述べる場合には、その作品に焦点が当たるので、Ⅱ型の場合焦点化他動詞構文が使われていても違和感がない。

(95) [壺の説明で]

胴部下部が膨れ底に小さな脚をつけ、口頸部は外に開いて立ち上がり、口縁に幅広で垂直の縁帯を作り出し薄い小さな円板を貼りつけている。(九州国立博物館『日本のやきもの』文化庁)

連体修飾によって〈場〉(となる対象物)が修飾されている場合も、通常は「動作主がそのようにした」という解釈よりは「そのような状態にある/そのような特徴を有した」とい

¹⁴³ アスペクトの形式と意味の対応を「完成性:スル/シタ」対「継続性:シテイル/シテイタ」(工藤 1995)と考えれば、(91d) (93d)の「付けている」「出している」は「結果継続」を表すと言える。しかし、ここで問題としているのは、「山田さんは(5月なのに)まだこたつを出している」の「出している」は「山田がこたつを出す」という運動の結果として対応しているが、「その店は(閉店時間を過ぎているのに)まだ看板を出している」の「出している」は「店が看板を出す」という運動の結果ではなく、「(人:店主)が看板を出す」という運動の結果である。それにもかかわらず、場を主語位置に据えて他動詞構文を作っている点に本論文は注目している。

¹⁴⁴ 例えば、「A社は商品に偽装したラベルを貼っていた」のような場合、「A社」は人を表していると考えるのはメトニミーである。

う意味で解釈される傾向が強い¹⁴⁵。

- (96) a. かわいい人形のストラップを付けたかばん
b. 最新の AV 機器を備えた部屋
c. 衛星放送を受信するためのパラボラアンテナを立てた家
d. 基礎部分に免震用の巨大ばねを設置したビル
- (97) a. 「何だって？ ちょっと待った」セスはミニステレオを置いている小さなキッチンに入り、音量を下げた。(BCCWJ[12])
b. 館内 1 階には卓球台やビリヤード台を数台置いている部屋があるのも、温泉宿らしくていい。(BCCWJ[14])

Levin (1993) が ‘Oblique Subject Alternation’ の一つとして挙げている ‘container subject alternation’ はここで扱っている II 型の他動詞構文と重なる¹⁴⁶。その中の一つである ‘incorporate’ に対応する日本語の「取り入れる」も II 型の他動詞文を作る。

- (98) a. I incorporated the new results into the paper.
私はその論文に新しい結果を取り入れた／盛り込んだ。
b. The paper incorporated the new results.
その論文は新しい結果を取り入れている／盛り込んでいます。
Levin (1993 : 82※日本語訳は引用者による)

(99a) のように焦点化された〈場〉が「～は」で明示される場合もあるが、(99b) のように「～では」となる場合も少なくない。これは「[動作主体が] ～では、～を盛り込んでい」の動作主が隠れていると見ることもできるが、「事故では死傷者を出した」の例のように、焦点化された〈場〉が文脈に埋め込まれており、〈場〉の特徴付けという側面をやや弱くするという語用論的な効果をもたらしているという解釈もできるだろう。

- (99) a. この点で、社会的学習理論は、認知理論の視点を大幅に取り入れているといえる。(BCCWJ[52])
b. 公表されたアクションプランでは、(…略…) 解体的出直しをすることや、不正に対応する「研究コンプライアンス本部」を設置することなどを盛り込んでい

¹⁴⁵ 影山 (1996 : 132) では、日本語では成立して英語では成立しない連体修飾句として「～た+場所名詞句」(下の例文の (ii) (iv) : 比較した英語は ‘V 過去分詞+Noun’) を挙げているが、これも本論文が主張する「場の特徴付け」という点と共通したものがあると思われる。(i) 顔にできたニキビ (ii) ニキビのできた顔 (iii) アタッシュケースに詰まった札束 (iv) 札束の詰まったアタッシュケース

¹⁴⁶ このような交替を起こす動詞として次のものを挙げている。amalgamate, contain, embed, include, incorporate, integrate, omit.

る。(毎日新聞 2014 年 8 月 27 日)

Levin (1993 : 82) で挙げられている動詞 ‘omit’ に対応する「省略する」「削除する」などの動詞はⅡ型の他動詞文を作る場合がある¹⁴⁷。移動イベントがそこに対象物が存在しない原因として読み込まれて、そこにそれがないことを表す動詞である。

(100) 第 2 に、独禁法 2 条 4 項の競争の定義規定は、昭和 28 年改正で、「国内における」を削除している。削除の理由は、(…略…) (BCCWJ[15])

4.5.4 再帰構造がベースの場合 (Ⅲ型)

これまで分析の対象としてきた場焦点化他動詞構文はⅠ型とⅡ型に分類されたが、もう一つのタイプが存在する。Ⅱ型の構文と対比するとよくわかるように、モノの移動先である〈場〉が他者であるのがⅡ型であり、自分自身であるのがⅢ型である。つまり、Ⅲ型は再帰構造がベースになって作られる場焦点化他動詞構文である。

4.5.4.1 再帰とは何か

日本語の再帰については、仁田 (1982) は、再帰の意味を次のように定義した上で、再帰的にしか用いられない動詞を「再帰動詞」と呼び、典型的な他動詞がその一用法として再帰的に使われる場合を「再帰用法」と呼び、両者を区別した。前者には衣服などの着脱を表す「着る」「被る」「履く」「脱ぐ」や「浴びる」が該当する。後者は様々な動詞があるが、(103) の「叩く」「振る」「噛む」はその再帰用法の例である。

(101) 再帰の定義 (仁田 1982 : 80)

〈再帰〉とは、動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻ってくることによって、動作が完結するといった現象を言う。

(102) a. 彼ハ入浴後イツモ冷水ヲ浴ビルコトニシテイル。

b. ソコニハベレー帽ヲカブッタ猫ガ立ッテイタ。

c. ココデハ靴ヲ履キ換エテ下サイ。

(同上 : 79)

(103) a. 子供ハ手ヲ叩イテ喜ンダ。

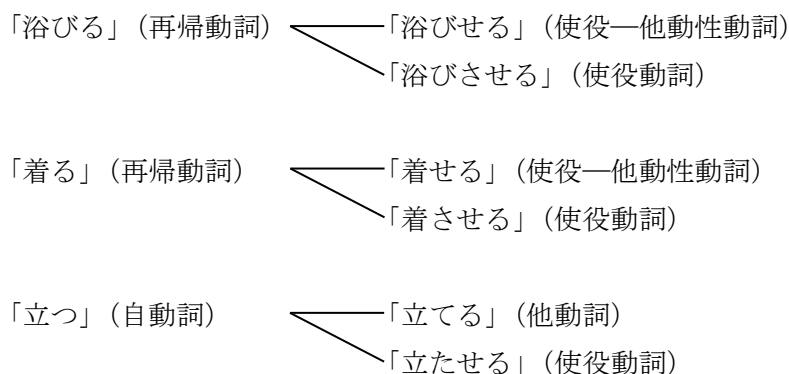
b. 彼ハ、コチヲ向イテ、手ヲフッテイル。

c. アワテテ御飯ヲ食ベタノデ、舌ヲカンデシマッタ。 (同上 : 87)

¹⁴⁷ この場合のイベントスキーマは、図 4.8 の「消失と所有のイベントスキーマ」に使役主が付加されたものが想定される。つまり、「存在」する原因として「発生」と「移動」は明確に区別されるが、「非存在」の原因としては「消失」も「移動」もその場からなくなるという点では同じことを表しているのである。

仁田（1982）は日本語の再帰を、意味と統語のつながりにおいて分析する先鞭を付けたものとして今でも参照されることが多い。その分析のポイントとしては、第一に再帰を「再帰動詞」と「再帰用法」に区別した点である。そして第二に、「動作主の動作が結局動作主に戻ってくるのが再帰動詞であり、動作主以外には動作の波及しないのが自動詞である」として、再帰動詞と自動詞の並行性に注目し、パラディグマチックな関係¹⁴⁸を示した点である。

（104）仁田（1982：81）の示したパラディグマチックな関係¹⁴⁹



本論文でもこのようなパラディグマチックな関係を重視して分析するが、仁田の示した関係では目が粗すぎ、見かけ上の形にとらわれていると考える。また、再帰の定義には問題がないものの、このあと議論を進めるにあたって、もう少しその内容を意味の構造と結び付けて分類しておきたい。その上で、仁田の示した「再帰動詞」と「自動詞」の並行性を批判的に検討し、修正する必要があることを主張する。

仁田（1982）を批判的に分析し、再帰という概念がはたして日本語に有意義な概念なのかを問うた論文に天野（1987a）がある。天野の批判は、本論文でも一部を除き基本的に支持するが、最終的に「〈再帰性〉という概念を特立する必要はなく、他の他動詞或いは他動詞構文と同様に扱ってさしつかえない」（同上：8）と結論づけることには賛同できない。確かに、日本語はロマンス語のような再帰動詞（再帰代名詞）を発達させているわけでもなく、また英語のように‘-self’に相当する代名詞を用いた構文を発達させているわけでもない。再帰が文法として発達している言語は、基本的に二者分離、つまり自分自身であっても客体化できる言語である。それに対して日本語は二者一体で主観的に事態を把握する言語である¹⁵⁰。したがって、類型論的な観点から言えば、日本語に積極的に文法として

¹⁴⁸ 「パラディグマチック」は仁田が用いている用語であるが、英語の paradigmatic（範例的な）という意味で使っていると考えられる。

¹⁴⁹ 仁田の例示と解説を参考に本論文著者がまとめたものである。仁田は、三項述語を作る複他動詞を「使役—他動性動詞」と呼び、再帰動詞に使役態の接辞を付加したものを「使役動詞」と呼んでいる。

¹⁵⁰ 池上（2006：167-169）では、英語の‘oneself’という再帰名詞が現れる構文と日本語の対応について、

の再帰を認める必要はないと言えるかもしれない。しかし、動詞の意味を分析する上では、やはり働きかけが「外」に向かうのか「内」(＝自身)に向かうのかという区別は重要で、再帰という概念は無視できないと考える。とはいえ、上に紹介した仁田(1982)の再帰の定義では「働きかけ」の部分が曖昧である。そこでその部分を補足した上で、本論文の目的に合わせて再帰を分類することにする。

4.5.4.2 本論文が提案する再帰の概念とその分類

<再帰の概念と分類>

再帰とは、動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻ってくることによって、動作が完結するという概念である。日本語の再帰には「働きかけ」の違いによって次の二つのタイプがある。

①：自分自身あるいは自身の体の一部が直接働きかけの対象になる。

②：外部の対象物に働きかけ対象物が自分自身あるいは自身の体の一部に移動する。

①は自身が働きかけの対象となる点で再帰であり、②は対象物は外部にあるが、自身が対象物の着点になるという点で再帰であると考ええる。

<再帰の概念と構文>

上の再帰の概念によって、①と②は次のような構文的特徴をもつと規定される。

再帰①：

自身(の体)がヲ格名詞で示されるが、動作主と対象は全体と部分の関係で同定されており、意味的につながりが保証されるので、日本語では「自分の」という句は統語構造に現れないのが普通である。

例) 太郎は立ち止った。そして(自分の／*他の人の) 腰を曲げてゴミを拾った。

再帰②：

外部の対象物がヲ格名詞句で示されるが、着点は動作主と同定されているので、意味的につながりが保証されており、「自分に」「自分の」は統語構造には現れない。

例) 太郎は(*自分に) 服を着た。太郎は(*自分の)(頭に) 帽子をかぶった。

本論文では、日本語を中心に扱うため「再帰動詞」という名称を仁田(1982)にならい、

英語の‘He washed himself’ ‘He washed the boy’を例に出しながら、日本語では「自分自身」というような言い方をせずに身体部位だけで処理するだけなのに対して、英語では「自分自身」は行為を蒙る対象としての<他者>並みに扱われていると指摘し、「英語の話し手は自分自身を客体化し、他者として捉えてみるという心理的な操作に関しては、日本語の話し手と比べると、はるかに抵抗感がなくやっつけのことができるように思える」と述べている。

また、池上(同上：187-191)では、日英の好まれる言い回しが、事態把握レベルの好みが反映されていると指摘した上で、「主客対立と主客合体」という把握の違いを論じている。言い換えれば「自己分裂」が容易にでき、<自己の他者化>が言語化に反映される英語に対して、<自己・中心的>で、それが<自己投入>というような認知的な把握に反映されるのが日本語であると指摘している。

上述の「再帰②」のように再帰専用、つまり着点が常に自分自身に指定されている動詞を指し示す用語として用いることにする¹⁵¹。上記の再帰の概念と分類②に従えば、再帰動詞は着衣動詞のみならず、「知る」「見る」「聞く」「含む」が「再帰②」の動詞の仲間に入ることになる¹⁵²。これらの動詞は 4.6 節で個々に取り上げて分析する。

次に再帰の概念と構文とのつながりについて分析の前提となる言語現象を、仁田 (1982) の主張点を批判的に検討しながら確認しておく。仁田 (1982) では、自身の再帰の定義にしたがって再帰動詞は「まものの受動」を作らないと主張し、この現象は「再帰が典型的な他動詞からはずれ、自動詞に近づいていることの統語的な一つの表れ」(同上: 84) だと結論づけた。これに対して、天野 (1987a) は再帰動詞は「まものの受動」を作ると反論し、再帰を根拠にして自動詞文に近づいていると判断することを批判している(同上: 5-6)。天野は、仁田が挙げた例文が受身文を作らない(ように見える)のは、無生物である名詞句を主語に据えておきながら、それを主語として昇格させて述べるのに十分な動機付けがないため、主語名詞句の属性を表すような文にすれば、(106) に示したように問題なく受身文は成立すると主張した¹⁵³。

- (105) a. 太郎ハ紺ノ背広ヲ着テイタ
b. *紺ノ背広ハ太郎ニ着ラレテイタ
c. 毎朝彼ハシャワーヲ浴ビル
d. *毎朝シャワーハ彼ニヨッテアビラレル (仁田 1982 : 83)

- (106) a. 森尾氏の意図したのよりも若い年齢の層が、よく彼のデザインした服を着ている。
b. 森尾氏のデザインした服は、彼が意図したのよりも若い年齢層によく着られている。
c. 町中の人が私のと同じ靴を履いている。
d. 私のと同じ靴が街中の人に履かれている。
e. 恵理子はベレー帽をわざと斜めにかぶっていた。
f. (恵理子の) ベレー帽はわざと斜めにかぶられていた。

(天野 1987a : 文中の下線は原文のまま)

¹⁵¹ ロマンズ語に多く見られる再帰動詞または再帰名詞を伴う動詞は、上の分類では①に相当するものである。したがって、再帰動詞という名称が日本語とで逆になってしまう点に注意されたい。

¹⁵² この後で論じるように、本論文では②を再帰の概念として取り入れることによって、従来、日本語では再帰動詞としては取り上げられなかった動詞(「知る」「見る」「聞く」など知覚動詞)も再帰動詞として「着る」の拡張事例として扱う。欧米の再帰が発達した言語においては、「見る」「聞く」は「自分自身を見る/聞く」が再帰動詞(代名動詞)の用法として挙げられるが、それは上の①の規定によるものである。ちなみに、張 (1993) は中国語の再帰動詞を論じるにあたり、「着る」「脱ぐ」などの着脱動詞のみならず、「見る」「聞く」などの視覚・聴覚動詞、そして「食べる」「飲む」などの飲食動詞も再帰動詞として扱っている。その理由は上に示したように②を再帰の定義に組み込んでいるからである。張は、「動作が行われた後、動作の作用を及ぼされる対象が結果的に動作主の側に帰して、動作主に何らかの変化をもたらす動詞」(p.531)であると規定している。

¹⁵³ このような主語名詞句の属性を表す受動文の成立については、Kageyama and Ura (2002) が叙述タイプの違いに注目して英語を分析しており、影山 (2007) では日英を対照してその特徴をまとめている。

この天野の指摘は受身文の成立の可否にかかわる要因としてはまったく正しいと思われる。再帰とのつながりについて言えば、能動文の目的語が無生物の場合、有情者とは異なり、取り立てて叙述するのに十分な動機付けがなければならない。天野の挙げた例は、主語名詞句の「属性」あるいは「(発話時における) 特徴ある状態」を叙述するということで、それを満たしている。しかし、動機付けはそれだけに限らず、出来事であっても無生物に視点を当てるような状況があれば一回だけの出来事でも受身文は成立する。

- (107) [A と B と C が作った服のどれが魅力的か、来店者が試着するかどうかで判定するという実験をしている。ただし、来店者のプライバシーに配慮して人物は映像で映していない、という状況で]

実況者「あ、一人の男性が近づいてきました。これで 5 人目です。今度はどうでしょうか。あ、A の服を手にしたようです。あ、今、A の服が着られました！」

このような特殊な状況を設定しなくても、「発話時の対象物についての取り上げるべき状態」と把握されれば、ある特定の個人によって「着られている」という受身文も成立する。それは本論文が再帰構造をもつものとして分析する「見る」「聞く」も同様である。

- (108) a. 椅子に掛けておいた服が、いつの間にか知らない人に着られていて驚いた
- b. 下駄箱に入れておいた靴が、勝手に山田のやつに履かれていてむかついた。
- c. きれいに片づけておいた帽子が、勝手に出されて、知らない人に被られていた。

- (109) a. その情報は、すでに太郎に知られていた。
- b. 太郎は、遠くから花子に双眼鏡で見られていたことに気が付かなかった。
- c. 二人の話は、隣の部屋にいた太郎に全部聞かれてしまった。

ここで改めて確認しておきたいことは、場焦点化他動詞構文は、そこに対象物が存在することが、その〈場〉を特徴付けるものとして把握され、所有の概念に転換し、言語化したものである。一方、主語名詞句の属性や取り立てるべきその時の状態を表すことによって成立する受身文があるとしたら、ここに両者は共通点を見出すことができるわけである。これは語彙的ヴォイス（自動詞と他動詞）の枠を越えて、統語的なヴォイスとのつながりを考える上で非常に重要な点である。場焦点化他動詞構文と受身文とのつながりは、4.6.5 節「自発・受身・可能と二格名詞が表す〈場〉」で再び取り上げて論じる。

次に、仁田（1982）が再帰動詞と自動詞の並行性の根拠として挙げた次の点について本論文の分析の立場から批判的に検討しておきたい。仁田は「再帰動詞には自らに対応する

自動詞は存在しない。これは、自動詞がさらに別な自動詞を必要としないのと軌を一にする」(同上：81)と分析している。ここには二つの点で問題がある。第一に、仁田が「再帰動詞」としたものは衣服等の着脱動詞と「浴びる」だけで、「知る」「見る」「聞く」は取り上げられていない。これらの動詞には「知れる」「見える」「聞こえる」という自動詞が存在する。仁田の理論を踏まえると、「知る」に「知れる」という自動詞があるのは、「知る」が再帰動詞ではないからという結論になる。これは出発点が誤っているために導かれた誤った結論である。「着る」に自動詞が存在しないのは、意味的に説明される。衣服のようなモノがひとりだけでにだれかの体につくというような現象を普通は経験できないからである。体から離れる動きについては経験上、それが自然に起こることを知っている。だから「脱ぐ」には「脱げる」「走っていたら靴が脱げた」などという自動詞が存在する¹⁵⁴。

第二に、再帰動詞と自動詞のパラディグマチックな関係である。(104)に示した関係で重要な点は自動詞(一項述語を作る)と他動詞／使役動詞(二項述語を作る)の項の増減の関係が、再帰動詞(二項述語を作る)と使役—他動性動詞／使役動詞(三項述語を作る)の項の増減の関係と平行性をもつという点である。天野(1986a)も指摘しているように、この並行性そのものは再帰動詞の自動詞への接近を説明することにはならない。自動詞は一項からスタートして項が増えるのに対して、再帰動詞は二項からスタートして項が増えるという意味での並行性しか説明していない。

ここで急いで補足しておかなければならないことは、再帰の概念が自動詞の概念に接近しているというのは決して間違っているわけではない。事実、再帰動詞(再帰代名詞)を発達させているロマンス語に属する言語は再帰が自動詞の概念に相当する場合がある。

(110) イタリア語の再帰の例¹⁵⁵

- | | | | | | |
|----|-------------|-----|-------|-----------|----------|
| a. | Io | mi | alzò | alle sei. | |
| | 私は | 私を | 起こす | 6時に。 | 私は6時に起きる |
| b. | Egli | si | alza | alle sei. | |
| | 彼は | 自分を | 起こす | 6時に。 | 彼は6時に起きる |
| c. | La finestra | si | apre. | | |
| | 窓が | 自分を | 開く。 | | 窓が開く。 |

日本語は、「再帰①」において、このようなロマンス語などで発達した再帰動詞(再帰名詞)を発達させなかった。むしろ「再帰②」において、仁田(1982)の用語では再帰動詞と「使役—他動性動詞」の区別(本論文では「単他動詞」と「複他動詞」¹⁵⁶)の区別が重要であ

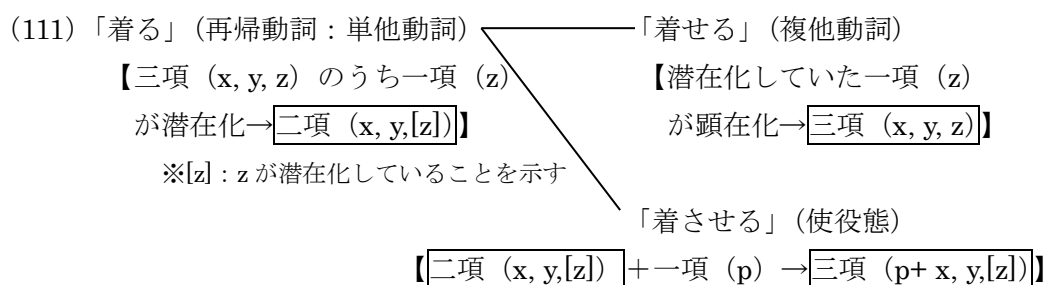
¹⁵⁴ 「含む」に対応する自動詞がないのは別の理由による。(詳細は4.6.8節を参照)

¹⁵⁵ イタリア語の文と日本語の訳は、日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』(大修館書店)p.124より引用。なお、この「再帰動詞」の項の執筆担当者は吉川武時氏である。

¹⁵⁶ 単他動詞と複他動詞という用語は奥津(1967)の命名による。二項述語(目的語が一つ)と三項述語(目的語が二つ)を作る動詞のことで、共通する語根をもちながら異なる形態で存在する動詞である。

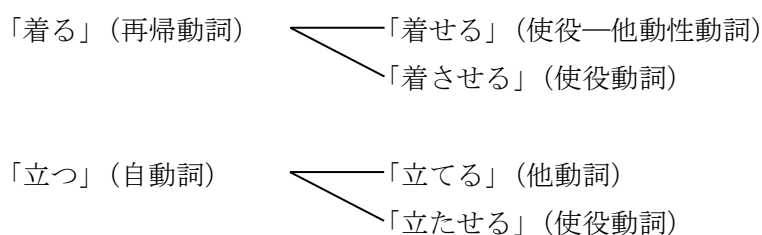
る。「自分自身への働きかけ」なのか「他者への働きかけ」なのかという点、そしてそれが項の増加にかかわっている点が重要なのである。このように「再帰①」においては自動詞への接近というのは正しい分析であるが、「再帰②」ではそれは関係がなく、普通の使役変化他動詞と同列に扱えるもので、違いはモノが他者に移動するのか、自分に移動するのかという点である。

「着る」は意味上は三項 (x: 動作主, y: 対象物, z: 着点) をもつが、再帰構造 (x=z) になっているため一つの項が統語上に現れない。そのために「子供が (*自分に) 服を着る」となる。つまり、「着る」は項が隠れていて二項になっており、「着せる」ではそれが現れて三項になるため「子供が隣の子に服を着せる」となる。「着させる」は元の「着る」の二項に新たに使役主という一項が加わるから合計で三項になるため「母親が子供に服を着させる」となる。(111) に示したように同じ「三項」でも項の中味が異なる。このような点を踏まえれば、単純に並行性があるとは言えないだろう。本論文では、この点に注目し、再帰動詞は 4.6 節で単他動詞と複他動詞のペアとして分析する。



cf. 仁田 (1982: 81) の示したパラディグマチックな関係

再掲 (104)



再帰についての考察が長くなったが、ここで本題に戻り、設置動詞が再帰構造をもつ場合について分析する。

4.5.4.3 再帰と場焦点化他動詞構文

4.5.3 節で示したように、対象物の存在の原因として移動事象が読み込まれる場合は、他の原因事象の読み込みの場合と比べて生産性は高いものの、一般的な傾向として、他者に向かう行為がベースになっているⅡ型はそれほど生産的ではない。それは見方を変えれば、

〈場〉が無生物であり、その無生物が自身を特徴付けるものとしてモノを所有する（分離可能所有）という見方が典型的な所有の概念ではないからだとも言える（112b）。一方、典型的な所有の概念である、〈場〉が人の場合はその人がそのモノを所有するという捉え方となじみやすい。したがって、（113b）のような動作主と着点としての〈場〉が同一である再帰構造がベースになるⅢ型の場合焦点化他動詞構文は生産性が高いと考えられる。

- （112） a. 太郎は壁に墨を付けた。
 b. ?その壁は墨を付けている。
 c. その壁には墨が {付いている／付けてある／付けられている}。

- （113） a. 太郎は（自分の）顔に墨を付けた。
 b. 太郎は（自分の）顔に墨を付けている。（結果状態）

川野（2000）は（112a）の非再帰の他動詞文と（113a）の再帰の他動詞文を比較し、「付ける」という動詞は位置変化を表す動詞であるが、（113a）は主語と場所句が「全体-部分」の関係にあり、主語と対象物が「包含関係」で結ばれることによって、主体変化を表すのであり、テイル形が進行のみならず結果継続の意味を表しうるのはそのためであると分析している。

- （114） a. 太郎が子どもの髪を染めている。（進行／*結果継続） （同上：41 脚注）
 b. 花子が顔に墨を付けている。 （進行／結果継続） （同上：41）

「全体-部分」の関係、そして「包含関係」が主体変化の意味解釈につながっているという分析は正しいが、問題点が二つある。第一に動詞の形態とその意味のとらえ方である。川野は、工藤（1982）、工藤（1991）が再帰構文の分析について「付ける」のような動詞が「～に～を付ける」と使われた場合に、「～に」の場所の変化も表し、主語名詞と場所句が所有の関係になっているので主体変化の意味を表す、という分析を批判している。つまり、川野は「付ける」はあくまでも対象の位置変化を表す動詞であり、移動先の場の変化を表すわけではないと主張し、主体変化の意味になるのは、再帰という文レベルの情報によると主張している。

この川野の分析は、形態と意味の対応を画一的（固定的）に見ている。確かに「付ける」は第一に使役位置変化を表す動詞の形態であり、移動先の場所変化を表す動詞の形態ではない。しかし、「付ける」は〈場〉に際立ちが与えられ、〈場〉が何を所有するようになったのかに注目することによって生まれる場焦点化他動詞構文（Ⅱ型）にも用いられる形態である。概念化者のそのような事態把握に「付ける」という形態で対応するからこそ、上に紹介したⅡ型の他動詞文が、使役変化他動詞の形態を用いて成立すると見るのが本論文

の立場である。

第二に非再帰と再帰の構造の比較が不完全なことである。川野は二つの構文の違いを次のように示した上で、再帰構文の主体が変化することを、「全体・部分」「包含関係」にあると結論づけている。

(115) 花子が 壁に 墨を 付ける (同上：43)
 非変化 位置変化

(116) 花子が 顔に 墨を 付ける (同上：44)
 状態変化 位置変化

(117) 花子が 顔に 墨を 付ける (同上：44)
 └─ 全体・部分 ─┘ 非変化 位置変化
 └─ 包含関係 ─┘

(117) で「花子」と「墨」を包含関係で直接結びつけているのが問題である。「再帰②」の概念は確かに動作の出所と対象物の着点が一致する場合である。しかし、「動作の出所」と「対象物の着点」の区別は事態の概念化にあたって存在しているはずである。したがって、「テイル形」が表す事態の言語化で主語位置に来ている名詞句は（見かけ上一つだが）それぞれ異なる意味役割を担っている。それを示すと (118) のようになる。

(118) 再帰②の構造

```

      ┌───┴───┐
      a. 花子が (自分)の 顔に 墨を付けた。
         └───┬───┘
         [動作の出所]                    [対象物着点]
         b. 花子が顔に墨を付けている。    c. 花子が顔に墨を付けている。
            (進行)                                    (結果状態)
  
```

(b) の「テイル形」は動作主の花子の動作進行中を表す。一方 (c) の「テイル形」は着点としての〈場〉である花子が墨を所有しない状態から所有する状態へ変化した状態を表すというのが本論文の分析である。再帰構造をベースにしたイベントスキーマは次のように示される。使役主 (x) が対象物 (y) の着点 (z) と同一 ($z=x$) になっている。

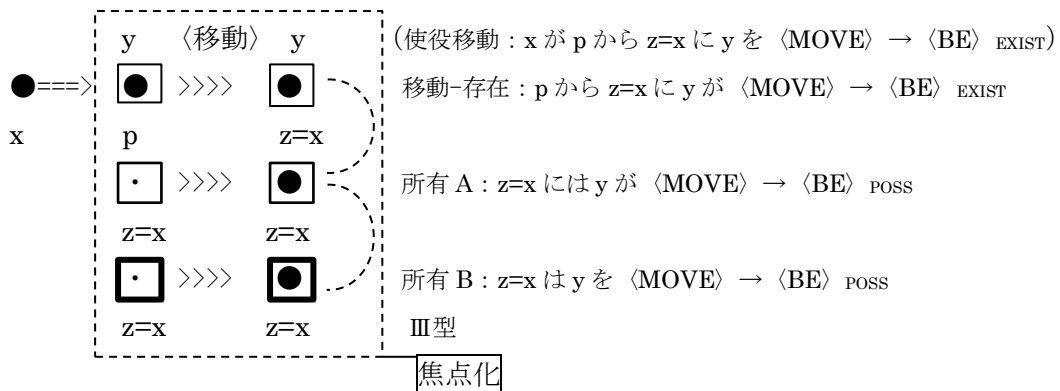
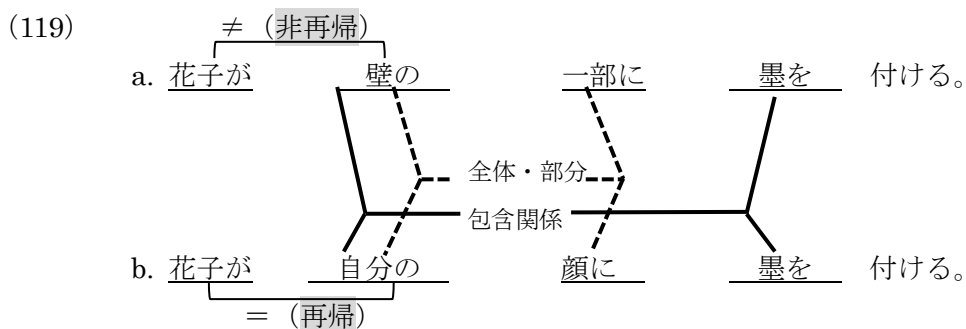


図 4.14 再帰構造をベースにした移動と所有のイベントスキーマ

さて、(118b) はデキゴトを叙述する文として「花子が～」でも、有題文として「花子は～」でもまったく違和感がないが、(118c) の「花子が～」のガ格名詞句は「だれが墨を付けているのか」という課題が前提になっている場合であって、デフォルトでは他の所有文と同様、〈場〉である所有主体の属性叙述になるので「花子は～」となる¹⁵⁷。このような違いは、(118b) と (118c) のように動作主としての花子と〈場〉としての花子を区別して論じることにより意義があることを示している。

このような事態把握を正確に反映させて、非再帰と再帰の構文の構造を比較すると次のようになる。ここで重要なことは、「全体・部分」「包含関係」そのものは非再帰構文の場合にも認められるということ、両者に共通していることである。そして再帰かそうでないのかを区別するのは、主語名詞句と照応関係にある名詞句との同一性である。



このように考えることによって、非再帰構文であっても、全体・部分、包含関係があれ

¹⁵⁷ 描写文として「あ、ほら。花子が顔に墨を付けているよ」のように言えることは事実である。しかし、この文は「あ、ほら。空が青いよ」と同じで、属性叙述がデフォルトの場合「空は青い」が基本文であり、「空が青い」と描写するためには、「空が青い」こと全体がその場の状況として新規の情報としての価値がなければならない。その点から見れば、(118b) と (118c) のガ格名詞が同等の次元では論じられないことは確かである。

ば、つまり〈場〉に際立ちが与えられ、所有関係によって〈場〉の変化を叙述する構文が成立し得ることが合理的に説明できるのである。確かに、「壁と墨」の関係ではⅡ型の場焦点化他動詞文の解釈は難しいが、「(だれかが) その鞆 (の金具の部分) にかわいいストラップを付ける」であれば、「その鞆は (金属の部分) にかわいいストラップを付けている」という構文が成立するのである。このような他動詞文を無視して非再帰文と再帰構文を正しく分析することはできない¹⁵⁸。

再帰だから場焦点化構文が成立するというのではなく、再帰構造がベースになっている場合は、場が人になるため、所有の概念をもつ場焦点化構文が成立しやすいと分析できる。そして本論文はこれをⅢ型の場焦点化他動詞構文と呼ぶ。再帰構文の主語名詞句は典型的には動作主、つまり人であり、それと同一視される着点である〈場〉もまた人である。所有の概念における人優位性が働くのである。広義の所有の概念はモノにおける包含関係も含むが、典型的な所有の概念は人が場(＝所有母体)となる場合である。重要なことは、非再帰構文であっても、対象物の着点が「人」の場合には、その人を主語にして場焦点化他動詞構文が問題なく成立することである。(120b) は見かけ上は(118b)と同じだが、自分で付けたのではなく、他者が付けた結果、他者の顔に墨が付いている状態を表現している。つまり、非再帰である。再帰構造がベースになくても、結果状態を意味することができるのである。その解釈を保証しているのは所有の概念化である。

- (120) a. 花子が太郎 iの顔に墨を付けた。(使役変化他動詞構文)
b. 太郎 iは顔に墨を付けている。(場焦点化他動詞構文) 結果状態

以上の分析で明らかになったように、場焦点化他動詞構文が作られる動機付けは、再帰の概念そのものではなく、あくまでも存在から所有の概念への転換であり、事態を構成するモノと〈場〉のどちらに注目して言語化するかという概念化の違いである。とはいえ、再帰構造は日本語の場焦点化構文を分析するにあたって、非常に有益な視点を提供してくれることは確かである。それが単他動詞と複他動詞の問題である。

4.6 単他動詞と複他動詞の分析

4.5 節では、対象物が存在する原因として移動事象が読み込まれる場合を見た。その最後では、再帰構造がベースになって作られる場焦点化他動詞構文があることを示した。そこでは「付ける」という動詞を取り上げて分析したが、このような物の移動を典型とした場合、その拡張例として「情報」の移動がある。それらを概念化する動詞を整理すると次のようになる。移動の再帰の概念は、(ア) (イ) (ウ) に示したように単他動詞で表され、複

¹⁵⁸ 「乗せる」は「人1が人2を車に乗せる」という用法があるが、人1が車の運転者の場合がある。この場合、一種の再帰になっていると考えられる。次の例のような文は〈場〉としてのタクシーの変化の結果状態を表している。(i) だが、深夜に通りがかるタクシーはすべて客を乗せていて、空車はなかった。(BCCWJ[25])

他動詞との構文交替，そして一部の動詞はさらに自動詞との構文交替が存在する。場焦点化他動詞構文の分析において興味深い言語現象を提供する。

<物の移動> (単他動詞, 複他動詞, 自動詞)

再帰用法 : 「付ける」など

再帰動詞 (ア) : 着脱物 「着る」 → 「着せる」, 「かぶる」 → 「かぶせる」
「はく」 → 「はかせる」

<情報の移動>

再帰動詞 (イ) : 知的情報 「知る」 → 「知らせる」 / 「知れる」

再帰動詞 (ウ) : 視覚・聴覚情報 「見る」 → 「見せる」 / 「見える」
「聞く」 → 「聞かせる」 / 「聞こえる」

上の<情報の移動>を表す動詞を再帰動詞と見ることに違和感を覚えるかもしれない。これらは知覚動詞（あるいは認知系の動詞）として括られることはあっても，再帰として分析されることは（ほとんど）ない。しかし，[1]～[4]のプロセスの対応を見れば，再帰動詞の典型である「着る」が表す<物の移動>の拡張として捉えられるだろう。

<物の移動> (典型) ¹⁵⁹

[1]動作主体が外部の対象物に対して，[2]自身の身体部位を用いて

[3]直接的に働きかけ，その結果，[4]外部の対象物を自身（の体）に移動させる

<知的情報の移動> 「知る」

[1]動作主体が外部の知的情報物に対して，[2]自身の知覚感覚器を用いて

[3]意識を向け，その結果，[4]外部の知的情報を自身（の脳）に移動させる

<視覚・聴覚情報の移動> 「見る」「聞く」

[1]動作主体が外部の知覚対象物に対して，[2]自身の知覚感覚器を用いて

[3]意識を向け，その結果，[4]外部の知覚対象物（イメージ・音）を自身（の脳）に移動させる

違和感を覚えるとすれば，[3]と[4]のつながりだろう。<物の移動>では直接的なエネルギーの伝達があり，対象物を意図的に獲得するという把握であるのに対して，<視覚・聴覚情報の移動>では対象物に意識を向けることによってほぼ自動的に自身に知覚対象物が‘届く’と感じられることである。<知的情報の移動>はその点で両者の中間に位置している。しかし，[3]がなければ[4]が起こらない。つまり[3]は[4]の契機になっている点では三つに共通しているので，典型から拡張として扱える範囲だと考えられる¹⁶⁰。むしろそう考

¹⁵⁹ ここで「典型」というのは，4.5.4.2節で規定した再帰の概念における分類②の典型という意味である。

¹⁶⁰ また，「知る」は英語では，‘know’で状態を表すが，日本語では変化を表す。「見る・聞く」は英語

えることによって、再帰の文法範疇を発達させなかった日本語の特徴を浮き彫りにすることができるはずである。

単他動詞と複他動詞という用語は奥津（1967）の命名によるが、簡単に言えば、二項述語（目的語が一つ）と三項述語（目的語が二つ）を作る動詞のことで、共通する語根をもちながら異なる形態で存在する動詞である。奥津（1967：60-61）はこのペアとして、「-ar 接辞」の自動化による「教える・教わる」「預ける・預かる」，「-se 接辞」の他動化による「着る・着せる」「見る・見せる」の4組だけを挙げている。本論文では「聞く」に使役接辞の付加した「聞かせる」も複他動詞相当として扱うことにする。さらに、場焦点化他動詞構文を包括的に分析する立場から、「知る」と「知らせる」（-as 接辞による他動化）、「含む」と「含める」（-er 接辞による他動化）もこの枠組みの中で分析する。

本節では、上の一覧で太下線を引いた単他動詞がⅢ型、つまり再帰構造をベースにした場焦点化他動詞構文を作ること示した上で、二重下線の複他動詞や波下線の自動詞がどのようなイベントスキーマに基づいた事態把握の言語化で、相互につながっているのかを明らかにする。なお、「含む」「含める」は単他動詞と複他動詞の関係があると見られるが、多義で、他の動詞とはやや異なる統語的な振る舞いを見せるため、別に扱うことにする。さらに、「預ける」と「預かる」，「教える」と「教わる」も単他動詞と複他動詞のペアであるが、上述の再帰動詞と異なる振る舞いをするので本節の最後に扱うことにする。

4.6.1 「着る」「着せる」

4.6.1.1 二つの「着る」

「着る」は「付ける」とは異なり、元々再帰の概念をもっている。そのため着点を表す二格名詞句は通常現れることはない。「x が y を着る」と言えば、y の移動先である着点は x 自身である。

(121) a. 太郎は自分に泥を付ける。

b. 太郎は（*自分に）服を着る。

そして 4.5 節の (118) と同様に、(122b) と (122c) の主語位置に来ている名詞句は同一の人物を指しているが、(b) は動作主としての太郎であり、(c) は場（＝着点）としての太郎である。イベントスキーマは次の図のように示される。「移動 - 存在」を表す自動詞構文はないので「*」を付けてある。再帰動詞の場合は所有 A はないので除外してある。対象物の元の場所である ‘p’ は動詞の意味とは関係しないため統語構造には現れない。

の ‘see, hear’ という情報の受容を表す動詞と ‘look at, listen to’ という行為の面を表す動詞の意味が融合している。このような違いを反省すれば、「知る」「見る」「聞く」が「動作主から出た心の働きかけが結局は動作主自身に戻ってくることによって、動作が完結するという概念である。」という再帰の規定の拡張事例だと考えるのは、それほど突飛な発想とは言えないだろう。

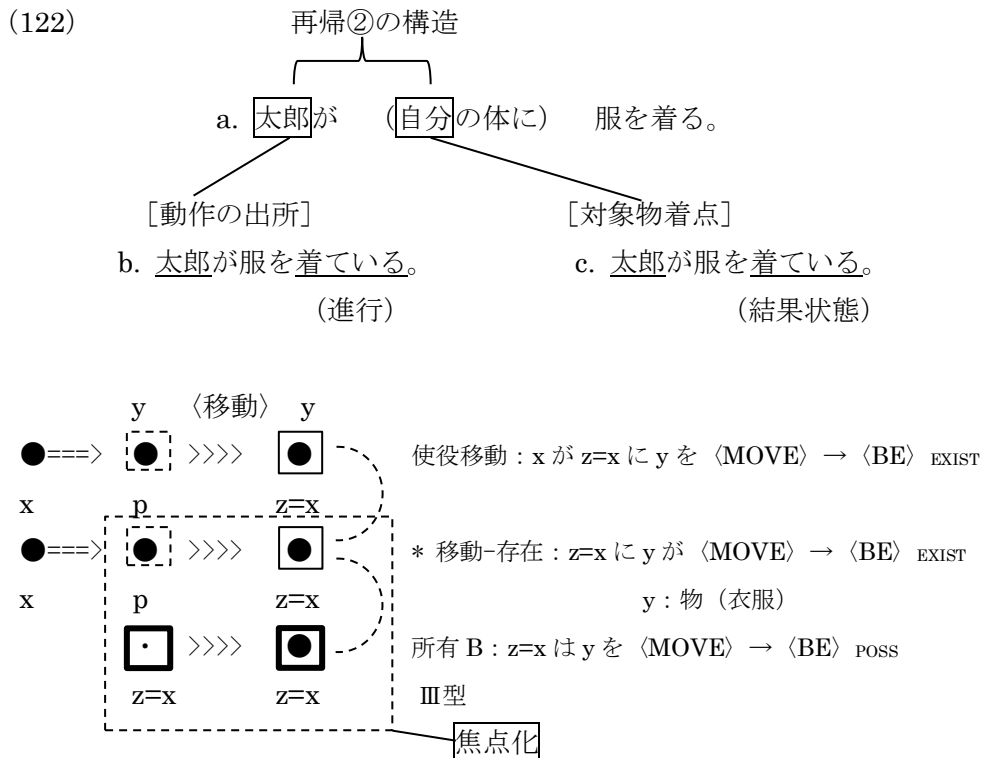


図 4.15 「着る」のイベントスキーマ

(122) (123) で (a) と (b) の「着る」は再帰構造をもつ使役変化の全体を表すが¹⁶¹, (c) の「着る」は変件事象に焦点が当たり、〈場〉である人の変化を表している。これが所有 B を表し、Ⅲ型の場合焦点化他動詞構文であるというのが本論文の分析である。Ⅲ型は変化の結果に焦点が当たり、通常は状態を表す「テイル形」になる。

- (123) a. 太郎は急いで服を着る。
b. 部屋をのぞくと、太郎があわてて服を着ていた。
c. 太郎は朝からずっと同じシャツを着ている。

通常、場焦点化他動詞構文は、場の「あるモノの非所有」から「モノの所有」への変化（あるはその逆）の事態を概念化しているので、基準時における状態を述べる場合には「テイル形」が付くのである。しかし、「着る」という基本形で言語化される場合もある。下の例文に示したように、総称文になったり、使役変化の動作の側面ではなく、変化する〈場〉に焦点を当てるような文脈になったりする場合にはⅢ型の「着る」が現れていると推測さ

¹⁶¹ (b) の「着ている」は一般に「動作進行中」と言われるが、「食べている」のそれとは質的に異なる。「服を着る」は Vendler (1967) の動詞 (句) のアスペクト特性による分類で「達成 (Accomplishments)」に相当する。「テイル形」が表す意味は変化が成立するまでの活動の部分である。例えば「(一つの) 犬小屋を作っている」というのは、完成する前の作業の途中であることを意味している。同様に「服を着ている」は、「服を着る」という変化が成立する過程の途中という意味になる。

れる。

(124) a. 人は暖色系の服を着ると、性格も明るく見られる傾向がある。

b. 「どう？似合う？」

「わあ、ドレスを着ると、まるで別人ね」

4.2.3 節, 4.3.3 節で規定したように、場焦点化他動詞構文の動詞の形態は、一部の両用動詞は別として、使役起動交替をする動詞であれば、その他動詞と同じ形態が用いられる。したがって、本節で扱うⅢ型他動詞文も、使役変化を表す「着る」と場焦点化他動詞構文を作る「着る」は同形である。ところが、再帰構造の場合には、「非再帰化」と呼ぶべき概念化があり、それによって「着せる」という複他動詞が作られる。

4.6.1.2 「着せる」と非再帰化

元々再帰構造をもつ概念において、着点が自分自身ではなく他者に向かうように概念転換することを「非再帰化」と呼ぶことにする。これを概念化した動詞が「着せる」である。これによって再帰構造では抑制され(φ), 統語上現れることがなかった着点としての〈場〉が二格名詞句で示されることになる。

<非再帰化>

- ・再帰構造 : x が (φ : z=x に) y を 再帰 - V (単他動詞)
太郎が [φ : 自分に] 服を 着る。

↓

非再帰化

- ・非再帰構造 : x が z に y を 非再帰化 - V (複他動詞)
太郎が 花子に 服を 着せる。

「着る」「着せる」「着させる」のつながりを示すと(125)のようになる。動作主としての「太郎」と変化する〈場〉としての「太郎」を区別することの重要性はここでも見てとれる。複他動詞の事態(125c)を前提に、〈場〉である花子を主語にした文(125d)は〈場〉の変化を表す構文であり、基本的に非意図的である。それに対して、「着る」の使役態の「着させる」(125e)を前提にしてできる「着る」の構文(125f)は単他動詞の「着る」であり、動作主に意図性が認められる。

(125) 「着る」「着せる」「着させる」

- a. 太郎が [ϕ : 自分に] 服を着る。(使役変化他動詞構文：単他動詞)
 <動作主> <場>
 ↓
 b. 太郎が 服を着る。(Ⅲ型 場焦点化他動詞構文)
 <場>
 c. 太郎が 花子に 服を着せる。(使役変化他動詞構文：複他動詞)
 <動作主> <場>
 ↓
 d. 花子が 服を着る。(Ⅲ型 場焦点化他動詞構文)
 <場>
 e. 母親が 太郎に 服を着させる。(使役態)
 <使役主> <動作主>
 ↙
 f. 太郎が [ϕ 自分に] 服を着る。(使役変化他動詞構文：単他動詞)
 <動作主>

4.6.2 「知る」「知らせる」「知れる」

着衣動詞では物の移動の再帰構造だったが、ここでは知的信息の移動の再帰構造をもつ「知る」をⅢ型の場焦点化構文を作る動詞と考え、形態的対立をもつ「知らせる」「知れる」とのつながりを分析する。

4.6.2.1 二つの「知る」

「知る」のような動詞の主語名詞句が<場>を表すことについては、格文法を提唱した Fillmore (1968), および語彙の概念構造を研究した Jackendoff (1972 : 30) でも指摘されていた。英語の ‘know’ は状態動詞で「知る」は変化動詞という違いはある。しかし、日本語の「知る」は<場>の焦点化によって作られたⅢ型の場焦点化他動詞構文であり、主語名詞句が<場>を表す点で英語と同じであると考えられる。

「知る」がどのような概念なのかは、森田 (1989) の「しる」についての分析が参考になる。

「しる」はもと「^し領る」で、“領有，占有，統治，支配する”の意（古典語）。
 “自分のものにし，すみずみまで完全に意のままに支配できるようになる”
 こと。そこから“自己の意識の中でその対象を完全に認識し，わが物にする”意へと移ってきた。（同上：539）

「知る」は、場焦点化構文の動詞の形態の分類では「使役変化他動詞と同一形態」であるが、同じ再帰動詞の「着る」と異なり、移動対象に焦点を当てて、移動先が場所項で示される自動詞構文「～が～に知れる」が存在する。

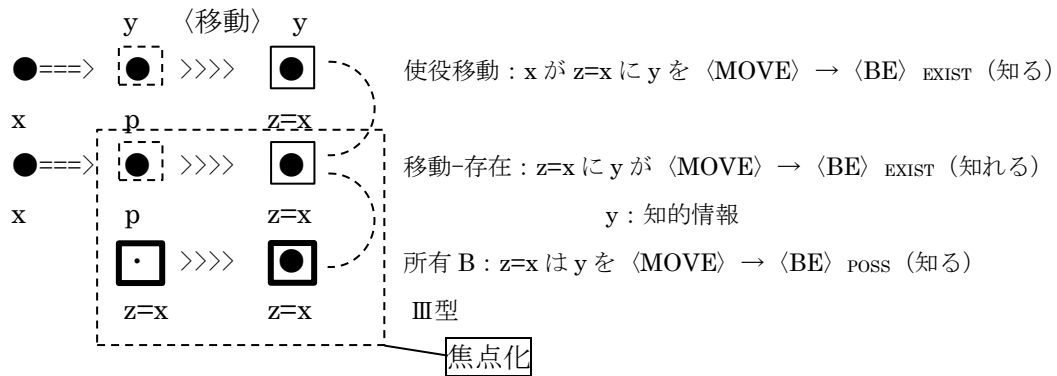


図 4.16 「知る」「知れる」のイベントスキーマ

この「知れる」という動詞が表す事態は、「知る」の使役関係をベースに対象の位置変化のほうだけが焦点化されたものである。この概念化についてはこの節の最後で取り上げて若干修正するが、重要なことは、この「知れる」によって概念化される事態は場焦点化他動詞構文を生み出す事態把握と裏表の関係にある点である。「知らせる」は、前節で「着る」と「着せる」で分析したように、非再帰化の概念によって生まれるものである。「知らせる」は、文語の「知らす」（下二段活用）から活用形の移行によって「知らせる」（一段活用）になったものだが、この形態は現代語において使役化接辞の「(さ)せる」と同じである。「着る」には「着せる」という複他動詞とは別に「着る」に使役化接辞がついた「着させる」があり、前者の二格名詞句は人名詞であっても着点という〈場〉として扱われ、その主体性が低く (125c)、後者の二格名詞句には主体性が認められた (125e)。一方、「知る」には「知らせる」しかない。したがって、「知らせる」の二格名詞句に来る人名詞は主体性の有無とは無関係である。

(126) 「知る」「知らせる」「知れる」

- a. 「知らせる」: 複他動詞 (「知る」の使役態と同形)

↑ 非再帰化

- b. 「知る」: 使役変化他動詞

↓ 自動詞化

- c. 「知れる」: 変化自動詞

「〈MOVE〉 \rightarrow 〈BE〉 EXIST」(自動詞構文)

知的信息がある人の頭に移動し、その場を領有するように存在する

d. 「知る」 : III型の場合焦点化他動詞構文を作る

「〈MOVE〉 → 〈BE〉 POSS」 (他動詞構文)

その人が、頭の中に到達しその場を占有するように存在する知的情報
によって特徴付けられる状態になる

つまり、そのような知的情報の非所有から所有へと変化する

「知る」には「知りたい」「知ろう」という主語名詞句の意志を表すことができる点からみて、何らかの意図性をもつ主語が来る使役変換事象が概念化していると考えられる(126b)。森田(1989)は「わかる」との対比で「知る」は「外部からの知識獲得なので、意志的行為の場合が多い」(同上: 540)と指摘している。外部から自身への知的情報の移動スキーマを想定することと合致するものであるが、「獲得する」といっても、積極的に主語名詞句がコントロールできるわけではない。「知れ」という命令形は「恥を知れ」のような慣用句を除けば、成立しにくいのではないだろうか。

(127) a. 日本語文法についてもっといろいろなこと {が／を} 知りたい。

b. 日本の歴史についてもっと知ろうと努力した。

c. ??「本で調べて、そのことをもっと知れ」

また、動作主がある目的をもって事前にある行為をすることを日本語では「ておく」を使って表現するが、「知っておく」は文脈があれば成立する。しかし、「食べておく」や「買っておく」のような意志的な行為とは異なる。積極的な知識獲得のための行為を表すというよりは、「結果として頭の中にその情報がある状態にする」という結果志向の表現だと考えられる。(128d)のように意志表現になると非文になる。

(128) a. [注意を呼びかけるポスター]

これだけは知っておこう！ 水分補給の重要性！

b. [本の宣伝用キャッチフレーズ]

知っておくと役に立つ情報が満載！

c. A: えっ！ まだ見てないの！

B: ごめん。今日中に見ておくよ。

d. A: えっ！ まだ知らないの！

B: *ごめん。今日中に知っておくよ。

その点を考慮すれば、「付ける」の再帰用法や再帰動詞「着る」のような対象物への働きかけを自由にコントロールできる動作主とは異なり、対象物へ意識を向ける、あるいは入ってくる情報を拒否せずに受け入れるなどの比較的弱いコントロール性を持つと言える。

また「知る」の「テイル形」は行為のイベントではなく、変化のイベントのほうにつく。つまり、情報を獲得している行為の最中を指して「知っている」とは言えない。結果として情報が存在するという意味になる。使役主の動作性が非常に低く、行為ではなく変化（結果）のほうに焦点が当たりやすいという要因と、行為としての動きが具体的に指定されているわけではないという要因が影響していると考えられる¹⁶²。

Ⅲ型の「知る」（126d）は使役変化他動詞と同形態である。上述のような弱いコントロール性をもつ主語名詞句ではなく、情報の着点である〈場〉の変化のほうに注目したのがⅢ型の場焦点化他動詞構文である。次のような文では、この事態把握が概念化していると考えられる。

- (129) a. 私がそのことを偶然知ったのは、8歳のときだったと思う。
b. 敵がこのことを知るのは時間の問題だ。
c. 君も大人になれば、いやでもその苦しみを知ることになるよ。

次の例のようにテイル形あるいは否定形の場合には結果状態のほうに焦点が当たっていると言えるので、Ⅲ型の他動詞構文である。

- (130) a. 彼はまだ酒の味を知らない。
b. 早慶戦でどっちが買ったか知っていたら教えてください。
c. 天文学者でも宇宙の実体を完全には知っていない。 (森田 1989 : 538)

4.6.2.2 「知らない」と「知っていない」

(126b)の使役変化他動詞構文と(126d)の場焦点化他動詞構文のような区別がつきにくい二つの他動詞構文が表す概念をわざわざ区別する必要はどこにあるのか。否定文に現れる形を考察しながら考えてみたい。基準時（発話時を含む）における状態を述べる場合、肯定表現には「知っている」が用いられるにもかかわらず、否定表現には「知っていない」ではなく、(131)のように「知らない」が用いるのが自然である。しかし、(132)のように「知っていない」が用いられる場合もある。

- (131) 「あそこに立っている女性、だれか知っている？」
「ううん。{知らない／??知っていない} わ」

- (132) 珠世からすこし離れたところに、琴の師匠の宮川香琴。彼女はまだ、自分がなぜこの席へ呼び出されたのか知っていないらしい。恐ろしい松竹梅三人姉妹をまえ

¹⁶² 具体的な行為とは「読む」「見る」「(人)に聞く」などのことを指す。「知る」とはそのような行為としての具体性を欠き、「なんらかのチャンネルによって情報を獲得する」ことを意味している。そのため「知ろうとする」という行為は「テイル形」がつくが、「知る」にはつかないと考えられる。

において、彼女はただおどおどとおびえている。(BCCWJ[16])

久野(1983)が詳しく分析しているように、「知らない」と「知っていない」の違いには、構文法的要因と意味的要因がある。ここで取り上げるのは後者のほうである。久野は四つ挙げているが、最も重要なのは最初のAである。

- A. 「知ッテイナイ」は、動作・完了性に注目した表現であり、「知ラナイ」は、静的状態に着目した表現である。(同上：116)

これは図 4.16 で示した「知る」のイベントスキーマによってその違いを明確に指摘することができる。つまり、知的信息が移動した結果の部分だけに焦点があたり、情報の「非所有」を言語化したのが「知らない」である。「ある」の否定が「ない」になるのと同じである。ところが、日本語の場合、イベントスキーマにおける変化イベントも原因として読み込まれるため、その変化に焦点が当たれば、「テイル形」が現れ、変化の結果として所有する状態になっていなければ「知っていない」が現れる得るのである。

表 4.5 イベントスキーマの焦点化と肯定・否定の形態

	イベントスキーマで焦点化される部分	
	変化イベント+所有	所有のみ
肯定	① 知っている	② (知る ¹⁶³) know
否定	③ 知っていない	④ 知らない NOT know

つまり、基準時における静的な状態を述べる形式は、イベントスキーマの焦点のあたり方によって表 4.5 に示したように①～④の四つの組み合わせが生まれることになる。英語はもっぱら所有部分のみに焦点が当たるので、②と④で言語化される。つまり、‘know’は‘be knowing’のような進行形を作らない。しかし、日本語は「ナル型言語」の特徴が顕著で、純粋に静的な状態を表す動詞が非常に少ない(4.1 節を参照されたい)。状態を表す場合でも何らかの変化イベントが原因として読み込まれることが多い。その結果、肯定形では①が用いられ、否定形でも③が用いられ得る。ここで考えなければいけないことは、否定表現で③ではなく④のほうがはるかによく用いられるのはなぜかである。変化イベントが読み込まれて、完了の意味が意識されている場合でも、④の「知らない」が用いられることが多い。下の例はいずれも「まだ情報を獲得していない」という状況においても「知らない」が用いられているが、まったく不自然ではない。

¹⁶³ 「知る」という形態が文末の述語として使われた場合は通常、変化、つまり主語名詞句が対象を非所有の状態から所有の状態へ変化することを表すが、連体修飾節の述語になった場合には、この形で被修飾名詞の状態を表すことができる。例)「詳しい事情を知る人物から話を聞く」

- (133) a. 「先生が転勤するって、聞いた？ けっこう噂になっているけど」
「へえ、そうなの。知らないな…」
b. 「先生が転勤するってこと、山田君はもう知っているかな」
「彼、こういう情報に疎いから、まだ知らないんじゃないかな」

そこで久野（1983）の意味的要因のもう一つの重要な項目を見てみる。

- D. 「知ラナイ」は、知識の欠如を、その主体（主語）の内側から見て記述した表現であり、「知ッテイナイ」は、知識の欠如を、外側から客観的に観察して記述した表現である。（同上：116）

定延（2006）が指摘しているように、「テイル形」は単にアスペクトという文法範疇のみならず、何らかのエビデンシャルティと関係している¹⁶⁴。それは「思う」という思考動詞では、基本形は第一に「私」について語る形であり、第三者が主語（思考の主体）になる場合には「思っている」にしなければならないという言語現象と共通したものがある。一人称の場合には、自分自身の頭の中の知的情報の有無を問われているのであり、あたかも客観的に外側から自分を観察する「私」が存在しており、その「私」を通して叙述されるわけではない¹⁶⁵。自分自身が自分の頭に直接アクセスして確認できることから、「ある」のか「ない」のか明確に判断できるのである。だから、ことさら自分のことについて「知っていない」と使うのは不自然である。したがって、例文（133）で自分について述べている（a）は「へえ、そうなの。知っていないな…」と言うのは不自然だが、第三者について述べている（b）は「まだ知っていないんじゃないかな」とは言える。そして久野の分析どおり、客観的に観察しうる得る状況を盛り込めば、さらに自然さが増す。

- (134) 「先生が転勤するってこと、山田君はもう知っているかな」
「どうかな…。さっき先生と普通に話していたところから見ると、
まだ知って(い)ないみたいだよ」

それでは第三者の場合にも情報をまだ獲得していない状態を指して、「知らない」が使われるのはなぜか。これには別の要因を考慮しなければならない。日本語の変化動詞は、そ

¹⁶⁴ 定延（2006）では、エビデンシャル（evidential）という用語を「情報源を表す表現」という意味で使用している。「??彼は痛みを感じる」と「彼は痛みを感じている」の例を挙げ、「ている」をアスペクトの形式として考えるだけでは、内部状態の表現に関する人称制限を説明できないと指摘している。そして、次のように説明している。「これまで日本語では、「らしい」「そうだ」「ようだ」「みたいだ」などが伝聞や推量のエビデンシャルとされてきたが、「ている」も「観察によれば現在これこれこうである」という形で情報源（つまり、いま語られる情報が観察に基づくものだということ）を表すエビデンシャルなのではないだろうか」（同上：157）

¹⁶⁵ このような「私」の存在は英語の人称代名詞の‘I’の発想である。（本多 2013：第 7 章「私の正体」）

の結果状態が継続している場合には「テイル形」が使われ、その結果状態がない場合には「テイナイ形」が使われるのが原則である。したがって、位置変化を表す動詞も状態変化を表す動詞も次のように用いられる。

- (135) a. 新潟行きの新幹線はもう 12 番線のホームに到着している。
b. 新潟行きの新幹線はまだ 12 番線のホームに到着していない。
c. 上野公園の桜はもう咲いている。
d. 上野公園の桜はまだ咲いていない。

ところが、変化が起こるかどうかの局面に注目した場合には、「まだ～しない」を次のように使うことができる¹⁶⁶。どちらもその動詞が表す変化の実現を期待している状況で、その場の状況を観察した上でそのような変化がまだ‘起きない’ことを述べているのである。

- (136) a. [ホーム上で左右を見ながら]
う～ん。新潟行きの新幹線、まだ到着しないな…。
b. [公園に足を運び、少し歩き回ってみて]
う～ん。上野公園の桜、まだ咲かないな…。

この例が示している状況と「まだ知らない」が現れる状況はよく似ている。第三者がその情報を獲得することが期待されるような状況で、その場の状況を観察した結果、「情報獲得による所有への変化」がまだ‘起きない’ことを述べているのである。上にまとめた表 4.5 は次のように修正される。※印をつけた部分が修正された部分である。「知らない」の形式が元々「知っていない」が用いられる領域に入り込んでいる。

表 4.6 【修正版】イベントスキーマの焦点化と肯定・否定の形態

	イベントスキーマで焦点化される部分		
	変化イベント+所有		所有部分のみ
肯定	① 知っている		② (知る) know
否定	③ 知っていない	③※知らない	④ 知らない NOT know

※変化の局面が焦点化する場合

以上の考察をまとめておく。

1. 「知る」はもともと変件事象を概念化した動詞なので、原因事象として変件事象が読み込まれて「知っている」という形で、現在その人の頭に知的情報・知識が「ある」

¹⁶⁶ 「まだ～しない」が「もう～するか」の問いの答えになっている場合ではなく、発話時点で事態が実現していないことを表す使い方になっている場合である。日高（1995）は、『マダ～シナイ』と『マダ～シテイナイ』の置き換えが可能なものには、『事態の実現』以前の、それに先行する『事態の発展段階』が含意されている動詞（句）が多い（同書：154）と指摘している。

という意味を表す。

2. 知的情報がその人の頭に「ない」場合、
 - (ア) 単にその情報・知識の有無を述べる場合には、原因としての変化事象は読み込まれないので、「知らない」を使う。
 - (イ) 変化事象が読み込まれる場合には、「知っていない」が用いられ得る。
3. しかし、変化事象が原因として読み込まれる状況であっても、
 - (ア) 自分自身の場合は、頭の中を内部からアクセスできる立場にあるので、ことさら原因事象の読み込みにアクセスする必要はなく、2(ア)と同じ扱いになる。
 - (イ) 他者の場合には、客観的に観察してその証拠性を示すために原因事象が読み込まれるため、テイル形が用いられ「知っていない」が用いられ得る。
 - (ウ) ただし、その場合であっても、変化局面に焦点を当て、該当する変化が「まだ発生しない」という意味で「知らない」を使うことができる。

このような理由で、最終的には否定表現で「知らない」が圧倒的に多く用いられることになると考えられる。久野（1983）が指摘する構文法的な要因を除けば、意味的な要因によって「知っていない」が積極的に選ばれる動機付けは弱いと考えられる¹⁶⁷。

4.6.2.3 「知れる」の形態と意味

最後に「知れる」という自動詞について考察する。仁田（1982）は再帰動詞と自動詞の並行性に注目し、「再帰動詞には自らに対応する自動詞は存在しない。これは、自動詞がさらに別な自動詞を必要としないのと軌を一にする」（同上：81）と分析しているが、本論文は再帰動詞の枠組みを作り直し、この後の節で取り上げる「見る」「聞く」、さらには「含む」まで広げて考察する。そして「知る」は「知れる」という自動詞があるから、再帰動詞ではないという誤った結論を出すことなく、再帰動詞の「知る」と自動詞の「知れる」のつながりを示したい。

4.6.2.1 節で示したイベントスキーマでは「知れる」は、使役変化他動詞としての「知る」の自動詞化であるとしたが、注意深く見ておかなければならない点がある。使役起動交替する自他動詞の形態上の対立については古くから研究があるが、「知る」と「知れる」は、「切る」と「切れる」のような古語において活用形のみで自他を区別していた最も古いタイプの対立形である（望月 1944）。つまり、現代語では見かけ上「-u」（kir-u）と「-eru」

¹⁶⁷ 久野（1983）は、意味的な要因の二つ目として、一つ目と連動して「従って、「…ヲ知ッタ」という表現が困難であればある程、知ッテイナイ」を用いることが困難である」を挙げている。「英語を知った」とは言い難い。ゆえに「英語を知っていない」も言い難い。これは上のまとめの2（ア）に吸収されている。三つ目として「知ッテイナイ」は、それが表す状態が非恒常的であることを示唆する」を挙げているが、これはそれほど強くは働かないと考えられる。上述3-（ウ）が働くからである。ちなみに、国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は約1億500万語の言語資源だが、「知らない」（8303件）、「知っていない」（33件）、「知らなかった」（2098件）、「知っていなかった」（7件）である。（「少納言」（<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>）を利用して検索した結果である）

(kir-eru) の対立で、自動詞化接辞の「-er」が付加したように見えるが、実は古語において「-u」(四段活用：他動詞)と「-u」(下二段活用：自動詞)の対立だったものが、活用の変遷があり、下二段活用の終止形が一段活用で「-e-ru」になったことによる。

このタイプは元々は影山(1996)が反使役化と呼ぶ概念の転換によって他動詞から自動詞が派生したと考えられる。反使役化とは概念構造において「使役主(x=y)が変化対象(y)と同定され、意味的に束縛される」ことによって「束縛を受けた使役主は対象物と同一物であることが意味構造で保障されるから、統語構造には現れない」(同上：145)とされる。見方を変えれば、「反使役化が成立するためには、変化対象そのものが使役主として働く資格ないし性質—これを<内在的コントロール>と呼んでおく—をもっていなければならない」(同上：160)ということである。これによって、転換した自動詞構文は「みずから然る」(同上：194)という概念をもつことになる。

(137) 概念構造における反使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]] (影山 1996 : 145)

この分析は妥当だと考えられるが¹⁶⁸、ここで問題にしたいのは、「知る」は「切る」と異なり、再帰構造を持つ点である。「糸を切る」に対して「糸が切れる」は、確かに糸の材質に基づいた内在的コントロールが働き、「ひとりで／勝手に切れる」と言える。それでは「その情報を知る」に対して「その情報が知れる」とはどういう意味なのか。元々再帰構造をもつので、使役主は場所項と同定されている(→138②)。反使役化の分析が正しければ、使役主と変化対象が同定されて(→138①)、束縛を受けた①の使役主が統語構造に現れない。そうだとしたら②の場所項と同定されている使役主の情報はどうなるのだろうか。

(138) 再帰構造における概念構造における反使役化

[x CONTROL [y BECOME [y BE AT-x]]]

→ [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-x=z]]]

①

②

↓

↓

xは統語構造に現れない

x=zはどうなる？

¹⁶⁸ 影山(1996)の意味構造に注目した分析では、反使役化とは別に、「掛ける」の自動詞化にかかわる「-ar」(異形態として「-os」がある)接辞があるとされる。これは「脱使役化」と呼ばれ、本来取り外しができない使役主を意味構造上で抑制することによって統語構造に投射しないようにする概念操作である。(同上：184) ただし、形態とそれがあらわす概念(転換)は一律に固定されているわけではない。対立が生じた元々の概念とその後の通時的な変遷を通じて類推によって生じた形態の派生対立とは分けて考えなければいけない。つまり、「-e」接辞による自動詞化が元々は反使役化で、「-ar」による自動詞化が元々は脱使役化だったとしても、それ以外の形態の接辞によるものが反使役化ではない、または脱使役化ではないということ意味するわけではないということである。

②が意味していることは、再帰の場合には、場所項は語彙的に指定されているので、統語構造には現れないということである。「着る」であれば、「太郎が自分に服を着た」とは言わないし、「知る」であれば、「太郎は自分にその情報を知った」とは言わない。それでは使役主が抑制された場合「(zに) 情報が知れた」となるわけだが、この「zに」という情報はどうになってしまうのか。元々抑制されていたもので統語構造には現れないが、意味(概念)上は存在していた。使役主が抑制されるとこの意味情報はどうになってしまうのか。理論的に考えられることは、使役主が変化対象と同定 ($x=y$) されるなら、照応先の場所項 ($x=y=z$) も変化対象と同定された上で、統語構造には現れないと見ることである。

(139) [$x=y$ CONTROL [y BECOME [y BE AT- $x=y=z$]]]

①

②

しかし、いくら情報が統語上に現れないとしても、意味上「その情報 (y) が (その情報自体に) 知れる」という意味をもつことになり、おかしいことになってしまう。そこで本論文では次のような仮説を立てる。

<再帰構造をもつ動詞における反使役化と場所項>¹⁶⁹

再帰構造をもつ動詞の概念において反使役化が起こった場合、変化対象と同定化されるのはあくまで使役主であって、照応先の場所項は使役主抑制によって「空 (ϕ)」になる。

[$x=y$ CONTROL [y BECOME [y BE AT- $z=\phi$]]]

①

②

この規定によって、「ある人がある情報を知る」が反使役化によって自動詞化すると「ある情報がひとりでに (ϕ に) 知れる」となる。つまり、場所項は存在するけれども、ある特定の場所 (=人) が指定されているわけでないということである。指定されていない場合はメトニミー的に解釈すれば、「ある場の人」であり、文脈によって「不特定多数の人々」を指す場合もあるし、漠然と「他人」を指す場合もあるし、ある特定の場 (人を含む) を指す場合もあることになる。辞書の「知れる」の語義の「(知られては困る事が) 多くの人の知る所となる」(新明解)、「他の人に知られる」(明鏡国語) もこの仮説を支持している。

(140) a. 新聞に出たので、すぐ世間に知れた。

b. 人に知れないように変装して行った。

¹⁶⁹ これがアドホックなものではなく、「知れる」だけでなく「見える」「聞こえる」のような自発が表す意味を考える上でも有効であることをあとで示す。

- c. 人知れず手渡す。 (以上「新明解」より)
- d. 会社に知れたら困るんだ。
- e. 名の知れた店 (以上「明鏡国語」より)

また『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所)を用いて「に知れる」を検索して得られた 57 例のうち、 possible の意味(「知ることができる」の意)になっている 5 例を除外した 52 例を分類したものを下に示す¹⁷⁰。

表 4.7 「知れる」に現れる二格名詞句

	二格名詞句に現れる語 [数]	合計数 (%)		
不特定多数	世間[8] 公[2] だれか[1] 人[1] 皆[1] ※非表示[2] 相手(不特定)[1] ユーザー(不特定)[1]	17	(32.7)	(71.2)
場所	住んでいるところ[1] 隣近所[1] 地方[1] 土州[1]	4	(7.7)	
団体・グループ	マスコミ(関係者)[4] 会社[3] 警察[2] 十手持ち[1] 店[1] 大学[1] 出版社[1] 織田勢[1] 政敵[1] 上[1]	16	(30.8)	
個人が特定される語	(名前)[3] 彼[2] 彼ら[1] 実家[1] 親[1] 父[1] 妻[1] 長老ども[1] そ奴[1] 王子[1] その持ち主[1] 長官[1]	15	(28.8)	(28.8)
		52	(100)	

不特定多数を表す語(文脈からそのように推定されるものを含む)が 17 件、個人が特定される語が 15 件だった。場所、団体・グループを個人が特定されない語に含めると、特定されない用例は全体の 7 割強となる。この検索結果を見ると、空(φ)になった場所項は「場全体」をデフォルトとして、状況に応じて場が限定されていき、最も限定されたのが特定の個人ということになると考えていいのではないかな。

反使役化という概念転換によることを踏まえれば、「知る」対象物(知的情報)はその内在的コントロールによってその場に発生するのである。私たちは百科事典的な知識として、知的情報は何も外部からコントロールされなければ、情報元からどこにでも移動するような性質をもっていると考えます。その結果、「～が(φに)知れる」の「空(φ)」となった〈場〉はデフォルトでは「人々」「不特定多数」となると分析される。

最後に、図 4.16 に示したイベントスキーマの中の自動詞の概念の部分に、反使役化の概念転換を組み込んで図 4.17 のように修正しておく。図の二段目で「x=y」となっている。それにとまって、元々同定されていた「z=x」は「z=φ(空)」になっている。

¹⁷⁰ 「に知れる」と「に知れた」を「少納言」を用いて検索。ただし「に知れた」は「に知れたら」のような接続助詞のついたものを含む。

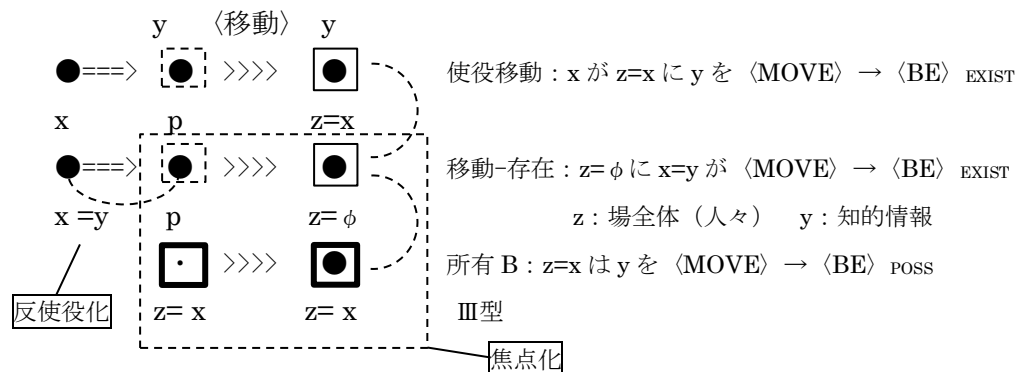


図 4.17 【修正版】「知る」「知れる」のイベントスキーマ

4.6.3 「見る」「見せる」「見える」

「着る」がモノの再帰を表し、「知る」は知的情報の再帰を表すのと平行して、「見る」「聞く」を視覚・聴覚情報の再帰の概念を表す動詞として分析する。この節では「見る」を中心に分析し、「聞く」については「見る」との違いに注目して最後にまとめることにする。

4.6.3.1 二つの「見る」

これまでの再帰動詞の分析と同様、「見る」も二つの概念をもつと考えられる。一つは使役変化他動詞構文として言語化されるもので、もう一つは使役変化の概念をベースにして〈場〉の変化に焦点が当たったもので、III型の場焦点化他動詞構文として言語化される。

「知る」と比べると、「見る」が表す使役変化イベントにおける使役主は比較的積極的な役割を担っている。視覚情報である対象に注意を向けること、向かって来る視覚情報を拒否しないということが、具体的に「目を向ける」や「目を閉じる」「目をそむける」という行為として捉えられるからである。また、「知る」に「知れる」という自動詞が存在しように、「見る」には「見える」という自動詞が存在する。「見せる」が「見る」がもつ再帰構造から非再帰化によって生成される点も再帰動詞の「着る」「着せる」の分析と同じである。

再帰構造をベースにした意味の分析に入る前に一つの視覚情報の獲得モデルを見ておく。

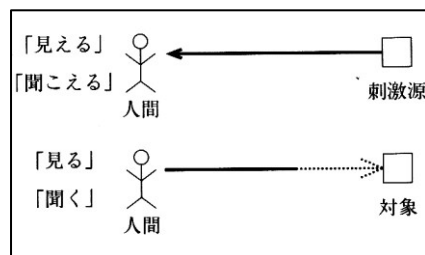


図 4.18 〈知覚〉の2種類の言語化 (池上 2006 : 169 より)

池上（2006）では、「見る」と「見える」の意味の違いをこのような図によって示している。

「見る」と「見える」を英語の‘look (at)’ ‘see’ に対応すると考えて、「見る」が表す概念を「視覚情報の対象（が見えるように）その対象に目を向ける」だけに限定する考え方である。「見える」「聞こえる」については「一つは外から視覚的ないし聴覚的な刺激が感覚器官に到達して感知されているという段階でとらえているもので、この場合には視覚ないし聴覚の営みの主体としての人間は、刺激の〈到達点〉ないしは、刺激の受容される〈場所〉として言語化される。」（同上：169）としている。これは本論文の立場と一致する。しかし、「見る」「聞く」については「もう一つは、視覚的ないし聴覚的な注意を意図的に外へ向けて発し、何らかの刺激源を捉えようとするもので、この場合、視覚ないし聴覚の営みの主体としての人間は、他者に働きかける〈動作主〉として言語化されることになる」（同上：169-170）としている。これは英語の‘look (at)’ の概念であり、「見る」の概念のもっとも焦点化されやすい一つの側面だけしか表していない。つまり「見る」の概念全体ではない。「見る」の概念はあくまでも再帰であり、池上が示したような動作主の側面だけでなく、その行為によってとらえた視覚（聴覚情報）の対象を「受ける」という再帰の側面も含むというのが本論文の主張である。英語との対照については次節で詳しく論じる。

下に「見る」「見える」のイベントスキーマの全体図と「見せる」を含めた三つの動詞のつながりを示す。ここでは y が視覚情報に変わっただけで、「知る」「知れる」で示したイベントスキーマと同じである¹⁷¹。「使役移動」の部分が使役変化他動詞としての「見る」。「移動 - 存在」の部分の自動詞「見える」。所有 B の部分がⅢ型の場合焦点化他動詞としての「見る」である。

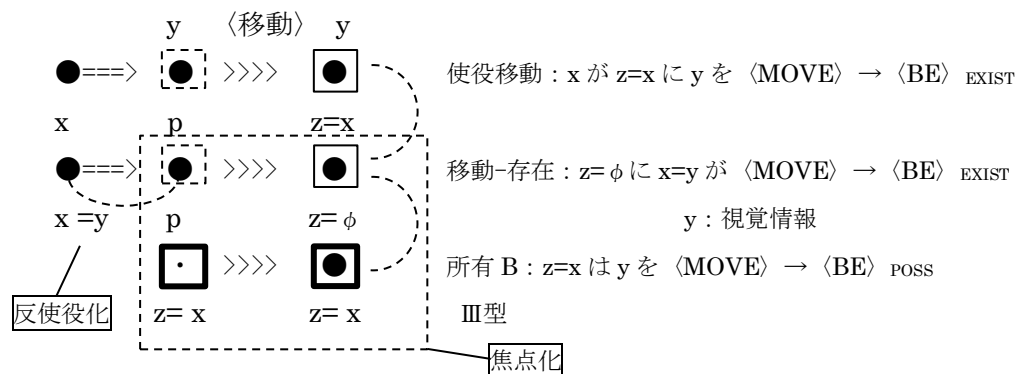


図 4.19 「見る」「見える」のイベントスキーマ

¹⁷¹ ここではこれまでの「着る」「知る」の分析の流れを受けてこのようにまとめとく。ただし、この後の自発の考察を踏まえて、4.6.6 節で若干修正される。しかし、この枠組みそのものが修正されるわけではなく、この枠組みに「発生」の概念の追加がされるだけである。

(141) 「見る」「見せる」「見える」¹⁷²

a. 「見せる」：複他動詞

↑ 非再帰化

b. 「見る」：使役変化他動詞

↓ 自動詞化

c. 「見える」：変化自動詞

「〈MOVE〉 → 〈BE〉 EXIST」(自動詞構文)

視覚情報がある人の目に到達し脳が像として認知できるような形で存在する

d. 「見る」：Ⅲ型の場合焦点化他動詞構文を作る

「〈MOVE〉 → 〈BE〉 POSS」(他動詞構文)

その人が、目に到達し脳が像として認知できるような形で存在する視覚情報(像)によって特徴付けられる状態になる
つまり、そのような視覚情報の非所有から所有へと変化する

基本的なイベントスキーマとその焦点化は、再帰構造という共通点をもつため、「着る」「知る」と同じだが、違いも存在する。第一に「テイル形」についてである。

(142) a. 太郎は急いで服を着ている。(動作進行中)

b. 太郎は朝からずっと同じシャツを着ている。(結果状態)

c. *太郎は急いでその情報を知っている。(動作進行中)

d. 太郎はその情報を知っている。(結果状態)

e. 太郎は今、外で星を見ている。「見る」行為が進行中)

f. 「この写真見た？」

*「うん。見ているよ」

(結果状態：「さっき見た情報が今頭の中にある」と意味で)

g. 太郎はもう、その写真を見ている(※現在完了の意＝「もう見た」)

h. 太郎は去年、一度その星を見ている。(※経験・経歴の意)¹⁷³

物の移動の再帰を表す「着る」では、使役変化動詞の「着る」のテイル形は動作進行中を表し(142a)、Ⅲ型の「着る」のテイル形は結果状態を表す(142b)。知的情報の移動の再帰を表す「知る」は、使役主の動作性(心の働き)が非常に低く、行為としての動きが

¹⁷² この内容は今後の議論によって、4.6.6節で改訂版が提示される。

¹⁷³ ここでは益岡・田窪(1992:114-115)を参考に「ている」の用法を分類している。同書では「動きの継続の状態」(太郎は音楽を聴いている)、「動きの結果の状態」(部屋の灯が消えている)の二つを基本とし、その他の用法として「完了状態」(その記事は、既に読んでいる)、「経験・経歴」(花子は2度カナダ訪れている)、「反復状態」(走者は何度もコーチの方をうかがっている)を挙げている。

具体的に指定されているわけではないため、テイル形は使役主の動作進行中を表し得ず（142c）、Ⅲ型の「知る」の結果状態のほうを表す（142d）。つまり、知的信息の獲得中を表す「知っている」は存在しない。「見る」のテイル形は、使役変化他動詞の行為の進行中を表すが（142e）、Ⅲ型の「見る」のテイル形は情報獲得後の結果状態を述べる形式としては通常存在しない（142f）¹⁷⁴。「着る」「知る」について言えば、モノを身に付けて、それがその人の体に存在することは情報として意義のあることだし、知的信息は一度獲得してそれが記憶情報または知識として存在することは意義のあることである。ところが、視覚情報は、獲得して入力された情報が脳のある場所に存在しているという「実感」がない。衣服が装着されている「実感」、知的信息が頭に存在する「実感」と比べるべき実感がない。もちろん一度入力された視覚情報は記憶されるため、それを想起することによって同一のイメージを頭の中に描くことはできる。しかし「テイル形」で表せるのは、「見たという履歴」のみである。基準時において履歴との照合が行われて（142g）や（142h）として出力されるのである。

なお、「見る」の場合にテイル形が動作の進行中になるのは、「見る」の概念が＜行為＞のほうに焦点がシフトしているからだとも言える。これについては次節で論じるが、ここで確認しておきたいことは、再帰構造をもつ使役変化動詞は共通して＜行為＋変化＞の概念をもち、そのなかで＜場＞の＜変化＞に焦点が当てられ、Ⅲ型の場焦点化他動詞構文を作る。しかし、同じ再帰構造をもっている、「テイル」形で表せる範囲が異なるのは、これらの動詞が表すアスペクト（＝事態の内部構造にどの程度入り込めるのか）が微妙に異なるからである。「着る」には＜行為＞と＜変化＞の両方に焦点を当てて事態を把握することができる。これは着始めてから着終わるまでのプロセスが把握される一方で、装着後の状態も幅をもって存在していると把握できることを意味している。ところが、「知る」は＜変化＞の結果状態のほうにしかそのような内部構造は存在せず、「見る」は逆に＜変化＞のほうにはそのような内部構造が存在するようには把握されないということである。

表 4.8 「テイル形」が表す意味

	イベント	
	＜行為＞＋＜変化＞	＜変化＞
	「テイル形」の意味	
	進行中	結果状態
着る	着ている	着ている
知る	—	知っている
見る	見ている	#見ている（履歴）
聞く	聞いている	#聞いている（履歴）
	使役変化他動詞（再帰）	Ⅲ型の場焦点化他動詞

¹⁷⁴ これは知覚動詞がもつ、行為をすることは同時にその情報を獲得することを表すという同時性も関係しているだろう。そこが英語の look と日本語の「見る」の違いである。単に見るための動作をしているというわけではない。ただし、見るための行為だけに焦点を当てて使うこともできる。これについてはあとで取り上げて論じる。

4.6.3.2 英語の see /look との対照からわかること

日本語の使役変化他動詞の「見る」は再帰構造をもち、同類の「着る」「知る」と同様に＜行為＋変化＞の概念をもっていると考えられる。しかし、前節で簡単に触れたように、＜行為＞の部分に焦点が当たりやすい動詞である。ここで＜行為＞というのは、視覚情報を得るために目を対象物に向けるという動作である。その点で‘look’の概念と重なる。しかし、重要なことは、重なるからといって、「見る」が＜行為＞の意味だけに限定されるわけではないということである。

辞典で「見る」の意味は、「目を対象に向けて、その存在・形・様子を自分で確かめる」（新明解）、あるいは「目の働きによって物の存在や動きをとらえる」（明鏡国語）のように定義されている。このように、単に対象物に視覚器官を向けるという行為だけを表しているわけではない。きちんと再帰構造によってその視覚情報を受けるところまで含むのである。‘look’は‘direct one’s gaze in a specified direction’¹⁷⁵という意味である。辞書によっては‘to direct your eyes in order to see’¹⁷⁶、‘to turn your eyes towards something, so that you can see it’¹⁷⁷のように意味が記述されているが、下線部の意味はあくまで＜行為＞の目的や結果として含意されるということである。「見る」のように元々再帰構造によって「視覚情報を受ける」という＜変化＞の概念をもつのは異なる。「見る」は＜行為＋変化＞の再帰構造をもつからこそ、＜変化＞の部分に焦点があたった場焦点化他動詞構文が作られるのである。

興味深いことに、池上（2006）自身も英語の‘I see～’が日本語では普通「私」が刺激の〈到達点〉として表示され、「（私に）見える」のように表現されることを確認した上で、「その日本語でも〈知覚〉の主体の人間を主語にした構文でありながら無意図的な営みを表す——つまり、たとえば「私が～を見る」が英語の“I see”と平行した意味で用いられること——ものもあるのに注意しておくといよい」（同上：171）と述べて、次のような例文を挙げている。

- (143) a. 外へ出たとき、西の空に月を見た。（＝月が見えた）。
b. 外へ出たとき、人の叫び声を聞いた。（＝叫び声が聞こえた）

池上は上のような文について、「ただし、いくらか文語的な表現という感じがする」（同上：171）と感想を述べているが、この文こそが本論文が主張している場焦点化他動詞構文である。そして、このような文を文語的と断定することはできない。〈場〉としての人の変化（どんな出来事があるのか）を述べる文脈であれば、比較的生産的に作ることができる。

¹⁷⁵ Oxford Dictionary Online（ウェブ版）<http://www.oxforddictionaries.com/>

¹⁷⁶ Cambridge Dictionary Online（ウェブ版）<http://dictionary.cambridge.org/dictionary/british/>

¹⁷⁷ Longman Dictionary of Contemporary English Online（ウェブ版）<http://www.ldoceonline.com/>

次に、(144) のようなキャンセル文¹⁷⁸ が成立することによって、「見る」は‘look’と同様「(それが見えるように) 対象物に目を向けること」だけを意味する、という考え方も妥当でないことを論じる。

(144) あのグラマン艦載機であった。窓から外を見たが爆音だけで姿は見えなかった。
(BCCWJ[20])

「見る」は確かにキャンセル文が成立する。しかし、キャンセルできるかどうかは動詞の概念によって異なるという事実がある。宮島 (1985) は 300 名を対象にしたアンケート調査の結果に基づいて、動詞の結束性の強さを次のように示している。同じように使役変化を表す動詞であっても、「冷やす」や「燃やす」は結束性が弱いいためキャンセルが成立しやすいが、「落とす」は成立しにくい動詞だと言える。

(145) 動詞の結束性の強さ (宮島 1985 : 353 ※動詞を横に並べ直した)

【強い】 ころす>おとす>こわす>のむ>ぬく>ぬる>

あける>わかす>ひろげる>のぼる>ほる>いれる>

うごかす>よわめる>もやす>かわかす>ひやす 【弱い】

(146) 宮島 (1985) のアンケート結果¹⁷⁹

a. 「冷やす」に関するアンケート項目と結果 (同上 : 353)

A : スイカを冷たくしたけれど、冷たくならなかった。

B : スイカを冷やしたけれど、冷えなかった。

C : スイカを冷やしたけれど、冷たくならなかった。

A : ○ (24), △ (37), × (38), ? (1)

B : ○ (51), △ (30), × (19), ? (-)

C : ○ (65), △ (24), × (11), ? (-)

¹⁷⁸ キャンセル文とは、ある動詞を用いて「～した」と言いながら、そのあとにそれが実現しなかったという内容を続けた文のことである。日本語では前者に対象の変化を引き起こす「他動詞」または「～く/～にする」のような他動詞文を、後者に対象の変化が起きなかったことを示す「自動詞の否定形」「他動詞の可能態の否定」などを用いて成立するかどうか判定される。例えば、「乾かしたけど、乾かなかった」、「飲んだけど、飲めなかった」。

¹⁷⁹ ○＝日本語として自然なもの、△＝日本語としてやや不自然だがつかわれるもの、×＝まったく不自然なもの。300 名を三つのグループに分け、それぞれグループ A, B, C に前件、または後件の内容を少し変えたものが出されている。() 内の数字は回答者数である。原文とは若干表示方法を変えた。

b. 「燃やす」に関するアンケート項目と結果（同上：350）

A：木の枝を燃やしたけれど、燃えなかった。

B：木の枝，燃やしたけれど，燃えなかったよ。

C：木の枝を燃やしたが，燃えなかった。

A：○（30），△（48），×（22），？（-）

B：○（30），△（49），×（21），？（-）

C：○（37），△（32），×（31），？（-）

c. 「落とす」に関するアンケート項目と結果（同上：352）

A：柿の実を落としたけれど，落ちなかった。

B：一生けんめい，柿の実を落としたけれど，落ちなかった。

C：柿の実を落としたけれど，どうしても落ちなかった。

A：○（11），△（22），×（66），？（1）

B：○（31），△（36），×（33），？（-）

C：○（11），△（23），×（65），？（1）

この結果から、「冷やす」や「燃やす」はキャンセルできる（しやすい）から＜変化＞の概念を持たないと言うことはできない。「冷やす」も「燃やす」も元々＜行為＋変化＞を表す使役変化動詞である。キャンセル文の成立が意味しているのは、事態の把握の仕方として「冷やす」「燃やす」の＜変化＞のほうは不問にして、「冷やそうとする」「燃やそうとする」という＜行為＞のほうだけに焦点を当てて用いることができる、ということである。

ここで注意しなければならないことは、その許容度が「固定」しているわけではないという点である。上に示した宮島（1985）のアンケート調査の結果では、確かに「傾向」は読み取ることができるが、その傾向にもまして重要なのは、個人の判断に「ゆれ」があり、提示される文脈で判断が異なるという点である。結束性が高いほうに分類されている「殺す」にしても、300名中合計で24名が「太郎は次郎を殺したけれど、次郎は死ななかった」を日本語として自然なものと答えている。また上に引用した「落とす」についても、「一生けんめい」という語を入れるとキャンセルが成立しやすくなることが確認されたという¹⁸⁰。

このような「ゆれ」と文脈依存があるということは、動詞のもつ概念のもとになるイベントスキーマの形成とその焦点化は最終的には個人の経験に基づいて主体的になされ、デフォルトで想起されるスキーマが個人によって異なることを意味している。言語は社会の慣習によってその意味が特定の文脈において決定される方向に働くのと同時に、その創造性により常に変化の方向に進む性質を内在していることの現れだと言える。

さて、使役変化動詞でありながら、このように＜行為＞のほうだけに焦点があたり、キ

¹⁸⁰ 同様に「一生けんめい」を入れるだけで許容度が倍近くに上昇したものに「一生けんめい，がけに上ったけれど，上れなかった」「一生けんめい，ドアをあけたけれど，あかなかった」が報告されている。

キャンセル文が成立する要因については、池上（1981b）、影山（1996）、佐藤（2005）などが意味構造や事態の把握の仕方によると分析している。重要な点は二つある。一つ目は、このように使役変化他動詞の〈行為〉の部分だけに焦点が当たり、キャンセル文が成立するかは言語によってその振る舞いが異なることである¹⁸¹。二つ目は、繰り返しになるが、動詞の表す概念がどのように言語化されるかというのは、事態の把握の仕方、つまり、イベントスキーマのどの部分に焦点が当てて言語化できるかによるということである。何らかの要因で〈変化〉とのつながりを不問にして〈行為〉の部分に焦点が当たりやすければ、キャンセル文は成立しやすく、他の部分を不問にしてその部分だけに焦点を当てるのが難しければ、成立しにくいということである。

さて、キャンセル文を成立させる要因にはいろいろあるが、重要なのは、その〈行為〉が〈変化〉を引き起こすための〈働きかけ〉としてどの程度その動詞の概念に含まれるものとして把握できるかという点である。もちろん、そこには経験に基づいてそのような〈行為〉が必ずしも〈変化〉に結びつかないことがあるという知識（世界知識、百科事典的知識）も重要な働きを担う。例えば「冷やす」であれば「きちんと作動している冷蔵庫に一定時間入れておく」という行為、「燃やす」なら「焚き木の中に入れて一定時間炎に包まれるようにする」という行為が〈働きかけ〉としてこの動詞の概念に含まれていると把握される（傾向が強い）。それに対して、「落とす」は、例えば、重い石を台車に乗せて落とす場所まで持って行って、重機を使ってぶら下げて、といった〈行為〉が想定されたとしても、その行為はその動詞の概念には含まれないと把握されるのである。だから「落としたけれども」の「落とす」はどんな手段を使ったとしても、最終的に空間内のある高さに位置しているものが落ちるようにする、まさにその局面しかイベントスキーマの中で把握されないのである。あとは重力によって落としたものは自動的に落下するという経験に基づいた世界知識も手伝って「落とす」はキャンセル文が成立しにくいのである。別の言い方でまとめれば、〈行為〉のプロセスの内部構造にいかに入り込めるかが、〈結果〉を不問にして〈行為〉のみに焦点を当てることの可否を左右するのである。

以上の分析を踏まえて「見る」を考えると、この動詞は〈行為+変化〉の概念をもちながらも、「対象物の方向に目を向けて、その視覚情報を得ようと注意を向ける」という〈行為〉のプロセスの内部構造に入り込みやすいと言える。さらに、〈行為〉の部分の焦点化されやすい要因としては、結果物に対する使役主のコントロール性である。「見る」場合、目を向けても必ずしも対象物を視覚情報として獲得することにはつながらない。つまり結果が保証されているわけではない¹⁸²。このようなイベントスキーマにおいては、「その〈行

¹⁸¹ 例えば、影山（1996）が主張するような視点の問題（英語は行為から結果を見る視点、日本語は変化の部分から行為の側と結果の側の両方に向ける視点）や池上（1981a）の「スル型言語」と「ナル型言語」の違い、または〈行為+変化〉を基本的な事態認知の単位としてみるのか、それとも〈変化〉を基本的な事態認知の単位としてみるのかといった違い（谷口 2005）など、言語によって好まれる事態の把握の仕方が異なることなど。

¹⁸² この考え方は、影山（1996）の意味構造による分析に照らし合わせれば、使役主が変化イベントを[CAUSE]するのではなく、変化（結果）を[CONTROL]するだけの存在だということになる。

為>をすることによって変化が結果的に得られるようにする」という方向に概念がシフトしやすい。「殺す」のように「その<行為>をすることによって<変化>を引き起こす」といった強い使役性をもつ動詞とは異なるということである。

さて、これまでの分析で英語の‘look’の概念は「見る」の<行為>に焦点があたった場合と重なり、多くの場合両者はその用法が対応しているが、「見る」にはそれ以外の概念を言語化することができる。そして‘see’は「見える」と対応していると言われるが、対応していないものはないのか。あるとしたらそれは何かを確認しておきたい。まず英和辞典の例文の一つ挙げておく。‘look’と‘see’の対応が見て取れる。

(147) I looked and looked , but couldn't see it.

穴があくほど見つめたが、それは見えなかった。(ジ英和)

次の英語と日本語は、アメリカの映画のシナリオの対訳である。これも日本語と英語の基本的な対応をよく表している。‘look’には「見る」が対応している。‘see’が「見える」「見えない」となっている。これを「見る」「見ない」(または「見ている」「見ていない」)で言い換えることはできない。

(148)

ト書き : They follow his gaze down the Mile, <u>see nothing</u> , turn to him like he's crazy.	彼の視線をたどってマイルを見る が、 <u>何も見えない</u> 。
BRUTAL : (…略…) <u>Look again</u> . He's right there.	<u>よく見ろ</u> 。あそこにいるから。
ト書き : Paul and Dean <u>look again</u> . and this time <u>they see it</u> :	ポールとディーンはもう <u>一度見る</u> 。 今度は <u>ふたりにも見える</u> 。

(対訳シナリオ[1])

このように‘see’の多くは「見える」に対応するのだが、全てというわけではない¹⁸³。これまでの分析を踏まえて英語と日本語の対応を示すと次のようになる。「見る (1)」は使役変化の概念を表し、「見る (2)」は行為のイベントに焦点があたった概念を、そして「見る (3)」は本論文が主張するⅢ型の場合焦点化他動詞構文を作る概念を表す。

¹⁸³ 英語の‘see’が「見える」ではなく「見る」に対応する場合には、次のような文法上の要因によるものもある。自発の概念を表す「見える」には「～たい」「～よう」は接続しないが、英語の‘see’は接続する。(i) Tell you what I think. I think he just wants to see on cook up close. (ii) 私の考えじゃ、電気椅子の処刑を間近で見たいからじゃないですかね。(「対訳シナリオ[1]」より)

表 4.9 「見る」「見える」と‘look’‘see’の対応

	<行為+変化>	
	<行為>	<変化> <状態>
英語	look (at/to)	see
日本語	—	見える
	【行為の焦点化】 見る (2)	【場の焦点化】 見る (3)
	見る (1)	

‘look’と「見る (2)」の対応は既に確認した。‘see’と「見える」の対応も確認した。この図の対応で残っているのは、網掛けをした‘see’と「見る (3)」の対応である。「見る (3)」の用法はどのようなものか。まず、やや長いが下の小説の「見る」で確認してみたい。(※丸数字と下線は引用者による)

(149)「隅田さんは、今回の旅行に来ていないんでしょう？ どうしてですか？」

麻沙子がおどろいてきた。

「いや、それが、別の旅館に泊っている彼を見かけた人がいるんです。相川千恵さんです。彼女は、バスで観光しているときに、タクシーがうしろからついてくるので、なにげなく①見たら、隅田さんに似た人が乗っていた、よく似ている人もいるものだと思っていたら、今度は、旅館に着いたとき、近くの旅館に入っていく隅田さんを②見たというんです。そのときは、大声で理沙さんにいったけど、理沙さんが③見たときは、もう④見えなかったということでした。我々が調べたところ、確かに隅田さんは、その旅館に一泊していたことがわかったんです。でも、彼は、翌日、旅館を出て京都に帰っています」(BCCWJ[21])

①～③の「見る」はどれも同じ意味で使われているとは思われない。①③の「見る」は<行為>の部分に焦点が当たる「見る (2)」の解釈になり、②は「見る (3)」の解釈になると感じられるのではないか¹⁸⁴。上で紹介した池上 (2006) の「見る」の例文もこれに相当する。

(150) (=143a 再掲)

外へ出たとき、西の空に月を見た。(＝月が見えた)。

次の映画シナリオの対訳に現れる‘see’と「見る」も同様である。引き出しを開けた行為は意図的だったかもしれないが、その中にあったものを見ようとする意図的な行為があ

¹⁸⁴ ①③は従属節に用いられていること、②は主節の述語として用いられていることも、このような解釈に影響を与えていると考えられる。

ったかどうかは不問にされ、どんな視覚情報を受け取り、所有している（＝それを覚えて
いる）のかに焦点が当たっている。

(151) (ペンダントを勝手に持ち出したと勘違いしている母親が子供に向かって)

Lynn : I saw what was in your bureau drawer when I was cleaning.

掃除をしているときに、あなたの部屋の引き出しの中を見たわ。

(対訳シナリオ[2])

(150) の例では「～が見える」と交替可能であるが¹⁸⁵、(151) の例で「引き出しの中が見えたわ」と言うと、語られている状況が違ってくる。引き出しは既に開いていて、その中の物が、ある位置に立った者の目に自然に到達するような状況だった、ということを述べる文になる。

次の三つの例は「見る (3)」だが、特別な文脈がなければ、「見える」と交換することが困難である。(※下線と括弧内の文と許容度の判断は引用者による)

(152) a. Did you see who started the confusion?

その騒ぎはだれが始めたか見ましたか。

(?/*見えました)

b. Have you ever seen a boxer knocked down?

ボクサーがダウンさせられるのを見たことがありますか。

(?/*が見えた)

c. I have never seen a butterfly like that before.

あんなチョウは今まで見たことがない。

(?/*見えた)

(ジ英和)

次の映画シナリオの対訳でも経験を問う文では‘see’は「見る」が対応していることがわかる。

(153)

COLE : I see ghosts.

僕には幽霊が見えるんだ。

MALCOLM : How often do you see them?

何回ぐらい見たことがあるんだい？

COLE : All the time. They're everywhere.

いつでも見える。幽霊はどこにでも
いるんだ。

(対訳シナリオ[2])

¹⁸⁵ 池上は「～を見る」と「～が見える」を‘＝’で示しているが、これは交替が可能ということで、事態のとらえ方まで同じであるとは意味していないだろう。なお、このような状況で日本語は「外へ出たとき、西の空に月があった」とも言える。

自身の経験として語る場合は、視覚情報を獲得し所有しているのは自分自身なのだから、Ⅲ型の場合焦点化他動詞構文と馴染む。(152a)のように目撃したかどうか、つまり視覚情報を記憶として所有しているかどうか問われるか、(152b, c)のように「見たことがある」や「見たことがない」のように経験を語る文では「見る (3)」が現れる。もちろん「見たことがある」と言う場合もあるが、その多くは「～(が) <様態> + 見たことがある」という構文である。それは自身の経験を語るというよりも、ある出来事について、発話者(概念化者)がその場に臨場してその場からの「見え方」を語るものである¹⁸⁶。

(154) 山羊は鳴きもせず、コトリとの音もしなかった。上にかぶせた風呂敷が、下からほんの一寸持ち上げられたかに見えたことが一度あったが、それも気のせいであるかも知れなかった。(新潮絶版 100 冊[1])

それでは単に「<対象>が見えたことがある」という言い方はしないのかと言えば、そういうわけではない。「見た」という経験を、現場から切り離された個人の履歴として語るのが「見たことがある」であるのに対して、ある時間に、ある場所に(またはある場所から)あるモノが視界に入るという事態が概念化者の「見え」の範囲に存在したことを述べる場合である。それは(155)に示したようなは普段は見られないようなものが視界に入ったという状況を語る表現として現れやすい。それはさらに(156b)の能力可能、そして(156c)の場の属性叙述へとつながっていくと考えられる。

- (155) a. 北海道でも一度オーロラが見えたことがあるらしい。
b. ぼくには 小さいころ幽霊が見えたことがあったんだよ。

- (156) a. (わたしは) 幽霊を見たことがある。(「見た」経験)
b. (わたしには) 幽霊が見えたことがある。(見る能力があった)
c. 昔、この墓地では幽霊が見えたことがある。(この墓地の特徴)

(157b) が不自然になるのは、幽霊と異なり、どこから見えたのかが示されないと、能力としての解釈が困難になるからだと考えられる。事実それを補えば、(157c)のように許容度が上がる。

¹⁸⁶ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で検索すると「見えたことが(ある)」は4件、「見えたことは(ない)」は8件、合計12件しかヒットしない。「(あります」「ありません」とその活用形を含む。「こと」が何かを指している場合は除外) そのうち、2件は「来る」の敬語の「見えたことがある」で、あとの10件は「(～が) <様態> + 見たことがある」「ちっぽけに見える」「はっきり見える」「を帯びて見える」だった。このように「形容詞-く見える」「形容動詞-に見える」「動詞-て見える」などは元々「見る」とは交替できない「見える」の使い方である。

- (157) a. (わたしは) 富士山を見たことがある。
 b. ? (わたしには) 富士山が見えたことがある。
 c. (わたしには) 200 キロメートル離れたこの場所から富士山が見えたことがある。(※昔はそれくらい視力が良かったという意)

「見たことがある」と「見えたことがある」の意味の違いは、「見る」と「見える」が単に他動詞対自動詞という対立だけでなく、事態の把握と語り方において大きな違いがあることを意味している。現段階ではとりあえず次のような違いがあることを指摘しておく。

<「見たことがある」と「見えたことがある」の違い>

- ・「見えたことがある」：概念化者がイベントに臨場してその対象の存在を語る。
- ・「見たことがある」：概念化者が経験者として、所有している視覚情報の履歴を語る。

「見る」と「見える」の分析をさらに進めるにあたっては、自発を表すとされる「見える」が一体どのような概念を表すのかをきちんと確認しておく必要がある。そこで、次節以降で自発の概念が何かを考察した上で、改めて「見る」と「見える」の意味と構文のつながり、さらには受身文の「見られる」との概念化の違いを考察することにする。

4.6.4 自発とは何か

『新版日本語教育事典』の記述によれば¹⁸⁷、自発とは「感情・思考・判断・認識・動きなどが、主体の意志とは無関係に、あるいは意志とは反するかたちで自然に出現することを表す」もので、その文法的な形式としては、助動詞の「(ら)れる」と五段動詞の接辞「-eru」がある。現代共通語ではこの助動詞と接辞による自発の形式は生産性に乏しく、前者の場合には感情・思考・判断・認識などを表す意味的に限られたグループ、後者の場合には「笑う」「泣く」などのごくわずかの語のみであるとしている¹⁸⁸。「(ら)れる」がついて自発を表す動詞としては次のようなものがある。

(158) 自発を表す動詞 (元の形→自発の形)

a. 五段動詞

思う→思われる, 思い出す→思い出される, 偲ぶ→偲ばれる

b. 一段動詞

感じる→感じられる, 案じる→案じられる¹⁸⁹

¹⁸⁷ 「自発」の項 (pp.113-114) の執筆担当者は渋谷勝己である。

¹⁸⁸ ちなみに、万葉集に現れる助動詞「ゆ」(自発・可能・受身を表す)の接続した例を調査した吉田(1973: 178)によれば、全421例のうち、90%は「見ゆ」「思ほゆ」「聞こゆ」「知らゆ」などの心理・知覚動詞で占められているという。

¹⁸⁹ 自発文を作る「案じる」は心配するという意味であり、「一計を案じる」の意味ではない。

この『新版日本語教育事典』でも指摘されているように、自発の意味は「(枝が) 折れる」「(糸) が切れる」のような自動詞構文でも表すことができるが、これは自發文(＝自発の文法形式による文)とは区別されるべきである。山田(2004)も「意味的な自発と助動詞によって生産的に得られる自発形とは分けて考える必要があります」(同上：88)として、「(ひとりで) 閉まる」や「(自然に) 燃える」と区別すべきだと主張している。このような自動詞は、影山(1996)が反使役化によって作られるとした自動詞と重なる。変化対象が使役主と同定されること、つまり変化対象がその内在的コントロールによって使役主のように振る舞うことによって、「ひとりで」「勝手に」そのような事態が成立するという自発の意味をもつようになったと分析している。

その一方で、助動詞や接辞の形態が同一であることから、「思われる」などは受動表現の一種、「泣ける」は可能表現の一種であり、それぞれ自発の意味をもつ特別な場合だと分析されることもある(益岡・田窪 1992：104, 107)。確かに形態も同じで二格名詞句が思考・認識主体を表す点でも一致している。(159a)が受身文で、(159b)が自発を表す文である。

(159) a. 太郎はみんなに陽気な人間と思われている。

b. (わたしには) 故郷がなつかしく思われる。

(益岡・田窪 1992：下線と (b) の「わたしには」は引用者が補った)

自発を受身の特別な場合であるとしても、単にその意味(概念)を述べるだけでなく、なぜそのような意味になるのかについて十分議論されてきたとは言えない。安達(1995：125)が指摘した両者の違いを以下にまとめておく。(※例文は原文のまま)

①二格名詞句の表示と位置

自発：文中に現れないのが普通。現れる場合は文頭に出るのが基本

受身：普通は文頭に現れない(文頭に現れるのは有標の語順である)

・山田が鈴木に殴られた。

②テンス

自発：基本形で発話時を指す。(a) 私にもそのように思われる。

受身：基本形は未来を指す。(b) 私は彼女にうそつきだと思われる。

③漸次変化の「テクル」が接続した文の許容度

自発：漸次変化を表すことができる。(a) 故郷が懐かしく思われてくる。

受身：漸次変化の解釈は難しい。(b) 太郎は花子にうそつきだと思われてくる。

安達(1995)では、その違いが「自発が状態的であるのに対して、直接受身が動作的であるという基本的な文の意味の相違に帰せられる」とまとめているだけであるが、自發文

の特徴について重要な問題点を提起していると言える。

疑問 1：なぜ①のような二格名詞句の位置の相違が生まれるのか。

疑問 2：なぜ自発文では認知主体が「私」になるのが普通なのか。

疑問 3：なぜ自発文は基本形で状態を表すことができるのか。

本論文は二格名詞句で示される〈場〉に注目し、モノと〈場〉の二者関係の概念化を研究するものである。次節では上の疑問 1～3 に答えるべく、モノからイベントへの拡張事例として、イベントと〈場〉の二者関係に注目して分析をする。

4.6.5 自発・受身・可能と二格名詞句が表す〈場〉

本論文では、自発をイベントスキーマとのつながりにおいて次のように規定する。

＜自発の規定＞

自発とは、

(ア) 生産の事象と再帰構造を併せ持つイベントスキーマにおいて、

(イ) 使役主が反使役化¹⁹⁰ によって働きかける材料と同定され、材料がその内在的コントロールによってひとりでに生産物となり、その場に発生するという概念に転換したものである。

(ウ) この概念の転換により、

①主体の意志とは無関係に、あるいは意志とは反するかたちで自然に発生するという意味を表し、

②結果的に発生物が〈場〉に存在することを意味するので、述語が基本形でも現在の状態を表すことができる。

(エ) このような概念の転換は、

①動詞に「(ら) れる」という接辞を付加することによって言語化されるが¹⁹¹、

②事態の発生の〈場〉は文脈に埋め込まれ、統語上に現れないことが多い。

③現れる場合には発生構文の格配列に従って、

- ・対象物が発生する場（人）は「二格名詞」で示され、
- ・発生する対象物は「ガ格名詞」で表示される。

(ア) は自発表現を作る動詞がどのようなものを規定する。現代共通語で自発文を作る動詞は限られたグループである。尾上（1989）によれば、現代語のラレル文による自発は、知覚次元（見られる、聞かれる）、認識次元（思われる、思い出される）、感情次元（な

¹⁹⁰ 影山（1996）で提案された他動詞を自動詞化する概念転換の一つ。どのような概念転換かについては 4.6.2.3 節の解説を参照されたい。

¹⁹¹ 次節で論じるように、「見える」「聞こえる」は特別な自発化の接辞によって自発を表す。文語では「見る」対「見ゆ」、「聞く」対「聞こゆ」であり、「-ゆ」がそれにあたる。「(ら) れる」接辞ではないが、ここでの自発の規定は「見える」「聞こえる」にもあてはまる。

つかしまれる、悔やまれる)の三種に限られるという。上の規定は(エ)にも書いたようにラレル文による自発についてである¹⁹²。

この規定では、人を〈場〉ととらえて、自発をそこで成立する生産事象であるとする。生産事象とは典型的には(160)(161)を指す。つまり、人が材料に働きかけて、ある場所に新たなものが発生するイベントなのである。そして、生産事象をベースにしているということは、通常の生産動詞がそうであるように、働きかける材料をヲ格名詞にして言語化することも可能である。

- (160) x が m に働きかけて z に y を V
 太郎が 木を用いて 庭に 犬小屋を 作る。
 ① ② ③ ④ ⑤

- ①使役主 [x] (=生産者) が
 ②材料 [m] に働きかけて
 ③場所 [z] に
 ④生産物 [y] を
 ⑤V: 新たに発生/出現させる {作る, 炊く, 焼く, 書く…}

- (161) x が m に働きかけて V
 太郎が 水を 沸かす cf. 太郎が お湯を 沸かす
 ① ② ⑤ ① ④ ⑤

- ①使役主 (=生産者) が
 ②材料に働きかけて
 ⑤V: 状態変化させて結果物を発生/出現させる {沸かす, 炊く…}

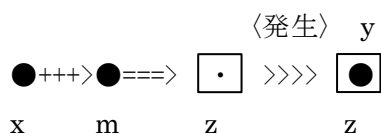


図 4.20 生産事象のイベントスキーマ

¹⁹² 「ラレル文」でない場合、つまり可能動詞で自発を表す「泣ける」「笑える」にしても感情の発生は拡張事例と上の規定が適応できる可能性はある。また、『日本語教育事典(旧版)』(大修館書店)が自発の例として挙げている「待たれる」(「今度の休みが待たれます」(p.199))についても発生概念とのつながりが認められる。『明鏡国語辞典 2 版』(大修館書店)によれば「待つ」は「人・物・時などが来ることや物事が実現することを望みながら、それまでの時を過ごす」とあり、例の一つとして「新作の発表が待たれる」を挙げている。この意の「待つ」は文字通りの意味ではなく、心の動きを表している。「ある外界の対象物に対してその実現を望むという<希求心>(という心的な働き)が生まれる」と考えれば、上の規定を適応できると思われる。なお、尾上(1998-1999)によれば、古代語のラレル文には「まもる(「見つめる」の意)」「振り返す(「振り返る」の意)」のような動作を表す動詞にも自発態があったようである。

この生産事象のイベントスキーマが再帰構造をもつと、次のようになる。

- (162) xが mに働きかけて z=x 自身に yを V。
 太郎が 恩師に意識を向け ϕ 恩師を 偲ぶ
 ① ② ③ ④ ⑤

①使役主 [x] (=生産者) が

②材料 [m] に働きかけて

(※外界から受ける刺激に反応することを含む)

③場所=自分自身 [z=x] に

④生産物 [y] を

⑤V：新たに発生／出現させる {思う, 思い出す, 偲ぶ, 感じる…}

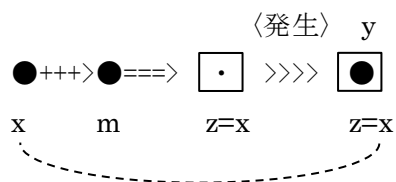


図 4.21 生産事象+再帰構造のイベントスキーマ

さらに、使役主 (x：生産者) が働きかける対象材料 (m) と同定されると、自発の概念へと転換する。つまり、材料がその内在コントロールによってひとりでに生産物となり、その場に発生するという概念へと転換するのである。

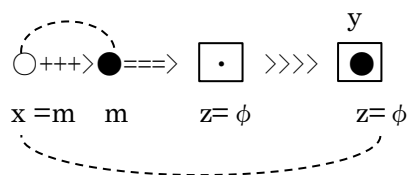


図 4.22 自発のイベントスキーマ

このようなイベントを表す動詞 (V) は、感情・思考・判断・認識など、結果物を頭/心の中 (z=x) に発生させる動詞である。自発の概念が言語化される場合には、③は再帰構造によって使役主と同定されるので、図 4.22 の「 ϕ 」で示したように意味構造で抑制されて、通常は統語上には現れない。デフォルトでは〈場〉に「私」が文脈に埋め込まれることについては後で論じる。

そして、生産構文は同じ動詞を用いて、④だけでなく②もヲ格名詞で表示できることは思考動詞も同じだと考える。ただし、思考動詞の場合は、典型的な生産構文と違って、「AはBだ」というような思考結果（＝思考の内容、命題）も発生物として認めることになる。この場合、発生物は補文標識である「～と」あるいは形容詞・形容動詞の連用形「～く／～に」によって示されるという統語規則を仮定しておく。

＜生産構文と自発文のつながり＞

■「①+④+V」型の生産構文と自発文

- a. 私は [次郎が哀れだ] と思う。
→私には [次郎が哀れだ] と思われる。
- b. 私は [次郎を哀れに] 思う。
→私には [次郎が哀れに] と思われる。
- c. 私は 当時のやんちゃぶりを思い出す。
→私には 当時のやんちゃぶりが思い出される。
- d. 私は 中学時代の恩師を偲ぶ。
→私には 中学時代の恩師が偲ばれる。
- e. 私は 母の愛情を感じる。
→私には 母の愛情が感じられる。
- g. 私は 息子が将来どうなるのかと案じる。
→私には [息子の将来がどうなるのか] と案じられる。

■「①+②+V」型の生産構文と自発文

- h. 私は 息子の将来を案じる。
（「将来」を材料にして、「心配ごと」を発生させるという意）
→ 私には 息子の将来が案じられる。

これらの自発文を作る動詞は通常の実動詞と比べてその他動性は低い、安達(1995)も指摘するように、ゼロではない。「そう思いたい」「思い出したくても思い出せない」のように「～たい」や可能形との共起が可能だし、「彼の悲痛な叫びをもっと{感じて!／感じろ!}」のような働きかけも可能である。「偲ぶ」や「案じる」はすでにこの形で自発に近い意味を表すと感じられるかもしれないが、やはりそこには思考・判断する対象に意識を向けたり、記憶にアクセスしてそれを引き出そうとしたりして、結果物を生むためになんらかの“心的な働きかけ”が存在すると考えられる。したがって「～たい」という表現が現れることがある。

- (163) a. 真宗では位牌を用いませんで、亡くなった人を偲びたいと故人の写真を仏壇の中に入れる人もいるでしょう。(BCCWJ[17])

- b. 「ひんい」という言葉さえ忘れたらしい国や、自国の外交ぶりにため息をつくくらいなら、多くの幸せを失った福島をもっと案じたい。

(読売新聞 2012 年 9 月 29 日)

次に自発の規定の（イ）について論じる。生産イベントでかつ再帰構造をもつイベントスキーマにおいて、使役主は反使役化によって材料が同定され、抑制されることによって統語構造には現れなくなる。そのかわりに焦点が当たるのが、発生物が〈場〉において発生するというイベントである。この〈場〉は元々再帰構造で思考動詞の思考主体と同定されていたものである。

4.6.2.3 節の「知れる」の自発の分析で示したように、本論文では、再帰構造をもつイベントにおいて、反使役化が起こる場合には、元々使役主と同定されていた場所項は、図 4.22 に示したように「空（ ϕ ）」となると考える。問題は、空（ ϕ ）になっている場所項にデフォルトで何が入るのかということである。「知れる」の分析では、反使役化という概念転換によることを踏まえて、「知る」対象物（知的信息）がその内在的コントロールによってその場に発生することに注目した。私たちは百科事典的な知識として、知的信息は何も外部からコントロールされなければ、情報元からどこにでも移動するような性質をもっていると考える。その結果、「～が（ ϕ に）知れる」の「空（ ϕ ）」となった情報の到達点として〈場〉はデフォルトでは「人々」「不特定多数」と分析した。

それでは、生産事象スキーマでかつ再帰構造の思考動詞の自発の概念の場合はどうなるだろうか。それは前節の疑問 2「なぜ自発文では認知主体が「私」になるのが普通なのか」の答を出すということである。「知れる」も自発の「思われる」「俥ばれる」「案じられる」も反使役化によって概念が転換するが、自発は「知れる」と異なり、ベースとなるイベントスキーマとして生産事象をもつ。これが決定的な違いである。生産事象をもつということは、その生産物の発生場所があるということである。反使役化によって使役者と材料が同定され、材料がその内在する性質によってひとりでに生産物（思考結果物）を発生させるという概念に転換する。すると、この同定により発生場所としての〈場〉はやはり「 ϕ （空）」になり、指定されない。つまり、指定されないある〈場〉に生産物（思考結果物）が発生するのである。

そこで、次に問題になるのは、「 ϕ （空）」となり無指定となった〈場〉に、なぜデフォルトで「私」が入るのかという点である。「私」について考える上で、生態心理学の視点に立った分析アプローチ（本多 2005, 2013）は有益である。本多（2013）では、一人称代名詞というは何かという問いに対して、次のようにまとめている。

人間は基本的に、自分の観点から見えるものしか明示的に言葉で表すことはできません。そして自分の姿は自分には直接見えません。ですが、自分の姿は他人には見えます。そして、自分とは違う他人に物事がどう見えているの

かを、人はかなり正確に想像することができます。なので、自分の姿が他人からどう見えているかも、それなりに的確に想像することができます。そのように他人の観点から、つまり自分の外から見た自分の姿は、明示的に言葉で指し示すことができます。それが一人称代名詞なのです。(同上：55-56)

本多はこのように一人称代名詞を規定した上で、日本語は一人称代名詞を表現しないことが多く、英語は一人称代名詞 (I, We) を表現するのが普通である理由を、同じ事態を見ても「どこから見るか」の違いがあるからだとして、その違いを次のようにまとめている。

日本語は他人の観点から見るシミュレーションが起こりにくいということで、自分自身が姿としては見えない観点からの見方が優勢といえます。それに対して英語は他人の観点から見るシミュレーションが起こりやすいわけで、自分自身が姿として見える観点からの見方が優勢と言えます。別の言い方而言えば、日本語は「当事者的な観点からの見方が優勢」なのに対して英語は「傍観者のないし超越的な観点からの見方が優勢」となります。(同上：69)

そしてその違いが現れる例として次の英語と日本語を紹介し、それぞれの見方を下の図のように違うと説明している。

(164) a. Then I saw a big lady standing there.

b. 太ったおばさんがいたの。

(本多 2013 : 68)

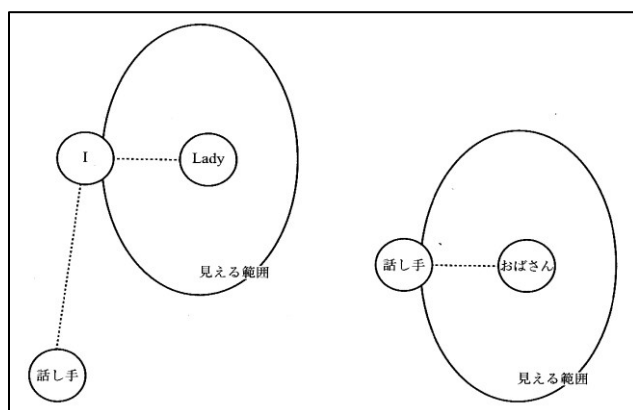


図 4.23 英語と日本語の事態の見方の違い (本多 2013 : 69 の図より)

「私」という存在は事態を語る当事者として見えない存在となり、言語化されないということは、その〈場〉に埋め込まれていると考えることができる。これで上述の疑問 2 の

答を出す材料がそろったことになる。

<疑問 2 とその答え>：なぜ自発文では認知主体が「私」になるのが普通なのか。

自発の概念において「 ϕ (空)」になっている〈場〉は、文脈によって解釈されれば、デフォルトで入るものは、事態の概念化にあたり〈場〉に臨場し、〈場〉に埋め込まれることの多い「私」になると考えるのがもっとも自然である。見方を変えれば、自発とは「語られる事態が発生する場と事態を語る概念化者が同一になっている」という点で非常に特殊な状況だと言える。

ここで大切なことは、池上 (2006) が「国語学の伝統の中で、たとえば「雨が降っている」といった文が〈現象文〉という名称で呼ばれてきたものも、(…略…)むしろ、〈体験文〉と呼ぶほうが妥当であろう」(同上：194) と指摘しているように、日本語は概念化者である「私」が観察の場に埋め込まれる傾向が強いということである。(156a) を日本にする場合には (b) (c) (d) の三つ語り方が考えられる。いずれも「私」を表出せずとも語ることができる。

(165) a. Then I saw a big lady standing there. (=164a)

b. その時、(私は) 太ったおばさんがそこに立っているのを見たの。

c. その時、(私には) 太ったおばさんがそこに立っているのが見えたの。

d. 太ったおばさんがいたの。 (=164b)

(165b,c) で「私」が文に現れる場合は、他の人ではなく私であることを取り立てて述べる場合であり、普通は文脈または場面から理解されるため現れない。(165b) は経験者が主語位置に来て、目撃情報を自身の経験として述べる語り方である。(165c,d) はどちらも観察者である「私」が現場にいて、その視点から「(見える範囲の) 存在物を語る」という〈体験文〉の語り方である。(165c) では「見える」という述語から観察者がそこに存在することが窺えるが、(165d) では「私」が完全に埋め込まれており、文には現れていない。このように英語の 'see' が表す意味は、日本語では状況に応じて「見る」「見える」「 ϕ (文には現れない)」で表現されるのである。

(166)

Cole turns to see Lynn holding the pop tarts. He walks back and takes them from her before leaving.

コールが振り返ると、リンがポップタルトを手にして立っている。コールは母親のところに帰り、ポップタルトを受け取る。部屋を出ていく。

(対訳シナリオ[2])

疑問 3 の答はすでに自発の規定（ウ）に書いたとおりである。疑問 1 のうち自発の格配列のほうは次のようにとられる。

< 疑問 1 とその答え（半分） > :

なぜ①のような二格名詞句の位置の相違が生まれるのか。

自発のイベントスキーマ（図 4.22）は、先に図 4.5 で示した発生の自動詞の概念と変件事象を表す部分の枠組みが同じである。生産事象のスキーマが発生の概念を組み込んでいるからである。自発は発生場所が人（の頭）という点で通常の発生事象の概念とは異なるが、発生の概念が言語化されたものは「<場所>に<対象>が発生」という語順がデフォルトになる。そこで自発の格配列もそれと同じになる。

それでは、受身（167a）に現れる二格名詞と自発（167b）のそれとは何が同じで何が異なるのだろうか。

（167） 再掲（=159）

a. 太郎はみんなに陽気な人間と思われている。

b. （わたしには）故郷がなつかしく思われる。

（益岡・田窪 1992：下線と（b）の（わたしには）は引用者が補った）

尾上（1998-1999）、尾上（2003）は、「受身」「可能」「自発」「尊敬」を表すラレル述語文を「出来文」と考え、共通する事態把握として出来スキーマを仮定し、「事態出来の場が出来文の（第一）主語となる」（尾上 2003：39）と分析している。「出来文」とは次のような文のことである。

出来文とは、事態をあえて個体の運動（動作や変化）として語らず、場における事態全体の出来、生起として語るという事態認識の仕方を表す文である。

（尾上 2003：36）

本論文は、ラレル述語文を生み出す事態把握の本質を「コト全体の生起である」と見る点では、この「出来文」を支持するが、異なる点もある。第一に、事態の発生する場を主語の概念と積極的に結び付けているわけではないことである。尾上（2003）では、出来スキーマを、主語（＝出来の場）が動作主と同一の場合（尊敬）、同一でない場合（受け身）、動作主・対象・場所など様々である場合（可能・自発）の三つに分類している。

(168) 事態の発生場 (尾上 2003 の例文をもとに作成。場の下線を引く)

- a. 【受身】太郎が母親に褒められた。
- b. 【尊敬】夏目先生が長編小説を書かれた。
- c. 【可能】私は納豆が/を食べられない。
- d. 【可能】納豆はだれでも食べられる。
- e. 【可能】この寮はいつでも電話がかけられる。
- f. 【自発】私は故郷が懐かしく思い出される。
- g. 【自発】あの人の意見は間違っていると思われる。

尾上 (同上 : 38-39) によれば、受身では被影響者・動作対象物が事態発生場として決まるが、自発・可能では事態生起そのものが焦点化されるので、事態発生場は複数通りありうるといふ。(168c) では動作主が、(d) では対象が、(e) では場所が、(f) では感情の主体が、(g) では認識・判断の対象が事態出来場として捉えられ主語になると指摘している。本論文ではこのように出来場を主語と結び付けて分析することはない¹⁹³。

第二に、事態が発生する〈場〉だけでなく、その発生が依拠する〈場〉の二つを設定する¹⁹⁴。受身と可能 (「尊敬」は本論文では扱わない) については、主語位置に立つガ格名詞句が把握事態の発生場〈場〉と考えるので、一部は尾上 (2003) の見方と重なる。しかし、その場合でも発生事象が依拠する〈場〉というものを導入し、あくまでも二格名詞句が示す〈場〉というものに注目する点で異なると言える。これは三つ目の違いとも関連する。

第三に、題目の「～は」の扱いである。尾上 (2003) は事態出来場が主語との関係で論じられており、「～は」で題目化された名詞句を指して、事態主体の場と認め、それを主語と結び付けている。文の基本的な構造を知るには、「～は」で題目化される前の文を見るべきだろう。本論文では、(168) の (c) ～ (g) はそれぞれ「私ニ納豆ガ食べられないコト」「誰ニでも甘納豆が食べられるコト」「(人々ニ) その寮で電話ガかけられるコト」「私ニ故郷ガ懐かしく思い出されるコト」「私ニあの人の意見ガ間違っていると思われるコト」のようにコト図式に入れた際に現れる「～ニ～ガ V」を構文の原型として認定し分析する。尾上 (2003) の示した例文はこのような出来文としての事態把握があった後に、特定の要素を題目化しその名詞句の特徴 (側面・属性) を述べる文になっていると考えられる。

下に本論文の分析アプローチに合わせた出来文の規定を示す。モノと〈場〉の二者関係の概念化に注目する立場をとること、そして主語を積極的に認定する立場をとらないこと、そして、あとで論じるように自発と受身・可能では出来事が発生する〈場〉の捉え方が異なることなどを踏まえて、次のように規定する。

¹⁹³ ただし、主語不要論を積極的に唱えるわけではない。〈場〉は〈場〉として、対象との二者関係のなかで立ち上がる構文を観察し、分析しようというものである。主語という用語は先行研究に言及する際には用いるが、本研究の分析を述べる際には極力避け、主語位置に立つ名詞句のように表現する。ただし、格標示については、ガ格、ニ格、デ格というように用いる。

¹⁹⁴ 後の分析でも少し触れるが、自動詞の可能文とニ格使役文ではこの二つの〈場〉は同一になる。

<出来文> 本論文の規定

出来文とは、モノとモノの使役連鎖としての事態把握から、イベントと〈場〉の二者の関係の把握に転換し、ある〈場〉に出来事全体が発生するという捉え方によって言語化される構文である。このような出来文の文法形式の一つとして「ラレル接辞」がある¹⁹⁵。

<出来文と二格名詞句>

もともとの動作主が格下げされ場所化し、二格名詞句となって現れる。二格名詞句によって示される〈場〉は、把握事態発生が依拠する〈場〉である。受身・可能にはこの発生が依拠する〈場〉が存在するが、反使役化がかかわる自発には存在しない。

・受身と可能の場合：

主語位置に来るガ格名詞句で示される〈場〉において把握事態が発生することが、二格で示される〈場〉に依拠して生起する、という捉え方になる。

・自発の場合：

把握事態の発生が依拠する〈場〉はなく、状況（文脈）に依存した〈場〉において把握事態が発生するという捉え方になる。

（※この〈場〉は先に分析したとおり、デフォルトでは「わたし」になる）

ある事態が起きたとき、その原因の把握として二つの側面がある。一つは、モノとモノの因果関係の側面である。もう一つは出来事全体をとらえて、それが発生した「背景」である。わかりやすく言い換えれば「事件を引き起こした当事者」なのか「事件が起きた背景」なのかの違いである。その点に注目し、本論文では受身と可能の出来文に現れる「把握事態の発生が依拠する〈場〉」を次のように規定しておく。

<発生が依拠する〈場〉>

把握事態の発生が依拠する〈場〉とは、出来事の成立にあたって認知される因果関係を、モノとモノの使役連鎖の始点と着点ではなく、〈場〉とイベントの関係、つまり〈背景〉とそこに発生するイベントの関係として把握される場合の〈場〉のことである。

把握事態が直接発生する〈場〉とその発生が依拠する〈場〉の二つを仮定する意義はこのあと受身、可能、自発のイベントスキーマを示しながら論じる。それでは、本論文が考える出来文のイベントスキーマを示しながら〈場〉とどのようにつながっているのかを見ていく。まず、能動文と受身文のイベントスキーマの違いを示す。

¹⁹⁵ あとで議論されるように、本論文では「ラレル述語」が出来文を作る唯一の形式であるとは考えない。使役態、受益態も同様に、ある〈場〉に事態全体が生起するという事態把握が組み込まれていると考える。

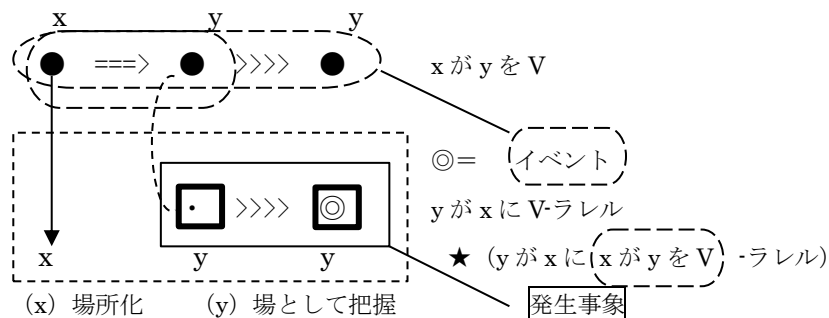


図 4.24 能動文と受身文のイベントスキーマ¹⁹⁶

上段は「x が y を V」という他動詞文（能動文）のスキーマである。イベントを示す破線の枠組みが二つあるのは、変化事象でも変化しない事象でも下段のスキーマには変わりがないことを意味している。下段は受身文のスキーマで、概略「受身文のガ格名詞句（y）の身にイベントが発生することが、降格した（x）という〈場〉に依拠して生起している」ことを表している。場所化した x を示す大きな破線の四角と、その中にやはり〈場〉して捉えられガ格名詞句の y が小さい四角で示されている。この四角が太実線なのは際立ちが与えられていることを示している。このような事態把握の認知モデルを、二つの〈場〉をもつということで、便宜的に「場の二重構造モデル」と呼ぶことにする。図の右側に書いた文はこのイメージスキーマによる事態把握が言語化したものである。★の文は「y の身に把握事態が発生する」という概念をわかりやすくするために示したものである。上の図を立体的に示すと次のようになる。上段の網掛けしたものが、把握事態（把握されるイベント全体）で、下段の◎から放射状に延びる破線は、y という〈場〉において把握事態が発生することを表している。以降は簡略化した平面図で示す。

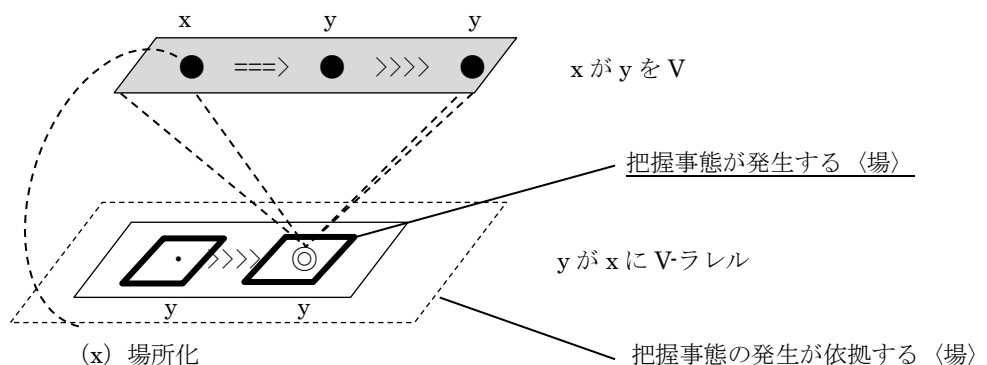


図 4.25 能動文と受身文のイベントスキーマ（立体図）

¹⁹⁶ 能動文が自動詞述語の場合に対応する受身文（間接受身）については 4.11.3 節を参照されたい。

このようなイメージスキーマを想定した場合、直観的には降格し場所化した二格名詞句は際立ちがなくなり、背景化することはわかるが、なぜ受身文がデフォルトでは「(xに) yがV-られる」ではなく、「yが(xに) V-られる」という構文になって現れるのかを十分に説明するものではない。さらに可能の事態把握とのつながりを考えなければならない。ラレル接辞は、自発・可能・受身・尊敬に共通している。これらの四つに現れる二格名詞句が示す〈場〉はイベントスキーマ全体でどのような位置付けになるかは、それぞれ異なり、異なるからこそ、四つの異なる概念として言語化されると仮定し、議論を進める。

これら四つの意味を表すラレル述語文が通時的にどのように生まれてのかについては吉田（1973）で次のように整理されている。山田（1936：317-318）は「受身＞自発＞可能＞尊敬」のようにつながると考えたのに対して、橋本（1969：286-292）は、一つのものから分かれたという考えを示した。何を出発点とするかについては、細江逸記氏が、中相(Middle Voice)をすべての出発点と考え、所相(＝受身)も中相から出て、また可能から敬語が出たと考えるのに反論する形で、橋本は「自らさうなる意味からすべてがわかれ出た」(同上：289)と唱えた¹⁹⁷。このようにまとめた上で、吉田（1973）は橋本説を支持し、四つのつながりを円錐形を用いて左のような図で示した。

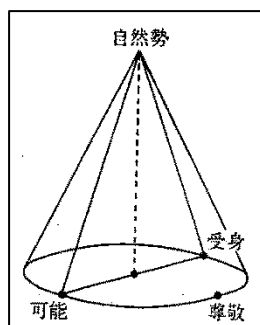


図 4.26 自然勢を頂点とした可能・受身・尊敬の関係（吉田 1973：122 より）

本論文の目的は通時的な四つの用法の派生関係を特定することではない。川村（2005）も意味相互の間の派生・拡張を見ていくことに対して「意味の種類の整理や、意味と格標示の関係をめぐる整理の上に立つと、従来の議論には種々の困難があると思われる」（同上：47）と指摘し、むしろラレル述語を事態の捉え方を表す形式として見ることによって多義が説明できると述べている。本論文も基本的にこの立場に立つが、ここで注目したいのは、派生・拡張関係というよりも、可能と受身を相対する関係であるとみる点である。

¹⁹⁷ 批判の対象となったのは次の論文である。細江逸記（1928）「我が國語の動詞の相（Voice）を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」市河三喜（編）『岡倉先生記念論文集』岡倉先生還暦祝賀會：96-130。橋本（1969）は「日本語では、後にも、反照的な語法は發達しないし、我々の言語意識として「自らをどうする」というやうに考えるのは不隱當に感ぜられる。それよりも、「自らさうなる」というのが、日本的の考へ方ではなからうか。」(pp.289-290)と考え、細江の中相が出発点になるという考えを退けた。

「れる」のもつ客観性・間接性を主体がどちら側から把握し、どのように感じ取るかによって、意味分化が行われるのではなかろうか。(…略…) 受身の相は主語が操作する当事者でなく受ける側になっている。(…例文略…) このような受身態に対して、可能は主語が動作主の側にある。(…略…) 受身は可能の反対側からの把握である。(吉田 1973 : 122-123)

森田 (1989) 『基礎日本語辞典』で示した「～られる」の分析でも、やはり可能と受身を相対するものとして分析している。森田氏は両者は同じ事態のとらえ方（視点）の違いであると考え、「おのずとそうになっていく行為の実現の主体が強調されれば＜能力賦与＞の＜可能＞となり、行為実現の対象が強調されれば＜受身＞となる」と分析した。そして視点の違いを「横綱が投げられる」という事態把握について次のように説明している。

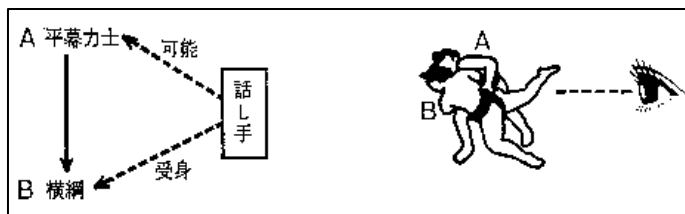


図 4.27 可能と受身の視点の違い (同上 : p.1214 の図より)

「A ニ B ガ他動詞られる」文型において、行為主体 A (おいどん) の立場から見れば＜可能＞であり、対象 B (横綱) の立場から見れば＜受身＞である。＜可能＞は行為主体 A が同時に「られる」の主体となった場合である。そのときの対象 B が「られる」主体となれば＜受身＞である。＜受身＞は、B が行為主体 A によってそのようにさせられるのである。

「おいどんにトッテハ (横綱が) 投げられる＜可能＞」

「(おいどんにヨッテ) 横綱が投げられる＜受身＞」

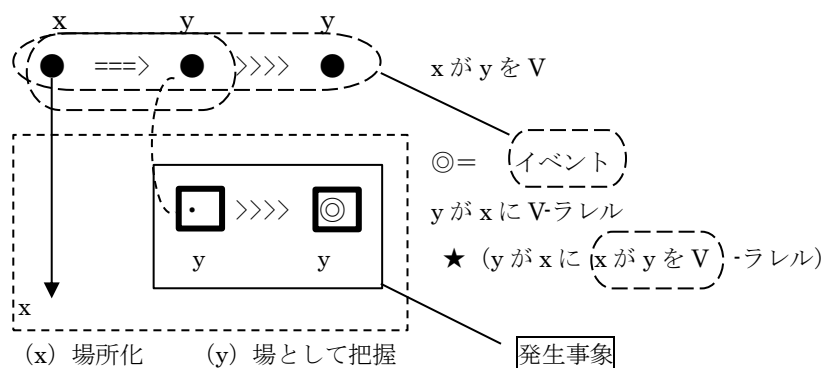
“横綱が投げられた” という一つの事実に対して、横綱を投げた側から見れば＜可能＞となる。“実現困難とみられた事態が現に成立しえた” ということも、一種の＜可能＞と見るべきである。文型的には、行為実現の主体 A が文頭に立って、

「A ハ/ニハ B ガ……」となる。

一方、横綱側から見れば明らかに＜受身＞である。(同上 : 1213-1214) ¹⁹⁸

¹⁹⁸ 森田氏は文型（格配列）を比較するために二格名詞句をどちらの文型でも文頭に置いて示しているが、デフォルトではやはり可能文は「～に～が V-(ら)れる」、受身文は「～が～に V-(ら)れる」である。

可能文と受身文のイベントスキーマを示して、いかなる点においてこの二つが相対する関係にあると言えるのかを見てみる。受身文と可能文のイベントスキーマは、一見すると同じようだが、二つの点で異なる。一つ目は、発生事象の部分である。可能の基本の意味は能力可能であれ状況可能であれ、それは潜在的にそのモノがもつ状態であるということである。尾上（1998-1999：出来文（2）：93）が規定しているように、可能は「動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中にある」ということである¹⁹⁹。したがって、その違いを、図 4.24（再掲）では発生事象の枠線を実線で示し、図 4.28 では発生事象の枠線を破線で示すことによって区別した。実線は顕在する事態把握で、破線は発生し得る状態で潜在的であることを示している。



（再掲）図 4.24 能動文と受身文のイベントスキーマ

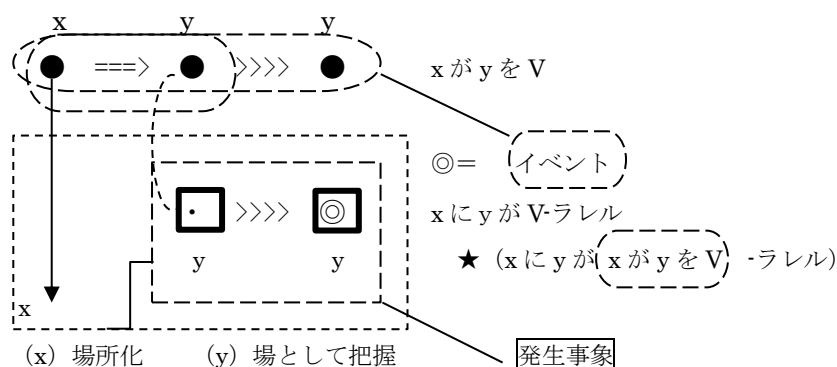


図 4.28 可能文のイベントスキーマ²⁰⁰

¹⁹⁹ このような潜在性が顕在化した場合、つまり実際に成立した場合については、「実現可能」（尾上 同上：95）あるいは「意図成就」（尾上 2003：36）と呼び区別されるが、両者を合わせて単に「可能」と呼ばれる場合もある。実現可能、意図成就を表す場合には、スキーマ上の発生事象の枠線が実線になる。

²⁰⁰ この図は他動詞の可能文のスキーマを示している。自動詞（非能格動詞）を用いた「（私は）10キロ泳ぐ」の可能文「（私に）10キロ泳げる [こと]」のスキーマは、事態の発生する〈場〉とそれが依拠する〈場〉が重なり一体になっていると仮定し、図中の y の〈場〉が x の〈場〉になると考える。それ以外、基本的なスキーマの枠組みは同じである。

二つ目は、発生事象が依拠する〈場〉と関連付けられているかいないかという点である。可能文のスキーマでは発生事象は依拠する〈場〉と積極的に関連付けられているが、受身文のスキーマはそうではない。これはスキーマ上で発生事象の左から依拠する〈場〉へと実線でつなぐことによって示されている。この実線は、発生の依拠する場と発生事象が積極的に関連付けられていることを視覚的に示したものである。

場所化した(x)は発生事象の依拠する〈場〉となることはどちらにも共通していることであるが、そのかわりの在り方が異なる。これは概念化者の主体的な事態把握の違いだと言える。本論文では、その「依拠性」の把握の違いによって受身と可能の区別が起こると考える。

<ニ格名詞句が示す依拠性>

その存在なしにはある事象が発生しない場合に、その存在は事象に対して依拠性をもつと言う。

①発生事象に対してポジティブな依拠性をもつ → <可能>の解釈

ポジティブな依拠性とは、発生事象が場所化されたニ格名詞句の意図に沿うように発生したと把握される性質のことである。²⁰¹

②発生事象に対してネガティブな依拠性をもつ → <受身>の解釈

ネガティブな依拠性とは、発生事象が単に場所化されたニ格名詞句に依拠して発生したと把握される性質のことである。²⁰²

上の規定は、可能と受身の違いを次のように説明する。「太郎(x)が次郎(y)を投げる」という事態をもとに、それをどのような視点で捉えて言語化するかには複数の方法がある。ここでは受け手の「次郎」に把握事態が発生するという捉え方したと仮定する。すると、概略「次郎の身に<太郎が次郎を投げる>という事態が発生する」という事態把握になる。これは「[太郎(x)に]次郎(y)が投げられる」となって出力される。この段階では、可能は潜在性で受身は実現性という違いはあるものの、スキーマに示した発生事象の中味は同じである。[太郎に]で示された発生事象が依拠する場と発生事象とのつながりが未定である。そこで、この依拠性をポジティブなものと捉えたと仮定する。すると、概略「背景化された太郎という依拠する〈場〉において、次郎の身に、太郎の意図に沿うような形で<太郎が次郎を投げる>という事態が発生する」という事態把握になる。これがすなわち、

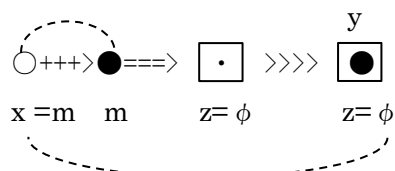
²⁰¹ 可能文に「xにyがV・(ら)れる」と「xがyをV・(ら)れる」の二つの構文が成立することについては、出来スキーマを基本とするラレル述語文として、前者の構文が基本だと考えられる。その上で、後者の構文が現れるのは、イベント「xがyをV」が発生する〈場〉が受け手のyではなく仕手のxと把握されることによって、発生する〈場〉と発生が依拠する〈場〉がxで同一になり、結果的に「xに」が表れなくなる、と現時点では考えておく。理論的な検証は今後の課題としたい。

²⁰² ここに示した依拠性は受身文における基本的な意味である。持ち主の受身および間接受身におけるニ格名詞句の依拠性もこれに基づいている。詳しくはそれぞれ4.11.2節、4.11.3節を参照されたい。

可能の概念になる。一方、依拠性をネガティブなものと捉えたと仮定する。すると、概略「背景化された太郎という依拠する〈場〉において、次郎の身に、＜太郎が次郎を投げる＞という事態が発生する」という事態把握になる。これがすなわち、受身の概念になる。

この考え方は、先に紹介した森田（1989）の言う「視点の違い」を、〈場〉とイベントの二者関係について、二格名詞句が示す発生事象の「依拠性」という観点で規定しなおしたものと言える。上記のとおり、この二格名詞句の示す依拠性は、なぜ可能の意味が生まれるのか、そして、なぜ受身は受影の意味が生まれるのかを、客観的に同じ事態をもとに事態把握の在り方の違いによって説明されるという点で意義があると考ええる。二つのイベントスキーマの上段に示したモノとモノの使役連鎖に基づいた他動詞構文の把握そのものはまったく同じである。つまり、ラレル述語による態の転換は、使役連鎖というモノとモノの非対称性に基づいた事態把握から、イベントと〈場〉の二者関係に基づいた事態把握への転換であると言える。現時点ではイベントスキーマに基づいた理論的な指摘に留まるが、このように考えて先に進むことにする。

それでは、本題の自発と受身の「思われる」に現れる二格名詞句の分析に移ることにする。先の分析において、自発の概念は生産事象と再帰構造がベースになった次のようなイベントスキーマに基づくことを示した。このスキーマにおける生産事象とは、使役主（ x ：生産者）が材料（ m ）に働きかけ、それによって生産物（ y ）つまり、思考の結果物が発生することを表し、再帰構造とは、生産物が発生する〈場〉が自分自身（の心/脳）になっていることを意味する。



（再掲：図 4.22） 自発のイベントスキーマ

これが事態把握のベースになり、図に示したように使役主（ x ）と材料（ m ）が同定されると、自発の概念へと転換する。つまり、材料がその内在的な性質によってひとりでに生産物となり、自分自身（の心）に発生するするという概念へと転換する。使役主が材料と同定されることによって、使役主（ x ）は抑制され、再帰構造において同定されていた発生する場（ z ）との同定も解除され空（ ϕ ）になると仮定した。

基本的にこのスキーマで問題ない考えるが、ラレル接辞の付加は態の変換なので、元他動詞文と自発文の対応関係がわかるように、書き直すと、図 4.29 のようになる。上段が思考動詞「～が～を思う」が作りだされる「生産事象＋再帰構造」のイベントスキーマで、下段がラレル接辞がついた自発文の「～に～が思われる」のイベントスキーマである。

Figure 1 illustrates the relationship between the world and the event. The diagram shows a sequence of states and transitions. At the top, a state with two black dots (labeled x and m) transitions to a state with a single dot (labeled x), which then transitions to a state with a single dot (labeled y). Below this, a state with a single dot (labeled ϕ) transitions to a state with a single dot (labeled $z=\phi$), which then transitions to a state with a single dot (labeled $z=\phi$). A dashed box labeled "発生事象" (Occurrence Event) encloses the transition from the single dot state to the double dot state. A legend indicates that a double dot represents an "イベント" (Event).

The diagram illustrates the relationship between place, event, and field in a process model. It shows a sequence of states connected by transitions (represented by arrows). The states are represented by circles containing symbols: a solid black circle, a circle with a dot, and a bullseye (concentric circles). Transitions are labeled with 'x' and 'y' above them, and 'm' and 'n' to their right. A dashed box labeled '(x) 場所化' (Place) encloses the first two states. A solid box labeled '(z) 場として把握' (Field) encloses the last two states. A dashed box labeled '(y) イベント' (Event) encloses the transition between the first and second states. A solid box labeled '(x) 発生事象' (Occurrence) encloses the transition between the third and fourth states. Text annotations explain the symbols: 'x が y を V / x が [p が/を~] と V (思う)' (x thinks y is V / x thinks [p is/has ~] and V), '◎ = イベント' (◎ = Event), 'y が x に V-ラレル (思われる)' (y is V-related to x (thought)), and '[p が~] と x に V-ラレル (思われる)' ([p is ~] and x is V-related (thought)). A star symbol is used to denote a specific relationship: '★ (x に x が y を V / x が [p が~] と V) -ラレル)' (★ (x is V-related to x that y is V / x that [p is ~] and V) -related).

上の図からわかるように、自発と受身の「思われる」の大きな違いは、把握事態の発生の依拠する〈場〉の有無である。自発にはそれがなく、受身にはある。ただし、通常の受身と次の点で異なることを指摘しておかなければならない。通常の受身では、発生事象が能動文の受け手 (y) において発生すると把握され、能動文の受け手がガ格名詞句となり主語位置に来る。一方、生産事象と再帰構造を併せ持つ「思う」の場合は、先に自発のイベントスキーマで分析したように、発生事象が発生する〈場〉は思考主体 (x) と同一になる。そのため、能動文における発生物 (y) または発生した内容 (= 命題) の主語 (p) が、受身文の主語名詞句となる。それでは、先に挙げた例文でその違いがどのように統語構造に反映されているかを確認する。

a. 太郎はみんなに陽気な人間と思われている。
b. (わたしには) 故郷がなつかしく思われる。

187

(a) は受身で、概念上は「みんな (の心/脳) という〈場〉において、＜みんなが【太郎が/陽気な人間だ】と思う＞という把握事態が発生し、その把握事態は、場所化した「みんな」とネガティブな依拠性をもつ」という意味を表す。このような概念が言語化されたものをコト図式に入れて示すと、「【太郎が陽気な人間だ】とみんなに思われているコト」となる。この格名詞句が題目されのが (a) に示した「太郎はみんなに陽気な人間と思われている。」である。

(b) は自発で、概念上は「φの〈場〉において、＜【故郷をなつかしく】思う＞という把握事態が発生し、その把握事態の発生が依拠する〈場〉はなく、事態はひとりでに発生する」という意味を表す。このような概念が言語化されたものをコト図式に入れて示すと、「φに【故郷がなつかしく】思われる」となる。そして、状況、文脈によってデフォルトで「φ」に「わたし」が入ったのが (b) の「(わたしには) 故郷がなつかしく思われる。」である。概念上の意味を説明すると非常に長くなるが、実際の発話においては、事態の把握は脳内で無意識にかつ高速に処理され出力される。

このように二格名詞句が示す依拠性の違いに注目すると、受身の「～と思われる」と可能の「～と思える」の意味の違いは次のように説明できる。

＜[～と/に/く] 思われる」と[～と/に/く] 思える」の違い＞

思われる (受身) :

場所化した二格名詞句が発生事象に対してネガティブな依拠性をもつ。

⇒単に場所化されるだけで見えなくなる思考主体 ⇒客観的な叙述

思える (可能) :

場所化した二格名詞句が発生事象に対してポジティブな依拠性をもつ。

⇒場所化されながらも意図性を示す思考主体 ⇒主観的な叙述

それでは疑問 1 の答え (もう半分) と合わせて次のようにまとめて本節の考察を終わる。

＜受身・可能・自発に現れる二格名詞は何が同じで何が異なるのか＞

- ・ 同じ点 : いずれも把握事態の発生の〈場〉にかかわる
- ・ 異なる点 : 二格名詞句は、受身と可能では把握事態の発生が依拠する〈場〉を示す。
(受身: ネガティブな依拠性, 可能: ポジティブな依拠性)
自発では把握事態の発生する〈場〉そのものを示す
(把握事態の発生が依拠する〈場〉はない)

・デフォルトの語順：

受身：【事態が発生する〈場〉】ガ＋〔発生が依拠する〈場〉〕ニ＋V-ラレル
(ネガティブな依拠性)

可能：〔発生が依拠する〈場〉〕ニ＋【事態が発生する〈場〉】ガ＋V-ラレル
(ポジティブな依拠性)

自発：事態が発生する〈場〉ニ＋《発生物／発生内容》ガ＋V-ラレル

事態の把握の在り方が意味の違いを生むという考え方に基づいて、「場の二重構造モデル」というものを仮定した。これを仮定する意義は、ラレル述語で表現される受身・可能・自発の概念の差異を、二格名詞で示される場の依拠性の有無とその捉え方の差異によって合理的に説明できることである。

4.6.6 「見る」と「見える」再考

自発とは何かについての分析を終えたところで、改めて「見る」と「見える」について考えることにする。4.6.4 節で自発を規定し、「(ら)れる」接辞によると記述したが、その規定は「見える」「聞こえる」にも当てはまる。現代語の助動詞の意識からすると、「思われる」は「思う」に自発の「(ら)れる」が接続した形のように見えるが、歴史を遡れば、上代で自発・可能・受身を表す助動詞「ゆ・らゆ・る」があり、「思ふ」は「思ほゆ」という語として存在していた。しかし、その後「ゆ・らゆ」は衰退し、かわりに「らる」が使われるようになったという経緯がある(山口他 1997: 23, 56)。したがって、「見える」「聞こえる」は遡れば上代の「見ゆ」「聞こゆ」であり、それが活用の変遷によって「見える」「聞こえる」になったものである。

さて、4.6.3 節の冒頭で「見る」「見える」の概念をイベントスキーマとともに示し、ここでは、次のように説明した。

(再掲=141)

a. 「見せる」：複他動詞

↑非再帰化

b. 「見る」：使役変化他動詞

↓自動詞化

c. 「見える」：変化自動詞

「〈MOVE〉→〈BE〉EXIST」(自動詞構文)

視覚情報がある人の目に到達し脳が像として認知できるような
形で存在する

d. 「見る」：Ⅲ型の場焦点化他動詞構文を作る

「〈MOVE〉→〈BE〉POSS」(他動詞構文)

その人が、目に到達し脳が像として認知できるような形で存在
する視覚情報（像）によって特徴付けられる状態になる
つまり、そのような視覚情報の非所有から所有へと変化する

しかし、これは「着る」（モノの再帰）から「知る」（知的情報の再帰）という流れを受けて、「見る」「聞く」を視覚・聴覚情報の再帰と位置付けたものである。このつながりは基本的に正しいと考えられるが、このままでは、「見る」も「見える」も移動イベント〈MOVE〉と存在（〈BE〉 EXIST），または所有（〈BE〉 POSS）の概念のみになってしまう。しかし、4.6.5 節の冒頭で自発を次のように規定した。

- (ア) 生産の事象と再帰構造を併せ持つイベントスキーマにおいて、
(イ) 使役主が反使役化によって働きかける材料と同定され、材料がその内在コントロールによってひとりでの生産物となり、その場に発生するという概念に転換したものである。

生産事象は内部に〈発生〉事象が組み込まれている。したがって、「見る」と「見える」にも〈移動〉だけでなく、〈発生〉も原因事象として組み込まなければならない。そこで、「見る」「見せる」「見える」の概念と相互のつながりを（141）から（170）へ、図 4.19 から図 4.31 へと修正する。

(170) 「見る」「見せる」「見える」【修正版】（修正された箇所に下線を引いておく）

a. 「見せる」：複他動詞

↑ 非再帰化

b. 「見る」：使役変化他動詞

↓ 自動詞化

c. 「見える」：自発を表す自動詞

「〈MOVE〉 → 〈OCCUR〉 → 〈BE〉 EXIST」（自動詞構文）

視覚情報がある人の目に到達し脳が像として認知できるような
形で発生し，そこに存在する

d. 「見る」：Ⅲ型の場合焦点化他動詞構文を作る

「〈MOVE〉 → 〈OCCUR〉 → 〈BE〉 POSS」（他動詞構文）

その人が、目に到達し脳が像として認知できるような形で
発生し，存在する視覚情報（像）によって特徴付けられる
状態になる。

つまり、そのような視覚情報の非所有から所有へと変化する

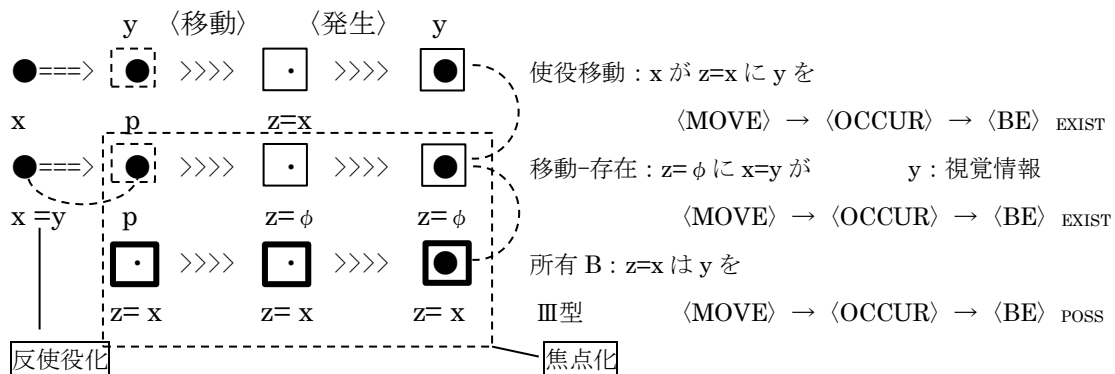


図 4.31 【修正版】「見る」「見える」のイベントスキーマ²⁰³

この〈発生〉を組み込むことで事態の把握にどのような違いが生まれるのか。修正版で注目すべき点は、〈移動〉事象があるにもかかわらず、上段と中段の右から二つ目の〈場〉には●が存在していないことである。これは次のような意味がある。対象物が現実存在するにもかかわらず、その対象に目を向け、いくら意識を向けていても、対象を捉えられないという経験をする。それは視覚情報が目に到達していても、その情報が像として認知できるような形で脳内に〈発生〉していない、つまり映像として出力されていないからである。このような経験的事実は、上の図に示したような〈移動〉と〈発生〉の二つの事象が組み込まれた生産のイベントスキーマによって説明されるのである。

また、再帰構造をもつ使役変化他動詞が、反使役化によって使役主と知覚対象が同定されると、元々再帰構造によって使役主と同定されていた場所項は「空（φ）」になると仮定した。この仮定に基づいて、〈移動〉イベントのみが組み込まれた「知れる」は「空（φ）」にはデフォルトでは「不特定のある場」が入り、「～に知れる」は「（広く一般に）知れる」という意味になると分析される（図 4.17 を参照）。一方、修正版の「見える」は〈移動〉だけでなく〈発生〉イベントも組み込まれている。〈発生〉が組み込まれていることによって、「空（φ）」になった〈場〉には、現場に臨場し〈場〉に埋め込まれている「私」がデフォルトで入ると分析される。

ここまで「自発」「受身」「可能」の概念と二格名詞句が表す〈場〉の共通点と相違点を考察した。それを踏まえてまとめると次のようになる。

<「見える」「見られる」の概念のまとめ>

「見える」自発：

視覚対象と知覚者の位置が定まればひとりでにその対象の情報が知覚者に到達し、
脳の中にイメージとして発生することを、現場に臨場した（場に埋め込まれた）「私」

²⁰³ 〈MOVE〉 → 〈OCCUR〉 は移動のあとに発生事象が続くという概念を表している

の視点で語る動詞の形態である。

「見られる」可能：

「見る」というイベント全体が、知覚主体の〈場〉において成立する潜在性が存在すること、つまり、イベント全体が成立することが自身の〈場〉にポジティブに依拠して生起することを語る動詞の形態である。

「見られる」受身：

「見る」というイベント全体が、「見る」行為の受け手の〈場〉において成立することが、格下げされた知覚主体の〈場〉にネガティブに依拠して生起することを語る動詞の形態である。

「見る」という事態が全体として成立するかどうか問われる場合には「見られる」が用いられ、現場に臨場し埋め込まれた「私」の視点で語る場合には「見える」が用いられる。つまり、「見える」とは対象物と情報の受け手との間に障害物がなければ、視覚情報がひとりで受け手に到達し、それが脳でイメージとして発生する。これが自発ということである。(171)の例はそれが端的に現れている場合である。(a)～(c)は「見る」という事態全体がそれをしようと思ったときに成立するかどうか問われている。見る行為を行う者は、事態を構成する要素としては存在するが、事態が成立する場に臨場しているという意識はない。(a)は「ドラマを見る」ことが成立するかどうかだけが述べられており、テレビの前に座ってテレビの画面に目をやる「私」が想起されるわけではない。一方(d)～(f)では、臨場した「私」が想起される。(d)「テレビの前にいる私」(e)「道路に立つ私」(f)「曲がり角に立って右側に目をやる私」の存在が、たとえ実際には発話時点にそこにいるとしても、想起はされるはずである。

- (171) a. きょうは帰りが遅くなるので、いつも見ているドラマが見られない。
b. この動物はあと数年で絶滅し、見られなくなるだろう。
c. すみません。イルカのショーは何時から見られますか。
d. この液晶テレビ、画像がきれいに見えるね。
e. パレードの行列はどんどん先に行って、とうとう見えなくなった。
f. 次の角を右に曲がると、右側に大きなビルが見えます。交番はそのビルの手前にありますよ。

どちらも用いられる場合があるが、その場合でも上述の語り方の違いは存在する。下の例の(a)ではそのような条件下で「見る」という事態が成立することを語っている。一方(b)では、展望台に上ってそこから富士山のほうを見る「私」の存在が意識される。

- (172) a. 展望台に上れば、富士山が見られますよ。

b. 展望台に上れば、富士山が見えますよ。

自発の「見える」に〈移動〉と〈発生〉の二つの事象がかかわっていると仮定することによって、「見えない」という意味にこの二つの事象がかかわっていると分析できる。「見えない」状況とは、視覚情報の到達を阻害する要因がある場合（173）と到達した視覚情報が脳にイメージとして発生することを阻害する要因がある場合（174）の二つがあることになる²⁰⁴。

（173）a. 前の席に大きい人が座ったので、スクリーンがよく見えない。

b. きょうはもやがかかっているので、遠くの景色が見えない。

（174）a. 黒板の字は小さくてよく見えない。

b. 「この絵の中にある動物が隠れているんだけど、見えるかな？」

「う～ん。ぼくには何も見えないけど。」

後者については少し注意が必要である。到達した視覚情報が脳にイメージとして発生するかしないかは、視覚情報を提供する対象物と受け手である知覚者の相互関係による。1 ミリ以下の非常に細かく書かれた文字が 100 メートル先にあったら普通の人間の視力では「見えない」だろうが、すぐ目の前にあれば「見える」。しかし、同じ人が同じ状況で同じものを見ても、疲労で視力が低下していたら「見えない」だろう。動物が隠れているだまし絵を見せられた場合、ある人にはその動物が「見える」が、ある人には「見えない」だろう。この到達の阻害要因と発生の阻害要因の二つの場合を統合して、アフォーダンス²⁰⁵の観点から言えば、次のようにまとめられる。

- ・ある対象が、その現場に臨場し場に埋め込まれた知覚者（＝「私」）に対して「見える」ことをアフォードするか、「見えない」ことをアフォードするかは、その現場の環境と知覚者による。

次に、一見すると奇妙に思われる次の「見える」について少し触れておく。（175b）には（175a）にはなかった実際に家が存在する場所として「川の向こうに」が現れているため、事態が発生する〈場〉としての「私に」と二つの名詞句が存在することになる。

（175）a. （私には）赤い屋根の家が見える。

b. （私には）川の向こうに赤い屋根の家が見える。

²⁰⁴ 日本語では視力を失った人には「目が見えない」という表現を用いるが、これは後者に分類される。

²⁰⁵ アフォーダンスとはアメリカの知覚心理学者ジェームス・ギブソンによる造語で、「環境が動物に提供する「価値」のことである。」（佐々木 1994）

池上（2006）、本多（2013）が示したように、日本語では概念化者がその現場に埋め込まれて意識されない。そのため、「あ、川の向こうに赤い屋根の家があるよ」という語り方も可能であり、むしろこのほうが日本語らしい。「家がある」と言うからには、それを観察している概念化が存在するのだが、その「私」は意識されないのである。このような語り方を踏まえれば、(175b)は「川の向こうに赤い屋根の家がある」という語り方と「赤い屋根の家が見える」という語り方が融合した構文だと言えるだろう。

このような融合が起こることは先に示したイベントスキーマでも示すことができる。「見える」が言語化される中段のスキーマに注目してほしい。このスキーマには、視覚情報（y）が元々存在した場所（p）とその情報が到達し、イメージとして発生する場所（ $z=\phi$ ）の二つの場があることがわかる。この二つがともに言語化されたのが、(175b)であると分析される。

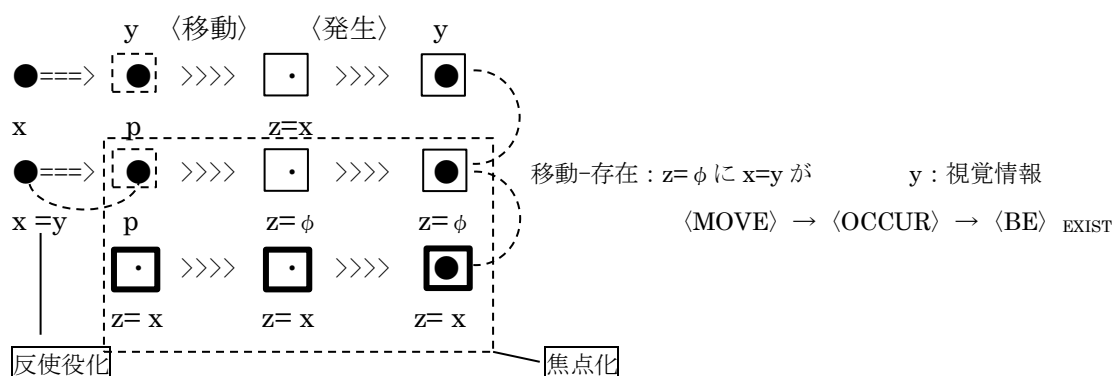


図 4.32 【修正版】「見る」「見える」のイベントスキーマ（再掲，一部情報を省略）

日本語の「見える」が英語の‘see’に対応していることはすでに観察したが、用例を観察すると、‘see’に‘can’がついて‘can see’で使われる場合とつかない場合とがあることに気が付く。安藤（2005）によれば、助動詞の‘can’の表す意味の一つに精神的・身体的な能力（ability）があり、この能力は潜在的であるが、「see, hear, feel, smell, taste のような知覚動詞（perception verb）の場合、特に〈英〉では can とともに用いられて、通例、身体的な〈能力〉が発現されていることを表す」（同上：275）と述べている。

(176) “...Ah!” —she shut her eyes— “I can see it happening ...”

（「ああ！」—彼女は目をつむった。—「それが起こっているのが見えるわ…」）

（同上：276）

日本語で「見える」は自発であり、知覚主体は聴覚情報の受け手としての〈場〉であり、

かつ脳への像を発生する〈場〉である。古語の「見ゆ」は自発・可能・受身の意味を持っていたと考えられるが、現代語においては、コトの生起全体にかかわる実現の潜在性・実現可能については、「(ら)れる」接辞をつけた「見られる」を用いる。もし「見える」にも可能の意味があるとすれば、〈場〉への到達プロセス、〈場〉における発生のプロセスに障害がなく事態が成立するという点においてだろう。日本語では「開けようとしたけど、開けなかった」「入れてみたら、入った」のように、意図したことが実現しなかったりした場合には、自動詞が現れ、かつそれが可能態にはなっていない。日本語学習者の中にはここに可能態を使う誤用も見られる。つまり、概念としてはここに可能が“刷り込まれている”と言えるだろう。同様のことが「見ようとしたけど、見えない」「見てみたら、見えた」という場合にも、自発という形をとりながら可能の意味が刷り込まれていると見ることができる²⁰⁶。

安藤（2005）によれば、(177)の二つの文は能力が顕在する場合と潜在する場合を表しているという。そして、(b)のように一般論（総称文）の場合にこのような潜在的能力の解釈ができるという。

- (177) a. I can see the moon tonight. (今夜は月が見える) 顕在的能力
 b. Cats can see in the dark. (ネコは暗がりで見える) 潜在的能力
 (同上 : 276)

また、Leech, G. N.の論考²⁰⁷を引用して次のように述べている。

知覚動詞が can と共起する場合は「知覚の状態」を表すが、can を伴わない場合は「瞬間的な知覚」を表すとする²⁰⁸。

- (i) a. I can see a bird. (鳥が見える)
 b. I see a bird! (鳥が見えた!)
- (ii) a. I could hear a door slamming.
 (ドアがバタンバタンというのが聞こえていた)
 b. I heard a door slam. (ドアがバタンというのが聞こえた) [一回の音]
 (同上 : 276)

つまり、‘can’が付かない場合は＜変化＞の側面に焦点が当たり、‘can’を付けることによって、その変化の＜結果＞の状態あるいは、その現象の持続に焦点が当たると、ま

²⁰⁶ 視力検査は「視覚対象物が見られるかどうかの検査」ではなく、「見えるかどうかの検査」である。

²⁰⁷ Leech, G.N. (1987) “Meaning and the English Verb,” Longman.

²⁰⁸ イギリス英語に顕著だという。また、‘see’ ‘hear’は通常進行形にすることができないが、can+感覚動詞はその代用表現に近いという。安藤（2005 : 277）によれば、Swan, M.(1995) “Practical English Usage.” Oxford University Press.も「can+知覚動詞」が現在進行形の意味をもつことを認めているという。『ジーニアス英和大辞典』の‘can’ ‘see’ ‘hear’の項も参照。

めることができるだろう。そこで、4.6.3.2.節で示した表 4.9 を次のように修正する。網掛けした部分が修正した部分である。

表 4.10 【修正版】「見る」「見える」と‘look’‘see’の対応

	<行為+変化> (状態)	
	<行為>	<変化> (状態)
英語	look (at/to)	see
		(can see)
日本語	—	見える
	【行為の焦点化】 見る (2)	【場の焦点化】 見る (3)
	見る (1)	

4.6.7 「聞く」「聞こえる」「聞かせる」

「聞く」「聞こえる」「聞かせる」は前節の「見る」「見える」「見せる」とほぼ並行的に分析できる。そこで、説明の重複を避け、ポイントとなる部分だけ例文を挙げながら整理しておく。英語知覚動詞との比較では、基本的に「聞く」と‘listen’、「聞こえる」と‘hear’が対応している。ただし、「見る」が‘see’と対応した例があったように、「聞く」にも‘hear’が対応する場合がある。それは、「聞く」にも再帰構造をもつ使役変化他動詞としての「聞く」だけでなく、Ⅲ型の場焦点化他動詞として「聞く」が存在するからである。(179)の「聞いた」もその例である。

(178)

Burt : Tell you something . You listen close,
too, because it might be something
you need to know.

Paul : I'm listening.

ひとつお話ししましょう。よく
聞いてください。きっとあなた
のためになります。

聞きましょう。

(対訳シナリオ[1])

(179)

Brutal : Course they're broken, I heard the
damn bones crack. (…略…)

Harry : You hear what he was yelling when
we brought the big dummy in?

Paul : How could I miss it , Harry? The
whole prison hears.

そりゃ折れてるさ。骨がボキッと
鳴るのが聞こえたぜ。

あの男を連行してきた時、あい
つがわめいていた言葉を聞いたか？

決まっているだろう、ハリー。

刑務所中に聞こえたぞ。

(対訳シナリオ[1])

また、聞いた内容を補文標識を用いて表現する場合、英語では‘heard (that)...’となるが、これに対応するものやはり場焦点化動詞としての「～と聞いた」である。

(180) a. I often hear people around me lamenting the decline of the Japanese language.

b. 日本語の墮落を嘆く声をよく聞く。 (ジ英和)

(181) It's like nothing they've ever heard before, ...

これまで聞いたこともない声, ...

(対訳シナリオ[1])

「見る」には使役変化他動詞の＜行為＞の部分に焦点が当たり、「見るための行為をする」という意味で使われる場合が多いことを確認した。そして、それは「見たけれども、見えなかった」のようなキャンセル文となって用いられることから裏付けられた。ところが、「聞く」のほうは、それと比べて「聞くための行為をする」という部分にはそれほど焦点が当たらないようである。キャンセル文「～を聞いたけど、聞こえなかった」がそれほど生産的とは考えられないからである。国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して用例を検索すると、「見る」と「見えない」がそれぞれ前件（前文）と後件（後文）に現れ、かつ逆接の接続詞でつながられている（または逆接のつながりによって並んでいる）例は 11 件確認できた。しかし、同様の条件で「聞く」と「聞こえない」で検索したところ該当する例は 0 件だった。数が少ないため断定はできないが、もし「聞く」の＜行為＞の部分に焦点が当たりにくいとしたら、それを間接的に支持するものはいくつか挙げられる。

まず、当然のことながら視覚の場合はその対象物に対して視線を向けるという＜行為＞が必要である。反対を向いたまま見ることはできない。一方、聴覚はそれに「意識を向ける」ことだけで聞くことができるように人間の耳は作られている。これは聞こうとする＜行為＞の際立ちという点では、マイナスの方向に作用するだろう。

次に「見る」と「聞く」の知覚情報を獲得しようとする＜行為＞の部分に関する単語を挙げてみると、上に挙げた違いとも関係しているが、「聞く（聴く）」には、「視線」や「視野」に相当する日常語もなく、語彙が乏しいことがわかる。語彙が貧弱ということは、聞く行為そのものが複雑な行為ではないからだと言えるだろう。一方、「聞く」は「耳」を用いて意図的に知覚情報を受けようとする行為や意識の働きを表す慣用句が比較的多い。キャンセル文のような文を作る場合には、こちらの語が用いられることが多いと推測される。

(182) 情報を獲得するための行為を表す語と慣用句

見る：	～ の方を 見る	見 入る	見 つめる	凝視する	注目する
聞く：	*～ の方を 聞く	聞き 入る	*聞き つめる	？	？

見る：＜行為＞ 目を近づける

＜意識＞ 目を凝らす

聞く：＜行為＞ 耳を近づける，耳を当てる，耳を傾ける

＜意識＞ 耳を澄ませる，耳をそばだてる

(183) a. (?) 一生懸命聞いたが，何も聞こえなかった。(作例)

b. これはどんなに理論で考えても，実際に聞こうと思っても聞こえない。

(BCCWJ[72])

c. ステンレス・スチールの壁にぴたりと耳をつけてみたが，それでもやはり音は聞こえなかった。(新潮文庫 100 冊[1])

d. タイヤのシューシューという音も，ひと言の話し声も。いくら耳を澄ませてみても，何も聞こえない。(BCCWJ[73])

最後に，テイル形がどの意味で用いられるかを確認しておく。「見る」のテイル形は通常，＜行為＞の進行中のみを表し，＜変化＞の結果・状態は表せず，知覚情報を所有しているという意味，つまり現在完了か経験・経歴の用法なら可能だと分析した。「聞く」についてもこの四つの用法を見る限り，同じ振る舞いを見せる。これはすべての用法で使うことができる「着る」との相違点である。

(184) a. 太郎はいま，急いでシャツを着ている。(動作進行中)

b. 太郎はいま，黄色いシャツを着ている。(結果状態)

c. 太郎はもう，黄色いシャツを着ている。(現在完了)

d. 太郎は以前，これと同じ黄色いシャツを着ている。(経験・経歴)

(185) a. 太郎はいま，その壁に飾られた絵を見ている。(動作進行中)

b. #太郎はいま，その壁に飾られた絵を見ている。(結果状態)

c. 太郎はもう，その壁に飾られた絵を見ている。(現在完了)

d. 太郎は以前，その壁に飾られた絵を見ている。(経験・経歴)

(186) a. 太郎はいま，教室で先生の話の聞いている。(動作進行中)

b. #太郎はいま，その話を聞いている。(結果状態)

- c. 太郎はもう、その話を聞いている。(現在完了)
- d. 太郎は以前、その話を聞いている。(経験・経歴)

4.6.8 「含む」「含める」

4.6.8.1 三つの「含む」と「含める」

「含む」と「含める」は奥津(1967)では単他動詞と複他動詞のペアとして取り上げられなかった動詞である。松本(2000)でも「含む」「含める」を一応「着る」「着せる」と同じグループに入れておきながら、「含める」は、他動詞「含む」の使役動詞ではあるが、二重他動詞(※引用者註：奥津の「複他動詞」に相当する)として扱うのに問題がある(同上：168)として括弧に入れて別扱いとしている。これは「含む」の概念が複数あり、それが言語化された構文と動詞の形態の対応が複雑なことに起因する。自動詞と他動詞を単に一項述語なのか二項述語(ヲ格名詞句をとる)という視点でしか見ないと、重要な違いを見落とすことになる。使役変化他動詞としての用法と場焦点化他動詞としての用法を区別することによって、自動詞を含めた語彙的ヴォイスの仕組みが見えてくる。本節では「含む」と「含める」を、これまでの分析で明らかにしたⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型の場焦点化他動詞構文とのつながりを確認しながら考察することにする。

「含む」はモノの移動の再帰構造をもつ「着る」と対比すると、その用法が対応しているように見える。

(187) (再掲=123)

- a. 太郎は急いで服を着る。
- b. 部屋をのぞくと、太郎があわてて服を着ていた。
- c. 太郎は朝からずっと同じシャツを着ている。

(188) a. 太郎は飴を一つ(口に)含んだ

- b. 部屋をのぞくと、太郎があわてて飴を次々と(口に)含んでいた。²⁰⁹
- c. 太郎はさっきからずっと同じ飴を(口に)含んでいる。

「含む」には(188a, b)のような再帰的な使役変化を表す他動詞(これを「含む①」と呼ぶ)と(188c)のようなⅢ型の場焦点化他動詞構文を作る動詞(これを「含む②」と呼ぶ)の二つが認められる。ところが、単他動詞と複他動詞の関係をみると、「含む」と「含める」が単純に対応しているのではないことがわかる。「着る」は同定されて統語上に現れなかつ

²⁰⁹ 「物を口に含む」という動作はアスペクト的には瞬間的(punctual)に成立する事態である。したがって「ドアをノックする」がそうであるように、動作の進行中を表す場合には複数回または複数の対象を連続しておこなうという意味になる。それに対して「服を着る」は一つ/一回の行為のプロセスに入り込んで「テイル」を付けることができる。ただし、飴が棒状のもので、時間をかけて全体を含んでいくような状況であれば、一回の行為のプロセスについて「テイル」を付けることができなくもない。「太郎は懸命にその長い飴を含んでいた」

た「(φ) 自分に」の部分了他者に変えて「着せる」と言えるが、「含む」は現代語の用法としては不自然になる。自然な表現にするには使役態を用いて「含ませる」にする必要がある。

(189) a. 太郎が [φ 自分に] 服を着る。(単他動詞)

↓ <非再帰化>

b. 太郎が 花子に 服を着せる。(複他動詞)

(190) a. 太郎が [φ 自分の口に] 飴を含む。(単他動詞)

↓ <非再帰化>

b. ??太郎が 花子の口に 飴を含める。(複他動詞)

c. 太郎が 花子の口に 飴を含ませる。(使役態)

辞書には「赤子の口に乳首を含める」(明鏡国語)のような用例が記述されているが、現代共通語の用法としては非常に限定されており、このような用法は一部の慣用表現に固定されていると考えられる²¹⁰。

(190b)の「含める」が不自然で(190c)の「含ませる」が自然になるのは、一種の有生制約が働いているからだと見ることができる。つまり、有情者を目的語にする際に、それを物あるは〈場〉として扱える場合と扱えない場合があるということである。「着せる」「見せる」の着点は人であっても〈場〉として扱うことができたが、「含める」は有生制約が働き、それができないということである。このような制約は自他動詞の構文交替にも見られる現象である。(191b)が成立しないのは、人をまるで物扱いにするからである。

(191) a. 花子が店の前に立つ／並ぶ。(有情者)

b.*太郎が花子を店の前に立てる／並べる。

c. 太郎が花子を店の前に立たせる／並ばせる。<「立つ」「並ぶ」の使役態

形態上対応する形をもつ他動詞と自動詞、そして自動詞の使役態の成立を考察したものとして青木(1977)があり、そこでも自動詞の使役態の成立要因として意志性の有無が論じられている。しかし、意志性の有無だけでは、(192c)が成立することが説明できない。無生物であっても、(a)が成立する場合には、(c)も成立する。

²¹⁰ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で「含む」と「含める」のヲ格をとる名詞の共起関係を調査したところ、「～に{乳首／乳房}を含める」は出現せず、観察されたのは「含ませる」のほうであった。「～に{乳首・乳房}を含ませる」3例

- (192) a. 棒が地面に立つ。(無生物)
 b. 太郎が棒を地面に立てる。
 c. 太郎が棒を地面に立たせる。＜「立つ」の使役態

これについてはすぐ下で考察するが、その前にもう一つの「含む」(193a: これを「含む③」と呼ぶ)の文を見てみたい。次の文の「含む」に使役主を付加すると、やはり「含める」は不自然で、使役態「含ませる」を使うのが自然である。

- (193) a. スポンジが水をたっぷり含んだ。
 b. ??母がスポンジにたっぷり水を含めた。
 c. 母がスポンジにたっぷり水を含ませた。

辞書には「筆に墨を含める」(明鏡国語)、「手ぬぐいの水を含める」(大辞林)のような用例が記述されているが、現代共通語の用法としては非常に限定されており、「赤子の口に乳首を含める」と同様このような用法は一部の慣用表現に固定されていると考えられる²¹¹。

「(人の口に) 飴を含める」が不自然になるのは、一種の有生制約によるものだと考えたが、上の(193b)の二格名詞句は人ではなく物である。なぜ使役変化他動詞が不自然で、使役態を用いる必要があるのだろうか。

対象が人であれ物であれ、述語動詞が表す事態の成立にどのように関与しているか、また主語名詞句の人がどのように関与しているかによって不自然さが決まると考えられる。使役態が成立するのは、元の自動詞文の主語名詞に自律的な内的な活動が認められる場合である。それは典型的には人であるが、物であってもそれが認められる場合がある。

- (194) a. 鉄の棒がぐにゃりと曲がる。(無生物)
 b. 太郎が鉄の棒をぐにゃりと曲げる。
 c. *太郎が鉄の棒をぐにゃりと曲がらせる。＜「曲がる」の使役態

- (195) 再掲 (=191)
 a. 棒が地面に立つ。(無生物)
 b. 太郎が棒を地面に立てる。
 c. 太郎が棒を地面に立たせる。＜「立つ」の使役態

(194)に示したように鉄の棒は外部から力や熱が加わらなければ変形しない。したがって、(194c)の使役態は成立しない。その一方で、(191/195 再掲)に示したように、棒は自身

²¹¹ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で「含む」と「含める」のヲ格をとる名詞の共起関係を調査したところ、「～に〔墨／水〕を含める」は出現せず、観察されたのは「含ませる」のほうであった。「～に墨を含ませる」5例、～に水を含ませる」35例)

の形や内部構造によって環境との相互作用を通じて「立つ」という事態を成立させていると捉えられる。このように、物であっても自分自身が使役主となって自分をコントロールして事態を成立させている場合（191c/195c 再掲）は使役態が成立するのである。

影山（1996）はこのような言語現象を、動詞の概念構造の違いによるものだと説明している。（196）に示したように、「地面が固まる」と「コンクリートが固まる」では「固まる」の概念構造が異なると考え、それによって「～を固める」の許容度に違いが生まれるとしている。簡単に言えば、上位事象（活動・働きかけを表す事象）と下位事象（変化・状態を表す事象）をもつ LCS²¹²（語彙概念構造）が一つの動詞述語が表わし得る最大の意味概念であり、その上にさらに使役主を付加する場合には、統語的な使役構造を利用するしかないということである。「地面が固まる」は上位事象の部分が空いているので使役主を埋め込んで、「固める」という使役変化動詞を派生できる。この場合、わざわざ使役態にすると不自然になる。

（196）「固まる」の LCS と文の許容度（影山 1996：182 を参考に作成）

a. コンクリートが固まる

LCS【上位概念が埋まっている】

↓

y CONTROL [y BECOME [y BE AT-SOLID]]²¹³

↓使役主 (x) を新たに埋め込めない

*作業員 (x) がコンクリート (y) を*固める（使役変化他動詞）

作業員 (x) がコンクリート (y) を固まらせる（使役態）

b. 地面が固まる

LCS【上位概念が空いている】

↓

y BECOME [y BE AT-SOLID]²¹⁴

↓使役主 (x) を埋め込める

x CONTROL [y BECOME [y BE AT-SOLID]]²¹⁵

作業員 (x) が地面 (y) を（踏み）固める（使役変化他動詞）

*作業員 (x) が地面 (y) を固まらせる。（使役態）

²¹² LCS とは Lexical Conceptual Structure のことで、影山（1996）の表示方法によれば、一つの動詞述語が表し得る最大の構造が [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]と記述される。‘CAUSE’の左側が上位事象で右側が下位事象である。詳しくは 2.4.2 節の「語彙概念構造の型」を参照されたい。

²¹³ これは「コンクリート[y]が、自分自身[y]が固い状態(SOLID)である(BE)ように変化する(BECOME)ようにコントロールする(CONTROL)」という意味を表す。

²¹⁴ これは「地面[y]が固い状態(SOLID)である(BE)ように変化する(BECOME)」という意味を表す。

²¹⁵ これは「作業員[x]が、地面[y]が固い状態(SOLID)である(BE)ように変化する(BECOME)ようにコントロールする(CONTROL)」という意味を表す。

一方、「コンクリートが固まる」はすでに上位事象が埋まっているので、別の使役主を埋め込むことができないため「固める」を使えない。つまり、対象がその内在的コントロールによって自らが使役主となって自身に働きかけて変化するという概念をもつからだと説明される²¹⁶。(196)の(a)と(b)の違いをイベントスキーマで示すと次のようになる。

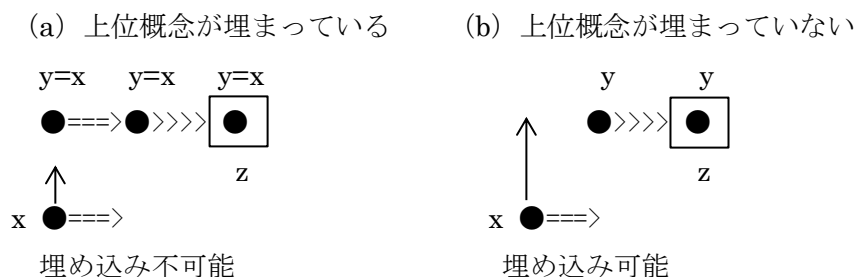


図 4.33 上位概念の有無と使役主の埋め込み

井島（1988）では自動詞の使役化の条件が分析されているが、そこで必要条件の一つとして挙げられている「自発性」は、本論文の「自律的な内的な活動」と呼ぶもの、影山（1996）の「内的コントロール」と一部重なると思われる²¹⁷。無生物主語の「卵が立つ/卵を立てる/卵を立たせる」がその例として上げている。しかし、「ゼリーが固まる/ゼリーを固める/ゼリーを固まらせる」も成立する例として挙げている。

影山（1996）の挙げた「コンクリート」の例も「コンクリートを固める」と言えないかと聞かれれば、成立すると判断する母語話者も少なくないと思われる。ここが語彙概念構造の弱点でもある。外界の事態把握はもっと柔軟で段階性をもち、構造として固定化しているわけではない。「内的コントロールをもち、自分自身に働きかける」ように把握される一方で、そのような側面がないものとしても把握される場合がある。それは程度の問題である。人主語の「太郎が立つ」は、「太郎を立たせる」が成立する一方で「太郎を立てる」は不自然である。それは人間を人の形をした塊のように扱うからである。物主語の「卵が立つ」の場合、卵の内的なコントロールによって自分が自分に働きかけて「立つ」という事態が成立すると把握される一方で、物の宿命として一方的に人にコントロールされて「立

²¹⁶ これは影山（1966）が反使役化と呼んだ概念構造の転換である。反使役化については、4.6.2.3 節の解説を参照されたい。

²¹⁷ 井島（1988：117-118）では、使役化ができない「燃える」「枯れる」「乾く」のような自然現象も「自発性」をもつとされている。これらの動詞は、影山の主張する「内的コントロール」をもち反使役化によって成立する自動詞には該当しない。同じ自発性を持っていても、これらの動詞が使役化できないこと、つまり「燃えさせる」「枯れさせる」「乾かせる」が成立しないことを、新たに「制御可能性」という条件を設定して説明している。きっかけさえ与えられれば、あとは自律的に変化が進むような事態（燃える・枯れる・乾く）は、自発性があったとしても使役化できないと結論づけられる。そのため、結果的に影山（1996）と同じ結論に達する。制御可能性は、LCSにおいて上位事象が存在するかしらないかということ別の視点から述べているからである。

つ」という事態が成立すると把握される場合もある。だからこそ「卵を立てる」とも言えるのである。逆に人主語であっても、外部の使役主が全面的にコントロールして事態を成立させると把握できれば、他動詞も成立するはずである。井島（1988）では、「子供たちを集める/集まらせる」と「旅人を船で渡す/旅人を泳いで渡らせる」が挙げられているが、これらの他動詞が成立するのはそのような把握によると考えられる。先の「コンクリート」の例でも、単に「固める」と言えるのか言えないかという議論よりも「24 時間放置してゆっくり {??固める／固まらせる}」における「固める」の不自然さに注目すべきである²¹⁸。

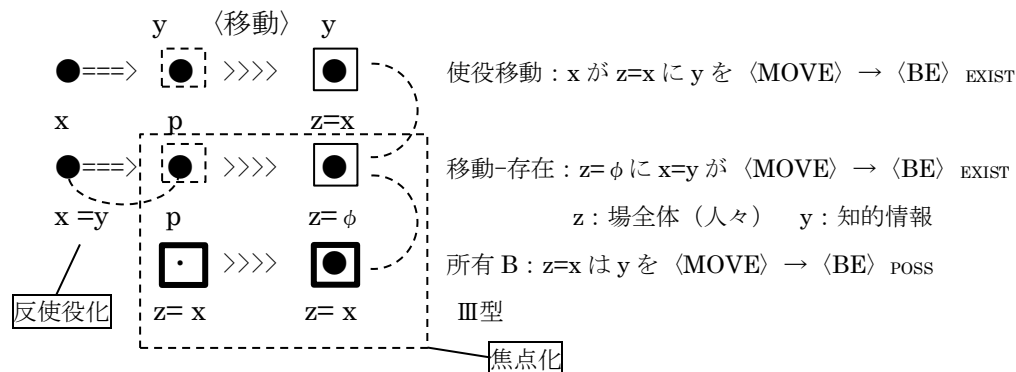
したがって、このような事態の把握の在り方という観点から上の影山の分析を解釈すれば、自動詞で概念化される自律的な変化事象には二つのタイプがあり、一つは自らが働きかけて変化を引き起こすと把握されるタイプで、もう一つはそうには把握されないタイプである。前者の傾向が強いほど統語的な手段で使役を表すことが義務的になり、後者の傾向が強いほど他動詞で使役を表すことが義務的になる、とまとめられるだろう²¹⁹。

前置きが長くなったが、「スポンジが水を含む」の「含む」がなぜ「スポンジに水を含める」と言い難いのか。これは「コンクリートが固まる」の「固まる」を「固める」と言い難いのも同じ理由だと考えられる。しかし、「固まる」は自動詞なのに対して、「含む」は他動詞である。どのように両者がつながるのか。

ここで扱う「含む③」の意味は「内部に成分や構成要素としてもつ」（明鏡国語）である。つまり所有の概念である。存在と所有の関係を一種の図地反転だと考える本論文の立場からすれば、所有の概念があるということは、その裏には存在の概念があるはずである。ここで 4.5 節で示した「移動事象が原因として読み込まれる」場合の分析を思い出してほしい。そこでは自律的な変化事象がベースになって成立するⅠ型の場焦点化他動詞構文と、使役変化事象がベースになって成立するⅡ型、使役変化事象と再帰構造がベースになって成立するⅢ型の場焦点化他動詞構文の三つがあると分析した。上で観察した「含む①～③」は、知的情報の再帰構造をもち、かつ自動詞をもつ「知る」「知れる」と平行的に捉えることができる。下にイベントスキーマを再掲しておく。

²¹⁸ 井島（1988）では、使役態の使役主の関与が間接的であるの対して「他動詞の使役主は、原則的に直接的に関与するのではないだろうか」（同上：116）と指摘している。しかし、「直接に「ゼリーを固める」動作とはどうすることか明らかにしにくい」（同上：117）とも述べている。事態把握の在り方に注目すれば、この場合の「直接性」とは、本来自分で働きかけるメカニズムが内在するにもかかわらず、その上に“覆いかぶさるようにして”全体をコントロールするように把握されるものだろう。自然に固まるのを待つ場合には「固まらせる」が自然で、薬剤を使って固まるのを速める場合は「固める」が自然になるだろう。

²¹⁹ ただし、ここでいう「他動詞」とは元の自動詞と形態上対立関係にある動詞という意味で、絶対自動詞のように対応する他動詞がない場合には、当然のことながら使役は使役態で表されることになる。「水やりを忘れて花をしおれさせた」「雨風にさらして鉄を錆びさせた」「冷蔵庫に入れ忘れて肉を腐らせた」



(再掲) 図 4.17 【修正版】「知る」「知れる」のイベントスキーマ

上段の使役変化に対応する再帰動詞が「知る」であり、これに対応するのが「含む①」である。そして下段に示したように、変化事象が焦点化され、かつ場が焦点化されて成立するⅢ型の「知る」に「含む②」が対応する。「知る」は〈場〉として使役主の頭が語彙的に指定され、「含む」は口が指定されるという違いはある。

さて、問題は中段の事象と言語化である。「知る」は反使役化によって「知れる」という自動詞を作る。その意味は、「知的信息がその内在的な性質によって、ある場 ($z=\phi$)」(※デフォルトでは「一般に人々」) にひとりでに到達する」と分析された。「含む」にはそれに対応するものがあるのだろうか。あるとしたら次のような概念をもつと推測される。

(197) 「含む」の反使役化によって作りだされる概念

あるモノがその内在的な性質によってある場 ($z=\phi$) にひとりでに移動し、
その場の成分または構成要素として存在する

現代日本語にはこの概念を表す自動詞がない。「知る」に対応する「含む」はあるが、「知れる」に相当する動詞がないのである。しかし、(197) の存在の概念を所有の概念に転換した動詞は存在する。それが「含む③」である。なぜなら「含む③」は (197) の概念を次のように転換したものにほかならないからである。

(198) 「含む③」の概念 (スポンジが水を含む)²²⁰

その場が、あるモノがその内在的な性質によってある場 ($z=\phi$) にひとりでに移動 (あるいは発生) し、その場の成分または構成要素として存在することによって特徴付けられる。

²²⁰ ここでは〈移動〉のみを扱ったが、「含む③」には〈発生〉事象が読み込まれるものもある。食物が何かを含む場合、それは植物の成長という自律的な内部メカニズムによって発生したと把握される。「レモンはビタミンCを多く含む」など。そこで下の「含む」の整理では「発生」という言葉を入れてある。

以上、三つの「含む」を整理すると次のようになる。

「含む①」：再帰構造をもつ使役変化他動詞

例：太郎は飴を一つ口に含んだ。

「含む②」：①をベースに変化事象に焦点があたりⅢ型の場焦点化他動詞構文を作る

例：太郎はさっきからずっと同じ飴を口に含んでいる。

「含む③」：①をベースに反使役化によって、対象物の自律的な移動・発生が原因

事象として読み込まれて場焦点化他動詞構文を作る。

例：レモンはビタミン C を多く含む。(＜発生事象)

例：スポンジは水をたっぷり含んだ。(＜移動事象)

「含む」①②③は一部の慣用的な固定表現を除いて「含める」と交替しにくい。

なお、「含む③」は自律的な変化事象がベースになって作られるⅠ型の場焦点化他動詞構文とそのプロセスが一部重なる。違いはベースに使役変化＋再帰構造があるという点である。そこで便宜的に「含む③」のような場焦点化他動詞構文を「Ⅰ&Ⅲ型」と呼ぶことにする。

4.6.8.2 四つ目の「含む」と「含める」

それでは「含む」は「含める」でなく「含ませる」とだけペアをなしているのかと言え、そういうわけではない。興味深いことに、次のような「含む」(199a, 200a: これを「含む④」と呼ぶ)では逆に「含ませる」が不自然になり、「含める」が自然になる。

- (199) a. この料金は手数料を含む。
b. (担当者が) 料金に手数料を含めて請求する。
c. ?? (担当者が) 料金に手数料を含ませて請求する。
- (200) a. 参加者は小学生の 3 人を含む。
b. (担当者が) 参加者に小学生の 3 人を含めた。
c. ?? (担当者が) 参加者に小学生の 3 人を含ませた。

管見の限りでは「含む④」の意味が辞書で独立して取り上げられていることはないようである。多くは「含む③」と同じ扱いである²²¹。確かに「A が B を含む」と言ったときに、二者の包含関係については③も④も同じである。しかし、上の示したような「含める」「含ませる」との交替の許容度を見ると、両者は異なる事態の概念化によると推察される。

両者の違いは影山(1996)が示した「反使役化」と「脱使役化」の違いだと考えられる。「含む③」は上で分析したように、位置変化または発生する対象物が自身の内的システム

²²¹ 例えば『大辞林 3 版』(三省堂)では、2 番目の意味として「ある物がその成分・要素としてもつ。含有する。」を立てて、例文として「金を一・む鉱石」「税・サービス料を一・んだ料金」「とげを一・んだ言葉」を挙げている。

によって自律的に事態を成立させるという概念を表している。これは「反使役化」の概念転換によって生まれる自動詞の概念と同じであり、本論文ではそこからさらに所有の概念に転換したのが「含む③」だと分析した。

一方「含む④」では、「手数料が料金の中に入っている」ことや「小学生3人が参加者（の名簿）に入っている」ことは、「手数料」や「小学生」の内的システムによってひとりで成立する事態ではない。明らかに行為者の存在が必要である。影山（1996）では「植える」に対する「植わる」や「（帽子を）かける」に対する「かかる」などは、動作主の存在なしには成立しない事態であるにもかかわらず、意味構造で使役主を抑制することによって統語構造には投射されないと分析している。これが脱使役化である。そこで、次のように平行的に考えてみる。

- (201) a. 「植える」 → 「植わる」 : 行為者なしには成立しない事態
他動詞 自動詞
b. 「含める」 → 「含む④」 : 行為者なしには成立しない事態
複他動詞 単他動詞

このような並行性から、「含む④」は行為者の存在なしには成立しない「含める」（複他動詞）から脱使役化によって生まれた単他動詞だと結論づけられる。以上で「含む」「含める」の概念がすべて出たことになる²²²。これまでの分析結果をまとめておく。

「含む①」：再帰構造をもつ使役変化他動詞

「含む②」：①をベースに変化事象に焦点が当たり場焦点化他動詞構文を作る（Ⅲ型）

「含む③」：①をベースに反使役化によって、対象物の自律的な移動・発生が原因
事象として読み込まれて場焦点化他動詞構文を作る（Ⅰ&Ⅲ型）

「含む④」：複他動詞「含める」から脱使役化によって＜変化＞事象だけに焦点が
あたり単他動詞になったもので、＜変化＞事象の枠組みで場が焦点化
されることによって場焦点化他動詞構文を作る（Ⅱ型）

「含める」：有情者があるモノを別のあるモノの中に入れて包含関係にするという
意味の使役変化他動詞（複他動詞）

- ・「含む①②③」は一部の慣用的な固定表現を除いて「含める」と交替しにくい
- ・「含む④」は「含める」と交替する

このように「含む」という形態だけを見て、単純に「含む」対「含める」の単他動詞と複

²²² これは「含む」「含める」の意味を網羅したことを意味するのではない。本論文の目的はそれぞれの動詞の意味拡張を網羅し分析することではない。事態把握が異なることによって生まれる概念の違いと、それによって作られる自動詞と他動詞の構文を分析するのがその目的である。したがって、これまでに挙げられた「含む」「含める」の意味がさらに抽象的な意味拡張することを否定するものではない。

他動詞の関係と見なすだけでは、その意味と相互のつながりはわからない。場焦点化他動詞構文という存在を認めることによって、含む②③④の違いがそれぞれ「Ⅲ型」「Ⅰ&Ⅲ型」「Ⅱ型」であると分析されるのである。使役変化他動詞の①を含めて、単他動詞として複他動詞の「含める」と概念上ペアになるのは④だけということがわかった。

4.6.8.3 「含む」の受身文の問題

この小節では、仁田（1997）が提起した「含む」の受身文の特殊性を手掛かりに、なぜ物と物の関係を示す「含む」に受身文が成立するのかを分析し、場焦点化他動詞構文と統語的なヴォイスとの接点を示す。

- (202) a. タバコは有害な物質を含む。
b. タバコには有害な物質が含まれる。

上の文は当たり前のように使われているが、受身文の文法からすると例外的である。なぜなら、ヲ格名詞をとり他動詞構文になっけていても、これまで分析してきた場焦点化他動詞構文がそうであったように、主語名詞句とヲ格名詞が全体と部分のような所有関係にある場合は、受動化を許さないからである。

- (203) a. その作業は危険を伴う。
b. *その作業に（よって）危険が伴われる。 cf. その作業には危険が伴う。
c. 太郎が熱を出した。
d. *太郎に（によって）熱が出された。 cf. 太郎には熱が出た。

仁田（1997：234）では語彙的統語論の枠組みの中でヴォイスと動詞の下位類を論じている。受身を三つに分類し、三つの相互関係を次の図のように示している。この関係からすると、「まものの受身」²²³を作る動詞は「第三者の受身」²²⁴を作る動詞でもあることになる。ところが、仁田自身が指摘しているように、「含む」は「まものの受身」ができるのに、「第三者の受身」が作れない。そこで仁田はこれを「例外」扱いにしている。

- (204) a. この鉱石にはたくさんの鉄分が含まれている。
b. *私はこの鉱石にたくさんの鉄分を含まれた。 (同上：234)

²²³ 「まものの受身」とは直接受身のことで、元の能動文と項の数が増えない受身のことを指す。

²²⁴ 「第三者の受身」とは間接受身のことで、元の能動文にはない名詞句（第三者）が主語となり項の数が増える受身のことを指す。

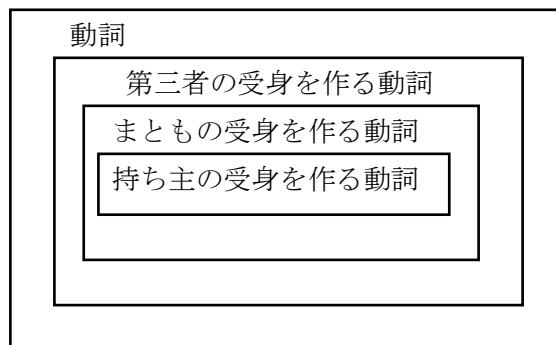


図 4.34 受身を作る動詞の相互関係（同上：234 より）

これまでの分析で明らかにしたように、上の例文の「含む」は「含む③」で、場焦点化他動詞構文を作っている。通常、場焦点化他動詞構文を作る場合、その動詞は外項を持たないので²²⁵、受動化を許さない。Ⅱ型・Ⅲ型は、一見すると受身文が成立するよう見えるが、それは同形で使役変化他動詞が存在するからで、受身文が成立するのは、この使役変化他動詞のほうである。場焦点化他動詞構文はヲ格名詞をとるが、外項をもつ通常他動詞構文と異なり、受動化されないのである。

- (205) Ⅰ型 a. 彼はやる気を欠く。 → *やる気が彼に（よって）欠かれる。
 b. 桜の木が芽を出す。 → *芽が桜の木に（よって）出される。
 c. 山が地滑りを起こした。 → *地滑りが山に（よって）起こされた。
 d. 町は昔の面影を残す。 → *昔の面影が町に（よって）残される。

- Ⅱ型 e. 鞆は取っ手にかわいいストラップを付けている。
 → *かわいいストラップが鞆によって取っ手に付けられている。²²⁶

したがって、仁田が提起した疑問に対する答えは次のようになるだろう。「この鉱石はたくさんの鉄分を含む」は、外項をもつ通常他動詞文ではないので、その受身文を受身文の相互関係の中に位置付けることそのものが不適切である。同じ「含む」でも「含む①」は外項をもつ使役変化他動詞なので、「まものの受け身」(206b)を作り、仁田の示した階層のとおり、「第三者の受け身」(206c)も作ることができる。

²²⁵ 出来事を引き起こしたり、コントロールしたりする項が外項であり、意味役割としては動作主や原因、事態をコントロールできる経験者などがそれと関連付けられる。受動文が成立するのは、この外項が存在する場合だとされている。

²²⁶ 「かわいいストラップが鞆（の取っ手）に付けられている」なら成立するが、これは使役変化他動詞文に対応する受動文である。

- (206) a. 太郎が残っていた飴を全部口に含んだ。
 b. 残っていた飴が太郎によって全部口に含まれた。
 c. 妹は太郎に残っていた飴を全部口に含まれた。

そこで真に問われなければならないのは、本来なら受動化が許されないはずの場焦点化他動詞構文が、なぜ受動化が許されるのかという点である。事実「含む③④」は受身文で使われることが多い。

- (207) a. タバコの煙にもわずかではあるが、ダイオキシンが含まれている。
 cf. タバコの煙はダイオキシンを含む (BCCWJ[18])
 b. 自由なカリキュラム編成には、どのような観点・方針・内容が含まれるのか。
 cf. カリキュラム編成がどのような観点…を含むか (BCCWJ[19])

まず 3.4.2 節で規定した所有 A と B の構文について改めてここで考えてみる。どちらも〈場〉が、そこに対象が存在することが、その〈場〉を特徴付けるものとして把握されることによって所有の概念に転換し、「〈場〉が対象物を所有する」という概念を表すが、所有 A はデフォルトでは〈場〉が題目化する（「～には」となる）だけで、際立ちは対象に与えられており、それがガ格名詞で表示され、動詞は自動詞のまま参照点構造自動詞構文を作る。一方、所有 B は〈場〉が焦点化され、第一の際立ちを与えられるため主語位置に来て、第二の際立ちが与えられた対象がヲ格名詞で表示され、場焦点化他動詞構文を作る。また、この構文に現れる動詞の形態によって分類すると、三つのタイプがあり、一つ目は自他同形で変わらないもの、二つ目は使役変化他動詞と同形態になるもの、そして三つ目は独自の形態をもつものである。形態の詳細は 4.3.3 節の「動詞の形態について（修正版）」を参照されたい。整理すると以下ようになる。

<所有 A と所有 B の形態の整理>

■B は A と自他同形

所有 A：桜の木には新しい芽が吹いた。

所有 B：桜の木は新しい芽を吹いた。

■B は使役変化他動詞と同形態

I 型（自律的な変件事象の場合）

所有 A：桜の木には新しい芽が出た。

所有 B：桜の木は新しい芽を出した。(cf. 太郎が引出から本を出した)

II 型（使役移動事象がベース：設置動詞の場合）

所有 A：鞆の取っ手にはかわいいストラップが付いている。

所有 B：鞆は取っ手にかわいいストラップを付けている。

(cf.花子が鞆にストラップを付けた)

Ⅲ型（再帰構造がベースになる場合）

所有 A：太郎の顔には墨が付いている。

所有 B：太郎は顔に墨を付けている。[※結果状態] (cf.太郎が顔に墨を付けた)

■Bは独自の形態

(1)すでに自他の対立形態が存在する場合

所有 A：山田さんのうちでは醤油が切れた。

所有 B：山田さんのうちは醤油を切らした。 (cf. #醤油を切った)

(2)形態上対応する自動詞が存在しない場合

所有 A：なし

所有 B：山田さんは地震で家族を失った。

以上が 4.2 節から 4.5 節までに分析してきた所有 A と B の動詞とその形態である。問題となっている「含まれる」と「含む」は、場が題目化され「～には」となるのか、それとも主語位置に来てヲ格名詞句をとり他動詞構文を作るのかという点で見れば、それぞれ所有 A と B の対立だと見なすことができる。

(208) 所有 A：タバコの煙にはダイオキシンが含まれている。

所有 B：タバコの煙はダイオキシンを含む

上に整理した動詞の形態を見てわかるように、所有 A は自動詞が用いられるのが基本である。なぜならある対象物が発生・存続・移動などの原因事象によってその場に存在するという概念を表す動詞は自動詞だからである。

それでは本節で分析した単他動詞と複他動詞のペアをもつ動詞はどうなっているだろうか。下にまとめたのは、Ⅲ型（再帰構造をもつ動詞）の場焦点化他動詞構文を作る単他動詞と複他動詞のペアである。

<単他動詞と複他動詞のペアの動詞の概念と構文の特徴一覧>

[1]「～が～を V」：使役変化他動詞【単他動詞】

{a. 着る b. 知る c. 見る d. 聞く e. 含む①}

a. 太郎は急いで服を着ている。

b. 太郎はそのことを知りたがっている。

c. 太郎は星を見ようと空を見上げた。

d. 太郎は虫の鳴き声を聞こうと耳を傾けた。

e. 太郎はテーブルにあった飴を一つ口に含んだ。

- [2] 「～には ～が V」：所有 A に相当（単他動詞の反使役化による自動詞）
 {a. なし b. 知れる c. 見える d. 聞こえる e. ★なし→含まれる}

- a. (なし)
 b. 山田さんにはそのことが知れている。
 c. 山田さんにはその光景が見えている。
 d. 山田さんにはその音が聞こえている。
 e. (なし) →★タバコの煙にはダイオキシンが含まれている

- [3] 「～は～を V」：所有 B（単他動詞の反使役化によって他動詞構文を作る）
 {a. なし b. なし c. なし d. なし e. 含む③}
 e. タバコの煙はダイオキシンを含む。

- [4] 「～は～を V」：所有 B（単他動詞の再帰構造がベース）
 {a. 着る b. 知る c. 見る d. 聞く e. 含む②}
 a. 山田さんは朝から同じシャツを着ている。
 b. 山田さんはそのことを知っている。
 c. 山田さんはその光景を見たことがある。
 d. 山田さんはその音を聞いたことがある。
 e. 山田さんはさっきから同じ飴を（口に）含んでいる。

- [5] 「～には ～が V」：所有 A に相当（複他動詞の脱使役化による自動詞）
 {a. なし b. なし c. なし d. なし e. ★★なし→含まれる}
 e. (なし) →★★この料金には手数料が含まれる。

- [6] 「～は～を V」所有 B（複他動詞の脱使役化によって他動詞構文を作る）
 {a. なし b. なし c. なし d. なし e. 含む④}
 e. この料金は手数料を含む。

- [7] 「～が～に～を V」使役変化他動詞【複他動詞】
 {a. 着せる b. 知らせる c. 見せる d. 聞かせる e. 含める}

上の一覧を見て気が付くことは、「含む③」は他の再帰構造をもつ他動詞と異なる特異な概念（とその出自）があるということである。[2] に示したように、「知る」「見る」「聞く」には反使役化による自動詞「知れる」「見える」「聞こえる」が存在する。この「～には～が<自動詞>」の構造の場合は所有 A に相当すると考えられる。ところがこの部分には「含む」に対応する自動詞がない（★印）。もし「あるモノがある場所にひとりで移動あるい

は発生してその成分としてまたは構成物として存在する」という概念を表す自動詞があれば、それを用いて所有 A は表現されるだろう。しかし、ない。なければどうするか。それは受動態の接辞「(ら) れる」を付加して自動詞のように用いるしかない。語彙的なヴォイスと統語的なヴォイスが連続していることはすでに先行研究でも指摘されているとおりで（寺村 1982）²²⁷、それがこの「含む」にも起きていると考えられる。興味深いのは、他の三つの動詞が反使役によって自動詞を作るのに対して、「含む」は [3] に示したように、同じ反使役化によって場焦点化他動詞（所有 B）を作っていることである。つまり、「含む」は反使役化によって所有 B の他動詞構文を作るが、それに対応する自動詞が存在しない。そこで、いわば補充形として受動態の接辞「(ら) れる」が用いられると考えられる。疑問の答えは次のようにまとめられる。

＜なぜ「タバコの煙にはダイオキシンが含まれている」という受身文が成立するか＞

この「～には～が含まれる」は通常の統語的な受動態ではなく、「移動あるいは発生が原因事象として読み込まれて、「あるモノがある場所にひとりで移動あるいは発生してその成分としてまたは構成物として存在する」という概念を表す自動詞文であり、自動詞の形態をもたない「含む」はその補充形として受動態の接辞「(ら) れる」を付加した「含まれる」が用いられる。

それではもう一つの「この料金には手数料が含まれる」はどうだろうか。上の一覧を見ると、「含む④」もまた特異な存在であることが見てとれる。[6] に示したように、他の再帰他動詞とは異なり、複他動詞を脱使役化することによって場焦点化他動詞構文を作っているのである。ところが、それに対応する概念を表す自動詞が存在しない。「(有情者がそうした結果) ある対象が場（＝別の対象または範囲）の中に入って包含関係になる」という意味を表す自動詞が存在しないのである。ないにもかかわらず、その存在が所有の概念に転換したもの、すなわち「ある場が、＜ある対象がその場（＝別の対象または範囲）の中に入って包含関係になる＞ことによって特徴付けられる」という所有の概念をもつ他動詞構文を作っているのである。それが「含む④」の「この料金は手数料を含む」である。ところが、この他動詞文に対応した自動詞文を作りたいくても元々自動詞が存在しない（★印）。そこで、いわば補充形として受動態の接辞「(ら) れる」が用いられると考えられる。この事情は上述の含む③と同じである。そこで疑問の答えは次のようにまとめられる。

＜なぜ「この料金には手数料が含まれている」という受身文が成立するのか＞

この「～には～が含まれる」は通常の統語的な受動態ではなく、「(有情者の行為によって) あるモノがある場（＝ほかの対象または範囲）の中に入って包含関係になる」とい

²²⁷ 自動詞は受動態とつながり、他動詞は使役態とつながっている。「ペンキを塗った壁」（他動詞）→「ペンキが塗られた壁」（自動詞はなし→受動態）「太郎の足がぶらぶらする」（自動詞）→「太郎は足をぶらぶらさせる」（他動詞はなし→使役態）

う概念を表す自動詞文であり、自動詞の形態をもたない「含む」はその補充形として受動態の接辞「(ら)れる」を付加した「含まれる」が用いられる。

結局、「タバコの煙にはダイオキシンが含まれている」も「この料金には手数料が含まれている」も普通の受身文(=「まものの受け身」)ではないのだから、「第三者の受け身」が作れなくても不思議ではないのである。そして、I型の場合焦点化構文を受身文にできないのは、外項がないからという意味的統語的な制約もさることながら、「存在」から「所有」の概念に図地反転しておきながら、再度反対側のものに焦点を当てようと、別の統語的操作をすることが無駄なのである。「所有」から「存在」へ戻せばいいのである。(203)で不自然な受身文を自然にするためには cf.で示したように元に戻せばいいのである。比喩的な言い方をすれば、コインを裏返したあと、反対側を見たければ、そのまま元に戻せばいいのである。「含む③」「含む④」のように特別な事情で、“表の顔”がなく、“裏の顔”しなければ、統語規則を借りて来て表の顔を作らなければいけないのである。

なお、「含まれる」はラレル接辞をとる以上、受動態として出来文のスキーマを適用すべきではないか、という考えもあるだろう。実際、包含関係にある対象物は、自然であれ人為的であれ、何らかの発生・移動事象の結果、そこに存在することになったものである。受動態の補充形という見方と出来文のスキーマ(の拡張)はお互いにつながっているというのが本論文の見方である。これについては、本論文の最後の 5.3.4 節で再び取り上げて論じる。

4.6.9 「教える」「教わる」の類

4.6.9.1 形態と意味の特徴

「教える」と「教わる」は、形態上「変える」と「変わる」あるいは「かける」と「かかる」と同じように「-eru」と「-aru」の対立になっている。そのことから奥津(1967)が指摘しているように、複他動詞(三項述語)が自動詞化接辞の「-aru」によって項が一つ減少して単他動詞(二項述語)になっていると考えられる。(209a)は他動詞化接辞「-se(ru)」 「-e(ru)」あるいは使役化接辞「-ase(ru)」によって単他動詞の項が増えて複他動詞になったもので、(209b)は自動詞化接辞「-aru」によって複他動詞の項が減って単他動詞になったと考えられる。(a)の動詞のペアはすでに分析した。次は(b)の動詞を取り上げて分析する。

(209) a. 他動詞化接辞／使役化接辞による複他動詞

(ア)「-se(ru)」による

「着る」→「着せる」, 「見る」→「見せる」

(イ)「-e(ru)」による

「含む」→「含める」

(ウ)「-ase(ru)」による

「知る」→「知らせる」

「聞く」→「聞かせる」

b. 自動詞化接辞「-aru」による単他動詞

「教える」→「教わる」

「預ける」→「預かる」

「授ける」→「授かる」

このように自動詞化接辞または他動詞化接辞と単他動詞と複他動詞の項の増減のつながりについては合理的に説明できるのだが、そのような関係にある動詞が一体どのような概念を言語化したものなのかということに踏み込んで分析されることはこれまでほとんどなかった。この 4.6 節で分析してきたように、単他動詞といっても、それがもつ概念は使役変化を表す<行為+変化>全体の事象をベースにするものと、<変化>事象にのみをベースにして作られる場焦点化他動詞構文がある。その違いを踏まえて「含む」を分析すると四つの概念をもつことが明らかになった。このようにどの部分に焦点を当てて外界を把握するのかを考えなければ自・他動詞がどのような概念で対応し、関連付けられるのかが見えてこない。本節もそのような視点で上に挙げた (209b) の動詞を分析する。

この動詞の意味を分析する上で、まず注目しなければならないのは、単他動詞と複他動詞が一つの事態に対して「与え手」と「受け手」という反対の視点から把握された概念を表すことである²²⁸。ここで「一つの事態」というのは、名詞であれば「一つの対象」に相当する。同一の「坂」であっても、視点の取り方によって「下り坂」とも「上り坂」とも言えるのと共通した対義の概念である (森田他編 1989: 91)。その点で「教える」「教わる」の関係は下の (210a-c) のように両者が独自の形態をもつ他動詞のペアと共通点がある。

(210) 視点の取り方の違いで生まれる対義語

<与え手>		<受け手>	
a. あげる	—	もらう	
(与える／授ける)		(受ける)	
b. 貸す	—	借りる	
c. 売る	—	買う	
d. 教える	—	教わる	
e. 預ける	—	預かる	
f. 授ける	—	授かる	

次に確認しておきたいことは、「～が～を教わる」という日本語に対応する英語には‘learn’

²²⁸ (210) の (a) ～ (c) は一つの事態を指す単語 (合成語) が存在する。授受, 貸借, 貸し借り, 売買。

が使われたり、受身が使われたりする点である。

(211) a. 水泳を教わった。

b. I learned how to swim.

c. I was taught how to swim.

(プログレッシブ和英辞典²²⁹)

(212) No, I, I won't tell you how I was taught to do it because I was taught to do it very differently. (BNC [KE3 1870]) ²³⁰

辞書の解説によれば、「study が積極的努力を伴うのに対して、learn は練習や授業によって学ぶ受身的な過程を表す；したがって×I am learning very hard. のように積極的努力を表す副詞とともに用いない。」(ブ和英)とあり、事実、英英辞典の意味の記述からそのような違いが見て取れる。つまり、「教わる」は受け身的な意味なので、英語でそれに対応する概念を表す場合には、受身文が使われたり、「learn」(学ぶ、習う)が使われたりする。「教わる」が受身的な意味であるのは、上に示したように、＜受け手＞の視点で事態を語ることと関係しているからだと見ていいだろう。

(213) learn: Gain or acquire knowledge of or skill in (something) by study, experience, or being taught

study: Devote time and attention to gaining knowledge of (an academic subject), especially by means of books

(Oxford Dictionary Online)

「～が～を預かる」に対応する英語にも、受身が使われることがある点では「教わる」と同じである。また、対応する動詞には＜受け手＞の視点が直接反映しているものではなく、「keep」が使われることも多い。英語では＜受け手＞の側面よりも、＜結果＞として所持・保持するという側面に焦点がずれているからだと考えられる²³¹。

(214) a. そんな高価な物を預かるのは嫌だ。

b. I don't want to be left in charge of such a valuable thing.

(会話作文英語表現辞典)

²²⁹ これ以降「ブ和英」と略す。

²³⁰ British National Corpus (<http://www.natcorp.ox.ac.uk/>) より。以下用例引用表示の際は BCN と略す。

²³¹ したがって、状況によっては＜受け手＞の視点の「借りる」の意味も表すことができる。例) How long can I keep this book? いつまでこの本を借りられますか。(ジ英和) ちなみに、意味が「管理・世話」のようにシフトすると、「take care of」のような英語が用いられる。

(215) a. Will you keep my belongings for me during the game?

b. 試合の間私の荷物を預かってくれませんか。

(ジ英和)

(216) keep: to have or continue to have in your possession

Do you want this photograph back or can I keep it?

(Cambridge Dictionaries Online)

以上、「教わる」「預かる」が一つの事態を<受け手>の視点から述べる動詞であるという点、そしてそれは受け身的な意味であるという点の二つを踏まえて分析する。

4.6.9.2 場焦点化他動詞としての「教わる」

影山 (2002) では語彙意味論の観点から「教わる」は非対格性をもつ他動詞であるとして、意味構造における概念転換によって「教える」から「教わる」が作られることを示している²³²。本論文も基本的に「教わる」は非対格性をもつ他動詞であるという分析を支持するが、主な目的は単他動詞と複他動詞という枠組みの中で分析することである。4.6 節のこれまでの分析を踏まえて「教える」と「教わる」を位置付けることにしたい。

まず、前節の冒頭で示したように「教える」「教わる」では、複他動詞のほうが基本形で、それに自動詞化接辞がついて「教わる」が作られると考えられる。「着る」「知る」「見る」が基本形で、再帰構造を持ち、非再帰化（使役主と着点として場との同定解除）によって複他動詞「着せる」「知らせる」「見せる」が作られるのとは異なる。「教える」が基本ということは、項の増減および「情報・知識の移動」という観点からすると、むしろ「付ける」と「付く」のように、対象物の位置変化を表す他動詞と自動詞の関係と平行的に捉えることができそうである²³³。

(217) a. 太郎が 壁に 墨を 付ける。

〈動作主〉 〈場所〉 〈対象〉

b. 壁に 墨が 付く。

〈場所〉 〈対象〉

c. 太郎が 花子に 数学を 教える。

〈動作主〉 〈相手〉 〈対象〉

d. 花子が 数学を 教わる。

〈相手〉 〈対象〉

└─┬─┘
(太郎に)

〈動作主〉

²³² 一つの分析として、影山 (2002) の意味構造における概念転換を次節で紹介する。

²³³ ただし、最終的には再帰構造がこれらのペアを分析する上で重要になることは、のちほど明らかにする。

移動するのが「モノ」か「情報・知識」かの違いはあるが、〈相手〉はその情報の着点と見なせばこれも〈場所〉として捉えることができるだろう。つまり、(217c)は太郎が自分のもつ知識を花子に移動するように働きかけたことを表しているのである。ただ、大きな違いがある。(217b)は自動詞文で、ある〈場所〉に〈対象〉が(結果として)存在することを表しているのに対して、(217d)は他動詞で、〈相手〉が〈対象〉を(結果として)所有していることを表している点である。しかし、ここで4.5.3節で分析したⅡ型の場合焦点化他動詞構文を思い出してほしい。そこでは、モノの移動先の場に際立ちが与えられると、その場が〈対象物が存在すること〉によって特徴付けられ、その場がその対象物を所有するという概念に転換することを示した。それがⅡ型の場合焦点化他動詞構文である。

- (218) a. 太郎は 鞆に かわいいストラップを 付ける。
 〈動作主〉 〈場所〉 〈対象〉
 b. 鞆は かわいいストラップを 付けている。
 〈場所〉 〈対象〉
 c. 太郎は 花子に 数学を 教える。
 〈動作主〉 〈相手〉 〈対象〉
 d. 花子は (太郎に) 数学を 教わる。
 〈相手〉 〈動作主〉 〈対象〉

上の(218b)は「付ける」が場焦点化他動詞構文で使われている例である。これと(218d)を次のように比べて、その共通点を考察の出発点としたい。

(218b) : 太郎が鞆にかわいいストラップを付けた結果,
 移動先の鞆が〈それが存在すること〉によって特徴付けられ,
 鞆がストラップを所有するという概念に転換している。

(218d) : 太郎が花子に数学(の知識)を教えた結果,
 移動先の花子が〈それが存在すること〉によって特徴付けられ,
 花子が数学(の知識)を所有するという概念に転換している。

このイベントスキーマは次のように示される。「移動と所有」のイベントスキーマ(4.5.1節)との違いは、移動では物の出所はある場(p)だったのが、ここでは使役主(x)と同じ場(x)になっている点である。これを「仮」のものとして考察の出発点とする。

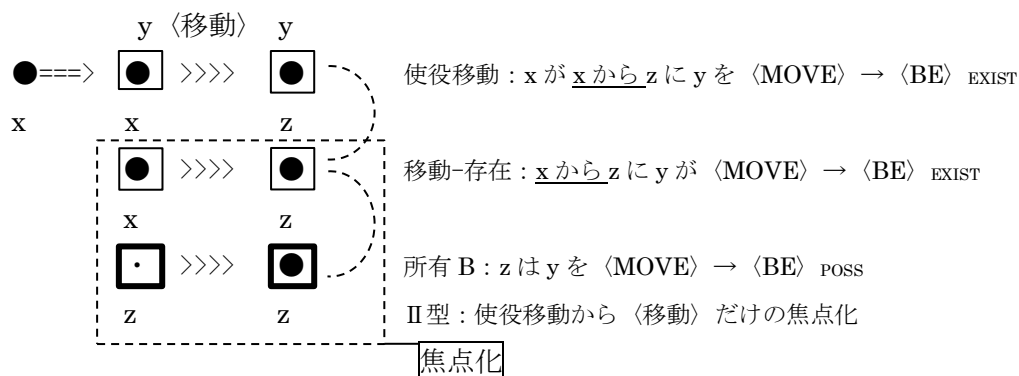


図 4.35 「教える」「教わる」の類のイベントスキーマ [仮]

もしこのように平行的に捉えることが正しければ、「～が～を教わる」はⅡ型の場合焦点化他動詞構文ということになる。しかし、その前に大きな問題がある。Ⅱ型の動詞の形態は使役変化他動詞と同形になると規定した。ところが、「教わる」は「教える」と同形ではない。もし規定どおりなら次のようにならなければいけない。

- (219) a. 太郎は花子に数学を教える。
b. 花子は（太郎に）数学を教える。

これではどちらも「～が～に～を教える」となって、一体どちらがどちらに「教える」のかわからなくなってしまう。しかし、ここで注意しなければいけないことは、一つの事態について反対の視点から捉えた概念を別々の動詞で述べるのか、同じ動詞を使うかは個別言語的だという点である。日本語の文法は同一の形態を許さない。しかし別の言語ではそれを許す場合もある。

日本語では「貸す」と「借りる」は別々の動詞だが、英語では‘rent’で両方の概念を表す。中国語も〈借〉[jie4]が「貸す」と「借りる」の二つの概念を表す²³⁴。どうやって主語名詞句が〈与え手〉なのか〈受け手〉なのかを区別するのかと言え、それを明示的に示す文法的なマーカーあるいは文脈によって、またはその両方によって区別されるのである。中国の〈借〉は日本語の「借りる」を表すが、「特定の前後関係がある場合にのみ「貸す」という意味になる」（呂叔湘主編 1983：208）。例えば〈给〉によって借りる人を導く場合には「貸す」を表すことができる。

²³⁴ []は中国語の発音と四声を表す。「貸す」については、近世以前は「借」の字を用いることが多かったという。（日本国語大辞典 2 版）日本語の古典語では「かす（借す）」と「かる（借りる）」、つまり「-su」と「-ru」という他動詞化と自動詞化の接辞の対立があったと見ることができるだろう。なお、中国語では表記と四声は異なるが「売る」と「買う」はどちらも [mai] である（〈売〉 [mai4] と 〈买〉 [mai3]）。〈授〉と〈受〉はこのとおり表記は異なるが、四声は同じで [shou4] である。

(220) a. 我借了他十块钱

b. ぼくは彼に 10 元借りた。

c. 我借给你课本, 借给你词典, 你要好好学习

d. テキストと辞書を貸してあげるから, しっかり勉強するんだよ。

(呂叔湘主編 1983 : 208)

そこで本題の「教える」と「教わる」に戻ると, フランス語は「教える」を意味する動詞 ‘enseigner’ を, 「教わる」を意味でも用いることができる。その場合両者を区別する文法的なマーカーは不定代名詞の ‘on’ (英語の ‘people, one’ に相当) である。これによって英語の ‘be + 過去分詞’ に相当する受動態を使わずに受身の意味を表し, 結果的に「教わる」の意味を表すことができる²³⁵。(221) に示したように (d) の動詞は受動態 (été + enseigné) になっておらず, (b) でも (d) でも<受け手>である「彼」は与格である点に注目されたい。

(221) a. 彼女は彼にフランス語を教えている。

b. Elle lui enseigne le français.

she to him teach French

c. 彼はフランス語を教わっている。

d. On lui enseigne le français.

このような個別言語的な事情を踏まえると, 日本語の「教える」「教わる」の類では共通の語幹をもつことによって「一つの事態」を述べる動詞であることが示され, 自動詞化接辞によって「教わる」の主語位置に来る人が<受け手>であることを示していると言えるだろう。影山 (1996) が指摘したように「-ar(u)」接辞は元々は脱使役化による概念転換を表す。これは「使役主を意味構造で抑制し統語構造に投射しないことで自動詞化を行う」(同上 : 184) ことである。つまり, 本来使役主の存在なしには成立しない事態において, その使役主を意味構造で抑制することによって, 統語構造には表示されなくなるのである。

例えば, 「帽子を壁にかける」という他動詞文に対して「帽子が壁にかかっている」という自動詞文が成立する。しかし, 帽子がひとりで壁にかかるわけではない。ここでは本来使役主の存在なしには成立しない事態において, 「-aru」接辞によって脱使役化した「かかる」(「kak-aru」) という自動詞になっていると考えるわけである。方法は異なるが, フランス語が ‘on’ で使役主を不定にして, 受身文と同様の効果を出していることと, 日本語

²³⁵ フランス語には英語と同様「be+過去分詞」の受動態があるが, 英語ほど受動態を用いられないという。その要因の一つとして, 不定代名詞の ‘on’ を主語にする能動文が英語の受動文に相当する意味を表すことが挙げられる。また, 英語が間接目的語を主語にした受動態 (He was given a book.) が成立するのに対して, フランス語では成立しないこともその要因に挙げられるという (Byrne & Churchill 1986: 286)。


が「-aru」接辞によって使役主（動作主）を抑制することによって、受身文と同様の効果を出すことは平行的に考えることができるだろう²³⁶。

(222) a. 太郎は 花子に 数学を 教える。

〈動作主〉 〈相手〉 〈対象〉

b. (φ) 花子は 数学を 教わる

<抑制> osow[aru] 脱使役化



これまでの分析をまとめておく。

- ・「教わる」はⅡ型の場合焦点化他動詞構文を作る動詞であると仮定しておく。
つまり、モノの移動先の場際に立ちが与えられ、その場がそのモノを所有しない状態から所有する状態へ変化するという概念をもつ。
- ・ただし、一つの事態を反対の視点から述べる動詞として「教える」という形態のまま用いられることはない。日本語では、この概念については<与え手>と<受け手>を区別しなくてはならないからである。
- ・そこで、日本語の文法では「教える」を脱使役化によって使役主を抑制して受身的な意味にする。このようにして作られたのが「教わる」である。

4.6.9.3 動作主と二格名詞句の問題（「～に教える」「～に教わる」）

◆問題点の整理

ここまでの分析で「教わる」「預かる」の単他動詞は場焦点化他動詞構文を作ると考えたが、解決しなければならない大きな問題が三つある。一つ目は、場焦点化他動詞構文の主語位置にくる名詞は意味役割としては所有者であり、動作主ではないとしたら、なぜ意志性をもつ表現を作ることができるのかという問題である。例えば、下のような表現は普通に使われるだろう。

(223) a. (わたしは) ぜひ先生に教わりたいんです。お願いします。

b. 経験が豊富な山本さんにいろいろと教わろうと思っている。

c. しょうがないな。他にだれにも頼めないなら、私が預かろう。

d. この荷物、数日間でいいから預かって。お願い！

²³⁶ 現代の口語の活用ではわかりにくいですが、文語では「教ふ (oshif-u)」対「教はる (osoh-aru)」, 「預く (azuk-u)」対「預かる (azuk-aru)」で、それぞれ複他動詞のほうが基本形で、単他動詞のほうが派生形であることがわかる。「教える」と「教わる」では語幹の音韻も変わっているが、これは母音交替によるもので、実質的には同じだと考えられる。

二つ目は、与え手を主語にした他動詞文と受け手を主語にした他動詞文の両方に現れる二格名詞句の問題である。このペアは与え手からみた相手を二格で表示するだけでなく、受け手からみた相手も二格で表示することができる。ここで便宜的に「相手」という用語を用いたが、意味格としては前者は<着点>の二格が現れ、後者は<出所>のカラ格が現れるべきところである。なぜ<出所>が<着点>と同じ二格で表示できるのか。

- (224) a. 太郎は 花子^に お金をあげる。(着点)
 b. 花子は 太郎 {^に/から} お金をもらう。(出所)
 c. 太郎は 花子^に 英語を教える。(着点)
 d. 花子は 太郎 {^に/から} 英語を教わる。(出所)

三つ目は、一つ目と関連して、<受け手>が主語になる他動詞文のリストを見ると、確かに主語名詞句の意志性あるいは相手に対する働きかけを認めることはできるが、その程度は一樣ではない。元々別々の語でペアになっている場合と自動詞化接辞で単他動詞になった語のペアとでは、その自然さに差がある。後者のほうが不自然さが強い。それはなぜなのか。以上の三つの問題について本論文では場焦点化他動詞構文とその拡張という点から答えを出す。

(225) 受け手を主語にした命令文

- a. 早くもらえよ。
 b. 早く買えよ。
 c. 早く借りろよ。
 d. ??早く教われよ。
 e. ?早く預かれよ。

◆先行研究の紹介と課題

授受を表す動詞のペアにおいて、一見すると反対の意味を表す<出所>と<着点>が同じ二格名詞句で示されることについては、これまでも多くの先行研究がある。問題とされるのは<出所>の二格である。なぜ意味上（意味格としては）カラ格が現れるべきところに二格が現れるのか。まずこの二格は「相手」を表すと分析した寺村（1982）を取り上げる。寺村は人については<仕手>と<相手>、モノについては<到達点>と<出どころ>という意味役割を設定し、「与エル類」と「受ケル類」の役割の構成を次のような図で示した。この図を見ると、「与エル類」も「受ケル類」も<仕手>から<相手>に働きかけがある点は同じだが、<もの>の移動方向は逆ということがわかる。このような構成をもとに、「与エル類」の<相手>は<到達点>であり、二格が現れる。そして「受ケル」類では<出どころ>であってもそれは<相手>なのだから二格が現れると分析される。

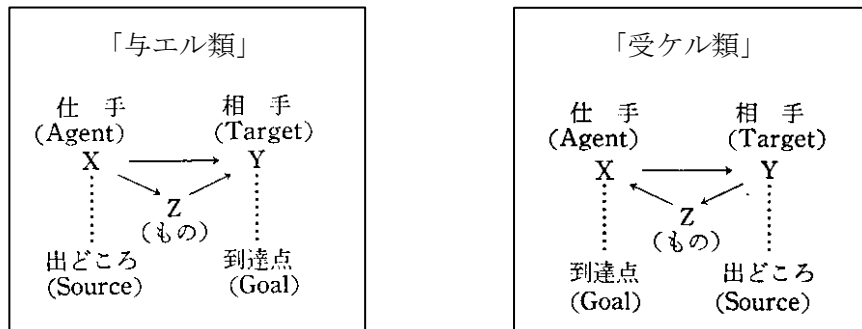


図 4.36 授受動詞と役割構成
(寺村 1982 : 128, 130 より)

この分析は、働きかけの方向（相手に向かう方向）と＜もの＞の流れの方向が逆になることが見て取れる点ではいいが、大きな問題がある。それは「受ケル類」の X が仕手 (Agent) であることを所与のものとして扱っている点である。4.6.9 節の冒頭でまとめたように、このペアの動詞類は事態を一まとまりと見なし、反対の視点から把握される事態を概念化したものである。そして、一方は与える側で、他方は受ける側である。つまり、一体となりかつ受け手であるという把握の在り方が上の図からは読み取れない。確かに直観的に一つの事態が成立する際の二人の参加者はお互いが＜相手＞であるというのは理解しやすい。しかし「売る・買う」のようにどちらの主体も独立して対等の立場にあるように認められるものと、「教える・教わる」のような関係を同一レベルで扱うことには問題があると考えられる。事実、「買う」には「～に買う」という言い方が現代共通語においては他の動詞のペアと比べて許容度が極端に落ちる。これは寺村 (1982) 自身も「(「子ドモカラ」の意味では) 不可、または少し無理という人が多い」(同上 : 132) と指摘している。

- (226) a. 子ドモガ 私ニ シジミヲ 売ッタ
b. 私ガ 子ドモニ シジミヲ 買ッタ (寺村 1982 : 132)

もし＜仕手＞と＜相手＞が図 4.36 に示したような対応関係になっていれば、「売る・買う」でこそ「二格名詞」が「受ケル類」に使われていいはずである。この指摘に対する反論としては「x が y を z に買う」という格配列の場合、「z に」が＜出所＞ではなく、買ったモノの行き先、つまり「他の所有や使用に供するために代金を払う」(明鏡国語) という解釈が優先されるからだ、というのが予想される。確かにこのような構文が成立することは事実だが、本論文の分析では考え方が逆で、元々「買う」の概念は二格で出所を示す動機づけに乏しいため成立しがたい。そして、その代わりに最終的な受け手を二格で示す構文が成立すると考えるべきだと主張する。

◆池上（1981a）、影山（1974, 2002）、岸本（2012）と本論文の分析の方針

本論文はこれまでの分析のとおり、モノの移動が原因として読み込まれた「存在」と「所有」の概念化の観点から分析する。それによって「与える類」と「受ける類」の動詞がイベントスキーマと焦点化の違いによってどのような拡張関係になるのか明らかにする。その中で「売る・買う」がなぜ上述のような特異な振る舞いをするのかを示す。

寺村（1982）は、＜出どころ＞を表すニ格について、「受ケル」表現の記述の最後で「「気の動き」の誘因「物音ニ驚く」の「ニ」や、さらには「彼ニ教エラレタ」「父ニ死ナレテ……」のような受身文の「ニ」とも通じる性質をもっているものと思われる」（同上：133）と指摘している。形式が同じなら共通の意味を持つという考え方にしたがえば、ここで問題になっているニ格も根本的には場所を表すニ格であるというのが本論文の立場である。

このような場所性を基盤としてモノの存在、移動からモノの状態、変化への拡張を説明するのが場所理論（Localist theory）であるが、この理論を発展させて分析したのが池上（1981a）である。池上はAnderson（1971）の目標（格）と場所（格）は同一のものとみられるという指摘を踏まえて、＜存在点＞と＜着点＞の中和は多くの言語で見られる現象であると指摘した。それに対して、＜着点＞と＜出所＞が同じニ格で表示される現象については、その移動の抽象度によって「方向性について曖昧さの生じる余地」があり、「移動が〈抽象的〉な場合に限り〈起点〉と〈到達点〉の間で転換が行われる」（同上：123）と分析している。

池上の言う抽象度による差とは、具体的に（知覚的に認知可能な）モノの移動を表す場合には、＜起点＞はニ格で表示できないということである（例文 227b）。抽象的なモノは授受動詞以外でも「由来する」のような動詞であれば、＜起点＞はカラ格だけでなくニ格で表示できると指摘した²³⁷。

- (227) a. 私ハコノ本ヲ彼カラ受ケ取ツタ
b. *私ハコノ本ヲ彼ニ受ケ取ツタ (同上：122-123)

- (228) a. コレハソレニ由来スル
b. コレハソレカラ由来スル (同上：122)

²³⁷ 確かに「由来する」はニ格とカラ格をとる。あとで明らかにされるように、授受動詞のニ格は所有と結び付いている。したがって、所有と関係のない「由来する」についても合理的な説明を与えたとしたら、それはやはり池上氏が主張するように「抽象性」が関与しているのかもしれない。ただ、「由来」という語に関して言えば、＜視点の＞取り方の違いで説明できるのでないだろうか。「源泉」について叙述する場合、源泉から語り手に向かう方向（モノ・情報の流れの方向）で心的にスキニング（走査）されれば、「～から由来する」であり、語り手から源泉に向かう方向（源を探す方向）でスキニングされれば、「～に由来する」となる。それは自分のアパートについて「駅に近い」と言うのか「駅から近い」と言うかという視点の違いと同じと見ることができる。または、「発生する」が「～から発生する」とも「～に発生する」とも言えることと平行的にとらえることができるかもしれない。この場合も視点の違いであり、「発生地点」を特定する視点は「～に由来する」となり、モノ・情報がそこから外へ流れ出るという側面に注目すれば、「～から由来する」となるだろう。

池上の場所理論に基づいた分析は説得的であるが、「抽象度」という曖昧な規定のままで不十分だと考えられる。影山（1974）は池上と同様に早くから場所理論的な観点から言語現象を分析した論文の一つであるが、そこでも、＜起点＞も＜着点＞も包括する＜場所＞を「運動の最も深い段階における重要な要素」とし、「どちらからどちらへという方向は二次的なもので、それぞれの場合の文脈、前提などから自然にわかるものである」（同上：57）と述べている。そして、影山（1996）で所有の概念を存在の概念からの転換として論じ、影山（2002）では「教える・教わる」について、位置関係から所有関係への概念構造の組み換えとして分析した。ここで展開された存在から所有への概念転換については、本論文の考える存在と所有のつながりと基本的に同じである。ただし、本論文は動詞の意味構造における転換ではなく、イベントスキーマにおける焦点化による概念転換に注目して分析する。

さて、この影山の分析によって池上が指摘した「抽象性」が何を指すかが明確になったと考えられる。それは「所有」である。実空間におけるモノの移動と異なり所有は場所が所有空間という抽象的なものになり、所有権の移動も実際にモノが移動するとは限らない。影山（2002）では移動を表す概念から所有を表す概念への転換を次のように分析したが、この分析の注目すべき点は、自動詞化接辞の「-ar(u)」を脱使役化であると規定した上で、「教わる」を所有の概念（BE WITH）に転換し、かつ脱使役化（ $x_i \rightarrow \phi$ ）した概念であるとしたことである。

(229) 先輩が後輩に合格の秘訣を教える

教える：[x_i CAUSE [y MOVE FROM- x_i TO- z_j]]

(x =先輩, y =合格の秘訣, z =後輩)

所有構造への変換

→ x_i CAUSE [BECOME [z_j BE WITH- $[y$ MOVE FROM- x_i TO- $z_j]$]]

脱使役化

→ x_i CAUSE [BECOME [z_j BE WITH- $[y$ MOVE FROM- x_i TO- $z_j]$]]

↓
 ϕ

↓
後輩が

↓
合格の秘訣を

↓
先輩から 教わる

(影山 2002 : 134)

上の概念構造は概略、次のような意味を表している。「教える」とは「 y が x から z に移動することを x が引き起こす」ことである。所有構造への変換とは、移動先の場の z が取り立てられて、その場が移動物 y を所有する（BE WITH）という把握の仕方に転換することである。そして、最後の脱使役化は、使役主である x を意味構造上で抑制して統語構造に投射しないようにすることである。この一連の変換によって「教える」が「教わる」に変

わる。

この意味構造における概念転換は、より根本的には外界の把握のレベルにおけるイベントスキーマとその焦点化（図地反転）によるというのが本論文の立場である。その立場から上の分析をみると、確かに「教える・教わる」のような関係は分析できるが、それ以外の「与える類」の動詞と「受ける類」の動詞とのつながりがこのままでは見えてこない。そして、＜出所＞がカラ格以外に二格でも表示できることは、この意味構造の転換から見えてこない。本論文では、より大きな枠組みで、あくまで二格は＜場所＞を示すという立場から分析を試みる²³⁸。

上述の影山と同様に意味構造によって分析したものに岸本（2012）がある。岸本は単なる「移動」に焦点があたる場合と、「所有移転」に焦点があてられる場合の二つを区別し、概念の転換ではなく、概念の合成というやり方で分析した。着点と起点がともに二格で表示できる動詞について、それがもつ所有の移転の概念に注目し、起点に二格が現れるのは（230）に示したような「所有の転移」の意味が概念化される必要があると分析した。

（230）

①所有の転移を表す動詞	あげる／与える	—	もらう
	授ける	—	授かる
②一時的な所有の転移を表す動詞	貸す	—	借りる
③知識やメッセージなどを伝える	教える	—	教わる
動詞	言いつける	—	言いつかる
	ことづける	—	ことづかる

岸本が用いる意味構造式の特徴は“&”を使って時間の概念も組み込んでいる点である。下の（231）に示した「あげる」の意味構造（a）は概略次のように解釈される。先行する時間（t-1）において、x が z を所有しているが、ある時間において y が z を所有することを、x が引き起こす。「もらう」（b）は、先行する時間（t-1）において、y が z を所有しているが、ある時間において x が z を所有することを、x が引き起こす。「受け取る」（c）は、先行する時間（t-1）において、y が z に存在しているが、ある時間において y が x に存在することを、x が引き起こす。この意味構造において、二格は主語にならない所有者に与えると規定することができるという。つまり、「あげる」では「後所有者（y）に～」となり、「もらう」では「前所有者（y）に～」となるが、「受け取る」は所有の構造がないので二格をとることができないことが理論的に説明できるというわけである。

²³⁸ 杉本（1986）も場所性に着目し、所有の二格名詞（与格）と存在の二格名詞（位格）には共通性があるとして分析しているが、＜起点＞を表す二格については結論を出していない。

↓前所有者 x ↓後所有者 y

a. [DO(x)] CAUSE [AT(t-1, HAVE(x,z))]&[AT(t, BECOME HAVE(y,z))]

x が y に z をあげる

↓前所有者 y ↓後所有者 x

b. [DO(x)] CAUSE [AT(t-1, HAVE(y,z))]&[AT(t, BECOME HAVE(x,z))]

x が y に z をもらう

c. [DO(x)] CAUSE [AT(t-1, BE-AT(y,z))]&[AT(t, BECOME BE-AT(y,x))]

x が y を z から受け取る

(岸本 2012 : 102 の記述をもとに作成)

◆イベントスキーマとその焦点化による分析（第二の疑問に答える）

＜再帰の概念と分類＞

①自分自身あるいは自身の体の一部が直接働きかけの対象になる
②外部の対象物に働きかけ、対象物が自分自身あるいは自身の体の一部に移動する。

①は自身が働きかけの対象となる点で再帰であり，②は自身が対象物の着点になるという点で再帰である。

<再帰の概念と構文>

上の再帰の概念によって，①と②は次のような構文的特徴をもつと規定される。

再帰①：

(省略)

再帰②：

外部の対象物がヲ格名詞句で示されるが，着点は動作主と同定されているので，意味的につながりが保証されており，統語構造には現れない。

例) 太郎は (*自分に) 服を着た。太郎は (*自分の頭に) 帽子をかぶった。

この再帰②の規定に基づいて，「着る」「知る」「見る」「聞く」が再帰の構造をもつ使役変化他動詞の構文とそれをベースに作られるⅢ型の場焦点化他動詞構文を作ると分析した。そこで，改めて「教える」「教わる」の類のペアを見ると，これは移動物の着点が自分自身に指定される再帰②がベースとなり，働きかける対象のところに「与え手」が組み込まれていると見ることができる。そこで，再帰②の拡張タイプとして位置付けて分析してみたい。まず，ペアとなる単語の動作主体が対等の関係として把握されるもの，つまり，別々の単語でペアをなすものを最初に考える。その場合，下の図に示したように，与え手は物の使役移動の事象のスキーマとして，受け手は再帰②のスキーマをベースとして示すことができる。そして前者の着点と後者の着点（＝動作主自身）が一致していることで，二つの事態が一体のものであることが保証される。「自身の場」「他者の場」は，所有空間を意味している。動詞によって一時的な所有や所持の場にも永続的な所有を表す場にもなる。

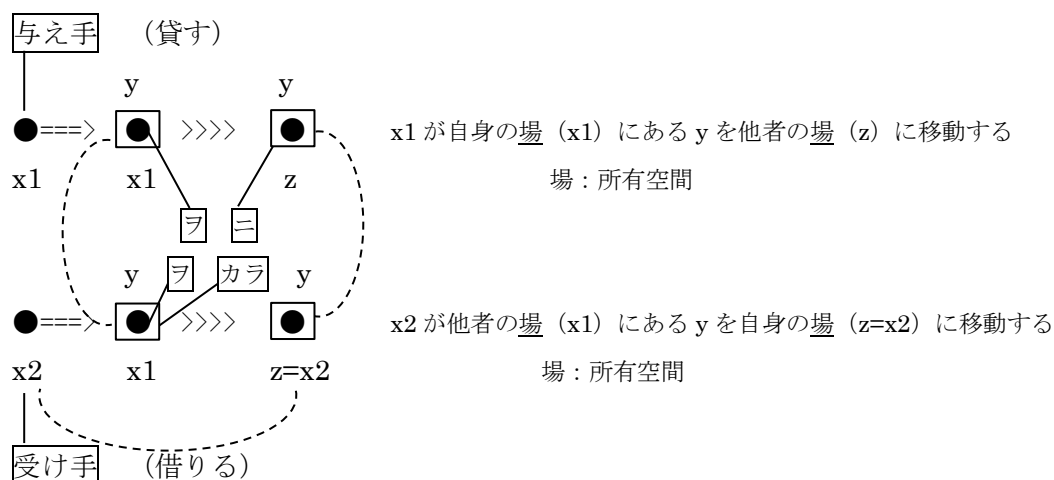


図 4-37 与え手と受け手を組み合わせたイベントスキーマ

このイベントスキーマに基づいて、「貸す」と「借りる」の事態把握は次のような構文となつて現れることが説明される。「与え手」(x1)にとって‘z’は着点なので「ニ格名詞句」として、「受け手」(x2)にとって‘x1’は出所なので「カラ格名詞句」として現れる。これがここで扱う類の動詞のペアのすべてに共通するスキーマと言語化の型である。

(232) a. 貸す (与え手側からの事態把握)

x1 が z に y を 貸す
太郎が 花子に お金を 貸す

b. 借りる (受け手側からの事態把握)

x2=z が x1 から y を 借りる
花子が 太郎から お金を 借りる

「受け手」側のスキーマは再帰②をベースとしているので、動作主 (x2) と着点 (z) は同定されている。そのため、「自分に」という部分は意味的に保障されていて、統語構造には現れない。これは「花子が (φ 自分に) 服を着る」と同じで、「花子が (φ 自分に) お金を借りる」となるのである。上の「受け手」のスキーマでもう一点指摘しておきたいことは、働きかけの対象である「x1」という〈場〉とそこにある対象「y」である。寺村 (1982) はこの「x1」を<相手>と認定して、この<相手>に対する働きかけを「～に (借りる)」のようにニ格で示すと分析した。本論文はそのような分析は受け入れられない。「与え手」にとっての働きかけと「受け手」にとっての働きかけは質的に異なるもので、同一視はできなからである。「受け手」はあくまでも「x1 カラ y が自身に移動する」ように働きかけるのである。したがって、図に示したように、この「x1」は<相手>ではなく<出所>の場として把握されるべきである。

これで二つ目の疑問の答えの半分が出たことになる。「教える」「教わる」のように自動詞化接辞によって派生対立関係をもつ動詞の場合についてはどう考えればいいのか。これを説明するためには、上に示したイベントスキーマに場の焦点化のプロセスを組み込んだものを考えなければならない。

新しく場焦点化他動詞構文を作りだすイベントスキーマを組み込んだ図 4.38 は何を説明しているだろうか。変件事象だけに焦点を当て、さらに場の焦点化によって所有の概念に転換したのがⅡ型の場焦点化他動詞構文である。しかし、そのような主体的な焦点化だけの場合、Ⅱ型の形態は元の使役変化他動詞と同じ形態になるのが原則である。それでは日本語ではどちらも「あげる」「貸す」「売る」になってしまい、混乱する。フランス語は「教える」という動詞を同じ形態のまま使うために、「教える」の動作主を一般人称化するという文法的手段を使う。日本語はどうか。同じような動作主 (x1) の格下げの方法とし

て動作主の「場所化」つまり「背景化」を用いると考えられる。そこが受身文での分析と共通する点である（4.6.5 節 図 4.24, 図 4.25 を参照されたい）。

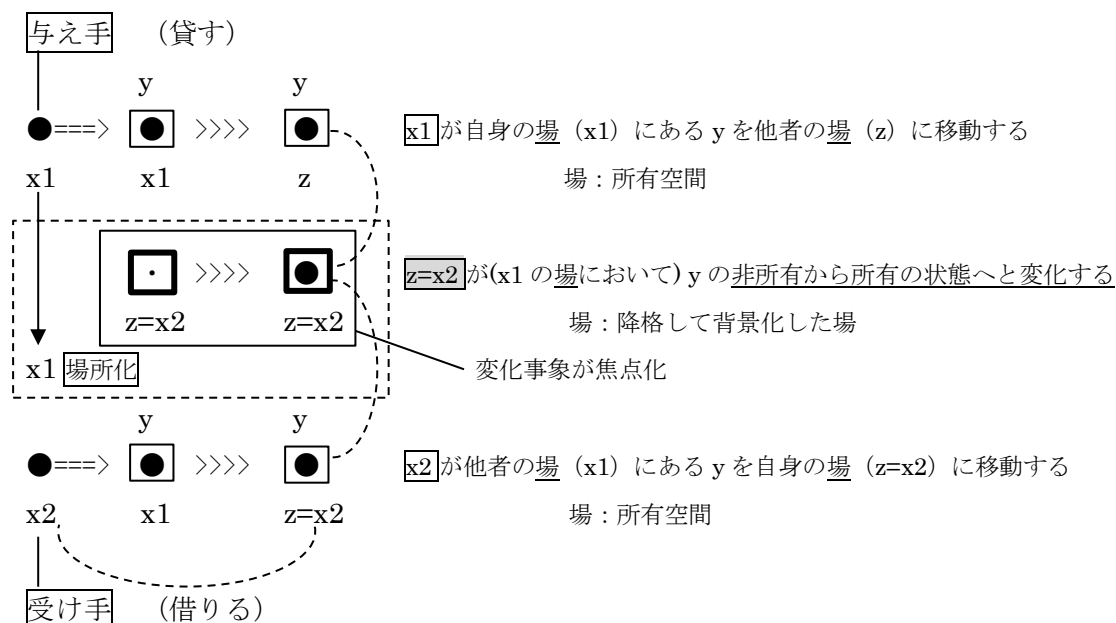


図 4.38 与え手と受け手と所有のイベントスキーマ

事実このペアの動詞の類が受身文で英語に翻訳されることがあることも観察した。そのような与え手側の行為者を格下げして背景化することを要請するのが、反対側からの視点であることを明示するために別の語を用いることである。このスキーマの中段に示したように、非所有から所有へと変化するのは、「受け手」の場 (z=x2) にほかならない。この「動作主格下げ」と「受け手の場の焦点化」の二つが反映されると、(233) の (b) の構文が作られる。先に分析した与え手側の構文が (a) で、受け手の構文が (c) である。

- (233) a. 太郎が花子_にお金をあげる。 (与え手中心の使役移動構文)
- b. 花子は太郎_にお金をもらう。 (受け手中心の場焦点化他動詞構文)
- ※二格名詞句は (a) の行為者が場所化
- c. 花子は太郎_{から}お金をもらう。 (受け手中心の再帰②ベースの構文)

この分析で重要な点は、(233b) に現れる二格名詞句は動作相手を表すものではなく、受身文が成立するときに見られるように行為者が降格され、場所化されたことによって現れる二格名詞句だという点である。そして、それは受け手の〈場〉があるモノを所有するという概念に転換した場合に現れるという点である。(233a) も (233c) も〈場〉は所有空間として把握されており、その所有空間におけるモノの移動として概念化されている。岸本

(2012) が指摘した「二格は、主語にならない所有者に与える」という分析は、上述のように与え手と受け手を一つの事態の両面として組み込んだイベントスキーマの焦点の当たり方の違いとして分析することによって、その意義が明確に理解されると考える。

「あげる-もらう」「貸す-借りる」「売る-買う」のように別々の語を用いる場合には、対立する概念の動詞を用いることによって、与え手側の行為者を降格させて背景化することができると仮定した。それでは、別々の語ではない場合はどのようにして行為者は背景化されるのか。それが影山が導入した「脱使役化」という概念転換である。本論文の分析に当てはめれば、この脱使役化によって焦点化されていた動作主（使役主）が場所化され背景化されると考える²³⁹。

- (234) a. 太郎が花子^に荷物を預ける。 (与え手中心の使役移動構文)
b. 花子は太郎^に荷物を預かる。 (受け手中心の場焦点化他動詞構文)
※二格名詞句は (a) の行為者が場所化
c. 花子は太郎^{から}荷物を預かる。 (受け手中心の再帰②ベースの構文)

以上で第二の疑問の答えがすべて出た。次のようにまとめられる。

＜授受を表す動詞のペアで着点と出所を同じ二格で表示できるのはなぜか＞

授受を表す動詞のペアにおいて、出所を二格で表示できるのは、事態を構成する相手を示すからではない。変件事象だけに焦点をあて、受け手が対象物の非所有から所有の状態へと変化したことを表すために、与え手の事態に存在した与え手（動作主）を降格する。与え手が場所化したことによって、二格で表示されるのである。ペアとなる事象における与え手を降格する方法として (1) 対立概念の動詞を用いる方法と、(2) 元の動詞に脱使役化接辞を付加する方法がある。

この分析は同時になぜ二格は所有の概念を表す場合にしか現れないのかを説明する。

- (235) a. 太郎は花子に手紙を渡した。
b. 花子は太郎 { に／から } 手紙をもらった。
c. 花子は太郎 { *に／から } 手紙を受け取った。

岸本 (2012) が示した LCS による分析は、概念を標示するだけで、なぜ所有でなければいけないのかという本質的なことは説明されない。しかし本分析では、それは事態の把握の

²³⁹ 影山 (1996) が示した脱使役化による概念転換は、他動詞から自動詞を派生する。その場合には意味構造で抑制された使役主は統語構造には投射されないとされる。しかし、今考察しているのは、複他動詞から単他動詞への派生である。本論文では、受身化との並行性に注目し、その場合には (b) に示したように場所化して (オブションとして) 二格標示できる、と仮定しておく。

現れ方によると結論づけられる。変化事象にのみ焦点を当て、さらに場が焦点化されて所有の概念に転換するためには、元々の与え手側の行為者は降格して背景化しなければならないのである。今回の分析においても、場焦点化他動詞構文に注目する意義が示されたと考える。

◆イベントスキーマとその焦点化による分析（第一と第三の疑問に答える）

次に、第一と第三の疑問の答えを出す。受け手の類の動詞は（233c）に示したように再帰②をベースとする構造をもつため、相手の〈場〉にある対象物を自分の〈場〉に移動させるよう働きかける動作主として把握される。そのため、「もらおう」「借りよう」「買おう」という意志表現ができるのである。しかし、本論文の仮定どおり「教わる」「預かる」が脱使役化されているとしたら、主語位置にある名詞句では動作主ではなく所有者になっているはずである。それならば、なぜ「教わろう」「預かろう」と言えるのか。そして、それと関連した三つ目の疑問。なぜ「早く買えよ！」と「早く教われよ！」のように命令形にしたときに自然さに差が出るのか。それは両者の拡張の在り方の違いとして分析できると考える。

（236）示したように別々の語によって反対の概念が表される動詞は、まず（a）（c）という動詞がまず存在しており、その上で、受け手側の「もらう」を用いながら、格下げし場所化した与え手が二格標示される（b）が作られると考えられる。

（236）別々の語が存在する場合：例文再掲（＝233）

- a. 太郎が花子^にお金をあげる。 基本（与え手中心の使役移動構文）
- b. 花子は太郎^にお金をもらう。 拡張（受け手中心の場焦点化他動詞構文）
※二格名詞句は（a）の行為者が場所化
- c. 花子は太郎^{から}お金をもらう。 基本（受け手中心の再帰②構文）

一方、（237）に示したように脱使役化の「-aru」接辞によって派生される動詞をペアにもつ場合には、（a）（b）が派生関係として存在し、そこから（c）が拡張することになる。

（237）「-aru」接辞によって派生される動詞：例文再掲（＝234）

- a. 太郎が花子^に荷物を預ける。 基本（与え手中心の使役移動構文）
- b. 花子は太郎^に荷物を預かる。 基本（受け手中心の場焦点化他動詞構文）
※二格名詞句は（a）の行為者が場所化
- c. 花子は太郎^{から}荷物を預かる。 拡張（受け手中心の再帰②構文）

どちらも（a）（b）（c）の構文を作るが、「受け手」について述べる構文では、「教わる」「預かる」の類は場焦点化他動詞構文が基本のため、意志的な表現ではやや不自由さが残ると

結論づけられる。それを裏付ける言語現象として、格標示を入れた場合、同じ命令文でも「～に教われ/預かれ」では不自然さが強いが、「～から教われ/預かれ」ではそれが低下する。(b)は所有の概念化であり、場焦点化他動詞構文になっているが、(c)は再帰構造(をもつ使役移動構文)だからである。

分析の最後に「～に買う」の二格名詞句が出所を表しがたいことに対する本論文の答えを出し、この構文を本論文が提案するイベントスキーマに位置付けておく。(230)に紹介したように、岸本(2012)は二格名詞句と所有の転移を結び付けて分析しているが、このリストに「売る・買う」が含まれていない。これは「売る・買う」は確かに一つの出来事を両側からみた事態把握であるが、所有の転移という視点から見ると、双方の動作主は商取引という〈場〉において対等の立場で存在しており、単純に所有が転移するとは見られないことを意味する。そのため「買い手」を「受け手」として捉え、受け手が対象物を所有する状態へと変化することが「与え手(売り手)」の〈場〉に依拠して生起するという事態把握と馴染まないと分析できる。(233)の「あげる・もらう」が典型的な所有の転移を表し、(233b)のように二格を示す構文を成立させるのとはその点で異なると言える。統語的なヴォイスによって受動態になる場合は、動作主は降格し場所化して二格で示すことができるが、その場合でも取引物が主語になり(「そのCDは太郎によって花子に売られた」など)、買い手が主語になることは難しい。「花子は太郎にそのCDを売られた」は、花子が買い手の解釈ではなく、間接受身の被害者の解釈になるのが普通である。買い手の解釈にするには受益態で「花子は太郎にそのCDを売ってもらった」としなければならない。

以上、「～に買う」の二格名詞句が出所として解釈しがたいのは「だれか他の人にあげるため」という解釈が優先されるからだと考えるのではなく、それとは逆に「買う」はその事態把握によって出所の二格の解釈が成立しがたいという事情があり、その代わりに最終的な所有者を二格で示す構文が成立する、と考えるべきだという主張の根拠を示した。

次に、「～に買う」がどのような事態把握に基づくのかを示す。図4.39は図4.38の一番下に「x2がyをpに買う」として言語化されるスキーマを組み込んだものである。x2が買って一度自身の所有空間($z=x2$)にあったものが最終的には他者の所有空間($z=p$)に移動することを表している。

また、(238c)に示したように、出所(x1)を「カラ格」で示しながら、同時に外部の最終受け手($z=p$)を「二格」で同時に表示することができない。単独では、それぞれ受け手側の再帰構文として、x1を「カラ格」で表示することはできるし(238a)、枠外にある他者の所有空間($z=p$)を「二格」で表示こともできる(338b)。しかし、自身の所有空間を飛び越えて、「カラ格」と「二格」を同時に表示することはできないと分析される。

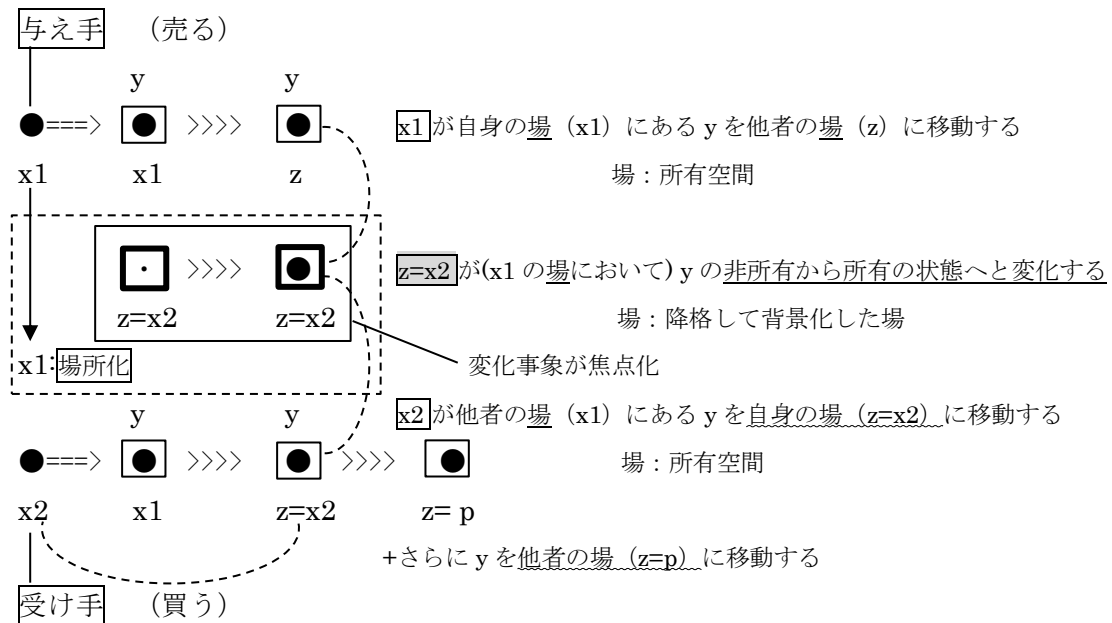


図 4.39 与え手と受け手（拡張型）と所有のイベントスキーマ

- (238) a. 花子は太郎から本を買った。 出所 (再帰②ベースの構文)
 b. 花子は友達に本を買った。 — + 外部受領者
 c. *花子は太郎から友達に本を買った。 出所 + 外部受領者

通常の使役移動動詞は、このように意味構造上に存在する着点を「飛び越える」ことはないので、「花子は自動車をガレージから家の前に移した」のように出所と着点を同時に言える²⁴⁰。したがって、(238b) のような二格名詞句は、動詞が表す本来の事態のまとまりを越えて付加された受領者の要素と認められ²⁴¹、その場合には本来存在する受領者を飛び越えて出所の「カラ格」と共起はできないと言えるだろう。

なお、(238b) の構文について、再帰②をベースとするスキーマをもつ「買う」が非再帰化し、着点が自分自身ではなく、他者になることによって成立すると分析できると思うかもしれない。これは「知る」から「知らせる」へ、「見る」から「見せる」へと複他動詞を作る概念転換である。しかし、このような概念転換を適用すれば、「x2 が y を (z=x2: φ に) 買う」から「x2 が y を z=p に買わせる」が派生することになる。この文の意味は、「x2 が <p が y を買うこと>を引き起こす」という使役態である。確かにこれも p が y を所有す

²⁴⁰ ちなみに「花子は家から公園 {*/に/まで} 歩いた」のように「カラ格」と「二格」が共起できないのは、動詞の意味特徴によるものである (cf. 影山・由本 1997 の「起点/着点指向と経路指向」: 132-143)。図 4.39 に示したような意味構造によるものではない。

²⁴¹ 「買う」は必須補語として行為者、対象物、そして再帰構造で意味構造上存在する受領者としての「自分」の 3 つをとる。そして、対立する概念である「売る」とひとまとまりの事態把握において出所が追加される。(238b) のような最終的な受領者はそのようなひとまとまりの事態把握の枠外にあると言える。

ることになることを意味しているが、今問題にしている (238b) の「～に買う」の意味ではない。

4.7 状態と所有の関係

4.7.1 モノの存在とモノの状態

場所理論的な観点あるいは認知言語学的な観点 (Lakoff and Johnson 1999) に立てば、モノの存在とモノの状態は平行的に捉えることができ、事実それは日本語の述語形式の中に確認されることが指摘されている。山田 (1908) は「あり」を純粹形式用言 (※これに分類されるのは「あり」のみ) とし、その意義と用法の中で名詞述語と形容詞述語について次ように記述している。

(239) 「あり」の意義と用法 (山田 1908 : 335-363 の記述をまとめる)

【第一種】存在動詞の「あり」

【第二種】形容詞の熟合したもの

連用形の「く」 + 「あり」 → 「かり」

【第三種】もっぱら統覚作用をあらわすのに用いる

「に」 + 「あり」 → 「なり」

「と」 + 「あり」 → 「たり」

【第四種】動詞及び形式動詞に付属してその属性をあらわす

四段活用の連用形 + 「あり」

【第二種】は古典文法のいわゆる形容詞「カリ活用」と呼ばれるものの基底構造に、【第三種】はコピュラに相当するものの基底構造に「あり」が存在していることを示している。このような国語学の分析を踏まえて、現代語の存在文、形容詞述語、名詞述語の型と基底にある型を結びつけると次のようになる。池上 (1981a : 32) は、(240a-f) の関係を指して、いずれも「具体的または抽象的な場所の表現」 + 「位格の表示」 + 「存在を表す動詞」という構造型になっていると指摘している。さらにここに上述の山田 (1908) の【第二種】を踏まえて形容詞述語 (240g) を加えて「に」と「あり」のつながりを整理しておく。

(240) 存在の「あり」(ある) とのつながり

(現代語の述語の型)

(基底の型または文語の型)

a. 先生は教室 にいる

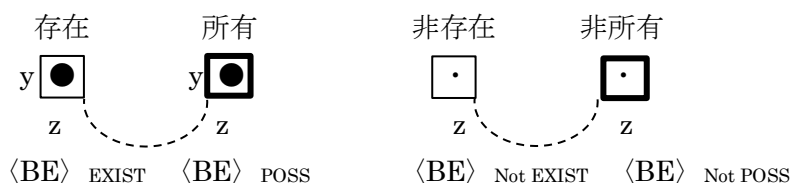
< に あり [存在]

b. 工場は埼玉 にある

< に あり [存在]

(c. ～は静か／d. 学生)		なり	<	に	あり	[状態]	242
				↓			
e. 教室は静か	だ	<	である	<	にて	あり	[状態] 243
f. 太郎は学生	だ	<	である	<	にて	あり	[状態]
g. 太郎は優しい	φ ²⁴⁴	<		<	く	あり	[状態]

4.1 節では存在の所有のイメージスキーマを次のように示した。



(再掲) 図 4.1 存在と所有のイベントスキーマ

「<BE> EXIST」からは存在構文「z に y がある」が、「<BE> POSS」からは所有 A「z には y がある」と所有 B「z は y を有する」が作られる。この存在「<BE> EXIST」と「<BE> POSS」のつながりを状態のイメージスキーマと重ね合わせるとどうなるだろうか。日本語の形容詞述語と名詞述語はデフォルトでは性状規定になり、「y は…形容詞/名詞述語」の形式で、主題として取り上げられた「y」の（広義の）属性を示していると考え（cf. 益岡 2004）。岡（2002, 2006, 2013）は場所的存在論の観点から日本語を分析しているが、「は」も場を表すという考え方に基づいて、「～は…述語」は「～が…述語」の関係を包含する形で概念化者がアクセスする場であると分析した。具体的には、図 4.40 に示したように「名詞文「X は Y だ」は、「X が Y だ」の図式から X のみを取り出し、再び Y に結びつける」（岡 2013 : 224）という考えを示している。形容詞述語文の「X は A」も「X は Y にある」の認知過程を継承すると考え、同様の図式を提案している（図 4.41）。

²⁴² 断定の助動詞「なり」は「に・あり」の転じた語と考えられる（山口他 1997 : 30）

²⁴³ 『日本語国語大辞典』（小学館）によれば、「にて」は断定の助動詞「なり」の連体形「に」に接続助詞の「て」の付いたもので、「あり」「なし」「はべり」「候ふ」などの補助用言を伴って断定的な陳述を表すという。また、同辞典の語誌によれば口語の助動詞「だ」の連用形「で」はこれから生じたという。

²⁴⁴ 「φ」は基底の型に相当するものが現れていないことを示す。ただし、現代語でも活用または副助詞が介在する場合には顕在化する。ここでは「語幹＋ク＋アル」を基底に想定するものの、無標の場合は、基本形に戻されて「優しい」になる」という加藤（2009）の分析を支持する。

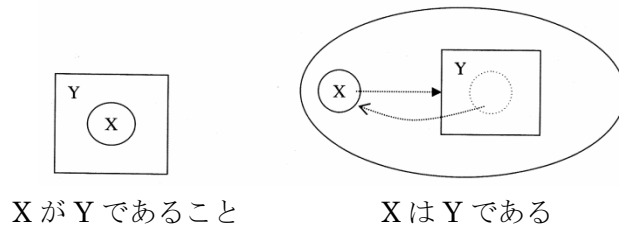


図 4.40 コト図式 (岡 2013 : 224 図 9 と図 10 より)

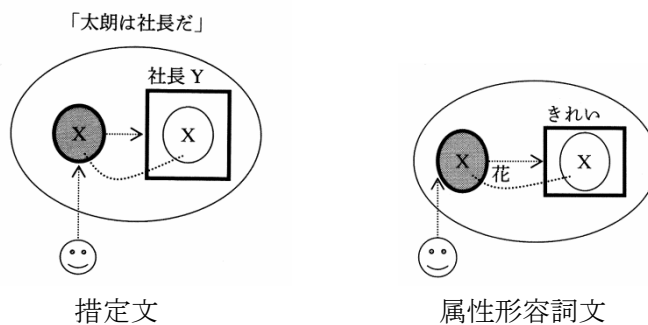


図 4.41 名詞述語と形容詞述語の「～は…」
(岡 2013 : 224 図 11, 225 図 13 より)

この名詞述語と形容詞述語における「～が…」と「～は…」の概念化の違いは、本論文の主張する場焦点化構文と矛盾しない。つまり「存在文」の原型は「～に～が〈BE〉EXIST」(車庫に車がある)であるが、場が取り立てられると、所有 A では「～に^は～が〈BE〉POSS」(田中には車がある)」、所有 B では「～^は～を〈BE〉POSS」(田中は車を有する)となり、デフォルトでは「は」が現れる。なぜならば、所有とは存在物による場の特徴付けにほかならないからである。それは「空は青い」という属性叙述文がデフォルトで「は」をとるのと軌を一にしている。「空が青い」というのは有標の形式であると同様、所有の概念において所有主体がガ格名詞句で表示されるのは有標の場合である。

本論文では存在の「ある」の概念を「〈BE〉EXIST」で表示するが、それに対して状態の「ある」を「〈BE〉STATE」と表示することにする²⁴⁵。名詞述語(N1がN2である[こと])は特殊(N1)が一般(N2)に含まれるという関係で集合図として描かれることがある。このN1を存在する主体(y)、N2を〈場〉(z)と捉えれば、名詞述語の「yが名詞・だ」と「yは名詞・だ」を作りだす事態のイメージスキーマは次のように示すことができる。

²⁴⁵ 「AはBだ」のコピュラ文が表す二者の関係は一樣ではないが、形容詞述語の概念と統一して表示するためにこのように表記することにする。

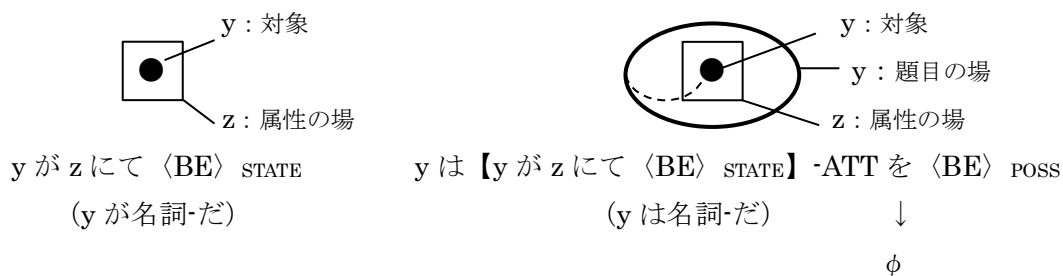


図 4.42 名詞述語のイメージスキーマ²⁴⁶

「y が名詞-だ」は「y が z にて <BE> STATE」つまり「y が z という状態の〈場〉に存在する」という把握の仕方である。「y が～」から「y は～」への転換は、題目として y の〈場〉が設定され、その〈場〉が【y が z にて <BE> STATE】という属性を所有する、という把握に転換する。このように「y は名詞-だ」は概念上は所有の関係を示すが、現代日本語の文法では名詞述語は「～だ」で実現するので、「ATT を所有する」の「を所有する」は抑制(φ)されて統語構造には現れないと仮定する²⁴⁷。

形容動詞述語は現代語においては「-だ」で名詞述語と同じになるので、イメージスキーマも同じである。ところが、形容詞述語はやや性質が異なる。なぜならその基底形として「くあり」があると考えたからである。「～にあり」ではなく「～くあり」であり、かつ基本的の肯定形ではこの「～くあり」の露出形が認められないのである。

これをどう扱うのがいいか。まず形容詞という品詞の存在そのものに注目してみよう。松本(2007: 96-102)は日本語の形容詞は西洋文法で本来 *adjective* と呼ばれるものとは性格が違っていると指摘している。それはギリシャ語、ラテン語の流れの中では形容詞はあくまで名詞の下位類の一つにすぎず、中世以降に思弁文法によって名詞が再分類され、*nomen substantivum* (実体名詞) と *nomen adjectivum* (付加名詞=形容名詞) という二つの下位類になったという。実体名詞とは物の実体であり、形容名詞とは物の属性を表すとされたのである²⁴⁸。確かに、英語は名詞も形容詞もコピュラ (*be*) の助けなしには述語として成立しないのに対して日本語の形容詞は用言の一つでそれ自体で述語を作る。しかし、形容詞述語の基底形として「～くあり」を認定するとなると、話は少し違ってくる。古くは日本語においても、名詞と形容詞が示すものが「あり」という存在詞によって「存

²⁴⁶ ATT は 'Attribute' の略で属性のことを指す。

²⁴⁷ 「～は～だ」には元々所有の概念があるという仮説は、今後検証しなければならないが、現時点では次の言語現象を指摘しておきたい。日本語の名詞述語には、うなぎ文(奥津 1978)の名称でよく知られている「(注文時に) ぼくはうなぎだ」というコピュラ文をはじめ、「彼女は明るい性格だ」「この人形は変わった形だ」のように、「x は y だ」が理論的に「x=y」にはならないコピュラ文(新屋 1989 の「文末名詞文」、角田 1996 の「体言締め文」など)が多いことは古くから注目されていた。このような「x は y だ」の x を所有空間とみなし、x が y という特徴を有すると分析することを提案するのが本研究の立場である。なお、形容詞述語については、このあとで「あの女の子は目が青い」という形容詞述語と「あの女の子は青い目をしている」という他動詞構文との対応関係を所有の概念によって分析する。

²⁴⁸ Jespersen (1924) はこのような分類を示した代表的な文法書であり、*substantives* と *adjectives* は共通点が多く区別がつきにく場合もあると指摘した上で、両者をくくる大きな類は *noun* (ラテン語: *nomen*) であると記述している。(同上: 72)

在するもの」として把握されていたと仮定することができるのではないだろうか。モノ自体については「モノが〈場〉にアリ」とその存在が把握され、モノの属性については「モノが〈～く〉アリ」とその有様の存在が把握されていると考えられるわけである。山田（1908：340）でも、第一種のもは事物そのものの存在を表し、第二種のもは属性そのものが、本体である事物そのものの上に存することをあらわすと記述している。このようにモノとその属性を概念上、二分した上で、形態統語上は両者を一体のものとして語るのが形容詞の現在肯定形である。そこで、加藤（2009）の分析を支持し、基底形の「-くあり」は現在肯定形では顕在化せず、「～が高い」「～が優しい」のようになると考える²⁴⁹。

以上の考察を踏まえると、形容詞述語のイメージスキーマは次のように示すことができるだろう。ここでは、主体のどのような側面（=Sd）について、その属性をもつのかを明示するスキーマを考える。「y が形容詞 (p)・φ」²⁵⁰ という形容詞述語文は「y が(y の Sd が)p-く〈BE〉STATE」つまり「y が(その側面が)p という状態で存在する」という事態把握の仕方によるものと仮定する²⁵¹。「y が～」から「y は～」への転換は、題目として y の〈場〉が取り立てられ、その〈場〉(=y)が【y が(y の Sd が)p-く〈BE〉STATE】という属性(ATT: Attribute)を所有する、という把握に転換する。

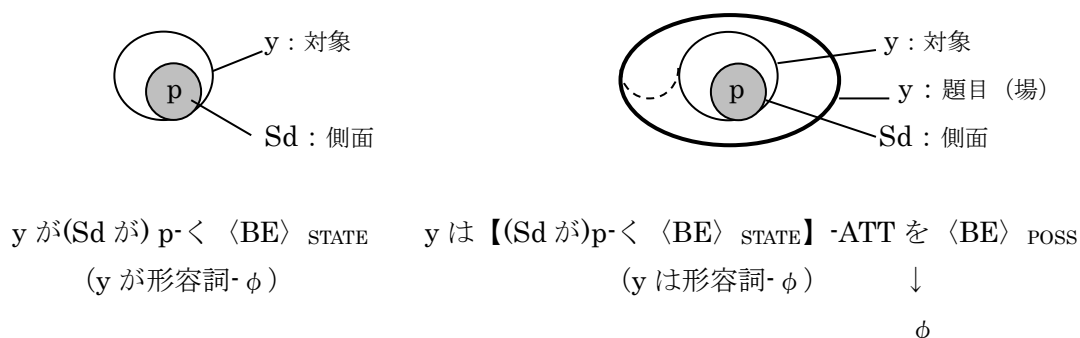


図 4.43 形容詞述語のイメージスキーマ

ここで急いで補足しておかなければいけないことは、名詞述語も形容詞述語も「～は」にならなければ所有の概念に転換しないというわけではない。存在から所有の概念の転換、〈場〉の焦点化はあくまで概念化者の心理活動の中で起こるものであり、それが具体的にどのような文法形式で言語化されるかは個別言語的である。日本語では、所有の概念は典

²⁴⁹ 加藤（同上）は、形容詞の基底形を「-く | ある」、名詞の基底形を「-で | ある」とし、被覆形と露出形という視点から活用体系を統一的に分析している。形容詞であれば、否定形または活用で他の助動詞を続けるときには、モノとその属性との境界が意識され「-くない」「-くあれ」「優しくあれ」などのように顕在化すると考える。このような基底形を想定することには十分根拠があるように思うが、なぜ形容詞の基本形は基底形を露出しないのかについては十分な説明をしていない。

²⁵⁰ ここで「φ」の意味は基底形の「～く」が現れていないという意味で、「形容詞(p)・φ」は p という形容詞の基本形の言い切り形を示している。

²⁵¹ ここでいう「存在する」はある特定の場所に存在するという意味ではない。ある対象物がそのような状態で存在することを意味している。西山（1994, 2003）の絶対存在文、金水（2002）の「限量的存在文」であり、場所句を必要としない。例えば、「最近は大学時代に一冊も小説を読まない学生がいる」

型的に「～は」で言語化されるという点が重要であり、現実には、構文の要請から所有の概念をもちながらも所有主体が「～が」で実現されることがあるということである。したがって、イメージスキーマを用いた分析でも、その典型的な事例の構造図を示している。

ここまで名詞述語と形容詞述語に対して異なるイメージスキーマを想定したが、もちろん共通点を重視し、どちらか一方のスキーマに統一することも可能である。つまり、名詞述語を、対象の側面が「 y が(Sd が) p にて $\langle BE \rangle_{STATE}$ 」と把握するなら、形容詞述語と同様に示すことができる。逆に、形容詞述語を、「 y が $z=p$ の状態にて $\langle BE \rangle_{STATE}$ 」という概念として把握して、対象がある $\langle p$ の状態の場合>に存在すると見るなら、名詞述語と同じように示すことができる。つまり、属性の場合(z)を想定して、二項述語としての存在文「～に～がある」を原型として設定し、そこから所有の概念に転換するのか、主体と側面の関係の注目し、一項述語としての存在文「～の状態の～がある」を原型として設定し、そこから所有の概念に転換するかの違いである。本論文では前者を名詞述語に、後者を形容詞述語に適用するが、どちらか一方に統一することも可能である。それは外界の把握の仕方の違いにすぎない。以上の状態と所有の関係を踏まえて、状態から所有を表す場焦点化他動詞構文になったものとして次節で「あの女の子は青い目をしている」を取り上げる。

4.7.2 「青い目をしている」構文再考

本小節では前節で示した「モノの存在」と「モノの状態」のつながりを踏まえて、「青い目をしている」という構文は場焦点化他動詞構文の一種であることを示す。分析にあたって、まずこの構文についての先行研究を概観し、どのような統語上、意味上の制約があるのかを確認し、その後に本論文の分析アプローチによってどのようにこの構文が位置付けられるのかを明らかにする。

4.7.2.1 「青い目をしている」構文とは何か

「青い目をしている」構文とは、「修飾句+身体部分・属性+をしている」という形で用いられ、主語名詞句が「身体部分」または「属性」としてある特徴を有していることを述べる文である。角田(1991)では言語類型論的な観点から、「所有傾斜」と呼ばれる階層を提案し、その上位二つである「身体部分」と「属性」に限ってこのような構文が成立すると指摘した。

(241) 所有傾斜²⁵² (角田 1991 : 119 より)

身体部分 > 属性 > 衣類 > (親族) > 愛玩動物 >
作品 > その他の所有物

²⁵² 角田はこれについて、「分離不可能所有と分離可能所有の分類を精密化したものである。また、別の観点から見ると、この所有傾斜は、所有者と所有物の間の物理的なまたは心理的な近さ・密接さの程度を表していると言える」(同上 : 119-120) と述べている。

そして、普通誰にでもあるものを「普通所有物」（髪・目・口など）、誰にでもあるとは限らないものを「非普通所有物」（髭・ほくろ・瘤など）と呼び区別した。その上で、影山の先行研究を踏まえて²⁵³、問題の構文は「普通所有物」でかつそれに修飾語が付かないと成立しないとした。角田はこのタイプの所有の動詞の例として次のようなものを挙げている。

- (242) a. 彼女は長い髪をしている。(身体部分)
b. メアリーは青い目をしている。(身体部分)
c. 太郎は明るい性格をしている。(属性)
d. あの男は陰気な表情をしている。(属性) (同上：139)

- (243) a. *歌子は口をしている。(修飾句なし) (同上：155)
b. *太郎は白い髭をしている。(非普通所有物) (同上：156)

佐藤（2003）は、この角田（1991）の「普通所有物」という規定ではこの構文を成立させる必要条件にも十分条件にもならないと、その問題点を指摘し「根源的属性」という見方を提案した。佐藤はこの構文を次のように規定している。

「青い目をしている」型構文はとらえられた対象の根源的属性を述べるものであると考える。「根源的属性」とは、対象XがXとして成り立つ以上は常に有されるXの内在的な属性であり、Xの成立後に外的に付与される可能性のないものである。(同上：22)

具体的には「普通所有物」でも構文が成立しない場合（「属性」「人格」「人柄」など）と「非普通所有物」でも構文が成立する場合（「度胸」「根性」「センス」など）があることを示し、構文の成立を決めるのは、「普通所有物」かどうかではなく、「根源的属性」かどうかであると主張している²⁵⁴。

- (244) a. *太郎は {昭和生まれの男性という属性／誰もが尊敬してやまない人格／皆から好かれる人柄} をしている。 (同上：25)
b. 太郎は {いい度胸／いい根性／すばらしいセンス} をしている。(同上：26)

これによって構文が成立する意味的な条件がより詳しく分析された。しかし、佐藤自身

²⁵³ 影山太郎（1980）「語彙意味論の問題」『言語文化研究』6：1-20

²⁵⁴ 佐藤は、まずその語が「普通所有物」かどうかを、「～がある／ない」が成立するかどうかで判断している。成立すれば所有することが当たり前でないことを意味しているので「非普通所有物」とされる。次に、自身が主張する「根源的属性」かどうかの判断には「生まれ持って～」という修飾句が自然に付くかどうか、あるいは「～を与えられた／もらった」が成立するかどうかで判定している。修飾句が自然に付けば「根源的」であり、授受表現を付けられないものが「根源的」と判断される。

は「テイル形」が必須であることは指摘するだけにとどまり、自身の主張する「根源的属性」との関連で論じられてはいない。根源的属性といった意味上の制約を含めさまざまな統語上の制約を、「～をスル」という軽動詞構文の一種であるという視点で理論的に説明を試みたのが影山（2004a）である。影山の分析の重要な点を三つ取り上げておく。第一に、佐藤（2003）が指摘した「根源的属性」が名詞の特質構造における主体役割の意味表示に還元できることを示し²⁵⁵、理論的に精緻化された点である。主体役割とは物体の起源や発生に関する要因で、その物体がどのようにして出来上がるのかを示したものである。これによって例えば「指」は「人間が変化することによって身体上に存在するようになるもの」と規定され、「彼女は細い指をしている」の「指」がなぜ根源的な属性をもつのかの説明される。第二に、叙述事態のレベルを「局面レベル叙述」と「個体レベル叙述」に区別し、問題の構文を個体レベル叙述であり、「テイル形」はそれを導くためのものとして関連付けた点である²⁵⁶。第三に、そしてこれが最も重要な点であるが、この構文を軽動詞「スル」構文の一種として考え、「スル」の骨組みだけの語彙概念構造に身体部位名詞の主体役割が意味編入されることによって「～をスル（シテイル）」という形式が生まれると分析したことである。それと連動して、修飾句がないと構文が成立しないことを、「修飾句（adj）＋名詞（N）」の修飾構造が実質的には「N が Adj」という主述関係を表しているからだと分析している。このようにして、語彙意味論および生成語彙論の理論的な枠組みの中で、「青い目をしている」構文がなぜ「根源的属性」の名詞が用いられるのか、なぜ「テイル形」で用いられるのか、なぜ「修飾句」が必要なのか、という意味的および統語的な制約が総合的に分析された。

本論文では、以上の先行研究で得られた知見と矛盾することなく、「青い目をしている」は場焦点化他動詞構文の一つであるという立場から、分析を試みる。この分析の意義は、自動詞構文と他動詞構文の対立の枠組みの中で、所有 A を表す自動詞構文（形容詞述語を含む）と所有 B を表す他動詞構文という対立としてこの「メアリーは目が青い」と「メアリーは青い目をしている」を位置付け、所有の概念化に注目することによって合理的に説明できる統語現象が少なくないことを示すことにある²⁵⁷。

4.7.2.2 形容詞述語から発生と所有の関係へ

前節では、「y が形容詞(p)・φ」は「y が(Sd が) p-く 〈BE〉 STATE」つまり「y が（側面が）p という状態で存在する」という把握の仕方では「y が～」から「y は～」への転換は、題目として y の〈場〉が取り立てられ、その〈場〉が【(y が(Sd が)p-く 〈BE〉 STATE)】という属性 (Attribute) を所有する、という把握に転換すると規定した。このように形容詞述語の

²⁵⁵ 名詞の特質構造とは、James Pustejovsky(1995) *Generative lexicon*. MIT Press で提唱された生成語彙論における語の意味表示レベルのことで、クオリア構造とも呼ばれる。「構成役割」「形式役割」「目的役割」「主体役割」の4つのタイプがある。

²⁵⁶ 局面レベルから個体レベルへの転換は、理論上「出来事項の抑制」という概念構造上の操作があるとされている。(同上：28-29)

²⁵⁷ 所有 A と所有 B の規定については 3.4.2 節を参照されたい。

デフォルトの構文「～は形容詞- ϕ 」に所有の概念があると考え、(245)に挙げたような構文とのつながりが説明できるのではないかと期待される。属性形容詞と呼ばれているものは、叙述される属性がどのような「側面」においてそうなのか、その側面にあたる語は統語構造には出てこないことも多い。意味的にそれが保証されているからである。「青い」というのは「色が青い」ことである。しかし、中には、意味的にほぼ保証されているけれども、日本語では側面の語が現れる場合もある。それは「N1（主体）は N2（側面）が～」構文を作る。「いい／悪い」のような抽象度の高い形容詞は、このような「～は～が」構文で多くの定型句を作る。比較的安定した属性を表すものから、一時的な属性を表すものまで様々である。「 ϕ 」は意味構造で保証されているため統語構造に現れないことを意味している。

- | | |
|----------------------------|-----------------------------------|
| (245) a. 空は（ ϕ 色が）青い。 | cf. The sky is blue. |
| b. ボールは（ ϕ 形が）丸い。 | cf. A ball is round. |
| c. 象は（ ϕ サイズが）大きい。 | cf. An elephant is big. |
| d. 太郎は 力が 強い。 | cf. Taro is strong. |
| e. 太郎は 背が 高い。 | cf. Taro is tall. |
| f. 太郎は 頭が いい／悪い。 | cf. Taro is smart/stupid. |
| g. 花子は 器量がいい。 | cf. Hanako is a good-looking girl |
| h. 花子は 運がいい。 | cf. Hanako is lucky. |

上の例では N1 が主体で N2 が側面だったが、これを全体と部分の関係にしても、「～は～が」構文を生産的に作ることができる。そしてこの中にこの小節で取り上げる「メアリーは目が青い」が含まれる。

- (246) a. 太郎は耳が大きい。
 b. メアリーは目が青い。
 b. 象は鼻が長い。
 c. その PC は画面が広い。

これを先に挙げた形容詞述語の事態の把握の仕方に当てはめると次のようになる。

- (247) 側面 (y は **【(y の Sd が)p-く** 〈BE〉 STATE】 -ATT を 〈BE〉 POSS)
 y=主体 Sd=側面 ATT=属性
- 部分 (y は **【(y の Part が)p-く** 〈BE〉 STATE】 -ATT を 〈BE〉 POSS)
 y=全体 Part=部分 ATT=属性

次に中段と下段だが、所有 A と B がどのような概念かをここで確認しておきたい。3.4.2 節で規定したように、所有 A は事態の把握が所有の概念に転換した後、デフォルトで〈場〉が文頭に来て「～は」で示され、自動詞構文で出力されるものである。所有 B は事態の把握が所有の概念に転換した後、場が焦点化され第一の際立ちが与えられ、対象に第二の際立ちが与えられ他動詞構文で出力されるものである。(249) にその例を示す。

(249) a. 所有 A : 「z には y が 〈BE〉 POSS」 (参照点構造自動詞構文)

= メアリーには 財産が ある

b. 所有 B : 「z は y を 〈BE〉 POSS」 (場焦点化他動詞構文)

= メアリーは 財産を 有する

そうすると、上のイベントスキーマの所有 A には先の「発生-存在」の構文を「～は」に転換したものが相当することがわかる。つまり「その人 (y) は目 (Part) が青い (p)」である。図 4.44 で示したように、概念上は所有の概念をもつが、構文として出力されるときには形容詞述語の文法にしたがって、ヲ格は抑制されると考えておく。

さて、このイベントスキーマの所有 B はどのような述語によって言語化されるのだろうか。(248) に示した「～という属性を所有する」を概念化する動詞述語があるのだろうか。本論文では、このような抽象度の高い内容を表す動詞として選ばれたのが、軽動詞の「する」で、「～をしている」という述語が所有 B に対応していると考ええる。

<発生 - 状態と所有の概念が作る構文>

所有 A : 「(〈OCCUR〉 →) y は 【(Part が)p-く 〈BE〉 STATE】 -ATT を 〈BE〉 POSS」

= y は (生まれたときに発生した) 【 】 という属性を所有している

→ メアリーは 目が 青い (形容詞述語)

所有 B : 「〈OCCUR〉 → y は 【(Part が)p-く 〈BE〉 STATE】 -ATT を 〈BE〉 POSS」

= y は生まれたときに発生した 【 】 という属性を所有している

→ メアリーは 青い目を している (軽動詞「する」の述語)

この分析で重要な点は次の二つである。

①形容詞述語は、原因事象として発生を読み込んだとしても、概念化されない。

現在の対象物の属性を述べるだけである。しかし、

②動詞述語は、原因事象として発生を読み込んで概念化される。そのため

(ア) 変化結果を表すために「テイル形」が必須である。

(イ) 「～という属性を所有する」という抽象度の高い内容を表す動詞として軽動詞「する」が選ばれる。

- (ウ) 発生物を所有するというイベントスキーマになることに連動して
 軽動詞が用いられるため統語構造が「名詞＋が＋形容詞述語」から
 「形容詞＋名詞＋を＋動詞述語」へと変わる。(統語上の要請)
- (エ) 人がその部分をもって発生する、つまり生まれることを意味するので
 その身体部位は生まれ持って備わっているものでなければいけない。

このように本論文では「青い目をしている」構文を、場焦点化他動詞構文の一つと位置付けることによって、その統語的な制約である、(ア)(イ)を説明し、さらに意味的な制約である、本来人間に備わっている身体部位でなければいけないという制約(エ)も説明した。この結論は先行研究で明らかにされた構文上、意味上の制約と矛盾するものではない。

4.7.3 状態変化と所有の関係 (1) 主体-側面

4.7.3.1 I 型の場焦点化他動詞構文

前節では、名詞述語の基底構造「y が z にて <BE> STATE」から「y は～」の所有構造への転換と、形容詞述語の基底構造「y が(Sd が) p-く <BE> STATE」から「y は～」の所有構造への転換の二つがあり、どちらにしても状態は「y は～」という属性(ATT)を<BE> POSS」という所有の概念に転換することを示した。

そこで本節ではこの分析を踏まえて、状態変化の事象において、状態変化が所有の概念へと転換して場焦点化他動詞構文が成立している事例を考察する。最初に非意図的な状態変化を表す(250)のような文を分析する。これらの文は自然現象(a～d)および人体の生理的な現象(e)であり、自然に/自律的に発生している事象だと見なすことができる。このような文を見ると、単に擬人化されているだけで、人主語と同じように考えれば、他動詞文が使われても不思議ではないと考えるかもしれない。しかし、いずれの文も「[主語名詞句]は何をした？」と問うのは不自然で、「[主語名詞句]はどうなった？」と問うのが自然である。このことは、主語名詞句は使役変化を表す動作主としては機能していないことを意味している。そのため(251)に示したようにヲ格名詞を主語にした受身文が成立しない。

- (250) a. 台風は今後、次第に速度を速め、28日には黄海に進む見込み。
 (読売新聞 2012 年 8 月 28 日)
- b. 台風は今後、東寄りに進路を変え、30日にかけて本州南岸を進む見込み。
 (読売新聞 2011 年 5 月 28 日)
- c. 車輪はどんどん回転を速めており、誰にもそれを停めることはできません。
 (新潮文庫 100 冊[1])
- d. 雨脚が急に勢いを弱めると、まばゆい陽光が雲の間からのぞく。
 (新潮文庫 100 冊[3])

- e. 「全く……何てことだ！」と呟いたのは、このマンションのことなのか、あの三好晃子のことなのか、それとも胸が鼓動を速めている自分について言ったのか、荒井自身も、よく分からなかった。 (新潮文庫 100 冊[2])

- (251) a. * (その) 速度が台風によって速められ…。
b. * (その) 勢いが雨脚によって弱められると…。
c. * (その) 鼓動が [自分の] 胸によって速められている…。

分析にあたって第一に注目すべき点は、他動詞構文の主語名詞句 (N1) とヲ格名詞句 (N2) の関係が主体と側面関係になっており、自動詞構文で表現する場合、「N1 の N2」という名詞句で現れうることである。N1 を題目化したものが右側の文である。

(252) 「N1 の N2」：主体と側面関係

- a. 台風の速度が速まる。 > 台風は、速度が速まる。
b. 台風の進路が変わる。 > 台風は、進路が変わる。
c. 車輪の回転が速まる。 > 車輪は、回転が速まる。
d. 雨脚の勢いが弱まる。 > 雨脚は、勢いが弱まる。
e. 胸の鼓動が速まる。 > 胸は、鼓動が速まる。

4.7.1 節で、「y は名詞・だ」「y は形容詞・φ」は、主体と側面 (Sd) を分けて、<主体が、側面 (Sd) が p にてある/p がある>という属性 (ATT) を所有する > という概念をもつことを示した。(図 4.42, 4.43 のイメージスキーマを参照されたい) この状態を表す概念を状態の変化を表す概念に拡張したらどうなるだろうか。

変化前の状態を p0, 変化後の状態を p1 とすると次のように記述される。ある主体の属性が変化する事象は、主体の側面が p0 から p1 に変化する事象として把握され、その変化する主体を〈場〉と捉えれば、主体が p0 という属性の側面を所有する状態から p1 という属性の属性を所有する状態へと変化する事象へと把握の仕方を転換することができる。

<状態変化と所有の関係：主体と側面>

- ・モノの状態の変化： 主体の属性が変化する
- ・主体と側面に注目： 主体の側面が p0 から p1 に変化する (→自動詞構文を作る)

- ・所有の変化に注目： →場焦点化他動詞構文を作る

<変化前>

主体が、「p0 にある/p0 にてある/p0 くある」という**側面** (Sd) を所有する

↓

<変化後>

主体が、「p1 にある/p1 にてある/p1 くある」という**側面** (Sd) を所有する

「p0 にある/p0 にてある/p0 くある」はそれぞれ「存在，名詞述語，形容詞述語」で表される意味が入るが，それが「p1 にある/p1 にてある/p1 くある」に変化する場合，「存在」で示される意味の変化は「位置変化」に，「名詞述語」と「形容詞述語」で示される意味の変化は「状態変化」に置き換えられ，場焦点化他動詞構文では，その置き換えられた意味に応じた述語が作られると考える。つまり，「p0 にある」から「p1 にある」への位置変化であれば，最終的に「移す」「移動する」「(位置を) 変える」などの述語となり，「速い (p0)」から「速い (p1)」への状態変化であれば，最終的には「速くする」「速める」といった述語となって現れる。

さて，ここで改めて (252) を見てみると，N1 と N2 の関係は「主体と側面」の関係にほかならない。したがって，「台風 (N1=主体) の速度 (N2=側面) が速まる」では，両者が一体となって把握され，変化を表す自動詞構文となり，「台風 (N1=主体) は速度 (N2=側面) を速める」は，概念上両者が一度分離した上で，また所有の関係で結び付けられ，場焦点化他動詞構文となるのである。それは次のようなイベントスキーマによって示される。

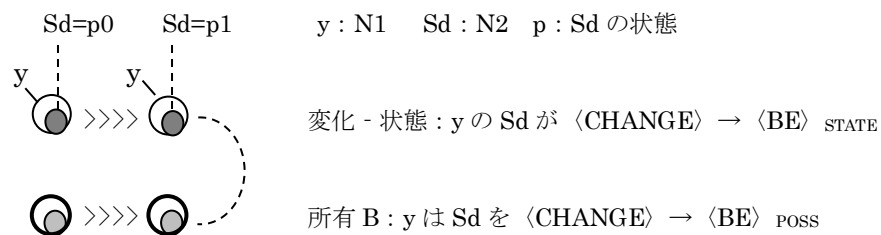


図 4.45 I 型の状態変化と所有のイベントスキーマ²⁵⁸

ここで取り上げた非意図的な状態変化のイベントを表す動詞にはどのようなものがあるだろうか。主体の側面として取り上げられるのは，モノが存在するからには必ずもたなければいけないものだと考えられる。それは，色，形，大きさ (長さ，高さ)，重さなどである。そして動きのあるモノなら必ず側面としてもたなければならないもの。それは，位置，速度 (「勢い」を含む)である。上に挙げた例文はすべてこれに該当する²⁵⁹。

²⁵⁸ CHANGE は状態変化の概念を表している。

²⁵⁹ 4.2.2 節で取り上げた森田 (1994) の両用動詞の「勢い {が/を} 盛り返す」もここに分類できるだろう。

- (253) a. {速度／回転／雨脚／鼓動} が速まる 【速度】
b. 進路が変わる 【位置】

この状態変化が原因事象として読み込まれて作られる場合焦点化他動詞構文の動詞の形態は、その多くが使役変化他動詞と同形態になるタイプである。しかし、次の用例のように、「自他両用」のタイプも存在する。側面は「高さ」で、「高くなる」＝「増す」とい捉え方で構文が作られる例である。

- (254) a. ほとんど雨が降らないのに六月になると、付近の運河の水嵩が増した。
 (新潮絶版 100 冊[3])
 b. 水泳場のある材木堀も界限の蘆洲の根方もたつぷりと水嵩を増した。
 (新潮絶版 100 冊[4])

これまでどちらかという物についての例が多かったが、「主体-側面」の関係で作られる場焦点化他動詞構文は人名詞句を主語に据えるものも少なくない。心理状態、精神状態などの変化は自律的な変化現象とみなされるだろう。後の 4.7.4.1 節の「再帰」のところでも触れるが、日本語には身体部位をヲ格目的語にとる他動詞構文が多い。それらの中には心理状態、精神状態、身体の状態の変化を表す非意図的な事象もある。心理状態や感情を意図的にコントロールしてそれを外に表すことは可能であるが、通常このような動きは自然に起こるものと把握される。下に挙げた例の中で(※)を付したものは、対応する自動詞文がないもので、もっぱら他動詞文の定型表現で使われるものである。

- (255) a. 速さ : 鼓動を速める
b. 色／形 : 顔色を変える, 血相を変える (※)

ただし、(256)に示した非能格動詞 (Perlmutter 1978, Perlmutter and Postal 1984) に分類される生理的な現象は、迷惑受身文が成立することからわかるように主語位置に来る人名詞句の<活動>を表している。そのため、上の自律的な変化を表す動詞とは区別される。(257a)の「鼓動を速める」は受身文にできないが、(257b)の「げっぶをする」は受身文が成立するのは、その違いを表している。植物の場合にも自然現象として把握される主体の側面変化がある。下の例で(258a)は「色」の変化であり、(258b)は形の変化を叙述している。

- (256) 人間の生理現象を表す非能格動詞（活動動詞）
くしゃみをする，げっぷをする，しゃっくりをする，（食べたものを）もどす

(257) a. *太郎は、次郎に大事な場面で鼓動を速められ、困惑していた。

b. 太郎は、次郎に大事な場面でげっぷをされて、困惑していた。

(258) a. 銀杏並木は一斉にその姿を黄金色に変えていた。

b. 久しぶりに訪れると街路樹は形を大きく変え、みごとな枝ぶりになっていた。

4.7.3.2 II型とI & II型の場焦点化他動詞構文

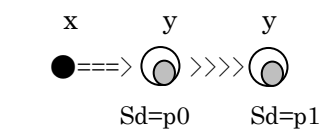
ここまでは非意図的な状態変化を見てきたが、4.5節で示したII型の場焦点化他動詞構文がそうであったように、使役変化のイベントスキーマの中で、〈場〉の変化の部分に焦点が当てられて作られる場焦点化他動詞構文もある。これは、本来は使役主の働きかけが前提になっているが、その部分は焦点からはずれているものである。(259a)は役人の意図的な行為の結果であり、(259b)は携帯電話を開発した技術者の行為の結果である。つまり、ひとりで形が変わったのではない。

(259) a. 財政融資資金法（昭和26年法第100号）に基づいて定められた（…略…）会計で、かつての資金運用部特別会計が形を変えたものである。（BCCWJ[22]）

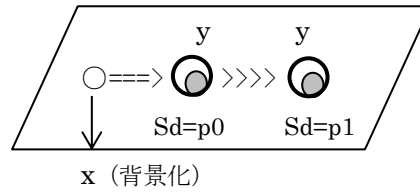
b. 5年間で驚くほど一般に普及した携帯電話は、技術の進歩で小型化・軽量化が進み、すっかり形を変えた。（BCCWJ[23]）

II型の場焦点化他動詞構文は、このように本来存在する使役主を焦点からはずして変化する事象のほうを焦点化するのだが、I型とII型の中間と呼ぶべきタイプが存在する。それは、使役主ではなく「原因」の存在が意識される場合である。原因が外部にあり、それによって変化する事象が引き起こされていると認められる場合、言語化には二つの方法がある。原因を主語位置に据えて、使役主と同等の資格を与え、使役変化他動詞構文として表現する方法。そしてもう一つは、原因はあくまで背景において、変化する事象のほうに焦点を当てて、①変化する対象に際立ちを与えて叙述する場合と、②〈場〉に際立ちを与えて、〈場〉の変化として叙述する場合である。後者の②が場焦点化他動詞構文を作るのだが、I型とII型と両方の特徴を有していると考え、「I & II型」と呼ぶことにする。このI & II型は日本語の他動詞構文を特徴付ける大きな存在である。これについては本節の最後にまとめることにする。これを状態変化のイベントスキーマで示せば次の図のようになる。

I & II型の特徴は、原因が存在していても、それが英語のように原因主語をとる他動詞文(260a)とならず、付加詞「〜で」で示され、結果的に「どうなったのか」という事象に焦点を当てて述べる文(260b)になるのである。下の例文では主体の側面は「価値」であり、形や色、大きさのような属性とは異なり評価する人間が関与する。これもモノが存在する以上本来的にもつ側面の一つと言えるだろう。



原因 (x) が y を V
(使役変化他動詞構文)



原因 (x) で y が Sd を V
(I & II 型の場合焦点化他動詞構文)

図 4.46 原因を使役主として把握

図 4.47 原因を背景として把握

- (260) a. For example, the curriculum may ignore or devalue black cultures and achievements and ... (BNC [CLW 808])
 b. 怪文書の流布^で, フランソワ・ドゥ・カヴォワの日記は今や価値を下げた。
 cf. 怪文章の流布^が, …日記の価値を下げた。 (BCCWJ[24])

ただし、急いで付け加えておかなければならないのは、I 型と I & II 型は完全には区分けできないということである。連続していると言うべきである。一方の I 型の端には「春になって、桜の木が芽を吹く」というのがある。この場合にも当然因果関係は存在する。しかし「春になる」というのはあくまで契機であり、「芽が出る」のは自律的な変化である。そして、もう一方の II 型の端には、「携帯電話が進化して形を変えた」がある。形態電話が生命体のように自己組織化によって自ら形を変えたわけではない。使役主が存在する。このような両端に挟まれた間の事象は連続しており、判別がつきにくい場合もある。次の例は原因が判明しているが、物理現象あるいは生理現象と把握されるだろうか。

- (261) a. 車は崖から転落し、原型をとどめないほど形を変えた。
 b. 不意の闖入者の方を窺っていた老婆は、そう言われると一瞬顔色を変えたようだったが、… (新潮文庫 100 冊[4])

むしろ区別をつけることにそれほど意味がないのかもしれない。重要なことは、〈場〉に際立ちが与えられ、〈場〉の変化として叙述する事態把握があり、それが場焦点化他動詞構文として言語化されるということである。

「成績」のような語は、その主体が本来的にもつ側面ではなく、作りだされたものと見ることができる。しかし、主体から切り離すことができないという点で側面と言えるだろ

う²⁶⁰。その場合、この側面はその人がもつ「力」の「高さ」を示している。次の例では、実際に成績を付けるのは評価する立場にあるもの（例えば「教師が学生の成績を下げる／上げる」）であるが、それが焦点からはずれて、結果としてどうなったのかに焦点が当たっていると見ることもできるし（Ⅱ型を作る）、自分の不勉強が原因で成績が下がったと見ることもできる（Ⅰ＆Ⅱ型を作る）。このようにⅠ＆Ⅱ型で背景化される「原因」は主語名詞句とは別の外部の原因と、自分自身が原因になっている場合両方を含む。いずれにしても、そのような使役主が焦点からはずれたり、原因が背景化したりするのである。

- (262) a. 二学期は上位だったが、三学期の評価で、太郎はかなり成績を下げた。
b. 入院で授業を受けられなかったため、三学期の期末テストで、太郎はかなり成績を下げた。

体重の増減も、使役変件事象（263a）と結果事象（263b）のどちらも焦点化できる。この場合の側面は「重さ」であり、場焦点化他動詞構文では〈場〉（＝自身の体）の特徴付けになっている。(b)では原因が「～で」で示されておりⅠ＆Ⅱ型である。ただし、(c)のように「増す」を用いると自律的な変化の事象に強く焦点が当たるのでⅠ型を作ると言える。

- (263) a. 一か月のトレーニングで5キロほど体重を減らそうと思う。
b. 太郎は、夏バテで5キロほど体重を減らした。
c. 登志子は日毎に体重を増していった。(…略…) その生長ぶりは産婆も驚くほどであった。(新潮文庫 100 冊[5])

寿命は生物が存在すると自動的にもつことになる「側面」である。この側面は「長さ」の拡張だと考えられる。「(長さが) 短くなる」＝「縮める」という把握で言語される。

- (264) その飛ばっちりで、おれ迄が小野に長げえ刀をつきつけられて寿命を縮めた。
(新潮絶版 100 冊[2])

最後にⅡ型とⅠ＆Ⅱ型を次のようにまとめておく。

<場焦点化他動詞構文 Ⅱ型, Ⅰ＆Ⅱ型>

Ⅱ型：外部に変件事象を引き起こす使役主（人）の存在が認められるが、それを背景化し、変件事象のみを焦点化し、その上で場を焦点化して作られる。他動性の観点から見て、主語位置に来る人の有責任性はゼロに近いと解釈される。

Ⅰ＆Ⅱ型：外部に変件事象を引き起こす原因の存在が認められるが、それを背景化し、

²⁶⁰ テストの点数や成績表は「成績」という側面を目に見える形に出力した「モノ」である。ここで言う「成績」とは属性として主体を特徴付けるものを指す。

変化事象のみのを焦点化し、その上で場を焦点化して作られる。この場合の原因は主語位置の来る人の外部に存在するものだけでなく、その人自身の非意図的な行為によるものも含む。他動性の観点から見て、その人の有責任性はゼロに近いものから過失の判断まで連続している。

- ・ どちらの型も使役主による事態や原因は背景化し、「～して」あるいは「～で」の形式で表示されることがある。

4.7.3.3 なぜ場焦点化他動詞構文なのか

さて、ここで次のような疑問が出るかもしれない。使役変化他動詞と同一形態なら、なぜ二つを区別する必要があるのか。主語名詞句が動作主として解釈されるのが使役変化他動詞としての典型的な用法で、他動性が低くなっていけば、最終的に所有の関係を表す他動詞文になり、その主語名詞は経験者あるいは変化主体として解釈されると考えればいいのではないか、という疑問である。それには次のように答えることができるだろう。

◆なぜ場焦点化他動詞構文というものに注目するのか

これは単に動詞の形態の問題ではなく、事態の把握の在り方の違いに基づいているからである。他動性の低下という考え方は、そもそも主語・述語という型をもつ言語において、モノとモノのエネルギー連鎖あるいは使役連鎖に基づいた事態把握に基づいている。このような連鎖の存在が前提となってそれが「低下」という発想が生まれるのである。しかし、事態の把握にはこれとはまったく異なるものがある。それが〈場〉とモノあるいは〈場〉と出来事の二者関係をみる把握である。それは存在と所有を基本概念とした事態把握である。「だれが何をするか」というだけでなく「それがどうなるか」に注目するのがナル型言語であるとするならば、「モノがどうなるのか」だけでなく、「〈場〉がモノ・イベントとの関係でどうなるのか」といった視点で事態を見たときに生れる構文、それが場焦点化他動詞構文である。重要なことは、事態の把握の在り方が構文の型を決めるのであるが、結果的に同じ「x が y を V」という他動詞文の統語構造になったからといって、それが元々同じ事態把握に基づいているとは言えないということである。確かに同じ形式をとる以上共通点はあるのである²⁶¹。しかし、非対格仮説で明らかになったように、同じ「y が V」という自動詞文の統語構造になっているからといって、自動詞が一つのグループでしかないとはいえない。同じように、他動詞についても外界の認知の在り方として別のタイプに基づく概念化を考えてみることに意義があるだろう。それを形態が同じだからという理由で

²⁶¹ 認知言語学の研究の流れから生まれた構文文法 (Goldberg1995) は基本的にこのような考えに基づき、構文間のつながりを考え、そのネットワークを描き出す。このような典型から拡張事例のネットワークを見ることには意義があるが、典型がそもそも一つしかないという保証はない。モノとモノの関係から立ち上がる事態把握とモノと〈場〉の関係から立ち上がる事態把握の双方に重きをおいた分析が必要ではないだろうか。

一括りにしてしまっはいけないと考える²⁶²。二者の関係である点は同じである。だからこそ主語（位置に来る名詞句）と目的語（位置に来る名詞句）によって「**x**が**y**を**V**」という構文を作るのである。しかし、「**x**が**y**を**V**」がすべてモノとモノの二者の関係で捉えられているわけではない。モノと〈場〉の二者関係で捉えられる点に注目する意義はそこにある。そして、この二つの視点はあるところで接点をもち、そして融合するというのが本論文の立場である。

◆自然現象に見られる非能格的な性質と自律性

次に本節で分析の対象とした構文の先行研究として杉岡（2002）を取り上げ、なぜ場焦点化他動詞構文という視点が重要なのかを説明しておきたい。杉岡（2002）は、「台風の勢いが強まる」「台風が勢いを強める」のように「～まる」自動詞文と「～める」他動詞文を分析したものである。杉岡は本論文の分析とは異なり、「台風が勢いを強める」を再帰的な使役構造を持つと考え、それに対応する「台風の勢いが強まる」の「～まる」は反使役化によって生まれる自動詞文で、通常の使役変化他動詞文（例えば「敵が攻撃を強める」）から脱使役化によって生まれる「～まる」とは異なると分析した。

この言語現象を分析するにあたって重要なのは、私たちが自然現象を経験的にどのような把握しているかという点である。再帰構造をもつ使役変化事象と見るのか、自律的な変化現象と見るのか。「人が服を着る」のような再帰構造をもつ使役変化事象と比べればその使役性の程度に差があることは確かである。その一方で、無生物のモノと比べれば、そこに何らかの内部の働きを見てとることもできる。たとえば、杉岡（2002：107）は意味構造において **CONTROL** を持っていると考えた根拠として²⁶³、「風よ、強まれ！」のような命令形であられることも可能であることを指摘している。しかし、命令形を使えるからと言って、動詞が外項をもつとは言えない。命令形はあくまで「命令」というモダリティに典型的に現れる形態であり、それ以外にも願望のモダリティを表現することもあるからだ。宝くじの抽選日に「当たれ！」と命令形が使われているからといって、それはだれかに命令しているわけではなく、願望の表れである。

また、「風に吹かれる」「雨に降られる」のように間接受身が成立することから、「（雨が降る）」「（風が）吹く」という動詞は、日本語では非能格動詞に分類される場合がある（影山 1993：60）²⁶⁴。「～に **V** て {ほしい／もらう}」のテストでは「{風に吹いて／雨に降っ

²⁶² 非対格仮説によれば、「笑う」と「枯れる」は異なるタイプの自動詞である。このタイプの違いは単に意図的かそうでないかという意味上の違いのみならず、統語的に異なる振る舞いをするからこそ区別することに意味がある。（迷惑）受身文の成立の可否をみると、「山田さんは花子に笑われて怒った」は成立するが、「*山田さんは庭の木に枯れられて悲しんだ」は成立しない。同様のことは、使役変化他動詞と場焦点化他動詞（構文）についても言える。使役変化を表す「速める」は「太郎は花子に話すスピードを速められて困惑した」でも成立するが、場の変化を表す「速める」は「太郎は花子に大事な場面で心臓の鼓動を速められて困惑した」は不自然である。

²⁶³ 意味構造で **CONTROL** をもつということは、使役主あるいは経験者に相当する項をとるということの意味する。

²⁶⁴ 動詞の意味構造の分析において、「意図を持つかどうか」という意味的な判断と動詞の項構造は必ずしも

て} {ほしい／もらう}」は成立するようだが²⁶⁵、その一方で「もっと風が吹いてほしい」や「もっと雨がたくさん降ってほしい」も用いられる。このことから判断すると、風や雨は通常の動作動詞の外項とはやはり異なると判断される。

「台風が勢いを強める」を「再帰＋使役」と見るのなら、「植物が芽を出す」もそのように分析する必要が出て来るだろう。植物の変化や自然現象は物理科学的な分析は別として、経験的にはまず自律的な変化事象とみるべきである。自然現象における事象の構造は典型的な「再帰＋使役」とは言えず、無生物と生物の中間に位置している。それは次のような言語現象で示することができる。影山（1996：182）が示したテストを用いれば²⁶⁶、元々非対格性をもつ自動詞であれば、使役主を付加できるので「～める」が成立する。しかし、元々使役主が存在して反使役化で両者が同定されているのであれば、「～める」は使えず、使役の接辞を付加して「～め・させる」にしなければならない。この統語テストをすると、予想どおり「～める」と「～め・させる」の両方が成立し、動詞によっては「～め・させる」の許容度が落ちる場合もある。

- (265) ① a. ショックを受けて、心臓の鼓動が速まった。
b. 電気ショックを与えて、心臓の鼓動を {速まらせる／速める}
② a. 本土に上陸後、台風の勢力は弱まった。
b. 現代の技術を使えば、人工的に台風の勢力を {弱まらせる／弱める} ことが可能だ。
③ a. 治療を受けなかったため、死が早まった。
b. 治療を拒否し、食事もとらなかったことが死を {?早ませた／早めた}。

つまり、自然現象における「雨」「風」「雪」「台風」などは動作主とは異なるが、無生物のように単なる変化の対象になるものとも異なり、その中間的な存在だと言える。自然現象の「～まる」対「～める」は、杉岡（2002）のように「～める」のほうを出発点として分析することは可能だが、そうしなければならないという必然性はない。「台風が勢いを強める」から出発するのではなく、「台風は勢いが強まる」から出発すべきだというのが本論文の立場である。

そして決定的に重要なことは、「～まる」と「～める」に限定されずに広く自然現象をどのように分析するのがいいのかという視点で捉えているかということである。そもそもなぜ「台風は勢力を強める」という表現が用いられるのか。それは「台風」という主体の変化に注目するからである。「台風は勢いが強まる」とは何が違うのか。それは「側面」の変

一致しない」（同上：60）と述べている。同様に間接受身が成立することから「死ぬ」は非能格、成立しない「死亡する」は非対格に分類されることになる。

²⁶⁵ 「てもらう」で二格名詞をとるということは、その名詞句は動作主に相当すると判定される（影山 1996:32）。ちなみに、同書のこの統語テストでは「雨が降る」「風が吹く」は取り上げられていない。

²⁶⁶ この統語テストについては本論文の 4.6.8 節の「含む」「含める」の分析も参照されたい。

化を所有するという概念に転換することによって、〈場〉(＝主体)の特徴付けになるからである。そのような視点で語るのが「台風は勢力を強め…」なのである。

4.7.4 状態変化と所有の関係 (2) 全体-部分

4.7.4.1 人の場合

前節では N1 と N2 の関係が「主体と側面」であるものを分析したが、次に「全体と部分」の関係になっているものを分析する。「主体と側面」も「全体と部分」も N1 と N2 の不可分の関係、つまり分離不可能所有を表している。したがって、「主体と側面」で行った分析をここでもあてはめることができる。例えば「太郎 (N1) が骨 (N2) を折った」という状態変化は、次に示したように〈場〉として把握された主体が変化結果を所有するという概念へと転換する。

<状態変化と所有の関係：全体と部分>

- ・モノの状態の変化： 主体の属性が変化する
- ・全体と部分に注目： 全体の部分が p0 から p1 に変化する (→自動詞構文を作る)
＝主体
- ・所有の変化に注目： →場焦点化他動詞構文を作る
＜変化前＞
主体が、「p0 にある/p0 にてある/p0 がある」という部分 (Part) を所有する
↓
＜変化後＞
主体が、「p0 にある/p1 にてある/p1 がある」という部分 (Part) を所有する

このように「主体」と「属性」の関係がそうであったように、「全体」と「部分」の関係も、概念上一度二つを分離したのちに、所有構造によって一体のものとして、〈場〉全体の変化事象として把握しなおすのである。

◆両用動詞

4.2.2 節で取り上げた両用動詞の中で状態変化を表す動詞として「閉じる」「開く(ひらく)」があることを示した。「増す」と「盛り返す」は 4.7.3 節で既に取り上げた) この二つの動詞は全体と部分の関係によって場焦点化他動詞構文を作ると考えられる²⁶⁷。ただし、この動詞は使役変化他動詞として主体が部分に働きかける場合にも (266c,i), 他者に働きかけ

²⁶⁷ 目や口の開閉について言えば、ほとんど意識せずに行っている行為であることが両用動詞として存在する動機づけの一つになっていると考えられる。(cf. 鈴木 1985 : 108 「目をあく/目をあける」の対立)

て変化を引き起こす場合にも用いられる (266d,j)。その点で 4.8 節で分析される「開く (あく)」とは異なる²⁶⁸。

- (266) a. 彼女はうっすらと目を開いて寝ていた。
b. 彼女の目はうっすらと開いていた。
c. 大きく目を開いてください。
d. 重い扉を三人がかりで開いた。
e. 椿がようやく蕾を開いた。
f. 椿の蕾がようやく開いた。
g. 彼は目を閉じて静かに聴いていた。
h. 彼の目は閉じていた。
i. しっかり目を閉じてください。
j. 葉をはさんで本を閉じた。

◆状態変化主体の他動詞文

さてここで取り上げる「人の場合」には、天野 (1987b) が「状態変化主体の他動詞文」と呼んだものが含まれる。天野は、述語が使役変化動詞でありながら、主語が使役動作主ではなく、「状態変化の主体」になっている文を「状態変化主体の他動詞文」と呼んだ。本論文はこのあとの分析のために天野の挙げた例を分離可能所有と分離不可能所有に分けておく。天野の挙げた (267) の例のうち (b) がこの節で扱うものである。(d) の「植物」は次節で、(a) (c) の分離可能所有については 4.7.5 節で扱う。

(267) 天野 (1987b) が挙げた例文 (a~c は左 2, d は左 12 脚注より)

- a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。
b. 勇二は教師に殴られて前歯を折った。
c. 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。
d. 昨日の台風で、街路樹はすっかり葉を落としている。

(267b) の受身文は「*教師に殴られて、前歯が勇二に (よって) 折られた」のように、成立しない (元の文の意味を保持していない) ことを確認しておく。

²⁶⁸ 「開く (あく)」は 4.8 節で、形態上対応する他動詞がありながらヲ格名詞句をとって他動詞構文を作る動詞 (目をあける/目をあく) として取り上げられる。これは「ヲあける」「ガあく」の対立が基本的に存在し、その中で「ヲあく」が生まれたと考えるものである。この「あく」は「扉をあく」のような外部の対象に働きかける用法をもたない。一方、「開く (ひらく)」は形態上対応する他動詞をもたない点で純然たる両用動詞である。また、「閉じる」は形態上対応する「閉ざす」が存在するが、基本的に両用動詞であり、後に「閉ざす」が生まれたと考えられる。『明鏡国語辞典』は「棒状の物を戸に差すの意から。「閉じる」とは別語源」と解説しており、『日本国語大辞典』で「閉ざす」(他動詞) の初出例をみると、「戸をしめて営業をやめる」の意味では 19 世紀終わりの坪内逍遙の作品から採られており、「中に閉じこめる」の意味の初出例は 20 世紀初めの国木田独歩の作品から採られている。

天野（1987b）は、この他動詞文は次に示した条件のもとで、主語名詞が変化の「事態を所有する」という意味で解釈されると考え、「〈他動性〉を〈働きかけ〉だけでなく〈所有する〉」という意味にまで広げたとき、状態変化主体の他動詞文も、他動詞文の一つの用法として正しく位置づけることが出来る」（同上：左 12）と述べている。

（268）天野（1987b：左 5）が規定した条件

条件 1：状態変化主体の他動詞文を作る他動詞は、主体の動きと客体の変化の二つの意味を含む他動詞である。

条件 2：状態変化主体の他動詞文のガ格名詞とヲ格名詞は、全体部分の関係にある。

◆他動詞側と自動詞側からのアプローチの接点

上の条件は妥当なもので、「所有」の概念をもつという分析、全体部分の関係になっているという分析は、本論文の分析と矛盾するものではない。ただ、分析のアプローチが（使役変化）他動詞側からであり、他動詞の用法として位置付けているのみという点で異なる。条件 1 で決定的に重要なのは「変化」の意味をもつことである。他動詞側からのだけのアプローチでは、変化を表す自動詞文（＝非対格性をもつ動詞が作る文）が所有の概念をもつ他動詞文と交替する現象をうまく説明できない。したがって、自動詞側からアプローチをもとにし、他動詞側からのアプローチとの＜接点＞を探らなければならないと考える²⁶⁹。

このモノとモノの二者関係によって作られる他動詞構文と、モノと〈場〉の二者関係によって作られる他動詞構文の＜接点＞とはどこにあるのか。それは使役変化のイベントをベースにしながら使役主を焦点からはずし、変化事象に焦点を当てて成立するⅡ型の場焦点化他動詞構文、あるいは原因を認めながらそれを背景にして、変化事象に焦点を当てて成立するⅠ&Ⅱ型の場焦点化他動詞構文であると考ええる。

児玉（1989）は天野（1987b）を踏まえて「状態変化主体の他動詞文」が「事態を所有する」という意味で解釈されるためには三つ目の条件が必要であることを示した。それは使役変化事象をベースにしながら使役主を焦点からはずしたり、原因事象を背景化したりすることの裏返しとして、変化事象に焦点があたっているという解釈を確実なものにする条件ということである。これも本論文の分析と一致している。

（269）児玉（1989：75）が示した三つ目の条件

三つには、ガ格名詞句が、動きの引き起こし手でなく客体変化後の事態を所有するというほどの意味をもつものであるために、主体の「動き」に対する自立性を喪失させるべく、主体以外に、主体からなんらの制御も受けない独自の動きの現象が、述語事態に直接の引き起こし手として（明示あるいは暗示されて）

²⁶⁹ 2.6.4 節の先行研究の紹介とコメントも参照されたい。

存在していること。

「私は歯を折った」では、全体-部分の解釈が優先される日本語においては、「私は（自分の歯を折った）」と第一に解釈される。しかし、この文だけでは、「自分が意図的に折った」という解釈を排除できない。ところが「転んで」と原因を明示すれば自分の過失だと解釈され、「殴られて」という原因を明示すれば、非意図的にそのような事態が生じたという解釈になるというわけである²⁷⁰。

さて、ここで、天野（1987b）が考える状態変化主体の他動詞文をⅡ型とⅠ&Ⅱ型の枠組みの中で整理しておく。「歯を折る」という事象がどのような事情で起こったかを叙述する場合、次の四つが考えられる。

- ① 使役主を立てる。他者への働きかけ
 - a. 太郎が 次郎の歯を 折る
 - b. 太郎が 殴って 次郎の歯を 折る 【手段明示】
- ② 使役主を立てる。自身への働きかけ（意図的：再帰）
 - a. 太郎が 自分の歯を 折る
 - b. 太郎が 叩いて 自分の歯を 折る 【手段明示】
- ③ 変化主体を主語に立てる。原因は自分自身にある。（非意図的：再帰）²⁷¹
 - a. 次郎が （自分の）歯を 折る
 - b. 次郎が 転んで （自分の）歯を 折る 【原因明示】
- ④ 変化主体を主語に立てる。原因は自分以外にある。（非意図的：受身的）
 - a. 次郎が （自分の）歯を 折る
 - b. 次郎が 殴られて （自分の）歯を 折る 【原因明示】

天野は①②→③→④の順で他動性が低下し、④では「事態を所有」という意味で解釈されるとした。本論文は、(b) の下線部の句に示したように「～て/～で」が【手段】にな

²⁷⁰ ただし、状況によっては、原因が自分側にあることが完全に排除されないこともある。「殴られて」という場合も、「殴られないように」注意をすることを怠っていたという解釈を完全に排除はできない。下の③と④の区分は明確につけられるものではなく連続しているとみるべきである。

²⁷¹ デ格は手段だけでなく原因も表す。非意図的に誤って刺す場合は原因のデ格が現れて、次のような文が成立する。(i) 太郎は誤ってピンで人差し指を刺した。(ii) 花子は生け花の最中にバラのとけで指を刺した。このようなデ格は意図的な動作としては「道具」を表すと考えられるが、非意図的な場合には、このような道具が、結果的に「(刺すという動きで) けがをする」ことを引き起こす原因として捉えられていると考えられる。次の「切る」も同様である。(iii) 太郎は、道に落ちていたガラス片で足の裏を切った。なお、「道具で場所(対象)を刺す」と「道具を場所(対象)に刺す」の構文交替については5.3節の「道具主語他動詞構文・LT主語他動詞構文」も参照されたい。

るのか【原因】になるのかを基準に、①②は使役変化他動詞、③④は〈接点〉とみなして、場焦点化他動詞構文になっていると考える。③と④のどちらも〈場〉(＝人)の変化(特徴付け)として語る構文になっているからである。③がⅠ&Ⅱ型で、④がⅡ型である。④-bを見ると、原因が明示されていて、一見するとⅠ&Ⅱ型と同じように見られるかもしれないが、①との対比で見てとれるように、④は元々あった使役主を焦点からはずした構文である。なお、①と④の対比から、④は「歯を折られた」という受身文との違いが問題になる。これについては4.11で改めて取り上げて論じたい。

(270)の(a)～(d)では、殴り手という使役主が存在するⅡ型の場焦点化他動詞構文を作り、(e)～(h)は外部の原因事象が表示されているⅠ&Ⅱ型である。

- (270) a. 太郎は 殴られて {歯・骨} を 折った。(Ⅱ型)
b. 太郎は 殴られて 鼓膜を 破った。(Ⅱ型)
c. 太郎は 殴られて あごの骨を 砕いた。(Ⅱ型)
d. 太郎は 殴られて {額・唇} を 切った。(Ⅱ型)
e. 太郎は 虫に刺されて 顔を 腫らした。(Ⅰ&Ⅱ型)
f. 太郎は 飛んできた火の粉で 髪を 焦がした。(Ⅰ&Ⅱ型)
g. 太郎は 飛んできたガラス片で 顔を 切った。(Ⅰ&Ⅱ型)
h. 太郎は 突然の雨で {髪・体} を 濡らした。(Ⅰ&Ⅱ型)

ここで取り上げる人の「全体-部分」の関係になる場焦点化他動詞構文は、上に示したように損傷を表す動詞が多いのも特徴である。「濡らす」もその延長として捉えることができるかもしれない。このような動詞(語られる事象)の偏りがあるとしたら何に起因しているのかについては、4.7.4節と4.7.5節ですべてのタイプの構文を検討した後、4.7.6節で取り上げて論じる。

◆再帰構文について

この小節の最後に再帰とのつながりについて少し触れておきたい。「全体と部分」の関係を人の体に当てはめると、身体の部分をつ格名詞にとる他動詞文が作られる。日本語はこのような表現が多いと言われる。ただし、注意しなければならないことは、池上(2006: 168-169)が的確に指摘しているように、日本語は欧米言語と異なり再帰構文(再帰代名詞を用いる構文)を発達させず、かわりに「全体と部分」の関係で他動詞文を生産的に作るという点である。したがって、「朝起きて顔を洗った」と言えば、普通の状況では「わたしが自分の顔を洗った」と解釈される。「顔」と言うだけで、それはこの語り手の顔であることが了解されているのである。

高橋(1975)は所属関係(所有関係)をもつ表現と構文を丁寧に観察して整理しているが、再帰構文として次の例を挙げたうえで、自動詞との近接性について述べている。

(271) 高橋 (1975 : 4) で引用されている例文²⁷²

- a. 柄杓にやんまが一疋止まって、羽を垂れて動かずにゐる。
- b. 一人の男が猫のやうに身をちぢめて
- c. もし春琴が災禍のため性格を変へてしまったとしたら

これらの文の中の対格名詞と他動詞の関係を連語論的にみれば、ものに対するはたらきかけをあらわしている。しかし、構文論のレベルで主語との関係をみると、他に対するはたらきかけをあらわしているのではなく、主体である自分の状態をかえることをあらわしている。つまり、対格名詞と動詞のくみあわさった連語が、ひとかたまりになって自動詞相当となり、合成述語をなしているのである。(同上 : 4)

そして、この種の連語からできた慣用句が非常に多いと指摘し、その慣用句が自動詞に言い換えられることから、自動詞に近い性格をもっていることがうかがえるとし、次のような慣用句を挙げている。

(272) 高橋 (1975 : 5) で挙げられている慣用句

こしをおろす (=すわる)、身をおこす (=おきあがる)、目をさます (=おきる)、
あたまをたれる (=うなだれる)、はらをたてる (=おこる)

ここで注意しなければいけないことは、再帰構文は確かに自動詞に接近している。しかし、自動詞相当になることは、必ずしも非意図的な事象を表すわけではない。高橋が最初に三つ挙げた例文がどれも(※aとbは特に)非意図的な解釈を読み込みやすい内容だったため、そのような誤解を生みかねない。(272)に挙げた身体部分をヲ格名詞にとる慣用句もそのように理解すべきである。つまり、自動詞相当になっても、「座る」が意図的な行為を表し得るように「腰を下ろす」も非意図的になっているわけではないのである。このように「再帰」そのものは「非意図的な事象」と直接的に結びつくことはない。(4.5.4節の再帰と所有の関係についても参照されたい)

本節の考察との関係で言えば、使役変化他動詞構文と場焦点化他動詞構文は動詞の形態が同一のことが多い。意志をもつ人が主語名詞句に立つ場合、それがどちらの解釈になるかは、多くの場合文脈によるが、「わざと～する」のような言い方をしなければ、非意図的な事象として解釈されやすいものとして次のような慣用句が挙げられる。(一部高橋 1975 が挙げた慣用句と重なる)

²⁷² 例文の出典は次のとおり。a. 森鷗外『阿部一族』b. 芥川龍之介『羅生門』c. 谷崎潤一郎『春琴抄』

(273) 犬がしっぽを垂れる，鳥が羽を垂れる，頭を垂れる²⁷³

腹を立てる，お腹／体を壊す，舌つづみを打つ，涙を浮かべる

[怒りに] 体を震わせる，顔を赤らめる，心を痛める，心を躍らせる

「{ひげ・髪・爪}を伸ばす」「ひげを生やす」なども場焦点化他動詞構文を作り，〈場〉である人の変化を表し，「～は～を V-ている」でその人の特徴付けとして用いられると考えられるが，「切らずに伸ばす，生やす」といったように持ち主の意図が働く余地があることは否定できない。

4.7.4.2 植物の場合

植物の場合は発生イベント（「芽を出す」「根を出す」「蕾をつける」）の延長として次のような「伸ばす」という変化を表す文が挙げられる。受身文が成立しない点も確認できる。

(274) a. その木は四方に枝を伸ばした。

b. その木は地中深く根を張った。²⁷⁴

(275) 「N1 の N2」：全体と部分の関係

a. その木の枝が伸びる。 > その木は，枝が伸びる。

b. その木の根が張る。 > その木は，根が張る。

(276) a. *（その）枝が木に（よって）伸びられた。

b. *（その）根が木に（よって）張られた。

次の「落とす」「散らす」の例では，動詞の概念自体は消失事象を表すわけではないが，結果的にそのような変化事象が消失の概念へとつながる場合である²⁷⁵。

(277) a. 菩提樹，白樺が葉を落とすようになると，秋は駆け足でやってくる。

(BCCWJ[27])

b. 五十年の伐期を目標にしているが，十年目くらいから実をつけだしたら，四十年間は実を落とすのだから，その四十年間はクマが実を食べればいい。

²⁷³ 「垂れる」は「～が垂れる」という自動詞としての用法があり，形態上対応する「垂らす」という他動詞がある一方で，「～を垂れる」という他動詞構文も作る。これは 4.8 節で取り上げる「有対自動詞の両用動詞化」の特徴であり，そこで改めて取り上げる。

²⁷⁴ 「根を張る」と「氷が張る」は表す事態が異なる。前者は「伸びる」という変化で，後者は「できる」という発生を表す。もちろん同じ動詞が使われるということは「見え」として共通したものがあるからだが，元々存在しないものが現れた場合は発生で，元々あるものが変化した場合には変化として，両者を区別しておく。

²⁷⁵ ここでは「消失」を「対象物の所有から非所有への変化」という意味で用いている。価値判断を含まない中立的な意味である。

(BCCWJ[28])

- c. どんぐり公園を風が勢いよくふきぬけていった。ポプラはみずみずしい若葉をゆらし、もくれんは白い花びらを散らした。(BCCWJ[29])

「揺らす」のような動詞が植物に用いられる場合、それを擬人法と見るべきだという考えもあるだろう。面白いことに、人と同様に「折る」が現れる場合もある。語り手が植物に感情移入し、植物の立場で描写したという解釈もあるだろうが、いずれにしてもここでは〈場〉(＝植物全体)の変化に注目した場焦点化他動詞構文と見ておく。

- (278) 赤い花がそれぞれに、少し強まって来た風に頭を揺らしている。(…略…)
台風のない季節に、植物は必死で生き延びようと枝を伸ばす。ハイビスカスの上に枝を伸ばす鳳凰木は、先日の台風で一番太い枝を折って、葉の茂みが半減した。(個人のブログ) ²⁷⁶

4.7.4.3 機械・物の場合

上で見たように植物の場合は「全体・部分」で場焦点化他動詞構文が成立するが、モノの場合は極端に許容度が落ちる。これは第一にモノ主語の他動詞構文を嫌う日本語の特徴の表れだと考えられる。ただ、事態の捉え方はするかしないかという二値的なものではなく、程度の差である。高橋(1975: 4)では小説の用例として次の用法を紹介している。原因が明示されているので、本論文の分類ではⅠ&Ⅱ型になる。

- (279) 一週間前の大嵐で、発動機船がスクリュを壊してしまった(小林「蟹工船」)

中村(2000)は、自他交替には二つの認知プロセスが関係しているとし、一つは使役構造を前提にしたプロファイル選択による自他交替で、これはいわゆる使役起動交替をするタイプである。そしてこれとは異なるタイプとして、「全体」と「部分」の関係において全体をトラジェクターに選択する他動詞文と部分をトラジェクターにする自動詞文との交替もあるとした²⁷⁷。その例として次の三つの例を挙げている。

- (280) 中村(2000: 94-95)の挙げた例文

(※下線と日本語訳と許容度の判定は引用者による)

- ① a. I broke a finger. 私は指(の骨)を折った
b. My finger broke. 私の指(の骨)が折れた

²⁷⁶ <http://suara.ti-da.net/c149740.html> (アクセス日: 2014年8月2日)

²⁷⁷ ただし、このようなトラジェクターを選択する構文交替は英語でも生産的ではなく、例えば次のような場合、交替はできないという。日本語訳とその許容度の判断は引用者による。(i) *The window broke a pane. (*その窓が窓枠を壊した) (ii) A pane of the window broke. (その窓の窓枠が壊れた)

- ② a. Deer grow new horns in the spring.
鹿は春になると新しい角を生やす
She has grown her hair long. 彼女は髪を長く伸ばした
b. Her hair has grown long. 彼女の髪は長く伸びた
- ③ a. My guitar broke a string. *私のギターは弦を切った
b. A string of my guitar broke. 私のギターの弦が切れた

①②は 4.7.4.1 節の「人の場合」で扱ったものである。③が物主語の場合である。日本語では他動詞文として成立しないと判断される。高橋（1975）の挙げた例文では「機械」で、ギターは楽器である。機械のほうはその内部構造が複雑なため、そこに内的な自律性を感じ取り、動物につながる側面が多少なりとも見てとれる。それに対して単純な構造のモノはそのようなつながりが感じられないのだろう。

Hawkins（1995）では、英語の break の様々な構文に現れる名詞句の意味役割を示しているが、そこでは一部構文が異なるが、上の③の自動詞文が次のように記述されている。

(281) break の Frame (Hawkins1995 : 131) ※下線は引用者による

- | | | |
|---|-------------------------------|------------------------------------|
| 1 | NP — V — NP | John broke my guitar |
| | [Agent] [Patient] | |
| 2 | NP — V | My guitar broke |
| | [Patient] | |
| 3 | NP — V — PP | A string broke on <u>my guitar</u> |
| | [Patient] [<u>Locative</u>] | |
| 4 | NP — V — NP | <u>My guitar</u> broke a string |
| | [<u>Locative</u>] [Patient] | |
| 5 | NP — V — NP | My guitar broke a world record. |
| | [Instrument] [Patient] | |

ここで注目すべきは、3の自動詞文では‘my guitar’が〈locative〉として現れており、それが4の他動詞文では、主語になっている点である。これは〈場〉が焦点化され〈場〉の変化を叙述する他動詞文になるという本論文の分析と通じるものである。

さて、日本語ではモノを主語にした構文は成立しにくいようだが、小説などでは次のような例はある。文中の「折れて」が原因だとわかる。折ったのは教師だという解釈も可能だが、教師が意図的に散らしたわけではなく、教師の手の中でそのような事態が発生したと解釈されるのであれば、I & II 型の場焦点化他動詞構文だということになる。

(282) 黒板に幾何図形を画いていた数学の教師は、チョークを持つ手を休めて聴き耳をたてた。チョークは真ん中でぽきんと折れて粉を散らした。(BCCWJ[30])

4.7.5 状態変化と所有の関係 (3) 人間関係・分離可能所有関係

これまで取り上げた「主体・側面」「全体・部分」の関係は分離不可能所有の関係を表す。分離不可能所有にはもう一つ「血縁関係」およびその拡張として「社会的人間関係」がある。そして分離可能所有と呼ばれる所有者と所有物の関係がある。この小節では、前者の二つをまとめて「人間関係」、後者を「分離可能所有関係」と呼び分析することにする。

4.7.5.1 血縁・社会人間関係

ここに分類されるものは、すでに 4.3 節の「消失と所有」の関係で紹介した「亡くなる」「亡くす」という動詞のペアがある。「N1 の N2 が死ぬ」つまり、N2 が生きている状態から死んでいる状態への変化を表す場合、(283) のような自動詞文と他動詞文を作ることができる。ここには変件事象を引き起こす使役主や外部の原因は想定されないで、(b) は I 型の場焦点化他動詞構文である。

- (283) a. 山田さん (N1) のお母さん (N2) が亡くなった。(=死んだ)
b. 山田さん (N1) はお母さん (N2) を亡くした。

本論文では、4.2 節の冒頭で規定したように、広義の変件事象を三つに分類する。まず「発生」と「それ以外の変化」に大きく二つに分ける。「それ以外の変化」は位置変化と状態変化に分けられる。消失は発生の反対の概念として把握される。そこで「亡くなる」「亡くす」は 4.3 節の「消失と所有の関係」で扱った。本節ではその意味を確認し、例文を追加しておくことにする。

(283b) は、〈場〉としての人において血縁関係をもつ人の死が＜発生＞したという事態を、その〈場〉としての人所有空間からの消失と把握され、「所有状態」から「非所有状態」への変化を表していると言える。さて、このような場の変化の叙述していることは確かであるが、次のような場面での発話が不自然になることが先行研究で指摘されている(近藤 2005, 許 2010)。

- (284) [登校してきた B が元気がないので、A が B に尋ねる]
A 「元気ないけど、何かあったの」
B 「実は…、今朝 {祖母が亡くなった／??祖母を亡くした} の。」

B さんが自分の祖母が亡くなったという状況では不自然な応答だと考えられる。これは、「N1 は N2 を亡くす」が出来事として＜変化＞を叙述する用法から、そのような変化の＜

履歴>を所有するという用法へとシフトしているからだと考えられる。これについては4.7.6節で改めて取り上げて論じる。

「N1はN2を亡くす」という場合、通常は血縁関係について述べるのだが、その拡張として「心理的に密接な関係」が認められる場合、言い換えれば「その人の<消失>によって心理的に多大な影響を受ける関係」であれば、「親友を亡くす」「スタッフを亡くす」「ライバルを亡くす」という表現も用いられる。

(285) a. 僕の誕生日は彼の葬儀となり、上京は突然、親友を亡くした悲しみと挫折で始まった。(BCCWJ[53])

b. 富士登山中の遭難事故で昨年、同行スタッフを亡くした元F1ドライバー、〇〇〇〇さん(47)が23, 24の両日、宇都宮市で開かれる自転車国際ロードレース大会「ジャパンカップ」に初出場する。(毎日新聞 2010年10月22日)

c. [DVD 発売の宣伝文句]

レースでライバルを亡くした元レーサー(見崎清志)は、無気力な自動車教習員となっていたが、無軌道で生命力あふれる生徒(江夏夕子)に愛憎半ばする。だが、壮絶なカーチェイスとなり…。(毎日新聞 2009年3月6日)

〈場〉が人ではなく、組織の場合もある。そして哀惜の念を「惜しい人を亡くす」という定型句で表現する場合もある²⁷⁸。

(286) a. 岩手県大槌町は、東日本大震災で首長を亡くした唯一の自治体だ。

(毎日新聞 2011年7月13日)

b. (…略…) 私が大学のときにお世話になりました高坂正堯先生のインタビューが載っております。その翌年に亡くなられて、大変惜しい方を亡くしたという思いで私は本当に残念でございますが、(…略…) (BCCWJ[54])

興味深いのは、「惜しい人を亡くす」という場合、亡くなった人の<消失>と語り手との二者の関係というよりも、その<消失>が(人間)社会あるいは私たち全体における<消失>という把握に拡張していることである。つまり、〈場〉が個人から社会へと拡張しているのである。そのような〈場〉は構文上には現れないのが普通であるが、(287)の例では、残念に思う「私」とは別に、「～を亡くす」の〈場〉として「社会」が文脈に埋め込まれていると考えられる²⁷⁹。

²⁷⁸ 「文壇は惜しい人をなくした」 The literary world has lost a dear friend. (会話作文英語表現辞典)

²⁷⁹ 英語ではこのような場合一般人称として‘we’を用いて‘we’ve lost …’のように表現することができる。次は著名な俳優ロビン・ウィリアムスが亡くなったことについて書かれたものである。Speaking of movies and depression, everyone seems to feel the need to express an opinion about the death of Robin Williams. Other than feeling bummed because we’ve lost a brilliant humourist, there’s not much I can say. Never met the man. (Portage DailygraphicCOM より：アクセス日 2014年9月12)

(287) ○○先生が亡くなられた。大変惜しい方を亡くしたという思いで私は残念だ。

↓

<社会は大変惜しい人を失った>

「惜しい」という形容詞と呼応して「～にとって」が現れ、それが〈場〉を表している場合もある。

(288) その訃報を聞いた時は、ぼうぜん自失したという。「政党が変わっても、政策は変わらず、その実現を常に考えていた。長崎にとって、日本にとって惜しい人を亡くした」と悼んでいた。(読売新聞 2011 年 11 月 6 日)

血縁・社会人間関係では、「亡くす」以外に場焦点化他動詞構文を作る動詞はない²⁸⁰。例えば「N1 の N2 が {(病気で) 倒れる／病気になる／酔っぱらう／起きる／寝る}」などを「N1 は N2 を (病気で) 倒す／病気にする／酔っぱらわせる／起こす／寝させる」とは言えない。言えたとしても、同一の事態を表すことはできない。(289) の例に示したように「田中さん」についてどんなことが起きたのかに焦点を当てて叙述する場合には、「～は～が」構文 (b)，あるいは迷惑受身 (b) を用いることになる。

- (289) a. 田中さんのお父さんが病気で倒れた。
b. *田中さんはお父さんを病気で倒した。
c. 田中さんはお父さんが病気で倒れた
d. 田中さんは (この大事なときに) お父さんに倒れられて困っている。

- (290) a. 佐藤さんの妹が起きた。
b. #佐藤さんは妹を起こした。(a.には含意されない意味を表す)

このような生産性の低さの要因は、同じ分離不可能所有であっても、「主体・側面」や「全体・部分」と異なり、抽象的な「血縁・社会人間関係」による結びつきにあると考えられる。そのような人間関係にある人の状態変化を、自分自身におけるある状態の「非所有」から「所有」への変化と見なす動機付けとして十分なのは「死」という出来事しかないと言える。さらに、(289d) に示したように迷惑受身という統語的な方法によって叙述できるということも関係しているだろう。受身文とのつながりについては 4.11 節で改めて取り上げる。

日 <http://www.portagedailygraphic.com/2014/08/22/please-dont-play-it-again-sam>)

²⁸⁰ 4.3.3 節の脚注にも記したように、「迷いを去る」をここに分類することは可能である。

4.7.5.2 所有者と所有物の関係（分離可能所有関係）

所有者と所有物の関係は分離可能所有で、天野（1987b）の「状態変化主体の他動詞文」の中で挙げられた文の中では次のものがそれに該当する。

- (291) a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。
b. 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。（同上：左 2）

(291) の表す事態は、(292) の自動詞構文で表されるような〈場〉としての人において発生した変化事象がベースになっていると考えられる。家財道具がひとりでに焼けたり、屋根が勝手に飛んだりしたわけではなく、原因が存在し、かつそれは使役主（人）による行為ではないので、I & II 型で、原因が自分たちの外部にある場合である²⁸¹。

- (292) a. 空襲で私たちの家財道具がみんな焼けた。
b. 昨日の台風で田中さんの家の屋根が飛んだ。

II 型の場合は (293) のような文の場合である。cf. に示した文が実際に存在する使役主を主語に据えて作られた他動詞構文である。ただし、本論文はこの区別を重視するのではなく、II 型も I & II 型も、その原因がどこにあるのか、あるいは責任性がどの程度あるのかよりも、場の変化（特徴付け）の叙述にシフトしているということを重視している。

- (293) a. 私たちは放火されて、家財道具をみんな焼いてしまった。
cf. 放火犯が火を付けて家を焼いた。
b. 昨日のテロ事件で田中さんは家の屋根を飛ばしてしまった。
cf. テロ実行犯が田中さんの家の屋根を爆薬で飛ばした。

4.7.4 節で紹介したように、天野（1987b）は (291) のような他動詞構文は、あくまで他動詞構文の一つの型であり、主語名詞句とヲ格名詞が全体部分の関係にあり、変化の事態を所有するという意味になっていると分析したが、これ自体は妥当なものである。典型的な他動詞構文から他動性の低下という視点で分析するのか、それとも、典型的な自動詞構文の側から、所有の概念への転換による〈場〉の特徴付けという視点で分析するかという分析のアプローチの違いである。本論文の立場は後者である。後者の分析アプローチの利点は、他の非意図的な事象を含めて統一的に分析できることであるが、そのようなアプローチであっても、モノとモノのエネルギー連鎖をベースにした事態把握を無視することはできないし、無視するべきではない。両者はともに事態把握の重要なあり方なのである。

²⁸¹ 原因が主語名詞句で示された人側にあるのか、外部にあるのかについては、明確に区別されるわけではない。戦争や自然災害などは典型的に外部と認められる場合である。

本論文はⅠ&Ⅱ型、Ⅱ型およびⅢ型の場焦点化他動詞構文が、両側からアプローチの接点になっていると考える。典型的な他動詞構文からのアプローチからは主語名詞句の「有責任性」という事態把握があり、所有の概念からのアプローチからは主語名詞句の「特徴付け」という事態把握があると考えられる。他動性が低下すれば、主語名詞句のもつ「有責任性」は低くなる。そして、限りなくそれがゼロに近づいていった先にあるもの、それが主語位置に来る名詞句を〈場〉として捉えた「場焦点化他動詞構文」になっていると考える。つまり、有責任性という視点から、「特徴付け」という視点にシフトしているというのが本論文の立場である。

「人」とその人の居住する「家」は客観的に見れば、分離可能所有であり、家を人に売することもできる。しかし、3.4.2節の所有の分類で指摘したように、言語の振る舞いは客観的な二者関係とは別に文化、慣習に根ざした心理的な要因が大きく左右する。家や土地を分離不可能所有の文法形式で表す言語も存在する。日本語は分離可能か不可能かを明示する文法形式をもたない。しかし、ここで扱う所有関係に見られる場焦点化他動詞構文は、両者のつながりの強さに基づいているとすれば、心理的には分離不可能所有の扱いになっていると見なすこともできるだろう。つまり、「全体」と「部分」のような不可分の関係として捉えることも可能ということである。(cf. 天野 1987 が規定した「全体部分の関係」)

<状態変化と所有の関係：分離可能所有関係>

- └ (分離可能所有)
- ・モノの状態の変化： モノの属性が変化する
- ・所有関係に注目： 所有者の所有物が p0 から p1 に変化する (→自動詞構文を作る)
- ・所有の変化に注目： →場焦点化他動詞構文を作る

※所有者と所有物の間に一体感がある。身体性の延長

<変化前>

所有者が、「p0 にある/p0 にてある/p0 くある」という所有物を所有する

↓

<変化後>

所有者が、「p1 にある/p1 にてある/p1 くある」という所有物を所有する

それでは、所有者 (N1) と所有物 (N2) の関係ではどのような場焦点化他動詞構文が成立するのかを見て行く。

◆原因：

主語位置に立つ名詞句 (人) の過失が原因になる場合もあるし、台風、洪水、地震、津波、

落雷のような自然現象による場合もある。自然災害に対して人間はどうしようもない存在であるという考えがあり、Ⅰ&Ⅱ型を作りながらも、Ⅱ型で使役主を背景化するのと同程度に有責任性が限りなくゼロに近づく。火事については、失火原因が自分の側にない場合は自然現象と同様に把握される。戦争や紛争も個人の力ではどうしようもなく、事態の成立に巻き込まれるだけという把握になる。

◆変件事象：

N1とN2が物理的には分離可能であっても、心理的に一体感をもつような関係であれば、所有物の変化が所有者の身における変化として把握されやすくなるだろう。その二者の関係には、天野（1987b）が挙げた「人・家」は成立しやすい。家の部分を「人・（家の）屋根／壁」のように特定することもある。居住者の身体の空間的な「延長」として把握されるからだと考えられる。

◆述語：

所有物の変化が所有者の身における変化として把握されやすくなるのは、第一に「消失」の概念である。そこから「消失」と同然の変化、つまり、実質的にはそれがなくなっただと同然と見なせるような状態変化の場合である。たとえば、家であればその家が住まう場所として意味をなさなくなるような変化の場合である。「焼く」「流す」「壊す」などは災害の状況ではよく用いられる動詞である。また「飛ばす」は消失とつながる状態変化である。

以上の点で典型的なⅠ&Ⅱ型の場焦点化他動詞構文を考えると、次のような文になる。

- (294) a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。（天野 1987b）
b. 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。（天野 1987b）
c. 先週の洪水で家を流してしまった人もいたそうだ。
d. 先日の台風で、飛んできた木で家の壁を壊した。
e. 昨晚隣家から出た火事で、二階の寝室を焼いた。

このような人名詞が主語位置に来る場焦点化他動詞構文は、母語話者の直観としてその存在は認められるが、用例を収集するとなると期待されたほど簡単ではない。池上（2006：171-172）が指摘した、事態の捉え方と言語化の好まれる型として「事態そのもの」と「事態の当事者へのかかわり」が関係していると見られる。英語では事実そのものを叙述する場合であっても、日本語では当事者へのかかわりに注目して言語化されることが多い。

- (295) [財布を盗まれたことを届け出て]

- a Someone stole my wallet.
b 財布を盗まれました。（池上 2006：162）

池上はこのような違いを次のように説明している。

英語の話し手は (8a) [引用者註：本論文の (295a)] のように起こった事態だけを客観的に伝えるのがふつうである。しかし、同じような言い回しを使って日本語で報告したとしたら 一直訳すると、「誰かが私の財布を盗みました」と言うことになるから一話し手は事態をまるで人ごとのように受け止めているような感じで、間違いなく不自然という印象を与えるであろう。〈受身〉の形で言語化している日本語の表現 (8b) [引用者註：本論文の (295b)] は、事態そのものよりも、事態の自分とのかかわり—具体的には、その事態によって自分が被害を蒙っているという意味合い—を全面に押し出した言い方になっており、
(…略…) (同上：171)

つまり、ネット上のウェブサイトの日本語を検索すると、(296) のような用例を拾うことができるが、下線部の場合焦点化他動詞文は日本語らしさの点では周辺的だと言える。

(296) 震災で多くの方々の支援を頂戴することができた。震災津波の前年、東久留米市での湧水保全フォーラムに参加した縁で、東久留米市のみなさんは、貨物車のような車に物資を積み込み、三度も大槌に来てくださった。自家用車を流したことを知って、持ち込まれた軽ワゴン車には東久留米市立南町小学校の児童がメッセージを書き込んでいた。この車はやがて、支援や慰問で訪れた人の、いわば芳名帳になった。(経団連の会報より²⁸²)

このような場合は「家財道具を焼かれる」「屋根を飛ばされる」「家を流される」「壁を壊される」のような迷惑の受身（間接受身）が現れるのが日本語らしいのである。ある事態とのつながりという観点から、被害の受け手としてのかかわりを表す「迷惑の受身」、それと反対に利益の受け手としてのかかわりを表す「受益構文（「～てもらう」「～てくれる」など）との枠組みの中で考えれば、本節で扱っている状態変化と所有の関係において作られる場焦点化他動詞構文は、文法形式によって明示的に被害とも受益とも示さない点で、＜中立的＞に事実を叙述する構文と言えるだろう²⁸³。それが、この種の構文の成立のしにくさと関係している可能性がある。このような構文成立上の制約は次節で再び取り上げて論じる。

家に起こる災害と比べて、持ち物との関係はその所有者の有責任性が生じやすい。なぜなら自分のコントロールによってその使用の仕方を変えることができるからである。次の

²⁸² アクセス日：2014年8月2日 www.keidanren.or.jp/kncf/news/data/news_130328_shiryo1-2.pdf

²⁸³ ＜中立的＞な叙述になっていると考える根拠については、4.7.6.2「中立的な叙述としての場焦点化他動詞構文」を参照されたい。

例では、台風や強い風が原因であるが、そのような風の状況で十分な注意を払わなかったという解釈を排除することはできない。その点を考慮すると、(297) の例は I & II 型と言えるかもしれない。

(297) a. 傘の修理をしてくれる所を教えてください

先日の台風で傘の骨を折ってしまいました (知識情報サイト「okwave」²⁸⁴)

b. [帽子を飛ばされないようにするクリップの広告]

ハートクリップ

帽子のお供に！風のいたずらでお気に入り帽子を飛ばしてしまった～！！

なんて経験、おありだと思います。(…略…) そんなときの強い味方です。

(通販サイトより²⁸⁵)

(298) の例では、一見すると典型的な I 型の場焦点化他動詞構文のように見えるが、文脈を見ると主語名詞句の有責任性を表すために「飛ばす」が選択されたと考えられる。「台本の紙が飛ばされた」と言う、それが原因で電車が止ったことに対して無責任な印象を与える。これは使役変化他動詞構文と場焦点化他動詞構文の接点の中でも、かなり前者に近い用例だと言える。事実、場としての「人」がどうなったのかという変化の側面よりは、非意図的ではあるが、何をしたかという側面に焦点が当たっている。

(298) お客さんのいない真夜中に撮影するのは当たり前ですが、JR にロケの許可申請するのはかなり難しいです。以前、旅番組のロケで、一人の技術スタッフが風で台本の紙を飛ばした事が原因で、それを遠くから見た新幹線の運転士が不審物と間違って緊急ブレーキをかけた話がありますから。(個人のブログより²⁸⁶)

また、4.2.4.4 節では事故や災害が発生した場合には、「〈事故・災害〉で〈場〉は…を V」という場焦点化他動詞構文を作る一方で、場が統語上に現れない「〈事故・災害〉で(は)…を V」という構文がニュースではよく用いられることを示し、それを「現場(状況)に埋め込まれる場」と分析した。

(299) その列車の脱線事故で(は) たくさんのけが人を出した。

本節で扱う状態変化の動詞で言えば、火事のニュースで用いられる「焼く」「燃やす」はこのようなタイプの構文を作りやすい。(300) は「火事で(は) ～を焼く」という表現に、(301) では「火事で～を全焼する」という表現になっている。

²⁸⁴ アクセス日：2014 年 8 月 2 日 <http://okwave.jp/qa/q3397021.html>

²⁸⁵ アクセス日：2014 年 8 月 2 日 <http://www.h5.dion.ne.jp/~fishpage/gear/fashion.htm>

²⁸⁶ アクセス日：2014 年 8 月 2 日 <http://ameblo.jp/ryuseinaoki/entry-11729486895.html>

(300) 佐賀県内は 26 日、湿った空気の影響で久しぶりのまとまった雨が降った。杵島郡白石町では、正午までの 1 時間雨量が 39 ミリの激しい雨を記録した。雷を伴った所もあり、唐津市では落雷で民家の一部を焼いた。10 ミリ以上のまとまった雨は今月 6 日以来。唐津市では同日午前 9 時 20 分ごろ、同市鏡の民家に「ドーン」という音とともに雷が落ち、木造 2 階建ての屋根裏約 40 平方メートルを焼いた。けが人はなかった。(佐賀新聞ウェブ版 2013 年 7 月 27 日)

(301) 30 日午前 7 時 30 分頃、愛知県〇〇市〇〇町の無職、〇〇さん (73) 方から火が出ているのを、通行人の男性 (39) が見つけて 119 番した。この火事で、木造 2 階の〇〇さん方をほぼ全焼したほか、焼け跡から女性とみられる遺体が見つかった。(読売新聞 2011 年 3 月 30 日 一部伏字)

「火事で」が現れない場合も少なくない。そして自動詞「焼ける」を使う場合もある。(302) は同じ火事を報じるニュース記事であるが、二紙は「～を焼く」を用い、一紙は「～が焼ける」を用いている。

(302) a. 10 日午後 3 時頃、東京都北区王子の民家から出火、木造 2 階建て住宅約 60 平方メートルのうち約 30 平方メートルを焼き、隣接する住宅 2 棟の一部を焼いた。
(読売新聞ウェブ版 2014 年 9 月 11 日)

b. 10 日午後 3 時ごろ、北区王子 4 の民家から出火、木造モルタル 2 階建ての 1 階部分約 30 平方メートルを焼き、約 1 時間後に消し止められた。
(毎日新聞ウェブ版 2014 年 9 月 11 日)

c. 10 日午後 3 時ごろ、東京都北区王子の木造 2 階建て住宅から出火、1 階部分約 30 平方メートルと隣接する民家 2 棟の外壁が焼けた。
(産経新聞ウェブ版 2014 年 9 月 12 日)

(300) ～ (302) では「焼く」の主語名詞は何だと考えるべきか。「(火事が発生してその) 火が…を焼く」という解釈、つまり原因主語が現れていないという解釈も可能である。実際、英語では ‘fire’ ‘blaze’ を原因主語として明示することができる。

(303) a. Fire destroys one of the Michael Brown memorials in Ferguson
(Washington Post Web 2014/9/24)

b. California wildfires burn tens of thousands of acres, state of emergency declared (Washington Post Web 2014/9/18)

c. The gigantic blaze has now destroyed 10 homes and nearly two dozen other

「この火事で…を焼く」という場合に、英語のように「この火事で（火/炎は）…を焼く」の「火/炎」が隠れていると見ることもできるだろう。しかし、原因主語は日本語の他動詞文としてこなれた表現ではない。そこで、本論文では焦点化された〈場〉が「火事の現場/状況」に埋め込まれており、文脈で理解され则认为。下に示したように、人が〈場〉となる場焦点化他動詞構文の②では焦点化した〈場〉が現れ、その所有物が変化したと把握されるが。それに対して④の「この火事で …を焼く」では、文脈の中で「●●」と「○○」と「所有物/部分」のつながりが理解される。このような事態を指して、〈場〉が「この火事で」と示される現場/状況に埋め込まれていると考えるものである。下に示したように現場に埋め込まれた〈場〉が「●●」や「○○」とまったく同じものを指している場合もあるだろう。しかし、漠然と「その現場」といった〈場〉がイメージされている場合もあると考えられる。

<現場（状況）に埋め込まれた場>

④の は埋め込まれている〈場〉を示している。

破線は各名詞句が文脈でリンクしていることを示している。

- ① 昨夜の火事で、
田中さん の 母屋が焼けた。
〈所有者〉 〈所有物〉 変化：p0→p1
- ② 昨夜の火事で、田中さんは (自分の) 母屋を焼いた。
〈所有者：場〉 〈所有物〉 変化：p0→p1
- ③ ●●から出火し、
…この火事で、 (○○の) 一階部分が焼けた。
〈全体〉 〈部分〉 変化：p0→p1
- ④ ●●から出火し、
…この火事で、 は (○○の) 一階部分を焼いた。
〈埋め込まれた場〉 〈全体〉 〈部分〉 変化：p0→p1

以上、人の場合の所有関係を見てきたが、I & II型の場焦点化他動詞構文は、自然現象や災害を原因として表示した場合には比較的成立しやすいと言えそうだが、その場合であっても、日本語は「事態の当事者へのかかわり」を示すことを好む傾向があるため、他動詞構文の全体から見れば決して生産的ではない。

それでは、人間以外の植物や物の所有関係は場焦点化他動詞文が成立するだろうか。そもそも植物や物の場合、分離可能所有が成立するののかという問題があるが、とりあえず「そこにそのモノがあることがその場の特徴付けになっている」場合に、それを所有関係と呼ぶとすれば、成立し得るという前提で話をすることができるだろう。4.5節で論じたように設置動詞はⅡ型の場焦点化他動詞構文を作る場合がある。それが成立していることを前提にして、設置物が自然災害で失われたり、損壊したりする場合に、Ⅰ&Ⅱ型の場焦点化他動詞構文が成立するかをしてみる。どちらも（a）の設置動詞の用法より（b）の消失変化事象を表すほうが、許容度が低下する。

(304) a. ?ここにある木は観察用に一本一本巣箱を取りつけている。

b. ??/*台風でここにある木は巣箱をすべて {壊した／飛ばした}。

(305) a. ここに植えられている植物はみな、茎のところに小さなかわいいネームプレートを下げている。

b. ??昨晚の突風でバラの花は茎に下げていたネームプレートをすべて飛ばしてしまった。

無生物の場合（306, 307）はどうだろうか。輸送手段が主語位置に来る場合は、（a）の設置動詞の用法も（b,c）の消失変化の事象を表す用法もⅠ&Ⅱ型の場焦点化他動詞構文が成立しやすいようである。植物の場合と比べて状態変化の場焦点化他動詞構文はそれほど許容度が低下しない。

(306) a. そのトラックは海外向けの電子部品を積んでいる。

b. そのトラックは曲がり角で荷物を落とした。

c. そのトラックは走行中に火災が発生し、積荷を全て焼いてしまった。

(307) a. その船は日本向けのコンテナを積んでいる。

b. ?嵐でその船はほとんどのコンテナを海に流してしまった。

c. ?その船は、落雷による火災で積荷の大半を焦がした。

建物の場合（308～310）はどうだろうか。（a）の設置動詞の用法より容認度が落ちるが、（b）（c）の消失変化の事象を表す用法は成立しないわけではないようである。

(308) a. その家はクリスマスのイルミネーションを飾っている

b. ?台風で、その家はイルミネーションを全部 {壊した／飛ばした}。

c. ?落雷で、その家はイルミネーションを全部焼いてしまった。

- (309) a. そのビルは屋上に巨大なアンテナを立てている。
b. ??昨日の地震でそのビルは屋上のアンテナを大きく傾けた。
c. ??昨日の突風でそのビルは屋上のアンテナを真っ二つに折った。
- (310) a. そのビルはいつも屋上にセールを知らせるアドバルーンを上げている。
b. ??台風で、そのビルは屋上のアドバルーンを全部飛ばした。
c. ??落雷で、そのビルは屋上のアドバルーンを全部焼いた。

このように移動事象が読み込まれたⅡ型の場合焦点化他動詞文が成立する状況において、それを失うような状態変化をⅠ&Ⅱ型の場合焦点化他動詞構文で叙述すると、全体に許容度が低下するか非常に不自然に感じるようである。物の場合は、その物と別の物との所有関係をどの程度その場の特徴付けとして把握できるかが構文成立の可否・許容度を左右していると考えられる。そして、そのような把握は人の場合と比べると、はるかに難しいと言える。このようにⅠ&Ⅱ型の場合焦点化他動詞構文は、他動詞構文の全体から見れば決して生産的ではない。生産的ではないながらも、このような構文が存在する意義は何か。それを次節で考えることにする。

4.7.6 場焦点化他動詞構文の成立の制約

広義の状態変化として「発生」「消失」「存続」「移動」などを含めれば、4.2 節か 4.6 節で論じたようにⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型の場合焦点化構文が作られることを見てきた。ところが、狭義の状態変化に限定すると、4.7.3 節でみた「主体・側面」の関係では、人、植物、物とも構文が成立したが、「全体・部分」の関係では、人、植物では身体部位、構成部分を目的語にした構文がいくつか成立するが、物では極端に生産性が低下した。そして「人間関係」は当然のことながら人のみで成立し、「(分離可能) 所有関係」では全体的に生産性が低かった。本小節では、場焦点化他動詞構文の成立の制約を考え、その後なぜこのような構文が存在するのか、その意義を考えてみたい。

4.7.6.1 成立の条件と制約

分析にあたって、焦点化される場を「人」「植物」「物 1」「物 2」に区別する。物 1 は動力がついて自ら動くものや装置の類である。物 2 はそれ以外のもので単体では動くことができない無生物である。場焦点化他動詞構文は、基本的にその〈場〉に存在するモノがその〈場〉を特徴付けると把握された場合に所有の概念へと転換して作られる構文である。したがって、その成立条件として、そのような場の特徴付けとしての変化事象が把握されるかどうか挙げられる。それは次のように規定できる。

◆成立条件と制約

<状態変化における場焦点化他動詞構文の成立条件>

〈場〉の「側面」「部分」「人間関係の相手」「所有物」の変化が、〈場〉である自身の変化として、概念化者によって主体的に把握されなければならない。つまり、両者の一体性が強いと把握されなければならない。

広義の所有関係における所有者と被所有者の一体性は次の順番になっていると考えられる。「主体・側面」とは本来分離されていないものを概念上分離したものである。「全体・部分」は分離不可能ではあるが、通常現実の空間においてその範囲が確認できるものである。「人間関係」は人が誕生したり、組織に所属したりすることによって付与される属性であり、個体としては独立して存在するものの、この抽象的な関係は一度成立したら「切っても切れない」ものであり一体性は高いとみなされる。ただし他の概念と同列には扱えないので下では（ ）に入れてある。

<所有関係における二者の一体性>

分離不可能所有

分離可能所有

「主体・側面」 > 「全体・部分」 > 「所有者・所有物」
(人間関係)

この条件と階層によって次の制約①が規定される。

<制約①>

分離不可能所有の「側面」は場の変化としてもっとも把握されやすいが、分離可能の「所有物」はもっとも場の変化として把握されにくい。

次に人とそれ以外の違いについて考える。3.4節で論じたように所有の典型は人を主語位置に据えて分離可能な所有物の（永続的な）関係である。このような人優位性を踏まえると一体性を有意義なものとして主観的に把握されやすい順番は次のようになるだろう。

<所有の典型と周辺>

「人」 > 「植物」「物1」 > 「物2」

この階層を踏まえると、次のように第二の制約を規定できる。

<制約②>

人優位の原則にしたがって所有の概念への転換は、「植物」「物1」では低下し、「物2」では著しく低下する。

次に前節で紹介した日本語の事態把握の好まれるスタイルについてである。池上(2006)が指摘したように、日本語は出来事を語る場合、そこに当事者の関与が認められるならそれを積極的に言語化する傾向が強い。このことから次のように第三の制約が規定できる。

<制約③>

人名詞句が主語位置に来る構文では、事態への当事者の関与の在り方が「間接受身」や「受益態」(あるいは「使役態」)などで言語化されることが好まれるため、場焦点化他動詞構文の生成には、事態を<中立的>に叙述するという動機付けが必要になる。

最後に「状態変化」の内容の制約について考える。存在から所有の概念への転換は、静的な状態を基本として、そこに発生事象、消失事象、存続事象、移動事象が原因として読み込まれて、場がモノやイベントを所有する状態へ変化する、またはその逆に非所有の状態へ変化するという把握となる。そして「状態」は「存在」のメタファー的な拡張によるものと考えた。これを踏まえれば、状態変化事象が原因として読み込まれて、所有の概念に転換する場合においても、発生事象または消失事象とのつながりで読み込まれるほうが、基本的な所有への概念転換に近いと言える²⁸⁷。そこで次のように四つ目の制約を規定できる。

<制約④>

状態変化が「発生」あるいは「消失」の概念との結びつきが強くなければ、状態変化から所有の概念への転換は起こりにくい。

制約④を少し補足しておく。状態変化を表しながら、実質的に発生または消失の意味を表している場合がある。この場合の消失にマイナス評価の価値判断は入らない。中立的に発生に対立する概念として扱う。例えば「木が実を落とす」は「実の消失」であり、「人が帽子を飛ばす」は「帽子の消失」である。次に「発生」を元にそこから続く現象は「成長」である。状態変化がこの成長過程を表す場合は、「発生」の拡張事象と見なすことができる。「芽を伸ばす」「花を咲かせる」などがそれにあたる。「消失」の拡張事象とは、状態変化によってそれが「なくなったと同然」の状態になることである。「焼く」「折る」「壊す」「砕く」など多くの損壊を表す動詞がこれに該当する。また「死」とのつながりで「枯らす」もここに含まれる。<制約④>はこのような拡張事例にあたらない場合には状態変化事象において場焦点化構文が成立しにくいことを説明するが、最終的には冒頭の<成立条件>に合致すれば成立する。結局「なんでもあり」ということになると批判を受けそうだが、人間の外界の認知が固定化されていないことの裏返しである。最終的には概念化者の主体的な把握によるということになり、成立するかしないかの線引きを所与のものとして規定

²⁸⁷ 存続事象は消失が起こらないという否定の概念であり、移動事象は発生事象に還元できる。

することはできない。

◆分析

以上の〈成立条件〉と〈制約①～④〉の規定を踏まえてこれまで観察してきた用例を見直してみる。見直しにあたって石田（1999）の分析を批判的に検討することにする。石田は「行為者解釈を持たない主語」がどのようにして生まれるのかを、語彙概念構造に基づいて分析した。石田は影山（1993, 1996）が示した CONTROL と CAUSE の意味述語の違いに注目し、前者は非行為者を主語にはとらず、後者のみが非行為者を主語としてとっている。その根拠は、「CAUSE の主語に関する選択制限が CONTROL の動詞よりも緩やかであることに起因する」（同上：27）からだとし、非行為者主語は元々働きかけ動詞の目的語に現れるべき「被行為者」であり、それが上のような緩やかな制限のせいで主語位置に来ていると分析される。石田は「分離不可能所有関係に基づいた物理的な構造を備えている場合、原因からの働きかけは所有物を含む所有者が受け、その所有物のみが増減する、というような関係が成立する余地が生じる。」（同上：27）と認めながらも、最終的には「上位事象中において働きかけを受ける実体が、所有関係を前提として、下位事象中の変化する実体からは独立して文に現れたものと考えることができる。言い換えれば、働きかけを受けかつ何らかの変化をきたすのは目的語として現れる所有物のみであり、主語として現れる所有者は働きかけを受けるのみで変化しない。」（同上：27）と結論づけている。つまり「非行為者＝被行為者＝働きかけは受けるが増減はしない」という分析である。この点で、主語名詞句に立つ〈場〉の変化であるとする本論文の分析とは異なる。

使役変化動詞の意味構造に CONTROL と CAUSE の二つの関数を認め、それに基づいて主語名詞の性質を判定することはいいとしても、意味構造は所与のものとして客観的に存在するものではない。外界とのインターフェースの役割を担っている鋳型であり、根本的にはその動詞の表す概念は事態の把握の在り方と結びついている。したがって、事態の把握の在り方そのものに注目する必要がある。そして、概念構造と統語構造とのリンキングも所与のものとして考えられており、なぜ受け手であるはずの名詞句が非行為者として主語位置に来るのが説明されていない。この二点の問題があることを確認した上で、行為者主語かどうかの判定の対象に挙げられた全部で 18 の例文について、本論文の分析を示したい²⁸⁸。石田（1999）は次の（a）（b）は非文で、同じ動詞でも（c）と（d）は問題なく成立している。

²⁸⁸ 石田（1999）は、「～が～を V」という現象文に限定して分析している。このようにガ格主語に限定しているため、本論文で提示する例文で有題文の「～は」となるものは、文は石田の意図しているところではないと考えられる。しかし、場焦点化他動詞構文はデフォルトでは「～は」になり、これが構文上の要請によって「～が」にもなると考える。したがって、本論文の立場からすれば、ここで「～が」のみに限定する理由はない。そして、石田の主張する「非行為者主語をもつ他動詞文」が本論文の主張する場焦点化他動詞構文とすべて一致するわけでもない。ここで試みるのは、石田が判定した文の成立の可否をたたき台に、本論文の分析アプローチでどのように統一的に説明できるかを示すことである。

- (311) a. *桜が風で枝を折った。
 b. *コップが床に落ちて縁を割った。
 c. 健太が事故で腕の骨を折った。
 d. 健太が事故で額を割る。

その理由を「折る」「割る」は **CONTROL** の主語をとり、デ格名詞句は「背景的状况のデ句」しか許さないため、「原因のデ句」をとっている上の文は非文になるとしている。確かに無生物主語の場合、「風で～を折る」や「落ちて～を割る」のように直接的な原因が明示されていると不自然になる²⁸⁹。本論文では元々自動詞構文で表現される事態が所有の概念へと転換し、「z の y が自動詞構文」から「z が y を他動詞構文」となると考える。この時の動詞の形態は使役変化他動詞と同じになると規定した。つまり、形態上は「折る」や「割る」が現れており、「原因のデ句」と本来は共起しないものであっても、元々は「折れる」「割れる」の原因と把握されていたものが、場焦点化他動詞文になっても現れていると考えることができる。

本論文では次のように分析される。(311b)は「全体-部分」の関係で<制約①>では二者の一体性の把握は中程度に位置しているが、<制約②>によって「物 2」は有意義な一体性の把握が最も低いとされる。そのため成立しがたいと分析できる。「人」であれば(311d)のように、あるいは「階段から落ちて額を割った」のように成立する。一般的に、「物 2」の状態変化は「所有者と所有物」はもちろん「全体-部分」の関係であっても作りにくい。(312)のように「主体-側面」では成立する。

- (312) a. テーブルから落ちて、そのコップは原型をとどめないほど形を変えた。
 b. その特殊素材のコップは、お湯を入れると、みるみる色を変えた。

(311a)は「植物」の場合で、「全体-部分」である。<制約①②>ではどちらも中程度の制約を受ける場合であり、「折る」という状態変化は消失事象につながる動詞なので<制約④>に該当する事例でもない。筆者はこの文が非文法的(*)だとは判断しないが、不自然さがあるとすれば、それは<成立条件>に合致しないと判定されるからだろう。消失部分を具体的に説明するか(313a)、場の特徴付け(所有から非所有への変化)がよりイメージできる文脈があれば(313b)、許容度は上がるだろう。

- (313) a. ?台風による突風で、その桜の木は太い枝を根本から折った。
 b. その桜の木は見事な枝ぶりで近所では知らぬ人がいないほど有名だった。
 ところが、昨日の台風による突風で、その枝を根本からポキッと折って

²⁸⁹ デ格名詞句が原因なのか背景的状况なのかと、動詞が **CONTROL** 主語をとるのか **CAUSE** 主語をとるのかのつながりについては、石田の分析は妥当だと思われる。しかし、本論文の観点からすれば、それが文の成立の可否を決定づけているとは考えない。

しまったのだ。

石田(1999)は上の(311b)の「コップ」は成立しない例として上げたが、次の(314a)は同じ無生物主語でありながら、非行為者主語として認めている。また、(314b)は植物の例であるが、やはり主語名詞がいかなる場合でも働きかけの力になっているとは認められないとして、非行為者主語として認めている。

- (314) a. 風ぐるまが風で羽根をまわした。
b. すすきが風で穂を揺らした。

この二つの文が非行為者主語の他動詞文を作っていることは異論がない。これは本論文で言えば、I & II 型の場合焦点化他動詞構文に相当する。なぜ(314)は成立するかについては、次のように分析される。(314a)は「全体-部分」の関係という点では上のコップと同じだが、コップは「物2」で、風ぐるまは「物1」である点で異なる。「物1」は装置であり、自律的に変化を生じるような構造をもつ。つまり、風が吹けば回るという構造を持つ装置なのである。さらに、「回る」という変化は、その物がもつ機能を発揮しているという点で、〈場〉全体の変化であると認められる。そのため、最終的に〈成立条件〉に合致し、構文が成立すると分析される。このような「物1」の扱いを受ける装置であれば、場合焦点化他動詞構文は成立しやすい。

- (315) a. 騒音計は、工事現場の前でその針をいっぱいまで振った。
b. 万華鏡は、回すたびに、極彩色の模様を見せた。

(314b)は植物で、「発生」「消失」およびその拡張事例ではないが、「すすき」の姿として特徴付けとなる動きとして把握されるため、「～を揺らす」という文が成立すると分析される。同じ「全体-部分」の関係であっても、〈制約②〉にしたがって「物2」では特徴付けの文脈が詳しく書かれていないと、成立しにくい。

- (316) a. ??/*台風で、そのビルは看板を揺らしている。
b. ??東京タワーは、突風で先端の避雷針を揺らしている。

植物に関するものとして石田(1999)は次の九つの例を挙げている(311a, 314bを除く)。例文の先頭にある#と?は原文のままで、#は許容度が低下することを意味している。

- (317) a. 桜が風で葉を散らした。
b. 杉が風で花粉を飛ばした。

- c. 秋になり、木々が葉を染めた。
- d. 春になり、梅がつぼみを付けた。
- e. #リンゴの木が風で実を落とした。
- f. #トウモロコシが日照りで葉を枯らした。
- g. ?桜が風で葉を飛ばした。
- h. ?松の木が風で枝を動かした。
- i. ?タンポポが溢れ出た水で綿毛を流した。

石田は、(c) (d) の「染める」「付ける」は CONTROL の主語であり、「自ら事象を展開する「働き手」としての解釈ができる」として非行為者主語ではない（意図性のない行為者主語）としている。本論文ではこのような現象は、植物に内在する自律的なメカニズムによって発生する変化事象であると考ええる。したがって、石田のいう非行為者主語でないことは、場焦点化他動詞文が成立しないことを意味するわけではない。本論文では、「植物」で「全体-部分」の関係にあり、(c) は発生事象の拡張事例である成長による場全体の変化、(d) は発生事象による場全体の変化として把握され作られた場焦点化他動詞構文であると分析される。

石田は、(a) について自然の落葉ではないので、主語とは別の働きかけが働いていると想定しなければいけないとして、この文の主語を非行為者主語と認定している。つまり、(c) (d) のように内部の自律的な活動によるとは考えられないからである。(b) も判断が難しいとしながらも、植物本来に備わっている機構であると考えて、非行為者主語には含めていない。本論文はこの自然な落葉や花粉の放出は I 型であり、原因が外部にある場合を I & II 型としたが、その区別自体を重要視はしていない。どちらにしても、〈場〉である植物全体の変化事象として「葉／花粉を所有する状態」から「所有しない状態」への変化として把握されることを重要視する。したがって、これは「植物」で「全体-部分」の関係で、消失事象と状態変化が関係づけられて成立した場焦点化他動詞構文だと分析される。

次に、石田が許容度が低下すると判断した (e) (f) について考える。許容度が低下する原因については、「非行為者主語は二重意味役割となることを嫌う」（同上：29）としている。行為者主語は「行為者」と同時に「起点」であつてもかまわないが、「非行為者」は「起点」であることを嫌うというのだが、それはあとからつけた理屈のように思われる。「彼は財布をなくした」は「非行為者」かつ「起点」であり、まったく問題ない。さらに石田は「枯らす」という状態変化も同様だと指摘しているが、どのような点で同じなのか十分説明しているとは思われない。本論文では、(e) (f) も「植物」で「全体-部分」の関係で、前者は消失事象、後者はその拡張事例で消失に相当する変化事象として把握され、〈場〉としての植物全体の変化として問題なく成立すると分析される。不自然さがあるとすれば、それは〈成立条件〉に合致しないと判断されるためであり、文脈があればまったく問題なく解釈されるだろう。

次に石田が‘?’を付けた (g) (h) (i) について考える。石田は‘?’の理由として、「散らす」は概念構造において MOVE だけをもつが、「飛ばす」「動かす」「流す」は PATH (経路) の意味述語をもつからだ指摘している。「所有者も、少なくとも事象の最初期の段階において所有物とともに働きかけを受ける、と見なしても、その一瞬後には働きかけは経路をたどり離脱していく所有物に向かってしまうわけで、その意味において非行為者らしさは低い」(同上: 32) と説明している。上で紹介した非行為者主語は「起点」の意味役割と二重になるのを嫌うという点と、焦点が離脱していく (元) 所有物に移るという二点で不自然になると分析しているようである。筆者は、石田の主張する語彙概念構造のタイプと非行為者主語の文とのつながりについて判断はできないが、文の成立の可否の点で言えば、(g) (i) は (318) のように「葉が飛ぶ」「綿毛が流れる」という状況がしっかり描写され、<成立条件>に合致するような文脈があれば、成立すると思われる。本論文の分析では、どちらも消失事象における場焦点化他動詞構文に相当する。

(318) a. 週末に葉桜の鑑賞を楽しみしていたのだが、公園の桜は昨晚の嵐でほとんどの葉を飛ばしてしまい、無残な姿になっていた。

b. きのうまで公園の片隅に肩を寄せるように集まって咲いていたタンポポが、そろそろ綿毛を飛ばそうかという時期になっていたのに、昨晚の大雨で用水路から溢れ出た水でその綿毛を流してしまい、茎だけになっていた。

また、(h) については、「風で松の木の枝が動く」という事象において、それを〈場〉(= 松) の特徴付けとする動機付けがそもそも乏しい。したがって、この三つの例の中では<成立条件>にもっとも抵触するために不自然になると分析される。

最後に石田が挙げた人名詞が主語位置に来ている例を見る。

(319) a. 健太が風で石灰の粉を散らした。

b. 早紀が風で帽子を飛ばした。

c. 健太に冷やかされて、早紀が頬を染めた。

石田自身も指摘している通り、デ格名詞句は多義的で、(319a) は風を利用して「粉を散らした」という解釈も可能であるが、ここでは非意図的な事象であるという前提で考える。石灰を取り出したときに、突然風が吹いてきて、石灰が飛んでしまったという事象である。これは (319b) の「帽子を飛ばす」とはやや性質が異なる。4.7.5.2 節で紹介した「スタッフが風で台本の紙を飛ばす」と同類で、〈場〉としての人の変化よりも、非意図的ではあれ、その人が何をしたかという側面に焦点が当たっている。したがって、これは場焦点化他動詞構文と使役変化他動詞構文との接点よりも後者の側に位置すると言える。そのような解釈を受ける要因は、人と石灰の関係である。たまたま所持していた物とのつながりに一体

性は感じられない。つまり本論文の提案する〈成立条件〉を満たさないということになる²⁹⁰。一方 (b) の帽子の場合は、「帽子あり」の状態から「帽子なし」の状態への変化が、人の姿の特徴付けとして有意義だと把握されるので、場焦点化他動詞構文が成立すると分析される。先の「松の枝が動く」「すすきの穂が揺れる」という状況もそうであったが、何をもって「特徴付け（として意義）がある」と判定されるのかについては、明確な答えはない。これは元々概念化者の主体的な事態把握に基づくものだからである。しかし、共同体で同じ言語を用いて生活を営む以上はある程度共通した把握の在り方というものはあるだろう。「帽子を飛ばす」という事態と「ハンカチを飛ばす」「(取り出した) ティッシュを飛ばす」を並べてみたときに、「風で〇〇を飛ばした」が文脈の助けなく受け入れられる程度に差があるとすれば、それは私たちが経験で得た知識に負うところが大きいからだろう。慣用化されれば、文脈なしでも許容される文があることは確かである。「すすきが風で穂を揺らした」で、穂を揺らす動きに「すすきらしさ」を感じ取ることができるのは、一種の文化的な刷り込みがあるからかもしれない。柳やすすきが揺れる様がこの植物の「らしさ」に関する情報として刷り込まれている。そのため、そのような動きをすることが、すすきという〈場〉の特徴付けとして把握される。その一方で松の木において、「枝が動く」ことで「松の木らしさ」あるいはその時の松の木の「特徴付け」を感じ取ることではない。

とはいえ、動詞そのものがもつ意味が文の成立の可否に影響を与えないわけでもない。動詞の表す概念の許容性（拡張性）と事態把握の在り方の相互作用で最終的には決まると言えるだろう。そもそも「何かが原因で木の枝が動く」とはどのような現象を指しているのか。「動く」とは対象物全体の位置移動という点では状態変化であるが、対象に焦点を当てて叙述することが強く求められる動詞だと言える。4.9 節の漢語サ変動詞の分析では、類似した動詞でも場焦点化他動詞構文が成立しないものがあることを確認するが、同じ消失現象であっても「その会社は昨晚の火災で建物を全焼した」と「その会社は昨晚の爆発で建物を全壊した」では、後者の許容度は非常に低い。それは「全壊する」という動詞が〈場〉を背景化したままモノの変化そのものに焦点が当たりやすく、〈場〉（全体と部分または所有者と所有物とで関連付けられる人を含む）を中心としたモノの二者関係の事態把握への転換が起こりにくからだと考えられる。「動く」という動詞の概念もそのような側面があるため、全体と部分の関係であっても、なかなか〈場〉全体の変化として把握しにくいと考えられる²⁹¹。「その松は強風で折れんばかりに枝をしならせていた」のように、〈場〉全体の状況として語りやすい動詞であれば、「木と枝」の関係であっても比較的許容度が上がるのではないだろうか。

(319c) は「全体-部分」の関係で、心理状態の変化が〈場〉である人の変化、つまりその人がどうなったのかという事態の把握が言語化されていると分析される。石田はそのよ

²⁹⁰ 後の 4.8.2.1 節で「人が釣り糸を垂れる」の分析も参照されたい。石灰の粉が散る中にたたずむ健太の姿が一つの情景として語られる状況であれば、場焦点化他動詞文として成立することはあり得る。

²⁹¹ 「地震で家の家具が動いた」状況で、それを家の変化として「地震で家は家具を動かした」とは言いにくい。

うな事態が生じたのは、主語名詞の人がそれを防げなかったという主体の関与が排除できないという点を指摘しているが、本論文はそのような関与の有無および程度にかかわらず、〈場〉としての人の変化として把握できるかどうかが重要であると考え。したがって、非行為者主語の他動詞文と場焦点化他動詞構文は必ずしも一致するわけではない。

以上で、石田の挙げた例文を利用して本論文の分析がどのようなものを整理した。重要なのは、構文は動詞の概念構造という固定した意味の構造に支配されているのではないということである。概念構造はあくまで外界の把握の鋳型であり、外界の把握は主体的な見方で変化するということである。モノの変化に注目するのか、そこにあるモノの変化を〈場〉の変化として把握するのか、使役主を含めた使役変化全体に注目するのかという事態の把握の在り方と構文のタイプを結び付けて分析することが必要であると主張するものである。

4.7.6.2 中立的な叙述としての場焦点化他動詞構文

前節で状態変化の場焦点化他動詞構文の制約③として次のように規定した。

<制約③> (再掲)

人名詞句が主語位置に来る構文では、事態への当事者の関与の在り方が「間接受身」や「受益態」(あるいは「使役態」)などで言語化されることが好まれるため、場焦点化他動詞構文の生成には、事態を<中立的>に叙述するという動機付けが必要になる。

これは、「空襲が原因で田中さんの家が焼けた」という事象が、間接受身で「田中さんは空襲で家を焼かれた」と表現されること、あるいは「美容院で美容師が客の花子の髪を切った」という事象が、受益態で「花子は美容院で髪を切ってもらった」と表現されることなしに、前者は「田中さんは空襲で家を焼いた」²⁹²、後者は「花子は美容院で髪を切った」²⁹³という構文によって言語化されることを指して、<中立的>と呼ぶものである。

日本語は事態を客観的に叙述することももちろん行われるが、その事態への関与者にとってなんらかの利害関係があると認められた場合、それに敏感に反応して構文に反映される。その代表的なものは次に示した受益構文(a,b)と迷感受身(c)である。

- (320) a. 太郎はわたしに本を読んでくれた。
b. わたしは太郎に本を読んでもらった。
c. わたしは太郎にこっそり本を読まれた。

²⁹² これは先に 4.7.5～4.7.6 節で場焦点化他動詞構文として分析された天野(1987b)の状態変化主体の他動詞文である。

²⁹³ これは後の 4.10.節で場焦点化他動詞構文と使役構文の融合として分析される佐藤(1994)の介在性の他動詞文である。

三つの文はどれも「太郎が本を読む」という事態を表しているが、「わたし」が利益を受けたと把握される事態では受益構文が、「わたし」が迷惑を受けたと把握される事態では迷惑受身が使われる。「太郎がわたしのために本を読んだ」「太郎がこっそり私の本を読んだ」という文は文法的にまったく問題はなく、状況によってはこれらも用いられるが、好まれる表現は(320)の構文だと言える。このような事情を踏まえて、場焦点化他動詞構文による<中立的>な叙述を次のように規定しておく。

<場焦点化他動詞構文による中立的な叙述>

ある変化事象を叙述するにあたり、事態に関与する人の利害関係に焦点を当てずに、変化が発生する〈場〉として把握される人が、結果的にどのような変化結果を所有するようになったのか、その変化をの有様を叙述することである。

利害関係の視点が叙述に入り込むことをモノあるいはイベントと〈場〉の二者関係の概念化の視点から分析すれば、概念化者(話者)が事態に臨場して、そこに立つ者の視点から事態を把握することによって生まれるものだと言える。現場に臨場することによって、設定された〈場〉の領域におけるウチとソト区別が強く意識され、他者の〈場〉に依拠して自分が関与する事態が発生することについて、その依拠性の在り方によって迷惑とか受益といった概念が生まれると考える。逆に言えば、このような事態把握にならないように、場焦点化他動詞構文では述語の動詞が無標のまま(ヴォイスの接辞を付加せずに)用いられるのである。構文的なヴォイスと場焦点化他動詞構文の比較分析は4.10節および4.11節を参照されたい。

4.7.6.3 事象タイプとのつながり

4.7.5節で人間関係、(分離可能)所有関係における状態変化が場焦点化他動詞構文として言語化される場合、目の前で起きていることや直近のことに用いると不自然になることを指摘した。類例として(b)～(e)を追加しておく。(e)は筆者の語感では不自然には感じられないが、人によっては(d)と同程度に不自然に感じるかもしれない

(321) a. 再掲＝(284)

[登校してきたBが元気がないので、AがBに尋ねる]

A「元気ないけど、何かあったの」

B「実は…、昨晚{祖母が亡くなった／??祖母を亡くした}の。」

b. ??山田さん_i さっき火事で家_iを焼いたらしいよ [被害者の解釈]

c. ??山田さん_i さっき土石流で家_iをまるごと流したよ。[被害者の解釈]

d. ?あ、あの人_i 風で傘_iの骨を折ったよ。[被害者の解釈]

e. (?)ほら、山田さん_i 風で帽子_iを飛ばしたよ！ [被害者の解釈]。

同じ人名詞句が主語位置に来ていても、「全体-部分」の関係の場合は上に見ような制約は働かない。(322) は目撃した人がその場で発話する内容としてまったく問題ない。これは (321d, e) が他の例と比べて不自然さが小さいこととつながっている。(321d, e) は分離可能の所有関係ではあるが、所有者（人名詞句）と所有物が現場で一体として把握できるからである。つまり、「全体-部分」の关系到近づいているため許容度が上がると考えられる。

- (322) a. ほら、山田さん、殴られて歯を折ったよ。
b. あ、田中さん、火の粉をかぶって、髪を焦がしたよ。

次の例は実際に起きた事故を報じるニュース記事である。「全体-部分」の関係で、負傷した本人が 119 番通報したとき、「足を切断した」と言っている。そして、事故を客観的に説明するところで「足が切断された」が使われている。

- (323) 26 日午前 4 時 10 分ごろ、〇〇市の JR 〇〇駅にいる男性から携帯電話で「電車にひかれて足を切断した。救急車をお願いします」と 119 番通報があった。市消防署の救急隊が駆けつけたところ、〇〇駅 1 番ホームに約 6 時間前に回送されて停車していた電車の下に、〇〇市内の 50 代公務員男性が、左足のひざから下がほぼ切断された状態で倒れているのが見つかった。(朝日新聞 WEB 版 2014 年 3 月 26 日 一部伏字処理)

(321) で不自然 (??) だと判定された文は、それぞれ次のように変化の対象（「変化した人間関係の相手」「変化した所有物」）に焦点を当てて表現するのが一般的である。1) は所有関係にある二者を一つの句で表現したもので、2) は分離して表現したものである。

- (324) a. [登校してきた級友が元気がないので]
A 「元気ないけど、何かあったの」
B 「実は…、昨晚祖母が亡くなったの。」
b. 1) さっきの火事で山田さんの家、焼けたらしいよ。
2) 山田さん_i、さっき火事で家_iが焼けたらしいよ。
c. 1) さっき土石流で山田さんの家が流されたよ。
2) 山田さん_i、さっき土石流で家_i{が／を} まるごと流されたよ。

人間関係や分離可能な所有関係の場合焦点化他動詞構文では、「主体-側面」や「全体-部分」や「現場で一体化して認識される所有者と所有物」の関係とは異なり、〈場〉として把握され主語に立つ人名詞句そのものが直接的に目に見える形で変化したわけではない。変化し

たのは、人間関係の相手の変化（例えば「その相手の死」）あるいは所有物の変化（例えば、その人の家の焼失）によるその人の特徴付けである。つまり、「父や母をもつ人」から「父や母をもたない人」へ、あるいは「(居住可能な) 家をもつ人」から「(居住可能な) 家をもたない人」へとその人の特徴付けが変化したのである。このような変化は外部から観察されるものではなく、その人の経験による特徴付けの変化であり、一種の〈履歴〉の変化と呼べる叙述のタイプである。

そこで、場焦点化他動詞構文が表す叙述タイプを整理しておきたい。時間軸に沿って展開する事象叙述なのかそれとも属性叙述なのかという事象タイプの違い²⁹⁴ が文法現象とつながっていることはよく知られている²⁹⁵。本論文のこれまでの分析でも、イベントがある〈場〉に発生するような変化の事態を場焦点化他動詞構文にすると不自然になる場合があるが、その場合であっても、その〈場〉の特徴を述べる文にするとその許容度が上がることを確認した。（例えば、4.2.4 節の「災害を発生する現場」という表現）

<場焦点化他動詞構文の生成と叙述のタイプ>

- 動機付け：〈場〉が、そこに存在するモノによって特徴付けられる
- 概念転換：存在から所有の概念への転換
- 構文生成：場焦点化他動詞構文（所有 B）／参照点構造自動詞構文（所有 A）
- 拡張：所有の概念を鋳型として静的な事象把握から動的な事象把握へと拡張

表 4.11 所有と事象タイプによる場焦点化他動詞構文の分類

静的な所有	① 〈場〉の恒常的状態の叙述		② 〈場〉の一時的状態の叙述
動的な所有 非所有⇔所有		③ 〈場〉の履歴変化の叙述	④ 〈場〉の状態変化の叙述
	属性叙述	★履歴叙述	事象叙述
	叙述のタイプ		

表 4.11 で静的な所有かつ属性叙述を表す①が所有の基本概念である。そして所有の概念の鋳型によって動的な事象が把握されると④へと拡張し、その結果状態を表すのが②または③となる。本論文では「★履歴叙述」という項目を独自に立て、事象叙述と属性叙述の

²⁹⁴ Carlson (1977) の stage-level predication vs. individual-level predication. Kratzer (1995) など。
²⁹⁵ スペイン語の二つのコピュラはこの叙述タイプの違いによって使い分けられる。本質的な特性を表すとされる ‘ser’ と偶発的な性質を表すとされる ‘estar’ は次のような形容詞文で区別される。(i) Juan es inteligente. [es=ser の三人称単数現在形] (フアンは聡明だ) (ii) Juan está desnudo. [está = estar の三人称単数現在形] (フアンは裸だ) また、英語の there insertion では、事象レベルの形容詞は現れるが、属性レベルの形容詞は現れない。(iii) There are firemen available. (出動可能な消防士たちがいまそこにいる) (iv) *There are firemen altruistic. (利他的な消防士たちがいまそこにいる) (例文は Kratzer1995:125 より。日本語訳は筆者による) そして、影山 (2007: 28-29) では、日英で事象叙述では成立しない受身が、属性叙述になれば成立することを指摘している。影山は (vi) (viii) のような受身を異常受身と呼んでいる。(v) *A spoon was eaten the soup with. (vi) This spoon has been eaten with. (vii) *今日の給食で、納豆が (先生に) 生徒達に食べさせられた (viii) 納豆は、毎日の給食で子供達に食べさせられている。

中間に位置付けた。この履歴叙述は、事象叙述が前提となり、その出来事の発生が〈場〉を特徴付けるものとして〈場〉の履歴の一項目として心的に記録されることを叙述するタイプである。したがって、一方では時間軸に沿って展開する出来事とつながり、他方ではその〈場〉の属性を叙述することにもつながると考えられる。この「履歴の叙述」は益岡（2004）で「履歴所有の属性」と呼ばれたものとほぼ重なるが、益岡は属性の一つとして位置付けている²⁹⁶。場焦点化他動詞構文が表す所有の概念と叙述タイプを整理したところで、(321)の構文の不自然さを次のようにまとめておく。

＜眼前あるいは直近の出来事を表現しにくい場焦点化他動詞構文が存在する理由＞

人間関係および分離可能の所有関係をあらわす場焦点化他動詞構文は、物理的に二者関係の一体感が強くなく、人間関係の相手および所有物の状態変化によって〈場〉として把握された主語名詞句が直接的に目に見える形で変化するわけではない。表 4.11 に示した④の〈場〉の変化の叙述ではなく、③の〈場〉の履歴変化の叙述へとシフトしていると考えられる。そのため、眼前あるいは直近の出来事を叙述しにくい。

本論文では、これまでの分析の中で次のような場合がこのような履歴変化の叙述にシフトしているのではないかと指摘した。ここにその例文を改めてまとめておく。

・ 4.2.4 節 その列車の脱線事故はたくさんのけが人を出した。

その列車の脱線事故で A 高校は多くのけが人を出した

この宝くじ売り場は 1 等 3 億円を出した。

・ 4.4.4 節 例えば、寅彦は随筆集『柿の種』に、「哲学も科学も寒き噫哉」という俳句を残している。

叙述のタイプという観点からは上のように分析できるが、自動詞文と他動詞文の違いという観点から分析することもできる。近藤（2005）は両者の違いを次のように述べている。

現在の瞬間的な経験は、それに対して心理的距離をとらないまま言語化されるとき、自動詞文によって表される傾向が強い。これは要するに、他動詞文を編成する時間の余裕がないからである。一方、過去の出来事は、それに対して心理的距離をとることができるので、自動詞文と他動詞文のいずれによっても表現される。（同上：31）

²⁹⁶ 益岡（2004）は (i) は (ii) と同義であり、その点で (iii) のような「所有文と同じ構造をもつ」と考え、(i) を「履歴所有の属性」と呼んでいる。(i) この五重塔は 10 年前に一度倒壊した。(ii) この五重塔は 10 年前に一度倒壊したことが（一度）ある。(iii) 太郎は財産がある。（同上：8-9）

本論文では表 4.11 に示したように「属性」という用語は恒常的な状態を指す用語として使用し、そのような性質や特性などを叙述する文を「属性叙述」と呼び、時空間の中で生起する事象を叙述する文を「事象叙述」と呼ぶ。そして「〈場〉の履歴変化の叙述」は便宜的にその中間に位置付けておく。

(321) が不自然で、(324) が自然に感じられるのはこのような理由も関係していると考えられる。しかし、自動詞文と他動詞文との違いとして一般化するのには注意が必要である。変化事象において自動詞文が選択されるのは、事態把握として直接視界に入り、有界性をもち、かつ動きのある物に第一の際立ちが与えられる傾向があるからだとも言える。何に焦点を当てて叙述するかは概念化者の主体的なものである。行為者に焦点が当たれば、目の前の瞬間的な出来事であっても他動詞を用いて「あ、殴った!」「あ、壊した!」「あ、食べた!」と言える。これを自動詞相当の文とみなせば、近藤の指摘はその通りだと言える²⁹⁷。(321) のような場焦点化他動詞構文に限って言えば、上に分析したように〈場〉の履歴変化の叙述にシフトしていることが不自然さを引き起こす第一の理由だと考える。

上記の近藤の指摘を踏まえて、許(2010)は受影主語の観点から(321)のような不自然な文の原因を受影動作主に求めている。これは妥当な分析であるが、「気持ちを整理するのに時間がかかる」(同上: 274) からだというような主観的な要因を指摘するだけでは不十分である。この考え方では、時間がかからずに気持ちを吐露できれば表現が成立することになるからである。なお、許(同上)で同様の不自然さは迷感受身文や使役文にも認められることを指摘している点は重要である²⁹⁸。本論文では間接的な受影性と呼ばれるものの根本には、モノとモノの二者の使役連鎖とは異なる事態把握、つまりモノ・イベントと〈場〉の二者関係の概念化があると考ええる。例えば、「A が死ぬ」という事態について間接受身(B は A に死なれる)、使役文(B は A を死なせる)で言語化されるとき、概念化者が A と他者(B) をモノの使役連鎖ではなく、A が死ぬという事態が他者(B) の身の上に発生する、あるいは、A の身に死ぬという事態が発生することを他者(B) が引き起こすと把握するところに、間接的な受影性が生まれる素地があると考ええる。

最後に「〈場〉の履歴変化の叙述」が現れやすい場面としてテレビのニュース報道におけるテロップを取り上げる。テレビのニュース報道には二つの情報伝達手段がある。一つは音声であり、もう一つは映像である。そしてその映像の中に登場する場面や人を説明するテロップが流れる場合がある。(325) は実際に災害現場の放送で用いられたものに基づいて再構成したものである。ある女性の夫が自然災害で亡くなった現場からレポーターが状況を伝える際に、テロップで被害者を紹介する文が表示された。直近の出来事であるにもかかわらず、場焦点化他動詞構文で「××を亡くした〇〇さん」という表現が使われた。これは、一律に「直近」のことは場焦点化他動詞構文が使いにくいというのではなく、どのような立場の人がどのような場でだれにどのような目的で伝えるのかという点も考慮されなければならないことを意味している。

²⁹⁷ ただし、上の引用は、能格言語の起源というテーマのもと言語表現の古層を考えるという文脈において提示されたものである点は重要である。本研究が提案する自動詞側(受け手の側)からの事態認知モデルはある意味で言語の能格性と相通じるものがある。この点については稿を改めて論じることしたい。

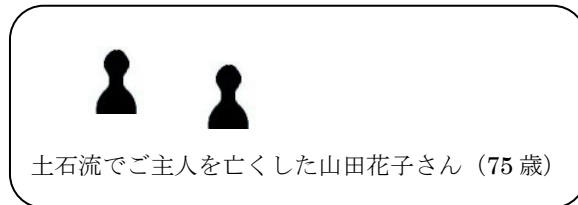
²⁹⁸ 許(2010: 267) は次のような例を挙げ、「??」の判定をつけている。この判定は筆者も支持する。

(i) ?? きのう、太郎は父親に死なれた。(ii) ?? きのう、太郎は息子を交通事故で死なせた。

(325) [ニュース報道番組で被害者がインタビューに答えて]

被害者「土石流は一気に襲ってきて、自分一人が逃げるのがやっとで…。

主人は奥の部屋で寝ていて、逃げ遅れたんです。」



画面上に表示されるテロップ

4.8 有対自動詞の両用動詞化

4.8.1 先行研究と課題

日本語は、語基（語根）を共有し、形態上派生対立関係をもつと見られる自動詞と他動詞のペアが多く存在する。自動詞の側から見て対応する他動詞があれば、有対自動詞と呼ばれ、逆の側から見ればそれは有対他動詞と呼ばれる。そのような形態上の対立の分類および形態と意味とのつながりの研究は、今日まで数多くの研究がされている²⁹⁹。これらの研究を通じて、形態上対応する他動詞がない自動詞（絶対自動詞・無対自動詞）や逆に対応する自動詞がない他動詞（絶対他動詞・無対他動詞）がどのような意味特徴をもつのかも明らかにされてきた（西尾 1982, 早津 1989a, 1989b, 佐藤 2005 など）。その一方で、自動詞と他動詞が同一の形態をもつ動詞も研究されてきた（森田 1994 [1994 所収] など）。このような形態上の対立派生関係や同一形態での構文交替が数多く認められる中において興味深い現象を提供するのが「あく」「変わる」「終わる」である。

(326) a. 佐藤さんは大きく口をあけた。

b. 佐藤さんの口が大きくあいた。

c. 佐藤さんは大きく口をあいた。

(327) a. 田中さんは（A から B に）席をかえた。

b. 田中さんの席は（A から B に）かわった。

c. 田中さんは（A から B に）席をかわった。

²⁹⁹ 1990 年代までの研究については、須賀・早津（1995）『動詞の自他』に主要な論文と解説が収められている。

- (328) a. 山田さんは 6 時に仕事を終えた。
 b. 山田さんの仕事は 6 時に終わった。
 c. 山田さんは 6 時に仕事を終わった。

(326-328) の (c) に現れている動詞は、形態上は自動詞であるが、ヲ格名詞を伴って他動詞構文を作っている。本論文では、このように形態上対立する他動詞がありながら、それが用いられずに自動詞の形態のまま他動詞構文を作る場合、その現象を「有対自動詞の両用動詞化」と呼ぶ。このような動詞については、早くから言葉の揺れとして取り上げられ、ヲ格名詞をとる「あく」「かわる」「終わる」は自動詞なのか他動詞なのか、意味はどう違うのかが議論がされてきた。このような動詞の構文交替について取り上げたものとしては、水谷 (1964), 櫻井 (1977), 須賀 (1981, 1990), 福島 (1991) などがある。須賀 (1981) は先行研究のそれぞれの立場を次のように整理した上で、自身は (イ) ~ (ニ) を退け、(ホ) の立場を主張している。

(329) 須賀 (1981 : 547) による先行研究者の立場の分類

- (イ) 自他の用法の誤りである。
 (ロ) 他動詞が省略されている。
 (ハ) 自動詞が臨時に他動詞化したものである。
 (ニ) 語形が自動詞と共通する他動詞である。
 (ホ) 自動詞の用法である³⁰⁰。

たとえヲ格を伴っていても自動詞は対象に変化を及ぼさない行為を意味し、他動詞は対象に変化を及ぼす行為を意味する。それぞれの基本的な性質の範囲で使われているのである。はじめに提示した

太郎が大きな口をあいた

大きな口があいた

という対応は、いわば疑似的な構文論的自他対応であって、正しい対応は、

太郎が大きな口をあけた

大きな口があいた

であり、「太郎が大きな口をあいた」の「あく」は自動詞であると認めるべきである。

(同上 : 563)

須賀の主張をまとめると、自動詞が例外的にヲ格名詞をとり、通常他動詞とは異なる意味を表す、となるだろう。自動詞と他動詞をどのように定義するのかという問題がある

³⁰⁰ 「用法」と記述されているが、須賀自身が説明しているところから判断すると、(ホ) は「自動詞である」ことを意味していると解釈できる。

が³⁰¹、この現象を分析するためには、他動詞構文は程度の差こそあれ対象に変化を及ぼす行為を意味する、という考えから一度離れて視点を変えてみる必要があるだろう。須賀の主張を敷衍すれば、「状態性の他動詞」または「関係動詞」（森山 1988, 工藤 1995, 山岡 2000）と呼ばれてきた「（～を）含む, 要する, 好む, 表す」といった動詞は対象に変化を及ぼす行為ではないので、例外的にヲ格をとっている自動詞ということになってしまう。本論文の立場は須賀の分類にしたがえば（ハ）（ニ）（ホ）の三つと関連する。「場焦点化他動詞構文をつくるように変化した」というのを「他動詞化した」と捉えれば（ハ）に該当するが、それは「臨時的」ではない³⁰²。「両用動詞化した」というのを「語形が共通する他動詞」と読み替えれば（ニ）に該当する。「自動詞で表される変化事象を言語化している」というのを「自動詞の用法」と捉えれば（ホ）に該当する。

（ニ）について、須賀は櫻井（1977）を引き合いに出し、次の点を批判している。櫻井（1977）は古典語を分析したものだが、主語名詞句とヲ格名詞句の関係を「動作主体に所属する」ものとし、このような動詞を再帰的他動詞と呼んだ。須賀は、所属関係が関係しているのなら「語形が自動詞と共通の動詞がヲ格を伴う例の全般にわたる説明が必要であろう」（須賀 1981 : 552）と述べ、古典語の分析を現代語にあてはめることに懐疑的であり、最終的に（ニ）を退けている。所属関係に注目した櫻井の分析は妥当なものであり、それこそがこの一見不可思議な言語現象を説明する鍵になる概念だと考える。ただ、櫻井は「再帰」に注目した。再帰は間接的に関与することはあっても直接的な要因ではないというのが本論文の立場である。

現在の研究の状況は、構文上は他動詞で意味的には自動詞という点を捉えて、「他動詞的自動詞とでもいうべきであろう」（鈴木 1985 : 115）という域を脱していない。『明鏡国語辞典 2 版』は「終わる」の用法について次のように記述している。「中間的」という説明は直感的にわかりやすく、語用論的な解説も役に立つが、一体なぜ中間的な意味になるのか、それはどんな意味なのかを明らかにするが本論文の目的である。

表現 「会議が終わる／会議を終わる／会議を終える」では、意味が微妙に異なる。『～が終わる』は自然のなりゆきとして終了する、『～を終える』は意図的に終了する意。『～を終わる』は中間的な言い方で、自分の意図にかかわりなく終了する意。『これであいさつを終えます』という、話し手の意図が全面に押し出されすぎるため、一般には『～を終わります』という穏やかな言い方になる。（明鏡国語）

4.7 節で分析したように、状態変化を所有の概念に転換する事態把握に注目するのが本論文の立場である。ヲ格名詞句をとる他動詞構文を単純に一つのグループと考えずに同じ事

³⁰¹ 本論文における自動詞と他動詞の規定については、2.1.2 節および 2.1.3 節を参照されたい。

³⁰² あとで見るように、消滅したもの、衰退するものがある一方で、新しく生まれ、そして今後も使われ続けるものもあるだろうと考えられる。

態を別の視点で捉えたときに、既存の「自動詞の形態」と「ヲ格」の組み合わせが選択されたと考えるべきである。自動詞か他動詞かという不毛な論争は終結しなければならない³⁰³。

須賀（1981）は、上に引用した「あく」と次の五つの動詞を自動詞の形態でありながらヲ格名詞をとる動詞として挙げている。本論文では、この六つに「(答を) 間違う」を加えて、これらの自動詞の形態をもつ動詞は、場焦点化他動詞構文であると分析される。ただし、本節で場焦点化他動詞構文の新しいタイプを導入する。それは、モノと〈場〉の関係が強化されることによって生まれるものである³⁰⁴。

(330) 須賀（1981）が取り上げた動詞とその例文

（※①は p.555 より②～⑥は p.546 より。表示方法は一部変えた）

- ①あく：与太郎が口を {あけて／あいて} 寝ている。
- ②かわる：一郎は勝手に座席を {かえる／かわる} ので、先生によくしかられる。
- ③うつる：花子はたびたび住所を {うつす／うつる} ので有名だ。
- ④はずれる：指揮者は良夫が音程を {はずして／はずれて} いるのに気づいた。
- ⑤たれる：犬がしっぽを {たらして／たれて} 歩いている。
- ⑥おわる：山田君は仕事を {おえて／おわって} 家に帰った。

(331) 追加して分析する動詞³⁰⁵

- ⑦まちがう：次郎はまたこのやさしい問題を {まちがえた／まちがった}

4.8.2 有対自動詞の両用動詞化の分析

この七つの動詞の分析を、鈴木（1985）の三分類を手掛かりに進めることにする。鈴木は自動詞につくヲ格は第一に移動の概念を表す動詞（「～を進む」など）とともに使われるとして、移動の概念を表すのを第一グループにし、そこに「かわる」「うつる」を入れた。第二グループには身体部位がヲ格名詞に来るという理由で「あく」を入れた。そして第一にも第二にも属さないものとして「終わる」を挙げた。また、「音程をはずれる」を不自然だとして分類に入れず、「たれる」については動詞の形態の通時的な検証によってここで扱う動詞ではない、と結論づけた。

第一グループについては、福島（1991）が説得的に論じているように「かわる」「うつる」を移動の概念をもつものとして分類するのは妥当である。本論文では、鈴木のカテゴリでは“迷

³⁰³ 本論文は「場焦点化他動詞構文」という名称を用いるが、それはこの動詞を積極的に「他動詞」であると認定する姿勢を示したものではない。議論を進める上で、ヲ格名詞句をとり二項（以上）の項で述語を作るものを、便宜的に他動詞構文と呼ぶにすぎない。詳細は 2.1.3 節を参照されたい。

³⁰⁴ 新しいタイプの所有の概念については 4.8.2.4 節で論じる

³⁰⁵ 2.6.2 節で示した坂野（2004）の分類では「終わる」と同一グループに「当たる」があるが、本論文では「別の場所に当たる」と「別の場所を当たる」は「終わる」と同類の拡張と認めないためここでは扱わない。

子扱い”だった「終わる」をその拡張例として位置付ける。第二グループはこのままである。鈴木では除外された「はずれる」は、離脱動詞が見せる興味深い例として分析する。そして「たれる」については鈴木のを支持するが、動詞そのものは場焦点化他動詞構文を作るので、取り上げることにする。以下で取り上げる動詞を（ア）～（オ）のように分類し、その特徴を整理しておく。丸数字は（330）（331）で示した番号に対応している。

- （ア）⑤「たれる」：元々他動詞として存在しており、それが場焦点化他動詞構文を作るようになった。
- （イ）①「あく」：「全体-部分」の関係をもつ状態変化を表し、このグループの中では比較的古くに場焦点化他動詞構文が生まれた。
- （ウ）②③⑥「かわる」「うつる」「おわる」：移動の概念を併せ持つ動詞で、その意味特徴によって場焦点化他動詞構文を作るようになった。
- （エ）④「はずれる」：離脱動詞の意味特徴によって場焦点化他動詞構文を作る。
- （オ）⑦「まちがう」：このグループの中ではもっとも新しく場焦点化他動詞構文の用法が生まれた。

4.8.2.1 「たれる」

「垂れる」は元々場焦点化他動詞構文を作る動詞だったと考えられるので、有対自動詞の両用動詞化の例からは除外する。元々存在した他動詞が、「垂らす」との対立の中で、場焦点化他動詞構文の用法を維持してきたと考えられる。鈴木（1985：116）は動詞の形態の変遷を踏まえ、これは本来他動詞で「～ヲたる（たれる）下二段活用」という形しかなく、近世以前には「～ガたる（たれる）下二段活用」という言い方はなかったのではないかと推測している。その後江戸時代に「水ガたる（たれる）」という言い方が成立し、「水ガたれる」対「水ヲたらす」という自他の対応が意識され³⁰⁶、それ以外の対象にも広がったと指摘している。つまり、下の図に整理したように、現代語の「ヲ垂れる」（一段活用）は古典語の「垂る」（下二段活用）の他動詞をそのまま受け継いでおり、②③の自他のペアがその後成立したと見られるのである。

現代語の用法としては、「あるものを下にたらす、下げるようにする」という意味では、次のような使い方がある。

- （332）a. 釣り糸をたれる。
- b. 柳が枝をたれる。
- c. 頭をたれる。
- d. まぶたをたれて眠る。（以上明鏡国語）

³⁰⁶ 他動詞化接辞の「-as(u)」を付加した自他の対立のパターンに刺激されたと考えられる。「枯る（枯れる）」対「枯らす」、「濡る（濡れる）」対「濡らす」など。（※括弧内は口語の終止形）

e. 犬が舌をたれる。 (新明解)

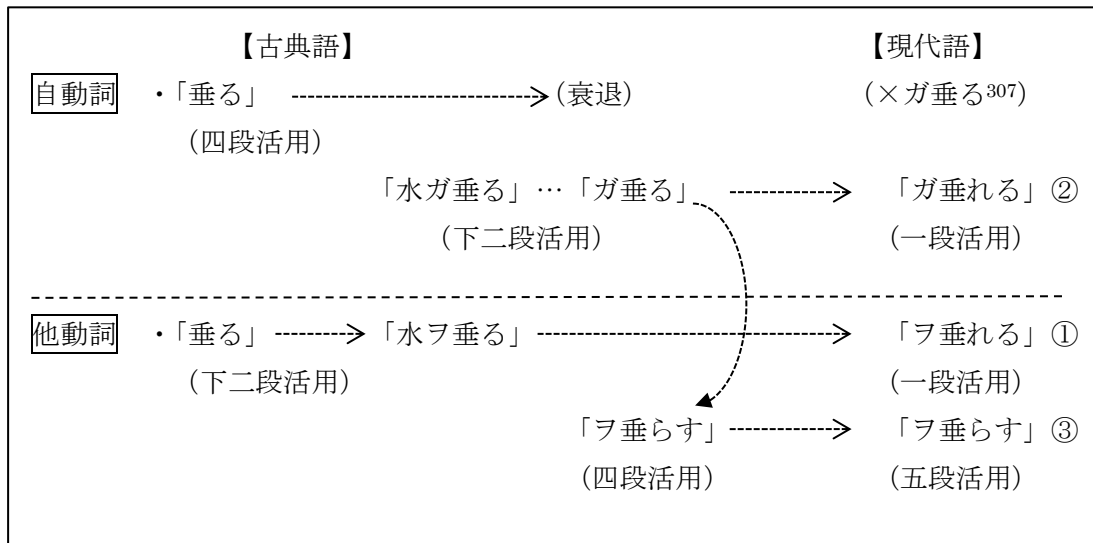


図 4.48 「垂れる」の形態の推移

この五つの例は、全体を二つに分けることができる。主語名詞 (N1) とヲ格名詞句 (N2) が「全体-部分」の関係になっている場合 (b~e) と「所有者-所有物」の (分離可能) 所有関係になっている場合 (a) である。4.7 節ですでに分析したようにこのような関係にある「N1 の N2 が自動詞」は、事態の把握の在り方によって「N1 が N2 を他動詞」に交替可能である。ただし、自動的に交替するのではない。場焦点化他動詞構文はその名称のとおり、〈場〉に際立ちが与えられ、状態変化をその〈場〉の所有の変化という事態把握に転換することによって交替するのである。つまり、そのような事態の把握を引き起こす動機付けがなければ交替は起こらないということである。さらに重要な点は、使役変化動詞のように行為者と被動者とに分離し、一方が他方に働きかけるという事態把握ではなく、概念上「全体-部分」あるいは「所有者-所有物」と二つに分けながらも、最終的には一体化し、そのような変化結果を所有することによって特徴付けられるという事態把握になっている点である。

「人が {頭・まぶた} をその重みにまかせて下げている状態」、「犬が {舌・尻尾} をその重みにまかせて下げている状態」、「(柳の) 木が {枝} をその重みにまかせて下げている状態」、このような状態が〈場〉全体 (人・犬・木) を特徴付けるものとして把握されていることを言語化したのが「~を垂れる」である。なぜ犬では「尻尾」「舌」が注目され、人では「頭、首 (=頭の意)、まぶた」が注目され、木では「枝」なのか。それは人、動物、木はそのような部位によって〈存在様態〉が特徴付けられるとを感じるからである。下の例ではそのような事態把握が見てとれるだろう。(a) は犬が何をして隠れるというよりも、

³⁰⁷ 現代共通語では単独で自動詞としての「垂る」はないが、複合語「滴る (←下垂る)」の成分として名残をとどめている。

どんな様子で隠れるかを叙述し、(b) はまさに木が目印になっているのである。

- (333) a. サッシの引戸を開けると、瞬間にこちらの様子を感じて、尻尾を垂れ、鎖を鳴らしながら、大急ぎで犬小屋の後ろに隠れる。(BCCWJ[31])
b. 七一八メートル登ると、左のほうに老婆の手のようにだらりと枝を垂れた古いアカマツが見えます。(BCCWJ[32])

それでは「所有者・所有物」の分離可能所有関係になっている例はどうだろうか。須賀(1981: 551)は、櫻井(1977)が「父が釣り糸をたれている」が成立して「花子はフライにレモンの汁をたれた」が成立しない理由を「レモンの汁」は動作主に所属しない、と分析したことを受け、その意味が理解しがたいと述べている。言葉遣いは別として櫻井はポイントをついていたと思われる。本論文の立場から言えば、「釣り糸が動作主に所属する」とは、人が釣りをして、釣り糸をその重さにまかせてさげて、魚がかかのを待つ姿、その姿勢が、その人の状態を特徴付けるものとして把握される、ということである。このような把握は日常生活のすべての「姿勢」に起こるわけではない。すでに慣用化されてしまったこの「釣りの姿勢」は、俗な言い方をすれば「一枚の絵になる」のである。フライにレモンの汁をその重さにまかせて流している姿はよほど文学的な文脈がなければ「絵にならない」のである³⁰⁸。次の例は双眼鏡を手にしてあたりを観察したときの描写である。老女の姿はいわば「一枚の絵」になっているのである。

- (334) おもちゃのオペラグラスだ。何気なく拾い上げ、目に当てる。とたんに調節もしないのに、鮮明な川原の景色が目に飛び込んできた。第三暁橋の下だ。日蔭で老女が一人、流れに釣り糸を垂れている。(BCCWJ[33])

4.8.2.2 「あく」

「人が目/口をあく」は主語位置に来る名詞とヲ格名詞の関係が「全体-部分」であり、上の「たれる」と同様の分析ができる。目や口の開閉の状態がその人を特徴付けるという把握が根底にあり、それが言語化したものである。理屈の後付けという批判は免れないが、人間の状態を特徴付けるものは手や足を大きく広げたり、上げたりする動作もある。しかし、目と口の開閉が選ばれそれが慣用化したのにはそれなりの動機付けがあったからだろう。

³⁰⁸ 例えば、物語の中で、レモン汁の容器をいつも携帯し、外食でも食べ物に必ずそれをかける習慣があり、そのかける姿が華麗なことでは有名な人が登場して「汁かけ娘」と呼ばれているような状況を想定してみよう。その人について描写する場合、「友子は、きょうも食事が運ばれるなり、皿に載せられたアジフライにレモンの汁をたれていたのである。」というのは、筆者の語感では文学的な表現として許容範囲であり、非文法的という印象は受けない。ここで言わんとしていることは、客観的に分離可能所有であっても、概念化者の主体的な事態把握によって、一体とみなし〈場〉全体の変化、〈場〉全体の特徴付けとして把握され得るという事実である。

う³⁰⁹。

この場焦点化他動詞構文は〈場〉(人を含む)を特徴付ける性質のものだから、その用法は動作よりは状態表現「～をあいている」または「～をあいて…する」として用いられる傾向が強いことが予想される。そこで簡単な調査を実施してみた。この調査は表記の問題もあって正しく実態を捉えるのに困難が伴う。「開いて」という表記は「あいて」とも「ひらいて」とも読めるからである。国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で、かな表記のみで「あく」を検索した結果は次のとおりである。「目」は用例数が少なく判断できないが、口については、かな表記に限れば「～の様態/状態で」「～の状態のまま」という使い方が多いことが窺える。

(335) 目をあく

「目をあく (ことができな)」1 件,

「目をあいた」1 件,

「目をあいて (見なさい)」1 件 (※「開いた状態で見」の意)

口をあく

「口をあく」0 件

「口をあいてごらんない」1 件

「口をあいて…」7 件

「口をあいたまま…」2 件

(336) の例で状態や様態を述べる用法とは (a) (b) のことで、(c) が動き (状態変化) を述べる用法である。

(336) a. ただ、それらの光景にそぐわぬのは、彼が大きな口をあいて、雷のような轟
をかいていることでした。(BCCWJ[34])

b. 血がしぶき、絶叫のかたちに口をあいたまま、半分に噛みちぎられた騎士が
無造作に地面に放り出される。(BCCWJ[35])

c. 今の日常ですか。だいたいこのところ、朝三時半ぐらいに起きるかね。帰っ
てきた当時は、たいてい一時間半ぐらいつつに目をあいた。(BCCWJ[36])

鈴木 (1985) は「口/目をあく」という用法は衰退しているのではないかという予測を立て、明治から昭和初期にかけて発行された小説に現れる用例 (※ルビなどで表記が確認されるもの) を調査した。その結果、衰退の傾向にあることを確認した上で、現代人の言語意識を調査するために、二つの小説の使用例を抜き出し、動詞の部分为空欄にし、そこに

³⁰⁹ 想像するに、視覚情報を受け取る器官であり、覚醒状態か睡眠状態かがわかる「目」、呼吸および飲食、発話のために開閉される「口」は人間にとって注意が向くのに十分な存在である。

{あく・あける・ひらく} のどれかを記入してもらうアンケートを実施した。その結果も鈴木予想を裏付ける結果となった。この衰退の傾向についてはあとでまた議論する。鈴木自身は意図していないことだが、このアンケートから見えてくるもう一つの点に注目したい。現代語の意識としては「～をあく」は全体としては許容度が低い、状態・様態を表す表現なら許容度が上がるということが見てとれるのである。

表 4.12 鈴木（1985）のアンケート結果³¹⁰

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
原文	あく	あく	あく	あける	あく	あける	あく	あく	あく	ひらく	ひらく	ひらく	あく	あく	あく	あく	あく
A	2	0	8	3	6	4	4	0	8	0	1	3	4	2	4	2	5
B	15	15	14	8	4	13	19	9	14	6	12	10	16	17	16	14	18
C	6	8	1	12	13	6	0	14	1	17	10	10	3	4	3	7	0

A:「あく」 B:「あける」 C:「ひらく」と記入した人の数

原文では「あく」が 12 例あったが、全体に「あける」と回答している人が圧倒的に多く、「ひらく」も多い。注目してほしいのは、そのような状況にあって「あく」と記入した人が比較的多いところとゼロのところである。23 名中 5 名以上が「あく」と答えたのは③⑤⑨⑰の四つである。この四つは原文では、③⑨⑰が状態表現で、⑤は否定意志の「～まい」に接続している³¹¹。逆に一人も「あく」を選ばなかったのが②⑧⑩の三つである。この三つは状態表現ではなかった。断定はできないが、このことから現代人の意識では、「～をあく」は状態・様態表現として用いるほうが許容されやすい傾向があることが窺える。

<状態表現>

①⑦⑨⑰あいテイル

③④あいテ…シテイル／…スル（※「あいて」はあいた状態の意）

<動作表現>

②⑥あいテミルト… ⑧あき（サエイレバ…） ⑩（ふと）あいた。

⑪⑬あくト… ⑫あきザマ…（※「あくとすぐ」の意） ⑭あく。

⑮（ふと）あいたトキ… ⑯あくダケデ

<その他>

⑤あくマイ（ト…ル）

急いで付け加えておかなければならないことは、上の調査および例文は書き言葉が対象ということである。これが話し言葉になると少し事情が異なるようである。「(口を) あい

³¹⁰ 1985 年当時大学生だった 23 名を対象にした調査。オリジナルには正答率の数値が入っているがここでは省略した。また一部表示方法を改変。

³¹¹ 原文は、⑤「人間が無精になってなるべく口を（ ）まいと儉約する結果…」 実はこの⑤は他の三つと異なり「あく」もやや多いが B ではなく C が多いという傾向を示している。

てください」という表現がまるでマニュアル言葉にでもなっているかのように使われる職業がある。歯科医である。この点については 4.8.4 節で取り上げて論じる。

4.8.2.3 「かわる」「うつる」

ここでは「かわる」「うつる」を取り上げる。鈴木（1985）が早くに指摘し、その後福島（1991）、須賀（1999）で議論されたように「{席・部屋・住所・会社・学校・病院}をかわる／うつる」などは、単に概念上の変化ではなく、移動の概念も伴っていると分析される。先行研究で明らかになったことを須賀（1999）を参考にして簡単にまとめておく。まず主語名詞句が移動を伴わない場合には文が成立しない。

- (337) a. 太郎は 席を (A から B に) かわった。 cf. 太郎は席をかえた
(=太郎は席 A から席 B に移動した)
b. *太郎は 帽子を かわった。 cf. 太郎は帽子をかえた

第二に、N1 と N2 が主体とその主体が占める場所、あるいは所属者とその所属場所の関係になっていなければならない。「太郎の席」は「太郎が座る場」(=その場を占める)であり、「太郎の住所」は(メトニミー的に)「太郎が住む場所」を指している。「太郎の会社」は「太郎の所属する場所」である。

- (338) a. 太郎は 席を (A から B に) かわった。
b. #太郎は 次郎の席を かわった。

第三に、対応する使役変化他動詞は、このような移動の意味は必ずしも含意しないし、表す内容も異なる場合がある。

- (339) a. *太郎は 席を (A から B に) かわったが、実際には移動しなかった。
b. 太郎は 席を (A から B に) かえたが、実際には移動しなかった。

- (340) a. 友人が下宿をうつるそうだ。
b. 友人が下宿をうつすそうだ。(須賀 1981 : 556)

須賀（1981）は（340）について、友人が下宿人の場合は別の場所に移動するという意味でどちらも成立するが、下宿屋を営む者であれば（a）は成立せず（b）は成立すること、そしてその場合の意味は下宿屋を別の場所で営むことになる」と指摘している。つまり（b）の使役変化他動詞は、概念として下宿屋を移動させられるが、下宿人は自分自身だけが移動

するのである³¹²。

以上が先行研究の分析の要点であるが、第三の指摘は実は第一の内容と関係がある。「ヲかわる/うつる」が主語名詞の人の移動を含意するのは、ヲ格名詞が表す名詞「席」「下宿」「学校」「会社」が（抽象的な）モノとしての把握からその人の存在する場所として把握され、その場所の中を移動すると把握されるのである。席は「A - B - C -」のようにつながっているわけではない。つながってはいないが、「いまここ」と「移動先」をつなぐ大きな空間がイメージされる。それが「席」「下宿」「学校」「会社」という共通の概念で括られた場所を作りだす。そして、その場所の中で、具体的な席 A から席 B へと移動すると分析されるのである。そこが「席」「下宿」をあくまでも（抽象的な）モノとしてとらえて操作する使役変化動詞とは異なる点である。このような把握は図 4.49 のように示すことができるが、今後の議論でこれは修正される。

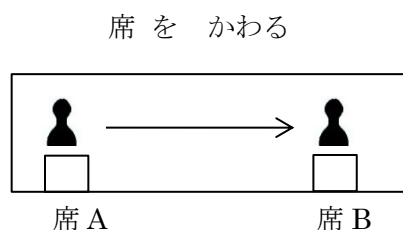


図 4.48 モノの把握から〈場〉の把握へ

4.8.2.4 場焦点化他動詞構文：所有（反転型）と占有（強化型）

ここで「ヲかわる」「ヲうつる」を場焦点化構文として分析することの意義はどこにあるのかという疑問が出て来るかもしれない。単に移動を表す動詞に転換したために、移動場所を示すヲ格名詞をとっているだけではないのか。その答えは自動詞と他動詞が表す事態の把握の在り方に求めることになる。単に変化動詞がヲ格名詞句を伴って移動動詞化したというだけで片付けるのではなく、どのような事態の把握によって成立するのか確かめ、「ヲ終わる」「ヲ間違う」とのつながりを示すのが本論文の目的である。そのために、これまでの分析でその存在を主張してきた場焦点化構文とは異なるタイプを導入する。

新しいタイプを導入する前に、この 4.8 節で問題になっている事態把握の三つの側面を確認しておきたい。従来の自動詞と他動詞の研究で注目されてきたのは①と②の交替である。ところが、もう一つ「その人」に注目した把握があるにもかかわらず、それほど注目されてこなかった。一部の研究では「再帰」という概念とのつながりで考察されたが、③の事態把握の本質は「再帰」ではなく、場焦点化他動詞構文を生成する概念であり、これまでそれはそれを所有だと仮定し分析してきた。ここで新しく「占有」という概念を導入する。

³¹² ちなみに『明鏡国語辞典 2 版』は「かわる」の解説でも、先に「終わる」で紹介したのとまったく同じように意図性の段階が異なるという“中間説”が書かれている。先行研究の知見が生かされていない。

<三つの事態把握の言語化> (「かえる」「かわる」の場合)

- ①人がモノに対して何をしたのか 使役変化他動詞「人が席ヲかえる」
- ②そのモノがどうなったのか (変化) 自動詞「席ガかわる」
- ③その人がどうなったのか 場焦点化他動詞構文を作る「人が席ヲかわる」
= 【〈場〉 (=その人) 全体としてどのように変化したのか】

③を場焦点化他動詞構文と書いたが、「場の焦点化」の在り方がこれまでのものとは異なる。「たれる」「あく」では下に示した「所有 (B)」で、モノが自分の体の一部になる場合である。一方、「かわる」「うつる」はここで新しく導入される「占有」の概念をもつと考える。下に概念化の違いを示す。(y, z) は項構造で、□で囲んだ項は第一の際立ちが、下線の項は第二の際立ちが当たっていることを示している。

<場とモノの二者関係の概念化の二つのタイプ>

所有 : モノと〈場〉の二者関係において一種の図地反転によって生まれる概念
「人またモノがある〈場〉に存在する」という把握から
「その場が、そこに対象物が存在することによって特徴付けられる」という把握に転換する。

所有 A : 「参照点構造自動詞構文」を作る。

〈場〉は背景化したままで、際立ちは対象物に当たる。

$(\boxed{y}, z) \rightarrow (\boxed{y}, z)$
z に y が 〈BE〉 EXIST z に y が 〈BE〉 POSS

所有 B : 「場焦点化他動詞構文」を作る。

〈場〉が焦点化し、第一の際立ちが与えられ、対象物には第二の際立ちが与えられる。

$(\boxed{y}, z) \rightarrow (\underline{z}, \underline{y})$
z に y が 〈BE〉 EXIST z が y を 〈BE〉 POSS

占有 : モノと〈場〉のつながりの意識が強化されることによって生まれる概念

「人またはモノがある〈場〉に存在する」という把握から、「その人またはモノがその〈場〉を占有する」という把握へと転換する。

「場焦点化他動詞構文」を作る。

対象物には第一の際立ちが当たったままだが、〈場〉が焦点化し、第二の際立ちが与えられ、対象化する。

$(\boxed{y}, z) \rightarrow (\boxed{y}, \underline{z})$
z に y が存在 y が z を占有

上に示したように、所有 B と占有の概念は、どちらも場焦点化他動詞構文を作る点では同じだが、際立ちの当たり方（際立ちの与えられ方）が異なる。二者関係は次のようなイメージスキーマで示される。

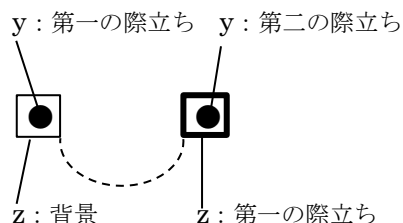


図 4.50 存在から所有 B へ

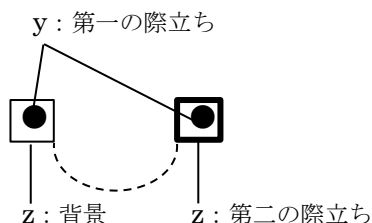


図 4.51 存在から占有へ

例えば、英語の (341) のような自動詞文と他動詞文の交替において、(b) と (d) は「占有」の場焦点化他動詞構文になっていると考えられる。(a) と (c) では〈場〉は場所句として背景化しているが、(b) と (d) ではそれが焦点化し、主語名詞句との関係が強化され、「主語名詞句が単にその場に存在する」から「その場を占める」という概念に転換し、他動詞文になっていると考える。

- (341) a. The meat is in the freezer.
 b. The meat occupies the freezer.
 c. The natives live in the outlying area.
 d. The natives inhabit the outlying area. (坂原 1998 : 122) ³¹³

なお、「所有」と「占有」は無関係な概念ではない。英語の ‘occupy’ や日本語の「占める」が所有の概念とつながっていることは辞書の記述からも窺える。(※下線は引用者による)

- (342) occupy (Oxford Dictionary)
 1 Reside or have one's place of business in (a building)
 2 Fill or take up (a space or time)
 3 Fill or preoccupy (the mind)
 4 Take control of (a place, especially a country) by military conquest or settlement

- (343) 占める (新明解)

³¹³ この四つの例文は認知言語学的に見て「地」から「図」への転換の例として紹介されている。

- 1 自分の勢力範囲／所有とする
- 2 客観的に見て、そのものが、全体の中でそのような位置を持つ。

本論文で分析の対象となる場焦点化他動詞構文は、その多くが「所有 B」の概念である。上述の「占有」の概念は、この 4.8 節で取り上げられる「ヲかわる」「ヲうつる」「ヲおわる」「ヲはずれる」、そして「ヲまちがう」で関連付けられ、さらに 5.3 節で取り上げる、道具主語構文、LT 主語構文でも関係してくる重要な概念である³¹⁴。今後の議論のために、二つの場焦点化他動詞構文を次のように命名し、必要に応じて呼び分けることにする。なお略称として「反転型」「強化型」を用いる。

- ・反転型 - 場焦点化他動詞構文・・・「所有」の概念をもつ
- ・強化型 - 場焦点化他動詞構文・・・「占有」の概念をもつ

占有の概念は、背景としての〈場〉を、モノとの結びつきの強い〈場〉に格上げし、〈場〉を対象化するということである。この「場を対象化」することによって生れる構文の一つに「〈場〉ヲ＋移動動詞」がある。移動動詞とともに使われるヲ格名詞句は、通常他動詞構文のそれとは異なる扱いを受けるのが普通である。例えば、「山田さんが道を歩く」のヲ格名詞句は「移動補語」と呼ばれ「山田さんがご飯を食べる」のような目的語を表すヲ格とは区別されるのが普通である (cf. 杉本 1986)。しかし、同じヲ格を使う以上その根底には何か共通したものはあるはずである。直観的に結びつく概念としては「対象」だろう。目的語が動作主が働きかける、あるいは動作が向かう対象であれば、移動補語のヲ格名詞句は移動空間を対象としてみなしていると言えるだろう。ただし、対象といえども、区別すべき意味的・構文的な違いも確かに存在する。そこで占有という概念によって〈場〉が対象化するとはどのようなものかを、もう少し考えてみたい。

池上 (1993) は英語の移動動詞が他動詞として用いられることについて、「〈移動〉とそれが関わる〈場所〉という関係が、〈行為〉とそれに関わる〈対象〉という関係で受け止められ、他動性を高めていることが、自動詞から他動詞への変換を動機付けている」(同上: 35) と説明している。しかし、その一方で、「日本語の「コースヲ歩く」や「水溜りヲ跳ブ」には対象と取り組むというような意味合い (つまり、他動性の高まり) はない」(同上: 36) と指摘した。池上の指摘で重要なのは、このような違いを踏まえて、英語は移動動詞の場合でも、「行為動詞＋目的語」という意味構造に引き寄せて、「目的語」のように扱う、つまり「目的語」と「移動補語」との間に区切りを入れるのに対して、日本語のほうはそのような区切りを入れないという点で異なることである (同上: 40-41)。すなわち、英語にとってヲ格名詞の典型的な意味は目的語によって示されるが、日本語のほうはそれがはっきりしないということである。

この指摘は、本論文の立場から見れば次のように解釈できる。モノとモノの使役連鎖を

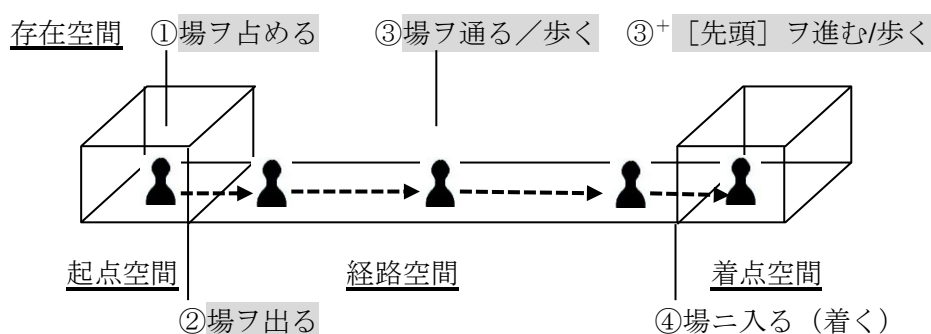
³¹⁴ LT とは 'locatum' の略で単なる移動するモノではなく、移動先の構成物となるモノのことである。

認知モデルの基本にする英語は、典型的な対格の現れは目的語になる。しかし、事態の把握にもう一つの重要な側面として、モノと〈場〉の二者関係の把握があると仮定すればどうだろうか。日本語は英語と比べれば、この把握が相対的に強く表れると考えられる。したがって、移動動詞がヲ格名詞句を伴って、移動空間を「対象化」したといっても、それは目的語のように扱うことを意味しない。そこで、本論文では、モノと〈場〉の二者の関係において、そのつながりが強化されることによって生まれる「占有」という概念を提案するものである。池上（1993）では、上に紹介したように、移動動詞の斜格名詞句が格上げされ他動詞となる現象について、英語と日本語とはその性質が異なると指摘しているが、本論文で日本語における空間の対象化は（目的語化ではなく）「占有」とであると提案するのも、そのような考え方に沿ったものである。池上（同上：36-37）が指摘するように、英語が‘walk along the course’から‘walk the course’になった場合、ゴルファーがコースを検分して歩くような事態把握に基づいているのに対して、日本語の「コースを歩く」にはそのように目的語化するような事態把握はない。しかし、「コースで歩く」と「コースを歩く」には明らかな違いが認められる。「歩く」という動作がどの領域で実現するのかという遠くから眺めるような視点で場所が把握されるのが「デ歩く」である。一方、〈場〉とモノ（＝移動する人）とのつながりが強化され、場所がその人が接地して移動する経路として把握されるのが「ヲ歩く」である。このような点を踏まえて、日本語における空間の対象化とは何かを考えたときに、それは「占有」という概念であるというのが本論文の主張である。

ここで誤解を与えないように補足しておくと、「占有」という概念は、二者の結び付きが強化されることによって生まれるが、典型的には静的な二者の関係におけるものである。つまり、「存在」に対して「所有」があるように、「存在」に対して「占有」を認めるのである。これを基本として、移動動詞を伴った場合はその拡張事例となる。「占有」という言葉に引きずられて「場を占めて動かない状態にある」と誤解してはいけない。具体的に移動の概念と結びついた場合にどのような意味になるのかは、以下で順番に見ていく。

その前に、もう一点重要なことを確認しておかなければいけない。それは「起点 - 経路 - 着点」というイメージスキーマである。認知言語学では、事態を把握するにあたり、身体的経験に基づいて得られた知識を高度に抽象化したスキーマによって概念化していると考えられる。スキーマには大きく分けて二つのタイプがある。一つはすでに本論文で示してきたようなイベントスキーマである。もう一つは「具体的なアナロジーやメタファーに基づくイメージ的な知識のスキーマ」（山梨 1995：234）である。このイメージスキーマにはいろいろなものがあるが、その一つに「起点 - 経路 - 着点」がある。このスキーマは典型的にはモノの移動の概念化に用いられるが、それが状態変化や出来事の因果関係、さらには行為の概念化（cf. 池上 1993, 菅井 1998 など）にも拡張して用いられる。本論文においてもこのイメージスキーマという枠組みを用いて事態の概念化を考察していく。例えば、「～ヲ出る」のヲ格は〈起点〉を表すと言われるが、その意味は「起点 - 経路 - 着点」の枠組

みの中で解釈されなければ、「～カラ出る」との違いが正しく理解できない。これについては後でまた触れる³¹⁵。



①が占有の基本概念であり，そこから②③が拡張する。それぞれの概念は次のように規定される。

- ・場の対象化：存在する空間を対象化する
 - ・占有の概念：対象が場を占める
 - ・意味：対象が単に背景となっている場に存在するという把握ではなく、対象が確固としてその場を占めているという把握である。その内容は具体的なものから抽象的なものまでである。[1] ～ [3] は人が主語位置に来る場合の例である。
- [1] 人がその場に足を付けて自分の立ち位置を確保している
- [2] 人がその場を一時的あるいは長期的に住まう空間として確保している
- [3] 人がその場に所属し、自分の身を置くところがある

- ・場の対象化：離脱する空間を対象化する
- ・意味：人がそれまで占めている場を離脱する〔※占有から非占有への変化〕

[そして（経路を選択し）着点に向かう]

③「場を通る/歩く」³¹⁶

- ・場の対象化：進む空間を対象化する
- ・意味：人が起点から着点までの経路として選択する
(※起点から着点までの移動の軌跡が経路空間を占める)

③⁺「[先頭]を進む/歩く」

- ・場の対象化：経路上の立ち位置を対象化する
- ・意味：人がその立ち位置を確かなものにながら移動する

③⁺の用法はやや特殊な事例だが、①の占有の概念がベースになっていることを支持していると言える³¹⁷。なお、日本語では④の概念化には二格名詞句が現れるが、場所を目的語化して他動詞構文で表現する言語は少なくない。例えば、英語には‘go into’ ‘arrive at’とは別に（ロマンス語系の借用語の）‘enter’ ‘reach’ という動詞がある。

ここで重要なことは、②③のように移動動詞に場所を示すヲ格名句が付く構文は、「起点 - 経路 - 着点」というスキーマ全体の構図における「部分」として見なければいけないという点、そしてその部分は「存在」を基本とした占有の概念の拡張になっているという点である。『基礎日本語辞典』で分析されているように、起点の「カラ」は「ヲ」とは異なり二つの領域だけが事態把握の枠組みとして設定されている³¹⁸。「カラ出る」と「ヲ出る」の意味の違いは両者のスキーマの枠組みによるものである。

(344) a. 家から出る。 (中と外の二つの領域だけの枠組み)

b. 家を出る。 (起点と経路 [と着点] の枠組み)

(345) [火災が発生して避難を呼びかける]

a. 危ないから早く家から出なさい！

b. ??危ないから早く家を出なさい！

(346) [電車を利用して目的地に向かっている]

a. ??次の駅で電車から降りて、歩いて行きましょう。

b. 次の駅で電車を降りて、歩いて行きましょう。

³¹⁶ 「起点・経路・着点」のスキーマを前提にすると、「{玄関・門} を入って奥に進む」の「を

³¹⁷ この用法は『基礎日本語辞典』で、ヲ格が場所をとる場合の意味の9番目として挙げている。「そのものが占める移動行為の場所（ポジション）を示す」(p.1249) 例として「しんがりを走る」「先頭を進む」を挙げている。

³¹⁸ ただし、森田自身は明確に「起点 - 経路 - 着点」というスキーマとの対応で分析しているわけではない。

(345) で「を」が不自然な理由と (346) で「から」が不自然な理由は (344) で示したようにどのような認知的な枠組みで事態を見るかの違いによる。(347) の例で (b) が (a) とは異なる「山での生活を終わる」という意味を表し得ることも、「ヲ下りる」が「占有から非占有への変化」という把握によるものだと説明できる。

- (347) a. 山から下りる。(下山する)
b. 山を下りる。(下山する／山での生活を終わる)

また「起点 - 経路 - 着点」がベースになり、占有の概念をもつと仮定することによって、「〈場〉{に／を／で} + 移動 (様態) 動詞」の意味の違いを合理的に説明できる。

- (348) a. 太郎は山に登った。(山は登るという行為によって到達する場所)
b. 太郎は山に登った。(山は足を付けて立ち位置を確保しながら移動する場)
(山は経路の選定の対象)
(349) a. 太郎は川で泳いだ。(場所の限定：ほかの場ではなく「川で」)
b. 太郎は川を泳いだ。(経路の選定³¹⁹：こちらの岸から向こうの岸へ／上流側から下流側へ)

以上が占有 (強化型) の概念に基づいた移動動詞とヲ格名詞句とのつながりの分析である。次節では、この分析に基づいて「席をかわる」がどのような点で占有と関係しているのかを明らかにする。

4.8.2.5 「かわる」再考と「おわる」への拡張

◆「かわる」再考

それでは新しく導入した占有の概念でこの「～ヲかわる/うつる」を分析する。先に挙げた三つの事態把握を確認しておく。

<三つの事態把握の言語化> (再掲：「かえる」「かわる」の場合)

- ① 人がモノに対して何をしたのか 使役変化他動詞「人が席ヲかえる」
② そのモノがどうなったのか (変化) 自動詞「席ガかわる」
③ その人がどうなったのか 場焦点化他動詞構文を作る「人が席ヲかわる」
＝【〈場〉(＝その人) 全体としてどのように変化したのか】

³¹⁹ 『基礎日本語辞典』で森田は「目的意識」と結び付けて論じているが、その根底には「起点 - 経路 - 着点」という枠組みがあるとみるべきである。

「席をかわる」の類の分析で重要なことは、③の事態把握になっている点である。つまり、行為者と対象を分離しないで、二者を一体のものとして把握するという点である。「(髪につける) リボンをかえる」であれば、行為者は対象であるリボンを取り、それを自分に取り付けばいい。しかし「席をかえる」は概念上は「席 0」から「席 1」へ変更したとしても、それは必ずしも使役主が「席 0 に座る」状態から「席 1 に座る」状態への変更することを意味していない。そこがリボンの例とは異なる点である。つまり、【〈場〉(=その人)全体としてどのように変化したのか】を意味するということは、自分自身が移動しなければいけないのである。

これを占有の概念と結びつけるとどうなるか。行為者が自身の所属先としての〈場〉を「席 0」から「席 1」へとかえることを意味している。このように自分と〈場〉の関係が強化され、所属先としての〈場〉(=席)という関係に転換しているのである。このように考えれば、「～ヲ出る」が離脱する空間を対象化し、「～ヲ通る」が進む空間を経路として選択し対象化したように、今度は「～ヲかわる」が「両端空間(=起点+着点)を対象化」していると考えられる。したがって、正確に言えば「席をかわる」の「席」は、図 4.49 に示したような(拡張した)移動空間として捉えられているというよりは、起点空間の「席 0」と着点空間の「席 1」が合わさって両端空間として対象化され、自身の所属先として〈場〉(=席)が「席 0」から「席 1」へと実際に移動してかわることを意味しているのである。これを「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマに組み込むと図 4.53 の⑤として示すことができる。

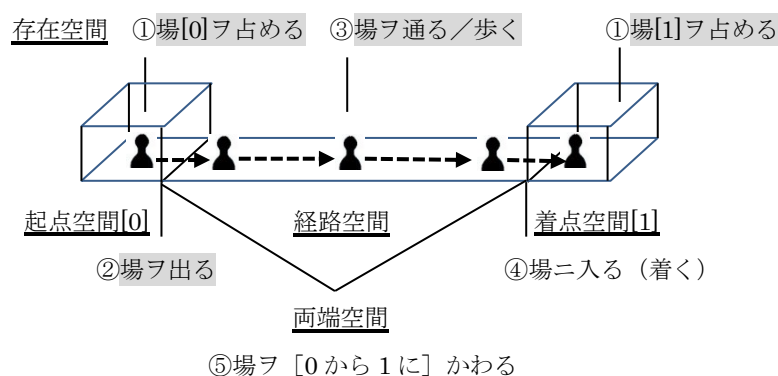


図 4.53 「起点 - 経路 - 着点」スキーマに組み込まれた「両端空間」

◆「終わる」への拡張

次に「席をかわる」の分析を応用して「仕事を終わる」のような「～ヲ終わる」を分析する。ここでも三つの事態把握の違いが重要である。

<三つの事態把握の言語化>（「終える」「終わる」の場合）

①人がモノに対して何をしたのか 使役変化他動詞「人が仕事ヲ終える」

- ②そのモノがどうなったのか (変化) 自動詞「仕事ガ終わる」
 ③その人がどうなったのか 場焦点化他動詞構文を作る「人が仕事ヲ終わる」
 = 【〈場〉 (=その人) 全体としてどのように変化したのか】

③の事態把握はどのようなものなのか、それを「席をかわる」を応用して考えてみたい。
 ③で共通しているのは、使役主と対象を分離せずに、一体のものとして捉えるという事態把握である。「席をかわる」では、自身が所属する〈場〉 (=席) を「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマの枠組みの中で移動すると分析した。「～ヲ終わる」はこの「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマの中にどのように組み込めるか。

「始まる」「続く」「終わる」はアスペクトの概念と通じる。そこで「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマを時空間に適用してみる。Jackendoff (1983 : 194-203) は場所理論 (Localist theory) に基づいた意味構造の分析で五つの意味の場 (semantic field) を設定した。その中に「状況の場」 (Circumstantial field) があり、場における存在と状況におけるイベントを次のように平行して捉えている。(id. : 199 を簡略化)

(350) Circumstantial field アスペクトに関する意味述語

start : [GO_{Circ} ([]_i, [Path TO_{Circ} ([]_i event]))]
 stop : [GO_{Circ} ([]_i, [Path FROM_{Circ} ([]_i event]))]
 be ~ing : [StateBE ([]_i, [Place AT_{Circ} ([]_i event]))]

(350) で注目すべき点は、動詞が表す「活動状況 (EVENT)」を〈場〉とみなした場合、始動を表す動詞 'start' は「TO : そこに至る」で、終結を表す動詞 'stop' は「FROM : そこから出る」で、進行は「AT : そこにいる」と表すことができるという点である。また、Smith (1991) では使役連鎖 (causal chain) とアスペクトのつながりを次のように示している。

(351) 使役連鎖 (causal chain) とアスペクトのつながり

Inchoative: focus on the coming about of a state but do not include the agent
 Inceptives: focus the entry into an event
 Egressives: focus the exit from an event
 Resultatives: focus on the end of the chain (Smith 1991 : 35)

ここでは始動相 (inceptives) は「イベントに入ること」、終結相 (egressives) は「イベントから出ること」と規定している。このような分析を踏まえて、本論文では「始まる」を「イベントに入ること」、「終わる」を「イベントから出ること」と規定する。そして図 4.53 を時空間に拡張して下のような「開始 - 継続 - 終結」のイメージスキーマを考える。

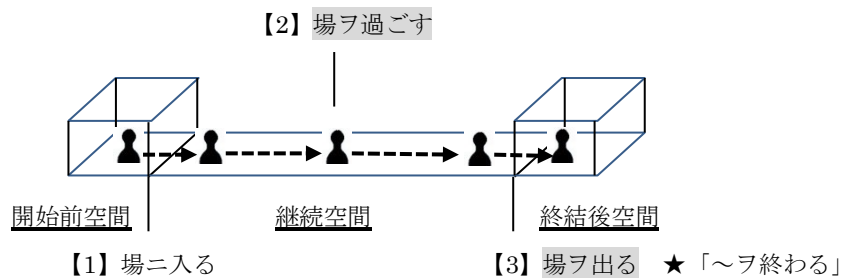


図 4.54 「開始 - 継続 - 終結」のイメージスキーマ

【1】の「始動」が「入る」という概念と結びついていることは、「会議に入る」のような表現があることから容易に理解できるだろう。「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマとの違いは、「に入る」と「を出る」の位置が反対になっていることである。【2】の継続空間は、「夏休みを海外で過ごす」「お正月を家族と過ごす」のような時空間がここに来る。そして【3】の「終結」が「出る」と結びついている。「議論の出口が見えない」のようなメタファーに「出る」とのつながりを認めることができるだろう。

人が作業を終えたこと、あるいは人の作業が終わったことについて、人がどうなったのかという視点で事態を把握すると、「人が作業を終わる」という構文が作られる。そしてそれは人と作業を一体のものとして捉えていると考えた。上に提案したイメージスキーマにそれを当てはめてみると、「～を出る」に相当するのが「～を終わる」であることがわかる。では、このように時空間における移動の概念と結びついた「～ヲ終わる」は「～ヲ終える」と何がどのように違うのだろうか。

動作主体と対象が分化せず一体的に結びついていることについては、既に須賀(1990)でも指摘されている。「終わる」の意味を行為と対象の一体性と関連付けて(352)～(354)の文を比較検討している(同上: 25より ×, ?の判断は原文のまま)

- (352) a. ×いやな宿題などは早く終わりたい。
 b. いやな宿題などは早く終えたい。
 c. いやな宿題を終わって、遊びに行った。

- (353) a. ? 退屈な読書は早く終わりたい。
 b. 退屈な読書は早く終えたい。
 c. 退屈な読書を終わって、遊びに行った。

- (354) a. 自己紹介は早く終わりたい。

- b. 自己紹介は早く終えたい。
- c. 自己紹介を終わって、席についた。

須賀（1990）は、（352a）が非文で（354a）が自然なのは、終わるのが「宿題」という「行為の対象」なのか「自己紹介」という「行為そのもの」なのかの違いによると考えている。

（353a）はその中間的な存在でやや許容度が落ちるという判断である。この判断は妥当なものだと考えられるが、最終的には「～ヲ終わる」「～ヲかわる」などを「自動詞形本来の意味する領域を越えるものではない」（同上：27）と結論づけている。

本論文では、動作主と対象の分離を前提にして対象の変化を表す自動詞が作る「仕事が終わる」と、両者が一体となって、主体の変化を表す自動詞が作る「仕事を終わる」は、同じ自動詞の形態をもちながらも、後者は主体と〈場〉の関係強化によって占有の概念に転換し、「継続空間」を対象化し、その空間からの離脱（占有から非占有への変化）を表すと分析される。本来は対象をガ格で表示するのに対して、ヲ格で表示するということは、概念化者の事態の把握が変わったのであり、「自動詞形本来の意味の領域」からシフトしていると考えるべきだと考える。

須賀（1990）が指摘したことと関連して、なぜ「～ヲ終わる」が「これで私の話を終わります」のような自身の行為を締めくくる定型句として用いられるようになったのかも、上に示した「開始 - 継続 - 終結」のスキーマによって説明できるだろう。自身がイベントの継続空間を移動するように捉えられ、その継続空間を対象化し、それを指して「これで（私は）この空間を離脱する」と述べているのである。つまり、自分が中心になりそれと切り離された対象に“働きかける”のではなく、自らその〈場〉を“出る”という捉え方にシフトしているのである。自身で「これで」と継続空間を対象化できることが、典型的な「～ヲ終わる」という表現形式の用法ということになる。これが須賀（1990）が指摘した対象によって一体性が異なると許容度もかわることの本質であると分析される。

現代語では言い切りの形やテ形で続く形では「～ヲ終わる」は広く使われるようになったが³²⁰、その中にあってなかなか「～ヲ終わる」が使い難い用法が存在する。例えば下に挙げた「刑（期）を終える」「出産を終える」などは、対象への働きかけのという把握が強く感じられる事態だと考えられる³²¹。継続空間を対象化し、自ら主体的にその場を「出る」という捉え方になりにくいのである。

（355） a. 五年間の刑期を終えて帰ってくる彼のために、町民たちは互いに金を出しあ

³²⁰ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で検索すると、「～を終える」（2921件）に対して「～を終わる」（1046件）である。（但し、そのうち国会会議録の「質問を終わります」が約280件で、3割弱を占めている）※検索条件は「終わる」「終える」は語彙素で、「を」は書字出現形である。

³²¹ 事態の把握は固定したものではなく、当然人によっても異なる。事実インターネット上の言語使用を観察すると、「刑期を終わる」「出産を終わる」は使われている。しかし、使いにくい状況であることは確かである。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では「刑/刑期を終える」は22件、「出産を終える」は17件ヒットする（※活用形を含む）が、「終わる」では1件もヒットしない。

って小さな劇場をつくってやった。(新潮絶版 100 冊[7])

- b. 私は (…略…) 無事出産を終えた後は母子別室で夜はしっかり休ませてもらい, (…略…) (BCCWJ[55])

逆に, 出来事の継続空間において, その段階 (区切り) があらかじめ設定されており, 対象化しやすい場合には, 「～を終わる」が現れやすいことが期待される。事実, 試合で「回」や「ラウンド」のような区切りがある場合, 「～回/ラウンドを終わって…」という言い方はよく用いられるようである。もちろんこの場合であっても, そのイベントの中の対象への働きかけが強くイメージされれば「～回/ラウンドを終えて…」という表現は用いられる。

- (356) a. [ゴルフで] 第3ラウンドを終わって, 優勝争いはこの4人に絞られた。2位のクーパーとは5打差。(BCCWJ[56])

- b. 接戦が予想されたが, 7回を終わって1-7と大差をつけられていた。

(BCCWJ[57])

4.8.2.6 「はずれる」

次に「音程をはずれる」を分析する。この「はずれる」の意味は「～ヲ離れる」と平行的に捉えて, 「音程 (という抽象的な空間) を離れる」ことであると分析するだけで済ませられると考えるかもしれない。確かに, 多義語である「はずれる」はここでは「～ヲ離れる」という意味になっており, ヲ格名詞句は離脱場所を示すという分析は正しい。しかし, よく観察すると, 「彼は音程をはずした」は「彼は音程をはずれた」と同じ事態を表すことができることがわかる。述語が異なる以上, 何らかの違いがあるはずである。異なる形式で出力されるということは, 異なる事態把握になっていることが予想される。単に移動の意味がある自動詞にく出所>のヲ格がついただけと指摘するだけでなく, 「音程をはずす」との違いを説明したいと考える³²²。ここでも三つの事態把握が重要なので, 確認しておく。ただし, ③はこのあとすぐに一部修正される。

<三つの事態把握の言語化> (「はずす」「はずれる」の場合)

- ①人がモノに対して何をしたのか 使役変化他動詞「人が音程ヲはずす」
②そのモノがどうなったのか (変化) 自動詞「音程ガはずれる」
③その人がどうなったのか 場焦点化他動詞構文を作る「人が音程ヲはずれる」
= 【<場> (=その人) 全体としてどのように変化したのか】

これまで「席をかわる」と「仕事をおわる」を分析してわかったことは, ①②は動作主と

³²² 「音をはずれる」と「音をはずす」が同じ事態を叙述することができるのは, 移動動詞として特殊である。リアルな空間の移動では, 「部屋を出る」と同じような意味で「部屋を出す」とは言えない。移動が抽象的な意味になっている場合でも, 「会社を首になる」と同じ意味で「会社を首にする」とは言えない。

対象の分離が前提であるのに対して、③は両者一体で、自らが〈場〉を離れたたり〈場〉に入ったりするということであった。このような考え方に基づいて「音程をはずれる」を分析してみたい。

まず「音程」という抽象的な概念だが、これは「二つの音の高低の差」(明鏡国語)という意味である。今問題となっている「音程をはずす」という場合の「はずす」は「一定の基準に合わせられなくなる、ずらす」(明鏡国語)という意味である。ここで注意しなければならないのは、「音程をはずす」という使役変化動詞自体がすでに非意図的な事態を表す動詞に拡張しているということである。つまり、「人が音程をはずす」というのは、「人がボタンをはずす」とは異なり、「その人の音程が正しい高さからずれる」という変化事象におてい、それがおこる〈場〉である人を焦点化し、その人の変化事象として述べたものである。ただし、「山田さんに音程をはずされて、弱った」のように受身文が成立することから、消極的ではあるが動作主としての地位は保っているため、使役変化動詞として認められると考えられる。したがって、冒頭に挙げた三つの事象把握を次のように修正する。

＜三つの事象把握の言語化＞(修正版「はずす」「はずれる」の場合)

- ①人がモノに対して何をしたのか 使役変化他動詞「人が音程ヲはずす」
- ②そのモノがどうなったのか (変化) 自動詞「音程ガはずれる」
- ③その人がどうなったのか 場焦点化他動詞構文を作る
 - [1]「人が音程ヲはずす」所有(反転型)³²³
 - [2]「人が音程ヲはずれる」占有(強化型)

③の[1]は所有への概念転換で、「音程」をその人の側面と捉え、「その人の側面(音程)が正しい位置から正しくない位置になる」という変化事象において、〈場〉としての人が、そのような変化結果(側面)を所有するという概念に転換したものである。

ここで③について、場焦点化他動詞構文であっても、概念転換を所有と占有の二つを設定することの意義が見てとれる。[1]は「人が、音程がはずれるという結果を所有する」という事象把握なのに対して、[2]は〈場〉を対象化してその〈場〉における何らかの移動を表す。「席をかわる」は起点空間と着点空間を対象化し、その間を移動するという把握に、「仕事をおわる」は「継続空間」を対象化して、そこを離れるという把握になっていた。「音程をはずれる」は、抽象的ではあるが「音の高低の空間」を対象化し、そこを離れるという把握になっていると分析できる。つまり、「自ら音の高低の空間を離れる」、あるいは概念を正確に解釈すれば、「正しい音の高低の立ち位置を離れる」という事象把握によって、自分の音程が正しくない状態になったことを表現していると言える。

以上まとめると、「音程をはずれる」の「はずれる」は有対自動詞の両用動詞化ではある

³²³ 所有の概念転換によるⅡ型の場焦点化他動詞構文は、使役変化他動詞があれば、それと同形態になると規定したため、[1]は「はずす」が用いられる。

が、使役変化他動詞がすでに場焦点化他動詞構文へと拡張しているという点で、先の「かわる」「おわる」とは異なる。また、実空間での移動を表す「席をかわる」、時空間での移動を表す「仕事を終わる」に対して、抽象的な「音の高低空間」というものが設定された点も異なる。これらの分析を踏まえて、最後に「～ヲ間違う」を分析したいと思う。

4.8.2.7 「まちがう」

「間違える」と「間違う」は次のような構文を作る。この三つの文を見ると、前節で分析した「はずす」「はずれる」との共通点が見て取れる。

- (357) a. 山田さんは、その問題の答を間違えた。
 b. 山田さんの答は、間違った／間違っている。
 c. 山田さんは、その問題の答を間違った。

「人が答を間違える」というのは、「わざと間違える」という場合を除き、通常は非意図的な事象であり、この文自体がすでに場焦点化他動詞構文になっているのではないかという点である。「田中さんがわたしを女性と間違える」は「わたしは田中さんに女性と間違えられる」のように受身文が成立するから、主語名詞は動作主としての地位を消極的なながらも保っており、使役変化動詞として認められると考えられる点も「はずす」と同じである。しかし、「音程をはずす」と「答を間違える」では、事象の構造（イベントスキーマ）が異なる。本論文では、「間違える」は生産事象＋再帰構造のイベントスキーマをもつと考える。

4.6.5 節で、思考動詞「思う」を分析するにあたって、生産事象＋再帰構造のイベントスキーマをもつと考え、「思われる」などの自発の概念を分析した。その際に示したのが次のものである。

再掲（＝161）

x が	m に働きかけて	z に	y を	V
太郎が	木を用いて	庭に	犬小屋を	作る。
①	②	③	④	⑤

①使役主 [x]（＝生産者）が

②材料 [m] に働きかけて

③ある場所 [z] に

④生産物 [y] を

⑤V：新たに発生／出現させる {作る, 炊く, 焼く, 書く…}

再掲 (=162)

x が m に働きかけて V

太郎が 水を 沸かす

① ② ⑤

cf. 太郎が お湯を 沸かす

① ④ ⑤

①使役主 (=生産者) が

②材料に働きかけて

⑤V: 状態変化させて結果物を発生/出現させる {沸かす, 炊く…}

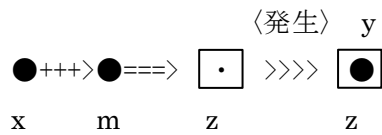


図 4.55 再掲 (=図 4.20) 生産事象のイベントスキーマ

この生産事象のイベントスキーマが再帰構造をもつと次のようになる。

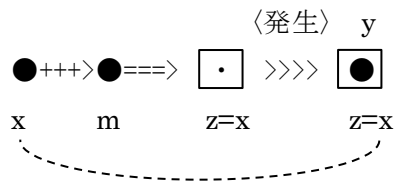


図 4.56 再掲 (=図 4.21) 生産事象+再帰構造のイベントスキーマ

このスキーマに「太郎が問題の答を間違える」を当てはめると次のようになる。

(358) x が m に働きかけて z=x 自身に yを V。
 太郎が 問題 ϕ 答えを 間違える
 ① ② ③ ④ ⑤

①使役主 [x] (=生産者) が

②材料 [m] に働きかけて (= [m] 判断をすべき思考対象)

③自分自身 [x] に

④誤った生産物 [y] を

⑤V: 新たに発生/出現させる

通常の生産動詞が表す事象と異なるのは、生産されたものが「誤った生産物」になっている点、そして再帰構造になっているので、「誤った生産物」が発生するのが、自分自身にな

っている点である。生産動詞が「米を炊く」とも「ご飯を炊く」とも言えるように、④だけでなく、②を目的語にすることもできると仮定する。この仮定は今後検証されなければいけないが、「問題の答えを間違える」という場合は、「問題」が働きかける材料に相当し、「答え」が誤った生産物に相当すると仮定しておく。辞書によれば「間違える」の意味は大きく二つに分けることができる。「方法や手順などを誤って正しくないことをしてしまう」と「正しいものとそうでないものを取り違える」（明鏡国語）である。このような意味の違いを、上の仮定に基づいて材料をヲ格にとるのか、生産物をヲ格にとるのかの違いだと考え、「間違える」を次のように規定する。

<「間違える」の意味と構文の型>

意味：人（x）が、ある判断すべき対象（m）を思考回路に送り込み、思考のプロセスを経て、誤った判断結果（y）を出力する

構文の型：

[A]：生産物（y=誤った判断結果）がヲ格名詞句になる構文

x が y を 間違える。 {文字・読み方・書き方・答え・解釈…}

※m も同時に表示する場合

x が m の y を 間違える。 {日本語の文字・名前の読み方・問題の答・計算の答・名前の書き方…}

[B]：材料（m=判断すべき対象）がヲ格名詞句になる構文

x が m を 間違える。 {道・場所・日にち・時間・名前・順番…}

※m の具体名を表示する場合

x が n1 と n2 を間違える。 {塩と砂糖・右と左・裏と表・土曜と日曜・アクセルとブレーキ・お姉さんと妹さん…}

※<誤って「p を q だ」だと考える>がベースになっている場合³²⁴

x が p を q と間違える。 {人の [モノ] を自分の [モノ] と・先生を学生と・A さんを B さんと・日曜日を月曜日と…}

(359)	構文の型	ヲ格名詞句 (y, m)
a. 田中さんは、 <u>答え</u> を間違えた。	[A]	y
b. 田中さんは、 <u>問題 2 の答</u> を間違えた。	[A]	m の y
c. 田中さんは、（駅に行く） <u>道</u> を間違えた。	[B]	m

³²⁴ 「～と考える」の補文構造には、「田中さんが親切な人だ（と考える）」だけでなく「田仲さんを親切な人だ（と考える）」も成立する。同じ理由で「～を～と間違える」という形式が成立すると考えられる。また、このパターンは、材料として「p」を表示すると同時に [A] に示した生産物（y）に相当する「q（だ）」も示されているので、[A] と対比して示せば、これは「y も同時に表示する場合」となる。

- | | | |
|------------------------------|-----|------------------------------|
| d. 田中さんは、 <u>調味料</u> を間違えた。 | [B] | m |
| e. 田中さんは、 <u>塩と砂糖</u> を間違えた。 | [B] | m : n1 と n2 |
| f. 田中さんは、 <u>塩</u> を砂糖と間違えた。 | [B] | m=p (y=q)
(「p を q だ」と考える) |

[A] も [B] も生産事象と再帰構造のイベントスキーマをベースに言語化されている点では同じだが、次の点で区別される。[A] は、書くことなら誤った「文字」、発声なら誤った「音声」、計算や問題なら誤った「答」、読解なら誤った「解釈」のように生産物がヲ格名詞句に来ている。したがって、その出力された結果について「～は間違っている」と言うことができる (360b,d,f)。

- (360) a. 田中さんは、問題 2 の答を間違えた。
 b. 問題 2 の答は間違っている。
 c. 田中さんは、首相の名前を間違えた。(「間違えて書いた／言った」の意)
 d. 首相の名前が間違っている。
 e. 田中さんは、その文章の解釈を間違えた。
 f. その (田中さんの) 文章の解釈は間違っている。

それに対して [B] は、判断対象の [m] がヲ格名詞句に来ているので、その名詞句自体を取り立てて「～は間違っている」とは言えない (361b)。言えるのは「その判断 (=生産物 : y) は間違っている」である (361c)。

- (361) a. あ、(駅に行く) 道を間違えた！
 b. [道に立ち、その道を指して言う場合]
 *この道は間違っている。³²⁵
 c. この道が正しいという判断は間違っている。

それでは、「ヲ間違う」の分析に入る。これまでの分析が正しければ、「ヲ間違う」は三つの事態把握の言語化の③・[2] に相当することが予測される。

<三つの事態把握の言語化>修正版

- | | |
|------------------------|--------------------|
| ①人がモノに対して何をしたのか | 使役変化他動詞「人が答えヲ間違える」 |
| ② <u>そのモノ</u> がどうなったのか | (変化) 自動詞「答えガ間違う」 |
| ③ <u>その人</u> がどうなったのか | 場焦点化他動詞構文を作る |

³²⁵ 地図のように生産物として出力された場合なら道を指して「この道は間違っている」と言える。しかし、道を間違った人が、自分の来た道を振り返って、「この道は間違っている」というのは不自然である。

[1]「人が答えヲ間違える」所有（Ⅲ型）

[2]「人が答えヲ間違う」占有（強化型）

図 4.57 に「ヲ間違える」イベントスキーマを示す。上段が使役変化動詞としての「間違える」である。そして下段が③・[1] の「間違える」である。これは、「〈場〉としての人に、誤った判断結果が出力し、その結果を所有していない状態から所有している状態に変化する」ことを表している。③・[2] は、「音程をはずす」の分析を踏まえて考えると、人が何かの〈場〉を対象化して、その〈場〉における移動事象として把握されると考えられる。それではどの〈場〉を対象化するのだろうか。

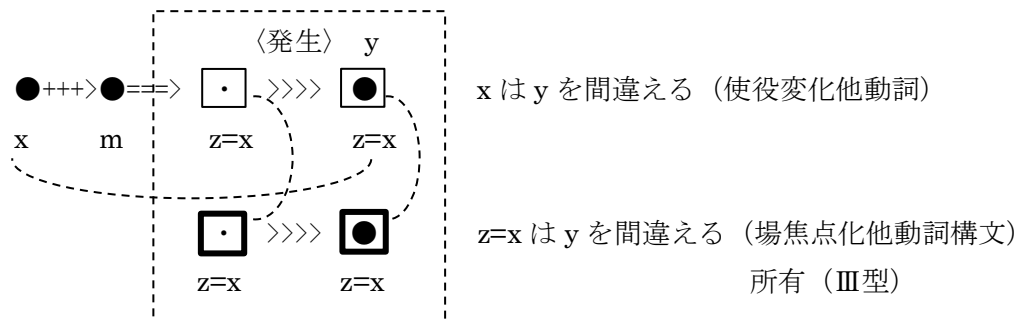


図 4.57 「～ヲ間違える/間違う」のイベントスキーマ

小柳（2011）ではそれを「思考空間」における移動と分析したが、本論文では「開始 - 継続 - 終結」のイメージスキーマの枠組みを拡張した上で、対象化される空間を「出力空間」および「顕在化空間」とであると修正する。これらの空間が何を指しているかを説明するに当たり、「間違える」のイベントスキーマをもう一步踏み込んで考察しておく。

図 4.56 は「生産事象+再帰構造」のイベントスキーマを表しており、これに「間違える」を当てはめて図 4.57 のイベントスキーマを考えた。しかし、これだけでは、自分自身の頭の中に「誤った判断結果」が発生することしか表していない。実際にはその「誤った判断結果」が何らかの形で顕在化（表出）することが（メトニミー的に）含意されるのが普通だ。例えば、「田中さんの名前を間違える」と言えば、正しい名前は田中さんなのに、「田村」という名前が自分の頭の中に発生すれば、その段階で「間違える」は成立している。しかし、実際にはさらにそれを文字に書いたり、声に出したりして“顕在化”する現象まで含むのが普通である。「傘を間違える」なら、実際は別の人の傘なのに、それを自分の傘だと勘違いするという誤った判断が頭の中に発生すれば、その段階で「間違える」は成立している。しかし、実際にはさらにそれを手にとったり、それを使ったり、持って帰ったりする行動まで含んでいることが普通である。同様に「ホテルで部屋を間違えた」と言えば、普通は別の部屋に行くという行動も含意している。

このような顕在化をイベントスキーマに付加し、それと対応させるように「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマを拡張させたものを図 4.58 に示す。この拡張したイメージスキーマは実際に人間が移動する空間ではなく、いわば‘思考空間’と呼ぶべき空間へと拡張している。生産事象+再帰構造のイベントスキーマとのつながりについては、「材料(m)」に働きかける部分が「起点」で「入力空間」に対応する。そして「経路」は「思考空間」に対応し、「着点」が「出力空間」に対応している、この出力空間で自身の頭の中に誤った判断結果が出力する。そして、さらにその出力が外部に行動や現象として顕在化するのが「顕在空間」である。

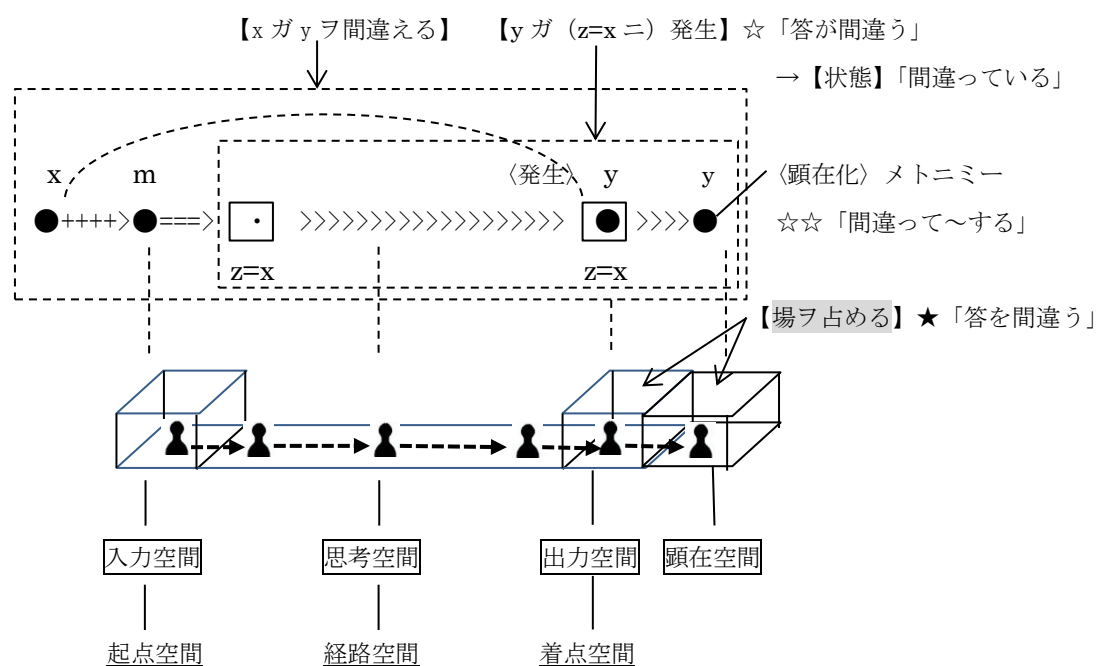


図 4.58 イベントスキーマ（上）と「開始 - 継続 - 終結」のイメージスキーマ（下）

それでは、この図 4.58 は③・[2] の「人が {答え/道} ヲ間違う」（占有）をどのように説明するのか。③・[2] の占有は、③・[1] の所有と場焦点化他動詞構文を作る点では一致するが、その〈場〉の焦点化の方法が異なる。人と〈場〉との関係が強化され、場が対象化されることによって、「その場を占める」という概念に転換し、それを基盤として「その場を出る」「その場を通る」という移動の概念に拡張するものである。

入力空間にインプットされた判断対象は「思考空間」を経て、さらに「出力空間」を通過して、顕在化される。このスキーマ全体を認知的枠組みとして、図に★で示した【場ヲ占める】という概念によって「ヲ間違う」が作られると考える。つまり、主語位置に来る人が誤った思考経路を選択した結果、誤った結果を出力した空間（出力空間）、あるいはそれとメトニミー的にリンクした、実際に何らかの行動として現れた空間（顕在化空間）に身

を置いているという事態把握である³²⁶。

それでは、③・[1]の「答え／道ヲ間違える」とどのように違うのだろうか。反転型の場焦点化他動詞構文(Ⅲ型)は、再帰構造をベースにしてその変件事象のみに焦点が当たり、〈場〉全体の変化として、誤った出力を所有する状態へと変化することを意味しており、第一に「出力空間」における変化結果の所有への状態変化を意味する。顕在化空間とはあくまでもメトニミー的なリンクによってその解釈がなされると考えられる。一方、③・[2]の「ヲ間違う」は、「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマをベースに誤った経路を選択した結果、誤った判断結果を出力する場へと入りその〈場〉を占めるだけでなく、さらに顕在化する空間へと進み、その〈場〉を占めることを意味している。

両者の概念化の違いをこのように仮定した場合、それは具体的にどのような意味の違いに結びつくだろうか。現時点では両者の意味の分化(棲み分け)は明確になっていないと考えられる。これは「ヲ間違う」という表現の発生が他の両用化動詞に比べて歴史が浅いことと関係があるだろう。明鏡国語辞典では「～ヲ間違う」は「間違える」の新しい言い方。「間違える」に比べてややくずれた語感がある」とだけ説明されている。また、「ヲ間違う」は場焦点化他動詞構文でありながら、「先生に名前を間違われる」ような迷惑受身が成立し、主語位置に立つ人名詞句が外項であるかのように振る舞うこともある。これも単に口語でくずれた言い方だと見るか。いずれにしても、「ヲ間違う」は「ヲ間違える」に覆いかぶさるようにその勢力を広げているようである。

たとえ意味の分化が明確になっていないとしても、ここで重要なことは、それまで「ヲ間違える」「ガ間違う」で十分対応できたところに、なぜ「ヲ間違う」という表現が生まれたのかということである。それは、それを生む概念化の基盤があったからだと考えるのが妥当だろう。その基盤が、上で分析した「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマに基づいた占有の概念だというのが本論文の分析である。事態把握の在り方として〈場〉を焦点化する把握が二つあり、一方は自分自身を〈場〉とみなし、誤った判断結果を所有するように変化したと把握することによって「ヲ間違える」(所有 B)を作りだし、もう一方は自分自身は思考空間を移動するモノとみなし、誤った思考経路を選択し、誤った判断結果を出力した〈場〉あるいは顕在化した〈場〉を占めると把握することによって「ヲ間違う」を作り出す。このように事態把握の在り方の違いが、生み出される構文の形式の差となって現れていると考える。

今後の検証をまたなければならないが、上述の違いが今後どのような用法の違いを見せるかを考える上で、興味深い事実を一つ指摘しておきたい。例えば、間違った使い方をしている人に対してその場で(362a)のように言うだろうか、それとも(362b)のように言

³²⁶ なお、「間違って～する」という表現(図 4.58 の☆☆)が「～ヲ間違う」という表現を生むきっかけ(の一つ)になった可能性がある。例えば、「食前に飲まなければならない薬を、【間違って】食後に飲む」のように、【間違って】が副詞句のように挿入される用法は広く用いられるが、そのような用法から直接ヲ格名詞句が動詞に接続し、「薬を間違って飲む」のような中間的な段階を経て「薬を間違う」という表現が用いられるようになった可能性も否定できない。

うだろうか³²⁷。興味深いのは、「ヲ間違う」が期待される以上に多く使われていることである。ここで「期待される以上に多い」というのは、「ヲ間違う」はどのヲ格名詞との共起であっても「ヲ間違える」と比べてその使用頻度が少ないことが予想される中で、(363)のような状況で話し言葉として「を間違っていますよ」が出現する頻度が高いという意味である。

(362) a. 「あのう、それ、使い方を間違えて (い) ますよ」

b. 「あのう、それ、使い方を間違って (い) ますよ」

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所) で調査したところ「ヲ間違える」と「ヲ間違う」の出現頻度はおよそ「3 対 1」である³²⁸。これを書き言葉における二つの表現の出現頻度の割合だと仮定する。一方、ネット上の言語資源を検索した結果を見ると、「使い方を間違えていますよ」と「使い方を間違っていますよ」ではおよそ「1.3 対 1」である。さらにヲ格名詞を指定しない場合、「ヲ間違えていますよ」と「ヲ間違っていますよ」の出現頻度は逆転しおよそ「1 対 1.3」である³²⁹。これを単に話し言葉としては「ヲ間違う」が広まっているからだと考えていいだろうか。大規模な会話コーパスでどのような場面で「ヲ間違う」がよく使われるかを調査してみる意義はあると思われる。

以上をまとめると、「ヲ間違える」と「ヲ間違う」は概念化のプロセスは異なるが、いまだ意味を分化させず、ほぼ同じ意味で用いられている。ただし、後者は話し言葉でだけた印象を与える。本論文の分析を踏まえて今後もし意味の分化が進むとしたらどのような場面かを推測してみると、誤った判断を顕在化させ、ある行動をとった（とっている）人に対して、その現場で誤りを指摘する場合で、「あなたは顕在化空間という〈場〉を占めている」という事態把握が活性化する場面ではないかと推測される。その結果使われるのが (363) のような自動詞の形態の「間違う」のテイル形とヲ格の組み合わせであるというのが、本論文の現時点での結論である。もちろん意味の分化が概念化の違いによるのか、それとも単に音節数が少なく言いやすい形式が好まれることによるのかについても考察する必

³²⁷ ちなみに、英語で間違い電話であることを相手に伝える場合には ‘You have the wrong number’ のように have が現れる。所有動詞が現れる点で、日本語の場焦点化他動詞構文としての「～ヲ間違える」との共通点がある。ただし、ナル型の日本語では変化結果という事態把握になり、一方英語では状態という事態把握になっている。

³²⁸ 動詞の活用形も含む。「ヲ間違える」は 642 件、「ヲ間違う」は 182 件である。

³²⁹ 検索日：2014/12/20 検索サイト google (<https://www.google.co.jp>) を利用。ヒット件数は次のとおりである。いずれも “ ” を用いてフレーズ検索をしている。なお、件数には普通体の「ている」および「い」が脱落した形態も含めている。「* を間違えていますよ / * を間違っていますよ」(23,680,000 件対 29,990,000 件)。google では助詞のみの場合とワイルドカードを意味する「*」を入れるのとはヒット件数に大きな差がある。筆者の見限り、前者の方法では該当する事例を正しく拾い切れていないようである。「使い方を間違えていますよ / 使い方を間違っていますよ」(161,270 件対 120,180 件)。ちなみに、このような使用例を調査するには、『日本語大規模書き言葉コーパス』ではサイズが小さく、用例を十分に拾うことができない。ネット上の言語資源を対象にした調査ではノイズが多いことが予想されるが、おおよその傾向を知るのには参考になると考えられる。

要があるだろう。

(363) (間違った判断結果を顕在化させた人に向かって、その現場で)

「あのう、〇〇を間違っ(い)ますよ」

〇〇 = {やり方・～し方・順番・手順, 部屋・道} など

4.8.3 所有と占有の概念化

この 4.8 節で分析した有対自動詞の両用動詞化の現象は、よく観察するとその内容は一様でないことがわかった。本論文ではいずれの場合も「～を＋【自動詞と同形態の動詞】」を場焦点化他動詞構文であると考えて分析した。その際に場焦点化他動詞構文を作りだす概念として所有 B と占有の二つのタイプがあることを示した。これを整理すると次のようになる。

表 4.13 有対自動詞の両用動詞化と場焦点化構文

	所有 B (反転型)	占有 (強化型)
口をあく	○	—
席をかわる	—	○
仕事を終わる	—	○
音程をはずれる	(音程をはずす)	○
答えを間違う	(答えを間違える)	○

場焦点化他動詞構文は、4.3.3 節で整理したように使役変化他動詞が存在する場合には、それと同一の形態になるのが原則である。そこでは次のように三つのタイプがあったとした。

(再掲) <場の焦点化による構文交替の動詞の形態について (修正版)>

[1] 「(〈原因事象〉 →) 〈BE〉 EXIST」 (存在・変化を表す自動詞構文)

[2] 「(〈原因事象〉 →) 〈BE〉 POSS」 (所有 A : 参照点構造自動詞構文)

[3] 「(〈原因事象〉 →) 〈BE〉 POSS」 (所有 B : 場焦点化他動詞構文)

自動詞構文[1][2]と他動詞構文[3]の動詞の形態に注目すると三つのタイプに分類できる

① [1] [2] と [3] の形態が同一である (両用動詞)

② [1] [2] は存在・変化を表す自動詞の形態で、[3] は使役変化他動詞と同じ形態

③ [1] [2] は存在・変化を表す自動詞の形態で、[3] が独自の形態をもつ

・欠かす : タイプ②の動詞「欠く」もある (⇔ [1] [2] 欠ける)

・切らす : タイプ③のみ (⇔ [1] [2] 切れる)

なお、③に該当する動詞を含め、その形態がもっぱら [3] の場焦点化他動詞構文

にしか用いられない場合、これを「場焦点化他動詞」と呼ぶ。

- ・変化を表す動詞：切らす、欠かす、亡くす、失う、など
- ・状態を表す動詞：要する、有する、誇る、擁する、帯びる、など

表 4.13 に示したように、「音程をはずす」「答を間違える」は上の規定の②のとおり、使役変化動詞と同一の形態で場焦点化他動詞構文を作る。前者はⅡ型で、後者はⅢ型である。ところが、それ以外は自動詞の形態で場焦点化他動詞構文を作る。その点では規定の①のタイプ（＝両用動詞）と共通点がある。本論文でこれらの動詞を有対自動詞の両用動詞化と呼ぶのはそのためである。

そして表を見て気が付くように、有対自動詞の両用動詞化は二つに分けて考える必要がある。所有 B による「口をあく」と、占有による他の四例である。所有 B は 4.1 節～4.5 節で分析してきたように、場が焦点化されて主語位置に来て、その場の「モノの非所有」から「モノの所有」の状態への変化あるいはその逆の変化として事態を把握することである。その所有 B で両用動詞として分析されたのが「(危険が/を) 伴う」「(芽が/を) 吹く」「(眠気が/を) 催す」であった。「(口が/を) あく」もこれと同様のタイプと考えられる。

一方、占有の概念は、場の焦点化という点は同じでも、反転型の所有 B と異なる。それが主語位置に来るわけではなく、存在主体と場の関係が強化され、場を対象化することによって、「主体が場を占める」という概念に転換し、それをベースにして「主体が場を出る/離れる」「主体が場を通る」「主体が二点間を移動する」のように把握されることを指す。このようなタイプになるのが他の四つの例である。場の対象化の在り方で整理すると次のようになる。

表 4.14 占有（強化型）の有対自動詞の両用動詞化に見られる移動の概念

	ベースとなるイメージスキーマ (下段：拡張スキーマ)	対象化される 空間	占有の概念と拡張
席をかわる	起点 - 経路 - 着点	「起点」と「着点」	二点間を移動
仕事を終わる	起点 - 経路 - 着点 開始 - 継続 - 終結	「経路」 「継続」	継続空間 (=イベント) を出る
音程をはずれる	※音の高低の空間	※音の高低の空間	正しい位置を離れる
答えを間違える	起点 - 経路 - 着点 \ メトニミー 入力 思考 出力 - [顕在]	着点 \ 出力 - [顕在]	出力空間/顕在空間 を占める

これらの構文で、「自動詞の形態」で「ヲ格名詞句」の組み合わせが選択されたのは、〈場〉を対象化し、占有の概念に転換し、「起点-経路-着点」のスキーマと重なることにより移動の概念と結び付いたためと結論づけられる。この点で「口をあく」とは異なるのである。

さて、この所有 B と占有の違いは、両用動詞化した用法の歴史的な変遷を見ると、興味

深いことがわかる。鈴木（1985）によれば、「口をあく」と同じタイプには「腹を立つ」「目を眠る」という表現もあったが消滅したらしい。そして、明治期に使われていたと見られる「腹を立つ」にしても、小説での用例が会話に現れることから、「はなしことばの世界で細々と生きていったのではなかろうか」（同上：108）と推測している。そして、4.8.2.2 節で紹介したように「目をあく」「口をあく」は現代語において衰退の傾向を見せている。

一方、「ヲ終わる」「ヲ間違う」は比較的新しく生まれた用法である。「ヲ終わる」については、鈴木（1985）が「明治期になってから生まれたものかと思われる」（同上：117）と述べている。また水谷（1964）によれば、国立国語研究所（1956）『現代雑誌九十種の用語用字』で「終わる」の使用例の調査結果を見ると、「ガ終わる」が延べ 43 例、「ヲ終わる」が延べ 11 例であったという。1976 年に出版された文化庁『言葉に関する問答集（第 2 集）』ではこの用法について「現代語では、「終わる」が自動詞にも他動詞にも用いられるようになったと考えざるを得ない」（文化庁 1976 [1995]：545）という見方と示しており、使用頻度が高まってきている状況が窺える。「ヲ間違う」についても 1983 年に出版された『言葉に関する問答集（第 9 集）』で「「間違う」と「間違える」も、今まさにゆれている言葉の一つであると言えるだろう」（同上：593）と述べていることから近年広まってきた用法であることが窺える。

このような変遷を踏まえると、有対自動詞の両用動詞化について言えば、所有 B と占有の違いは、衰退・消滅と広がりとの二つの流れを特徴付ける要因になっている可能性がある。占有は移動の概念が動機付けとなり生まれ、そして広がってきている。「席をかわる」という実空間での移動の概念から「仕事を終わる」という時空間という抽象的な空間での移動、さらには、思考空間という抽象的な空間での移動と実空間（顕在空間）の二つの空間を併せ持つ「答を間違う」へと拡張してきたのではないかと考えられる。

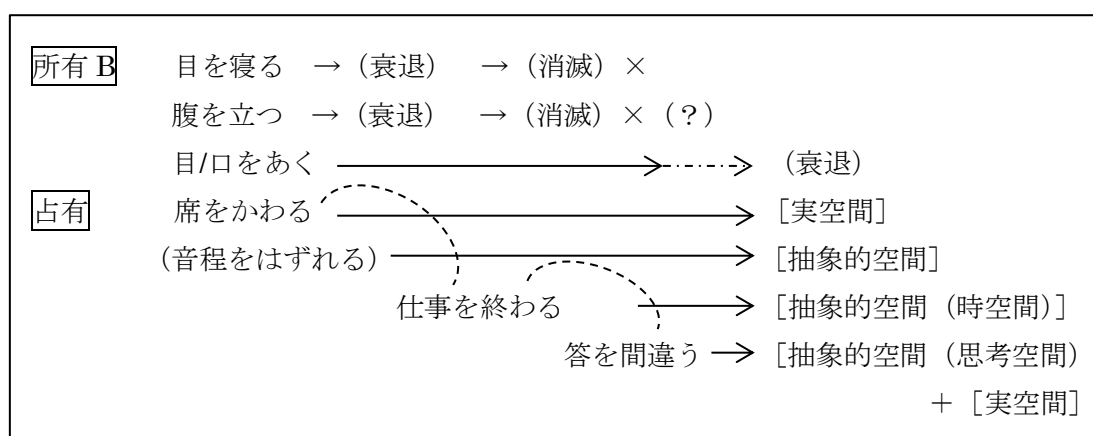


図 4.59 有対自動詞の両用動詞化の歴史的推移

4.8.4 語用論的効果

4.8 節の最後に「口をあく」の誤用論的効果について指摘しておきたい。前節で所有 B に分類される「目/口をあく」は衰退の方向にあると指摘したが、その中にあって、「口をあく」は口頭表現として「口をあいてください」という定型句が、特に歯科医によって使われているようである³³⁰。確かに全体的な傾向として「目/口をあく」は衰退の方向に行くだろうが、4.8.2.2 節での分析を踏まえれば、その場(=人)全体を特徴付けるような場面では「目/口をあいて…している」という表現は(縮小傾向ながらも)今後も使われるのではないかと推測される。それとは別に「口をあいてください」のような依頼表現での使用も、特定の場面での用法として今後も使われていくのではないかと推測される。

それを支える大きな要因は、丁寧のモダリティである。「コーヒーのほうをお持ちしました」「ご注文は以上でよろしかったですか」のような表現は業界のマニュアル用語として非難の対象となった。これらの表現の使用の是非は別として、言語現象として見た場合、直接的な表現を避けることによって「お客に丁寧に接しよう」という使用者の態度がそこに塗り込まれていると見ることができるだろう (cf. 飯田 2002, 北原編 2004)。このような視点で場焦点化他動詞構文としての「口をあいてください」を見れば、動作主体と対象を分離して、「(あなたが自分の) 口をあけてください」と依頼するよりも、両者が一体として把握され、「<口をあけていない状態>から<開けている状態>へとかわってください」という意味になる「口をあいてください」と言うほうが間接的な依頼表現になるという意識が使用者にあるのだろう。ここで一つ注意しなければいけないことは、非意図的な対象の変化を表す自動詞を用いて「てください」と言えば、間接的で丁寧になるというわけではない。そもそも日本語の文法では意図的にコントロールできない動きについて働きかけの表現を用いることはできない。運動の指導員が受講生に向かって「もう少し腕をあがってください」や「もう少し膝をまがってください」「ゆっくり首をまわってください」などと言えば非文法的だと感じられる³³¹。すなわち、対象変化を表す自動詞の「てください」という言い方が先に成立したのではなく、「目/口をあく」という表現が成立しており、その流

³³⁰ 筆者の経験では東京、埼玉の歯科医でこのような使用例を確認している。インターネット上の知識型検索サイトでもたびたび取り上げられている話題であるが、全国的なものかは調査が必要である。「目/口をあく」という用法に接することがほとんどない現代人にとって、「あいてください」という表現を奇異に感じる人が多いことが、掲示板などのやりとりからわかる。

³³¹ ネット上の日本語を観察すると、ストレッチで自分の体を伸ばす/倒す場合に、「伸びて/倒れてください」は使われるようである。これは、「伸びる」「倒れる」が「(体を) 伸ばす/倒す」という他動詞がありながら、ヲ格名詞句を動詞の側に取り込んで、まるで自動詞「座る」「立つ」「しゃがむ」などと同じように用いられるようになった例だと考えられる。事実、用例を観察すると、ヲ格名詞を取る例はまれである。その点で「目/口をあく」とは性質の異なるものだと考えられる。ちなみに「ひらく」「とじる」も両用動詞としての用法があるので、「{目/口/脚} を {ひらいて/とじて} ください」は成立する。ストレッチのやり方を紹介する文章として次のようなものがある。(下線は引用者による：アクセス日：2014/12/20 http://www.taiyodo-seitai.jp/stretch_upper)

やり方(背中1) 1.あぐらの姿勢をとり、片方の足を逆側の骨盤の上に乘せてください。2.腰をそらして背中を丸めずに体を前に倒してください。3.倒しきったら両腕を組んであまた方向に伸びます。やり方(背中2) 1.正座になりそのまま後ろに倒れます。2.倒しきったら両手を組んで頭方向に伸びてください。

れの中で語用論的な効果と相まって「口をあいてください」という表現が使われるようになったと考えるべきである。そのような心理的な基盤に場焦点化他動詞構文につながる所有 B の概念がかかわっているというのが本論文の結論である。

4.9 漢語サ変動詞と場焦点化他動詞構文

これまでの場焦点化他動詞構文は、和語動詞を中心に進めてきた。ここでは漢語サ変動詞を取り上げて分析する。そして、これまでの分析で提案したⅠ型、Ⅱ型、Ⅰ&Ⅱ型の区分が重要な意味をもつことを確認する。

4.9.1 漢語サ変動詞の自他の区分

影山（1996：202）はサ変動詞を意味概念によって「自動詞のみ」「他動詞のみ」「自他両用」の三つに分類した。

- (364) a. 自動詞のみ：事故が発生する，地価が下落する，火薬が爆発する，
水が蒸発する，株価が暴落する，ビルが乱立する
b. 他動詞のみ：ビルを爆破する，通行人を殺害する，家を新築する，
郊外を緑化する，顔を整形する，主張を正当化する
c. 自他両用：拡大する，縮小する，変形する，完備する，完成する，
正常化する，回転する，開店する，展開する，解散する，
実現する，解消する，具体化する

確かに影山が指摘しているように、自動詞のみになるのか他動詞のみになるのは恣意的ではなく、「実世界において原型的、典型的な状況がどのように認識されているかという基準」（同上：202）によっていると考えられる。しかし、影山（1996）、影山（2002）で示された「非対格性をもつ他動詞」という動詞クラスが存在を認めるならば、漢語サ変動詞についても、そのような動詞が認められるはずである。事実、自他で形態上の対立がないサ変動詞として「噴出する」「紛失する」するような非対格性をもつ動詞を挙げている。

- (365) a. 火口から煙が噴出している。
b. 火山が（火口から）煙を噴出している。（影山 1996：116）

- (366) a. 重要なデータが紛失した。
b. 彼は、重要なデータを紛失した。（影山 2002：141）

(364a) の「自動詞のみ」のリストで場焦点化他動詞構文を作るものがないか見てみると、「発生する」は実際に物が発生する意味を表す場合にはⅠ型を作る（367b）。それ以外の動

詞は (368) に示したように I 型が成立しないようである (*, ?? の判定は本論文の筆者による)。

- (367) a. 汚泥からガスが発生している。
b. 汚泥がガスを発生している。

- (368) a. あの交差点で事故が発生した。
b. *あの交差点は事故が発生した。
c. 東京ではバブルがはじけて {地価/株価} が {下落/暴落} した。
d. *東京はバブルがはじけて {地価/株価} を {下落/暴落} した。
e. そのビルで火薬が爆発した。
f. *そのビルは火薬を爆発した。
g. 湖から水が蒸発する。
h. ??/*湖が水を蒸発する。
i. この地区にビルが乱立している。
j. ??/*この地区はビルを乱立している。

(367b) と (368b) の違いは、4.2.4.3 節でも触れたように、物の発生は、発生母体の自律的な内部メカニズムを想定できるが、イベントの発生は、その〈場〉の内部から発生するわけではないという事態把握の違いに基づいている。(368j) が成立しがたいのは、4.1.5 節で論じたように、存在物の多さを表す場合、「～に～が富む」がそうであったように、日本語は自動詞から場焦点化他動詞構文 (所有 B) を作りにくいことが影響していると考えられる。場の特徴付けの場合には「この地区にはビルが乱立している」のように題目化する (所有 A) のが一般的である。

次に (364c) で自他両用に分類された動詞について、使役起動交替をする自他両用なのか、それとも場焦点化他動詞構文を作る自他両用なのかを調べてみる。影山 (1996) は「使役構造を基にして、そこから反使役化によって自動詞が派生されている」として、その根拠を (369) ～ (371) に示したように「他動詞用法と自動詞用法では自動詞用法のほうに意味的・認知的制限が観察される」(同上: 203) ことを挙げ、具体的には「変化対象の自力ないしは内在的コントロールが認められる場合だけ自動詞が成り立っている」(同上: 204) と指摘している。

- (369) a. ナポレオンがフランス領土を拡大した。
a'. フランス領土が拡大した
b. コピー機を使って、図面を拡大した。
b'. * (コピー機で) 図面が拡大した。 (同上: 203)

- (370) a. 水を分解すると水素と酸素に分かれる。
 a'. 水が酸素と水素に分解した。
 b. 時計をばらばらに分解した。
 b'. ?*時計がばらばらに分解した。 (同上：203-204)

- (371) a. ボクシングでなぐられて、顔が変形した。
 b. *深層構造が表層構造に変形した。 (同上：204)

影山の分析は妥当だと考えられるが、すべてが反使役化とみなしていいかは疑問が残る。自動詞文が「ひとりでに～する」とは言い難く、「難なく～する」のほうがふさわし場合は、脱使役化が起きていると言えるのではないだろうか。

- (372) a. すべての階に冷暖房を完備する。
 a'. すべての階に冷暖房が完備する。(*ひとりでに／難なく完備する)
 b. 南青山にブティックを開店する。
 b'. 南青山にブティックが開店する。(*ひとりでに／難なく開店する)
 c. 海外に事業を展開する。
 c'. 海外に事業が展開する。(??ひとりでに／難なく展開する) ³³²

反使役化であれ、脱使役化であれ、他動詞文のほうは動作主と対象が分離している点は同じである。それでは、両者がモノと〈場〉として一体化している場焦点化他動詞構文が成立する動詞はここにあるだろうか。まず「拡大/縮小する」はⅡ型が成立する。「国」と「領土」は「主体・側面 (広さ)」である。反対語の「縮小する」も同様にⅡ型が成立する³³³。

- (373) a. ナポレオンがフランスの領土を拡大した。(使役変化)
 b. フランスの領土が拡大した。(変化自動詞構文)
 c. フランスが領土を拡大した。(＜状態変化：Ⅱ型)

次に「完備する」は「移動事象」が原因として読み込まれて成立するⅡ型の場焦点化他動詞構文を作る。「そのかばんはかわいいストラップを付けている」と同じタイプである。

- (374) a. すべての階に冷暖房を完備する。(使役変化)

³³² 「議論が展開する」では、「ひとりでに展開する」と言えそう。共起する語によって異なる。

³³³ 「拡大・縮小する」は自動詞用法では、自律的な変化事象を表現できるが、それに対応する、つまりⅠ型の場焦点化他動詞構文は作らないか、非常に作りにくいと考えられる。(i) ヨーロッパで戦争が拡大した。(ii) ??/*ヨーロッパは戦争を拡大した。

- b. すべての階は冷暖房を完備している。(＜移動：Ⅱ型)

以下の四つの動詞（実現・解散・解消・完成する）は、使役変化他動詞構文と場焦点化他動詞構文が見かけ上は同じである。(a)は動作主（太郎、彼ら、二人、次郎）が「何をしたか」と問うた場合の答えに相当するもので、(c)は場としての人（太郎、バンド、二人、次郎）が「どういう状態になったか」と問うた場合の答えに相当するものと考えて、区別しておく。

(375a)の「～を実現する」は生産事象と再帰が組み合わさったイベントスキーマを作る。「何かに働きかけて願っていることが自分自身において発生するようにする」という概念である³³⁴。(375c)はその発生事象に焦点が当たって作られるⅢ型である。

- (375) a. 太郎は夢を実現した。(＝実現させた：「何をしたか」の答え)
b. 太郎の夢が実現した。
c. 太郎は夢を実現した。(＜使役発生：Ⅲ型「どうなったのか」の答え)

(376a)の「～を解散する」は使役消失事象と再帰が組み合わさったイベントスキーマを作る。「自分達に働きかけて、団体としてのつながりを消失させる」という概念である。(376c)はその消失事象に焦点が当たって作られるⅢ型である。自然解散という用語もあるように、非意図的な消失事象も関与する場合はⅠ&Ⅲ型になるだろう。

- (376) a. 彼らはバンドを解散した。(＝解散させた)³³⁵
b. 彼らのバンドが解散した。
c. 彼らはバンドを解散した。(＜使役消失：Ⅲ型)

(377a)の「～を解消する」は使役消失事象と再帰が組み合わさったイベントスキーマを作る。「自分達に働きかけて、他者とのつながりを消失させる」という概念である。(377c)はその消失事象に焦点が当たって作られるⅢ型である。Ⅰ&Ⅲ型が想定できる点は「解散」と同じである。

- (377) a. 二人は婚約関係を解消した。(＝解消させた)³³⁶
b. 二人の婚約関係が解消した。
c. (親に反対され/話し合って)

³³⁴ 実現した結果、具体的に外部に発生するモノはメトニミー的にリンクしているもので、「夢が実現する」の「夢」そのものは自分自身の中に実現すると考えて再帰と考えておく。

³³⁵ 「解散させる」という使役態は、自分自身がかかわる場合にも使えるが、普通は第三者が主語になる場合である。「両親が息子の（所属している）バンドを解散させた」

³³⁶ 「解散する」と同様で、「解消させる」という使役態は、自分自身がかかわる場合にも使えるが、普通は第三者が主語になる場合である。「両親が息子の婚約を解消させた」

二人は婚約関係を解消した。(＜使役消失：Ⅲ型)

(378a) の「～を完成する」は「～を終える」に対応し、(378b) は「～を終わる」に対応していると考えられる。つまり、占有の場合焦点化他動詞構文である。

- (378) a. 次郎はログハウスを完成した。(＝完成させた)
b. 次郎のログハウスが完成した。
c. 次郎はログハウスを完成した。(占有：強化型の場合焦点化他動詞構文)

なお、影山が挙げた (364b) の「他動詞のみ」の中で「家を新築する」「顔を整形する」は使役主を主語に立てる (379a, b) 以外に、行為の受け手を主語に立てる他動詞文 (379a', b') が成立する。本論文では後者も場合焦点化他動詞構文の一種であると考え、これは 4.10 節の「介在性の他動詞構文」とつながっている、そこで改めて取り上げて論じる。4.7.6 節で紹介した「足を切断する」も同様に解釈できる場合がある。

- (379) a. 建築業者が田中さんの家を新築した。
a'. 田中さんは家を新築した。
b. 日本で有名な美容外科医が田中さんの顔を整形した。
b'. 田中さんは顔を整形した
c. 外科医が糖尿病の田中さんの右足を切断した。
c'. 田中さんは、糖尿病のため、右足を切断した。

次に金 (2004) が挙げている自他両用動詞について取り上げる。金は上掲の影山 (1996) が示した、他動詞が基本で反使役化によって自動詞が派生し、自動詞のほうに使用制限があるという点に反論し、自動詞が元で他動詞側に制限がある漢語サ変動詞を取り上げて分析している。例えば「回復する」は (381b) のように他動詞側に制限がある。

- (380) a. イラクとの国交が回復した。
b. ヨルダンがイラクとの国交を回復した。(同上：91 下線は原文のまま)

- (381) a. 景気が回復した。
b. *経済学者が景気を回復した。(同上：91 下線は原文のまま)

このような振る舞いを見せる漢語サ変動詞を、モノ名詞をとるかイベント名詞をとるかで区別して次の動詞を挙げている。() 内の語は影山 (1996) と重なっているもので、「する」は省略してある。

(382) a. モノ名詞をとる

喪失, 一変, 回復, 紛失, (解散) 全焼, 集中, 発症, 等 (同上: 95)

b. イベント名詞をとる

中断, 停止, 結束, 完了, 終了, 復活, 等 (同上: 96)

上記のうち影山 (1996) の例と重なっていないものを取り上げて, 場焦点化他動詞構文を作るか確認する。金 (2004) はこのような他動詞用法に制限をもつのは, 再帰性をもつ場合に限られると結論づけている。金自身は「再帰性」を動詞の再帰的用法ではなく, 再帰の意味にしかない性質であると規定しているようである³³⁷。「再帰」という用語をどのような意味で用いるかにもよるが, 本論文でたびたび指摘しているように, 再帰の概念を用いた説明の場合, 確かに金 (2004) の研究のようにある特定の分野に限った分析では合理的に説明ができる。しかし, そこで分析されている統語的振る舞いは, 根源的には使役変化とは異なる事態の把握がヲ格名詞句を伴って他動詞構文として言語化されている現象だと考える。自動詞文が元になり他動詞文の成立に制限があるとは一体どういうことを意味しているのか。そこに再帰性という共通の特徴があることは, どんな意義があるのか。本論文では, それを存在から所有の概念への転換であるという視点から, 再帰の概念でないものを含めて, 統一的にその生成原理を明らかにするものである。したがって, 再帰の概念が関係しているという事実は支持するが, それは場焦点化他動詞構文という大きな枠組みの中で分析されるべきだと主張する。以下で本論文の分析にどのように組み込まれるのかを示す。

まず (382a) の動詞を見てみる。「発症する」は発生事象が読み込まれて I 型を作る (4.2 節)。「彼に熱が出る」と「彼は熱を出す」の関係と同じである。

(383) a. 彼に肝炎が発症した。

b. 彼は肝炎を発症した。 (I 型)

「喪失・紛失する」は消失事象が読み込まれて I 型または I & II 型を作る (4.3 節)。「彼 {から/の} 戦意がなくなる」「彼は戦意を失う」, そして「彼の書類がなくなる」「彼は書類をなくす」と同じ関係である。

(384) a. 彼 {から/の} 戦意が喪失した。

b. 彼は戦意を喪失した。 (I 型/ I & II 型)

(385) a. 彼の重要な書類が紛失した。

³³⁷ 「目的語に対して主語との関わりを要求する」(同上: 97) と規定している。

b. 彼は重要な書類を紛失した。³³⁸ (I 型/I & II 型)

「全焼する」(「半焼する」も同様)は、「N1 の N2」が「全体-部分」あるいは「所有者 - 所有物」の関係で、消失の概念につながる変化事象が読み込まれて I & II 型を作る (4.7.5 節)。「寺の本堂が全部／半分焼ける」「寺が本堂を全部／半分焼く」と同じ関係である。

(386) a. 火事で、その寺の本堂が全焼／半焼した。

b. 火事で、その寺は本堂を全焼／半焼した。(I 型/I & II 型)

「一変する」は「N1 の N2」が「主体-側面 (=形)」の関係で、変化事象が読み込まれて I & II 型を作る。「母親の態度ががらりと変わる」「母親が態度をがらりと変える」と同じ関係である。

(387) a. 娘の話を聞いて、母親の態度が一変した。

b. 娘の話を聞いて、母親は態度を一変した。(I 型/I & II 型)

金 (2003) が、影山 (1996) の分析の反例として挙げた「回復する」は、発生の概念であると考える。つまり「当事者において再び元の良い状態が発生する」という意味である。金は主語名詞句とヲ格名詞句が「N1 の N2」の関係になることのみに注目しているが、発生の概念がベースになっていると考えれば、(388a,b) と (389a,b,c) は同じように考えることができる。つまり、(380b) で他動詞の用法とされた「～を回復する」は、使役変化他動詞ではなく、場焦点化他動詞である。そのため、「回復する」は (381b) のように行為者を主語にした使役変化他動詞構文では使うことはできず、「回復させる」を用いることになる³³⁹。他動詞構文を使役変化によるものと〈場〉の焦点化によるものと二つに分けて分析することの重要性がここでも見てとれる。

(388) a. しばらくして彼において意識が回復した。

b. しばらくして彼は意識を回復した。(I 型)

³³⁸ 「紛失する」という動詞の場合、必ずしも「紛失物の所有者」と「(非意図的であれ)紛失という事態を引き起こした人」が同じというわけではない。(i) 田中さんの書類が紛失した。(ii) 佐藤さんは田中さんの書類を紛失した。しかし、この場合であっても、(i) と (ii) が同一の事態を別の視点から述べているのであれば、(i) は「(佐藤さんが管理していた)田中さんの書類が紛失した」ということであり、このような「管理」も一時的な所有と捉えれば、(ii) を所有の概念をもつ場焦点化他動詞構文(「所有」から「非所有」への変化)として分析することにまったく問題はないと考える。つまり、「所有」のレベル(意味)が異なるだけで、どのレベルの「所有者」を〈場〉として取り立てるかの違いである。

³³⁹ なお、影山 (1996) が両用動詞としてあげた「正常化する」は、概念としては発生と変化の両方を併せ持ち、回復すると類似しているが、「～する」の形で使役変化他動詞としても使える点で異なる。場焦点化他動詞構文は発生事象をベースに I 型が、変化事象をベースに II 型が作られると考えられる。

- (389) a. A 国において B 国との国交が回復した。
 b. A 国と B 国において国交が回復した。
 c. A 国が B 国との国交を回復した。 (I 型)
 d. *経済学者が景気を回復した。(金 2004 : 91)
 f. 経済学者は景気を回復させようといろいろな対策を考えた。

「集中する」は(390a)のように外部から受け手に向かう動きと、(391a)のように自身の内部での心の働きの二つがある。前者では場焦点化他動詞構文は成立しない。後者では一種の再帰構造になっており、自身への働きかけは(391c)のように「させる」という形で用いることもあるが、同じ意味で「する」を用いることもできる。状態変化を表す場焦点化他動詞構文(391b)の解釈は難しいようである³⁴⁰。

- (390) a. {彼・私} に {攻撃・非難・批判・人気・関心} が集中する。
 b. * {彼・私} は {攻撃・非難・批判・人気・関心} を集中する。

- (391) a. (*自分自身に) {意識・神経・気持ち} が集中する。
 b. ??/*彼は意識を(自分自身に)集中する。(I & III 型)
 c. 彼は意識を(自分自身に)集中させる (=集中する)。

次に(382b)の動詞を見てみる。金(2004)では主語名詞句とヲ格名詞句が「N1 の N2」という関係で成立するかのチェックをしているだけで、その「N1 の N2」が一体どのような関係なのかまで踏み込んで分析はされていない。この(382b)に挙げられた動詞は、大きく二つに分けられるだろう、一つの大きなグループは「中断・停止・完了・終了する」で、これらはアスペクトに関するものであり、出来事の過程について叙述する動詞である。いずれも「開始 - 継続 - 終結」のイメージスキーマの枠組みで継続空間を対象化し、「その場を出る/離れる」という概念を表し³⁴¹、占有の概念をもつ場焦点化他動詞構文を作る³⁴²。

- (392) 太郎は作業を {中断・停止・完了・終了} した。
 (移動の概念：作業のイベント空間を出る) cf. 作業を終える／作業を終わる

残りの「結束する」「復活する」は金(2004)には例文が挙げられていないため、どのような用法を指しているのか不明である。「復活する」は(393a)のように「ある場において以前あったモノが再び発生する」という概念をもつと考えられる。使役(発生)変化の場

³⁴⁰ 再帰構造をもち自身の体に直接働きかける「回転する」(影山 1996)も同じだと考えられる。「体を回転させる」意味で「体を回転する」を用いることができる。

³⁴¹ 「中断」は「一時的に出る/離れる」という移動の概念と対応していると考ええる。

³⁴² 「占有」の概念をもつ場焦点化他動詞構文については、4.8.2.4 節、4.8.2.5 節を参照されたい。

合には、通常「復活させる」が用いられる (393b) ³⁴³。(393c) は (a) の〈場〉を焦点化した場焦点化他動詞構文である。

- (393) a. その村に 100 年前に途絶えていた祭りが復活した。
b. 村人がその村に 100 年前に途絶えていた祭りを復活させた/??復活した。
c. その村は 100 年前に途絶えていた祭りを復活した。

以上まとめると、「自動詞のみ」の概念をもつとされた動詞の中では「発生する」、自他両用動詞とされる中では「発症・復活・全焼・一変・拡大・縮小・完備・実現・解散・解消・回復する」が場焦点化他動詞構文を作ることがわかった。そして「中断・停止・完了・終了・完成する」は「終わる」がそうであったように占有概念に基づく場焦点化他動詞構文（強化型）を作ることがわかった。

4.9.2 場焦点化他動詞構文のタイプと制約

前節で観察したように、漢語サ変動詞も各タイプの場焦点化他動詞構文を作る。しかし、その統語的な振る舞いが和語動詞とまったく同じというわけではない。例えば、漢語サ変動詞「下落・暴落する」は「急激に・大幅に下げる／下がる」に相当する意味をもつと考えられるが、和語動詞「下げる」を用いた (394a) は成立するのに対して「下落・暴落する」を用いた (394b) は場焦点化他動詞構文が成立しない。これはなぜか。場焦点化他動詞構文は、属性叙述になると許容度が上がる場合があるが³⁴⁴、下の文はそのような操作をしても許容度が上がらないようである (394c)。

- (394) a. 東京はバブルがはじけて {地価／株価} を大幅に下げた。
b. *東京はバブルがはじけて {地価／株価} を {下落／暴落} した。
c. *大都市というものはバブルがはじけると {地価／株価} を {下落／暴落} する。

また、「全体が変化してその〈場〉からなくなる」という意味では共通していると思われる「全焼する」と「全滅する」では、前者 (395a) だけが場焦点化他動詞構文が成立し、後者 (395b) は成立しない。その一方で、類似の意味をもつ和語動詞「焼く」「失う」では (396) のように場焦点化他動詞構文は成立する。

- (395) a. 山田さんは、昨晚の火事で自宅を全焼した。
b. *ナポレオンは、東ヨーロッパでの戦闘で部隊を全滅した。

³⁴³ 明鏡国語辞典は「～を復活する/復活させる」では、後者が一般的だと解説している。

³⁴⁴ 4.2.4.5 「所有と〈場〉の特徴付け」および 4.7.6.3 「事象タイプとのつながり」を参照されたい。

- (396) a. 山田さんは、昨晚の火事で自宅を全て焼いた。
b. ナポレオンは、東ヨーロッパでの戦闘で部隊全員を失った。

さらに、「権利がなくなる」ことについて述べる場合、「失う」は場焦点化他動詞構文が成立する。しかし「消滅する」は「権利が消滅する」と言えるが、「権利を消滅する」は成立しない。

- (397) a. 山田さんは、その契約書にサインした時点で、すべての権利を失った。
b. *山田さんは、その契約書にサインした時点で、すべての権利を消滅した。

このように類似の意味をもつ漢語サ変動詞でも場焦点化他動詞構文が成立する場合としない場合があるのはなぜか。また、類似の意味をもつ和語動詞と漢語サ変動詞で、前者は成立するのに、後方で成立しない場合があるのはなぜか。前節で観察したように、漢語サ変動詞だからという理由だけで場焦点化他動詞構文が成立しないわけではない。事実、多くの漢語サ変動詞において成立している。そこで、とっかかりとしてこれまで本論文で扱った漢語サ変動詞を「所有」「占有」の別に、さらに読み込まれる事象別に整理してみる。Ⅰ型とⅠ＆Ⅱ型の区分は文脈によるものが大きいので、連続しているものとしておく。×印を付けた動詞は場焦点化他動詞構文を作らないものであるが、参考までに意味が類似する動詞のグループに入れておく。動詞に下線が引かれているものは、他動詞構文でのみ用いられる動詞で、他の動詞はすべて変化自動詞構文の「～がV」と場焦点化他動詞構文の「～をV」の両方の構文を作る。スルは省略してある。

表 4.15 場焦点化他動詞構文を作る漢語サ変動詞の分類

所有		存在/所有の原因として読み込まれる事象				
	存在	発生 >	消失 >	存続 >	移動 >	状態変化 >
Ⅰ型 Ⅰ＆Ⅱ型	<u>所有</u>	(ガスが)発生・ 噴出・発症・ 輩出・回復・ 復活・正常化 ×勃発・×乱立 ×(事故が)発生	紛失・消失・ 喪失・流出・ 消耗 ×滅亡 ×消滅	存続・持続・ <u>保持・維持</u> ・ ×残存		全焼・半焼・ 一変・ ×爆発×蒸発 ×下落×暴落 ×全滅×壊滅
Ⅱ型	<u>表現</u> <u>表示</u>	正常化			完備 <u>設置・削除</u>	拡大・縮小・
Ⅲ型 Ⅰ＆Ⅲ型		実現	解散・解消		?集中	
占有	中断・停止・完了・終了・完成					

場焦点化他動詞構文を作る動詞と作らない動詞を見ると、所有の概念化のテンプレートによって事態を把握できるかによると言える。これは場焦点化他動詞構文の定義および成立条件から当然の帰結として導き出されるものである。〈場〉が、そこに存在するモノによって特徴付けられるという把握によって所有の概念に転換し、〈場〉が焦点化されて成立するのが場焦点化他動詞構文（所有 B：反転型）である。したがって、〈場〉と対象物にそのような関係が認められない場合は、所有の概念に転換しないと考えられる。つまり、漢語サ変動詞で場焦点化他動詞構文を作らないものは、場は背景化されたままで、対象そのものの発生・消失・存続に焦点が当てられて概念化する動詞であると分析できる。「腐敗物からガスが発生する」は「ガスを発生する」と言えるのに、「交差点で事故が発生する」は「事故が発生する」と言えないのはそれを端的に物語っている。「戦争が勃発する」も同様である。「ある場からあるモノが消える」という概念を表していても、〈場〉との関係で概念化する「紛失・消失・喪失・流失・消耗する」は場焦点他動詞構文を作るが、「滅亡・消滅する」は、〈場〉が背景化したままで対象物にしか焦点が当たらないため概念転換せず、場焦点化他動詞構文を作らない。存続事象が読み込まれる場合も事情は同じで、「存続・持続・保持・維持する」は〈場〉と対象の関係として把握し概念転換するが、「残存する」は対象物に際立ちを与え、場所は背景されることが要求される動詞ということになる。

状態変化は 4.7 節で論じたように、位置変化のメタファー転換として捉え、本論文では、「主体が、変化した「側面」「部分」「(分離可能) 所有物」を所有するようになる」という概念へと転換することによって場焦点化他動詞構文が作られると分析した。そして、4.7.6 節で示したような制約①～④が課せられると考えた。成立しやすいのは、物の「発生」「消失」の概念と結びつきやすいもので、さらに「発生」の拡張として「成長」を表す変化事象、あるいは「消失」したと同然と見なされる「損壊」を表す場合だと考えた。いずれにしても、主体あるは全体と「側面」「部分」「(分離可能) 所有物」の二者の関係が所有として（一体のものとして）把握されることが必要である。

このような視点で改めて状態変化が読み込まれるグループで場焦点化他動詞構文が成立するものと成立しないものを見てみる。「全焼・半焼する」は状態変化だが、消失の概念と結びつきが強く、「全体-部分」の関係（例文 386）はもちろん、所有者-（分離可能）所有物の場合でも、所有者の履歴の顕著な変化として把握されるため、場焦点化他動詞構文が成立する。「一変する」は〈場〉全体が 180 度変わるという意味であり、〈場〉を焦点化し、その特徴付けを述べるという構文の成立条件をクリアーしている（例文 387）。ところが、「蒸発する」は対象物の変化そのものに焦点が当たり、蒸発するモノと〈場〉の二者関係として把握しにくい。そのため、水（分）が存在する〈場〉は背景化されたままで、概念が転換しないと考えられる。

- (398) a. その湖の水は、この異常気象のせいで、そのほとんどが蒸発した。
 b. ??その湖は、この異常気象のせいで、そのほとんどの水を蒸発した。

しかし、湖と水ではなく、植物の場合、消失母体と水の二者の関係が注目され、その〈場〉からの消失事象であると把握されるようになり、「〈場〉が水を蒸発する」が比較的成立しやすくなる。それが(399)のように属性叙述ならば、さらに許容度が上がることは、これまでの分析で示したとおりである。(4.7.6.3 節も参照されたい)

(399) a. 植物の葉は赤外線を多く反射するうえ、葉の気孔から水分を蒸発するため、
葉温が気温より1～4度低くなる。(朝日新聞 1985 年 1 月 1 日)

b. 植物は葉の気孔から水分を蒸発する際、周りの熱を奪う作用がある。

(朝日新聞 2005 年 5 月 20 日群馬版)

「全滅・壊滅する」は、すべてがなくなるという点では「全焼する」と違いがないように感じるかもしれない。しかし、家は「居住者」との関係において一体のものとして把握しやすいが、「全滅・壊滅」は対象物の変化にのみ焦点が当たるため場焦点化他動詞構文が成立しないと考えられる。

それでは類似した意味をもつ和語動詞と漢語サ変動詞の振る舞いの違い(例文 394, 397)はどのように説明できるのだろうか。上述の分析が正しければ、和語動詞のほうは、対象のみに焦点を当てるだけでなく、二者の関係にも注目して事態を概念化できることになる。和語動詞では、使役変化他動詞をもつ場合、多くの場合で場焦点化他動詞構文はそれと同一形態となる。それで(394a)のように「下げる」が現れる。これは元々他動詞の形態であり、主語名詞句と目的語の名詞句との二者の関係を捉えて叙述できる「下地」が整っていると言える。「上げる」に対する「上昇する」にも同様のことが言える。

(400) a. 集中豪雨によって、川はみるみるその水位を上げた。

b. *集中豪雨によって、川はみるみるその水位を上昇した。

c. 集中豪雨によって、川はみるみるその水位が上昇した。

「権利を失う」とは言えるが「権利を消滅する」と言えないのも、「失う」が場焦点化他動詞構文専用の動詞である点を除けば、(400b)と同様の理由によると考えられる。「消滅する」は対象の変化のみに焦点が当たり、〈場〉との関係で、〈場〉の変化として概念化できないのである。逆に言えば、漢語サ変動詞がもともと両用動詞であれば場焦点化他動詞構文は成立しうる。「発症・紛失」のように他動詞用法が元々場焦点化他動詞構文を作る用法だったり、「実現・解散」のように、他動詞用法に元々使役変化だけでなく場焦点化他動詞構文を作る用法があったり、「拡大・完備」のように使役変化他動詞としての用法から変換事象だけが焦点化され場焦点化他動詞構文が成立したりする場合である。

以上まとめると、次のようになる。なお、下線を付した動詞は影山（1996：202）が挙げた動詞で、波線を付した動詞は金（2004）が挙げた動詞で、太下線は両者で共通して挙げられた動詞である。それ以外は筆者が補充した動詞である。補充するにあたり①②③への分類は『明鏡国語辞典』の自他の記述によった。

<漢語サ変動詞の場焦点化構文の種類とその成立条件>

①自動詞とみなされている動詞：

変化が起こる「対象物」を、〈場〉との二者の関係として把握できる場合には場焦点化他動詞構文を作る。しかし、場を背景化したまま対象だけに焦点を当てる場合には成立しない。

I 型、I & II 型を作る（参考のために成立しない動詞を右側に列挙した。以下同様）

- ・発生＞ {(ガスが) 発生} 不可 {勃発・乱立・(事故が) 発生}
- ・消失＞ {消失・流出} 不可 {滅亡・消滅}
- ・存続＞ なし 不可 {存続}
- ・状態変化＞ なし 不可 {爆発・蒸発・下落・上昇・暴落・全滅・壊滅}

②両用動詞とみなされている動詞：

以下の（ア）～（エ）のいずれにも該当しない場合は、場焦点化他動詞構文を作らないか作りがたい。

（ア）他動詞用法はもともと場焦点化他動詞構文のことである

I 型、I & II 型を作る

- ・発生＞ {発症・回復・復活・輩出・噴出}
- ・消失＞ {紛失・喪失・消耗}
- ・存続＞ {存続・持続}
- ・状態変化＞ {全焼・半焼}

（イ）他動詞の概念（＝使役変化）がベースになりその変化事象のみに焦点が当たり場焦点化他動詞構文を作る場合がある。使役変化しか表さない場合は不可。

II 型を作る

- {拡大・縮小・完備} 不可 {開店・出店・変形・展開・具体化}

III 型、I & III 型を作る

- なし 不可 {回転}

（ウ）他動詞用法にもともと使役変化他動詞構文と場焦点化他動詞構文の二つがある

・I 型を作る

- {一変}

・I 型と II 型を作る

- {正常化}

・Ⅲ型, I &Ⅲ型を作る

{実現・解散・解消・(??集中)}

(エ) 自動詞の概念が占有の概念に転換し, 場焦点化他動詞構文も作る。

{完成・中断・停止・完了・終了}

③他動詞とみなされている動詞

他動詞の概念(=使役変化)がベースになりその変件事象のみに焦点が当たり, I 型, I & II 型, または II 型の場焦点化他動詞構文も作る。

・存続> {保持・維持} ³⁴⁵

・移動> {設置・削除} ³⁴⁶

①②③のいずれにしる, これらの概念に相当する和語動詞が作る場焦点化他動詞構文は, 一部の両用動詞を除き, 使役変化他動詞と同一形態になるか, 独自の形態をとる。そのため, 変化自動詞の形態とは異なるのが普通である。ところが漢語サ変動詞は形態が常に同じである。これが和語動詞との決定的な違いである。この形態上の違いによって和語動詞と統語上の振る舞いがどのように違うのかは次のようにまとめられる。

<和語動詞と漢語サ変動詞の場焦点化他動詞構文の違い> ³⁴⁷

発生, 消失, 存続の各事象が原因として読み込まれる場合は, 自動詞として概念化される事象が元々「場と対象」の二者の関係として把握されやすい。つまり発生母体, 消失母体, 存続母体として把握されやすい。したがって, それが和語動詞であれ, 漢語サ変動詞であれ, それがたとえ元々自動詞の概念しかもたなくても, 場焦点化他動詞構文を作りやすい。それが成立しない概念とは「勃発する」「(事故)が発生」「滅亡・消滅する」「残存する」のように, 明確に場を背景化したまま変化対象にだけ際立ちが与えられている場合ということになる。状態変化が読み込まれる場合, このような母体と対象という二者の関係としての把握が一樣にできるわけではない。「下がる」と「下落する」, 「上がる」と「上昇する」は確かに類似した概念を表しているが, 同じ事態を場焦点化他動詞構文で叙述できるかどうかという点になると, 和語は「下げる」「上げる」という使役変化他動詞と同一形態の動詞を用いることによって, あるいは「失う」のような「場焦点化他動詞」(=場焦点化他動詞構文専用の動詞)を使うことによって二者の関係として叙述できるのに対して, 元々自動詞の概念しかもたない漢語サ変動詞は, それができない。そのため「下げる」「上げる」「失う」は場焦点化他動詞構文を作れるのに対して, 漢語サ変動詞の「下落／暴落する」「消滅する」はそれができないと結論づけられる。

³⁴⁵ 和語動詞の用例は 4.4.1 節を参照されたい。

³⁴⁶ 和語動詞および「削除」の用例は 4.5.3 節を参照されたい。

³⁴⁷ 小柳 (2010) でも場焦点化他動詞構文のタイプの違いに注目して分析したが, 本論文ではタイプの違いがどのようなものかを明確にした。

4.10 介在性をもつ他動詞文の分析

4.10.1 課題と分析の枠組み

佐藤（1994）は、「述語のヴォイスの形態が無標であるにもかかわらず、主語が動詞の示す行為の主体ではないという解釈をも許すもの」（同上：53）を「介在性の表現」と呼んだ。通常、日本語ではヴォイスの形態が無標、つまり受身・使役の接辞がつかない場合は、述語動詞の示す行為の主体が主語になるので、(401) (402) の (a) と (b) の動作主はそれぞれ別々のはずだが、実際には、同じ事象を叙述することができる。この (b) のような特殊な意味特徴をもつものを「介在性の表現」と呼び、どのような条件のもとでこのような他動詞文が成立するのかを分析している。（分析の内容は 2.6.4 節を参照されたい。）

(401) a. 医者が患者に注射した。

b. 患者が注射した。

(同上：54)

(402) a. 大工が（山田さんの）家を建てた。

b. 山田さんが家を建てた。

(同上：54)

2.6.4 節の最後に佐藤氏の分析に対して次のような課題を設定した。

- ①「きのう予防注射をしたよ」「美容院で髪を切ったよ」と述べる話者の意識の中には「使役主」としてよりむしろ「受け手」の意識のほうが強いという直感が筆者にはある。「あたかもすべての過程を自分で行ったかのように事態を把握する」という仕手としての視点と行為の受け手としての視点とはどのように融合するのか。
- ②介在性の表現に再帰と非再帰の二つあるとしたら、両者を介在性の表現として成立させている根底にある事態把握あるいは概念は何か。
- ③同じ主語名詞でありながら、使役主として「～させる」と言語化される場合もあり、受益者として「～てもらう」と言語化される場合もあるわけだが、どちらの態も現れず無標で「～する」と使われる場合、それは話者のどのような事態把握に基づいているのか。

本節ではまず上記の課題の答えを最初に示し、その後根拠となる分析を示す。本論文では介在性の表現は、「モノとモノの因果連鎖」と「〈場〉とイベントの二者関係における〈場〉の変化」という二つの事態把握が融合したものだと考える。前者によって「使役主」の視点が、後者によって「受け手」の視点が組み込まれる。そして、再帰の概念がこの両者の融合の橋渡しをするのだが、非再帰と見られる構文も「受け手」の視点が組み込まれることによって統一的に説明できることを示す。そこに通底するのは所有の概念への転換であり、それによって「受け手」としての〈場〉の変化が言語化される。つまり介在性の表現は、モノの因果連鎖が組み込まれた場焦点化他動詞構文であると結論づけられる。場焦点

化他動詞構文の意味的な特徴は〈場〉の変化を中立的に叙述することであり³⁴⁸、そのため「使役態」および「受益態」とは異なり無標で言語化され则认为。

介在性の表現を分析するにあたって、もっとも重要なことは、結果を伴う変化事象を含まないものは成立しないという点である。次の例は介在性が成立しない場合である。

(403) a. *兄が車を運転した。(兄が命令して別の人が運転した場合)

b. *兄がジーンズをはいた。(兄が命令して別の人がはいた場合)

(佐藤 2005 : 93-97)

他動詞構文を作る事態把握には二つあり、一つは、モノとモノの因果連鎖あるいはエネルギー連鎖に基づいて二者の非対称性によって言語化される場合、そしてもう一つは、モノと〈場〉の二者関係の概念化において存在から所有へと概念が転換することによって、〈場〉の変化という視点で言語化される場合である。後者の言語化に注目するのが本論文の立場である。変化事象を含意するかないかが構文の成立の可否にかかわるということは、〈場〉の変化という視点による事態把握と結びついていることを強く示唆する。

そこで、介在性の表現を分析するために、変化事象に注目して【1】～【4】の四つに分類しておく。ここで再帰構造と言うのは、4.5.4.2 節で規定した「再帰②」に該当するものだが、「外部の対象物に働きかけ、対象物が自分自身あるいは自身の体の一部に移動する」を拡張して「他者に働きかけて、他者を介して自分自身（の所有物）に変化を引き起こす」と規定しておく。

【1】使役移動事象（再帰構造）

(404) (山田さんが病院に行って予防接種を受けた場合)

a. 医者が山田さんに予防接種（の注射）をした

b. 山田さんは予防接種（の注射）をした。(介在性)

(405) (電気屋さんに頼んで取り付けてもらった場合)

a. 業者が山田さんの部屋にエアコンを取り付けた。

b. 山田さんは部屋にエアコンを取り付けた。(介在性)

【2】使役状態変化事象（再帰構造）

(406) (山田さんは美容院に行って髪を切ってもらった場合)

a. 美容師が山田さんの髪を切った。

b. 山田さんは髪を切った。(介在性)

³⁴⁸ 中立的な叙述については、4.7.6.2 節を参照されたい。

(407) (山田さんは病院に行って手術してもらった場合)

- a. 医者が山田さんの胃の手術をした。
- b. 山田さんは胃の手術をした。(介在性)

(408) (田中さんは業者に依頼して修理してもらった場合)

- a. 修理業者が田中さんの車を修理した。
- b. 田中さんは車を修理した。(介在性)

【3】使役発生事象 (=生産事象) (再帰構造)

(409) (田中さんが業者に依頼して家を建ててもらった場合)

- a. 建築業者が田中さんの家を建てた。
- b. 田中さんは(自分の)家を建てた。(介在性)

(410) (木村さんは業者に依頼してドレスを作ってもらった場合)

- a. 業者が木村さんのパーティー用のドレスを作った。
- b. 木村さんはパーティー用のドレスを作った。(介在性)

ここで、4.2.5 節の発生と所有の関係の中で「動作主主語が認められる場合」の例として挙げた「男は背中に刺青を入れている」について少し触れておく。これは場焦点化他動詞構文の分類ではⅡ型、つまり、外部に使役主が存在するが、その使役主を焦点からはずし、〈場〉にモノが発生したという変化事象に焦点を当てて成立する構文であると分析した。しかし、〈場〉が人の場合には、実際の行為者への働きかけが想定できるため、この表現を介在性の表現と認めることもできる。「男が刺青師に依頼して、自分の背中に刺青を入れた」という事態がベースにあって「男が背中に刺青を入れた」(介在性)成立し、自身の変化結果の状態を「刺青を入れている」と表現するというわけである。この表現を介在性の表現と認めると、上の【2】に分離されることになると考えられる。ただし、「ている形」が進行中または経験・経歴の解釈より、結果状態の継続の解釈が優勢である³⁴⁹。その点でⅡ型の場焦点化他動詞構文との接点があるのではないかと考えられる。

【4】使役変化事象 (非再帰構造)

(411) (マフィアのボスが部下命令して、警備員を殺させた場合)

³⁴⁹ 例えば、分離可能所有の場合、「ている」形の「田中さんは都内に一軒家を建てている」は現在進行中の意味になるか、経験・経歴の意味(=去年建てた)の解釈になるが、自身の体の変化の場合、「田中さんは背中に刺青を入れている」は現在進行中(=入れている最中)の意味にも経験・経歴の意味(=去年入れた)にもなりうるが、文脈がなければ、結果状態の継続の解釈が優先されると考えられる。(407)の「手術する」についても、「整形手術をする」のような表現なら「整形手術をしている人としていない人を、写真で判断する」のように、その人の変化結果の状態継続の解釈ができるので、Ⅱ型の場焦点化他動詞構文に接近していると言えるだろう。

- a. 部下が警備員を殺した。
 b. マフィアのボスが警備員を殺した。(介在性) (b 佐藤 1993 : 61)

(412) (田中さんが秘書に依頼して、ファックスを送らせた場合)

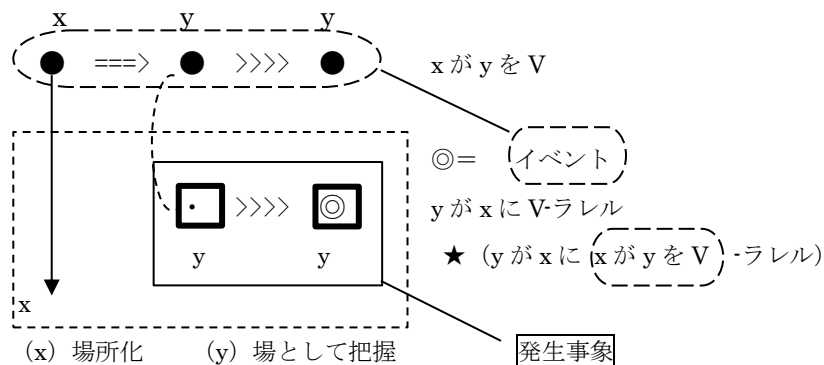
- a. 秘書が取引先にファックスを送った。
 b. 田中さんは取引先にファックスを送った。(介在性)

以上の四つの変化事象をベースにどの部分が焦点化し、どの部分が背景化することによって介在性の表現が作られるのかを見ていく。最初に【1】を扱うが、そこでは介在性の表現をなぜ場焦点化構文とのつながりで分析しなければならないのかについても論じる。

4.10.2 各タイプのイベントスキーマと介在性の表現の分析

◆使役のイベントスキーマ

分析を進めるに当たり、本論文が考える使役態（使役文）のイベントスキーマを示しておきたい。既に 4.6.5 節で受動態（受身文）のスキーマを次のように示した。



(再掲：図 4.24 受身文のイベントスキーマ)

4.6.5 節で示したように〈場〉に出来事全体が発生するという事態把握は、ラレル述語に共通するスキーマであるが、このようなスキーマをその他のヴォイスの接辞および補助動詞（テもらう）にも適用しようというのが本論文の主張するところである。そのように考える理由は本節と次節で具体的に論じられる。

上に再掲した図が示すように、受身文のスキーマは、受け手である y において出来事全体が発生することが、場所化した x という〈場〉に依拠して生起することを表している。使役態は、このように捉えられるイベントが、外部に設定された使役主によって引き起こされると考え、図 4.60 のようなスキーマを提案する。これは「 x が y に働きかけて y が変化する」という事象をベースに、受け手の視点で事態把握されるのが受動態で、外部に付

加される使役主の視点で把握されるのが使役態ということを示している。

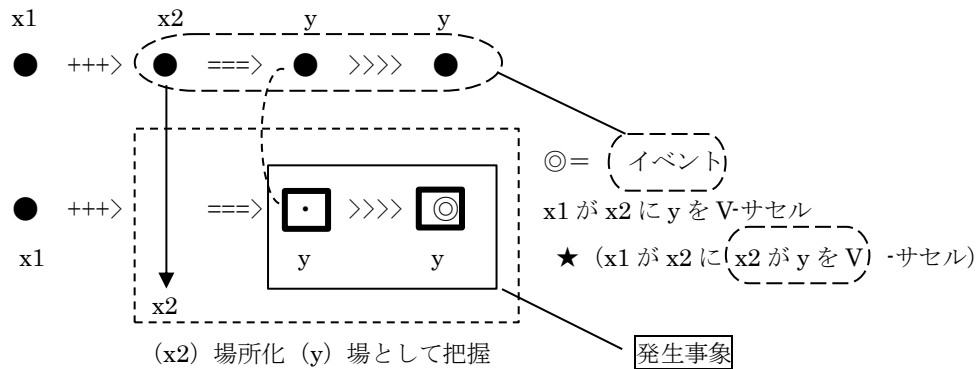


図 4.60 使役態（使役文）のイベントスキーマ

◆【1】使役移動事象（再帰構造）がベースになる介在性の表現

この使役文のスキーマをもとに、介在性の表現を考察する。最初に見る介在性の表現は再帰構造をもつ使役移動事象なので、元になる使役文も再帰構造（ $x1=z$ ）にして、発生事象は使役主自身が〈場〉になっている。図 4.61 が介在性を組み込んだものである。

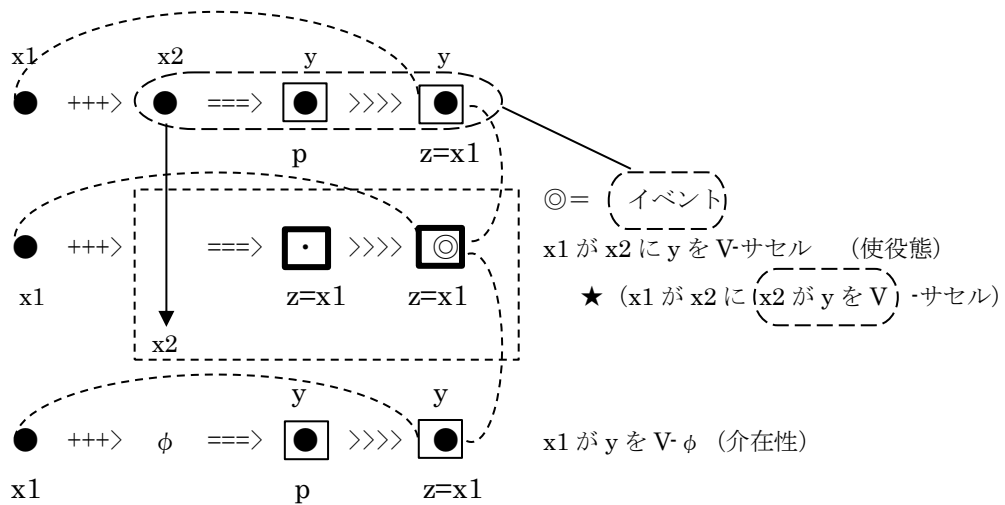


図 4.61 使役態（使役文）と介在性の表現【1】のイベントスキーマ

上段のイベントスキーマは、「使役主/依頼者（ $x1$ ）が実際の行為者（ $x2$ ）に働きかけて、場（ p ）にあるモノ（ y ）が場（ z ）に移動する」という概念を表している。例えば「山田さんが、医者に働きかけて、注射をする」といった事象である。このように使役主と実際の行為者の二人がいる場合、一つの動詞述語で表すには、実際の行為者を格下げし使役態を用いる。本論文では二格名詞句で表示されるものは基本的に〈場〉と考えるので、ここでも

使役態に現れる二格名詞句は〈場〉となっていると考える。中段はそれを表しており、「山田さんが医者に注射をさせる」と表現される。そして、介在性の表現がもし佐藤（1993）が規定する通りであれば、実際の行為者（x2）が諸条件に合致する場合に抑制され（ ϕ ），結果的に動詞が無標（ ϕ ）のまま、使役者と対象の二項をとる他動詞文「山田さんは注射をする」を作ることになる³⁵⁰。図の下段はそれを表している。

この図で示した介在性の表現は、事態の把握の「半分」しか説明していない。なぜなら、使役態とのつながり、つまり仕手側からの視点でしか事態を把握していないからである。

「山田さんは注射をした」（介在性）には「もう半分」の側面がある。それは「山田さんは注射をしてもらった」という受益態とのつながりである。確かに、図 4.61 に示したように再帰構造を持つ点で、使役者（x1）と受け手（z=x1）はリンクされているが、これだけでは、十分に説明されているとは言えない。残りの半分とのつながりを示さなければ、介在性の表現として言語化する概念の全体を説明したことにはならない。

そこで、4.6.9.3 で考察した「与え手」と「受け手」がひとまとまりとなって把握される事態のイベントスキーマ（図 4.38）を応用して、図 4.62 のようなスキーマを提案する。

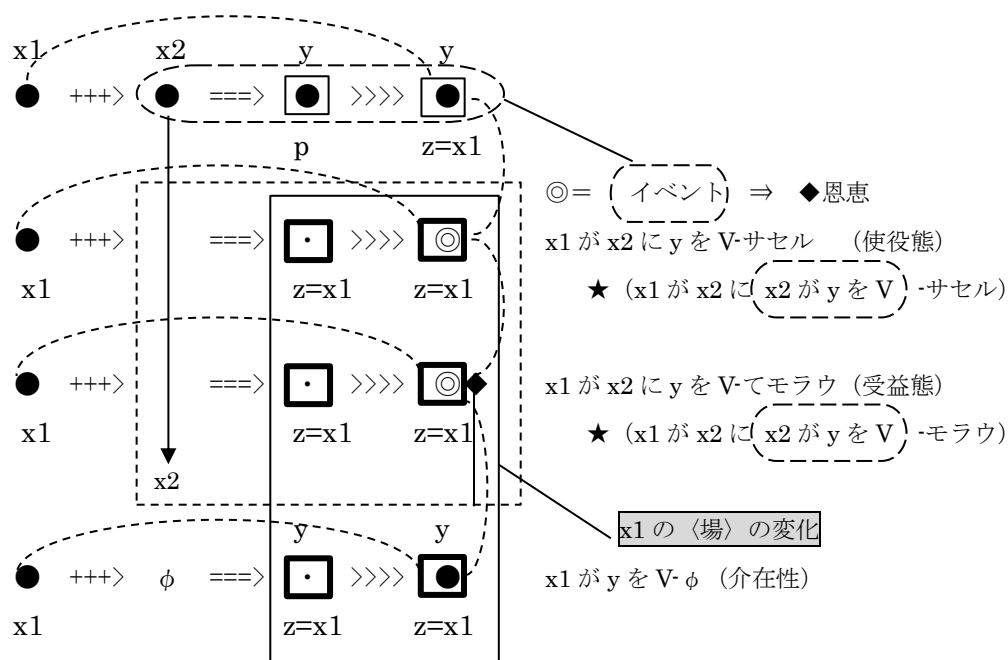


図 4.62 【1】使役移動事象（再帰構造）と介在性の表現のイベントスキーマ（修正版）

最上段と二段目のスキーマは 4.61 と同じである。三段目が「もう半分」の受益構文のスキーマを表しており、それを踏まえて最下段の介在性の表現のスキーマも修正されている。

「x1 の〈場〉の変化」を表す実線で四角に囲んだ部分に注目してほしい。この変化事象では、三つとも〈場〉におけるイベントあるはモノの発生という捉え方になっている。「もら

³⁵⁰ 介在性が成立する条件については 2.6.4 節の先行研究の紹介を参照されたい。

う」について図 4.38 で示したスキーマは、モノの授受に関するものだが、補助動詞「(て) もらう」もこの拡張として表示できる。「(て) もらう」は行為によって発生する受益を表す。この「受益」という概念は、このような〈場〉におけるイベントの発生と、その発生事象が依拠する〈場〉(= x_2) とのつながりのあり方によって生まれるというのが、本論文の仮説である。

このつながりについては、4.11 で詳しく論じるが、実際の行為者が降格した〈場〉は発生事象が依拠する場となる。この依拠する〈場〉と使役主とのつながり、そして発生事象とのつながりを概念化者がどのように捉えるかによって作られる構文が異なるを考える。受益態では、使役主にとってこの依拠する〈場〉とのつながりがプラス評価の依存性をもつものとして把握されることによって、メトニミー的にイベントの発生から利益の授受が読み込まれると考えておく。図 4.62 では、〈場〉(= x_2) の破線の枠線から発生事象の直接の場 ($z=x_1$) の右の◆に伸びる実線でそのつながりを示している。受益態を作る概念というのは「(x_1 が働きかけて) プラス評価された実際の行為者 (x_2) の〈場〉に依拠して、使役主 (=受け手) の身に発生したイベント (◎) によって恩恵 (◆) を所有する状態へと変化する」ことを表す。使役態と受益態は、実際の行為者が場所化して二格名詞句で表示されている点 (=二段目と三段目を囲む破線の枠組み)、そして x_1 が〈場〉として把握され、その変化に注目している点で共通している。しかし、発生事象が依拠する〈場〉(二格名詞で示された場) と発生事象のつながりに対する把握が異なるのである。

そして、場所化した行為者 (x_2) が諸条件に合致して、ないもとの見なされると、最下段に示した介在性の表現を作る概念になる。介在性の表現は、「(x_1 が働きかけて) 〈場〉(=自身: $z=x_1$) に発生したモノを所有する状態へと変化する」という概念に転換したものである。

ここで本論文が主張したいのは、元となる使役移動事象(最上段)と介在性の他動詞文(最下段)のみを比べて、実際の行為者がなくなったから無標のままで他動詞文構文として現れるというだけでは事態を十分に把握していないということである。介在性の表現は、〈場〉におけるイベントまたはモノが発生することによって、それを所有する状態へ変化することを表すという点で「使役態」と「受益態」と共通しているという点に注目したい。使役態、受益態とのつながりを見ることによって、動詞の形態が無標でありながら、「～させる」「～てもらう」の意味が塗り込まれていることを説明できるのである。以上のことから、介在性の表現は、使役連鎖の事態把握と、モノまたはイベントと〈場〉の二者関係に基づく事態把握の両方の融合によって生まれると結論づけられる。

◆【2】使役状態変化事象(再帰構造)がベースになる介在性の表現

上に示した分析と基本的に同じである。最上段と二段目が移動事象から変化事象に置き換わっただけである。使役状態変化のイベントスキーマは 4.7 節で示したとおりで、ベースとなる最上段のスキーマは、「使役主/依頼者 (x_1) が実際の行為者 (x_2) に働きかけて、対

象物 ($y=x1$) の {側面 (Sd) /部分 (Part)} が $p0$ から $p1$ に変化する」という概念を表している。

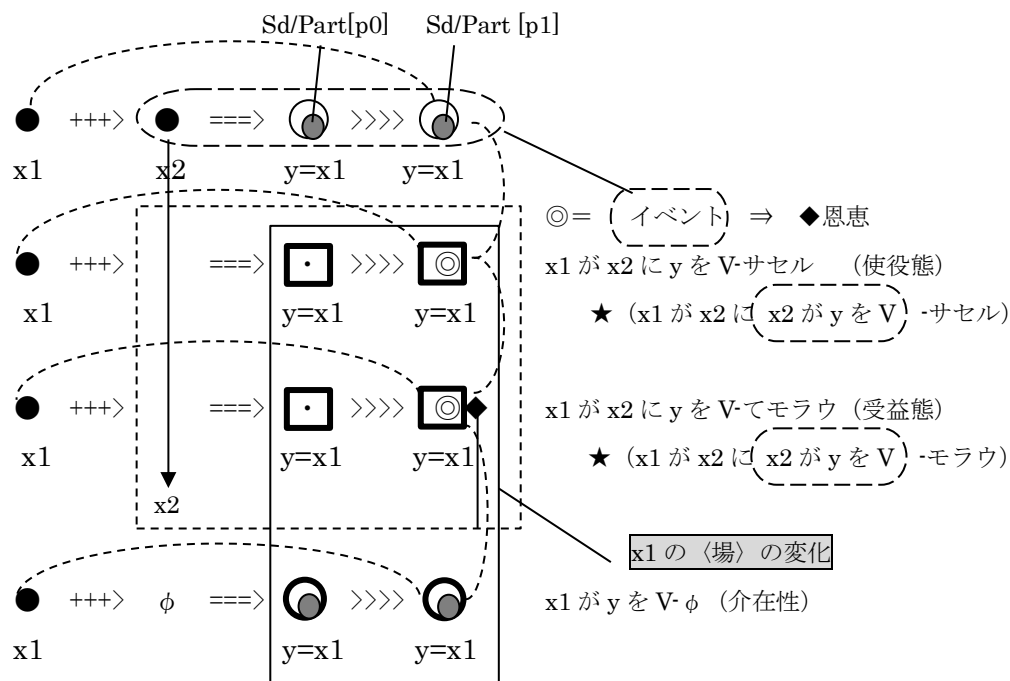


図 4.63 【2】使役状態変化事象（再帰構造）と介在性の表現のイベントスキーマ

それが使役態になると、具体的には「山田さんが医者に（自分の体の）手術をさせる」という表現になる。受益態であれば「山田さんが医者に（自分の体の）手術をしてもら」になる。介在性の表現は、使役連鎖の実際の行為者 ($x2$) が抑制 (ϕ) され、「 $x1$ が働きかけて〈場〉 ($y=x1$) が発生した変化結果を所有する状態へと変化する」という概念に転換したものである。その結果「山田さんは手術をする」という表現になる。

◆ 【3】使役発生事象（＝生産事象）（再帰構造）がベースになる介在性の表現

これも【1】と基本的に同じである。最上段と二段目が移動事象から生産事象に置き換わっただけである。生産事象は使役と発生が組み合わされて概念化したものである。使役主（＝生産者）が材料に働きかけて、この世界に新たにモノを発生させるという事態把握である。ここでは、発生させる〈場〉として「この世界」ではなく使役主の〈場〉になっている点で再帰構造をもつと見なすことにする。図 4.64 に示したイベントスキーマは、簡略化のために材料に働きかける部分を省略してある。ベースとなる最上段のスキーマは、「使役主/依頼者 ($x1$) が実際の行為者 ($x2$) に働きかけて、〈場〉 ($z=x1$) に生産物 (y) が発生する」という概念を表している。

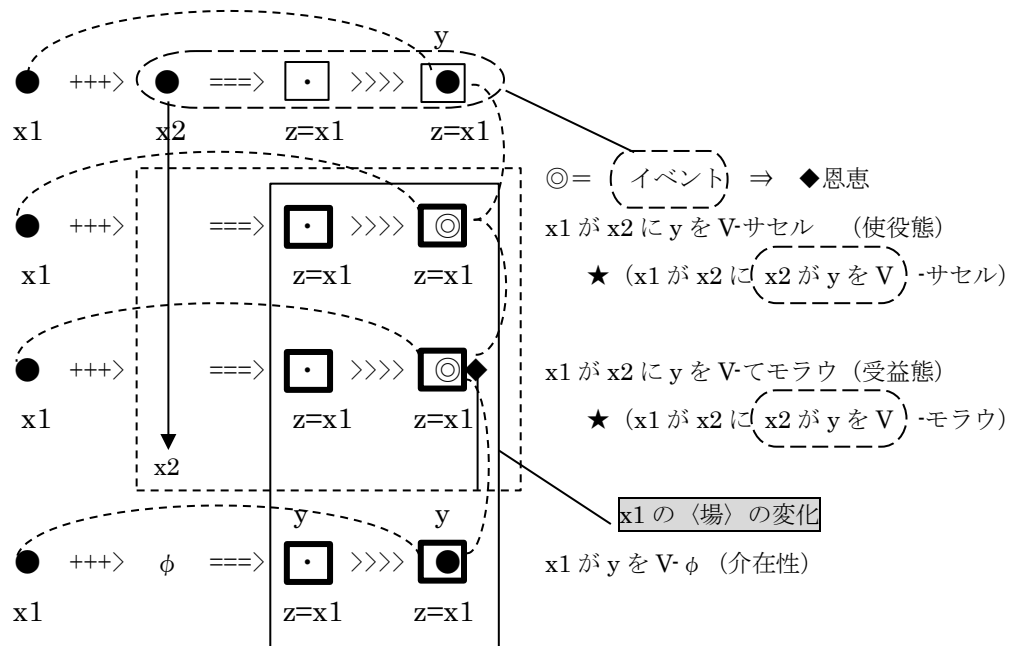


図 4.64 【3】使役発生事象（再帰構造）と介在性の表現のイベントスキーマ

それが使役態になると、具体的には「山田さんが業者に（自分の）家を建てさせる」という表現になる。受益態であれば「山田さんが業者に（自分の）家を建ててもらう」になる。介在性の表現は、使役連鎖において実際の行為者（x2）が抑制され、「x1 が働きかけて〈場〉（＝自身：z=x1）に発生したモノを所有する状態へと変化する」という概念に転換したものである。その結果「山田さんは（自分の）家を建てる」という表現になる。

◆【4】使役変件事象（非再帰構造）がベースになる介在性の表現

【4】は上の三つとは異なり、再帰構造ではない。したがって使役主/依頼者（x1）がどのようにして「受け手」としての〈場〉とリンクするのかが問題になる。この非再帰構造をもつ場合に、介在性の表現ではないと見なすこともできるが、本論文では〈場〉の変化の拡張事例であると考えて、介在性の表現として分析する。図 4.65 がその全体図である。

再帰構造ではないため、これまでのように x1 と z が自動的にリンク（z=x1）することはない。しかし、受益態は「もらう」という受け手の視点を表すため再帰構造でなくても、受け手として「x1 の〈場〉の変化」にも焦点を当てることができる。それでは介在性の表現はどのような動機付けによって「x1 の〈場〉の変化」にも焦点を当てることができるのか。

このタイプの介在性の表現は、どんな場合でも成立するわけではない。考察するにあたって、須賀（2000）の分析に注目する。「直接の行為者は使役主の行為を〈代行〉していると言える」（同上：28）と把握され、「原因としての行為者は、その最終的責任者まで逆上

って表現することが可能である」(同上:29)と把握される事態において成立するのである。この指摘は、見方を変えれば「x2による行為は使役主(x1)のため」と言える。ここに受益態とのつながりが認められる。受益態は先にも指摘したように、発生事象が依拠する〈場〉(x2)が存在し、その〈場〉をプラス評価の依拠性をもつものとして把握することによって「恩恵の授受」という意味が生まれる。介在性の表現も「x2がx1のためにある行為をする」という前提によって、受益態と同様に受け手としての「x1〈場〉の変化」にも焦点を当てることができる。それでは具体的にそれはどのような変化なのか。

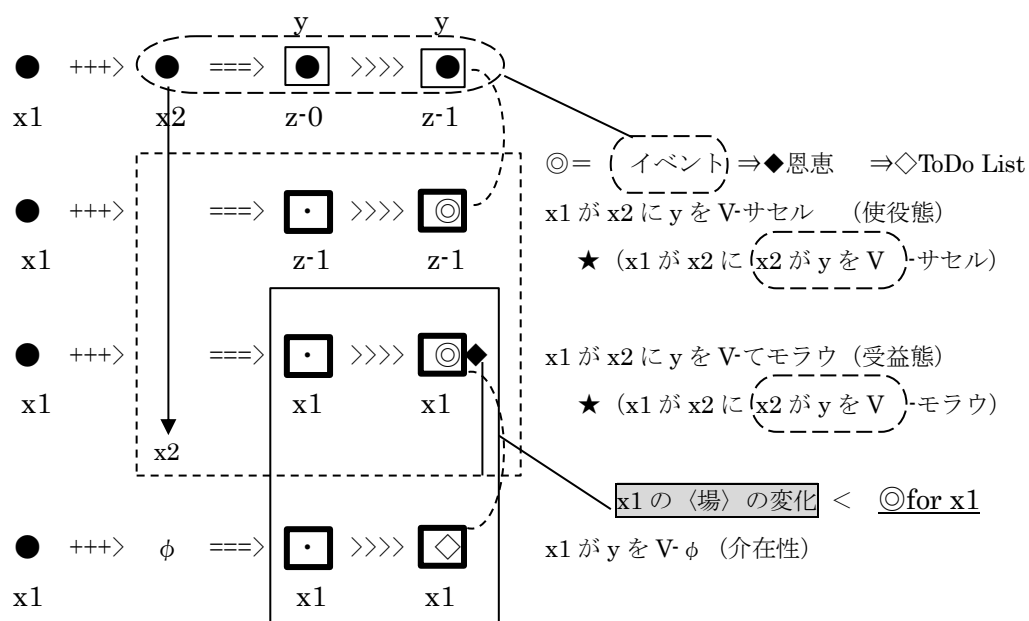


図 4.65 【4】使役移動事象（非再帰構造）と介在性の表現のイベントスキーマ

それは自分が主宰する出来事（＝自身が最終的な責任者として認められる出来事）が成立することによって更新されるその人の〈履歴〉だと考えられる。4.7.6.3節の「事象タイプとのつながり」で、属性叙述と事象叙述の中間的なタイプとして履歴叙述というものを仮定した。そこには「田中さんは空襲で家を焼いた」のような文が分類され、主に「所有者-所有物」の二者関係の状態変化を表す場焦点化他動詞構文において、所有物の変化が所有者の特徴付けを変えることを指して、〈場〉の履歴変化の叙述にシフトしていると分析した。

今議論している非再帰構造の介在性の表現においても、このような履歴変化の叙述タイプの場合、使役者(x1)の特徴付けを変えるのは、所有物の変化ではなく、チェックされるToDo Listだと考えられる。適当な日本語がないのでこれを使うが、要は心理的に設定される〈場〉で、望んでいることが実現されることによってチェックされる(☑)リストである。ここで「組

み込まれている」というのは、介在性の表現とは、使役連鎖の事態把握と場焦点化他動詞構文を作りだす〈場〉とモノの二者関係の事態把握の融合だと考えるからである。したがって、〈履歴〉の変化といってもそれは受身的に変化するものではなく、使役者が自身のコントロールにおいて変化させられると把握される。

このように、【1】～【3】と【4】の共通点は「x1の〈場〉の変化」がスキーマに組み込まれていることで、両者の違いは、「x1の〈場〉の変化」が再帰構造で直接リンクされているかいないかである。【4】で受益態と介在性は、再帰構造によって直接リンクされていない。しかし、「◎for x1（イベントがx1のために行われる）」という事態把握によって、受益態は受益者（x1）の〈場〉の変化として把握でき、一方介在性の表現は主宰者（x1）のToDoList更新（＝履歴の変化）として把握できるのである。

上に示した使役移動事象（非再帰構造）が表す事態は、例えば「部長が秘書に命令して、秘書がファックスを送る」ことを表す。使役態では「部長が秘書にファックスを送らせる」で表現され、受益態では「部長が秘書にファックスを送ってもらう」となり、介在性の表現では「部長がファックスを送る」となる。

なお、使役状態変化（非再帰構造）がベースになって成立する介在性の表現については、イベントスキーマの最上段と二段目が使役移動から使役状態変化のものに置き換わるだけである。図 4.66 にそれを示しておく。

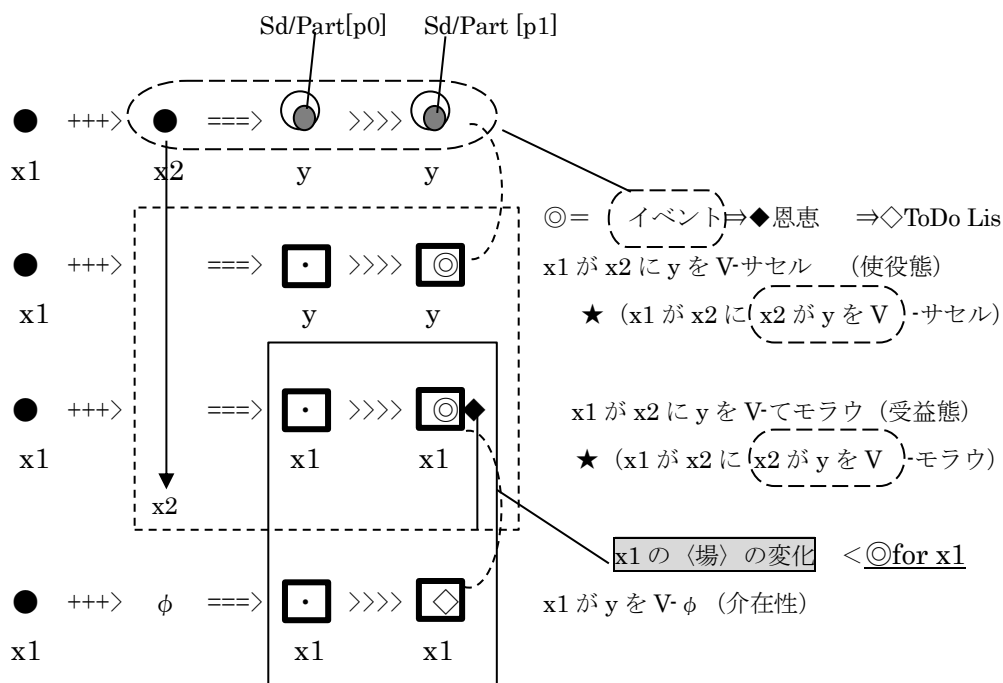


図 4.66 【4】使役状態変化事象（非再帰構造）と介在性のイベントスキーマ

ベースとなる使役変件事象は、例えば「マフィアのボスが仲間に指示してスパイを殺した」ことを表す場合、使役態では「マフィアのボスが仲間にスパイを殺させた」となり、受益態では「マフィアのボスは仲間にスパイを殺してもらった」となり、介在性の表現は「マフィアのボスはスパイを殺した」となる。

このように「x1の〈場〉の変化」という事態把握に注目することによって、再帰構造をもつ場合ももたない場合も統一的に介在性の表現の成立する事態把握を説明することができると考える。

◆分析のまとめと意義

介在性の表現を論じる場合に、単に実際の行為者である x_2 を無いものとみなして、事態の成立を実際にコントロールしている使役者 (x_1) を主語に据えた他動詞構文が成立すると考えるだけではなく、「x1の〈場〉の変化」を導入するのはなぜか。本論文が主張したい事態把握の二面性について以下のようにまとめておく。

殺人事件が発生したときに、直接手を下した人ではなく、その事件の裏で糸を引く人物を指して、「この人が娘を殺したのだ！」と主張することは日本語としてごく自然にあることである³⁵¹。本論文が主張したいのは、仕手側からと受け手側からの事態把握の二面性である。モノとモノの使役連鎖で捉えられる有責性（事態の始発点）とは別に、使役主が事態の実現によってどのように変化するか（特徴付けがどのように変化するか）という側面、より具体的には何が発生して何を所有する状態へと変化するかという側面の二つがあると考え。この二つの側面はある時は一方のみが現れ、「何をしたのか」あるいは「どうなったのか」を叙述する。そしてあるときには両方が融合して現れる。「～が～を～V」と他動詞構文で現れるからといって、それがいつも「だれかが何かをする」というモノモノの関係だけを叙述するわけでない。もう一つの把握事態として「だれかが何かを所有するように変化した」というのがある。後者に注目するのが本論文である。その両者が融合して成立しているのが介在性の表現だと言える。

「ある人が、だれかに自分の髪を切らせる／切ってもらう」場合に、実際にだれがそれをするのかは焦点の枠外 (ϕ) になり、ある人が①「だれか (ϕ) が髪を切ることによって生じる結果が、自分に発生して自分が変化する」ように、②「だれか (ϕ) に働きかける」というように事態が把握される。この①の受け手側と②の仕手側からの事態把握が融合し、それによって「人が（自分の）髪を切る」という介在性の他動詞構文を作ることになる。つまり「その人が、だれかに働きかけることによって、その人がどんな人になったのか」を語るのである。①と②の要素を併せ持つことは先行研究でもたびたび指摘されてきたことだが、本論文の意義は、モノあるいはイベントと〈場〉の二者関係における〈場〉

³⁵¹ 同様に、実際に事務作業をしているのは部下で、指示を出すだけの部長を指して「部長はきのう取引先に契約書を送った」と言うことも、試合を実際に行っているのは選手だが、監督・マネージャーも飛び越して、選手補強のための資金集めに奔走したクラブのオーナーを指して「オーナーがクラブの勝利を導いた」と言うこともできる。

の変化に注目して分析したことである。これによって、使役態および受益態とのつながりがより明確に示すことができ、かつ再帰性をもつ介在性のみならず非再帰性の介在性も統一的に説明できたかと考える。

4.10.3 課題の答え

以上の分析を踏まえて、2.6.4 節で提起した介在性の表現に関する課題に対して本論文の答えをまとめておく。

課題①：

「きのう予防注射をしたよ」「美容院で髪を切ったよ」と述べる話者の意識の中には「使役主」としてよりむしろ「受け手」の意識のほうが強いという直感が筆者にはある。「あたかもすべての過程を自分で行ったかのように事態を把握する」という仕手としての視点と行為の受け手としての視点とはどのように融合するのか。

本論文の答え：

仕手としての側面と、〈場〉として把握される受け手の側面の二つをもち、その両方の側の事態把握が融合することによって生まれているからである。

課題②：

介在性の表現に再帰と非再帰の二つあるとしたら、両者を介在性の表現として成立させている根底にある事態把握あるいは概念は何か。

本論文の答え：

使役主でもありかつ受け手として〈場〉ともみなされる再帰構造と、使役主という仕手としてしか存在しない非再帰構造とが根底でつながっている事態把握とは、使役主の「〈場〉の変化」に注目する事態把握であり、それはその〈場〉に発生するモノまたはイベントによって特徴付けられる変化のことである。

課題③：

同じ主語名詞でありながら、使役主として「～させる」と言語化される場合もあり、受益者として「～てもらう」と言語化される場合もあるわけだが、どちらの態も現れず無標で「～する」と使われる場合、それは話者のどのような事態把握に基づいているのか。

本論文の答え：

仕手としての視点は使役態によって、そして受け手としての視点は受益態によって結びついているが、実際の行為者が抑制されることによって、それが中和されていると考えら

れる。言い換えれば、使役とも受益とも明示せず、ただ自身の身の上に発生したことを、自分の働きかけと結び付けて叙述するという態度である。

4.10.4 補足：使役連鎖における実際の行為者の抑制について

本節の最後に、使役連鎖における実際の行為者（x2）の抑制について少し補足しておきたい。認知言語学的な事態の捉え方では、「行為者 > 道具 > 対象」というエネルギーの連鎖が取り出される。英語では（413b）のような道具を主語にした文も成立することから、このようなつながりは有益だが、日本語はもともと無生物主語の他動詞文を避ける傾向が強いため、この連鎖を直接統語構造に反映させるという見方はとられないのが普通である。

(413) a. Floyd broke the glass (with the hammer).

b. The hammer (easily) broke the glass.

c. The glass (easily) broke.

(Langacker 1990a : 216)

このように行為者と対象の間に存在する「道具」という意味役割の参与者を、今回の分析対象である介在性の表現に当てはめると、実際の行為者はこの「道具」扱いになっているという分析もできる³⁵²。しかし、そのように見る場合であっても上述の分析には影響はない。概念上の抑制であれ、事態参与者の脱焦点化であれ、使役連鎖におけるある「部分」が欠落することは確かである。本論文は、単にその部分の欠落だけではこの構文を十分に捉えられないということを主張するものである。

4.11 ヴォイスの中におけるモノと〈場〉の二者関係の概念化

第4章を終えるにあたり、受動態、受益態、使役態というヴォイスの中で場焦点化他動詞構文がどのような形で組み込まれているのかをまとめておきたい。受動態のイベントスキーマは 4.6.5 節で示した。使役態と受益態のスキーマは 4.10.2 節で介在性の表現（佐藤 1994）とのつながりを示した。残る作業として、4.7.4 節と 4.7.5 節で考察した状態変化主体の他動詞文（天野 1987b）と受動態とのつながりをここで新たに示しておきたい。これによって三つの態とモノと〈場〉の二者関係の概念化とのつながりを明らかにし、本論文の意義を確認する。

³⁵² 例えば、長谷川明日香 (2010) 「英語における間接使役構文の動機付け」『東京大学言語学論集』(pp27-37) は英語を対象とはしているが、日本語の介在性の表現の分析にも応用できるだろう。また、深田 (2008) では認知言語学と語用論の接点という視点で「サービス・フレーム」というフレームを設定し、介在性の表現を分析している。このように間接使役構文、道具主語構文を認知的な視点で分析しているが、個物の因果連鎖の分析にとらわれている点ではかわりがない。

4.11.1 介在性の表現の位置付け

介在性の他動詞構文にはいくつかタイプがあることは 4.10.2 節で示したとおりだが、その中から使役状態変化事象（再帰構造）がベースとなるタイプのイベントスキーマを再掲し、二つの態と介在性の表現との違いのポイントを整理しておきたい。共通の基盤となる事態把握と、違いを生み出す要因として【1】と【2】を示す。

<使役態・受益態・介在性の表現の三つの違い>

■共通の基盤となる事態

使役主（x1）が実際の行為者（x2）に働きかけ、受け手が変化する。

※再帰構造の場合は、使役主と受け手が同一

■共通の事態把握

使役主としての仕手側からの事態把握と、受け手の側からの「〈場〉」にモノまたはイベントが発生し、〈場〉がそれを所有するように変化する」という事態把握が融合する。

■違いを生む要因

【1】使役主（x1）と実際の行為者（x2）と発生事象の把握：

（A）実際の行為者（x2）は降格し、発生事象が依拠する〈場〉となる。

1) x2 は発生事象に対して x1 にコントロールされた依拠性 をもつ

2) x2 は発生事象に対して プラス評価の依拠性 をもつ

（B）実際の行為者（x2）は存在しないものとして扱われる（φ）

【2】〈場〉に発生する物事： （把握事態 = ベースとなる変化事象）

（A）把握事態<全体>

（B）把握事態によって変化・生産するモノ

・使役態：【1】（A）-1）& 【2】（A）

有標 ～（さ）せる

「x1 が x2 に y を V-（さ）せる」

・受益態：【1】（A）-2）& 【2】（A）

有標 ～（て）もらう

「x1 が x2 に y を V-（て）もらう」

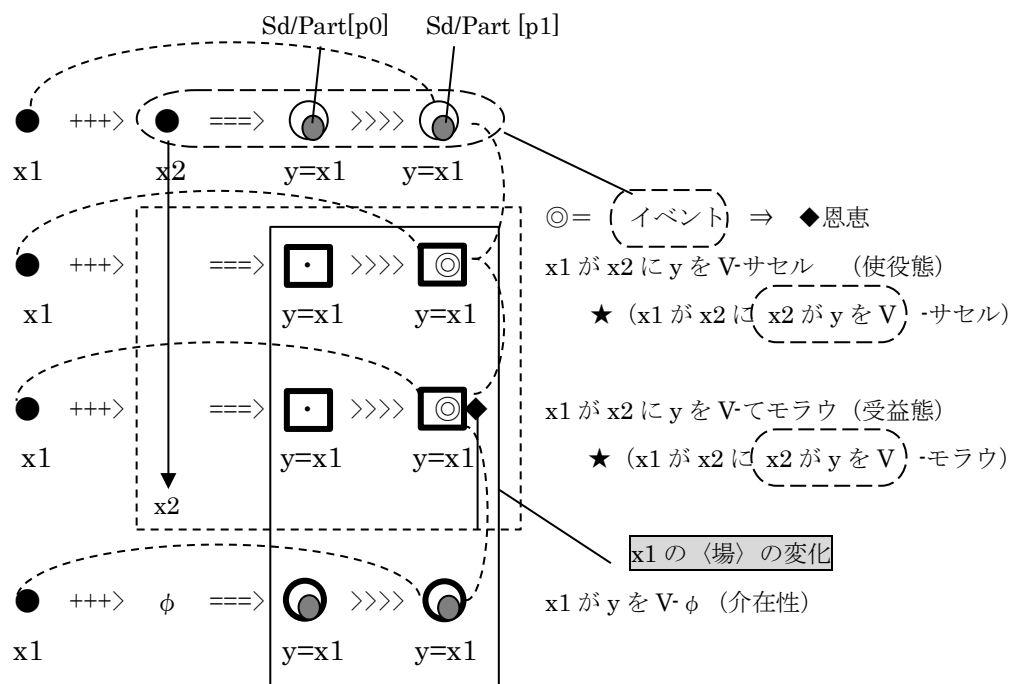
・介在性：【1】（B） & 【2】（B）

無標 （※非再帰構造の場合、B は「ToDo List」の☑項目になる）

「x1 が y を V-φ」

このように三者はベースとなる事態と事態把握において共通する部分があり、それぞれが異なる構文として出力されるのは、【1】と【2】の要因の組み合わせによる、と整理することができる。見方を変えれば、態の変換にかかわるのは「ある〈場〉」においてイベント

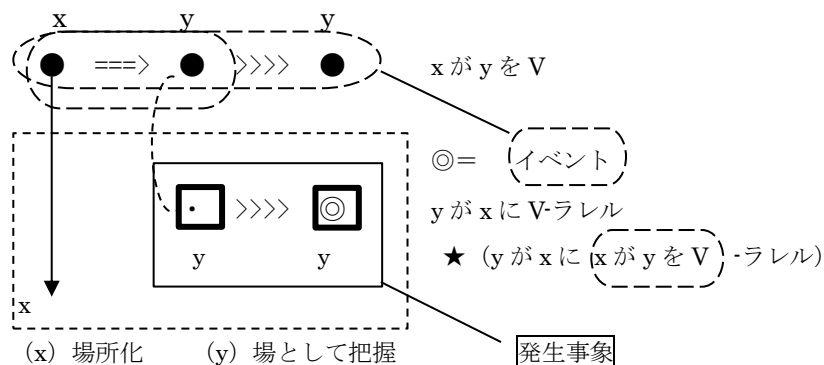
全体が発生することが、降格したニ格名詞句が示す〈場〉に依拠する」という把握になっている場合だと言える。このように有標の接辞を伴う態の変換と無標で表現される構文との関係を、受動態と状態変化主体の他動詞文との関係にも認められるだろうか。



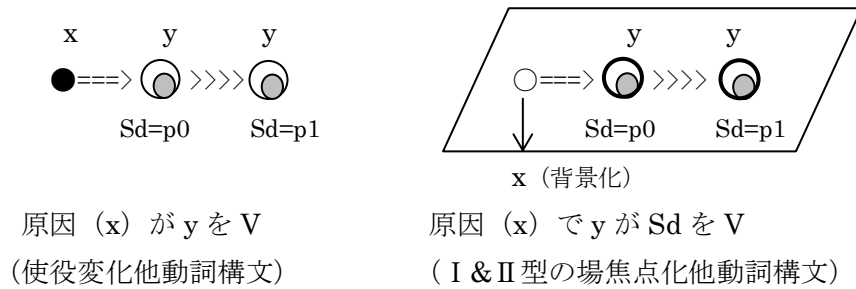
(再掲：図 4.63) 【2】 使役状態変化事象（再帰構造）と介在性の表現のイベントスキーマ

4.11.2 状態変化主体の他動詞文の位置付け

受身文のイベントスキーマは 4.6.5 節で次のように示した。そして、状態変化主体の他動詞文で、本論文が I & II 型に分類したイベントスキーマは 4.7.3 節で次のように示した。それぞれの図を再掲しておく。



(再掲：図 4.24 受身文のイベントスキーマ)



(再掲：図 4.46 原因を使役主として把握) (再掲：図 4.47 原因を背景として把握)

能動文から受身文が作られるのは態の変換にかかわる文法である。ラレル述語で表現される点に注目し、尾上 (1989-1999), 尾上 (2003) が示した「出来文」「出来スキーマ」つまり、事態全体がまるごとある〈場〉において発生するという事態把握を支持しながらも、独自に「場の二重構造モデル」を仮定し、二格名詞句が示す〈場〉とイベントの二者関係に注目して提案したのが図 4.24 のスキーマである。ここまでの分析でわかったことは、ある〈場〉におけるイベント全体の発生という把握は、ラレル接辞によって態の変換を引き起こすが、それだけでなく、使役態、受益態の接辞または補助動詞によっても同様の事態把握になるということである。最終的にラレル接辞によって受身文として出力されるのか、サセル接辞によって使役文として出力されるのか、あるいは (テ) モラウという補助動詞によって受益文として出力されるのか、その違いは、使役主・実際の行為者・発生事象の三つの関係のありかたを概念化者がどのようにとらえるかによると分析された。そのような観点から状態変化主体の他動詞文を見てみたい。

本論文では、状態変化事象においても場焦点化他動詞構文が作られると考え、その基本となるスキーマは図 4.47 (上に再掲) で示したように態の変換にかかわらないものと仮定された。このスキーマでは、〈場〉と把握された y においてその側面 (Sd) に変化 (p0 から p1 へ) が起こる場合、その側面の変化結果を母体である y が所有するように変化するという事態把握になっている。そして、I 型は自律的な変化事象の場焦点化他動詞構文で、II 型は使役主が存在する事象において、変化事象にのみ焦点が当たって生まれる場焦点化他動詞構文で、その中間に存在するものとして、原因が存在する事象において変化事象のみに焦点が当たって生まれるのが I & II 型であると規定した。

このように状態変化主体の他動詞文は、本論文では場焦点化他動詞構文の一つであると分析されたのだが、このスキーマを受身文のスキーマと組み合わせて示すと、図 4.66 のようになる。状態変化主体の他動詞文は、母体とその部分 (part) またはその所有物 (poss) を概念上一度切り離し、母体とその部分/所有物の変化結果を所有するという事態把握になっている。それに対応する受身文は、いわゆる持ち主の受身と呼ばれるものである³⁵³。二

³⁵³ 能動文の補語の名詞句の「N1 の N2」が持ち主とその対象物となっている場合に、N1 を主語に据えて

【2】〈場〉として把握される「全体」「所有者」の変化：

(A) 〈場〉において＜変化事象＞全体が発生すると把握される。

(B) 〈場〉がその「部分」「所有物」の変化結果を所有すると把握される。

・受動態：【1】(A) & 【2】(A)

有標 ～ (ら) れる 「y が x に/で Part/Poss を V-ラレル」

・状態変化主体の他動詞文：【1】(B) & 【2】(B)

無標 「y が x で Part/Poss を V-φ」

このように比較してみると、両者を区別する事態把握は、【1】と【2】の要因が(A)と(B)のどちらになるかの違いであることがわかる。態の変換は受動態にしても、使役態・受益態と同様「ある〈場〉においてイベント全体が発生することが、降格した二格名詞句が示す〈場〉に依拠する」という事態把握になっている。そして、その〈場〉の依拠性の把握の点で三者がそれぞれ異なる考える。

- ・使役態：二格名詞句(x2)は発生事象に対して x1 にコントロールされた依拠性 をもつ
- ・受益態：二格名詞句(x2)は発生事象に対して プラス評価の依拠性 をもつ
- ・受動態：二格名詞句(x1)は発生事象に対して ネガティブな依拠性 をもつ

既に結論を出したように、状態変化主体の他動詞文は、場焦点化他動詞構文である。そして、意外なことかもしれないが、持ち主の受身と呼ばれるものも、上のまとめに示したように、やはり共通した「yの〈場〉の変化」という事態把握をもつので、場焦点化他動詞構文が組み込まれていると言える。

最後に違いを生む要素の【1】について補足しておく。受動文における二格名詞句は、発生事象が依拠する〈場〉であり、〈場〉に出来事全体が発生するという把握と組み合わせられて出来文のスキーマが適用される。そして、4.6.5節で可能文との比較で考察したように、受身文の二格名詞句は、発生事象に対してネガティブな依拠性(cf. 4.6.5節)をもつと把握される³⁵⁴。このような二格名詞句の発生事態に対する依拠性によって受身文の主語名詞句には受影性が生まれると仮定する。

一方、状態変化主体の他動詞文では、変化事象が依拠する〈場〉という把握はない。ここで元々存在した使役主・原因者の降格を「文脈化」と呼ぶのは、次のような事象を指している。状態変化主体の他動詞文の動詞の形態は使役変化他動詞構文と同じであり、文脈なしには主語名詞句が使役主なのかそうではないのかの区別がつかない。しかし、現実的

³⁵⁴ 4.7.6.2「中立的な叙述としての場焦点化他動詞構文」の利害関係の視点が入り込むことについての説明および、より具体的な説明は次節(4.11.3)の「間接受身文と二格名詞句の依拠性」も参照されたい。

には使用される文脈によってどちらなのか解釈される。ベースとなる事象の「原因」が文脈化されるというのは、このような意味で文脈の中に登場するということである。それがあれば、主語名詞句が状態変化主体であるという解釈の助けとなるが、必須というわけではない。言語外の文脈（常識や百科事典的な知識）から推察される場合も多い。

文脈化した原因は、原因・状況を示すデ格、あるいは状況を説明する副詞句「～して」「（～場所）で」として現れる。例えば、ベースとなる使役変化事象が「風が花子の帽子を飛ばした」であれば、次のように現れる。

- | | | |
|---|--|--------------------|
| <p>(414) a. <u>風で</u>
 b. 風が吹き抜ける<u>場所で</u>
 c. うっかり外に<u>出てしまって</u>,
 d. 突風に<u>見舞われて</u>,</p> | <div style="font-size: 3em; line-height: 1;">}</div> | <p>花子は帽子を飛ばした。</p> |
|---|--|--------------------|

典型的には (a) に示したように原因となる出来事が「デ格」を伴って「火事・空襲・地震・台風で」のように現れるが、文脈化した原因の現れ方は色々である。もちろん文脈化は場所化とつながっている。デ格が典型的に現れるのもそのためである³⁵⁵。ただしニ格は現れない。ニ格は事象に対して依拠性をもつ格だと考えられるからである。モノとモノの使役連鎖のような直接的な「原因」という把握から、場所化されて、変化事象発生の依拠する〈場〉という把握になり、さらには文脈化されるといった形で連続していると見ることができる。

次に【2】の要因について補足する。受身文については、【1】にも書いたとおり、出来文のスキーマが適用されている。本論文が注目するのは、両者とも対象 (y) を「全体・部分」「所有者と所有物」と分離し、全体/所有者を〈場〉として把握されながらも、受身文では変化事態の発生する〈場〉としてダイナミックな把握になっている。一方、状態変化主体の他動詞文では、変化していない状態から変化した部分/所有物をもつ状態へ変化するという把握になっている。このような【1】と【2】の違いを見ると、状態変化主体の他動詞文が、そのモノに起こった変化を、特に原因と強く結びつけることなく、そのような状況で起こったことを淡々と描写するという概念化者の把握の在り方であると言えるだろう。

以上まとめると、最も重要なことは、日本語では使役態も受動態も受益態も（可能態も）モノとモノの使役連鎖による事態把握から、部分的か全体的かの程度の差こそあれ、イベントと〈場〉の二者の関係の事態把握へと転換が起きていることである。ここにモノと〈場〉の二者関係の概念化に注目することの意義が確認できる。イベントと〈場〉の関係はこの拡張事例である。次に重要なことは、状態変化主体他動詞構文と介在性の他動詞文が無標の述語の形態で表現されるのはなぜかについてである。それは使役態あるいは受動態や受

³⁵⁵ 格の表す意味は、認知言語学的な観点から見れば、デ格が示す意味も連続しており典型的な場所を示す用法から原因、さらには道具というようにつながっていると考える。(cf. 山梨 1995)

益態の事態把握と共通した〈場〉の変化を持ちながらも、変件事象全体が出来するというダイナミックなスキーマではないからである。その一方で、〈場〉の変化を持つからこそ、無標の形態でありながら有標のヴォイスの概念が中和され塗りこめられていると言えるだろう。それはイベントと〈場〉の二者関係に注目した分析によって明らかになったことである。

4.11.3 間接受身文と二格名詞句の依拠性

前節では持ち主の受身を取り上げて状態変化主体の他動詞文との違いを論じたが、それをさらに間接受身全体に拡張して、二格名詞句の依拠性とのつながりを示すことにする。イベントと〈場〉の二者関係の概念化に注目すると、日本語の特徴である間接受身はどのように説明できるか。迷惑という意味はどのような事態把握によって生まれるのか。

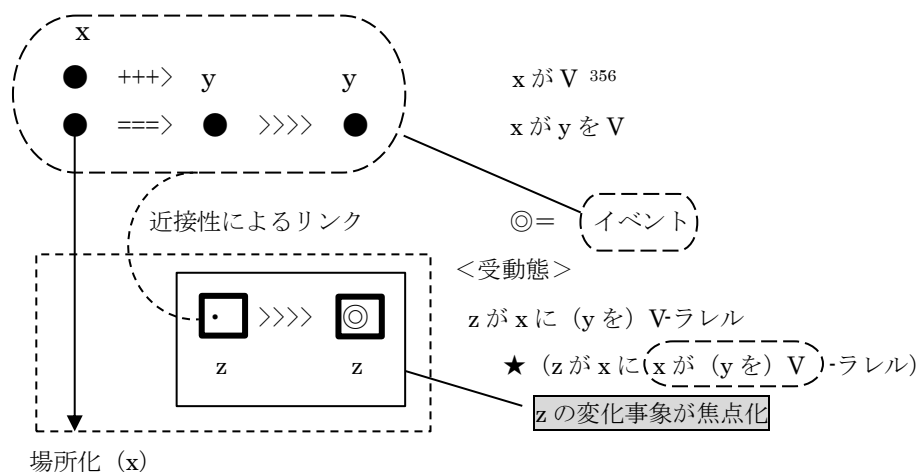


図 4.67 間接受身のイベントスキーマ

間接受身とは、事態に直接関与しない第三者がその事態発生によって迷惑を蒙るという把握によって作られる受身である。図 4.67 の上段はもとなる把握事態である。自動詞文も他動詞文もある。上段と下段の間接受身のイベントスキーマとは参与者同士が直接リンクせず、イベントと近接性によってリンクしている。このリンクは概念化者によって主体的に把握され、(415) に示したように、共有される空間、人間関係など何らかの近接性に

356 この動詞は典型的には非能格動詞で、意図的な行為を表すものである。しかし、「倒れる」「滑る」など、本来非対格動詞と見られる動詞であっても、人主語の場合には「そのような変化を止められなかった」という意味で意図性を認め、これに相当すると考えておく。なお、受身文の二格名詞句になるという事実から「雨に降られる」「父に死なれる」の「降る」「死ぬ」を非能格動詞扱いにする (cf. 影山 1996) 見方もあるが、本論文では、それが非対格か非能格を問わず、ある行動、現象の主体となる名詞句が態の変換によって場所化し、事態発生に依拠する〈場〉となるという点に注目する。見方を変えれば、依拠性とは無生物よりは有情者にこそ認められるものだが、気象現象はそれに準じた把握になっていると言えるだろう。

基づいている。重要なことは、いずれの場合もその事態が主語名詞句の〈場〉(z) とリンクして、その身 (z) の上に発生したと把握されることである。

(415) 間接受身文と近接性によるリンク

- a. 近くでタバコを吸われて、咳き込んだ。[私の近くで]
- b. 忙しい時期に社長に倒れられて、大変だった。[私の勤める会社の社長]
- c. 同期の田中に先に出世されて、ショックだった。[私と同期の人]
- d. 仕事中に急に電気を消されて、驚いた。[私がいる場所]

そもそもなぜ直接受身だけでなく、間接受身のようなものが日本語では成立するのかということを考えたい。モノとモノの因果連鎖のみで事態を把握するならば、因果連鎖に直接関与しない参加者を主語に取り立てて受身を作ることはできない。しかし、本論文が主張するように日本語では直接受身であっても、イベントと〈場〉の二者関係として事態を把握していると仮定したらどうだろうか。そう仮定すれば、因果連鎖に直接に関与しない参加者に焦点を当てる場合であっても、ある〈場〉に依拠して事態全体が生起するという事態把握によって受身が成立すると言えるだろう。

受身とはガ格名詞句の身の上(＝場)に、ある事態全体が二格名詞句で示される〈場〉に依拠して生起することを表す。本論文ではこれを「場の二重構造モデル」(4.6.5 節)と呼んだ。そして、事態発生に対する二格名詞句の依拠性はネガティブなものと規定した。ネガティブとは単に場所化し背景化する性質のことであるが、概念化者の状況の主體的な把握の在り方に応じて三つの意味をもつ。第一に可能態に現れる二格名詞句の依拠性がポジティブと規定されるのとは反対に、二格名詞句に示された人の期待に沿うような事態が発生したのではないことを意味している。第二に、受動態のヴォイスの本務は外項の背景化(抑制＝現れない)であることを意味している。そして第三に、ウチとソトの領域の把握においてソトの〈場〉(＝ウチではない〈場〉)に依拠して事態が発生したことを意味している。

直接受身と間接受身の違いは、この二格名詞句のネガティブな依拠性の捉え方(背景の捉え方)の違いによると考えられる。直接受身では文字通り二格名詞句は背景化し、含意するしないにかかわらず統語構造に現れなくてもいいことが多い。一方、間接受身は文脈によって含意されている場合を除き、原則として二格名詞句を省略できない。これは〈場〉の依拠性の把握の仕方がちょうど逆方向であることを示唆している。直接受身は、能動文に存在した仕手を格下げし背景化し、受け手を焦点化する。その結果、仕手は事態の発生が依拠する〈場〉でありながらも、見えなくなる方向へと進む。つまり、背景は非明示的な性質をもつ。ところが、間接受身は、元々事態の直接の受け手ではない第三者の〈場〉が、近接性によって事態発生の依拠する〈場〉へと“引き込まれる”という捉え方になっている。つまり、依拠性の存在を明示することによってこの第三者による“引き込み”を

表すのだと考えられる。自身の身（ウチ）に起こることがソトの〈場〉に依拠して起こるという事態把握によって間接受身が迷惑の解釈を生むと分析される。

二格名詞句がもつ依拠性の違いによって直接受身と間接受身の違いを説明できることを示したが、これをさらに二格使役文とヲ格使役文の分析にも適用し、イベントと〈場〉の二者関係に注目することの意義を確認したい。

4.11.4 二格・ヲ格使役と二格名詞句の依拠性

使役文も受動文と同様、ある〈場〉にイベント全体が発生するという事態把握になっていると分析した。違いは、使役文は使役主（モノ）と「〈場〉の変化」の組み合わせになる点、そして二格名詞句がもつ依拠性の解釈である。そこで、二格使役文とヲ格使役文の違いが、発生事象の依拠する〈場〉の違いとして説明できることを示す。

自動詞文の使役文には動作主を二格で示す場合とヲ格で示す場合がある。

- (416) a. 子供が行く
b. 父親は子供に行かせた
c. 父親は子供を行かせた。

生成文法による初期の補文構造の分析では、井上（1976a：59）が指摘したように、ヲ格使役は「補文の主語の意志を無視した使役文」、二格使役は「補文の主語の自発的行為を全面に出して、主文の主語は間接的な働きかけを表す」と考えられていた。ただし、井上自身も同書で指摘していたように例外もあり、現在では「動作主を二格で表す場合には動作主の意向が入る余地が残っている（…略…）動作主の意向に逆らって「させる」場合は、ヲ格も二格も使われ（る）」（松岡 2000：300）と説明されることが多い。このような制約は「場の二重構造モデル」によって次のように説明できるだろう。

図 4.68 の上段は「行く」「歩く」ことを他者が働きかけて移動を引き起こすという事象を表している³⁵⁷。これはモノとモノの使役連鎖に基づいた事態把握である。一方、中段と下段は使役主が何らかの働きかけをして、〈場〉にイベントが発生し、それを所有するように変化する、という事態把握である。違いは、中段では動作主（x2）が場所化し、イベントの発生が依拠する〈場〉となっている点である。依拠する〈場〉があるほうが二格使役を作り、ないほうがヲ格使役を作る。

二格使役文で、動作主の意向が入る余地があるのは、事態の発生の依拠する〈場〉になっているからである。二格使役文でも強制使役として用いられるのは、使役における二格

³⁵⁷ この自動詞文のイベントスキーマで動作主（x2）と変化対象（x2）が同一である。これは「行く」なら「動作主が自分に働きかけて、位置変化する」ことを意味している。また「歩く」であれば「動作主が自分に働きかけて、歩く様態で位置変化する」ことを表している。このような構造は、影山・由本（1997：155）の移動推進動詞を表す run の語彙概念構造の分析を参考にした。run: [x ACT (in a running manner)] CAUSE [x MOVE]

名詞句の依拠性は「ニ格名詞句 (x2) は発生事象に対して x1 にコントロールされた依拠性をもつ」と規定されることによる。動作主の意向が抑制され使役主 (x1) の意向が全面に出ることもあるからである³⁵⁸。

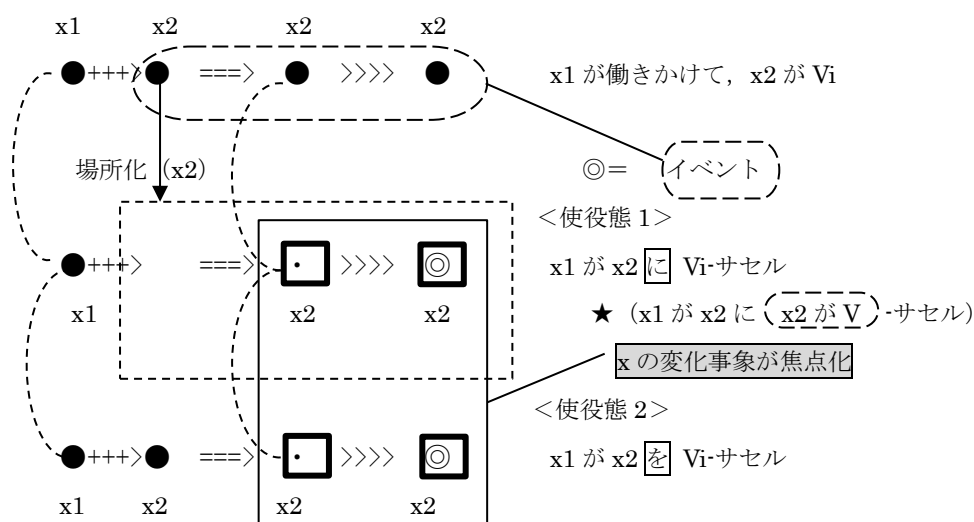


図 4.68 自動詞のニ格／ヲ格使役文のイベントスキーマ

ヲ格使役文が強制使役として用いられるのは、図 4.68 の下段を見てわかるとおり、動作主 (x2) の身に発生するイベントに使役主 (x1) が直接的に働きかけをするという事態把握になっているからである。

このように、〈場〉におけるイベントの発生と発生が依拠する〈場〉の二つを仮定することによって、ニ格使役とヲ格使役の統語的な振る舞いと意味とのつながりが説明できるだろう。以上で第 4 章の考察を終わる。

³⁵⁸ 図 4.68 に示したスキーマは、「行く」「歩く」などの移動、移動推進あるいは姿勢変化を表す自動詞のものである。対象の移動・変化を表さずに（含意せずに）意図的な活動を表す自動詞（例えば「泣く」）の場合のスキーマについては、4.11.4 節で分析した可能文のスキーマと同様、事態発生の〈場〉とその発生が依拠する〈場〉は同一となる。たとえ同一になっても、上述のニ格の依拠性に基づく分析には影響がない。図 4.28 「可能文のイベントスキーマ」の脚注も参照されたい。

第5章 際立ちが与えられた〈場〉が作り出す構文：パート2

第4章では、主に際立ちが与えられた〈場〉が主語位置に来て、ヲ格名詞句をとる他動詞構文を分析した。この第5章では、際立ちが与えられた〈場〉が主語位置に来て自動詞構文を作る場合、〈場〉が目的語位置に来て他動詞構文を作る場合を取り上げて分析する。さらに、道具主語構文と呼ばれる構文を取り上げ、物の移動の概念化の全体について整理する。そこでは第4章で導入した所有と占有の概念の重要性が確認される。

5.1 場所格交替する自動詞文

〈場〉の焦点化は必ずしも他動詞構文を作ることを意味していない。際立ちの与えられ方によって、二項述語として言語化されれば他動詞構文になるが、一項述語として言語化されれば自動詞構文になる。自動詞構文における場所格交替としては Levin (1993) が Swarm 型と呼んだ構文交替がよく知られている。この構文交替は英語と日本語で成立の可否が異なることを示し、その原因を考察する。

5.1.1 Swarm 型場所格交替

Levin (1993) は (1) のように動詞 ‘swarm’ に見られる構文交替をその動詞名をとり Swarm 型の場所格交替 (Swarm Alternation) と呼んだ。この構文交替の特徴は次のとおりである。(a) で場所句だった ‘the garden’ が (b) では主語位置に来て、元の主語だった ‘bees’ が前置詞 ‘with’ を伴って付加詞に格下げされている。

- (1) a. Bees are swarming in the garden.
b. The garden is swarming with bees. (同上：253 例文(920))

Levin (1993 : 53-54) はこの場所格交替を七つに下位分類している。[] の日本語は引用者による。

1. Verbs of light emission: [発光動詞]
beam, blink, burn, blaze, flash, sparkle, twinkle … (略)
2. Verbs of sound emission: [音放出動詞]
babble, bang, beat, beep, click, hiss, scream, sing … (略)
3. Verbs of substance emission: [流出動詞]
drip, foam, gush, ooze, radiate … (略)
4. Verbs of sound existence: [音存在動詞]
echo, resonate, resound, reverberate, sound
5. Verbs of entity-specific modes of being: [存在様態動詞]
bloom, blossom, bristle, foam, sprout

6. Verbs of modes of being involving motion: [動きがかかわる存在様態動詞]
dance, flutter, pulsate, quiver, shake, stir, sway, tremble, writhe
7. Swarm verbs: [「群がる」類の動詞]
abound, bustle, crawl, creep, hop, run, swarm, swim, team, throng

5.1.2 英語と日本語の構文成立の可否

Levin (1993) の分類にしたがって、その英語の例と対応する日本語を観察する。英語の付加詞の ‘with’ は「道具」または「材料」を表すと考えられるので、規則的に「デ格」で対応させ（各例文の(b)）³⁵⁹、それが成立するか見た上で、成立しない場合あるいは不自然な場合（各例文の b-①）、日本語として自然な表現を挙げておく（各例文の b-②③）。対応する日本語とその判定は本論文の筆者による。

◆Verbs of light emission

(2) sparkle ³⁶⁰

- a. Jewels sparkled on the crown.
- b. The crown sparkled with jewels. (同上 : 234 例文(788))

(3) 輝く・光り輝く

- a. (多くの) 宝石が王冠 (の上) で {?輝いた／輝いていた}。 ³⁶¹
- b. 王冠は (多くの) 宝石で {?輝いた／輝いていた}。

◆Verbs of sound emission

(4) sing

- a. Birds sang in the trees.
- b. The trees sang with birds. (同上 : 235 例文(797))

なお, Dowty (2000 : 116) は, sing は?付きで示し, twitter なら成立するとしている。

- (5) a. ? The trees sang with birds.
- b. The trees twittered with birds.

³⁵⁹ 次節で取り上げる他動詞文の場所格交替では、英語の with 前置詞句に相当するものとして日本語では「デ格名詞句」が用いられる。この場所格交替との平行性に基づいてこの自動詞文の交替でも「で」を用いることにする。このデ格については後でまた取り上げて論じる。

³⁶⁰ sparkle : (宝石・星・目などが) 輝く, […で] 光る [with], (才気などが) ほとばしる, 異彩を放つ ; […で] 光る, 輝く [with] His conversation sparkles with humor. 彼の会話はユーモアに富んでいる。(ジ英和)

³⁶¹ 日本語では「ている」を付けるほうが自然になる。これは英語では進行形になっていなくても、対象物の存在様態を叙述しているからである。以下の例文でも「ている形」を併記しておく。

(6) さえずる

- a. 鳥たちが林で {さえずった／さえずっていた}。
- b. ① *林は鳥たちで {さえずった／さえずっていた}。
② 林は鳥たちのさえずり (声) {に／で} 満ちていた。
③ 林では (あちこちで) 鳥たちがさえずっていた。

◆Verbs of substance emission

(7) gush

- a. Water gushed through the streets.
- b. The streets gushed with water. (同上 : 237 例文(815))

(8) 噴き出す

- a. 水が道路一面に噴き出した。
- b. ① *道路は一面水で噴き出した。
② 道路は一面噴き出した水で {あふれていた／いっぱいだった}。
③ 道路には一面水が噴き出していた。

◆Verbs of sound existence

(9) echo ³⁶²

- a. The voices echoed in the hall.
- b. The hall is echoing with the voices. (同上 : 252 例文(913))

(10) 反響する

- a. 声がホールに {反響した／反響していた}。
- b. ① ??/*ホールは声で {反響した／反響していた}。
② ??ホールは声で {いっぱいだった／満ちていた}
③ ホールには声が反響していた。

岸本 (2001 : 106) では交替する動詞として「響く」「鳴り響く」「反響する」を挙げているが、「響く」「鳴り響く」では交替しにくいようである。英語の ‘resound’ では交替する。

³⁶² echo : <場所が> [音などで/…に] 反響する [with/to], <音が> 反響して返る (back)
<音などが> [場所に] 反響する [through, in, around] The house echoed with her laughter. = Her laughter echoed through [throughout] the house. 彼女の笑い声が家にこだました。(ジ英和)

(11) resound

- a. Another scream resounded through the school
- b. The office resounds with the metronomic clicking of keyboards.

(Oxford Dictionary Online)

(12) 響く・鳴り響く

- a. また一つ叫び声が校舎に響いた。
- b. ① *オフィスはメトロノームのようなキーボードの音で
{響いた/鳴り響いた}。
② ?オフィスはメトロノームのようなキーボードの音で
{いっぱいだった/満ちていた/あふれていた}。
③ オフィスにはメトロノームのようなキーボードの音が
{響いて/鳴り響いて} いた。

◆ Verbs of entity-specific modes of being

(13) flower

- a. Roses flowered in the garden.
- b. The garden flowered with roses. (同上 : 251 例文(899))

(14) (花が) 咲く

- c. バラが庭に {咲いた/咲いていた}。
- d. ① *庭は一面バラで {咲いた/咲いていた}。³⁶³
② 庭はバラの花でいっぱいだった。³⁶⁴
③ 庭には一面バラが咲いていた。

◆ Verbs of modes of being involving motion

Levin (1993) ではこの動詞の場所格交替の例文を挙げていないが、Dowty (2000) では次のような交替を挙げている。実際の動きがある (a) では場所主語の自動詞文が成立しないのに対して誇張の (b) と比喻の (c) では成立している点が注目される。

(15) dance

- Literal (a) Graceful couples danced on the floor.
*The Floor danced with graceful couples.
- Hyperbole (b) Fireflies danced in the garden.

³⁶³ 岸本 (2001 : 106) が挙げているように「満開になる」は交替するが、その場合は下の②に相当するだろう。(i) 春になれば、山のすべてが桜で満開になるそれは美しい山になりました。(佐藤緋玲「尊くも困難に堪えた私たちの母」)

³⁶⁴ ‘flower’ と同タイプの ‘bloom’ については、次のような対訳があてられている。
The field bloomed with poppies. 野原は一面ケシの花だった。(ジ英和)

The garden danced with fireflies.

Metaphor (c) Visions of success danced in his head.

His head danced with visions of success. (同上：119)

(16) 踊る

文字通り (a) モノ主語：上品なカップルたちがそのフロアで踊った。

場所主語：①*そのフロアは上品なカップルで踊った。

② そのフロアは踊る上品なカップルでいっぱいだった。

③ そのフロアでは上品なカップルが大勢踊っていた。

誇張 (b) モノ主語：蛍たちが庭で踊るように飛んでいた。

場所主語：①*庭は蛍で（踊るように）飛んでいた。

② 庭は飛び回る蛍でいっぱいだった。

③ 庭には多くのホタルが踊るように飛んでいた。

メタファー (c) モノ主語：？成功のビジョンが彼の頭の中で踊った。

場所主語：① *彼の頭は成功のビジョンで踊った。

② 彼の頭は成功のビジョンでいっぱいだった。

③ ?彼の頭には成功のビジョンが踊った。

◆Swarm verbs

(17) swarm ³⁶⁵ 再掲 (=1)

a. Bees are swarming in the garden.

b. The garden is swarming with bees.

(18) 群がる

a. ミツバチが庭に群がっている。

b. ① *庭はミツバチで群がっている。

② 庭はミツバチでいっぱいだ。

③ 庭にはミツバチが群がっている

上の分類は英語を基準にしたが、英語にはなくて日本語では成立する自動詞文の場所格交替もある。例えば、他動詞文の場所格交替は英語・日本語の両方にもあるが、自動詞文の交替が日本語のほうにしか存在しないものがある³⁶⁶。

³⁶⁵ swarm : <ミツバチが>群がって巣別れする [飛び回る], <場所が> [人・動物などの動く群れで] いっぱいになる [with] The hall swarmed with a large audience. 会場は多数の聴衆で埋まった。(ジ英和)

³⁶⁶ 「散らかす」「山盛りにする」という他動詞に対応する英語としては、‘scatter’ ‘heap’ があり、場所格交替するが、これらには自動詞用法がないか、あっても自然現象を表す用法である。影山 (1996) が

(19) 散らかる

- a. 部屋におもちゃが散らかっている。
- b. 部屋がおもちゃで散らかっている。

(20) (バイキング形式のレストランで)

- a. 皿に料理が山盛りになっている。
- b. 皿が料理で山盛りになっている。

また、日本語では自動詞文で場所格交替するが、英語では物主語による他動詞文と **with** 前置詞句をとる場所主語の自動詞文になる場合もある。

(21) a. 水道管にゴミが詰まる。

- b. 水道管がゴミで詰まる。

(22) a. Leaves are clogging (up) the drain.³⁶⁷ (モノ主語 - 他動詞構文)

- b. The pipes had clogged with rust.³⁶⁸ (with - 前置詞句自動詞構文)

以上、英語とそれに対応する日本語を観察してわかることは、日本語は元の文と同じ動詞を用いる場所格交替は成立しにくいということである。英語が規則的に同一の動詞で構文交替するのとは対照的である。そのかわり日本語は各例文の②で示したように、「(～でいっぱい)」あるいはそれに相当する述語（「あふれる」「満ちる」など）で対応する³⁶⁹。英語にはない自動詞文の場所格交替についてもいくつか取り上げたが、(19) (20) (21) の日本語「散らかる」「山盛りになる」「詰まる」もその対象物がある場面一面を埋めるように存在するという意味であり、「場全体」の変化を表していると言える。そのために、「〈場所〉が〈対象物〉で V」が無理なく成立していると考えられる。そうすると、「輝く」だけが、元々「その場全体に/一面に存在する」という意味がない動詞で、構文交替が成立していることになる。英語と日本語でこのような違いがなぜ生まれるのかを次節で考えてみたい。

5.1.3. セッティング主語と BE 所有

英語の場所格交替で場所句が主語になっている構文は、Langacker (1990b) が示した ‘Setting Subject Construction’ という構文に相当すると考えられる。もともと背景

指摘するように、英語の自動詞派生は原則的に反使役化で、人為的な動作において動作主を抑制する（脱使役化の）ような動詞の自動詞化は起こりにくいと考えられる。

³⁶⁷ Cambridge Dictionary Online

³⁶⁸ The American Heritage Dictionary of the English language Online

³⁶⁹ 「反響する」には「??/*」の判定を付けたが、もし「音が反射してその場に音がいっぱいになる」という意味が強く意識されると使うこともあるようだ。しかし、こなれた日本語とは言えない。

(setting) であった場所句に際立ちが与えられ、主語になった構文である。Langacker は事態認知モデルである「ステージモデル」で参与者 (participant) とセッティング (setting) の区別を重視した。そして主に参与者とその関係がプロファイルされことによって概念化されると考えたわけだが、セッティングにも際立ちが与えられ、主語になる構文があることを指摘した。その中にはここで分析対象となっている Swarm 型の構文交替も含まれている³⁷⁰。

(23) a. Fleas are crawling all over my cat.

(ノミがぼくのネコの体じゅうを這っている／這いまわっている)

a'. My cat is crawling with fleas.

(ぼくのネコの体はノミでいっぱいだ)

b. Bees are swarming all through the garden.

(ハチが庭一面に群がっている。)

b'. The garden is swarming with bees.

(庭には一面ハチが群がっている)

(同上 : 231 ※日本語訳は引用者による)

Langacker はこのような構文の意味は 'be the setting for { crawling/swarming } activity' (同上 : 232) であるとした。つまり、主語名詞句は述部が表している事態のセッティングであるという解釈である。しかし、場所句に際立ちがあたり主語位置に来るというのはどうということなのかについては具体的に説明されていない。概念化者は事態を構成する要素のどれに対しても際立ちを当てることができる。その中で場所句が選ばれる動機付けは何か。本論文では、背景として機能している場所句に際立ちが当たるとするのは、「場所句が、そこに対象物が存在することによって特徴付けられる」という事態把握によって所有の概念に転換していることだと考える。上の Langacker の例文はまさにその場所に対象物がたくさんいることによって、その場所が特徴付けられていることがよくわかる。

広がりのある場所に対して存在物が少なければ、まとまり性の点で対象物に焦点が当たる。これはゲシュタルトの要因によるもので、通常はモノが図になり、場所は背景になる。しかし、存在物の数が多くなると、そのモノ一つ一つに注意が及ばず、場所がその存在物によって特徴付けられるように「見え方」が変わる。それは図地反転の一種と言えるだろう。Salkoff (1983) の挙げた例でそれを確認してみたい。

³⁷⁰ Langacker (1990b) では次のようなものも setting subject としている。直訳すると擬人法的な日本語になるものである。(※日本語訳は、河上 1996 : 124 より)

(i) Tuesday saw yet another startling development. (火曜日に、さらに驚くべき発展が見られた)

(ii) This arena has witnessed many thrilling contests. (この競技場では、興奮を呼ぶ闘いが多く見られてきた)

- (24) a. Stars are { blazing, ablaze } in the sky.
 = The sky is { blazing, ablaze } with stars.
 b. Flies { buzzed, were abuzz } in the bottle.
 = The bottle { buzzed, was abuzz } with flies.
 c. Fireflies { glowed, were aglow } in the field.
 = The field { glowed, was aglow } with fireflies. (同上 : 301)

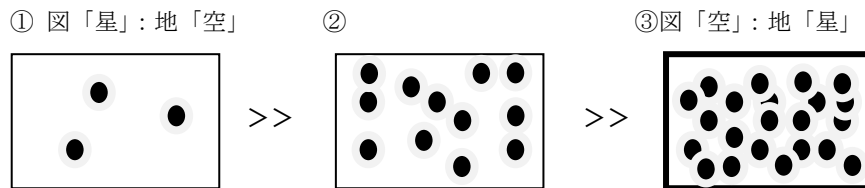


図 5.1 モノから場へ

図 5.1-①のように目に見える星の数が少なければ、それは「星の見える方」と把握され、星が図で空が地（背景）となり「空に星が輝いている」と描写される。ところが②のように見える星の数が増えると、「星が輝いているのか、空が輝いているのか」その区別がだんだん曖昧になってくる。そして③の段階になると、「空の見える方」にシフトして、空が図となりその構成要素（素材）として星が地（背景）となるため、「空は星で輝いている」となるわけである。日本語は、**Swarm** 型の構文交替で場所句が主語位置に来る自動詞文が成立しにくいことを上で確認したが、その日本語であっても成立するのが「輝く・光る」のような発光動詞である。これは上の図で示したように、多くの発光体が存在する場合、他のタイプと比べて、モノから〈場〉へと「見える方」がシフトしやすいからだと考えられる。

ここで一つ重要な点を指摘しておかなければならない。図 5.1 に示したようなモノから〈場〉への図地反転は、モノが動いている状態よりは静止している（ように把握される）状態のほうが起こりやすいということである。Talmy (1978) は図 (Figure) と地 (Ground) を次のように規定している。動いているものは図として認識されるのである。

- (25) 図と地の定義 (Talmy 1978 : 627 より ※下線は引用者による)

The Figure object is a moving or conceptually movable point whose path or site is conceived as a variable the particular value of which is the salient issue.

The Ground object is a reference-point, having a stationary setting within a reference-frame, with respect to which the Figure's path or site receives characterization.

事実、Swarm 型の構文交替は、元々動きを表す動詞であっても意味が静的なものへとシフトしている。連続体として把握される物質は別として、個体として把握される対象物の場合、その動きを表す動詞では交替が起こらない。‘swarm’では交替するのに、‘fly’では交替しないのはそのためである。

- (26) a. Bees are flying in the garden.
b. *The garden is flying with bees. (Salkoff 1983 : 289)

Talmy (1978) では、図と地は構文上の名詞句の位置によってその意味役割を変える場合と変えない場合があると指摘している。(27) では元々 (G=ground) だった場所名詞句が主語位置に来て (F=Figure) になり、変項 (variable-point) 扱いになっている。この場合元々 (F) だった bike が今度は参照点 (reference) 扱いに変わり (G) になっている。

- (27) a. The bike (F) is near the house (G).
b. The house (F) is near the bike (G). (同上 : 629)

このような静止したモノと場所の位置関係は何を中心にして語るかによって図地反転が起こりやすい。ただし、それが自然な文になるかは別の問題である³⁷¹。

一方、次の例では意味役割は変更されていないと指摘している。

- (28) a. Smoke (F) slowly filled with the room (G).
b. The room (G) slowly filled with smoke (F). (同上 : 629 ft2)

この場合、部屋 (room) は依然として参照点 (reference point) の意味役割であり、両者の違いは視点 (perspectival viewpoint) の違いによると説明している。これは、対象が動く場合であり、場が主語位置に来て依然として地としてとられていると言える。対応する日本語は、場所句に「は」を付加したものが最も近いと考えられる。

- (29) a. 煙がゆっくりその部屋に充満してきた。
b. その部屋には煙がゆっくり充満してきた。

3.4.5 節で示した HAVE 存在文も同じ発想で、場が主語位置に来ているが、それは参照点にすぎず、実質的には存在を表している。

³⁷¹ 通常の事態把握では、動くことができるモノ (bike) を (F) にするほうが動かないモノ (house) を (F) にするより自然である。

(30) The tree_i has a nest in it_i. (= There is a nest in the tree.) (Freeze1992 : 583)

それでは、ここで問題になっている Swarm 型の場所格交替では、〈場〉は図になっているのかそれとも地のままなのか。この交替では自動詞構文でありながら、主語名詞句と with 前置詞句とが、壁塗り交替で目的語名詞句と with 前置詞句の間に見られるような全体的な解釈を受けるとされる (Levin 1991 : 54)。

(31) a. Jack sprayed paint on the wall. (locative variant)

b. Jack sprayed the wall with paint. (with variant)

(31) の壁塗り交替で (b) のように場所句が目的語になる場合は、with 前置詞句で示されたモノを全体的にもつという意味になる (またはなりやすい) という特徴がある。そして Pinker (2007) が指摘しているように、この「モノの移動事象」と「場所の状態変化」の交替は一種の図地反転であると考えられる³⁷²。このような特徴を Swarm 型の構文交替がもつとすれば、やはり図地反転が起きているとみなしていいだろう。

本論文では、所有の概念に転換しながらも、〈場〉が背景化し、二格名詞句のまま自動詞構文を作る場合を所有 A (参照点構造化自動詞構文) であると考えた。しかし、この Swarm 型の構文交替では場所句は二格を伴って現れるわけではないので、所有の概念に転換した上で、〈場〉が焦点化し主語位置に来て自動詞構文を作っていると考ええる。そして、所有の概念をもつ構文の特徴として、〈場〉(＝主語位置に来る名詞句) の特徴付けになっている点で共通していると考ええる。

なぜ日本語は英語のような自動詞文で同一述語による構文交替が生産的ではないのか。英語のように生産的であるということは、一つの動詞が同形態で動的な意味にも静的な意味にも用いることができることを意味している。そしてそのような動的と静的の意味の転換がしやすい言語としにくい言語があるとすれば、日本語は後者の言語ということになる。これに関するさらなる分析は今後の課題としたい。

次に、日本語特有の要因として、「充満」の概念と「デ格」の結びつきについて考えてみたい。「存在する対象物の多さ」を叙述する場合に、その対象物に焦点が当たる場合は問題ないが、存在する場がどうなっているのかを述べる場合には、統語上の制約が強く働くようである。日本語は「対象物が多いこと」をその対象物を主語にして述べることはできる。そして、「その多くの対象物が、ある動きをしながら存在すること」も対象物を主語にして述べることはできる。しかし、〈場〉の見え方として、「多くの対象物がそのような動きをしながら存在する」ということを一つの述語で述べるのが難しい。一つの方法は「動き」の部分捨てて、(32d) のように「存在」の部分だけ述べる。もし「動き」も入れる場合

³⁷² 詳しくは次節 (5.2 節) 「場所格交替をする他動詞文」を参照されたい。

には、(32e) のように連体修飾にする³⁷³。

- (32) a. ミツバチが庭にたくさんいる。(対象主語—存在)
b. ミツバチが庭でたくさん群がっている。(対象主語—存在・様態)
c. *その庭は、ミツバチで群がっている。(場—対象の存在様態)
d. その庭は、ミツバチでいっぱいだ。(場—対象でいっぱい)
e. その庭は、飛び回るミツバチでいっぱいだ。(場—様態+対象でいっぱい)

まず (32) の例文で注目したいのは、(d) と (e) に現れるデ格である。デ格には様々な用法があるが³⁷⁴、英語と対応する日本語としてデ格が選ばれるのは場所句主語の自動詞文に現れる with 名詞句がその場所を構成する「材料」だと見られるからである。しかし、日本語では動きを表す動詞にデ格名詞句が付く場合、「材料」を表すのは、「紙で飛行機を作る」のような生産を表す動詞の場合である。したがって、そもそも「さえずる」「あふれる」「反響する」のような動きを表す動詞に付いてその動きが存在する場所の構成物を示すことはできない。生産動詞以外で「材料」を表す構文は、「いっぱいだ」「満ちる」「あふれる」「満員だ」などの充満の意味を表す構文である。英語のように同一の動詞を用いたままデ格名詞句で「材料」を表すような交替ができないのは当然の帰結といえる³⁷⁵。

次に英語に対応する日本語として挙げた③に注目してみたい。上で観察したように自動詞文の場所格交替で場所を主語に据えた文については、日本語では「～には…が V」のように自動詞構文で対応できる。本論文では、静的な事象の場合「～には…が V」には存在を表す場合と、所有を表す場合があるとした (3.4.2 節)。存在の場合は、場所句が単に題目化されているだけである。一方、所有のほうは、「場所が、存在物によって特徴付けられる」という把握によって所有の概念に転換しながらも、場所句は背景化したままで自動詞文を作る。この場合を「所有 A」と呼んで区別した。一方、所有の概念の鋳型を通じた動的な事象の把握はこれまで所有 B を中心に分析してきたが、所有 A にも当然適用される。したがって、③のような表現において「～には」で示される場所と「～が」で示される対象物とが所有の概念によって結び付けられて把握されていると見る事が可能である。もちろん③は所有 A ではなく、存在の概念で単に場所が取り立てられているとみなすことも可能である。静的な事象における存在（場所が「は」で取り立てられたもの）と所有 A の線引きは、事象叙述か属性叙述かを判断基準としたが、存在と所有の概念が鋳型となった動的な事象把握においては、どちらも事象叙述のタイプになるため、線引きはそれほど明確ではない。重要なことはいずれにしても、事象叙述で〈場〉の一時的な状態を叙述しているという点

³⁷³ モノの存在の多さを叙述する表現の制限については、4.1.5 の「富む」の分析も参照されたい。

³⁷⁴ 「出来事・動作の場所」「道具・手段」「材料」「原因」「範囲」「限度」「基準」を表す用法などがある。
(益岡・田窪 1992)

³⁷⁵ 上に挙げた動詞では発光動詞の「輝く」だけがデ格名詞句で交替したが、このデ格は「輝く」という現象が存在する場所を構成する「材料」と見ることもできるが、「輝く」という現象を引き起こす「原因」と見ることもできる。

であり³⁷⁶、ある対象物の存在がその〈場〉を特徴付けているという把握の在り方が強くなれば、それは所有の概念の鑄型を通して言語されたのだと言える。

以上をまとめると、英語では同じ動詞述語によって自動詞文による場所格交替が起こりやすいが、日本語では充満を表す述語を用いて表現するか、所有 A によって表現することになる、と言えるだろう。

<Swarm 型場所格交替における英語と日本語の対応のまとめ>

- ・対象物主語の自動詞構文

[英語] Water gushed through the streets.

[日本語] 水が道路一面に噴き出した。(各例文の①)

- ・場所句主語の自動詞構文

[英語] The streets gushed with water.

[日本語] 【充満構文】(各例文の②)

道路は噴き出した水^で {あふれていた/いっぱいだった}。

【所有 A (事象叙述)】または【場所題目化構文】(各例文の③)

道路に^は一面水が噴き出していた。

- ・英語は同一の述語で場所格交替をするが、日本語は別の構文で表現する傾向が顕著

5.2 場所格交替をする他動詞文

本節では (33) (34) に示したような他動詞文の場所格交替 (locative alternation) と呼ばれる構文交替現象を取り上げる。ここで扱う場所格交替は、動詞句 (VP) にある Theme (主題/対象物) の意味役割を持つ項と Location (場所) の意味役割をもつ項の統語上に現れる位置が交替する現象である。(a) のほうは目的語に Theme を、(b) のほうは目的語に Location をとっている。

- (33) a. John smeared paint on the wall.
b. John smeared the wall with paint.

- (34) a ジョンは壁にペンキを塗った。³⁷⁷
b ジョンはペンキで壁を塗った。

まずこの構文交替が、一つの事態についてそれが「モノの移動事象」として把握されるのか、「場の状態変化」として把握されるのかという一種の図地反転によって起こることを

³⁷⁶ 4.7.6.3 節の「事象タイプとのつながり」も参照されたい。

³⁷⁷ 「塗る」はこのタイプの交替現象でよく例として取り上げられるが、あとで論じるように特殊な例である。英語の 'spray' の場合は「吹き付ける」であり、その場合は日本語では交替しない。日本語の「塗る」は上に示したように 'smear' が近い。

確認する。次に、「全体的解釈」(holistic interpretation)と「部分的解釈」(partitive interpretation)の問題について先行研究の分析を概観した上で、それを存在と所有の概念とのつながりによって説明を試みる。さらに、日本語の場所格交替の制約について本論文の枠組みの中で分析する。

5.2.1 二つの事態把握と構文

まず英語と日本語において、どのような動詞がどのような交替現象を示すのかを見てみる。各タイプに属する動詞を岸本(2001: 105-106)より抜粋しておく。この交替現象を見せる動詞は大きく「取り付け」の意味と反対の「除去」の意味を表す動詞のタイプに分類される。英語の「取り付け」タイプは、代表的な動詞をとって‘SPRAY/LOAD alternation’と呼ばれ(Levin1993)、移動事象では(35a)に示したように‘on’をはじめとする移動先を示す前置詞が現れる³⁷⁸。場所の状態変化事象では(35b)に示したように‘with’が現れる。

(35) = (1)

- a John sprayed paint on the wall.
- b John sprayed the wall with paint. (Levin1993: 51)

- (36) a Jessica loaded boxes on the wagon.
- b Jessica loaded the wagon with boxes. (Levin1993: 118)

<英語の spray/load type の動詞例> ※分類名も岸本(2001)による。

- ・塗り込み: grease, brush, dab, daub, plaster, rub, slather, smear, smudge, spread, streak
- ・積み上げ: heap, pile, stack
- ・放出: inject, spatter, splash, splatter, spray, sprinkle, squirt; bestrew, scatter, sow, strew
- ・詰め込み: pack, cram, crowd, jam, stuff, wad
- ・積み込み: load, pack, stock

三項述語になる動詞の意味構造を考えると、大きく pour 型と fill 型に分けられ、場所格交替するのは、上に挙げたような動詞で、その両方の型の性質を備えている動詞である(岸本 2001: 111)。つまり、「移動物の動き」に注目し、移動先の場所がどのような状態に変化したかには無関心な動詞が pour 型(例文 37)で、逆に移動物の動きには無関心で、移動

³⁷⁸ 動詞によっては ‘onto’, ‘in’, ‘into’ などが現れるが、ここでは代表的な前置詞として ‘on’ を挙げておく。
(i) stack hay (up) in the barn (ii) stack the barn with hay (iii) She rubbed ointment into her arms. (iv) She rubbed her arms with ointment. (ジ英和)

先の場所の変化に注目する動詞が fill 型（例文 38）である。その両方の性質をもつ動詞が交替する。pure 型は場所目的語の文が成立せず、fill 型は移動物目的語の文が成立しない。

- (37) a. John poured water into the glass.
b. *John poured the glass with water.

- (38) a. John filled the glass with water.
b. *John filled water into the glass.

Pinker (1989) は「X が Y を Z に動かす」という移動の意味と、「Y が Z に動くことによって X が Z の状態変化を引き起こす」という場所の変化の意味の両方をもつことが場所格交替の成立条件であるとし、Pinker (2007) ではこのような違いは一種の図地反転であるとして、一つの事態の把握の在り方の違いによるものとした³⁷⁹。

それでは日本語の場所格交替はどうだろうか。日本語では下に示したように、pour 型では場所名詞句に助詞「に」が付き、fill 型では移動物に「で」が付く。SPRAY タイプについては「塗る」(smear) は成立するが (39), 「吹き付ける」(spray) では交替しない (40b)。LOAD タイプについては「載せる」(load) では成立しないが (41b), 「詰める」では成立する (例文 42)。また、英語では成立しない fill 型の「満たす」は交替する (43)。

(39) = (2)

- a ジョンは壁にペンキを塗った。
b ジョンはペンキで壁を塗った。

- (40) a. ジョンは壁に塗料を吹き付けた。
b. *ジョンは塗料で壁を吹き付けた。

(41) 英語 (36) の日本語訳

- a ジェシカはワゴンに箱を載せた。
b *ジェシカは箱でワゴンを載せた。 cf. 箱でワゴンをいっぱいにした。

- (42) a. 太郎は隙間に新聞紙を詰めた。
b. 太郎は新聞紙で隙間を詰めた。

³⁷⁹ 「これは同一の事態を二つの異なるしかたで解釈することであり、ゲシュタルト心理学でいう「地」と「図」の反転—見る者の意識によって人の顔に見えたり、壺に見えたりする—にちょっと似ている。干し草とワゴンの文の場合、地と図の反転が行われるのは「心の目」ではなく、心そのもの—その事態が何であったかに関する解釈—においてだ。」(Pinker:2007: 43-44※日本語訳はピンカー2009:93による)

(43) 英語 (38) の日本語訳

- a ジョンはグラスに水を満たした。
- b ジョンは水でグラスを満たした。

このように日本語は、英語と共通する特徴が認められるものの、まったく同じではなく、個別言語的な違いがあるようである。岸本 (2001) は交替する他動詞として次のものを挙げて四つに分類している。

<日本語の動詞例>

- ・塗り込み：塗る，張る，葺く，からめる，和える，染める，飾る
- ・積み上げ：盛り付ける，山盛りにする
- ・放散：ちりばめる，散らかす，まぶす，敷き詰める
- ・詰め込み：詰める，満杯にする，埋める，満たす

5.2.2 三つの課題

場所格交替では、場所名詞句が目的語になる場合に「その場所全体が変化する」という解釈が優勢になるが、移動物が目的語になる場合には必ずしもそのような解釈にならないことが早くから指摘されていた。これが「全体的解釈」と「部分的解釈」の問題である。英語でも日本語でも (a) は壁がどのように変化したかは不明で、どちらの解釈も可能だが³⁸⁰、(b) のほうは全体的解釈が優先される。

(44) 再掲 (=33)

- a. John smeared paint on the wall.
- b. John smeared the wall with paint. (全体解釈：壁全体が変化)

(45) 再掲 (=34)

- a. ジョンは壁にペンキを塗った。
- b. ジョンはペンキで壁を塗った。(全体解釈：壁全体が変化)

奥津 (1981) はこの「塗る」の全体的解釈を文型の違いではなく、「塗られている場所の違い」というような条件によるのかもしれない³⁸¹とした上で、「同種の代換をもつ多くの動

³⁸⁰ 修飾語または特別な文脈がなければ、通常は「部分的解釈」になる。

³⁸¹ 奥津 (1981) はその根拠として宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』(秀英出版) の例文を挙げた。(i) 唇に毒々しくルージュを塗った。(ii)唇を毒々しくルージュで塗った。(同上：左 22)

それに対して、岸本はこの例文で部分と全体の解釈の違いが生じにくのは、「毒々しく」という結果を表す副詞があるためではないかと指摘しており、全くそのとおりであるが、さらに付け加えるならば、私たちの日常の経験から、ルージュを塗るときに、唇の一部だけを塗って済ませることが普通ではありえないという知識によるものである。このような百科事典的な知識あるいは語用論的な解釈が影響する

詞には、部分・全体的という読みの違いは認められない」(同上：左 22)としている。しかし、奥津は語用論的な解釈と事態が概念化される際の把握の在り方を区別しておらず、さらに全体的解釈を単に「量」の問題に置き換えており、この場所格交替の言語現象を正しく捉えてはいない。部分的解釈と全体的な解釈がはっきり表れない場合がある(岸本 2001 : 108)ことは確かである。しかし、重要なことは、事態の把握の在り方の違いも意味の違いとして認めるならば、この構文交替の両文が同じ事態の把握であるはずはないということである。次節で奥津の分析を批判的に検討して、存在と所有の概念に基づいて、全体的解釈の本質を明らかにする。

英語では(46)に示すように、「ほとんどの部分にはペンキが塗られていない」と続けるのは、移動物目的語の文では問題ないが、場所目的語の文では矛盾をきたし非文となることから(b)が強く全体的な解釈を受けることがわかる。(岸本 2001 : 107)

- (46) a John smeared paint on the wall, but most of the wall didn't get any paint on it.
 b *John smeared the wall with paint, but most of the wall didn't get any paint on it.

日本語の場合も、壁の修繕のためにその一部のみにペンキを塗ったことについて、「壁にペンキを塗ったが、ほとんどがまだ塗られていない」とは言えるが、「壁をペンキで塗ったが、ほとんどがまだ塗られていない」とは言いにくい。また、岸本(2001)が紹介している次の例からも日本語にも場所名詞句が目的語になっている場合には全体的解釈が優勢になることがわかる³⁸²。

- (47) a. 持っている本全部を本棚に詰めたが、本棚にはまだ隙間がある。
 b. *持っている本全部で本棚を詰めたが、本棚にはまだ隙間がある。

この全体的解釈は、場所句が直接目的語になることによる当然の帰結だと説明されることが多い。しかし、それで十分だろうか。このような説明は、使役主(動作主)の視点から対象への働きかけを考えている。しかし、全体的解釈は、所有の概念とも深くかかわっているというのが本論文の立場である。そのかわりを示すのが第一の課題である。

次に、日本語の場所格交替の特徴について考察する。前節で観察したように、どのような動詞が交替するかは共通の枠組みがある一方で個別言語的な振る舞いも見せる。岸本(2001)が示した分類を手掛かりとして、日本語はどのような特徴のもつ動詞が交替しているのかを整理してみる。これが第二の課題である。

ことは認めながらも、それでもなお全体的な解釈が生じることを論じることに意義があると考え。

³⁸² この例は、Kageyama, Taro (1980) "The role of thematic relations in the spray paint hypallage." *Papers in Japanese Linguistics* 7 :35-64 による。

最後に、第二の課題の延長で、日本語の個別言語的な振る舞いの中で「塗る」の構文を取り上げて分析する。奥津（1981）でも指摘しているように「塗る」は移動物が「ペンキ」で移動先が「壁」の場合には、「(壁に) ペンキを塗る」と「(壁を) ペンキで塗る」とで交替するが、「バター」と「パン」では交替しない。英語では (50) (51) に示したように場所目的語の文が成立するが、日本語では成立しない。奥津はその理由を明示していない。次節では、以上の三つの課題に対する答えを出す。

(48) a. She smeared the wall with paint.

b. 彼女は壁をペンキで塗った。

(49) a. 太郎ハ パンニ バターヲ 塗ッタ。

b. *太郎ハ パンヲ バターデ 塗ッタ。 (奥津 1981 : 左 24)

(50) slather 「たっぷり塗る」

a. She slathered her toast with butter. (Cambridge Dictionary Online) ³⁸³

b. *彼女はトーストをバターでたっぷり塗った。

(51) rub 「こすりつけるようにして塗る」

a. First rub the baking tray well with butter. (Cambridge Dictionary Online)

b. *最初にベーキングトレイをバターでよく塗ってください。

anoint 「すりこむようにして塗る」

c. The witches anointed their bodies with salves made up of ingredients such as aconite and belladonna.

(魔女はトリカブトやベラドンナのような成分からなる軟膏を体に塗った)

(ジ英和)

d. *魔女は…体を軟膏で塗った。

5.2.3 場焦点化他動詞構文としての分析

5.2.3.1 全体的解釈

場所格交替において場所目的語の場合になぜ全体解釈が優勢になるのか、その理由については、「場所名詞句が直接目的語に来ることそのものによる」という考え方が多くの支持を得ているようである。岸本（2001）はそのような考え方を次のようにまとめている。

壁塗り交替の本質は〈行為〉→〈移動物の動き〉→〈場所の結果状態〉という意

³⁸³ spread も同様の交替を見せるが、やはり日本語では成立しない。

(i) She spread her toast with a thick layer of butter. (Cambridge Dictionary Online)

(ii) *彼女はトーストをバターで薄く塗った。

意味構造の中のどの部分を意味的に重視するかということである。この意味構造を想定すると、前節で紹介した全体的解釈・部分的解釈という曖昧な概念は不必要になる。つまり、場所名詞句を直接目的語にした fill 型構文は、その場所の状態を表すわけだから、普通の状況なら、場所全面が影響されるという全体的解釈が得られる。(同上：113)

岸本が指摘するような事象の構造に立脚する「意味構造」は、本論文が考えるイベントスキーマ枠組みにおける特定部分の焦点化と、言わんとしていることは同じだと考えられる。しかし、単に直接目的語だから場所全面が影響されるというのでは、事態把握の本質を捉えていない。それに、自動詞文の場所格交替では、主語名詞句が全体的な解釈になることを同時に説明できなければならない。そこで本論文は事態把握の本質には所有の概念がかかわっていると主張する。

本論文の規定によれば、所有の概念は「〈場〉が、そこに存在するモノによって特徴付けられる」という事態把握によって生まれるものである。つまり、〈場〉があるモノの非所有から所有の状態へと変化すること（またはその逆）が、場所の状態変化の本質である。イベントスキーマにおいて、場所の結果状態が焦点化するということは、それはすなわち場の特徴付けとして所有の概念に転換していると考えられるのである。このような所有の概念への転換を〈場〉の特徴付けだと考える利点は、全体解釈が単に「程度・量」の問題だけでなく、心理的なものを含めて説明できる点である。岸本（2001：113）も次の Pinker（1989）の例を取り上げているが、このような心理的な側面は、「所有」の概念を想定してこそ合理的に説明できるのである。つまり、程度が少しであっても、「その〈場〉が、そこに存在するモノによって特徴付けられる」という所有の概念によって、「美的価値が損なわれている」と認識されるのである。(52)の描写は、像とペンキが一体化し、ペンキが像に「単に存在する」というのではなく、ペンキが像を特徴付けるものとして存在するという事態把握であり、それはすなわち本論文で主張する所有の概念にほかならない。

- (52) The vandal sprayed the statue with paint. (Pinker 1989 : 78)
(その破壊者は銅像をペンキで汚した) (日本語訳は岸本 2001 による)

奥津（1981）が、『飾ル』の場合は、部分的・全体的の読みは出て来ないだろう。例えば、『壁ヲ絵デ飾ル』といっても、『壁』全体に『絵』を付着させるとは普通は考えられない(同上：左 27)と指摘しているのも、全体的解釈を単に「程度」の問題と結び付けていることによる。この場合の全体的解釈とは「壁が、そこに存在する（一つでも、複数性もかまわないが）絵によって特徴付けられている」という意味で、所有の概念に転換していると見るべきである。したがって、その〈場〉が結果的に美しくなったとしても、「壁に絵を飾る」というモノの設置に焦点が当たった叙述とは事態の捉え方が異なるのである。

岸本・影山（2011）ではここで取り上げた場所格交替と類似した交替として次のような文を挙げており、この文では部分解釈と全体解釈の差はないと指摘している。

- (53) a. 犯人はナイフを被害者の背中に刺した。
b. 犯人はナイフで被害者の背中を刺した。(同上：290)

ここで岸本・影山は「刺す」の (b) は状態変化を表していることは認めているが、全体的な解釈を生むわけではないとしている。ここでも「全体的」というのを単に「程度」「範囲」の問題とだけ結び付けられている。ある移動物が弧を描くようにしてある場所に到達するという事象において、その場が焦点化され、目的語位置に昇格しているということは、すでに事態の捉え方が変わっているということである。その違いの根本にはモノとモノの二者関係（使役移動）の事態把握だけではなく、モノと〈場〉の二者関係の事態把握があり、「所有」の概念への転換を生む事態把握と組み合わせられているはずである。つまりピンカー（2009：103）が苦言を呈しているように、「全体」効果というのは不適切な名称であり、本当は「状態変化」効果と呼ぶべきものである。そして本論文が主張するのは、その〈場〉の状態変化に注目するということは、所有の概念への転換を意味しているということである。ここでの所有とは、（その対象物が一瞬であれ、ある程度の時間であれ）その〈場〉に存在したことがその場の特徴付けとして把握され、「非所有」から「所有」の状態への変化（またその逆の変化）として認められることを指しており、結局他動詞文全体では、そのような変化を使役主が引き起こしたこと意味しているのである。

『明鏡国語辞典』は (53) の (a) (b) の「刺す」の語義をきちんと区別している点で注目される。下に抜粋した 1 の語義が (53a) で、3 が (53b) である。

(54) 刺す

- 1 ある物の内部に先のとがった物を突き入れる。突き刺す。
「大根に箸を一」「壁に鋸を一・してカレンダーを止める」「釘をさしておく」
- 2 ある物を先のとがった物に突き刺して、固定したひとまとめにしたりする。
「アユを串に一・して焼く」
- 3 先のとがった物を体の内部に突き入れて、人などを傷つける。
「ナイフで相手の胸を一」「とどめを刺す」

(53b) の「刺す」は、単に「突き入れる」という動きだけでなく「人を傷つける」という意味に限定される方向に拡張しているのである。つまり、「鋭利なものを突き刺して、（それがそのような状態でそこに存在することによって）その人が傷つくようにする」という〈場〉の状態変化を意味しているのである。ヲ格名詞句として身体部位だけでなく、「彼が友人を刺したニュースが…」のように「人」が来ることができるのも、「その人が傷つくよ

うにする」という〈場〉の変化事象の把握になっていることが窺える。さらに、通常の治療行為は「注射針を腕に刺す」と言い、「注射針で腕を刺す」とは言わないのも同様の理由によると理解できるだろう³⁸⁴。

5.2.3.2 日本語の場所格交替の特徴

自動詞の場所格交替で分析したように、日本語は英語と異なり、同一の述語で交替が成立しにくく、「デ格名詞句」は「いっぱいだ」「溢れている」「満ちている」のような充満を表す述語と共起しやすいという特徴があった。そこで、移動物目的語をとる用法が元々「その場所全体に」という意味を含意するかどうか注目して、二つのグループに分けてみると、日本語の交替現象の特徴が浮かび上がるのではないかと期待される。奥津（1981）は日本語の場合、「多くの動詞には、部分的・全体的という読みの違いは認められない」と指摘したが、これはそもそも日本語は全体的な解釈をもつ動詞が元になっている場合が多いからであり、一部のそうでない動詞の場合は、日本語でも部分的解釈と全体的な解釈の違いが現れることを明らかにする。

◆全体性を元々含意する動詞と含意しない動詞

表 5.1 は、岸本（2001）の場所格交替する動詞の分類を参考にして大分類を設定し、英語と対比できるように、小分類を設定したものである。岸本の分類と異なる点は以下のとおりである。〈詰め込み〉は小分類にして、〈詰め込み〉を含むものとして〈充満〉という大分類をたてた。「飾る」は元々〈塗り込み〉に入っていたが、〈充満〉の下位分類〈装飾〉に移動した。「まぶす」は〈放散〉から〈塗り込み〉に移動。また新たに大分類として〈貼りつけ〉を作り、「敷き詰める」は〈放散〉からここに、「貼る（張る）」は〈塗り込み〉からこの〈貼りつけ〉に移動した。なお、英語の動詞についての交替の可否および Fill 型・Pour 型の区別は Levin（1993）を参考にした。

日本語の「〈対象〉を〈場所〉ニ V」と英語の“V 〈theme〉 to/into/on 〈place〉”が「その場所全体に」という意味を含意するか、含意しないかという点で分類すると、英語はど

³⁸⁴ 岸本・影山（2011）は同じ箇所です次の「当てる」も全体的解釈と部分的解釈の差が出ない例として挙げている。(i) 彼はこのボールをあの的に当てた。(ii) 彼はこのボールであの的に当てた。(p.290) 場所句を目的語にとる「的に当てる」は不自然だと判断する母語話者がいる。国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で検索すると、「的に当てる」は 15 件ヒットするが、「的に当てる」は 1 件もヒットしないことはそのような判断を支持しているようである。しかし、ネット上の言語資源を検索すると、「的に当てる」という表現は使われていることがわかる。「的に当てる」は状態変化ではないので、ここで議論している場所格交替の例には該当しないと思われるが、表現形式の違いは外界の把握の在り方の違いが反映されているはずである。「的に当てる」は「人を刺す」と異なり、目的語になっている場所それ自体の変化ではなく、メトニミーによって「的に当てて何かを勝ち取る」という意味になっているのではないだろうか。「宝くじを当てる（＝勝ち取る）」という他動詞用法が、物を投げて当てる場所にも拡張して「的に当てる」になったのではないだろうか。事実、「的に当てるゲーム」という表現ではかなり使われているようである。（調査日：2014/9/26 <https://www.google.co.jp/>）ネット上の言語資源ではあくまで全体の傾向を知ることしかできないが、「何かを勝ち取る」という事態把握が「（～で）～を当てる」を使う動機付けになっていることが窺えるのではないだろうか。

こちらの側にも動詞が現れる傾向があるが、日本語のほうは明らかに「含意する」のほうに偏っている。つまり、日本語で場所格交替が成立する場合、その多くはすでに物が移動先の全体に存在することを含意しており、それが場所格交替を強く動機付けていると言えるだろう。したがって、全体的解釈と部分的解釈の違いの有無は、表の「含意しない」側の動詞についてみる必要がある。「塗る」と「貼る」の二つである。そして、なぜこの二つだけが他と異なる振る舞いをするのかも考える必要があるだろう。

表 5.1 場所格交替する動詞の意味特徴による分類³⁸⁵

		「〈対象〉を〈場所〉＝V」／“V 〈theme〉 to/into/on 〈place〉”が「その場所全体に」という意味を	
大分類	小分類	含意する	含意しない
塗り込み	塗る	spread, plaster	塗る grease, brush, dab, daub, rub, slather, smear, smudge, streak
	着色	(染める)	
	混ぜる	絡める・和える・まぶす	
貼りつけ	覆う	葺く・敷き詰める	貼る
積み上げ		盛り付ける・山盛りにする heap, pile, stack	
放出 放散	注入		(※日本語では交替しない) inject,
	まき散らす	ちりばめる・散らかす bestrew, scatter, sow, strew, sprinkle	(※日本語では交替しない) spray, squirt
	跳ねかけ		(※日本語では交替しない) spatter, splash, splatter,
充満	塞ぐ	詰める・(埋める) ³⁸⁶ (※英語は Fill 型で交替しない : fill)	
	満杯	満たす (※英語は Fill 型で交替しない : fill)	
	装飾	飾る (※英語は Fill 型で交替しない : adorn, decorate)	
	詰め込み	詰める pack, cram, crowd, jam, stuff, wad	
積み込み		(※日本語では交替しない) stock	(※日本語では交替しない) load

この二つの動詞の分析に入る前に、「含意する」側に分類した「飾る」について少し説明

³⁸⁵ 構文交替する動詞であっても、どちらがよく使われるかという点で見ると、優勢な構文というのは存在する。ここでは先に挙げた課題のみを扱うため、個々の場所格交替の例の分析はしない。

³⁸⁶ 「地中に入れて見えなくする」(大辞林)の意では「水道管を(地中に)埋める」だが、「穴などのくぼんだ所に物を詰め平らにする」(大辞林)の意では「穴をパテで埋める」のようになり、交替によって意味が変わるため、()に入れておく。

しておく必要があるだろう。一見すると「飾る」は「含意しない」側に入ると思われるかもしれない。しかし、移動物が場所あるいは〈場〉として捉えられる「別の対象物」において物理的にどの程度占めるのか、といったことが「その場全体に」と結びつくのではない。「その場所にその対象物を装飾する」という行為そのものが、「その場全体を変化させる」という概念化者の主体的な事態把握と結びついているのである³⁸⁷。その証拠に、対応する英語の動詞‘adorn’‘decorate’は Fill 型に分類され、場所格交替しない (Levin1993)。

◆「塗る」と「貼る」の共通点

さて、「塗る」と「貼る」だけが、なぜ構文交替する動詞の中で「含意しない」側に分類されるのか。注目すべき共通点として、どちらも生産動詞として結果目的語をとる用法がある。「塗る」には「壁土・漆喰などをなすりつけて壁や塀を築く」(明鏡国語)という意味があり、その場合は、デ格名詞が原材料となり、それを用いてヲ格名詞で示された物を作り出すという意味になる。

(55) 漆喰で壁を塗る。(明鏡国語)

「貼る(張る)」は奥津(1981)が次の構文交替の例を挙げているが、奥津自身が指摘しているように、「障子をはる」は「障子をつくる」の意味である³⁸⁸。

(56) a. 障子ニ 紙ヲ 張る。

b. 障子ヲ (紙デ) 張る。 (同上: 左 27)

障子というのは紙が貼られてはじめて障子と言えるのであって、それがないのは障子の「骨組み」とも言うべきものである。これは生産動詞としての「塗る」も同様で、「壁を築く」前には、「骨組み」となるものがあるが、そこに対象物を移動させて「塗る」ことによって壁が完成するのである。奥津(1981: 左 24)は、「塗る」の場所格交替(註: 奥津の用語では「代換」)は上のような生産動詞としての用法であると指摘している。

このようにこの二つの動詞は生産動詞という点で共通しており、その意味で場所名詞句は生産される(新しく創造される)ものなので、それが全体的解釈になっているかどうかの判断対象にはならない。ただし、「骨組み」に対して行う行為であると見れば、それはその〈場〉全体(=骨組み全体)であると言えるだろう。このような生産動詞としての「塗る」「貼る」に注目し、生産物を作るという点で全体的な解釈が元々あると見なせば、表 5.1 の分類で、日本語のほうは「含意しない」に分類される動詞がなくなることになる。しかし、全体的な傾向として日本語は元々全体性を含意する動詞が構文交替すると結論づけら

³⁸⁷ 5.3.3 節の考察と図 5.3 の「飾る」も参照されたい。

³⁸⁸ 『明鏡国語辞典』はこの「貼る」の語法の欄で、『障子紙を張る』に対し、『障子を張る』など〜ヲに〈結果〉をとる言い方もある。張ることによってそれを作り出す意。」と記述している。

れるとしても、「塗る」については、それが生産動詞になっているから構文交替すると結論づけるわけにはいかない。確かにこれが基盤となっていることは確かだろうが、「壁にペンキを塗る」と交替する「ペンキで壁を塗る」は生産動詞としての用法とは認めがたい。したがって、生産動詞としての用法とは別に交替する現象を説明する必要がある。元々全体性をもつ動詞が構文交替する日本語にあって、なぜ「塗る」は例外的な振る舞いを見せるのか。これは次節で考察することにする。

◆〈場〉の焦点化と「語り方」

この小節を終わるにあたり、日本語における場所格交替とその構文の役割を考えておきたい。すでに分析したように、場目的語の他動詞文がもつ全体的解釈はその本質には所有の概念があり、場を特徴付けるという事態把握がある。それが全体的解釈を生み出すと考えた。しかし、注意しなければならないことは、全体的な解釈を生むためだけにこの構文を使うわけではないということである。重要なのはその根底にある事態把握のほうである。そして事態把握の在り方は、より大きな流れの中では談話レベルにおける「語り方」と深く関係する。表 5.1 に整理したように、対象物目的語の構文であっても、元々の意味が「その場全体に」という意味を含意するのであれば、単に「その場の状態変化」事象に注目し、その〈場〉の特徴付けになるような結果状態を叙述するからというだけでなく、〈場〉を取り立てて述べるという談話レベルにおける「語り方」の問題とも深く関係してくるはずである。例えば「絡める」は「(ある対象物)に(粘り気のあるものモノ)をまぜるようにしてくっつける」という意味を表す。この場合、「ある対象物の全体にそれがつく」ことが含意される。したがって、全体解釈を出すためにわざわざ「～を～で絡める」という表現を用いる必要はない。ところが、談話の流れから、それが要請されることがある。

- (57) 細かく切ったジャガイモとタマネギと挽き肉を炒めて黒い中華味噌でからめ、温かい手打ちの中華麺の上にかけます。その上にはエンドウ豆やキュウリの千切りを飾りで色のアクセント。(BCCWJ[58])

上のような料理の手順を述べる場合、中心となる素材があり、「それをどうするのか」という展開になる。もちろん「細かく切ったジャガイモとタマネギと挽き肉を炒めて【それに】黒い中華味噌【を】からめ…」と言ってもいいのだが、手順の流れがそこで一呼吸あくことになる。似た意味の「まぶす」は、管見ではほとんどの辞書が「(対象物)を(別の物)にまぶす」という例を挙げている。「パン粉をまぶす」(大辞林)、「餅に黄粉をまぶす」(明鏡国語)、「黄粉をまぶす」(岩波国語)、「灰にまぶす／あんこをまぶす」(新明解)など。しかし、ある食べ物をどうやって食べるか説明する状況ではその食べ物を中心に据えて、それをどうするのかを語る「語り方」もあるのである。

(58) (お店のメニューの紹介で)

そば豆腐をきな粉でまぶしてあんと一緒に食べるデザート甘味あらいそ 500 円

(BCCWJ[59])

5.2.3.3 「パンをジャムで塗る」はなぜ成立しないのか

前節で「塗る」と「貼る」は、場所目的語をとる交替文は生産動詞としての用法になっていることを指摘した。しかし、「塗る」はそのような用法だけでなく、「壁をペンキで塗る」のように、塗料を付着させて場(=壁)の状態を変化させるという用法もあり、「壁にペンキを塗る」と比べて「壁を塗る」のほうには全体的解釈が生じやすい。

ところが、同じ「塗る」でも「パンとジャム」「体とオイル」の関係では交替が成立しない。これをどのように説明したらいいのか。

(59) a. パンにジャムを塗る。

b. *パンをジャムで塗る。

(60) a. 体に日焼け止めクリームを塗る。

b. *体を日焼け止めクリームで塗る。

「〈場〉が、そこに存在するモノによって特徴付けられる」と把握され、所有の概念に転換すれば、場所名詞句が目的語に来て、(59b) (60b) のような交替文が成立してもいいはずである。事実、何も塗られていないパンと何かが塗られているパンでは明らかに〈場〉の状態が異なり、オイルを塗っている体とそうでない体でも〈場〉の状態が異なる。そこで考えられることは「塗る」が場所格交替する場合の「状態変化」はその意味が限定されているのではないかと予測を立て考察してみる。

場所名詞句が目的語に来て、付着物がデ格名詞に来る例を分析するにあたり、明鏡国語辞典の「塗る」の語釈は有益な情報を提供してくれる。

(61) 塗る (明鏡国語)

1 物の表面に液体や液状・のり状のものをこするようにしてつける。

「刷毛で細工物にニスを一」「塀にペンキを一」「パンにバターを一」

「傷口に軟膏を一」「君は人の顔に泥を一」

2 物の表面に色をつける。着色する。「ポスターに色を一」

3 塗料などを付着させて表面をその色にする。彩色する。

「色鉛筆で背景を青く一」「窓枠を緑色に一」

この語釈で注目すべきは、3 である。ここに「～で～を塗る」という格配列が現れている。

「〈材料〉で〈場所・対象物〉を〈変化後の色〉・く/に塗る」のように、場全体の“色”の変化に限定して、場所格交替が起こると考えられる。つまり「ペンキで」「白粉で」「墨で」のような付着物をデ格名詞句で示す場合、構文上には現れなくても「ペンキで（特定の色に）」「白粉で（白く）」「墨で（黒く）」のように場所の色の变化を述べているのである。

- (62) a. 壁を (白の) ペンキで 塗る。
 b. 壁を ペンキで (白く) 塗る。
 c. 顔を 白粉で (白く) 塗る。
 d. 絵の背景を 墨で (黒く) 塗る。

場所格交替が、このような場所の色の变化（色付けによる模様も含む）に限定されているとすれば、(59) や (60) のような場所の色の变化とは関係がない付着物の移動については交替が起こらないことが説明できる。そのような状況でも「色の变化」の解釈をもたせれば文が成立することからもこの考えの妥当性が見てとれるだろう。ジャムがそこにあること、あるいは日焼け止めクリームがそこにあることよりも、それを用いてどのような色に変化させたのか、という場所全体の色の变化に注目した述べ方になっている。ジャムやクリームはそのような色にする材料という位置付けである。

- (63) a. パンをイチゴジャムで真っ赤に塗る。
 b. 体を日焼け止めクリームで真っ白に塗る。

ちなみに、「塗る」ではなく、「塗り固める」のような複合動詞になった場合は、後項動詞の意味によって場所の変化にシフトするので、色の变化はもちろんそれ以外でも成立しやすくなると考えられる。「～で塗り固められる」という表現が多い。

- (64) a. (…略…) 盗難や火災への備えは厚い。屋根は瓦葺き、扉は火災に耐えるように漆喰で塗り固められている。(BCCWJ[60])
 b. ドームは日干しレンガを中身にして土で塗りかためられており、土壁の厚さは五十センチメートル以上あろうか、(…略…) (BCCWJ[61])

5.3 道具主語他動詞構文・LT 主語他動詞構文

5.3.1 locatum という見方

モノがある場所から別の場所へ移動する場合、それはモノの移動事象として把握されるのだが、英語には‘locatum verb’と呼ばれるタイプが存在する。Clark and Clark (1979) は名詞転換動詞を包括的に扱った論文であり、道具、動作主、場所、着点・起点、期間を

表す名詞が動詞に転換したものなどを挙げているが、その中に *locatum* が動詞になった場合として (65) のような例を挙げ、その意味を次のように記述している。

(65) a. Jane blanketed the bed.

b. Jane did something to cause it to come about that

[the bed had one or more blankets on it]. (Clark and Clark 1979 : 190)

上の例では「毛布 (blanket)」という名詞が動詞に転換し、おおよそ「ジェーンはベッドに毛布をかけた」といった意味を表している。ここで動詞になった ‘blanket’ を ‘*locatum verb*’ と呼んだのである。一見すると単に「毛布」が「ベッド」という場所に移動することを意味しているようだが、影山・由本 (1997) が分析しているように、これは単なる移動でない。影山・由本は ‘*locatum*’ に「物材」(＝物体と材料をあわせた合成語) という言葉をあて³⁸⁹、「物材と場所との一体化」がおこるような状態変化が起きていると主張している。つまり、場所格交替で論じたように、モノの移動に焦点が当たるのか、〈場〉の変化に焦点が当たるのかという観点から言えば、この *locatum* 動詞は〈場〉の変化に焦点が当たっており、‘*butter the bread*’ や ‘*saddle the horse*’ は単にバターをパンに塗った、鞍を馬に取り付けた、というだけでなく、「それを塗り込んでトーストが美味しく食べられる状態に変えることが必要」であり、「鞍を載せベルトを締めて、乗馬ができる状態にしなければならない」(同上:28) ののである。そして、このような意味は意味構造において BE WITH という意味述語 (関数) をもつこと、つまり所有の概念をもつことによると指摘している (同上:30)。本論文もこの分析を支持するが、それを HAVE 言語である英語に特有の概念化であると結論づけている点には注意が必要である。

確かに「物材動詞」のような名詞転換動詞は日本語には存在せず、動詞の意味構造の転換が比較的自由にできる英語ならではの構文だと言える³⁹⁰。しかし、*locatum* が現れる構文が日本語に存在しないわけではない。つまり、*locatum* が現れ、「所有」の概念へと転換するのは、HAVE 型言語に限定されたことではなく、日本語にも起こり得ることであり、現に場所格交替ではそれが認められる。要は、現れ方の違いである。本論文では、単なる移動物ではなく、移動先の場においてその場を構成する材料となるという意味で *locatum* を「構成物」と呼ぶことにする。この「構成物」は移動先において「全体-部分」あるいは「主体-側面」の関係として把握され所有の概念へと転換すると考える。言い方を変えれば、

³⁸⁹ *locatum* は元々 Clark and Clark (1979) の造語である。

³⁹⁰ 日本語に名詞転換動詞が存在しないというわけではない。外来語由来の動名詞に「る」を付けて動詞に転換することは、「サボる」などに見られるし、普段は意識されないものでも、古くは「畝+る」から「うねる」のような動詞が派生した例もある。さらには、若者言葉としての「愚痴る」「コピる」まで含めれば、名詞転換動詞そのものがないわけではない。しかし、これらは主にモノの発生 (あるいは生産) の概念と結びついており、物名詞のある場所への移動の概念と結びつけるような、意味構造の転換を伴うものはまれである。影山・由本 (1997) では「肉に塩・胡椒する」「臭いものに蓋する」などの「名詞+する」の例を挙げているが、これらは「名詞+を+する」の「を」が省略されているだろうと述べている。

移動物が移動先で単なる存在物としてではなく、〈場〉との密接な関係を結ぶ存在物として捉えられるということである。5.2 節で扱った場所格交替における場所目的語の他動詞文はデ格名詞がこの「構成物」を表していると考えられる。「玄関と花」「タンクと水」「壁とペンキ」はそれぞれ一体のものとして把握され所有の概念になっている。

- (66) a. 彼女は玄関に花を飾った。
b. 彼女は玄関を花で飾った。
- (67) a. 彼はポリタンクに水を満たした。
b. 彼はポリタンクを水で満たした。
- (68) a. 太郎は壁に青いペンキを塗った。
b. 太郎は壁を青いペンキで塗った。

5.3.2 道具主語構文と LT 主語構文

「飾る」は場所格交替を起こす (69a,b)。一方「覆う」はデ格名詞句が移動物を表す点では同じだが (70b), 場所名詞句をニ格で表示できない点で異なる (70a)。その一方で、両者は (c) に示したようにデ格名詞句が主語位置に来て他動詞文を作る。

- (69) 「飾る」(場所格交替する動詞)
- a. 彼女は玄関に花を飾った。(=66a 再掲)
b. 彼女は玄関を花で飾った。(=67a 再掲)
c. 花が玄関を飾っている。
- (70) 「覆う」(場所格交替しない動詞)
- a. *彼女はテーブルに白い布を覆った。
b. 彼女はテーブルを白い布で覆った。
c. 白い布がテーブルを覆っている。

「飾る」も「覆う」もあるモノをある場所に移動させて、その場所に存在させるという事象がベースにあるが、場所格交替する「飾る」はモノの位置変化にも場所の状態変化にも焦点を当てて叙述できるのに対して、交替しない「覆う」は場所の状態変化にだけ焦点が当たって言語化される点異なる。正確に言えば、「覆う」は移動先の場所である対象物である道具(物質を含む)を用いて状態変化させることに焦点が当たっている。川野(2000)は「主体変化を表す」という視点から、(69c)(70c)も「テイル形」が主体の結果継続を表しているということで、一括りにして「道具主語構文」としている。

(71) 道具主語構文と対応する使役変化他動詞構文 (川野 2000 : 46 より)

- | | |
|------------------|---------------------|
| [1] 水がグラスを満たす | cf. 太郎がグラスを水で満たす |
| [2] 雪が山頂を覆う | cf. 太郎がテーブルを布で覆う |
| [3] きれいな花が食卓を飾る | cf. 太郎が食卓を花で飾る |
| [4] 石が壁の穴をふさぐ | cf. 太郎が壁の穴を石でふさぐ |
| [5] 小石が隙間を埋める | cf. 太郎が隙間を小石で埋める |
| [6] 岩が川の流れをせき止める | cf. 太郎が川の流れを岩でせき止める |

上に示したように、見かけ上は「**x**が**z**を**y**で**V**」で同じだが、「飾る」に現れる **y** は「構成物 (LT)」であり、「覆う」に現れる **y** は「道具」である。この違いは作られる構文の差となって現れ、構文の関係の全体を理解するために重要だと考えるため、本論文では区別することにする。そして、デ格で表示される名詞句の性質の違いを踏まえて、(69c) の他動詞文を「LT 主語他動詞構文」(LT=locatum) と呼び、そして (70c) の他動詞文を「道具主語他動詞構文」と呼んで区別する。

川野 (2000) が挙げた (71) の動詞について言えば、「満たす」「飾る」「埋める」が LT 主語他動詞構文に、「覆う」「ふさぐ」「せき止める」が道具主語他動詞構文に分類される。「飾る」のように場所格交替する構文は下に示した①の「使役位置変化」と②の「使役場所変化」の両方の事態把握が可能な動詞である。②と③の構文の格配列は同じだが変化事象の把握の在り方が異なる。

<移動の概念の三つの型>

y が **z** に移動する点は共通するが、どの変化事象の把握かという違いで①②③の三つに分類される。

変化の概念	構文	把握
①使役位置変化	x が y を z に V	【 z への y の位置変化】
②使役場所変化	x が z を y で V	【 y (=LT) の充満/付着による z の状態変化】
③使役場所変化	x が z を y で V	【 y (=道具) によって外部と遮断されること による z の状態変化】・
②→ y が z を V : LT 主語他動詞構文 ③→ y が z を V : 道具主語他動詞構文		

それでは、どの動詞がどのような構文を作るかを確認しておく。最初に③の「使役場所変化」で **y** が道具になっているものである。ここに分類される動詞は、上の事態把握の特徴にも書いたように外部と遮断されることによる場所の状態変化を表す。そこで、ここに属する動詞を「遮断動詞」と呼ぶことにする。遮断動詞は①の構文 (各例文の a) を作らないため場所格交替をしない動詞である。そして、道具を主語にした道具主語他動詞構文 (各

例文の c) が成立する。

(72) 再掲 (=70) 「覆う」

- a. *彼女は白い布をテーブルに覆った。
- b. 彼女はテーブルを白い布で覆った。
- c. 白い布がテーブルを覆っている。

(73) 「ふさぐ」

- a. *太郎が新聞紙を壁の隙間にふさぐ。
- b. 太郎が壁の隙間を新聞紙でふさぐ。
- c. 新聞紙が壁の隙間をふさいでいる。

類似した意味でも場所格交替する「埋める」は「太郎が壁の隙間に新聞紙を埋める」と言えるので遮断動詞ではない。

(73c) のように道具主語他動詞構文が成立するのは、移動した道具がそれ自体でその場所にとどまるような状況でなければならない。これは他の動詞も同様である。「ハンカチが花子の口を塞いでいる」は、だれかが押えているのではなく、何らかの方法でハンカチ固定されているような状況がイメージされる。

(74) 「せき止める」

- a. *国が水門を川にせき止める。
- b. 国が川を水門でせき止める。
- c. 水門が川をせき止めている。

(75) 「囲む」

- a. *家主が塀を家に囲む。
- b. 家主が家を塀で囲む。
- c. 塀が家を囲んでいる。

(76) 「包む」

- a. *太郎は唾液を歯の表面に包む。
- b. 太郎は歯の表面を唾液で包む。
- c. 唾液が歯の表面を包んでいる。 (例文 c : BCCWJ[62])

「包む」は (77b) のように「太郎がガムを銀紙で包む」という構文を作る³⁹¹。これは「ガ

³⁹¹ 「ガム」というモノが場所 (y) であるという見方に違和感があるかもしれないが、ここでは移動物 (y)

ム」が場所の [z] に、「銀紙」が道具の [y] に相当するので、(76b) に相当し、道具主語他動詞構文 (c) も作る。ところが、この「包む」は (d) のように「ガム」を移動物 [y] に、「銀紙」を場所 [z] にした「x が y を z に V」という構文も作る。これは格配列が見かけ上①の構文 (=a) と同じだが、y と z にくる名詞句が異なっている。この (d) は (e) に示したように場所格交替しない。つまり、「包む 1」は遮断動詞としての用法で③の構文を作り、場所格交替はしない。一方、「包む 2」は設置動詞としての用法で①の構文を作り、これも場所格交替はしない。y と z に異なる名詞句をとるので、異なる用法の (77b) と (77d) を結び付けて、場所格交替する動詞であると判断してはいけない。

- (77) a. *太郎 (x) は銀紙 (y) をガム (z) に包む。・・・「包む 1」(遮断動詞)
 b. 太郎 (x) はガム (z) を銀紙 (y) で包む。
 c. 銀紙 (y) がガム (z) を包んでいる。

 d. 太郎 (x) はガム (y) を銀紙 (z) に包む。・・・「包む 2」(設置動詞)
 e. *太郎 (x) は銀紙 (z) をガム (y) で包む。(※d と同じ状況で解釈できない)

「挟む」も設置動詞の用法と遮断動詞の用法がある。前者の場合、「対象物を移動させその場 (の物) が移動物を挟むような位置関係で保持する」という意味を表している。移動先の場所の形状が隙間や切れ目のように何か挟み込めるような構造になっている必要がある。この場合は、③の構文も道具主語他動詞構文も成立しない。

- (78) 「挟む」の設置動詞の用法
 a. 太郎は葉を本の間挟む。
 b. *太郎は本の間を葉で挟む。
 c. *葉が本の間を挟んでいる。

「挟む」が遮断動詞として③と道具主語他動詞構文を成立させるのは、モノを両側から押えるような動作をする場合である。つまり、(78) に示した設置動詞の場合とは反対に、移動物 (道具) のほうが二つに分かれているか、挟み込むような構造になっている必要がある。(79) は「肉」と「レタス」の位置関係と物の形状が遮断動詞 (挟む 1) と設置動詞 (挟む 2) では異なる。前者では肉のほうが二枚でレタス是一片だが、後者では逆に肉のほうが一枚でレタスのほうが二枚である。同じ格配列で事態の把握の仕方が異なるためである。

- (79) 「挟む」
 a. #花子は肉をレタスに挟んで食べた。・・・「挟む 1」(遮断動詞)

が移動していく先の場所として把握されているということである。

(a は、「肉-レタス-肉」の順番になっているという意味で)

b. 花子はレタスを肉で挟んで食べた。

(b は、「肉-レタス-肉」の順番になっているという意味で)

c. 肉がレタスを挟んでいる。

d. 花子は肉をレタスに挟んで食べた。・・・「挟む 2」(設置動詞)

(d は、「レタス-肉-レタス」の順番になっているという意味で)

e. #花子はレタスを肉で挟んで食べた。

(e は、「レタス-肉-レタス」の順番になっているという意味で)

道具主語他動詞構文は、通常なら視点が当たることがない道具に視点を当てるわけなので、それなりの文脈がなければ許容量が下がる。「書類をクリップで挟む」は普通だが、単に「クリップが書類を挟んでいる」はすわりが悪い。「風で飛ばされないように、見るからに頑丈そうなクリップが分厚い書類をがっちり挟んでいた」なら許容量が上がるだろう。このような傾向は他の道具主語他動詞構文にも言えることで、私たちのもつ百科事典的な知識がどの程度読み込まれるかという程度の差である。(72)～(75)の(c)が修飾句なしでも不自然さが無いのは、「道具」として焦点が当てられる状況が容易に想定され、無理なく解釈できるからだと言える。

上で示した遮断動詞が作る道具主語他動詞構文(c)は、(b)に示した②使役場所変化の把握がベースになって成立していると見られるが、(80)に示したような使役主による行為ではなく、自然現象(発生事象)あるいはモノの位置関係を表す場合にも同じ動詞を用いて道具主語他動詞構文が成立する。このような他動詞文については、5.3.4節で再び取り上げる。

(80)「覆う」「ふさぐ」「せき止める」「囲む」「包む」「挟む」(自然現象・非人為的)

a. 膚にまとわりつくような熱を帯びた空気が東京全体を覆っていた。

(BCCWJ[63])

b. 途中一箇所、壁の煉瓦が崩れて道をふさいでいた。(BCCWJ[64])

c. 脳血栓は、細くなった脳動脈でできた血のかたまり(これを血栓という)が、
血流の流れをせき止めてしまう病気である。(BCCWJ[65])

d. 一軒には灯が入っていて、それを小竹の林が囲んでいた。(BCCWJ[66])

e. 単調で早いエンジンの響きだけが船全体を包んでいる。(BCCWJ[67])

f. 細長い長方形の広場を挟んで向き合うかたちにそれぞれ七棟ずつ、同じ大きさの平屋が計十四棟あった。(BCCWJ[68])

次に LT 主語他動詞構文を作る動詞を見ていく。この動詞は、場所格交替をする動詞であ

り、上で示した①「使役位置変化」と②「使役場所変化」（移動物は LT）の両方が成立する動詞である。ただし、前節で見た場所格交替する動詞のすべてが LT 主語他動詞構文を作るわけではない。表 5.1 に示した分類で言えば、「※英語は Fill 型で交替しない」と註を付した動詞がこのグループに分類される³⁹²。具体的には、大分類＜充満＞で小分類＜塞ぐ＞に分類された「埋める」、＜満杯＞に分類された「満たす」、＜装飾＞に分類された「飾る」である。これらの動詞は「移動する対象物 (y=LT) の充満によって場所 (z) が状態変化する」ことを表しているので、「充満動詞」という名称を付けておく。そして、場所格交替はするが、LT 主語他動詞構文を作らない動詞は「移動する対象物 (y=LT) の付着によって場所 (z) が状態変化する」ことを表しているので、「付着動詞」という名称を付けておく³⁹³。これに分類されるのは、「塗る・絡める・敷き詰める・盛り付ける・ちりばめる」などである。それでは、LT 主語他動詞構文を作る充満動詞を見ていく。

「埋める」は「埋め込み」の意味と「塞ぐ」の意味がある。構文の格配列上は構文交替をしているが、交替によって意味が変わっている。LT 主語他動詞構文を作るのは「塞ぐ」の意のほうである (81d)。

(81) 「埋める」

- a. 作業員が水道管を地面に埋める。 「埋め込み」の意
- b. *作業員が水道管で地面を埋める。 「埋め込み」の意
- c. 作業員が穴を土砂で埋める。 「塞ぐ」の意 ゼ格名詞=LT
- d. 大量の土砂がその穴を埋めていた。 「塞ぐ」の意 LT 主語他動詞構文

「満たす」と「飾る」はそれぞれ (82) (83) に示したように場所格交替をし (a,b), LT 主語他動詞構文を作る (c-e)。(d, e) のように具体的な物から抽象的なモノに拡張している場合もある。

(82) 「満たす」

- a. 彼は酒を杯に満たした。
- b. 彼は酒で杯を満たした。
- c. 酒が杯を満たしている。
- d. 歓声が会場を満たす／期待が私の心を満たす」(明鏡国語)
- e. …全体としては悲しみに近い思いが早川の体を満たしている。(BCCWJ[69])

³⁹² 英語では LT 主語他動詞文は Fill 型動詞によって作られ、この Fill 型動詞は場所格交替をしない。ところが、日本語では Fill 動詞であっても、「埋める」「詰める（＜塞ぐ＞の類）」「満たす」「飾る」は場所格交替する点で異なる。

³⁹³ ここに分類される動詞は「付着」という名称で括れるものではないが、適当な用語が思い当たらないため、とりあえずこのように呼ぶことにする。表 5.1 で示したように、大分類で＜塗り込み＞＜貼りつけ＞＜積み上げ＞＜放出・放散＞としたものである。したがって、名称は「その他の動詞」とするべきかもしれないが、移動先で場とモノが一体化するイメージを表すものとして「付着」としておく。

(83) 「飾る」

- a. 主人が室内に重厚なインテリアを飾る。
- b. 主人が室内を重厚なインテリアで飾る。
- c. 古びているはいるが、椅子もテーブルも高価そうな品で、重厚なインテリアが室内を飾っている。(BCCWJ[70])
- d. ある高校地理の教科書では、スイスの地図が表紙を飾っているし (…略…)
(BCCWJ[71])
- e. 二連覇のニュースが一面を飾る (明鏡国語)

次に、「付着動詞」を見ていく。この付着動詞は、場所格交替する点で充満動詞と同じだが、LT 主語他動詞構文を作らない点で異なる。(84) (85) の (c) に示したとおりである。「絡める」「盛り付ける」「ちりばめる」も同様の振る舞いをする。

- (84) a. 田中さんはその壁に白いペンキを塗った。
b. 田中さんはその壁を白いペンキで塗った。
c. *白いペンキがその壁を塗っている。

- (85) a. 田中さんは庭に砂利を敷き詰めた。
b. 田中さんは庭を砂利で敷き詰めた。
c. *砂利が庭を敷き詰めている。

「詰める」という動詞は、「詰め込み」と「塞ぐ」の二つの意味があるが、どちらも場所格交替はするが、LT 主語他動詞構文は作らないようである。「詰める」については、5.2 節では「詰め込み」の意で場所格交替する動詞として挙げ、例文 (47) で「本全部で本箱を詰める」を紹介した。しかし、管見の限りでは辞書で「～で～を詰める」の例として挙げているのは (86b) のように「弁当を詰める」だけのようである³⁹⁴。この「弁当」は「弁当箱」ではなく結果目的語になっていると見られ (cf. 「明鏡国語」の語法欄)、(86a) とは厳密には対応していない。いずれにしても、(c) に示したようにデ格名詞句を主語にした LT 主語他動詞構文を作らないのは「本箱」も「弁当」も同じである。

(86) 「詰める」・・・「詰め込み」の意

- a. 母がおかずを弁当 (箱) に詰める。
- b. 母が (残り物で) 弁当を詰める。

³⁹⁴ 国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(約 1 億 500 万語) では、「～で～箱を詰める」はヒットしない。「弁当を詰める」は 3 件ヒットする。

- c. *残り物が弁当を詰めている。

「詰める」が「塞ぐ」の意で用いられる場合も、充満動詞の「埋める」とは異なり、LT 主語他動詞構文を作らないようである。「詰める」は「埋める」とは違って無理に押し付ける力が想定され、使役主の存在が意識されるため、LT を主語にしにくいためではないかと考えられる³⁹⁵。

(87) 「詰める」・・・「塞ぐ」の意

- a. 歯科医がセメントを虫歯に詰める。
b. 歯科医がセメントで虫歯を詰める。
c. *セメントが虫歯の穴を詰めている。

ここまで道具主語他動詞構文を作る動詞（遮断動詞）、LT 主語他動詞構文を作る動詞（充満動詞）、そして付着動詞を見てきたが、三つに共通するのは移動物をデ格名詞句で表示する、つまり「x が z を y で V」という構文を作る点である。しかし、遮断動詞では移動物は道具であり、充満動詞と付着動詞は構成物（LT）という違いがあった。そして、充満動詞と付着動詞は同じように LT をデ格名詞句で示して使役場所変化を表す構文を作るが、LT 主語他動詞構文を作れるのは、充満動詞だけである。以上の構文の成立・不成立を整理すると表 5.2 のようになる。この表を見てわかるように、①②③と「道具/LT」のすべての構文が成立するのが充満動詞で、①が欠けるのが遮断動詞、「道具/LT」が欠けるのが付着動詞である。次節ではここに物の移動を表す動詞グループとして「設置動詞」を組み込み、全体としてどのような構文のつながりを見せるのかを観察する。最後に各構文から派生する自動詞構文、受動態とのつながりも観察する。

表 5.2 動詞の意味と構文成立の対応

		遮断動詞	場所格交替する動詞①&②	
			充満動詞	付着動詞
		覆う・囲む・包む・挟む・塞ぐ・せき止める	満たす・埋める・飾る	塗る・絡める・詰める・敷き詰める・盛り付ける・ちりばめる、など
①使役位置変化	x が y を z に V	NO	OK	OK
②③使役場所変化	x が z を y で V	OK (y=道具)	OK (y=LT)	OK (y=LT)
道具/LT 主語	y が z を V	OK (y=道具)	OK (y=LT)	NO

³⁹⁵ 使役変化がベースになっていない場合には、「皮脂／化粧品が毛穴を詰めている」のような用例がネット上の日本語に数例見つかるが、筆者の語感ではこなれた日本語とは思われない。

5.3.3 物の移動事象の概念化と構文

表 5.2 には移動事象が概念化される動詞の中でもう一つの大きなグループが欠けている。それは①の使役位置変化「x が y を z に V」が成立するけれども、場所格交替しない動詞で、設置動詞のことである。設置動詞は対象物の移動のみに視点が当たるため、構文交替しない。移動物は道具とも LT とも認められないので、②③が成立しない。②③が成立しなければ、道具/LT 主語他動詞構文も作らない。設置動詞にはいろいろがあるが、代表的なところでは、「付ける・載せる・備える」などがある。さらに既に前節で考察した「包む」「挟む」も設置動詞としての用法がある。

各グループが作る構文の全体を見るにあたって、第 4 章と第 5 章の考察でその存在意義を主張してきた場焦点化他動詞構文とのつながりを確認しておきたい。これまでの観察で示した①使役位置変化、②③使役場所変化はいずれも x・y・z の三つの構成要素からなる構文を作る。ここでは y・z が焦点の当たりかたによって項として現れるのか付加詞として現れるのかは問わない。一方、道具主語他動詞構文と LT 主語他動詞構文は、y・z の二つの構成要素からなる。この二つの要素は「y が z を V」という格配列になっている。これとは対照的に「z が y を V」という格配列になる他動詞構文がある。それは第 4 章で考察してきた場焦点化他動詞構文である。〈場〉が焦点化され、第一の際立ちを与えられ、対象が第二の際立ちを与えられて作られる構文である。設置動詞は場所格交替もしないし道具/LT 主語他動詞構文も作らないが、そのかわりに、所有 B (反転型) の場焦点化他動詞構文を作る。(さらなる用例については 4.5 節を参照されたい)

(88) 「付ける」(設置動詞)

- a. 花子が鞆にかわいいストラップを付けた。(①使役位置変化)
- b. *花子が鞆をかわいいストラップで付けた。(②使役場所変化)
- c. その鞆はかわいいストラップを付けている。(反転型 - 場焦点化他動詞構文)

それでは、「y が z を V」という格配列になっている道具主語他動詞構文と LT 主語他動詞構文はどのような事態の把握の在り方が反映されているのか。それを考えるために、まずそれぞれ構文を作りだす概念について、そのイメージスキーマを示しておきたい。このイメージスキーマは使役変化後のモノと〈場〉の二者関係を示している。

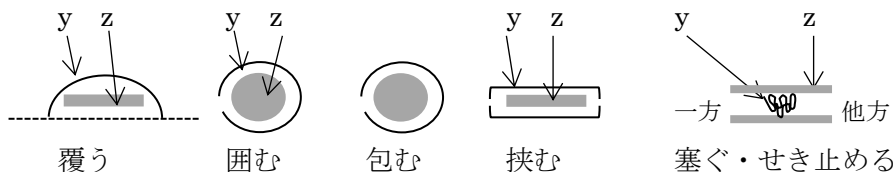


図 5.2 遮断動詞のイメージスキーマ

図 5.2 は遮断動詞のイメージスキーマを示している。遮断動詞という名称を与えたのは、図 5.2 に示したように、道具 (y) を用いて、〈場〉 (z) として把握される対象物を外界から遮断するというイメージである。覆う、囲む、包む、挟むはイメージとしては相互に共通した「形」をもつが、塞ぐとせき止めるはやや異なる。「外界から遮断する」というスキーマから「一方から他方への通行を遮断する」へと拡張している。これは後の議論で非常に重要な違いになる。

次に、充満動詞であるが、容器のイメージスキーマを基本として、三つの動詞は次のように示すことができる。

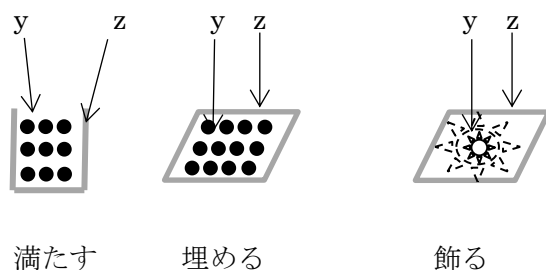


図 5.3 充満動詞の概念のイメージ

「飾る」が充満という概念とつながることは意外な感じがするかもしれないが、英語で対応する ‘adorn’ ‘decorate’ が Fill 型の動詞である (Levin1993) ことから、何らかの点で充満と関係していることがわかる。装飾するという概念はその方法としてモノをいくつか使うにかかわらず、そのモノを用いて場所を美しく変化させることである。この装飾という行為はその場所におけるそのモノの存在価値を高めることになる。そのような概念化者の主体的な把握の在り方が充満とつながっていると考えられる。「飾る」のイメージは中心に実際に飾るモノが配置され (=実線部分)、装飾物として心的に把握されるイメージがそれを取り囲むように広がったものとして配置されている (=破線部分)。

この二つのグループのイメージスキーマを見ると、モノと〈場〉の関係の在り方が所有 B (反転型) とは異なることがわかる。所有 B は、モノの移動先の〈場〉が、そこに移動したモノが存在することによって特徴付けられるという事態把握であり、一種の図地反転が起こり、存在から所有の概念に転換していると分析した。所有 B を「反転型 - 場焦点化他動詞構文」と呼ぶゆえんである。一方、遮断動詞も充満動詞も、同じようにモノの移動事象がベースになりながらも、焦点化された〈場〉は目的語位置にとどまり、存在するモノのほうで第一の立ち位置を与えられ主語位置に来ている。これは〈場〉が焦点化されながらも第二の立ち位置にとどまる場合であり、第 4 章の分析で導入された「占有」の概念に基づいた「強化型」の場焦点化他動詞構文と呼んだものに相当する。

遮断動詞は、使役場所変化では「xがzをyでV」で、〈場〉(z)を手段(y)によって外界と遮断された状態にするという概念になっている。それによって実現するモノと〈場〉の二者関係のつながりが強化されると、「手段で示されていた物体(y)が〈場〉を占める」という概念に転換する。それが、道具主語他動詞構文である。充満動詞は、使役場所変化では「xがzをyでV」で、〈場〉(z)をLT(y)によって満たされた状態にするという概念になっている。それによって実現するモノと〈場〉の二者関係のつながりが強化されると、「LTで示されていた物体(y)が〈場〉を占める」という概念に転換する。それが、LT主語他動詞構文である。

場所格交替する他動詞文は5.2節で分析したように、焦点化された〈場〉が目的語位置来て、デ格名詞句で示された移動物と所有の関係を結んでおり、反転型の場合焦点化他動詞構文の一種であると言える。以上をまとめたのが表5.3である。

表 5.3 移動事象の概念とそれに対応する構文と動詞

		遮断動詞	場所格交替する動詞①&②		設置動詞
			充満動詞	付着動詞	
		覆う・囲む・包む 1・挟む 1・塞ぐ・せき止める	満たす・埋める・飾る	塗る・絡める・詰める・敷き詰める・盛り付ける・ちりばめる、など	付ける・載せる・備える・挟む 2・包む 2、など
①使役位置変化	xがyをzにV	NO	OK	OK	OK
★反転型(z⇔y)	zがyをV	NO	一部?	一部 OK	OK
②使役場所変化 ★反転型(z⇔y)	xがzをyでV	NO	OK (y=LT)	OK (y=LT)	NO
☆強化型(y≡z) (道具/LT 主語)	yがzをV	OK (y=道具)	OK (y=LT)	NO	NO
③使役場所変化 (場の隔離)	xがzをyでV	OK (y=道具)	NO	NO	NO

註：「包む」「挟む」は遮断動詞（1）と設置動詞（2）の二つの特徴を併せ持つ

このように場所格交替する動詞を真ん中に配置すると、右側には①のみの設置動詞、左側には③のみの遮断動詞が配置される。この配置が意味していることは、〈場〉の変化にもっとも注目する動詞が遮断動詞で、モノの移動にもっとも注目するのが設置動詞で、その中間で場所格交替するのが充満動詞・付着動詞だということである。もっとも多くのタイプの構文を作る充満動詞の例を挙げておく。

(89)「飾る」(充満動詞)

a. ①使役位置変化の他動詞構文

その壁に印象派の画家の絵を飾る。

b. ★反転型の場焦点化他動詞構文

その壁は印象派の画家の絵を飾っている。

c. ②使役場所変化の他動詞構文

その壁を印象派の画家の絵で飾る。

d. ☆強化型の場焦点化他動詞構文

印象派の画家の絵がその壁を飾っている。

5.3.4 自動詞文と受身文／二格とデ格

モノの移動を表す事象と他動詞構文の関係を整理したところで、それらの構文と対応する自動詞構文と受身文について観察する。表 5.3 に整理したのはすべて他動詞構文である。まず表の①の使役位置変化他動詞構文をベースに、使役主 (x) を降格し、移動物 (y) を主語に据えて成立するのが「z に y が Vi / Vt-られる」という位置変化自動詞構文/受身文である。①が OK の動詞のうち、自動詞が存在するのは、「付ける」「満たす」「埋める」などである。自動詞を持たない「飾る」「塗る」などの動詞は受身文によって叙述することになる。なお、ここで扱う受身文は結果状態を表す場合だけである。

(90) a. 花子はかばんにストラップを付けた。

b. そのかばんにストラップが付いている。(設置動詞：自動詞)

c. そのかばんにストラップが付けられている。(設置動詞：受身文)

(91) a. 太郎は壁にペンキを塗った。

b. その壁にペンキが塗られている。(付着動詞：受身文)

(92) a. 太郎はグラスに水を満たした。

b. そのグラスに水が満ちている。(充満動詞：自動詞)

c. そのグラスに水が満たされている。(充満動詞：受身文)

(93) a. 花子は玄関に花を飾った。

b. 玄関に花が飾られている。(充満動詞：受身文)

次に表の②と③の使役場所変化他動詞構文をベースに、使役主 (x) を降格し、場 (z) を主語に据えて成立するのが「z が y で Vi / Vt-られる」という場所変化自動詞構文/受身文である。②③が OK の動詞のうち、自動詞が存在するのは、「満たす」「塞ぐ」「挟む」などである。対応する自動詞を持たない動詞は受身文によって叙述することになる。

- (94) a. 花子はテーブルを白い布で覆った。
b. テーブルが白い布で覆われている。(遮断動詞：受身文)

- (95) a. 太郎はその穴をセメントで塞いだ。
b. その穴がセメントで塞がっている。(遮断動詞：自動詞)
c. その穴がセメントで塞がれている。(遮断動詞：受身文)

<遮断動詞>としての「挟む」は自動詞形はあるが、「～が～で Vi」自動詞文は成立しない。

- (96) a. 花子はハムとチーズを食パンで挟んだ。
b. *ハムとチーズが食パンで挟まっている。(遮断動詞：自動詞)
c. ハムとチーズが食パンで挟まれている。(遮断動詞；受身文)

自動詞の「挟まる」は設置動詞の意味で用いられ (97a), 受動態の「挟まれる」は降格した行為者が想定されるためか, 設置動詞の意味では用いられないようである (97b)。

- (97) 「挟む」
a. 花子は葉を本に挟んだ。
b. 葉が本に挟まっている。(設置動詞：自動詞)
c. ??葉が本に挟まれている。(設置動詞：受身文)

- (98) a. 太郎はグラスを水で満たした。
b. グラスが水で満ちている。(充満動詞：自動詞)
c. グラスが水で満たされている (充満動詞：受身文)

- (99) a. 花子は玄関を花で飾った。
b. 玄関が花で飾られている。(充満動詞：受身文)

- (100) a. 太郎は壁を白いペンキで塗った。
b. 壁が白いペンキで塗られている。(付着動詞：受身文)

次に, $y \cdot z$ の二つの構成要素からなる他動詞文がどのような受身文を作るかを観察する。最初に, 表の①の使役位置変化から作られる反転型の場合焦点他動詞構文である。この構文は「 z が y を Vt 」であり, 焦点化されて主語位置にあった z を再び降格し, 対象物の y を主語に据えた「 y が z に Vt られる」という受身文である (101d)。元々の①の使役位置変化他動詞構文の受身文 (101b) と (結果的に) 同じ格配列になる。

- (101) a. 花子のかばんにストラップを付けた。 (使役位置変化他動詞構文)
 b. そのかばんにストラップが付けられている。(a. >受身文)
 c. そのかばんはストラップを付けている。 (反転型・場焦点化他動詞構文)
 d. そのかばんにストラップが付けられている。(c. >受身文)

それでは、強化型の場焦点化他動詞構文(=道具/LT主語他動詞構文)の受身文はどうだろうか。この構文は「yがzをVt」であり、yを降格し、〈場〉のzを主語位置に据えた「zがyにVt-られる」という受身文である。対応する使役場所変化他動詞構文から作られる受身文は、上に示したように「zがyでV-られる」となる点に注意されたい。受動文でLTがニ格とデ格のどちらで表示されるのかという点で異なる。それを確認した上で、受身文が成立するかどうか観察すると、道具主語とLT主語で振る舞いが異なることがわかる。(102)～(104)の(b)に示したようにLT主語他動詞構文からは、全体的にニ格受動文は成立しにくい。

- (102) a. 水がグラスを満たしている。(LT主語他動詞構文)
 b. ??グラスが水に満たされている。(a.の受身文)
 cf. グラスが水で満たされている。
- (103) a. 大量の土砂がその穴を埋めている。(LT主語他動詞構文)
 b. ??その穴が大量の土砂に埋められている。(a.の受身文)
 cf. その穴が大量の土砂で埋められている。
- (104) a. 花が玄関を飾っている。(LT主語他動詞構文)
 b. ??玄関が花に飾られている。(a.の受身文)
 cf. 玄関が花で飾られている。

上の受身文では、主語が無生物だから元の文から降格した主語がニ格標示できないと考えられるかもしれない。確かに上の例ではニ格の代りに「によって」を用いて降格したy(=LT)を表示すれば成立する。しかし、ニ格で表示できない理由は、主語名詞句が無生物だからではないことは、下に示した道具主語他動詞構文から作られる受身文を見ればわかる。LT主語の場合とは対照的に、無生物主語であるにもかかわらずほとんど問題なくニ格受動文が成立する。今後の議論のために例文(a)の右側に元他動詞文主語の名詞の特徴を記しておく。

- (105) a. 白い布がテーブルを覆っている。 (白い布：移動物・モノ：人工)
 b. テーブルが白い布に覆われている。
- (106) a. 黒い雨雲が町を覆っていた。 (雨雲：(非) 移動物・発生物：自然)
 b. 町は黒い雨雲に覆われていた。
- (107) a. 柵ではなく有刺鉄線が庭を囲んでいた。 (有刺鉄線：移動物・モノ：人工)
 b. 庭は柵ではなく有刺鉄線に囲まれていた。
- (108) a. 深い堀が城を囲んでいる。 (堀：非移動物・生産物：人工)
 b. 城は深い堀に囲まれている。
- (109) a. 山火事で発生した煙が町全体を包んだ。 (煙：(非) 移動物・発生物：自然)
 b. 町全体が山火事で発生した煙に包まれた。
- (110) a. 静寂が森を包んでいる。 (静寂：非移動物・発生物：自然)
 b. 森は静寂に包まれている。
- (111) a. …テーブルにはコーヒーカップとグラスが置いてあり、その上にピンク色のふきんがかぶせてあった。椅子が二つテーブルを挟んでいる。(BCCWJ[74])
 (椅子：移動物・モノ：人工)
 b. テーブルは椅子二つに挟まれている。
- (112) a. 二本の国道が公園を挟んでいる。 (国道：非移動物・生産物：人工)
 b. 公園は二本の国道に挟まれている。
- (113) a. 新聞紙が壁の隙間を塞いでいる。 (新聞紙：移動物・モノ：人工)
 b. *壁の隙間は新聞紙に塞がれている。

このような違いがあることを踏まえれば、LT 主語他動詞文から作られる受動文で二格名詞句が現れにくい理由は主語が無生物であることとは別のところに求めなければならないだろう。そこで 5.1 節で観察した **Swarm** 型場所格交替（自動詞文）を思い出してほしい。主語位置に来る〈場〉とデ格で示される存在物の二者関係を見ると、全体性の解釈が適用され、〈場〉全体にそのような様態を示すものが多く存在するという意味になる。その場合、日本語では存在物の多さを叙述するために、充満を表す述語「いっぱいだ・満ちている・あふれている」などを用いる方法がある。そしてこれらの述語は二格ではなくデ格名詞

句で充満物を示す。このように充満という状況においては、LT (=その場に充満している物) は二格標示よりはデ格標示と相性が良いと言えるだろう。その一方で 4.1.5 節で論じたように「富む」のような述語はその存在物を示すために二格名詞句をとる。どのような観点においてそのような物が多く存在する状況が成立するのかわかる二格である。このような意識が働くとしたら、筆者が付した「??」ほど不自然に感じないという母語話者もいるかもしれない。いずれにしても、充満という概念が二格名詞句ではなくデ格名詞句を強く求めていると言えるだろう。

次に、道具主語他動詞文から二格受動文が成立することについて考えてみたい。まず確認してかなければならないことは、道具主語他動詞構文から作られる受身文「z が y に Vt-られる」は、y も z も基本的に無生物である。z には「花子は一種のオーラに包まれていた」のように有情者が来る場合もあるが、その場合でも物扱いになっていると考えられる。このように主格名詞句にも二格名詞句にも無生物が来るような受身文をどのように考えればいいか。

このような格配列の受身文、あるいはラレル述語文は中古語にも存在し、日本語に固有のタイプであったことは、金水 (1991: 叙景文), 尾上 (1998-1999: 情景描写), 川村 (2003, 2005: 発生状況描写) が指摘しているとおりである。

- (114) a. すずりにかみのいりてすられたる。(枕草子) (金水 同上: 3)
 b. 内にも人の寝ぬけはいひしるくて、いと忍びたれど、数珠の脇息にひき鳴らさる音ほの聞こえ… (源氏 若紫) (川村 2003: 45)

金水 (1991) はこのような事実を踏まえて、受身文の主格と二格で表示される名詞句の意味役割の分布を (115) のように考えた。(a) に示した〈受影者〉と〈動作主〉〈経験者〉はともに人格的な役割を担うもので、(b) に示した〈対象〉は非人格的役割を担うものとして区別されている。

- | | | | |
|-------|-----------|---------------|-------------------|
| (115) | <u>主格</u> | <u>二格</u> | <u> </u> |
| a. | 〈受影者〉 | 〈動作主〉または〈経験者〉 | |
| b. | 〈対象〉 | 〈周縁的他動主〉 | |
| c. | * 〈対象〉 | 〈動作主〉または〈経験者〉 | (同上: 10) |

そして、中古語から現代語に至るまで (115c) が成立しない理由として (116) の制約を提案している。

(116) 受動文における人格的役割の分布制約 (同上：10) ³⁹⁶

非人格的役割を担う名詞句が受動文の新主語であるとき、人格的役割を担う旧主語を二格で表示していけない。

本節で問題となっているのは、(115b) のタイプである。確かにこれは金水の提案した制約に合致するが、二格名詞句の意味役割とされる〈周縁的他動主〉については議論の余地がある。金水は「風」「嵐」「月」などが二格で表示される場合について、「風」「嵐」「月」等々、他動文の主語になることも可能であるが、人格的とは考えられないものもある。そこで、それらに与える役割を、熟さない用語であるが、仮に〈周縁的他動主〉と呼んでおこう。「周縁的」とはプロトタイプ論の考え方を借りた用語である。」(同上：10) と説明した上で、(115b) の意味役割の組み合わせに相当する現代語の例として次のものを挙げている。(下線は引用者による)

(117) a. 家屋が激流に押し流される。

b. 女神像が照明に照らし出される。

c. ゼラチン質に覆われた卵

d. 四方を塀に囲まれた空地

e. 放射能に汚染された食べ物

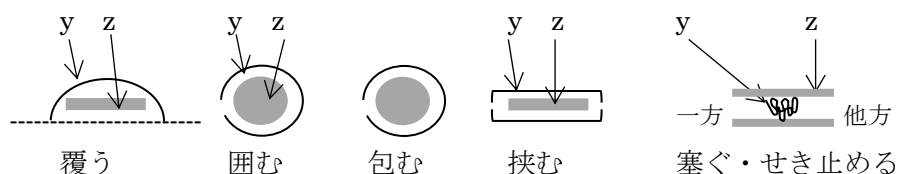
f. 机は家具に含まれる

(同上：11)

〈周縁的他動主〉というものを仮定し、それによって無生物主語の受身文の成立を説明するとしても、その段階性をもう少し丁寧に見ておきたい。金水が「周縁的」と用いるとき、中心となるプロトタイプは典型的な他動詞文における動作主である。(117) の (a) (b) (e) の元になる他動詞構文「激流が～を押し流す」「照明が～を照らし出す」「放射能が～を汚染する」を見ると、確かに人ではないが、その物がもつエネルギーの発現が対象に働きかけられることがイメージされるし、「押し流し続ける」「照らし出し続ける」「汚染し続ける」のように持続相との共起も可能なので、そのようなエネルギーの発現の影響もイメージされやすい。ところが、(c) (d) (f) の「覆う」「囲む」「含む」は「卵-ゼラチン質」「空地-塀」の二者の位置関係を、「家具-机」は概念の包含関係を述べているにすぎない。このような二者の関係を一つにまとめあげようとする考え方は、他動詞構文に現れる主語名詞句を他動性のスケールで見ても、動作主から経験者を経て所有者に行く着くような捉え方と共通している。このような捉え方は事態把握の片側だけしか見ておらず、重要なもう一方

³⁹⁶ 金水はこの制約について「非人格的な〈対象〉をわざわざ主格とする、という有標的な認可のために、もっと主格としてふさわしい人格的役割を担った名詞句をあからさまに非主語として表示することがさまたげになる、というところからきていると見ておきたい」(p.10) と述べている。これは受身文を生み出す事態把握(概念化者の主体的な事態把握)の点からも妥当だと考えるが、受動文の二格が示す場所性に注目してさらに掘り下げてみたいというのが本論文の目論見である。

の事態把握を見落とすことになる。それはモノと〈場〉の二者関係に注目した事態把握である。なぜそれが重要なのかを考えるにあたって、(117)の(c)(d)(f)のような受身文が実は非常に特異な存在であることを確認する。(f)の「含む」と受身文の関係については4.6.8節で論じた。残りの「覆う」と「囲む」は5.3節で分析した道具主語他動詞構文を作る動詞（遮断動詞）である（下にイメージスキーマを再掲）。もし以下の動詞がどれも等しく受身文を作るのであれば問題ないのだが、「塞ぐ・せきとめる」は二格受身文が成立しない。デ格で表示すれば受身文は成立する。



（再掲：図 5.2 遮断動詞のイメージスキーマ）

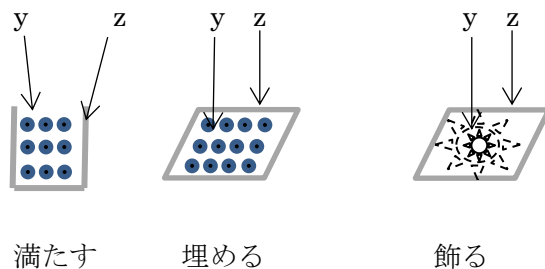
(118) 再掲 (=113)

- a. 新聞紙が壁の隙間を塞いでいる。 （新聞紙：移動物・モノ：人工）
- b. *壁の隙間は新聞紙に塞がれている。
- cf. 壁の隙間は新聞紙で塞がれている。

(119) a. ビーバーが作った木のダムが川の流れをせき止めている。

- b. *川の流れがビーバーが作った木のダムにせき止められている。
- cf. 川の流れがビーバーが作った木のダムでせき止められている。

なぜ道具主語他動詞文が等しく成立しているにもかかわらず受身文が成立しないのかは、モノと〈場〉の二者関係の把握の在り方（概念化）を見る必要があるだろう。それは、道具主語他動詞文が受身文になったときに、主語位置に来る名詞句（z）と二格名詞句（y）の関係である。上の図 5.2 のスキーマを見てわかるように、「覆う」「囲む」「包む」「挟む」はそもそも「z は y（の内部）にアル」という位置関係にあるのである。ところが「塞ぐ・せき止める」だけは「z は y（の内部）にアル」という位置関係としては把握されない。そのために二格受身文が成立しないと考えられる。そして、なぜ「塞ぐ・せき止める」はデ格受身文なら成立するのかと言え、動詞が表す移動の概念が遮断動詞の特徴だけでなく、充満動詞の特徴も持っているからである。本論文では充満動詞のイメージスキーマを次のように示した。



(再掲：図 5.3 充満動詞の概念のイメージ)

充満動詞が表す事態は、「 z は y (の内部) にアル」あるかと言え、そうではない。むしろ関係が逆である。充満動詞が表す事態は、「 z は y でいっぱい」なのである。

以上まとめると、受動文の成立の可否は、能動文の主語名詞句をモノとしてだけでなく、モノが存在する場所として把握できるかどうかにかかっていると言える。(120) に示したように二格の受動化ができる道具主語他動詞構文は、そのような把握が可能であり、LT 主語他動詞構文と一部の道具主語他動詞構文(塞ぐ・せき止める)ではそのような把握ができないので二格の受動化が成立しない。言い換えれば、道具は場所として把握され得るが、LT はあくまで移動先の場所の構成物となるものであり、場所としては把握しがたいということである。したがって、LT 主語他動詞構文は LT をあくまで充満物として把握するデ格の受動化なら自然に成立するのである。

(120) 受動化の可否と二格名詞句の場所性

- a. 白い布 (y:モノ) が テーブル (z:場所) を 覆っている。
 テーブル (z:モノ) が 白い布 (y:場所) に 覆われている。
 cf. テーブルが白い布の内部にアル
- b. ジュース (y:モノ) が コップ (z:場所) を 満たしている。
 *コップ (z:モノ) が ジュース (y:場所) に 満たされている。
 cf. *コップがジュースの内部にアル
- c. ジュース (y:モノ) が コップ (z:場所) を 満たしている。
 コップ (z:場所) が ジュース (y:モノ) で 満たされている。
 cf. コップがジュースでいっぱい

次に、道具主語他動詞構文が受動態に転換することについて、本論文の考えを示しておきたい。受動文については、これまでの分析で出来文として「可能」「自発」と同じラレル述語文として表現される点に注目し、ある〈場〉に出来事全体が発生するというスキーマを想定した。はたして、道具主語他動詞構文の受動態がそれに該当するのか。二つの見方ができる。一つはラレル述語である以上、共通したスキーマを持つという見方である。もう一つは態を転換するにあたり、形態上対応する自動詞を持たないため、その補充形として受動態が選択されるという見方である。「含む」の受身文については後者によって受身文になると結論づけた。

道具主語他動詞文についても、上に挙げた動詞に関して言えば自動詞の補充形という見方はできる。「覆う」「包む」には自動詞形がない。そして「挟む」には自動詞形「挟まる」があるが、上で観察したように、この受動態は遮断動詞の用法ではなく、設置動詞としての用法になっていた。

(121) 再掲＝ (96)

- a. 花子はハムとチーズを食パンで挟んだ。
- b. *ハムとチーズが食パンで挟まっている。(遮断動詞：自動詞)
- c. ハムとチーズが食パンで挟まれている。(遮断動詞；受身文)

(122) 再掲＝ (97)

- a. 花子は葉を本に挟んだ。
- b. 葉が本に挟まっている。(設置動詞：自動詞)
- c. ??葉が本に挟まれている。(設置動詞：受身文)

一方、あくまで受動態として成立しているという見方をとる場合、一見すると動的な事象ではなく、静的な位置関係にもそのような出来文のスキーマを適用できるのかという疑問が起こるかもしれないが、よく観察すれば、そのような場合であっても、発生によってその場所に位置していたり、生産されてそこに位置していたりすることがわかる。(105)～(112)に挙げた受身文の中で、二格名詞句の特徴を見ると、「非移動物」であっても、発生物や生産物であることがわかる。つまり、そこに存在することになった原因をたどれば、出来事が発生したことを読み取ることは可能である。

また、実際には移動していない場合でも、そこに移動の痕跡を認めるという事態把握も可能である。「囲む」「挟む」が典型的に表す動きがイメージされ、あたかもその動きによって生まれた結果としてその位置にあると、概念化者によって主体的に把握されるのである。このような把握の在り方を国広(1985)は痕跡的表現と呼んだ。また、動詞が表す動きが実際に起こらなくても、概念化者の視線の動きのような「認知プロセスによって捉え

られる対象の動きや形状」(中村 2000 : 77) が言語化するという見方もある。このような事態把握ができることは、道具主語他動詞構文の受動態がまさに出来文として成立していることを支持するものである。現時点では、両方の要因が働いて受動文が成立していると考えておく。とはいえ、重要なことは、出来文の事態把握にせよ、受動態を自動詞にかわる補充形として用いると見るにせよ、モノ (イベント) と〈場〉の二者関係に注目することによって明らかにされることであると、本論文は主張するものである。

第6章 まとめと今後の課題

6.1. モノと〈場〉の二者関係の概念化に注目する意義

本論文はモノと〈場〉の二者関係の概念化によってどのような自動詞構文と他動詞構文が作り出されるのかを明らかにした。モノと〈場〉の二者関係の概念化について注目する研究とはどのような研究なのか、その要点を六つにまとめ、その意義を示す。

◆事態把握の認知モデル

言葉の意味、文の意味は概念化者が主体的に外界を把握する認知プロセスを通じて対象を概念化することによって生まれると考えられる。その一方で、あらゆる概念化に対応するように言語の形式（形態・単語・構文）が用意されているのではなく、概念化にあたって鋳型になるようなものがあり、それを柔軟に適用させながら、ある概念化は自動詞構文を出力し、ある概念化は他動詞構文を出力すると考えられる。一つの語が多義性をもつと同様に、一つの構文も多義性をもつ。統語上「～が～を V」という形式であっても、それが異なる事態把握によって出力されているとすれば、その多義性の根本には概念化者の外界の把握の在り方の違いがあるはずである。本論文は言葉の意味と形式をこのように考え、外界の事態把握には大きく二つの視点があるという作業仮説をたてた。そして図 6.1 に示した事態認知モデルを提案し、「～が～を V」という他動詞構文を生み出す外界の把握には、大きく二つの鋳型があると主張した。本論文はすべてこの事態認知モデルに基づいて分析をしたものである。

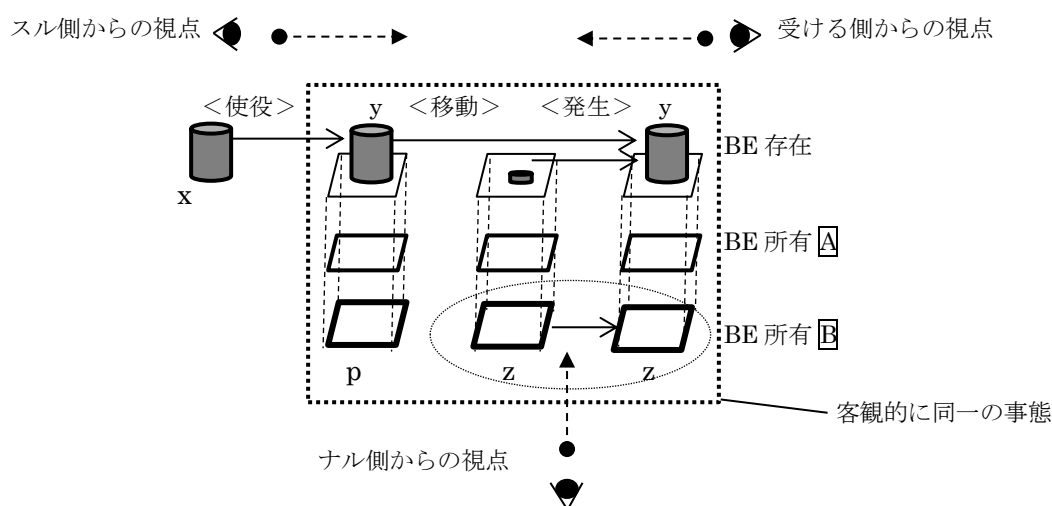


図 6.1（再掲 図 3.20） 使役事象と移動/発生の焦点化

外界の事態把握には、第一に図 6.1 の上段に示されたモノ（x）とモノ（y）の使役連鎖に基づいた二者関係に注目した把握がある。これは、スル側からの視点であり、動作主が対

象に働きかけ、その対象が変化するという事態把握がプロトタイプとなる。この事態把握は、「太郎は茶碗を割った」と「茶碗が割れた」のような構文交替の原理を説明することはできる。しかし、「その仕事は危険を伴う」と「その仕事に危険が伴う」、「柳の木が芽を出した」と「柳の木に芽が出た」の交替をうまく説明することができない。なぜなら、この二つの文が表す事態は、図で点線の四角で囲んだ部分であり、客観的に同一の事態を指しているからである。何が異なるのかと言えば、自動詞構文のほうは場所（z）が背景とし扱われ、モノ（y）の存在や変化に注目している。一方、他動詞構文のほうは、場所（z）の状態や変化に注目して、「そのモノ（y）がそこに存在する」こと、あるいは「それまでなかったモノ（y）がそこに存在するようになった」ことを述べている。このような事態把握においては、モノと〈場〉の二者関係の基本は存在である。したがって、この事態把握は静的な存在をプロトタイプとしていると言える。

このように単に対象の存在や変化と捉えるのではなく、モノと〈場〉の二者関係の概念化に注目することによって見えてくる自動詞構文と他動詞構文があり、このようなタイプの交替現象を無視しては日本語の自他交替現象の全体を正しく捉えることはできないと考える。これは従来の自動詞構文と他動詞構文の交替現象の分析に欠けていたもので、モノと〈場〉の二者関係の概念化に注目する第一の意義である。

◆存在と所有

所有の概念を存在との関係で規定し、「〈場〉が、そこに存在するモノによって特徴付けられる」と把握することによって存在から転換する概念であるとした。その所有の概念が、単に人とモノの静的な所有関係を表すだけでなく、動的な事象を把握する際の鋳型としても用いられることを示したことで、これが第二の意義である。

この事態把握モデルを採用することによって、非意図的な現象で、「zにyがV」（湖に氷が張る）という自動詞構文で叙述されるような事象（＝図中の点線の枠内の事象）がなぜ「zがyをV」（湖が氷を張る）という他動詞構文でも叙述しうるのか、その生成原理を明らかにした。モノがモノに対して働きかけ、モノが変化するという事態把握（上段のモデル）ではなく、〈場〉（として把握された物・人を含む）がモノの存在がない状態からある状態へと変化するという事態把握になり、他動詞構文を作る動機付けになっていると考えた。それを反映させたのが、図 6.1 の受ける側からの視点に立った事態把握のモデルである。このモデルでは「モノがいまここに存在するのは、それがそこに{発生・移動}したからだ」というように原因事象が読み込まれて把握されるものである。それはすなわちナル側からの視点で事態を把握するモデルだとも言える。

上段に示したモデルも下段に示したモデルも、結果的にどちらも「xはyをV」という他動詞構文を作るが、概念化者の事態の把握の在り方が異なる。上段の事態把握で作られる典型的な他動詞文のxは動作主であり、典型から離れる（他動性が下がる）にしたがって、原因、経験者となり、最終的には対象に対して何ら働きかけのない所有者になるとされる。

しかし、本来受け手として把握されるべき経験者が他動性のスケール上に配置されているのはなぜか。それはモノとモノの使役連鎖を基本とするモデルでは、二者の非対称性が注目され、人優位の原則にしたがって、「人 ⇒ 物」の構図の中で再配置され、「人（経験者）⇒ 物事」となるからである。そして所有の概念も「人（所有者）⇒ 所有物」という構図の中に組み込まれることになる。しかし、このような事態把握と言語化は **HAVE** 型言語の発想であり、**BE** 型言語である日本語の事態把握と言語化を分析するためには、所有はあくまで存在とセットになっている概念であるというところから出発し、他動性の低下とは逆に自動詞（存在）の側からも見る必要があると主張した。「そこにある」という存在を基本として、「そこに来る」という受ける側から事態を把握するモデルが図の中段であり、存在から所有の概念に転換したのが、下段に示した〈場〉が「それを所有しない」状態から「所有する」状態へと変化すると把握するモデルである。したがって、このモデルでは、「**z** は **y** を **V**」という他動詞構文が典型的に表すのは状態であり、**z** は静的な所有者である。この典型から離れるにしたがって、動的な所有者へ、そして経験者と呼ばれるものへと移行し、スル側からの事態把握とく接点>をもつと考えた。

◆二つの事態把握の接点

本論文は上述の受ける側（ナル側）からの事態把握に注目することの意義を主張するが、スル側の事態把握の意義を軽視するわけではない。むしろ、この二つの事態把握の接点を探り、そこに立ち現れる構文というものを明らかにしたいという立場である。これが本論文の三つ目の意義である。

これまで例外的あるいは周辺的な他動詞文として扱われていた「太郎は火事で家を焼いた」「花子は風で帽子を飛ばした」「次郎は台風で傘の骨を折った」などの構文を、二つの異なる視点（仕手側と受け手側）による事態把握のく接点>として位置付けた。図 6.1 の「客観的に同一の事態を表す」部分の自律的な変化事象だけでなく、外部に原因や使役主がある場合であっても、概念化者の主体的な把握によって変化事象のみに焦点を当てて概念化できると考えた。

外界に発生する事象の因果関係を叙述する場合、原因の把握の仕方には二つある。一つはモノとモノの使役連鎖における「使役主」「原因」という把握で、これは「**x** が **y** を **V**」という他動詞構文によって表現され、主語名詞句（**x**）の「有責任性」となって現れる。もう一つは「（イベントが発生した）背景」という把握で、この場合は原因が背景化され、変化事象のみが焦点化される。そしてモノと〈場〉の二者関係において所有の概念の鋳型によって言語化されれば、それは「（**x** で）**z** が **y** を **V**」という他動詞構文として出力され、主語名詞句（**z**）の「特徴付け」となって現れる。「**x** は何をしたのか？」という事態把握と結びつく「**x** の有責任性」と、「**z** はどうなったのか？」という事態把握と結びつく「**z** の特徴付け」の両方に注目して分析した。有責任性が限りなくゼロに近づいたときに立ち現れるもの、それが「特徴付け」であり、それは他動性のスケールという一方向のみからの事

態把握によって説明するのは無理がある。自動詞側からのアプローチの意義はここにある。

◆再帰と所有

再帰という概念を文法カテゴリーとして発達させなかった日本語において、それを言語の中にどのように位置付けるかは大きな課題である。先行研究の多くが「太郎は熱を出した」「台風は勢いを増した」などの非意図的な事象を表す他動詞文を程度の差こそあれ再帰の概念と結び付けて論じてきた。その一方で、結局は他動詞構文の一つのバリエーションとして扱うべきだと主張する研究もある。

本論文が主張するのは、再帰の根底には所有の概念があるということである。再帰は「自分から発したものが最終的に自分の〈場〉の至り、その〈場〉が所有するところとなる」と考えることができる。つまり、〈場〉の変化に注目した事態把握は、他者に対しても自分自身についても起こるが、後者に起こるのが再帰だという考え方である。その点で再帰は他動詞構文の一つのバリエーションであるとも言えるが、動きが外に向かうのかそれとも内に向かうのかは外界の事態把握として区別すべき特徴を有していると考えられる。

このように再帰を、モノの移動が原因事象として読み込まれる所有の概念化の一つのバリエーションと見ることによって、「着る」のような再帰動詞を自身の〈場〉の変化、「着せる」を他者の〈場〉の変化として分析した。そして、本論文の独自の分析アプローチとして、「着る」の拡張事例として「知る」「見る」「聞く」を、知的情報・知覚情報の移動事象が原因として読み込まれる所有の概念化として分析した。これによって「知れる」「見える」「聞ける」という自動詞、「知らせる」「見せる」「聞かせる」という他動詞（複他動詞）とのつながりが統一的に分析できることを示した。このように再帰を、〈場〉がモノを所有する状態へ変化するという把握の一つのバリエーションとみなして分析したことが、四つ目の意義である。

◆移動動詞のヲ格（所有と占有の概念化）

「出る・通る・歩く」など移動の概念を表す動詞はその移動の出所や経路を示すのにヲ格名詞句をとる。通常、これらの移動動詞は自動詞に分類され、他動詞の目的語を示すヲ格とは区別される。そこには文法的な区別が存在するのだが、その一方で同じヲ格をとる以上、何らかの共通点があることも確かである。「道を見た」と「道を歩いた」で共通してヲ格が現れるのは、どちらにも「対象化」という概念化が働いているからである。しかし、前者はモノ（＝人）とモノ（＝道）の二者関係の把握であるが、後者は「モノ（＝人）と〈場〉の二者関係の把握である。つまり、〈場〉をモノとして対象化（目的語化）する把握とは別に、〈場〉を空間として対象化する把握がある。本論文は、〈場〉を空間として対象化することによって生まれる「占有」という概念を導入した。

この「所有」と「占有」はモノと〈場〉の二者関係の概念化の基本の型である。前者は「zにyが〈存在〉」から「zがyを〈所有〉」の事態把握への転換であり、後者は「zにy

が〈存在〉から「yがzを〈占有〉」という事態把握への転換である。この占有の概念化を「起点・経路・着点」のイメージスキーマに組み込んだのが図 6.2 に示したスキーマである。「人がその〈場〉を占める」という把握をプロトタイプに、その拡張として「人が〈場〉を出る/通る」という概念へと拡張するイメージスキーマを提案した。

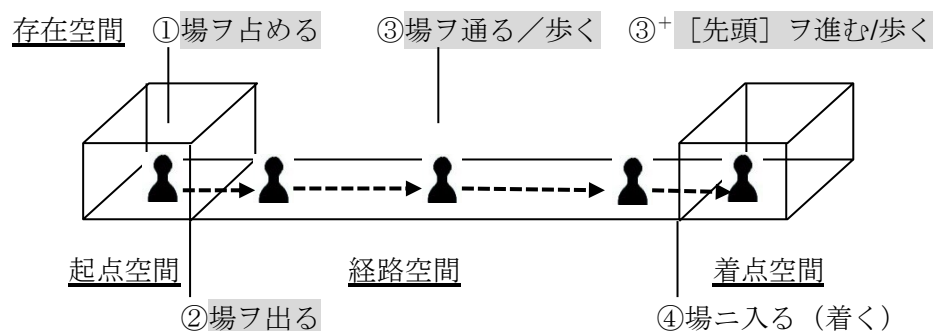


図 6.2（再掲 図 4.52）占有の概念と「起点 - 経路 - 着点」のイメージスキーマ

このスキーマを用いて「席ヲかわる」「仕事ヲ終わる」「答えヲ間違ふ」などのように形態上対応する他動詞をもちながら、自動詞の形態のままヲ格名詞句をとり他動詞構文を作るといふ、例外的な振る舞いを見せる動詞を分析した。先行研究では既に「席ヲかわる」には移動の概念に拡張している点が指摘されていたが、本論文はその移動の概念を図 6.2 に示したスキーマ全体を鋳型とする事態把握の中で、「ヲ終わる」「ヲ間違ふ」も含めて占有という概念に基づいて生まれた用法であると分析した。これが五つ目の意義である。

このような分析は、次に示した事態把握の三つの側面のうち、先行研究では欠けていた③の側面を補うものだと言えるだろう。①動作主が対象に何をしたのか、②（その結果）対象はどう変化したのか ③（その結果）動作主はどう変化したのか、の三つの側面である。上の動詞を当てはめると、①「太郎は席を A から B にかえる」②「太郎の席が A から B にかわる」③は「太郎は A から B に席をかわる」となる。

以上の五つの意義をまとめれば、これまで例外的あるいは周辺的な他動詞構文として個別に分析されてきた他動詞構文が、モノと〈場〉の二者関係における「所有」あるいは「占有」の概念化に注目することによって、統一的にその生成原理と意味を説明できることを示したことである。

◆ヴォイスの体系におけるイベントと〈場〉の二者関係の概念化

〈場〉とモノの二者関係の概念化の枠組みを〈場〉とイベントの二者関係に広げ、受益態・自発態・可能態・受動態・使役態を、「〈場〉がそこに発生するイベントを所有するように変化する」という事態把握の概念化が組み込まれていると分析したこと。これが六つ目の意義である。6.2 節のまとめも参照されたい

授受・受益構文「～ガ～ {カラ・ニ} ～ヲ (て) もらう」は興味深いことに意味上はく起点>に相当する名詞句をカラ格だけでなくニ格で表示できる。それはなぜか。そして「ラレル」という共通した接辞によって表現される自発態・可能態・受動態、さらには使役態に現れる動作主の意味役割をもつニ格名詞句は何を表すのか。本論文はこれらを、元の動作主（使役主）が降格し、イベントの発生が依拠する〈場〉として把握されると考えた。このニ格名詞句が示す依拠性という概念は、モノと〈場〉の二者関係において「ステージに立つ」と「ステージで立つ」の違いからも見てとれるようにニ格がもつ本質である。本論文は、概念化者よるこの依拠性の把握の在り方によって恩恵、受影性、(能力の) 潜在性、使役性という意味が生まれると分析した。自発は依拠する〈場〉がないものとなる。さらに、「太郎は病院でインフルエンザの注射をした」（介在性の表現）のような他動詞構文が成立する条件として、実際の行為者がいないものとみなされるというのは、上に示した使役態、受益態にはあった依拠する〈場〉がないと把握されることによるもので、かつ仕手側からの事態把握と受け手側からの事態把握が融合して生まれる構文だと分析した。

日本語が「ナル型」の言語であり、「受け手」志向の言語であるのならば、そこに立ち現れる構文はモノと〈場〉の二者関係の概念化を見なければ、正しい捉えられないはずである。それを体系的に分析した意義は小さくないと考える。

6.2 〈場〉の焦点化によって生まれる構文

次に、〈場〉とは何かについて要点をまとめた上で、本論文で分析対象とされた構文を整理してその全体像を示す。

本論文では〈場〉をニ格名詞句で表される空間と規定した。それは、第一にモノの存在地点であり、移動の着点も含まれる。移動の着点は物理的な場所のみならず、モノの受け手としての人も〈場〉とみなされる。第二に発生地点である。発生はモノの発生のみならず、モノとモノの二者の関係が発生する空間、つまり事態が発生する場所としての空間も含む。したがって、人もイベントが発生する〈場〉とみなされる。第三に、存在から所有の概念に転換することによって生まれる所有空間という〈場〉である。第四に、状態という抽象的な〈場〉である。モノが存在する以上なければいけないのは、そのモノが存在する場所と、そしてもう一つがその性状である。モノはメタファーとして捉えられるものも含めて、それが存在する以上は形・色・大きさなどの基本的な属性はもちろんさまざまな特徴を有する。そのような特徴を有する主体あるいは母体も〈場〉として捉えられる。外界においてモノと場所がきれいに切り分けられて客観的に存在するわけではない。概念化者の主体的な把握によってモノはあるときには場所になり、場所はあるときにはモノとして扱われる。

〈場〉に際立ちが与えられる（焦点化される）ことによって生まれるのが場焦点化他動詞構文である。どのような観点でこれらの構文が分析されたのかを整理して示す。それぞれの構文につけた例文は本論文で考察された一部である。分析された節を適宜参照された

い。

日本語のような BE 言語と呼ばれる言語では、事態の把握が存在（の鋳型）から所有（の鋳型）に転換されながらも、〈場〉は背景化されたまま「z に y がある」という自動詞構文で現れる。これは概念化者が外界を把握するにあたり適用した参照点構造（まず場所に向かい、そしてターゲットの対象物に到達する）がそのままの形で残りながら、所有が概念化していると考え、「参照点構造自動詞構文」と呼んだ。それに対して、〈場〉が焦点化され他動詞構文として現れるものを「場焦点化他動詞構文」と呼んだ。本論文では前者を「所有 A」、後者を「所有 B」と呼び区別した。この所有 B は、もともと背景化されていた〈場〉に際立ちが与えられ、前景化したものである。

そして、場焦点化他動詞構文を、その焦点化の在り方によって二つのタイプに分類した。一つは、上の所有 B のように、背景化されていた〈場〉が焦点化されることによって主語位置に来て、二項述語の他動詞構文を作る場合、あるいは焦点化されることによって目的語位置に来て三項述語の他動詞構文を作る場合である。〈場〉が「地」から「図」へ転換していると見て、これを「反転型」と名付けた。もう一つは、背景化していた〈場〉が焦点化することによって、主語位置にあるモノとの関係が強化され二項述語の他動詞構文を作る場合である。これは「モノが〈場〉を占める」という事態把握になっているため、「占有」と名付け、これによって生まれる場焦点化他動詞構文を「強化型」と名付けた。この「所有 (B)」と「占有」はモノと〈場〉の二者関係の概念化の基本の鋳型である。前者は「z に y が〈存在〉」から「z が y を〈所有〉」への転換であり、後者は「z に y が〈存在〉」から「y が z を〈占有〉」という事態把握への転換である。このような事態把握の枠組みで様々な他動詞構文を分析した。

<存在から所有の概念への転換と構文とのつながり>

- ・所有 A： 参照点構造自動詞構文 （山田さんには妹が一人ある／いる）
- ・所有 B： 場焦点化他動詞構文 （例は表 6.1 を参照）

<場の焦点化の違いによる分類>

- ・場焦点化他動詞構文
 - ┌ 反転型 （例は表 6.1, 表 6.3 を参照）
 - └ 強化型 （例は表 6.2, 表 6.4 を参照）

第 4 章では反転型の場焦点化他動詞構文を、大きく二つの観点で分析した。一つは「いまそこにモノが存在する／その状態にある原因」としてどんな事象が読み込まれているかという視点である。もう一つは、どのような事象が事態把握のベースになっているのか、どの事象が焦点化されるのかという視点である。後者の視点はさらに三つのタイプに分類された。この分類は、場焦点化他動詞構文の拡張を表している。図 6.1 で客観的に同一事態

として囲んだ破線の四角は、自律的な対象の変化事象を表している。これがベースになって生まれるのがタイプⅠである。それに対して、「いまここにこのモノがある/この状態にある」ことが外部からの力によるものだと把握される場合、つまり、外部に原因や使役主が存在する場合に、図 6.1 の上段の事態がベースとなり、そのなかで四角の枠線が焦点化される。それがタイプⅡとタイプⅢである。この二つは後者が再帰構造を持つのにに対して、前者は持たないという点で異なる。このⅠ型とⅡ型の中間的な特徴をもつものとしてⅠ＆Ⅱ型を設定した。ただし、事態の把握は連続しており、明確な線引きが難しいことを指摘し、むしろ場焦点化他動詞構文として〈場〉の特徴付けになっている点が重要であると主張した。例は少ないがⅠ型とⅢ型の特徴を持ち合わせるタイプ（再帰構造でかつ自律的な変化事象）としてⅠ＆Ⅲ型が設定された。

<事態把握のベースと焦点化される変化事象>

・場焦点化他動詞構文

- タイプⅠ：自律的な変化事象がベースで、そこから生まれる
- タイプⅡ：使役変化事象がベースで、その変化事象が焦点化されて生まれる
- タイプⅢ：再帰構造がベースで、その変化事象が焦点化されて生まれる

本論文は、「知る」「見る」「聞く」を「着る」の拡張事例として再帰構造をもつ事態として把握されると考えた。使役変化動詞としての意味、そして場焦点化他動詞構文（Ⅲ型）を作る場合の意味、さらにそれが自動詞「知れる」「見える」「聞こえる」になる時の意味が、モノと〈場〉の二者関係の視点から分析された。

表 6.1 所有 B 反転型-場焦点化他動詞構文

※Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲという分類は 4.5 節で導入される。ためそれ以前の分析ではこの用語は用いられていないが、ここではそれに相当するものを分類しておく。

原因事象	分析	タイプ	例文
なし	4.1 節	状態	太郎は金銭的な支援を要する。会社は伝統を誇る。敵は 100 万の軍を擁する。このサインはくとまれ>を表す。
		Ⅱ型	彼の言葉は謝罪の気持ちを表している。
発生	4.2 節	Ⅰ型	柳の木が芽を吹く。パンがカビを生じる。汚泥がガスを発生する。太郎が熱を出す。太郎が頭にこぶを作る。
		Ⅱ型	(男は背中に龍の刺青を入れている。)
	4.6.8 節	Ⅰ＆Ⅲ	レモンはビタミン C を多く含む
	4.7.2 節	Ⅰ型	その少女は青い目をしている。
消失	4.3 節	Ⅰ型	太郎は強調性を欠く。花子は財布をなくす。彼は親を亡くす。次郎は信頼を失う。友子は醤油を切らす。
存続	4.4 節	Ⅰ型	町は昔の風情を残す。花子は母親の面影を残している。この仕事は危険を伴う。
		Ⅰ＆Ⅱ型	町は台風の爪痕を残している。

		Ⅱ型	その作家は多くの詩も残している。
移動	4.5 節	I 型	セルロイド版はほこりをたくさん付けている。
		Ⅱ型	花子のかばんはかわいいストラップを付けている。その部屋は最新のAV 機器を備えている。その店は軒先に提灯を下げている。 ※独禁法のその規定は昨年 of 改定で〇〇という文言を削除している。
		Ⅲ型	太郎は顔に墨を付けている。(自分で付けた) どのタクシーも客を乗せている。
	4.6 節	Ⅲ型	花子はその服を着るとかわいい。太郎はいつかそのことを知るだろう。太郎は西の空に月を見た。日本の将来を嘆く声をよく聞く。
	4.6.8 節	I &Ⅲ型	スポンジが水をたっぷり含む。
状態変化	4.7 節	I 型	台風は速度を速める。太郎は心臓の鼓動を速めた。川は水かさを増す。その木は四方に枝を伸ばした。
		I &Ⅱ型	株が値を下げる。夏バテで体重を減らした。 彼女は昨夜の火事で母屋を焼いた。強風で街路樹はすっかり葉を落とした。太郎は虫に刺されて顔を腫らした。洪水で家を流した人が多い。台風で傘の骨を折ってしまった人を見た。
		Ⅱ型	携帯電話は進化して形を変えた。彼は殴られて額を切った。

4.8 節で分析された有対自動詞の両用動詞化の結論をまとめておく。6.1 節に示したように「席をかわる」「仕事を終わる」「答えを間違う」が生まれる事態把握を、「起点・経路・着点」のイメージスキーマに「占有」の概念を組み込んだスキーマを設定し、これらの三つの動詞が表す概念がどの部分に対応しているのかを考えた。

表 6.2 (再掲 表 4.14) 占有 (強化型) の有対自動詞の両用動詞化に見られる移動の概念

	ベースとなるイメージスキーマ (下段: 拡張スキーマ)	対象化される空間	占有の概念と拡張
席をかわる	起点 - 経路 - 着点	「起点」と「着点」	二点間を移動
仕事を終わる	起点 - 経路 - 着点 開始 - 継続 - 終結	「経路」 「継続」	継続空間 (=イベント) を出る
音程をはずれる	※音の高低の空間	※音の高低の空間	正しい位置を離れる
答えを間違う	起点 - 経路 - 着点 \ メトニミー 入力 思考 出力・[顕在]	着点 \ 出力・[顕在]	出力空間/顕在空間 を占める

第 5 章では、まず〈場〉が焦点化され主語位置に来ながらも他動詞構文ではなく自動詞構文を作る交替現象を分析し、英語と日本語の違いを考察した。次に、〈場〉が焦点化され目的語位置に来る場所格交替現象を観察し、全体性の解釈を所有の概念と結び付けて論じた。そして全体性を有する動詞かどうかで英語と日本語を比較した結果、日本語は明らかに全体性を有する動詞によって場所格交替が起きていることを示し、日本語の特徴を明らかにした。第 4 章で分析された場焦点化他動詞構文も含め、そこに通底するのは焦点化された〈場〉(z) とモノ (y) が所有の関係として把握されることである。5.1 節と 5.2 節で

分析した構文をまとめたのが表 6.3 である。

表 6.3 構文交替現象と〈場〉の焦点化（反転型）

構文 1 →	焦点化される〈場〉	→ 構文 2	分析	＜焦点化のタイプ＞ 例文
自動詞構文 <u>z</u> にyがV	Z：場所項	他動詞構文 zがyをV [所有関係]	4 章	＜所有 B：反転型・場焦点化他動詞構文＞ (例文は表 6.1 を参照)
自動詞構文 <u>z</u> にyがV	Z：場所項	自動詞構文 zがyでV	5.1 節	＜反転型＞ ※自動詞文の場所格交替 王冠に宝石が輝いている。 ⇔ 王冠が宝石で輝いている。
他動詞構文 xがyを <u>z</u> にV	Z：場所項	他動詞構文 xがzをyでV	5.2 節	＜反転型＞ ※他動詞文の場所格交替 太郎は壁にペンキを塗った。 ⇔ 太郎は壁をペンキで塗った。

次に 5.3 節で、表 6.3 の下段で分析した他動詞文の場所格交替の分析を踏まえて、動作主 (x) と移動するモノ (y) と移動先の場所 (z) の三項述語を作る動詞を包括的に分析した。場所格交替は「モノの位置変化」に焦点を当てた事態把握と「移動先の場所の状態変化」に焦点を当てた事態把握の両方ができる場合だと、先行研究で分析されている。本論文では、モノと〈場〉の二者関係に注目するという立場から、「移動先の場所の状態変化」とは、「移動先の〈場〉が移動したモノによって特徴付けられるように状態変化する」とみなし、これも所有の概念化が組み込まれていると考えた。そして、移動してきたモノがその〈場〉でどのような様態で存在するのか、反転して見れば、〈場〉が移動してきたモノをどのような様態で所有しているのかに注目した。そして、「LT=locatum, : 構成物」として存在するか、それとも「道具」として存在するか、あるいはそれ以外の一般的なモノとして存在するか、この三つの把握の在り方の違いが構文交替の成立の可否に影響を与えることを明らかにした。それを踏まえ、表 6.4 に示したように移動動詞を「遮断動詞」「充満動詞」「付着動詞」「設置動詞」の四つに分類した。

また、LT/道具主語他動詞構文の成立には「占有」の概念化が動機付けになっていると分析し、見かけ上は同じ「y が z を V」となるが、二格受身文 (z が y に V-られる) が成立するのは、道具主語の構文だけで、LT 主語は受動化が困難であることを示した。そして、その原因を、モノが〈場〉にどのような様態で存在すると把握されるのかの違いであると分析した。

表 6.4 三項述語を作る移動動詞の構文交替と動詞のタイプ (●構文成立 ×不成立)

使役位置 変化構文	使役場所変化構文		LT／道具主語 他動詞構文 <u>強化型</u>	タイプ	動詞例
	y=LT <u>反転型</u>	y=道具			
x が y を z に V	x が <u>z</u> を y で V <u>所有</u>	x が z を y で V	<u>y</u> が <u>z</u> を V <u>占有</u>		
●	×		×	設置動詞	付ける・備える・載せる 挟む 2・包む 2
●	●LT で 場所変化		×	付着動詞	塗る・絡める・詰める・敷 き詰める・ちりばめる
●	●LT で 場所変化		●LT 主語 二格受身文困難	充満動詞	満たす・埋める・飾る
×		●道具で 場所変化	●道具主語 二格受身文可能	遮断動詞	覆う・囲む・包む 1・挟む 1 [塞ぐ・せき止める] *

*この二つの動詞は道具主語構文を作るが充満動詞の特徴をもち、二格受身文は不成立

最後に、4.6.5 節で分析した自発・受身・可能の分析および 4.11 節で分析した場焦点化他動詞構文と態（ヴォイス）とのつながりについてまとめておく。モノと〈場〉の二者関係の概念化では、発生事象が原因事象として読み込まれると、「〈場〉にモノが発生する」という概念を表す自動詞構文（「木に実が結ぶ」など）と「〈場〉が、そこに発生したモノによって特徴付けられるように変化する」という概念を表す他動詞構文（「木が実を結ぶ」など）が作られる。モノではなく出来事名詞が来る場合も「山に地滑りが起こる」と「山が地滑りを起こす」のように構文が交替する場合がある。

文法カテゴリーとしてのヴォイスを「何に視点を置いて表現するかという文の機能的意味構造にもとづく統語論的な側面と、述語になる動詞がどのような形態をとるかという動詞の形態論的な側面の相互関係の体系」（村木 1991：1）と定義した場合、その「形態論的な側面」の中には「(ラ) レル接辞」「(サ) セル接辞」「(て) モラウ」という補助動詞だけでなく、語基を共有し派生接辞によって対立する自動詞と他動詞のペアによる構文交替も含まれる。それでは両者をつなぐものは何か。本論文は〈場〉において何かが発生する事態把握になっている点で共通していると考えた。モノと〈場〉の二者関係の概念化は、モノに焦点を当てた自動詞文と〈場〉に焦点を当てた構文とが交替する。これと平行して、〈場〉とイベントの二者関係の概念化による態の変換を考えた。

<「場の変化」の事態把握とヴォイス>

・〈場〉とモノの二者関係の概念化

基本態：モノが〈場〉に【発生する】 【 】は動詞の概念を表す

概念の変換：〈場〉が、そこに発生したモノを所有するように変化する

態の変換：①→②

①：自動詞構文 「木に芽が出る」「人に眠気が催す」

②：他動詞構文 「木が芽を出す」「人が眠気を催す」

・〈場〉とイベントの二者関係の概念化

基本態 : モノが【する】／モノが【変化する】
 : モノがモノに【働きかける】
 : モノがモノに【働きかけて】モノが【変化する】 } イベント

概念の変換 1: 〈場〉が、そこに発生したイベントを所有するように変化することが、二格名詞句が示す〈場〉に依拠して生起する
 (※基本態の動作主は降格し、場所化して二格名詞句となる)

概念の変換 2: 上述における変化を使役主が引き起こす

態の変換 1: ①→②

①：基本態（自動詞構文，他動詞構文）

②：可能態，受動態，自発態（※ただし依拠する〈場〉なし）

態の変換 2: ①→③

①：基本態（自動詞構文，他動詞構文）

③：受益構文，使役態

このようにヴォイスを〈場〉とイベントの二者関係の概念化である仮定すると、日本語のヴォイスの体系を概念化者の主体的な把握の在り方の違いとして合理的に説明することができる。

表 6.5 使役態・受益態・介在性の表現の共通点と相違点

	使役態	受益態	介在性の表現
ベースとなる事態	使役主 (x1) が実際の行為者 (x2) に働きかけ、受け手 (y) を変化させる (※介在性の表現が再帰構造の場合は使役主=受け手)		
共通の事態把握	使役主としての仕手側からの働きかけの事態把握と、 <u>受け手の側からの「〈場〉にモノまたはイベントが発生し、〈場〉がそれを所有するように変化する」という事態把握が融合する</u>		
発生する物事	変化イベント全体		変化結果・生産物
x1 と x2 と発生事象	実際の行為者 (x2) は降格し、 <u>発生事象が依拠する〈場〉</u> となる (x2 に V-接辞/補助動詞)		実際の行為者 (x2) は存在しないものとして扱われる (φ)
二格名詞句の依拠性	x2 は発生事象に対して x1 にコントロールされた <u>依拠性</u> をもつ	x2 は発生事象に対して プラス評価の <u>依拠性</u> をもつ	(なし)
依拠性に基づく意味	使役性	恩恵	(中立的)
形態の転換	V- (さ) せる 有標	V- (て) もらう 有標	V- φ 無標
文型	y が x に V-(さ)せる	y が x に V-(て)もらう	x が y を V- φ (無標)

本論文が注目したのは、二格名詞句がもつ「依拠性」という概念である。概念化者が使役主・動作主と発生したイベントとそれが依拠する〈場〉の三者のつながりをどのように捉えるかによって態の表す意味が決まると考えた。表 6.5 に使役態と受益態と介在性の表現の共通点と相違点をまとめた。(※イベントスキーマは 4.11 節の図を参照されたい。表中の波線部が、〈場〉の変化の事態把握が組み込まれている部分である。)

本論文の分析の独自性は、共通する事態把握を、仕手側と受け手側の事態把握の融合だと考えたこと、そしてイベント発生が依拠する〈場〉の有無、そしてその性質によって態が表す意味が決まると考えたことである。このような視点で捉えることによって始めて介在性の表現がヴォイスの中で正しく位置付けられたと考える。

6.3 今後の課題

モノと〈場〉の二者関係の概念化の研究は、二つの面でさらなる研究が期待される。一つは現場あるいは文脈と〈場〉のつながりである。もう一つは統語的なヴォイスとのつながりである。実は両者は最終的に関連していることは後で論じる。

4.1.2 節で指摘したように、談話構造として題目が設定されることと、〈場〉の概念は無関係ではない。本論文では、研究の対象となる〈場〉の規定の五番目に「題目空間」を挙げたが、十分にそのつながりを論じることができなかった。所有の概念が根本的に属性叙述という構文タイプとつながっており、デフォルトでは「～は」で叙述されるのが普通であること、そして形容詞述語、名詞句述語が「～は+Adj/Noun だ」で表現される場合および、「～は～が…」の構文で表現される場合は、本論文が規定した所有 A になっていることを指摘した。

また、「文脈に埋め込まれる〈場〉としての人」(4.1.2 節)、「現場に埋め込まれる〈場〉」(4.2.4.4 節)、「私が埋め込まれている〈場〉」(4.6.5 節, 4.6.6 節)、「〈場〉としての社会が文脈に埋め込まれている」(4.7.5.1 節)などのように、〈場〉が焦点化されながらも構文上には現れず、文脈で解釈されることが多いことを指摘した。このように焦点化された〈場〉が、談話レベルにおける「文脈」や「現場」といった概念とどのようにつながっているのかを研究することが期待される³⁹⁷。

また、他動詞構文を場焦点化他動詞構文と使役変化他動詞構文に分けて考えることによ

³⁹⁷ 「焦点化される」と「文脈/現場に埋め込まれて統語上に現れない」ことは矛盾すると思われるかもしれない。しかし、これは日本語らしさの現れだと考えられる。焦点化という用語は本論文では背景化されていた〈場〉に際立ちが与えられ、前景化する認知的な把握の在り方を指して用いている。この事態把握が言語化されるにあたって、一律に統語構造に出力されるわけではない。この際立ちを与えるとは、「目立たせる」という意味ではなく、参照点構造によって把握される〈場〉を事態把握の中心に据えるということである。そしてその〈場〉というのは様々なレベルで現れる。物の次元では、変化結果を有する母体であったり、現場の次元では、事象が発生する場所全体だったりするわけである。したがって、〈場〉の変化を新規情報としてまるごと「柳の木が芽を出した」「川の水かさが急に増した」のように言語化する場合もある一方で、「その事故では(…は)多くの死傷者を出した」「窓を開けると、(…には)夕日が見えた」のように暗黙に了解される〈場〉が文脈の中に埋め込まれることがあると考えられるのである。

って、談話の流れを構成する型のようなものが抽出されることが期待される。6.1 節で示したように、事態把握には大きく三つあった。①動作主が対象に何をしたのか、②対象はどう変化したのか ③動作主はどう変化したのか、である。この中で①と③は主語位置に来る名詞が同じである。日本語は一人に視点を当てたら、できるだけ同じ視点で語ることを好む言語である。①と③が連続して現れる場合には、「①+③」の流れと「③+①」の両方が想定できる。「①+③」は「事態の展開（因果関係）」の流れの中に現れることが期待される。一方、場焦点化他動詞構文が、〈場〉の特徴付けという性質を有するのであれば、「③+①」は「場面設定と出来事」の流れの中に現れることが期待される。(1) は前者のタイプで、(2) は後者のタイプである。

(1) 太郎は、次郎にしつこく嫌がらせをしたので、ある日殴られて、唇を切った。

〈行為〉①

〈変化〉③

(2) a. 100 万の軍を擁する A 将軍は、迷わず軍隊を進めた。

〈状態〉③

〈行為〉①

b. A 将軍は、100 万の軍を擁していたが、進軍するのを躊躇した。

〈状態〉③

〈行為〉①

場焦点化他動詞構文と統語的なヴォイスとのつながりについては、本論文において既に、自発・可能・受身・使役・受益を分析した。理論の精緻化が必要なことはもちろんだが、〈場〉とイベントの二者関係の概念化として態を分析するというアプローチが正しければ、今後他のヴォイスの分析にも応用できるはずである。「てある」はアスペクトとのつながりもあり非常に興味深い態である³⁹⁸。「てある」は受身との共通点がある一方で、行為者が降格してニ（ヨッテ）格名詞句で表示できるわけではない。また、元その他動詞構文のヲ格を残したまま「てある」を付けることもでき、さらにその場合、行為者を表示することも可能である。

(3) a. 太郎が窓を開けた。

b. 窓が（太郎によって）開けられている。

c. 窓が（*太郎によって）開けてある。

(4) a. 花子がパーティーのためにたくさん料理を作った。

b. パーティーのためにたくさん料理を作ってある。

c. 花子がパーティーのためにたくさん料理を作ってある（から心配いらない）。

d. 舞踊家が舞に応じて幾本もの扇を用意してあるように、幸吉のいう墨もまた幸

³⁹⁸ 「てある」を（周縁的であれ）ヴォイスとして認める立場については、村木（1991）、早津（2005）などを参照されたい。

吉の蒐集した品々であろうかと（新潮絶版 100 冊[8]）

このように一方では実際の行為者を降格してニ（ヨッテ）格で表示させず含意されるだけの構文を作りながら、他方では行為者を表示する構文を作る。これは行為者と〈場〉のつながりを考える上で非常に興味深い現象である。(5) のような会話が成立するときに、確かに、統語上現れない行為者（だれかは不問）が含意され、その行為者の意図的な動作の結果状態を述べている。しかし、談話の機能としては、むしろ会話が成立している共有された〈場〉の状態を述べているのではないだろうか。

(5) 田中「ねえ、頼んでおいたビールある？」

木村「うん。買ってあるよ。きんきんに冷やしてあるよ」

このような態の変換も〈場〉の変化として分析することによって見えてくるものがあることを示し、最終章を締めくくりたいと思う。「てある」が態を表す文法形式であるとしたら、本論文の分析によって次のような概念の転換が起こっていると説明されることになる。

(6) 基本態 : x が y を V (y の変化が含意される)

概念の転換 : 〈場〉が、そこに発生したイベントを所有するように変化する

ことが、ニ格名詞句が示す〈場〉に依拠して生起する

(※基本態の動作主は降格し、場所化してニ格名詞句となる)

態の転換 : ①→②

① : 基本態 ② : てある構文

しかし、てある構文では基本態の動作主が降格し、場所化してニ格名詞句となることがない。したがって、発生事象が依拠する〈場〉というものが表示されない。文脈化してデ格などで表示されることもない。しかも、動作主が表示されたまま、あるいはヲ格名詞句がガ格に転換しないまま、「てある」が付加され得る。この点でこれまで分析した態と大きく異なる。そこで、てある構文は通常の有標形式による態の転換ではなく、本論文が提案した「受け手側から見た事態認知モデル」に基づいて、ある〈場〉の状態を叙述するにあたって、その〈場〉の状態を引き起こした原因が読み込まれて成立する構文だと仮定してみる³⁹⁹。便宜的に簡易表示すれば、(7) のような事態把握によって言語化されると仮定さ

³⁹⁹ 4 章、5 章で分析した場焦点化他動詞構文も外部に使役者あるいは原因者が存在しても、変化の事象に焦点があたり、〈場〉の変化として事態が把握されたと考えた(Ⅱ型、Ⅰ&Ⅱ型)。てある構文もこのような事態認知モデルに基づいているが、大きく異なる点は、動詞の形態である。場焦点化他動詞構文の動詞の形態は、使役変化他動詞がある場合は、原則的にその形態と同一になると規定した。てある構文は「(て) ある」という補助動詞を付加することによって、実際に存在する行為者を不問にして〈場〉の変化結果を述べる文法形式、つまり、ある〈場〉がそのような状態にあることを原因事象を組み込むことによって述べる文法形式であると仮定しておく。

れる。

(7) 事象把握：【原因事象】⇒【〈場〉がいまの状態にある】

構文 ：[〈場〉は] …V-てある

このような構文を作る原因事象は典型的には状態または位置の変化を引き起こす他動詞であるが、〈場〉の状態変化（＝特徴付けの変化）と把握されるのであれば、それは自動詞であってかまわない。そこで問題となるのは、ここで言うところの〈場〉とは何かである。今後の研究課題として〈場〉の広がりと言用論的解釈について指摘しておきたい。

この〈場〉は「結果としてその物が存在する〈場〉」，「結果としてその変化結果が存在する〈場〉としての人」，さらには「結果としてその変化結果が存在する，現場・文脈で共有される〈場〉」にまでその広がりを見せると考えられる。このような〈場〉の変化として把握されることこそが日本語らしさを特徴付ける大きな要因となっているというのが本論文の主張するところである。

(8) の例文ではどのような行為がどのような〈場〉の変化として把握されているかを示している。もし第二言語習得あるいは外国語学習において「てある」の非用が認められるとしたら、() に示した語用論的な解釈を生み出す〈場〉の変化の把握の在り方が影響している可能性もあるのではないだろうか。[] は文脈によって了解され、文には現れないことがあることを示している。

(8) a. [玄関(に)は] きれいな花が飾ってある。

 ：「花」の位置変化 > 「花がある玄関」の状態変化

 (=この玄関は，入ったときにきれいな花が見えるようになっている)

b. [換気のために][この部屋は] 窓がぜんぶ開けてある。

 ：「窓」の状態変化 > 「窓がある部屋」の状態変化

 (=この部屋は，換気できるようになっている)

c. [テストで満点がとれるよう][私は] しっかり復習してある。

 ：「自分」の状態変化

 (=自分は，テストで良い点がとれるようになっている)

d. [会議の] 資料はもうコピーしてある。

 ：「資料」の状態変化 > 「現場・文脈で共有される〈場〉」の変化

 (=この〈場〉は，会議がいつでも始められるようになっている)

e. A「例の件，部長に話してくれた？」

 B「ええ，話してあるわよ。」

 ：「情報」の位置変化 > 「現場・文脈で共有される〈場〉」の変化

 (=この〈場〉は，期待どおりにことが処理されている)

f. A「ビールある？」

B「うん。冷やしてあるよ。」

:「ビール」の状態変化 > 「現場・文脈で共有される〈場〉」の変化
(=この〈場〉は、ビールがいつでも飲めるようになっている)

図 6.3 は、行為者 (x) による行為が原因として読み込まれて〈場〉が変化することを示したものである、〈場〉として把握されるものが、物が存在する〈場〉のレベルから抽象化し、「現場・文脈で共有される〈場〉」にまで広がっている。従来の研究で「準備」「処置」などと呼ばれていた事態把握は、〈場〉の変化という視点から光を当て分析されることが期待される⁴⁰⁰。

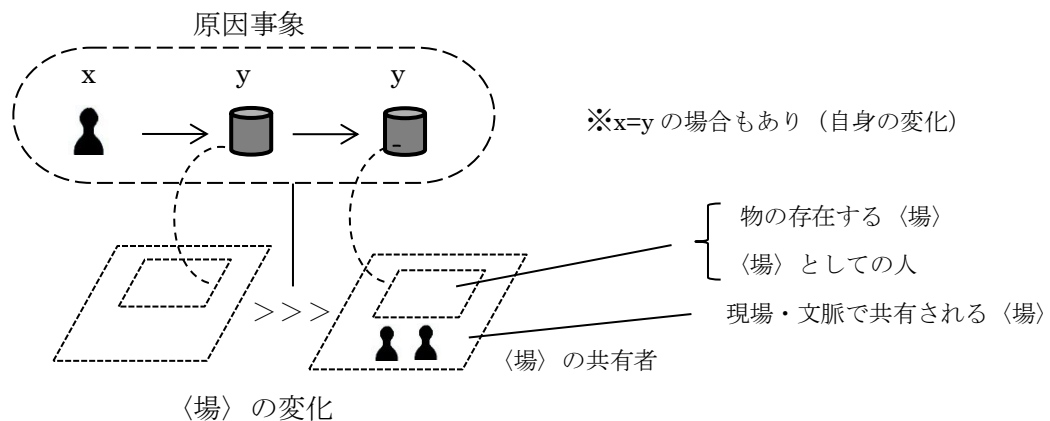


図 6.3 てある構文における原因事象の読み込みと〈場〉の変化

このようにモノあるいはイベントと〈場〉の二者関係の概念化に注目することは、自動詞文と他動詞文の構文交替現象をはじめとしたヴォイスの分析に貢献することにとどまらず、現場に埋め込まれた〈場〉の分析を通じて、他の文法分野へと広がりを見せることが期待される。これによって、モノとモノの使役連鎖に基づいた事態把握だけでは見えて来ない日本語母語話者の目を通した外界の把握の在り方が浮き彫りになると確信している⁴⁰¹。

⁴⁰⁰ 「てある」とのつながりでは、「ておく」も同様に時空間における〈場〉の変化として分析されるべきであると考えられる。「てある」が受動態とつながっているとすれば、「ておく」は「てある」状態を引き起こすという点で使役態とのつながりが示唆される。本論文で受動態と使役態が場焦点化他動詞構文とのつながりで分析されたことは、このような点からも有益だと考える。

⁴⁰¹ 岡 (2013) は、「場所の哲学」に基づいて提起された「場所の言語学」の研究である。場所に注目する意義を考える上で本研究も学ぶところが大きかったことを記しておく。また、言語の研究は究極的には人間 (社会) の研究でもあるという前提に立てば、〈場〉に注目する研究スタンスは、近年盛んに論じられるようになった複雑系とつながる。(cf. 濱口 1998 : 29-32) 〈場〉に注目する言語の研究が人間社会の抱える問題を解決する研究の一助になれば幸いである。

参考文献

〔和文〕

- 青木伶子（1977）「使役 ―自動詞・他動詞との関わりにおいて―」『成蹊国文』10：26-39
- 安達太郎（1995）「思エルと思ワル―自発か可能か―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版 121-130
- 安藤貞雄（2005）『現代英文法講義』開拓社
- 天野みどり（1987a）「日本語文における＜再帰性＞について」『日本語と日本文学』7：1-9
- 天野みどり（1987b）「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151 国語学会 左 1-14（110-97）
- 天野みどり（1991）「経験的間接関与表現 ―構文間の意味的密接性の違い―」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 191-210
- 天野みどり（2002）『文の理解と意味の創造』笠間書院
- アラム佐々木幸子（2001）「燃やしたけれど燃えなかった」のはなぜ？ ―「弱い達成動詞」と「強い達成動詞」― 南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育 2』くろしお出版 57-74
- 飯田朝子（2002）「〈新・接客表現〉はことばの乱れか変化か」『言語』31（9）：52-56
- 飯田隆（2002）「存在と言語 ―存在文の意味論」『西洋精神史における言語観の諸相』慶應義塾大学出版 1-21
- 池上嘉彦（1981a）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 池上嘉彦（1981b）「‘Activity’ ―‘Accomplishment’ ―‘Achievement’―動詞意味構造の類型（2）」『英語青年』126（10）：526-528, 530
- 池上嘉彦（1993）「＜移動＞のスキーマと＜行為＞のスキーマ ―日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造の類型論的考察―」『外国語科研究紀要』43（3）：34-53
- 池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』日本放送出版協会
- 石田尊（1999）「行為者解釈を持たない主語について」『筑波日本語研究』4：16-41
- 井島正博（1988）「動詞の自他と使役との意味分析」『防衛大学校紀要 人文科学分冊』56:105-135
- 井島正博（1991）「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版 149-189
- 伊藤太吾（2003）「ラテン語所有動詞の末裔」『言語』32（11）：78-85 大修館書店
- 稲村すみ代（1995）「再帰構文について」『東京外国語大学日本語学科年報』16：55-80
- 井上和子（1976a）『変形文法と日本語・上・統語構造を中心に』大修館書店
- 井上和子（1976b）『変形文法と日本語・下・意味解釈を中心に』大修館書店
- 今村泰也（2009）「ヒンディー語の所有表現再考 ―類型論的観点からの考察―」『言語と文明』7：17-39
- 岡智之（2002）「存在構文に基づく日本語諸構文のネットワーク ―日本語文法論への存在論的アプローチ」『認知言語学論考』2 ひつじ書房 111-156
- 岡智之（2013）『場所の言語学』ひつじ書房

- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形 -自・他動詞の対応-」『国語学』70 : 46-66
- 奥津敬一郎 (1981) 「移動変化動詞 -いわゆる spray paint hyperllage について-」『国語学』127 : 左 21-33
- 尾上圭介 (1998-1999) 「文法を考える 5 出来文」『日本語学』17(7), 17(10), 18(1) 明治書院
- 尾上圭介 (2003) 「ラレル文の多義性と主語」『言語』32 (4) : 34-41
- 尾上圭介・西村義樹 (1997) 「国語学と認知言語学の対話 1 主語をめぐる」『言語』26 (12) 大修館書店 82-95
- 小柳昇 (2008) 「自他動詞の派生対立の分類再考 -自動詞と他動詞の両方に現れる「-er-」の位置づけ-」『言語教育研究』8 : 143-158
- 小柳昇 (2009) 「〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の分析 -語彙概念構造における「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」のプロセス-」修士論文 拓殖大学
- 小柳昇 (2010) 「コーパスに基づいた漢語サ変動詞の他動詞用法の分析 -「場主語構文」の観点から-」『言語・地域文化研究』16 : 69-91
- 小柳昇 (2012) 「有対自動詞の両用動詞化のメカニズム -「場主語構文」の観点からの分析-」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8 : 129-152
- 小柳昇 (2014) 「存在スキーマを基本とした日本語の自他交替の分析-一場所の焦点化はどのような構文と意味を創り出すか」『日本認知言語学会論文集』14 : 647-652
- 影山太郎 (1974) 「場所理論的見地から」『言語の科学』5 東京言語研究所 39-77
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論 -言語と認知の接点-』くろしお出版
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』ひつじ書房 33-69
- 影山太郎編 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎 (2002) 「非対格構造の他動詞」伊藤たかね編『文法理論：レキシコンと統語』東京大学出版会 119-145
- 影山太郎 (2004a) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4 (1) : 22-37
- 影山太郎 (2004b) 「存在・所有の軽動詞構文と意味編入」影山太郎・岸本秀樹編『日本語の分析と言語類型：柴谷方良教授還暦記念論文集』くろしお出版 3-23
- 影山太郎 (2007) 「形態論から見えてきた新しい意味機能」『言語』36 (8) : 25-32
- 影山太郎編 (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社出版
- 加藤重広 (2009) 「日本語形容詞再考」『北海道大学文学研究科紀要』129 : 左 63-89
- 紙谷榮治 (2007) 「字音語サ変動詞の他動詞形」『関西大学文学論集』56 (4) : 1-46
- 河上誓作編著 (1997) 『認知言語学の基礎』研究社出版
- 川野靖子 (2000) 「主体変化を表す他動詞文の分析」『筑波日本語研究』5 : 39-52
- 川村大 (2003) 「受身文の学説史から」『言語』32 (4) : 42-48
- 川村大 (2005) 「ラレル形述語文をめぐる-古代語の観点から-」『日本語文法』5 (2) : 39-56
- 川村大 (2008) 「「見ゆ」「聞こゆ」「思ほゆ・思ゆ」の格体制 -動詞ラレル形との対照の観点から-」『東京外国語大学論集』77 : 370-351 (左 1-20)
- 岸本秀樹 (2001) 「壁塗り構文」影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』くろしお出版

- 岸本秀樹（2012）「授受動詞構文の意味と格」 畠山雄二編『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』開拓社 99-111
- 岸本秀樹・影山太郎（2011）「構文交替と項の具現化」 影山太郎編『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店 270-304
- 北原保雄編（2004）『問題な日本語』大修館書店
- 木村睦子（1996）「自他両用動詞の実態」『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院 540-562
- 許永新（2010）「自動詞文と他動詞文の同義表現についての日中対照研究」『東京大学言語学論集』30：255-277
- 金英淑（2004）「「VN する」の自他交替と再帰性」『日本語文法』4（2）：89-102
- 金水敏（1991）「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164：1-14
- 金水敏（1994）「連体修飾の「～タ」について」 田窪行則編『日本語の名詞修飾表現：言語学、日本語教育、機械翻訳の接点』くろしお出版 29-65
- 金水敏（2002）「存在表現の構造と意味」『近代語研究』11 近代語学会 473-493
- 金水敏（2003）「所有表現の歴史的変化」『言語』32（11）大修館書店 38-44
- 金水敏（2005）「歴史的に見た「いる」と「ある」の関係」『日本語文法』5（1）：138-157
- 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15 [金田一春彦編（1976）『日本語動詞のAspect』むぎ書房に再録]
- 工藤真由美（1987）「現代日本語のAspectについて」『教育国語』91 むぎ書房 2-21
- 工藤真由美（1991）「AspectとVoice」『現代日本語のテンス・Aspect・Voiceについての総合的研究』1988-1990 年度科学研究費報告書一般研究（B）課題番号 63450058：5-40
- 工藤真由美（1995）『Aspect・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 国広哲弥（1974）「人間中心と状況中心—日英語表現構造の比較—」『英語青年』119（11）48-50
- 国広哲弥（1985）「認知と言語表現」『言語研究』88：1-19
- 国広哲弥（2002）「意味とは何か」『国語学』47（11）：6-12
- 久野暲（1983）『新日本文法研究』大修館書店
- 久野暲・ジョンソン由紀（2005）「日本語の「非規範二重主語構文」について」 南雅彦編『言語学と日本語教育4』くろしお出版 13-24
- 熊代敏行（2002）「日本語の「に-が」構文と分裂主語性」 西村義樹編『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京大学出版会 243-260
- 倉持保男（1986）「「腹が立つ」と「腹を立てる」」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院 706-722
- 児玉美智子（1989）「状態変化主体他動詞文の成立と構造」『甲子園短期大紀要』9：67-80
- 近藤健二（2005）『言語類型の起源と系譜』松柏社
- 坂原茂（1998）「認知意味論」 郡司・阿部・白井・坂原・松本『意味（岩波講座言語の科学4）』岩波書店 83-124

- 佐久間鼎（1983）『現代日本語の表現と語法＜増補版＞』くろしお出版〔恒星社厚生閣 1966 年刊の復刊本〕
- 櫻井光昭（1977）「古代語の再帰的他動詞」『學術研究（国語・国文学編）』26：67-82
- 佐々木正人（1994）『アフォーダンス ―新しい認知の理論』岩波書店
- 定延利之（2006）「心内情報の帰属と管理 ―現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について」中川正之・定延利之編『言語に現れる「世間」と「世界」』くろしお出版 167-163
- 佐藤琢三（1994）「他動詞表現と介在性」『日本語教育』84：53-64
- 佐藤琢三（2005）『「青い目をしている」型構文の分析』『日本語文法』3（1）：19-34
- 佐藤琢三（2005）『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 澤田浩子（2003）「所有物の属性認識」『言語』32（11）大修館書店 54-60
- 柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店
- 柴谷方良（2001）「日本語の非規範的構文について」南雅彦・アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育 2』くろしお出版 1-37
- 島田昌彦（1979）『国語における自動詞と他動詞』明治書院
- 新屋映子（1989）「“文末名詞”について」『国語学』159：88-75
- 須賀一好（1981）「自他違い－自動詞と目的語，そして自他の分類－」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 543-567
- 須賀一好（1990）「＜終了＞の意味と自他の形態－他動詞形用法に接近した自動詞形用法の分析－」『日本語と日本文学』13：20-27
- 須賀一好（1999）「動詞「かわる」の意味と自他」『山形大学日本語教育論集』2：69-78
- 須賀一好（2000）「行為の主体に関する認識と表現」『山形大学日本語教育論集』3：21-30
- 須賀一好・早津恵美子編（1995）『動詞の自他』ひつじ書房
- 菅井三実（1998）「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』44：15-29
- 杉岡洋子（2002）「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」伊藤たかね編「文法理論：レキシコンと統語」東京大学出版会 91-116
- 杉本武（1986）「格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 鈴木英夫（1985）「「ヲ＋自動詞」の消長について」『国語と国文学』62（5）：104-117
- 鈴木容子（2008）「日本語における非行為者主語の他動詞文」『日本語文法』8（2）：71-87
- スティーブン・ピンカー著 幾島幸子・桜内篤子訳（2009）『思考する言語（上）』日本放送出版協会
- 高橋明（2003）「ヒンディー語の所有表現」『言語』32（11）大修館書店 52-53
- 高橋太郎（1975）「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103：1-17
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・斎美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈（2005）『日本語の文法』ひつじ書房

- 竹沢幸一 (2000a) 「アルの統語的二面性 -be/have の比較に基づく日本語のいくつかの構文の統語的解体の試み」『東アジア言語文化の総合的研究 (筑波大学学内プロジェクト (A) 研究報告書)』 75-100
- 竹沢幸一 (2000b) 「空間表現の統語論 -項と述部の対立に基づくアプローチ-」『空間表現と文法』くろしお出版 163-214
- 竹沢幸一 (2003) 「「ある」と have/be の統語論」『言語』 32 (11) : 61-67
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社
- 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房
- 張威 (1993) 「中国語再帰動詞及びその特殊用法: "給~+再帰動詞" をめぐって」『中京大学教養論叢』 34 (2) : 531-555
- 鄭聖汝 (2009) 「非意図的事象と他動詞構文 -「所有」か「責任」か、それとも? -」『日本語文法』 9 (2) : 53-69
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」『日本語文法の諸問題 -高橋太郎先生古希記念論文集-』ひつじ書房 139-161
- 坪井栄治郎 (2003) 「受影性と他動性」『言語』 32 (4) : 50-55
- 寺村秀夫 (1976) 「「ナル」表現と「スル」表現-日英態表現の比較-」国立国語研究所『日本語と日本語教育〈文字・表現編〉』[1993『寺村秀夫論文集Ⅱ』くろしお出版に再録]
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 外崎淑子 (2005) 『日本語述語の統語構造と語形成 -意味役割の標示と状態述語, 心理述語, 使役構文からの提言』ひつじ書房
- 中右実・西村義樹 (1998) 『構文と事象構造』研究社出版
- 中村雄二郎 (1989) 『場所 (トポス)』弘文堂
- 中村芳久 (2000) 「認知文法から見た語彙と構文-自他交替と受動態の文法化-」『金沢大学文学部論集言語・文学篇』 20 : 75-103
- 中村芳久 (2001) 「二重目的語構文の認知構造 -構文内ネットワークと構文間ネットワークの症例-」『認知言語学論考』 1 ひつじ書房 59-110
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・文法」中村芳久編『認知文法論Ⅱ』大修館書店 3-51
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明編『「内」と「外」の言語学』開拓社
- 成田節 (2005) 「ドイツ語の be-動詞表現 -対格化をめぐって-」『言語情報学研究報告』 7 : 361-381
- 西山佑司 (1994) 「日本語の存在文と変項名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』 26 : 115-148
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味と語用論』ひつじ書房

- 西尾寅彌 (1954) 「動詞の派生について -自他对立の型による-」『国語学』17 : 105-117
- 西尾寅彌 (1982) 「自動詞と他動詞 -対応するものとししないもの-」『日本語教育』47 : 57-68
- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞, 再帰用法 -Lexico-Syntax の姿勢から-」『日本語教育』47 : 79-90
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 沼田善子 (1989) 「日本語動詞 自・他の意味的対応 (1) -多義語における対応の欠落から-」
国立国語研究所報告 96『研究報告集 (10)』秀英出版
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』大修館書店
- 畠山雄二・本田謙介・田中江扶「同族目的語構文と「上戸彩はきれいな目をしている」構文」『英語青年』55 (8) : 45-47
- 濱口恵俊 (1998) 『日本社会とは (複雑系) の視点から』日本放送出版協会
- 早津恵美子 (1989a) 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて -意味的な特徴を中心に-」『言語研究』95 : 231-255
- 早津恵美子 (1989b) 「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」『計量国語学』16 (8) : 353-364
- 早津恵美子 (1991) 「所有者主語の使役」『東京外国語大学日本語学科年報』13 : 1-25
- 早津恵美子 (2005) 「現代日本語の「ヴォイス」をどのように捉えるか」『日本語文法』5 (2) : 21-38
- バンヴェニスト, エミール (1983) 『一般言語学の諸問題』みすず書房 [Benveniste, E. (1966) *Problèmes de Linguistique Générale*]
- 坂野収 (2004) 「所動詞的他動詞再考」『中田清一教授退任記念論集』青山学院大学大学院国際コミュニケーション学会言語研究部 75-85
- 日高水穂 (1995) 「「マダ〜シナイ」と「マダ〜シテイナイ」」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (上)』151-158
- 深田淳 (2008) 「日本語の介在性使役構文をめぐって」『言葉と認知のメカニズム』ひつじ書房 61-73
- 福島直恭 (1991) 「他動性と自動性の対立の解消に関する一考察」『学習院女子短期大学紀要』29 : 107-122.
- プラシャント パルデシ・堀江薫 (2005) 「「非意図的な出来事」の認知類型論」南雅彦編『言語学と日本語教育 4』くろしお出版 111-123
- 文化庁 (1976) 『言葉に関する問答集 第2集』大蔵省印刷局 [文化庁 (1995) 『言葉に関する問答集 総集編』所収]
- 文化庁 (1983) 『言葉に関する問答集 第9集』大蔵省印刷局 [文化庁 (1995) 『言葉に関する問答集 総集編』所収]
- 細江逸記 (1928) 「我が國語の動詞の相 (Voice) を論じ, 動詞の活用形式の分岐するに至りし原理の一端に及ぶ」市河三喜編『岡倉先生記念論文集』岡倉先生還暦祝賀會 96-130
- 細川由起子 (1990) 「日本語のいわゆる再帰動詞とその直接受動構文について」『アジアの諸言

語と一般言語学』三省堂 636-645

本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論 ―生態心理学からの見た文法現象』 東京大学出版会

本多啓 (2013) 『知覚と行為の認知言語学 ―「私」は自分の外にある―』 開拓社

前野隆司 (2013) 『脳はなぜ「心」を作ったのか』 筑摩書房

益岡隆志 (1979) 「日本語の経験的間接関与構文と英語の have 構文について」『英語と日本語と：林栄一教授還暦記念論文集』 くろしお出版 345-358

益岡隆志 (1997) 『複文』 くろしお出版

益岡隆志 (2003) 『三上文法から寺村文法へ ―日本語記述文法の世界』 くろしお出版

益岡隆志 (2004) 「日本語の主題 ―叙述の類型の観点から―」『主題の対照』 くろしお出版 3-17

益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 ―改訂版―』 くろしお出版

松岡弘監修 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク

松下大三郎 (1923-1924) 「動詞の自他被使動の研究」『国学院雑誌』 29 (12), 30 (1-2) 国学院大学 [須賀一好・早津恵美子編 (1995) 『動詞の自他』 ひつじ書房, に再録 13-40]

松下大三郎 (1977) 『増補校訂 標準日本口語法』 (徳田政信編) 勉誠社

松本克己 (2006) 『世界言語への視座：歴史言語学と言語類型論』 三省堂

松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語』 三省堂

松本曜 (2000) 「日本語における他動詞／二重他動詞ペアと日英語の使役交替」丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』 ひつじ書房 167-207

三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書院 [1972 復刊くろしお出版]

水谷静夫 (1964) 「話を終わる」と「話を終える」『ゆれている文法 (口語文法講座3)』 明治書院 45-60

水谷静夫 (1982) 「現代語動詞の所謂自他の派生対立」『計量国語学』 13 (5) : 212-223

三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』 110 : 143-168

宮島達夫 (1985) 「ドアをあけたが、あかなかった」『計量国語学』 14 (8) : 335-353

村木新次郎 (1991) 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』 くろしお出版 1-30

望月世教 (1944) 「國語動詞に於ける對立自他の語形に就いて」橋本博士還暦記念會編『國語學論集:橋本博士還暦記念』 岩波書店 449-482

森田良行・村木新次郎・相澤正夫編 (1989) 『ケーススタディ日本語の語彙』 おうふう

森田良行 (1990) 「自他同形動詞の諸問題」『国文学研究』 120 : 331-341 [『動詞の意味論的文法研究』 (1994) 明治書院に所収 232-252]

森田良行 (2000) 「自他両用動詞から自他同形動詞へ」『早稲田日本語研究』 8 : 左 1-13

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院

ヤコブセン, ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野暲・柴谷方良編『日本語

学の新展開』くろしお出版 213-248

山岡政紀 (2000a) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版

山岡政紀 (2000b) 「関係動詞の語彙と文法的特徴」『日本語科学』8 : 29-53

山口明穂・鈴木英夫・坂梨隆三・月本雅幸 (1997) 『日本語の歴史』東京大学出版会

山田敏弘 (2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版

山田孝雄 (1908) 『日本文法論』寶文館

山田孝雄 (1936) 『日本文法學概論』寶文館

山口巖 (2003) 「「もつ」の言語・「ある」の言語」『言語』32 (11) : 30-37

山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版

吉川武時 (1974) 「日本語の動詞に関する一考察」『日本語学校論集』1 : 67-76

吉田金彦 (1973) 『上代語助動詞の史的研究』明治書院

[英文]

Anderson, John M. (1971) *The Grammar of Case*. Cambridge University Press.

Bruzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Reidel.

Bach, Emmon (1967) "Have and Be in English syntax." *Language* 43. 462-85.

Byrne, L. S. R and E. L. Churchill (1986) *A Comprehensive French Grammar, 3rd ed.* B. Blackwell.

Carlson, Gregory (1977) *Reference to kinds in English*. Doctoral Dissertation. University of Massachusetts.

Chappell, Hilary and William MacGregor (1996) "Prolegomena to theory of inalienability," in Hilary Chappell and William Macgregor, eds., *The Grammar of Inalienability: A Typological Perspective on Body Part Terms and the Part-Whole Relation*. 3-30. Mouton de Gruyter.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.

Clark, Eve V. (1978) "Locational: Existential, Locative, and Possessive Constructions." in Joseph H. Greenberg, ed., *Universals of Human Language, 4: Syntax*. 85-126. Stanford University Press.

Clark, Eve V. and Herbert Clark (1979) "When Nouns Surface as Verbs." *Language*. 55 (4): 767-811.

Croft, William (1991) *Foundations Syntactic Categories and Grammatical Relation: The Cognitive Organization of Information*. University of Chicago Press.

Dowty, David R. (1979) *Word meaning and Montague grammar*. Springer

Dowty, David R. (2000) "'The Garden Swarms with Bees' and the Fallacy of 'Argument Alternation'," in Yael Ravin and Claudia Leacock, eds., *Polysemy: Theoretical and*

- Computational Approaches*. Oxford University Press. 111-128.
- Fillmore, Charles J. (1968) "The Case For Case." in E. Back and R. T. Harms, eds., *Universals in Linguistic Theory*. 1-88.
- Foley, William and Robert D. Van Valin, Jr (1984) *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge University Press.
- Fortis, Jean-Michel (2011) "On Localism in the history of linguistics," *Workshop on localism. AFLiCo 2011*.
(http://htl.linguist.univ-paris-diderot.fr/fortis/Fortis_On%20localism.pdf)
- Freeze, Ray (1992) "Existentials and other locatives." *Language*. 68 (3) : 553-595.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Hawkins, John A. (1995) "Argument-Predicate Structure in Grammar and Performance: A Comparison of English and German," in I. Rauch and G. F. Carr, eds., *Insights in Germanic Linguistics I*. Mouton de Gruyter. 127-144.
- Heine, Bernd (1997) *Possession: Cognitive sources, forces and Grammaticalization*. Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1994) *Patterns in the mind: Language and Human nature*. Basic Books.
- Jespersen, Otto (1924) *The Philosophy of Grammar*. London. George Allen & Unwin.
- Kageyama, Taro and Hiroyuki Ura (2002) "Peculiar Passives as Individual-level Predicates." *Gengo Kenkyu*. 122 : 189-199.
- Kratzer, Angelika (1995) "Stage-level and individual-level predicates." in Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier, eds., *The Generic book*. University of Chicago Press. 125-175.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We live by*. University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. Basic Books.
- Landau, Idan (2010) *The Locative Syntax of Experiencers*. MIT Press.
- Langacker, R. W. (1987a) "Grammatical Ramifications of the Setting/Participant Distinction." *BSL* 13 : 383-394.
- Langacker, R. W. (1987b) *Foundations of Cognitive Grammar: Vol. I : Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1990a) *Concept, Image and Symbol*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1990b) "Settings, participants, and grammatical relations." in S. L.

- Tsohatzidis, ed., *Meanings and prototypes: studies in linguistic categorization*. Routledge. 213-238.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar: Vol.II: Descriptive Application*. Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1993) "Reference-point constructions." *Cognitive Linguistics* 4(1) : 1-38.
- Langacker, R. W. (1995) "Possession and Possessive constructions." in John R. Taylor, Robert E. MacLaury, ed., *Language and the cognitive construal of the world*. 51-79.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: a preliminary investigation*. University of Chicago Press.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity : At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1976) "Subject and Topic: A New Typology of Language." in Charles N. Li, ed., *Subject and Topic*. Academic Press. 457-489.
- Lyons, J. (1967) "A Note on Possessive, Existential and Locative Sentence." *Foundations of Language*. 3(4) : 390-396.
- Lyons, J. (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge University Press.
- Masuda, Takahiko and Richard E. Nisbett (2001) "Attending Holistically Versus Analytically: Comparing the Context Sensitivity of Japanese and Americans." *Journal of personality and social psychology*. 81 : 922-934.
- Nisbett, Richard E. (2003) *The Geography of Thought*. Free Press.
- Milsark, G. L. (1977) "Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English." *Linguistic Analysis*. 3(1) : 1-29.
- Perlmutter, David (1978) "Impersonal passives and the unaccusative hypothesis." *BLS* 4: 157-189.
- Perlmutter, David and Paul Postal (1984) "The 1-Advancement Exclusiveness Law." in D. Perlmutter and C. Rosen, eds., *Studies in Relational Grammar 2*. University of Chicago Press. 81-125.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. MIT Press.
- Pinker, Steven (2007) *The Stuff of Thought: Language as a Window into Human nature*. Penguin Books.
- Salkoff, Morris (1983) "Bees are swarming in the garden: A synchronic study of productivity." *Language*. 59. 288-346.
- Smith, Carlota S. (1991) *The Parameter of Aspect*. Kluwer Academic Publishers.
- Talmy, Leonard (1978) "Figure and Ground in Complex Sentences." in Miriam Butt and Wilhelm Geuder, eds., *Universals of Human Language 4: Syntax*. Stanford

University Press. 625-649.

Van Valin, Jr. R. (2005) *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge University Press.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

Verma, Manindra and K. P. Mohanan, eds. (1990) *Experiencer Subjects in South Asian languages*. Center for the Study of Language and Information.

〔辞典・事典〕

※論文中の略称を【 】に示す

北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典 2 版』大修館書店【明鏡国語】

國廣哲彌・安井稔・堀内克明編集主幹 (2003) 『プログレッシブ和英中辞典 4 版』小学館【プ和英】

小西友七・南出康世編集主幹 (2001) 『ジーニアス英和大辞典』大修館書店【ジ英和】

西尾実・他編 (2000) 『岩波国語辞典 6 版』岩波書店【岩波国語】

日本語教育学会編 (1982) 『日本語教育事典』大修館書店

日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店

日本語国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-2002) 『日本国語大辞典 2 版』小学館

林巨樹・安藤千鶴子編 (1999) 『古語林』大修館書店

村松明編 (2006) 『大辞林 3 版』三省堂【大辞林】

森田良行 (1989) 『日本語基礎辞典』角川書店 [『基礎日本語：意味と使い方』1, 2, 3 (1977 年～1984 年) の合本]

山田忠雄主幹・他編 (2005) 『新明解国語辞典 6 版』三省堂【新明解】

呂叔湘主編 牛島徳次・菱沼透監訳 (1983) 『現代中国語用法辞典』現代出版

言語資料と出典一覧

論文中の引用に用いられている略称とその番号に対応する出典は以下のとおりである。

■BCCWJ

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

利用した検索ツール「中納言」<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>

「少納言」<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

- | | | | | |
|-----|------|----------|-------|------|
| [1] | 樋口恵子 | 私の古い構え | 文化出版局 | 1987 |
| [2] | 木下栄蔵 | 成功と失敗の科学 | 徳間書店 | 2003 |
| [3] | | 国会会議録 | | 2000 |
| [4] | | 防災白書 | | 1982 |

- | | | | | |
|------|------------|---------------------|---------|------|
| [5] | 豊田穰 | あふれる愛 | 講談社 | 1992 |
| [6] | 長瀬荘一 | 小学校英会話の授業・成功させるポイント | 明治図書出版 | 2001 |
| [7] | 五木寛之 | 百寺巡礼 | 講談社 | 2004 |
| [8] | 中沢けい | 往きがけの空 | 河出書房新社 | 1986 |
| [9] | 佐藤紘彰 | 訳せないもの | サイマル出版会 | 1996 |
| [10] | 真保裕一 | ストロボ | 新潮社 | 2003 |
| [11] | 利美川進 | 湯の街小町 | 文芸社 | 2004 |
| [12] | 松井今朝子 | 奴の小万と呼ばれた女 | 講談社 | 2003 |
| [13] | 小此木啓吾 | フロイト思想のキーワード | 講談社 | 2002 |
| [14] | 本多政史 | 札幌から行く日帰り温泉 221 | 亜璃西社 | 2004 |
| [15] | 岸井大太郎 ほか | 経済法 | 有斐閣 | 1998 |
| [16] | 横溝正史 | 犬神家の一族 | 角川書店 | 1972 |
| [17] | 中西智海 | 浄土真宗 | 世界文化社 | 2005 |
| [18] | ドクター有川 | 健康への緊急提言 | ぎょうせい | 2001 |
| [19] | 岩内亮一 | 私大改革の条件を問う | 学文社 | 2002 |
| [20] | 妹尾河童 | 少年 H | 講談社 | 1997 |
| [21] | 山村美紗 | 京都・出雲殺人事件 | 実業之日本社 | 1994 |
| [22] | 松浦武志 | 特別会計への道案内 | 創芸出版 | 2004 |
| [23] | 青山剛昌 | 名探偵コナン全映画パーフェクトガイド | 小学館 | 2001 |
| [24] | 佐藤賢一 | 二人のガスコン | 講談社 | 2004 |
| [25] | 折原一 | チェーンレター | 角川書店 | 2004 |
| [26] | 今井紀明 | ぼくがイラクへ行った理由 | コモンズ | 2004 |
| [27] | 小林英起子 | ケルン大聖堂の見える街 | ブッキング | 2004 |
| [28] | 栗栖浩司 | 熊と向き合う | 創森社 | 2001 |
| [29] | 吉富多美 | ハードル | 金の星社 | 2004 |
| [30] | 外岡秀俊 | 北帰行 | 河出書房新社 | 1976 |
| [31] | 鈴木芳正 | 自由奔放感覚的な B 型人間 | 産心社 | 2004 |
| [32] | 村上政彦 | ニュースキャスターはこのように語った | 集英社 | 1997 |
| [33] | 篠田節子 | レクイエム | 文藝春秋 | 2002 |
| [34] | 江戸川乱歩 | ちくま日本文学全集 | 筑摩書房 | 1991 |
| [35] | 栗本薫 | 魔宮の攻防 | 早川書房 | 2003 |
| [36] | 横井庄一 | 「文芸春秋」にみる昭和史 | 文芸春秋 | 1988 |
| [37] | 原年廣 | ただ、顧客のために考えなさい | | |

ダイヤモンド社 2003

- [38] 外務省国際協力局総合計画課 我が国の政府開発援助
(財) 国際協力推進協会 1991
- [39] 文部科学省生涯学習政策局社会教育課 我が国の文教施策
大蔵省印刷局 1991
- [40] 山折哲雄/工藤精一郎 日本文明とは何か 角川書店 2004
- [41] 石澤靖治 大統領とメディア 文藝春秋 2001
- [42] 池内了 天文学者の虫眼鏡 文藝春秋 1999
- [43] 七尾あきら 古墳バスター夏実 角川書店 1997
- [44] 山田眞實 デザインの国イギリス 創元社 1997
- [45] 鈴木道彦 失われた時を求めて 集英社 1998
- [46] 山川暁 ニッポン靴物語 新潮社 1986
- [47] 岩村偉史 ドイツ感覚 三修社 1999
- [48] 吉野道男 熱球児 文芸社 2002
- [49] 石原結實 ガンも生活習慣病も体を温めれば治る！
角川書店 2004
- [50] 文部科学省科学技術・学術政策局 調査調整課
科学技術白書 (独) 国立印刷局 2004
- [51] 関田淳子 ハプスブルク家の食卓 集英社 2002
- [52] 滝澤武久 発達と学習の心理 学文社 2002
- [53] 宇治川博司 沖縄スタイル [エイ]出版社 2005
- [54] 国会会議録 1998
- [55] 長坂道子 世界一ぜいたくな子育て 光文社 2005
- [56] 杉山通敬 マスターズを創った男 廣済堂出版 1998
- [57] 斎藤靖史 週刊朝日 8月15日増刊号 朝日新聞社 2002
- [58] 池成姫 韓国食堂の味方 双葉社 2001
- [59] 昭文社 伊豆 昭文社 2002
- [60] 上田秀人 破斬 光文社 2005
- [61] 松田昭美 沙漠の旅 今井書店 2004
- [62] 花田信弘 もう虫歯にならない！ 新潮社 2002
- [63] 江川紹子 冤罪の構図 新風舎 2004
- [64] 安部公房 密会 新潮社 1977
- [65] 北條恒一 知って安心！「脳」の健康常識
PHP 研究所 2004
- [66] 梓林太郎 月光の岩稜 光文社 1996
- [67] 中津文彦 復讐航路 祥伝社 1995

[68]	鈴木光司	生と死の幻想	幻冬舎	1998
[69]	江波戸哲夫	左遷！	講談社	1990
[70]	笠井潔	サイキック戦争	講談社	1993
[71]	鳥光美緒子/ハインリヒ・ラインフリート			
		スイスと日本	刀水書房	2004
[72]	鎌田茂雄	白隠	講談社	1994
[73]	香川由利子/ブリジット・オベール			
		雪の死神	早川書房	2002
[74]				
	梓林太郎	尾瀬ヶ原殺人事件	徳間書店	2005

■新潮文庫 100 冊

『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』新潮社, 1995 年

[1]	村上春樹	世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド
[2]	赤川次郎	女社長に乾杯
[3]	吉村昭	戦艦武蔵
[4]	石坂洋次郎	石中先生行状記
[5]	新田次郎	孤高の人
[6]	宮本輝	錦繡

■新潮絶版 100 冊

『CD-ROM 版 絶版の 100 冊』新潮社, 2000 年

[1]	島木健作	生活の探求
[2]	子母沢寛	おとこ鷹
[3]	加賀乙彦	湿原
[4]	岡本かの子	巴里祭・河明り
[5]	佐藤春夫	都会の憂鬱
[6]	獅子文六	娘と私
[7]	尾崎士郎	人生劇場 青春篇
[8]	有吉佐和子	地唄

■対訳シナリオ

- [1] スティーブン・キング原作 北沢あかね訳 (2000) 『グリーンマイル シナリオ対訳』愛育社
- [2] M. ナイト・シャマラン著 豊岡真美訳 (1999) 『シックス・センス シナリオ対訳』愛育社